
らぶほ

條ひろみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

らぶほ

【Nコード】

N0849J

【作者名】

條ひろみ

【あらすじ】

自称スーパーエリートヴァージン、略してSEV千夏が高校入学と同時に一目惚れしたあいっにはとんでもない噂が！

処女なのにソルフェージュを毎日欠かさないキュートな女子高生、
おかざきちなつ
岡崎千夏と

ムツリスケベの同級生、見た目も中身もイケてない、ねっちりね
たくらりようた
ちねちネチっ子田倉良太と

そして噂のあいつ、見た目だけはカッコいい坂城龍馬さかきりょうまの

クリス・チャンディオール高校一年D組おバカトリオが

ちよつとエツチに暴走する、全然爽やかじゃないハイスクール青春
スト〜リ〜

クリス・チャンディオール高校一年D組

「あいつはねえ、ラブホに住んでるらしいよお」

高校に入学して初めてのゴールデンウィークが明けた次の週の月曜日の放課後、つまり昨日、田倉良太がにまにましながら近付き、鼻息荒く鬱陶しく私に耳打ちして来た。

あいつ、高校に入ってもう一ヶ月経過ぎるというのに未だ友達の出来ないあいつ。

誰かと会話をしているところすら見たことのないあいつ。

授業中も窓の外ばかり眺めているあいつ。

即ち坂城龍馬。

クリス・チャンディオール高校一年D組。推定十五歳。

私は頼みもしないのに、おせっかいな、暇な、無駄なエナジーを持て余した男子クラスメート、即ち田倉良太は四月のある日の放課後、あいつを尾行した。その結果が冒頭のセリフとなったわけだ。

うちの高校には最寄り駅が二つある。西武線の椎名町と営団地下鉄有楽町線の要町。共に池袋から一駅である。

あいつは学校を出ると要町駅に向かって歩き出したのだが、地下鉄には乗らず、そのまま大通りを池袋方面に歩いて行ったのだそうだ。

そして芸術劇場にほど近いホテル群の中の一つの建物に入ってしまったのだという。

「単に誰かとさあ、待ち合わせをさあ、してただけの可能性も否めないからねえ」

ねちねちとそう言って田倉は確認のため、さらに無駄なエナジーを費やして、次の週の別の曜日に再びあいつの後を追ったところ、やはり一人で同じラブホテルに向かっていったということ。芸術劇場なら池袋のすぐ近くだ。一駅とはいえあいつはなぜ電車を使わないのだろう。

「ラブホから学校に通う高校生」そんなティーンエイジャーでなくとも飛びつきそうな、強烈ゴシップにも拘らず、全校にあつという間に噂が広がらないのは、追跡した無駄なエナジー野郎が、これまた友達のいない、ムツツリスケベの田倉良太だったからだ。

田倉良太は何というか、まあ一言でいえばパツと見オタク的な要素をふんだんに持っている少年だ。何のオタクか、本当にオタクなのかそれは知らない。

背は私と変わらない160センチ（これから育ち盛りなんだろうけど）、色白、ガリガリ、のっぺりとした顔、ねちっこい話し方、要するに女の子から好かれる要素を何一つ持ち合わせていない、爽やかな青春時代とはまるで縁のなさそうな男子高校生だ。

ではなぜ私のように、にっこり笑うとチャーミングな八重歯が、思わずキスしたくなるぽってりツヤツヤの唇から覗く、超キュートな女子高生が、ムツツリねちねちネチっ子田倉からそんな極秘情報を

手に入れたのかというと、何のことはない、奴とは同じ中学、即ちオナチュウだからだ。

別に中学時代に仲が良かったわけではないし、そもそも掃除当番のとき以外、口を利いたことなどほとんどないはずだ。

しかし奴とは気付けば三年間奇跡の同じクラス、即ちオナクラターキーで、その上高校まで一緒、即ちオナコウで、さらにさらにクラスも再び一緒、即ちオナクラオナコウ、フニクリフニクラという、あまり嬉しくない運命の糸で繋がっているのだ。

あんな奴に運命の一部を消費してしまったのかと思うときどき切なくなる。

入学式の後、教室で私の顔を見つけると、にまあと気持ち悪く笑いながら奴は近付いてきたのだ。私はそのとき初めて田倉良太と同じ高校に来たことを知った。

周りは知らない人間ばかりなので、こういう場合、一人でも知り合いがいるとホッとするものだが、さすがにそのときは、ネチっ子田倉の顔を見た瞬間に溜め息き混じりで口から出た言葉は「またかよ」だった。

「岡崎千夏さあん、またまたよろしくう」

微妙に語尾を伸ばすイラッと来る話し方で、目にかかる前髪を鬱陶しく首の動きで跳ね上げて、右手を差し出してきたが、じっとりぬめぬめと汗を掻いていそうな、ナメクジのような手の平だったので当然無視した。

つーかフルネームで呼ぶな。

ちょーーーーーキスしたい

中学の頃はネチっ子田倉にもそれなりに友達がいた。総勢八名のムツリグループはどこへ行くにも追いついてられた鴨のように常に群で移動していたので割と有名だった。しかも奴はその総裁的存在だったのだ。しかしここ新天地では、まだ同類に出会っていないように、未だ単独行動を続けている。どうでもいいか。

そんなこんなで奴にとって今のところ唯一話しかけられるのが私だけなのだった。私は今どきっぽい外見の女子高生ではあるが、中身は割と普通なので、田倉がにまにまと薄ら笑いで話しかけてきても「んだよキモいんだよ!」とか言って、学ランに上履きの跡がくつきり付くほどの蹴りを腹に入れつつ拒絶したりしない、優しい子なのである。まあ握手は出来なかったけど。

「あいつ、どっから通ってんのかな」

田倉があいつの追跡調査を始めたのは、私のこの一言がきっかけだった。ある日の放課後、たまたま私は教室で一人ぼんやりしていた。夕日が学園ドラマのワンシーンのように窓から差し込み、くつきりとした影を描く教室で、何気なく口から零れた言葉を、ネチっ子田倉は聞き逃さなかった。

教室に私しかいなかったのになぜ田倉が私の言葉を聞き取れたかという、私が気付かなかっただけで、奴は私の背後に背後霊の如く立っていたからだ。なぜ立っていたのかというと、一人でいつまでも教室に残っている私が、寝過ごしているのだと思い、起こしに来たのだそうだ。

それなら音を立てずに忍び寄らなくてもいいじゃない、教室の入り口から名前を呼べばいいじゃない、そう言ったのだが、「99%の確率でえ、岡崎千夏さんだとは思っていたんだけどさあ、万が一人違いだったらさあ、立ち直れないからねえ。一応確認しようと思っただよねえ」だそうだ。例えば人違いだったとして何から立ち直れないのかは今以ってナゾである。

私が「あいつ」と言ったただけなのに、ネチっ子田倉はムツトリオタク特有の鋭さで坂城龍馬だと悟ってしまった。私はそんなにあいつのことばかり眺めていたのだろうか。眺めてたんだろな。

そして頼みもしないのにゴールデンウィーク前に一度、後にもう一度あいつの尾行をし、結果を私に報告してきたのだった。だからこのスキャンダルは大スクープにも拘らず、実は私とネチっ子田倉の間だけの秘密なのである。奴が誰にも喋っていないければの話だが。

五月も終わり、ネチっ子田倉は違うクラスにようやく二人の仲間を見つけたらしく、休み時間はムツトリオで活動を始め、あの報告以来私に話しかけて来なくなってしまった。

おかしいな、私ってそんなに魅力ないのかなあ。あんなムツツリスケベでも途端に離れて見捨てられると少なからず寂しいもんだ。私はそこそこの女友達が出来たが、心からの友人とは言い難い。そして気になるのはやはりあいつだ。

授業の合間の十分の休憩時間でも昼休みの学食でも未だ一人のあいっ。なぜこれほど気になるのかといえ、答えは簡単、ドンピシャ

で好みのタイプだから。

色白で背が高く、きりりと細めの濃い眉に、長い睫毛の鹿のような
優しそうな目、高めのすっとした鼻に、薄めの唇。ちょーちょー
ーキスしたい。初めて見た日からそう思ってしまった。要するに一
目惚れだね。

今どきイケイケ女子高生な外見の私だが、何を隠そうこれまで彼氏
がいたことはない。もちろんとっても可愛いので告白はそこそこさ
れて来たが、好きじゃない男を彼氏にしたいとは思えなかった。

自分が好きな相手から告白されるなどという都合のいいことは、少
女マンガの中でしか起きないことは充分承知だ。だから好きじゃな
くても「好きになれそう」な相手なら付き合っても良かった。

私が告白されたときに第一に考えるのは「こいつとキスしたいか？」
第二に考えるのが「こいつとエッチしてもいいか？」である。その
二つをクリアすれば交際をスタートさせても良かったのだが、残念
なことに今のところそれに該当する男は現れていない。そして私が
一方的に好きになる男もこれまた現れていない。

フレンチの爽やかさの中にも気品とエロスを

付き合う前からキスやエッチのことを考えてしまう私はイケナイ女の子なのだろうか？

答えはイエス。私はキスはもとより早くエッチがしたくて堪らない。男の人と付き合ったことはないが一人エッチ、即ちオナニーは毎日する。だけでもこの「オナニー」っていう響きは好きになれないんだよね。物凄く猥褻で湿り気のある感じがする。清々しさをまるで感じさせない何かが漂ってきそうだし。

新明解国語辞典で「オナニー」を引く。引いたらその単語には赤線を引きましよう。「Onanie」という綴りの上に「ド」ってあるからドイツ語だろう。日本語だと自慰、手淫。しゅいんねえ。英語ならマスターベーション。「マスター」はいいけど「ベーション」は頂けない。

早い話、どれもじっくり来ないのよね。もっと、爽やかな言葉にして欲しかった。例えばソルフエージュとか。うん、いいなソルフエージュ。フレンチの爽やかさの中にも気品とエロスを暗に含む感じ。

私がソルフエージュを毎日嗜むきっかけを作ったのは、間違いなく姉だ。十歳離れている美しき姉は、既に結婚して子供も二人いる。三年前の中学の入学祝に、結婚して家を出る直前の姉が私にプレゼントしてくれたのが、愛用していたバイブとローターだったのだ。

「彼は真面目でウブだから、結婚するのにこんな物持って行けないのよね。使っていたことがバレても駄目。かといって捨てるのもも

つたないから」という理由で、その二つをヨックモックのブルーの空き缶に、中でごろんごろん転がらないようにご丁寧プチプチと共に入れて、さらにピンクのリボンまで掛けてくれたのだ。

ウブだという割にデキ婚とはこれいかに。まあこの場合の「ウブ」

は「普通のセックスで満足する人」という意味なのだろうな、と最近分かったマイレボリューション。

「大丈夫。バイブは使うときちゃんと毎回コンドームを被せてたから」

手渡されて箱の蓋を開けたとき、美しき姉は私に言った。しかし十二歳の少女にその意味はよく理解できなかった。だが両方とも大人のオモチャである事は小学校を卒業したばかりの私にも理解できた。なので使い方が分からないからと言って、「お母さく、これってどうやって遊ぶの？」などと空気を読まずに夕食の並べられた団欒の食卓に持ち込んで、無邪気に聞いたりはしない。

バイブはモロ男性器の形をしているので自分のあの部分に入れるものだということはすぐに分かった。「男性器はペニスと言います。それが女性の膣に入ってくることが性行為です」と、自分の母親よりも年上の、小学生の目にも明らかにもうしてないんだろーなと思わせる保健の先生が言ってたからね。

しかし何事も、頭で分かっているからといって行動に移せるかどうかは別問題である。私は机にやけにリアルな——と言っても本物のペニスを見たことはないのだが——バイブと、ショッキングピンクの、巨大な風邪薬のような、カプセルに似た形のローターを置き、腕を組み難しい顔をしていた。

とりあえずパイプは映画のエイリアンに出てきそうで何だか怖いので、無機質なローターから試す事にした。スイッチを入れると机の上でぶぶぶぶと振動を始め暴れだした。肩や首筋に当ててみる。なかなか気持ち良い。すると引越し直前の美しき姉が部屋に入ってきた。

そんなこんなで毎日欠かさずソルフェージュ

「あら、ちーちゃん、使い方が違うわよ」

私の名前は「ちなつ」だが、歳が離れているため、美しき姉は私を呼び捨てにせず、ずっとちーちゃんと呼んでいる。

「そんなこと言ったって、どうやんの？」

「しょうがないわね、じゃあ使い方を教えてあげる」

そう言うとき姉は私をベッドに寝かせ、スポーツブラの發育途上の胸を露にした。ついでにスカートはそのままパンツも脱がされた。

「こことこことここ、いい？」

ローターを手にしながらかしき姉は漢字の書き順を教えるように、震える物体を私の乳首とクリトリスと膺に当てた。正直大して気持ちよくなかったのがっかりした。特に乳首とクリトリスは痛いくらいだった。

「最初はそんなもんよ」

ふふん、と得意気に鼻を鳴らしてかしき姉は言った。ローターを止め、ベッドに腰掛けて私に諭すように話しかける。

「エッチっていうのはね、最初から気持ち良いものじゃないの。気持ち良い部分を毎日少しずつ刺激していったって、感度を上げていくものなのよ。ちーちゃんも中学に入ったらお友達とそういう話をする

と思うんだけど、決まってみんな『最初は痛かった』って言うはず」
「え？ 痛いのか？」

エッチは気持ちが良い、素晴らしい行為だと思っていたのに、痛みを伴うことだと聞いて少なからずショックを受けた。

「そう。何の準備もなしにいきなり男の子としちゃうとね、とつても痛くて血が出るの。それでエッチが嫌いになっちゃう子もいるくらい」

快感を求めて行ったことが結果痛かったら、それは大変なショックだろう。

「やだやだ、私、気持ち良いエッチいっぱいしたい」

「そうよね。せっかく気持ち良いことだもんね。でもそのためにはトレーニングを怠っちゃ駄目よ。ちーちゃんがこないだ学校でやった合唱コンクールだって、練習せずにぶっつけ本番だったら優勝なんてできなかったでしょ？ 毎日みんなで頑張って練習したから優勝できたのよ」

「そっか……私、男の子とエッチでも優勝できるように頑張る！」

「ふふ、そうよ、その意気！ でも無理しちゃ駄目よ、最初はゆっくりでいいからね」

美しき姉は私の頭を嬉しそうに撫でると、宮崎に嫁いで行ってしまった。

しかしその後も私は分からないことが出てきたり、壁にぶつかったりすると電話で姉に相談した。その度姉は的確な答えを示してくれて、そのお陰で今では昔とは比べ物にならないほどの快感を得られるようになったのである。私は姉をソルフェージュの師匠として今

でも尊敬しているのだった。

そんなこんなで毎日欠かさずソルフエージュを行う私だが、中学に入り、一年を過ぎた当たりから、どうも周りの女子達は自分とは違うらしいということに薄々気付いてきた。そして中学三年くらいになると、姉が言っていた通り初体験を終えた女子が「もーちょー痛くってさー」と半ば自慢気に話す光景がしばしば見られるようになった。

私は姉に感謝した。あの大きさのバイブがすんなりと気持ち良く入るのだ。これでいつ何時男の子と対峙しても痛いなんていうことは有り得ないのだから。

しかしフィジカル面での準備は万端だったが、そっちに夢中になるあまり心はトレーニングしてこなかったため、結局中学時代には彼氏が出来なかったのだ。

出会いはいつも予期せず起こる。高校に来てそのときは突然訪れた。まあ別にね、まだ十五だしね、恋はこれからこれから、そう思っていた矢先のあいつの登場。「これから」が今来てしまったというわけ。

実戦経験はゼロのバーチャルソルジャー

ネチっ子田倉は三百六十度どこから見ても純度100%の気持ち悪さを誇る男だが、あいつの秘密を時間を割いて探ってくれたという点においてはかなり感謝している。

しかし、後をつけたは良いものの、早くホテル街から抜け出したかったためなのか何なのか、あいつの住むと言われているラブホの特徴や名前を全く覚えていないという致命的なミスを犯したという点においては張り倒してやりたかった。

とは言えこれ以上田倉の世話になるわけには行かない。あれ以来、田倉が私から離れたのも「後は自分の力で切り開けよ、グッドラック」と言っているような気さえする。

何らかの情報が得られるかもしれないので、一応表面的に付き合い始めた女子達にあいつの話を振ってみようかとも思ったがやめた。何せ私は身体的には受け入れ態勢万全だが、精神的にはまだ恋を知らないウブな純情乙女なのだから。

既に経験済みで、男絡みのエロネタを連発するようなこいつらと恋バナで盛り上がることは現時点では不可能に等しい。バイブとローターを使ったソルフェージュネタならいくらでも披露できるのだが。

今の私は訓練では成績優秀特待生だが実戦経験はゼロのバーチャルソルジャー、もしくは偏差値が高いが現場のことなど何一つ知らないエリート官僚。迂闊に発言をしても舐められること確実だ。

一発で主導権を握るには「最近カレシがあバツキー気味でえ、まじ

ウザいからさあ、別れようかと思ってんだよねえ」くらい言えないときと駄目なのだ。そのためには最低限彼氏の存在が必要不可欠である。

こいつらと心から打ち解けあうには私はまだ経験値が不足しているのだ。

クロネコもいちいちカップルでお荷物お届け

そして六月に突入。未だ単独のあいつ。それをチラ見するだけの私。

「岡崎千夏さあん、見に行かない？」

紫陽花咲き誇り、カタツムリがはしゃぎまわる梅雨寒の放課後、しばらく振りにネチっ子田倉が話しかけてきた。

「見に行くって何を？」

「決まってるじゃあん。ホテルホテルう」

校舎の二階の窓から、一人傘も差さずに背中を丸め、濡れながら帰るあいつを指差しながら、ネチっ子田倉はにまにまと言った。

「え？ つけるの？」

「まあつけなくてもお場所はしってるからさあ」

「行ってどうすんのさ」

「だってさあ好きなんでしょお？」

な……そんなダイレクトに言わなくってもいいじゃないか。

「いつまでも眺めてるだけじゃさあ先に進まないと思うよお？」

お、お前は先に進んでるんかい！ と言いたかったが、言われてみればその通り。このままじゃ見てるだけで卒業しかねない。

「田倉も来んの？」

「二人のほうさがさあ怪しまれないでしょお」

「何だよ」

「だあってラブホテルだよお？　岡崎千夏さん、一人で入れるのお？」

「ちよちよちよちよい待ち！　何であんたとラブホテル？」

「だからあ、一人じゃ入れないからあ」

「つかさ、住んでるんだったら、その、裏口とか自宅の玄関とかあるはずでしょ？　何でわざわざ正面切ってラブホに入らにゃならんのよ？」

するとネチっ子田倉はふっ、と鼻で笑った。ムカつく。

「僕もさあ最初はそう思ったんだよねえ。そいでねえホテルの周りをぐるっと見回してみたんだけどさあ、玄関らしきものが見当たらないんだよねえ。それにあいつだってさあ、正面の入り口から入ってたんだしい」

「二回とも？」

「二回ともお」

「え？　じゃあさ、坂城くんちに用事があって来た人……例えば宅急便とかどうすんの？　クロネコもいちいちカップルでお荷物お届けなわけ？」

「そういうのはさあ、フロントに渡せばいいんじゃないかなあ」

「じゃあ別に遊びに行くだけなんだから私だってフロントで『学校の友達です』って言えば済むことじゃん！　何でわざわざカップルの振りして行かなきゃならんのよ？」

「えゝそれはだあってえ……」

ただでさえ気持ち悪いのにネチっ子田倉はさらにくねくね始めやがった。

「だって何!？」

「見てみたくなあい？」

「何を？」

「ラブホテルの部屋の中あ」

「愛だけじゃお腹はいっぱいにならないのよ」って

「部屋見てみるだけだかんね！　あと料金はあんたもちだかんね！」

うきうきと半ば飛び跳ねるようにして歩くネチっ子田倉に強く念を押して私たちは校舎を後にした。結局好奇心に負けた私はこいつと坂城くんの住んでいるらしいラブホテルに行くことにしたのだった。まあこれも社会勉強の一環ということだ。

大通りをひたすら歩き続けて思った。

「ねえ、芸術劇場の裏なんですよ？　何で電車で行かないのよ？」

「そりゃあだつてさあ、こうして歩いた方がさあ、あいつの気持ちに少しでも分かると思わなあい？」

む……確かに……そうなのか？　まあいいや。

「あれあれえ」

芸術劇場の裏手に来ると、ネチっ子田倉は割と大きめな建物の並ぶ一角を指差した。その方向には十階建てくらいの、すぐ近所にある赤い看板でお馴染みの丸井も真っ青なくらいの白く立派な建物があった。

「え？　あれ？　あんな凄いビル？　あれってホントにラブホテル？　ちゃんとしたホテルじゃないの？」

「違う違う、その隣い」

ふんっ、と顎の勢いで鬱陶しく前髪を上げると、ネチっ子田倉はさ

らに歩き出した。そして一軒の建物の前で立ち止まる。

「う、うそ……」

「ホントお」

にまあと笑うと、田倉はネチっ子のくせにがっしりと私の手を取り、堂々と入り口から中へ入ろうとした。私は道の真ん中で、これ以上の散歩を断固拒否して微塵にも動こうとしないラブラドルレトリバーのように足を踏ん張った。だって、目の前の建物は、私が情報として知っているどんなラブホのジャンルからも外れるものだったから。

高速道路を通っているとときおり見かける、ほとんど客の来なさそうな郊外の寂れたラブホ、渋谷のホテル街にある、一見それっぽくないちょっとオシャレな感じのラブホ、メガネのパリミキのような、安っぽいお城風の張りぼてのラブホ、そのどれでもなかったのだ。

三階建ての、青い三角屋根からは本物かどうか疑わしい煙突が伸びている。白いモルタルの壁は、罅割れ、下の方から何の植物か分からない蔓が這いつくばっている。旅館とも呼べず、民宿というほど民家っぽくもない。

強いて言えば、スキー客を見込んで建てたけど、微妙に立地が悪く、料理が美味しいとか温泉があるとか特に目だったセールスポイントもないために、ハイシーズンにも思ったように客が来なくて赤字続きで、でも子供は来年中学に上がるし、お父さん負けないからねって何とか頑張ってきたけど、それももう限界で、「愛だけじゃお腹はいっぱいにならないのよ」ってお母さんは愛想尽かして家出てっちゃって、上の子はスキーに来てたチャライ大学生にナンパされてヤラれちゃって、ついでにデキちゃって、そのまま大学生について

東京行っちゃって、一家離散でリゾート気分の欠片もなくなって、未練たらただけど何とか気持ちの整理つけて十年前に閉めて、それ以来空き家のまま放置されてきたペンション？

ここ、池袋駅前だよね……

「ニューウアフロディーテええ」

ネチっ子田倉は入り口の上に書かれた、ホテルの名前を読み上げた。ちなみに最後は伸ばさない。正しくは「ニューアフロディーテ」。

「や、やっぱ帰る」

「ええ？ 何でええ？」

「何でって、こんなところだと思わなかったし！」

「あああ、岡崎千夏さん差別う」

「はあ！？」

「僕今ので思い出しちゃったなあ」

「何を！？」

ここからネチっ子のロングストーリーが展開されようとは。

年に一回の発情期を迎えてしまった草食系男子

「小学生の頃にさあ読んだ話なんだけどさあ、とっても貧しい母子家庭の家があつてねえ、そこには小学生の男の子が住んでたんだよねえ。

でえ、ある日家庭訪問があつてさあ、先生が訪ねて来たんだよねえ。そこのお母さんはさあ、学校の先生を家に迎えるわけだからさあ、おもてなしをしたいと思うじゃない？ 普通の家だったらお茶出してお茶菓子出してって当たり前だけどお、とっても貧しいからお菓子なんか買えないんだよねえ。

でもお母さんはさあ、息子に恥を掻かせたくないからさあ、なけなしのへそくりはたいて街に羊羹を買いに行ったんだよねえ。もちろんちゃんとした羊羹。みんなが普段食べてる羊羹。でもその家にとってはお客様を迎えるための特別な羊羹。

そして家庭訪問当日、先生がやってきましたあ。先生は若くて美人でその上優しいと近所でも評判の先生なんだよねえ。お母さんは狭くて汚い家に綺麗な先生を上げることには恐縮しながらも、お茶と羊羹を差し出したんだよねえ。でも先生はお茶にも羊羹に手を付けなかったんだなあ。

『さっきの家で、いろいろご馳走になってしまいましたから』ってさあ。そこでお母さんは、気を利かせて『じゃ、じゃあ後でお家で召し上がって下さいな』って羊羹を元の包みに戻して手渡したんだよねえ。せっかく奮発して買ってきたんだからさあ、どうしても食べて欲しかったんだと思うんだよねえ。

隣で息子は物欲しそうに羊羹を眺めてたけど、本当は食べたかったけど、でもぐっと我慢したんだなあ。偉いよねえ。羊羹なんて生まれてこの方口にしたこともないのにねえ。どれほど食べたかったことか。

ひとしきり話が終わって、先生は手渡された羊羹を持ってその家を後にしたんだ。お母さんは、人並に先生をおもてなしてきたことに満足していたんだねえ。息子もそんな誇らしげなお母さんを見て、嬉しかったんだなあ。あそこで我がまま言わなくて良かったってねえ。しかーし！」

ネチっ子はいきなり叫んだ。何だ何だ？

「先生は……優しくて綺麗でみんなの憧れの先生は……『あんな汚い家を出された物、何が入ってるか分かったものじゃないわ』って吐き捨てるように言っさあ、帰り道、どぶ川に……どぶ川にだよお？ その羊羹を投げ捨てたんだよおおお」

な……ネチっ子は号泣し始めた！ 道の真ん中で、池袋のラブホテルの真ん前で！ 私の手をしっかりと握ったまま！

「わ、分かった分かったからさ、泣くなって」

「よおおお」

「だだだだから自分の話で泣くのはやめてええ！」

は！ この状況は……「今日こそはラブホテルに行ってくれて言っただのに……エッチしてくれるって約束したのに……ここまで来て帰るなんて言わないで！」的な、年に一回の発情期を迎えてしまった草食系男子的な発言により痴話喧嘩っぽくなってる高校生カップルにしか見えない！

たたた大変だ！ と、慌てふためく私の横を、ハゲたメタボ親父が、既にパンツ見えてるルーズソックスの女子高生のお尻を触りながら「ニューアフロディーテ」に入っていた。マジで……すぐ隣にオシャレなホテルがあるのに……

今の話とアフロディーテの関連性はどこに？ 羊羹は羊羹で、貧乏人が買っても金持ちが買っても同じだから、オシャレなラブホに住もうが切ないラブホに住もうが坂城くんは坂城くんであって、住んでいる場所で判断しちゃいけないっていう教訓？

「よおおおお」

「わ、分かったから！ ね？ 行こう！ とにかく入ろう！」

ネチっ子はまるで泣き止まない。これ以上公衆の面前で恥を晒すのは耐えられない。とりあえずホテルに逃げ込むことにした。入り口には土間があり、左には背の高い下駄箱が聳えていた。目の前にずらりとスリッパが並ぶ。まるで旅館。つーかラブホなのに靴脱ぐんですか……

ナースとか婦警とかレースクイーンとかマックの店員とかスク水とかブルマとか

「あゝダメダメ、高校生はお断り。外でやんな」

仕方なく靴を脱いで上がるなり、フロント？　とういうか、近所の個人病院のような小さな窓の受付で、どんより目の下にくまの出来た太って歯並びの悪いオバサンが、しっしつと追い払う仕草をした。つーか外でなんてやらないしね。

「え？　でも今さっき、女子高生が入って行きましたよね？」

「あ？　あゝ麗子ちゃんね。あの子はコスプレ風俗嬢だよ。ああ見えて三十二の子持ち」

さささ三十二！？　顔は見えなかったけど、スタイルはなかなか良かったような……

「あのエロ親父とは長い付き合いでね。ナースとか婦警とかレースクイーンとかマックの店員とかスク水とかブルマとか自衛隊とかヤクルトレディとかスッチーとかサッチーとか色んな格好で毎週ここに来るんだよ。実はあの子バツ三でさゝ元旦那ってのが三人が三人、アル中のDVの女好きで苦労しっ放しでさゝ、何だってあんなに男運悪いんだろぅねゝ？　もうほんつと見てて可哀想だったゝ」

「よおおお」

いや、そんな詳細な麗子ちゃん情報要らないんですけど……ってお前はいい加減泣き止め！　つーかもう部屋とかどうでもいいや。

「あ、あのですね、私たち実は坂城くんの……」

そこまで言ったとき、奥から出てきたのは。

「何してんだ？ お前ら」

「坂城くん！」

「……あ！ そっかそっかそういうことな。はいはいはいはい」

腕を組みしばし考える表情の後で彼は言った。

「え？ え？ 何が？」

「悪いね、気が利かなくて。あ、聖子さん、こいつらオレのクラスメートなんだ。今回だけ使わせてやってくれない？」

「ああ、坊ちゃんの友達なのかい。じゃあしょうがないね。ほれ、今日だけ特別だよ」

聖子という名前を聞けば、日本人なら誰もが想像するであろう、娘が成人してもなおチャームिंगさを失わないあの聖子さんとは遠くかけ離れた聖子さんが、窓から部屋の鍵を差し出した。鍵とチェーンで繋がっているオレンジのアクリルの四角い棒には部屋の名前らしきものが彫ってあった。「ポセイドン」。

「部屋分かるか？ ポセイドンは二階ね。じゃあごゆっくり」

ポケットに手をつ込んで口笛吹きつつ坂城くんはそのまま入り口に向かい歩き出した。

「ちよちよちよちよと待った〜！」

私は未だしっこく握ってくるネチっ子のねちっこい手を振りほどき、既に靴を履き始めている坂城くんの腕を掴んだ。

「ん？ どした？ ああ、時間？ いいぜ、本当は休憩は二時間だけど好きなだけ使って。つってもそんなに何回も出来ねーと思うけどな」

「そうじゃなくって！ 私たち付き合ってるとかそういうんじゃないの！」

「付き合っていないのにやるのか……まあ、いいんじゃない？ 先に身体の相性知っておくっていうのもアリだと思うぜ？ 心だけじゃ恋愛できないしな。じゃ、オレ急ぐんで」

くると背を向けてポケットに手を突っ込み、坂城くんは行ってしまった。

さり気なくないほどギンギラギンで

「だから違うのに」

二階の部屋「ポセイドン」の布団の上で私は一人悶える。ネチっ子田倉は隅で体育座り。

「完全に誤解された」もうお終いだわ絶望だわノストラダムスだわ」

私は泣いた。泣いたけどあんまり涙が出てこないから、うわーんうわーんと声を出してみる。

「岡崎千夏さあん、大丈夫だってえ」

「何が大丈夫なのよ！ 大体あんたが二人で行こうなんて言い出すのがいけないんでしょ！」

「あゝ人のせいにしてえ。岡崎千夏さんだって納得したじゃないかあ。それにそこまで言うんならさつき追いかけてってえ、説明すればよかったじゃないかあ」

「だって、そんなの、まだ彼氏でもないのに『彼とは何でもないんです！』とか言うのもおかしいでしょ？」

「そうじゃなくってえ、家を確かめに来たんだからあそれを言えば済むことでしょお？」

「あ、そっか。じゃあ明日学校で話すか……それにしてもさあ、寂しい部屋だね」

ポセイドンは十二畳ほどの和室だった。部屋の真ん中には既に布団が二枚敷いてある。窓際に小さな低いテーブルがあり、ポットと緑茶のティーバッグとお饅頭が二個。窓の外は、手を伸ばせば届きそ

うなほどの距離に、すぐ隣の建物の壁がある。あとは備え付けの冷蔵庫と今どきリモコンのないテレビ、押入れに予備の布団と浴衣とバスタオルがあるだけだった。

「ラブホテルってさあ、去年家族で行った熱海の旅館と変わらないんだなあ」

ネチっ子が切なそうに呟く。いや、違うぞ！ 本物のラブホテルはもっとこう、さり気なくないほどギンギラギンで欲望を掻き立てる作りのはず。

「でもさ、部屋にトイレもお風呂もないってどういうことよ？」
「あーなんか共同みたいだねえ。お風呂は一階って案内板に書いてあったよお」

そうなの？　そういうもんなの？　一回戦が終わったら、「じゃあ、ひとつ風呂浴びてくつか！　なあカアちゃん！」みたいな感じなの？

この部屋で唯一ラブホテルらしい物といえば、床の間の掛け軸である。いわゆる春画というのだろうか、浮世絵のエロいやつ。男が女を後ろから抱え込み、脚を広げさせ、前から別の男が楽しそうに女の股間を舐めている絵だ。女性器が妙にリアルである。

うーん、こういう路線なら、部屋全体、ひいてはホテル全体を江戸時代的エロスで統一すれば、それはそれで売りになると思うんだけどな……

私はもっと卑猥な世界が待っているものと思って密かに楽しみにしていたのだが、春画以外にエロい要素は何一つなく、当然田倉と二

人で何かで盛り上がることもなく、仕方がないのでお茶を飲み饅頭を食べて、すぐに解散した。

帰り際、受付で鍵を返すと「ま、最初は誰でも上手くいかないもんだよ。次頑張んな」と聖子さんがネチっ子に励ましの言葉をかけていた。

こんな状況であんなことやこんなこと

次の日学校に行くと、休み時間に坂城くんが話しかけてきた。ネチっ子は薄情にもムツツリ軍団とどこかへ消えてしまった。

「よお、昨日は上手く行ったか？」

教室で坂城くんが誰かと話すのはこれが初めてなので、少なからず注目を集めてしまっている。こんな状況であんなことやこんなことはとても話せない。私は彼を廊下に引っ張った。

「坂城くん、放課後空いてる？　っーか空けて」

「何か用か？」

「帰り校門のところで待ってて」

それだけ言うと私は再び教室に戻った。

「話があるの」

話があるの、という会話の出だしは相手を警戒させてしまうのであまり良くないなあと言ってから気付く。私たちは坂城くんの家への道のりを歩く。

「何だよ」

「私別にあいっとは何でもないから」

「あいっって？」

「田倉！　昨日会ったでしょ」

「ああ、あのムツツリな。要するにあれか、身体の相性悪いから付き合うのやめたってことか？」

「だーかーらーそうじゃなくって！ 昨日あのホテルに行ったのは、坂城くんがラブホテルに住んでるっていう噂を確かめるためだったの！」

「噂になってんのか？」

「え？ あ、いや、知ってるのは私とあいっただけだけど」

「ふーん、まあいいけど。事実だから」

「やっぱそうなんだ。でも何で？」

「何が？」

「何でラブホテルなの？」

「そんなもん親に聞いてくれ。オレは生まれたときからあそこで育ったんだから」

「苛められたりとかしなかった？」

「え？ 別に」

「だって、子供の頃ならよく分かんないかもしれないけど、中学とか今ぐらいの歳ってそういうのに敏感でしょ？ 特に男の子は」

「でも知ってる奴はほとんどいないぜ？」

「でも、友達とか……」

「友達もいない。そういうの面倒だからあんまり人と話さないのかもな」

「坂城くん……」

そうか、彼が誰とも喋らなかったのは、やっぱり家の事情を知られたくないからだだったんだ。何か、可哀想だ。

別にラブホテルの存在を悪く言うつもりはないけれど、それで子供が苦勞するとしたら、やっぱり親にも責任があるんじゃないだろうか。私だったらどうだろう。親がラブホテルの経営者で、自分もそこに住んでいる。そもそも商売としてやるのは構わないけど、何もそこに住まなくてもいいと思うんだけどな。

「他に家を借りるとかしなかったの？」

「うーん、あそこは代々うちの土地らしくってさ、他に部屋借りたら単純に金かかんじゃん。見た通り客も入らないし。あそこにいれば家賃もタダ、食費も光熱費も経費で落とせるらしいから」

「そもそもあのホテルのどこに住んでんの？」

「一階の奥。元々は客室だったんだけど、オレと兄貴と親父とお袋がそれぞれ一部屋ずつ」

「ええ！？ お父さんとお母さん、寝室別なの？ 家庭内別居？」

「大袈裟だな。ときどきは一緒に寝てるみたいだけど。で、もう一部屋を改装して台所作って、食堂になってる。結構居心地いいんだぜ。見に来る？」

「うん、行く」

彼の部屋もまたポセイドン同様、切なさ満点の薄暗い和室なのだろうか。壁一面に春画が貼ってあったりして……あれこれ想像を巡らせながら私は坂城くんについて歩き、アフロディーテへと向かって行った。

「ただいま」

坂城くんが昨日と同じ、受付にいる聖子さんに声をかける。

「あらあなた、また来たの。しかも今日は坊ちゃん相手かい。毎日
とつかえひつかえ大変だね」

「違います！今日は、っていうか昨日だって本当は坂城くんの部
屋を見に來ただけなんです！」

「あーそーかいそーかい。ま、ごゆっくり」

坂城くんは黙って笑っている。

「もう、何なのあのオバサン！」

「え、だから聖子さん。昔からうちの店の受付嬢やってくれてる」

「嬢って歳じゃないでしょ」

「あ、ここ」

両側に十部屋ほどある廊下を歩き、一番奥の、非常扉のすぐ手前の
部屋の前で坂城くんは立ち止まった。

「ダイダロス……」

私は部屋の扉の名前を読む。だから何なのよ、この神話的ネーミン
グは。坂城くんはポケットから鍵を取り出すと、ドアに差し込んだ。

「どーぞ」

私を先に通す。部屋の中は……至って普通だった。ベッドがありソファがあり机がありテレビがありコンポがあり本棚があった。そして春画はなかった。もっと色々な絵を見てみたかったので、ちょっとがっかり。

「あ、冷蔵庫もあるんだ。いーなー」

自分の部屋に冷蔵庫というのはかなり贅沢な設備だ。

「ま、ホテル仕様の小さい奴だけどね、各部屋に一台ずつある。何か飲む？」

「うん」

坂城くんは身を屈めて冷蔵庫を開けた。

「ジョージア午後ティーコーラジンジャーエールアクエリアスカルピスファンタおいしいお茶」

「おいしいお茶」

「渋いね、はい」

「ありがと」

冷えたペットボトルを手渡された。ここにいると普通に一人暮らしの男の子の部屋にいるのと変わらない気がする。一人暮らしの男の子の知り合いはいないけどね。私はベッドに腰掛けてペットボトルの蓋を捻り口を付けた。

お茶を飲んで完全にリラックスしていると彼が近付いてきた。目の前に立つとペットボトルを私の左手から抜き取り机に置いた。何してんだろ、そう思った瞬間彼が私の身体を抱え、ベッドの真ん中に放り投げた。そして上から跨る。

「ちよちよ何やってんの!？」

「何ってここはラブホだぜ? やることは一つ」

私の両手首を大きな左手で一掴みにして頭上に持っていき、枕元へ押さえつけると、彼の足が私の両足に割り込んできた。右手が太腿を撫で、徐々にスカートの中に滑り込んできた。

「や! やめて坂城くん! 私そんなつもりじゃ……」

「どんなつもりだよ? 男の部屋に一人で来るってことはそういうことだろ?」

「わわわ私は単に坂城くんがここに住んでるのかどうかっていう……」

「だってお前オレのこと好きなんだろう? いつもオレのこと見てるもんな」

やっぱりバレてた……

「それにさ、毎日毎日同じ屋根の下でみんなやりまくってるわけじゃない。そうするとなんていうのかな、欲望の濃度? みたいのが濃いんだよね、この建物の中って。そういうところで育つとさ、人より性欲が強くなるんだって親父が言ってた」

そんなことわざわざ言わなくていいですお父さん! あなたの息子さんまだ十五歳なんですよ!

「だからしょうがないよね」

しょうがなくなるから! 私の気持ちとか! 考えて考えて!

そんな心と身体の抵抗も空しく彼の顔が近付いてきて、そして、唇を奪われた。キス。初めてのキス。もちろんキスはソルフエージュの中に含まれていない。キスだけは訓練不可能で、誰もがいきなり実践である。

確かに一目惚れしたし、あんなにキスしたかった相手だったが、こんな風に強引にされるのは嫌だった。私はイヤイヤをするように首を振り足をばたつかせた。ようやく口を離す彼。そして見下すような視線。そして一言言い放った。

「お前さあ、処女だろ」

いきなり何てことを！　だから何よ！

私は凶星を突かれて紅潮する。処女は処女でもそこらへんのトーション口処女と一緒にしないでよね！　三年間訓練を積んだんだからね！　スーパーエリートバージンなんだからね！　と喉まででかかったが言ったところで意味は伝わるまい、何とか飲み込んだ。すると坂城くんは言葉を続けた。

「オレさあ、処女とはやりたくないんだよね」

あ、あんた何様のつもり！？　こんなぴちぴちキュートスウィート女子高生捕まえて、エッチしたくない理由が処女だからってどういうことよそれ！？

「だってさ、なかなか入らないから面倒くせーし、痛がるし血が出るし、手間かかる割りに気持ち良くてねーし」

そんな……いやいやめっちゃすんなり入りますって旦那！　手間ひまかけなくても気持ち良いですって旦那！　血も出ないし後悔させませんで旦那！　などとはもちろん言えない。坂城くんはもう私に興味を失ったのか、ベッドから離れアクエリアスをぐびぐび飲んでいる。

「そ、そんなの試してみなきゃ分かんないでしょ！　初めてだったすんなりできる子もいるんだからね！」

このぐらいの反撃が限度。すると彼は再びベッドに近付いてきた。

しまった、思わず挑発してしまった。

確かに坂城くんはキスもエッチもしたいと思った初めての相手。でもするならもう少しロマンチックに、横浜ベイブリッジで夜景の見えるホテルの最上階のスウィートルームでムードたっぷり、何てことは言わないけど、せめてもう少し優しくして欲しかった。とういかまだ付き合ってもいいよね？ 私たち。

しかし。覚悟を決めた私。

いいじゃない、別に、多少強引でも。一目惚れした相手なんだし。それに初体験なんてきつとみんなこんなもの。中学生の頃、さっさと済ませた子が自慢気に語ってた話だって、周りが知らないのを良いことに、きつと尾鰭背鰭をつけまくって誇張しまくりだったに違いないのよ。実際は強引だったりお互い初めてで何だか良く分かんなかったり、大したことないのよ。

そうよそうだわそうに決まってる。それに比べたら私なんかソルフエージュのお陰で最初から気持ち良いんだから、それに好きな相手なんだからこれ以上何を望むというの？ 贅沢言っちゃだめよ、千夏。

両腕で自分の上半身を抱きしめて目をきつく閉じる。

さあ来るなら来い！ こちとらウォーミングアップはとっくの昔に出来てるんだからね！ さあ！ さあ！ さあ……あれ？

薄っすら目を開けるとベッドに彼の姿が見当たらない。おかしいな。そのとき水を流す音と共にトイレから出てくる彼。信じらんない！ うら若き純情乙女が一大決心し、清水から飛び降りる覚悟で待っていたというのにトイレって！ 悔しさのあまり私はうつ伏せにな

り、枕を殴り、ベッドの上でバタ足×100セット。

「何暴れてんの？」

「バカバカバカバカ！ もう知らない！」

「あ、そっか、せっかくやれると思ったのにオレが諦めたから怒ってんのか。ま、お前が処女でも処女じゃなくてもどっちでもいいんだけどさ」

そこで再び冷ややかな視線を向ける

「オレのこと気持ちよく出来ないだろ？ オレ一方的に女に尽くすだけのセックスとかしたくねーから」

その言葉で私の彼に対する思いが一気に冷めた。

「……帰る。坂城くん、そんな人だと思わなかった。残念だわ」

私は乱れた制服を直し髪を直し鞆と飲みかけのおいしいお茶を持ってダイダロスを後にした。

東京一関東一のゲイシャ・ガールの名を欲しいままにしたへら千代姉さん

何なのあいつ！　ちよつとカッコいいからって調子こいてんじやないわよ！

私は走る電車の中、銀色の扉を軽く蹴り飛ばす。予想以上に大きな音を立ててしまい、周りの乗客が振り向いて恥ずかしいと思ったらありやしない。

しかし、気になる一言。「オレのこと気持ち良く出来ないだろう？」。確かに私は今まで「自分が気持ち良い」今年か考えてこなかった。さっきのあいつの発言の「オレ」を「男」に変えてみる。

今の私には、「エッチとは男が女を気持ち良くしてあげる」ことだとばかり考えていた節がある。しかしエッチは二人でするものだ。男がヤリたがるのは当然自分が気持ち良いからに他ならない。

基本的に男も女も両方気持ち良い行為には違いないのだが、例えば私がセンター街をひとたび歩けば、五秒に一回の割合で男に声をかけられる（キャッチ、アダルトビデオの勧誘含む。しかし昨今はアダルトビデオは可愛い子しか出られない、らしい）今をときめく女子高生だとしても、ただ寝転がって待っていればいいというものではないのだろう。

ではあいつの言っていた「男を気持ち良くする」とはこれいかに。家に帰ると壁にぶつかった私は宮崎の美しき姉に指示を仰ぐことにした。

「あーらちーちゃん、そんなの決まってるじゃない。フェラチオよ」

「へらちよ？」

へら千代と聞いて、御歳九十を迎えた芸者界の大ベテラン、へら千代姉さんを思い浮かべた。皺だらけの手で差し出された若かりし頃の白黒写真は、これまた若かりし頃の加賀まりこを髣髴とさせる小悪魔系美人で、目の前の皺くちやばあさんが、本当にこの超美人だったのかは、もはや誰にも確かめようがなかったりする。

へら千代姉さんの自慢はそれだけに留まらない。戦前に東京一関東一のゲイシャ・ガールの名を欲しいままにしたへら千代姉さんは、数え切れないほどの男との浮名を流したのと言う。それも各界の著名人や政界の大物ばかり。

いつになく舌の滑らかな姉さんは、当時の現役総理大臣の子を身籠ったとまで言い切る。それは誰だと聞いてもへら千代姉さんは、くしゃくしゃと歯の一本もない口で笑うだけで一向に答えない。そしていった言葉が「あたしゃね、このことだけは墓場まで持っていくよ」。そんな、もう八割方墓場に入ってるようなもんなだから、教えてくれよう。

などという小話はおいというて。

へらちよ。何となく聞いたことはあるが、人の口からはつきりと聞いたのは初めてだ。私は携帯を左肩と左耳に挟みつつ金田一京助の手による新明解国語辞典第四版1997年1月10日第三十四冊発行の、「へら」のページを辿る。べら、へらす、へらずぐち、ページを捲ってへらづけ、へらぶな。

「辞書に載ってないんだけど、へらちよ」

「ちーちゃん違うわよ。『へ』じゃないの『ふえ』。ふえーらーち

「お！」

なーんだ、ふえらちおね。「へ」じゃなくて「ふえ」「よ」じゃなくて「お」ね。日本語って難しいのね。

今度は「ふえ」のページ。フェノール、フェミニスト、フェミニズム、フェムト、フェライト、フェリーポート……ない。新明解国語辞典第四版に私の捜し求める「ふえらちお」は載っていなかった。ということは金田一先生はそんなことには興味がなかったということになる。

ソルフェージュ同様フレンチっぽい響きがしなくてもないが、若干違う気もする。何語か気になるところだ。

終わった後はウェットテッシュで拭いてるし、ファブリーズもかけてる

「やっぱりないよ」

「あらそう？ ま、簡単に言えばね、ペニスを舐めることよ」

「え!？」

初体験の前にソルフエージュをマスターした、スーパーエリートヴァージン、略してSEV、読んでセヴ、の私だが、美しき姉のその一言は結構衝撃的であった。

私は引き出しからエイリアンバイブを取り出し、しげしげと眺める。

「これを……舐めるの？」

「そうよ、舐めるっていうかしやぶるっていうか銜えるっていうか、舌とか唇とか、とにかくお口全体を使って刺激してあげるの。ちーちゃん知らなかったの？ お友達とそういうお話しない？」

お姉様、実践経験を積んでいないセヴ千夏は、ぶっつけ本番叩き上げの娘達とはまだ心を通わせること儘ならないのであります……

「あ、でもちーちゃんそれは舐めちゃ駄目よ。だって毎日使ってるんですよ？」

「うん。だけど終わった後はウェットテッシュで拭いてるし、ファブリーズもかけてるよ？」

私はエイリアンを手に取る。思えば身近な道具の中で、これほど毎日使い、身体になじんだアイテムが他にあるだろうか？ 否。ああエイリアンバイブ、略してエバ、我が友よ。

「まあちーちゃんがいいんならいいんだけど……」

言われてみれば、毎日自分の膾に入れていた物だ。糸引く体液が絡みつきもする。清潔に心がけてはいるとはいえ、これを口にするのは抵抗があった。

「あ、そうだ、じゃあ今度フェラ専用のを送ってあげるから。そういえば高校の入学祝い、まだだったもんね。私からのプレゼント」

おお……さすがは我が師匠。ふえらちお専用のバイブを送ってくれるなんて。感激のあまり私は両手を広げ天を仰ぐ。電話を切ると、それが届くのを楽しみに今日もソルフェージュに勤しんだ。

次の日学校にあいつの姿はなかった。ふん、私に冷たくされて落ち込んで風邪でも引いたのだろう。少しは頭を冷やすべし。

しかしもう一つ気になることが。ネチっ子田倉も休みだったのだ。ムツツリでスケベな男はあるが、中学校の頃も確か休んだ事はないはず。とはいってもまあね、人間だものね、長い人生一日くらいね。

滞りなく学校を終え家に帰ると居間のテーブルに姉からの小包が置いてあった。さすがは美しき姉&クロネコさん。ここは埼玉なのに宮崎からでも一日で届くなんて……と、受付日を見ると二日前になっている。

これはつまり、美しき姉はとっくのとうに私のためにふえらちお専用バイブを注文していて、私が電話で指示を仰ぐより前に既に発送したことを意味する。ということは、私がそろそろソルフェージュ

の次の段階の壁にぶち当たる事を予測しての行動。素晴らしい、素晴らしい。素晴らしいわお姉様。私のことなんでもお見通しなのですね。

逸る気持ちを抑えて部屋に戻り、包装紙を破き箱を開ける。そして中から出てきたものを見て、私は啞然とした。これまで毎日愛用していたエバ、それを遥かに凌ぐリアルなテクスチャがそこにはあった。私は机の中からエバ1号を取り出して、二つ並べてみた。

負けたのよエバ1号

エバ1号は形こそ男性器そっくり（だと思う）なのだが、クリアブルーの爽やかな色合いで、人体の一部っぽくはなかったのだ。それが目の前のこれといったら、肌色で質感もかなり皮膚に近く、血管まで浮き出るほどの細部へのこだわりようである。

負けた。負けたのよエバ1号。あなたはエイリアンには程遠かったわ。どっちかっていうとSFね。サイエンスフィクションバイブ。略してサフバ。あなたは今日からサフバよ。そして新たに届いたふえらちお専用のキミ、キミこそエバの名に相応しい。

ニューエバを手にとって三百六十度ぐると観察する。すると、明らかにサフバと違う点がいくつかあった。まずサフバには、主となるペニス部分のほかに、根元から小さな枝が出ている。これは膣を刺激すると同時にクリトリスにも振動を与えられるという、快感を追求した結果生まれた、実際の性器にはありえない構造なのだ。その点から言っても、フィクションなのだから、やはりこの子はサフバと呼ぶに相応しい。

一方ニューカマーのエバは、枝状の小突起もないし、そもそもスイッチがない。その代わりに睾丸がぽこぽこと二つ並んでくっついている。そして根元が大きな吸盤状になっており、机や床や壁に貼り付けられる構造になっているのだ。

エバの入っていた袋に便箋が同封されていた。師匠からのメッセージに違いない。読もうとしたところで電話が鳴った。美しき姉からである。

「ちーちゃん届いた？」

「うん！　ありがとう！」

「実はね、それ本当はちーちゃんが入学した時に送ろうと思っていたの。だから私の手元には三月の時点で届いていたのよ。でもね、私は待ったの。ちーちゃんがソルフュージュの次の段階に進み、自ら課題を見つけてくるまで待ったのよ。だって、ちーちゃんが学びたいという気持ちにならないのに先走って教材だけ送っても、学習意欲が湧かないでしょう？　だから昨日ちーちゃんから電話があったときは凄く嬉しかったのよ」

「でもさあ……これ送ったのって一昨日だよ？　何で昨日私が電話するって分かったの？」

「うふふそれはね以心伝心テレパシ……って言いたいところだけどね、いつでも送れるように寝室に置いておいたんだけど、旦那さんが見付けちゃってね、勝手に送っちゃったのよ」

「ふうん。でも大丈夫だった？　お兄さんウブなんですよ？」

「大丈夫よ。しっかり包装して後は送るだけになってたんだから。中身が何なのかなんて分かりっこないわ」

「そっか。でもこれ、前のバイブとは違うよね？」

「それはね、正確にはバイブじゃないの。モーターもないし振動もしないからね。デイルドっていうのよ」

「でいるど……」

「使い方は書いてあるから。じゃあ頑張るのよ」

そして電話は切れた。早速美しき姉の手書きの説明書を紐解く。金箔の散りばめられた和紙の便箋にはたった二行、達筆な毛筆で次のようにしたためられていた。

一、机（もしくは床）に立てて、上から銜え込む。

二、壁につけて正面から銜え込む。

そうか、床に立てた場合は男の人が寝ている状態で、壁につけた場合は男の人が立ったままふえらちおするということか。男の人の取るであろうあらゆる体勢に対応するための根元の吸盤。ううむ、これまたよく考えられている……

試しに机に立ててみる。一応ウェットティッシュで軽く拭き取る。さらにティッシュで残った水分を拭き取る。そして上から銜えこむ。

恐らく先端が気持ち良い部分だろう。口の中で舌を先端に絡める。うーん、あんまり楽しくないな。それはそうか。反応があるわけじゃないし、自分が気持ち良いわけでもないからね。というかこれ、入れてみたくなっちゃったな。だってサフバだと振動がある代わりに片手で抑えてなくちゃならないからね。

私は机からエバを取り外し、フローリングの床に固定し直した。パントを下ろし、その上に仁王立ち。そしてゆっくりと腰を下ろし、エバを右手で添えながら膣の中に沈めていく。

あああ。

全部入ったところで両手を前に着き、お座りの格好で腰を振る。こ、これはまたいつもと違って……強力な吸盤のお陰で、激しく腰を振ってもエバはびくともしない。夢中で腰を振り、私はいつてしまった。

ベッドに横たわりエバを手にとってしげしげと眺める。実際のエッチでは、ペニスが振動するなんてことはないわけで、そうするとエバを使つてのソルフエージュの方がより実践に近いということにな

る。

せっかくふえらちお専用で送られてきた代物だが、ソルフェージュの上級レッスンでも充分使えそうだな……というところで千夏、ご飯よーという母の声が階下から聞こえてきたのだった。

イジリー岡田と岡田准一くんが実は

明るる日、あいつとこいつ（あ、あいつは坂城でこいつはネチっ子ね）は復活していた。ネチっ子はいつも通りムツリトリオと活動していた。あいつは以前と同じく誰とも喋らない。私も何だか一目惚れした相手とかどうでもよくなっているの、ちらちらと顔色を伺ったりしないのだ。あいつも話しかけてこないしね。

別に気まずいとかいうんじゃないからね！ 一昨日の私に対する態度で気持が完全に冷めてしまったのだ。さよなら初恋の人。これにより学んだ事。「今後一目惚れは避けましょう。外見だけで好きになるのはアイドルに夢中になるのと変わりません」である。

さーて今日も詰まらない授業だったな……ん？ んん！？ 何で！？
何であの二人一緒に帰ってんの！？

教室の窓から校門への通り道を見下ろすと、あろうことか坂城くんとネチっ子が一緒に並んで帰っているのを見つけた！

見間違いではない。坂城くんは元好きな人だし、あの飛び跳ねるような、それでいて下手なマリオネットのように軽快ではないネチっ子特有の歩き方は一度見たら忘れられない。たまたま帰る時間と歩く方向が重なっただけかと思いきや、確実に喋りながら帰っている。

うそお……なんか完全に取残された気分。街中で彼氏が他の女の子と歩いているのを期せずして発見してしまったときのような。

どういうことだ？ 私は鞆を引っ掴むと急いで教室を出て校門へと向かった。二人一緒ってことは坂城くんち、すなわちアフロデ---

テに向かう可能性が高い。小走りに追いかけると、大通りを歩く二人を見つけた。私は20メートルほど後ろを鞆バッグで顔を隠しつつつかず離れずつけて行く。

それにしても何なんだ？ 坂城くんは中身は別として見た目はイケている。一方ネチっ子田倉は中身も見た目も完全にイケてない。この組み合わせは明らかに不自然だ。違和感だ。イジリー岡田と岡田准一くんが実は大の仲良しでしたーと聞かされるくらいショッキングな光景だ。

二人が接近した、私が考え得る理由は二つ。

一、デキている

二、よからぬことを企んでいる。

だってさー純粹に友情育めるとは思えないんだよねー。人種が違い過ぎるもん。やがて芸術劇場が見えてくると、二人は急に走り出した。

なんだなんだ！？ どうしたどうした！？ アフロディーテとは違う方へ曲がる二人。追いかけて十字路に立つ私。そして見失った。まさか、捲かれた？ ということは気付かれてた？ 道の真ん中で呆然としていると、

「つうかまあえたあ」

「ぎゃあああ！」

いきなり後ろから二人に両腕を取られてしまった。くそう、こいつ

らやっぱり……

「こんなところで何してんだ？」

坂城くんが見下ろして言う。

「な、何だって良いでしょ！ さ、散歩だよ散歩！」

するとネチっ子田倉が前髪をクンツと上げながらにまにまと言う。

「仲間外れにされたのが悔しいんでしょお」

「な……ベベ別々に悔しいとか仲間外れとかそんなじゃないし！」

「ま、いーや、とにかく連行な」

「あいあいさあ」

「やーめーろーはーなーせー！」

私は捕らえられた例の宇宙人の如く、足が地面から浮くほど両肩を持ち上げられてそのままフロディーテに拉致されてしまった。

「離せ！ バカ！ 痛いっつの！」

坂城くんの部屋の前に着くとようやく私を離してくれた。

「だいたい何だってあんた達がツルんでんのよ！ デキてんでしょ！ ホモだホモ。ここラブホテルだしね、ちょうどいいから二人でやってくれば！」

しかし挑発的に氣勢を吐く私に二人はにまにまと笑うだけだ。坂城くんまでネチっ子のにまにま病がうつったらしい。

「まあとにかく入れよ」

坂城くんがダイダロスの扉を開けて私を促す。しかしまた襲われるのが嫌なので私は坂城くんを睨み付けた。

「怖い顔すんなって。悪かった、一昨日の事は謝るから。もうやんねーって。お前処女だし」

一言多いんじゃないやボケえ！ 田倉が「へえー岡崎千夏さん処女なんだ意外いー」という顔付きで、私の全身を舐めるように何度も見渡した。鳥肌。

「何か飲むか？ あ、岡崎はおーいお茶でいいよな？」

いや別にさ、病めるときも健やかなるときもいつ如何なるときもおーいお茶が飲みたいわけではないんですけど……出来れば今日はフアンタとか飲みたい気分だったけど、既に三人それぞれにペットボトルが行渡ってしまったのでここでやっぱ取り替えてとか言うのも大人気ないし、もういいや。

ちよいとアダルトな子供番組

「で、何なわけ？」

これで「一」のセンは消えた。まあこの二人が付き合っていたとしたらかなり気持ち悪いが。ということは悪巧みに決まっている。

「良太、つけてみ」

「あいあいさあ」

りよ、良太！？　ってネチっ子のファーストネーム！？　何でそんな親しくなってるのこいつら？　つーかあいあいさあってっ完全に上下関係生まれてません？

龍馬の号令でネチっ子は、永遠に若さと美しさを保ち続ける、日本が世界に誇る大女優吉永小百合さん推奨の、30インチ液晶アクオスのスイッチを入れた。普通の番組ではなく、入力を切り替える。すると画面にはどこかで見たことのある、寂れた和室が現れた。

「これってさあ……」

と言いかけたとき、画面右側の襖が開いて一組の男女が肩を組んで入ってきた。まさか……

「これ盗撮だよね？」

「盗撮じゃないよお」

「だってこれここのホテルの一室でしょ？　それを隠し撮りしてるんでしょ？」

すると坂城くんが悪びれずに言った。

「あれと同じだって。コンビニとか本屋とかのカメラ」

「あれは犯罪防止のためでしょうが！」

「だから、これも犯罪防止のため。最近さ、物騒な話が多いんだよね。女の子無理矢理拉致してやっちゃうとかさ」

それはお前のことだろ……

「あとカップルの振りしてホテル入って麻薬の売買やったり、児童売春やらせたりさ、だからそういうのを防ぐためにカメラを設置したってわけ」

ネチっ子田倉を見ると、にまにましながら頷いている。

「嘘つくんじゃないわよ。本当にそうだとしたら全室にカメラつけて、受付で一括で監視できるようになってなきゃ意味無いじゃないのさ！ どーせこの部屋だけに取り付けて、覗こうって魂胆なんですよ！ 聖子さんに言いつけてやる」

私はおーいお茶を持ったまま立ち上がろうとした。迫力のある受付嬢聖子さんはこういうときには頼もしい味方になるに違いない。いきり立つ私の肩を龍馬が抑える。

「まあまあ落ち着けて。分かった、白状する。犯罪防止は嘘だ。良太がさ、オレがラブホに住んでるのをやたら羨ましがるからさ、何でって聞いたんだよ。そしたら『僕だったら絶対に部屋にカメラ取り付けるんだけどな』っていうもんだからさ」

だからなにさ。

「生まれたときからこういう環境だから、部屋を覗こうとかいう発想自体なかったんだよ。それ聞いて、ああそうかって目から鱗でさ」

若干使い方違わない？

「だから昨日アキバ行ってカメラ買って、親と客がいない間を見計らって設置したってわけ」

「あんた達、ホント最低……ってあの人達何してんの？」

画面をふと見ると、男と女はクマとウサギになっていた。ウサギといっても網タイツとハイレグがセクシーなバニーちゃんではない。二人とも完全な着ぐるみである。一体何が始まるのだろうか。

「お！　きたきた！」

坂城くんが嬉しそうな顔をしている。こんな顔初めてだ。

「来たって何が？」

「あの二人さ、ここの常連なんだけど、毎回コスプレして来るんだよな。で、いつも使う部屋が決まっててさ、ちょうどこの真上、二階のプロメテウスなんだよね」

ああ、確か、ネチっ子と来たときに女子高生の格好で入っていった三十二歳子持ちで元旦那達がアル中でDVの不幸な彼女、麗子さんね……

画面はちょうど目の高さに固定されていて、部屋全体がすっぽりと収まっている。恐らく床の間辺りの違い棚にでも仕掛けてあるのだろう。ウサギちゃんの中身が恐らく麗子さんだ。布団の上で顔をこ

つちに向けて四つん這いになっている。もちろんウサギちゃんの被り物だから素顔は分からないが。

クマの男を見ると、股間からは既に大きくなったペニスが露出して
いる。股間だけ切り取ったのだろうか。ウサギちゃんの背後に回ると、腰に両手を置き、お尻に股間を押し付けた。クマががんと後ろから突いている。ということはウサギちゃんの股間にも穴が開いているということだ。

「ねえこれってさあ……」

見方によっては獣のようなセックス、と言えなくもないが、このほのぼの感、とてもエッチをしているようには見えない。デパートの屋上で着ぐるみを着た二人が、お客さんが来なくてあまりにも暇だったので、悪ふざけで交尾の真似事をしているといったところ。もちろん後で店長に見付かってクビにされるのだが。ちよいとアダルトな子供番組（性教育的な？）を見ているようだ。男二人は腕を組んでにまにましながら見ている。面白いか？　これ。

第二ラウンド

五分ほど頑張って、ようやくクマとウサギちゃんの交尾が終了した。被り物を取ると、二人とも汗だくである。クマの方はオッサンで、薄い髪が頭皮にへばりついていた。よほど疲れたのか、そのまま横になるとクマ男とウサギちゃんは動かなくなった。

「声は出ないの？ これ」

せめて音が出ればもう少し臨場感が出るだろうに。

「ああ、それは無理。小型カメラだからマイクなんか付いてない」
「ふうん……何か期待外れ」

「何だよお前、さんざん盗撮とか言ってたくせに楽しみにしてたんじゃないかねえか！ 見る気満々じゃねえか！」

「え、だってそりゃあそうでしょ。もっと濃厚な大人のエッチが見れると思ってたのに」

アニマル着ぐるみプレイじゃ何の勉強にもなりませんかな。

「ああ、見て見てえ」

ネチっ子田倉が画面を指差した。するとシャワーから戻ってきたのか、バスタオルを巻いた二人が画面に現れた。

「ほら、こっからだって。第二ラウンド」

すると二人は部屋の真ん中で抱き合ってキスを始めた。バスタオルがはらりと落ちる。おおおこれよこれ。遂に本物のエッチが見れる

のですね……彼女はそのままオッサンの腹の出た身体に口付けながら、徐々に脚を折り、しゃがみ始めた。そして股間の位置に顔を持つてくる。

「おお！ いけ！ いけ！」

坂城くんが両拳を握り締めて叫んだ。ネチっ子も食い入るように見ている。当然私も。女は手でペニスを包み込むと舌を出し、先端を舐め始めた。そして大きく口を開け、銜えた。

「やった！」

麗子さんは銜えたまま首を前後に動かしている。そして手も休ませておらずに、根元の部分をしごき、玉袋をさすっている。なるほど、これがふえらちおなのか……オッサンの顔は確かに気持ち良さそうだ。できればその動きをメモっておきたかったが、さすがに止めておいた。

やがてオッサンは麗子さんの口からペニスを抜くと、またもや彼女を四つん這いにさせた。今度は先程と逆の向き、つまり女の顔が向こうでお尻がカメラに向かっていて。つまり女性器がもろに見える形になった。

「うおおおおお！」

ここで男二人の興奮はマックスだ。手を取り合って喜んでいる。そんなに見たかったのか？ つーかネチっ子はともかく、坂城くんは見ただことあるんじゃない？……？

しかし喜びも束の間だった。こっちに女のお尻があるということは、

さらにその後ろからオッサンが挿入するということを意味している。程なく画面全体が、オッサンのぶよぶよとした、でっかいほころからはひよろりとした毛も生えている汚いお尻で埋め尽くされた。

「どけオヤジ！」

「ケツどけろおお！」

男達の怒声も空しく、オッサンがいくまでその体勢が変わることはなかった。

オッサンはいく寸前でペニスを抜くと、弛んだ尻をぶるっと震わせ、へたれこんだ麗子さんの背中に放出した。せっかくシャワー浴びたのになあ。オッサンはティッシュをしゅしゅしゅしゅしゅと何枚も引き抜くと、彼女の背中に出した物を丁寧に拭き取り、自分の性器も丁寧に拭き取った。麗子さんはしばらく動かなかったが、やがて二人とも服を着て、部屋を後にした。

齢十五にしてさくらんぼじゃない

「まあ初回にしては上出来だな」

坂城くんとネチっ子は腕相撲の形がっちり手を握り合い、にまにまど頷き合っている。

「でもさー坂城くん実際やってるんでしょ？ 人の見て面白いわけ？」

「お前なあ、男をまるで分かってねーな。面白いに決まってんだろ。童貞しか他人のセックスに興味がなかったら世の中にエロビデオがこれほど普及するわけないだろ」

あ、そうか。

「それに、何たってライブだしな。最後はオヤジのケツだったけど、彼女のアそこもばっちり見れたし」

「それなんだけどさ、坂城くん女性器にやたら興奮してたけど、普段見てるんじゃないの？」

「童貞だよお、坂ちゃんは」

私と坂城くんのやり取りを黙って聞いていたネチっ子田倉が口を挟む。え？ ドーテー？

「ばばばばバカ野郎！ 何でバラすんだよ！」

「だってえ、そんなの見栄張ったってさあ、すぐ分かっちゃうってえ」

「へーーーーそーなんだー童貞だったんだー坂ちゃん？」

私は目を細め、私的最高のムカつく顔を作り出し坂城くんを見下ろした。

「あ！ お前まで坂ちゃんとかやめろよな！」

「何だっけ？ 散々偉そうなこと言ってたよねえ？ 処女とはやりたくないとか尽くすセックスは嫌だとか。要するにあれってさく自分が初めてだから、相手も初めては嫌だってことなんですよ？」

完全なる形勢逆転である。あんな百戦錬磨的発言をしていた坂城くんが、実はチェリーボーイだったなんて。くくくく。一昨日だって、どうせ最後までやる気はなかったに違いない。

「そそそそーゆーお前はなんだよ！ お前だって処女なんだろう！？」

「さくあどうですかねくく仮に処女だとして何か問題でも？ チェリー坂城くん？」

「ちえちえちえチェリーとかくつつけんな！ つーか良太！ お前だって童貞だろ！ なに我関せずみたいな顔してんだよ！」

「違うよお」

「え！？」

私と坂城くんが同時に叫ぶ。今、違うって言ったよね？

「僕はねえ、童貞じゃあないんだなあこれが」

「う、嘘でしょ……いつ？ どこで？ 誰と？」

私はネチっ子田倉に詰め寄った。信じられない。こんなムツッリスケベオタクの田倉が、齢十五にしてさくらんぼじゃないだなんて……

「これはさあ、内緒って約束したんだけどさあ、まあいいっかあ、

もう卒業しちゃったもんねえ」

「え？　ってことは中学校の同級生とか？」

ふふふん、と笑い、ネチっ子は前髪を鬱陶しく振り払った。

「違うんだなあ、これが。岡崎千夏さんさあ、保健の先生覚えてるう？」

「ああ、沢村先生でしょ。結構綺麗な先生だったよね」

「うん。その沢村先生なだけどさあ」

「えええまさかまさか沢村先生と！？」

「ふふふ、まあ聞きなよお。あれは中三の二学期の終わりの日だったんだけどさあ、終業式が終わったんだけどお、そのとき物凄くお腹痛くなっちゃってさあ、みんな帰っちゃったんだけど一人でトイレに閉じ籠ってたんだよねえ。うーんそうだなあ、一時間くらいうんうん唸ってたかなあ、僕さあ、年に何回か原因不明の腹痛に見舞われるんだよねえ。僕の仮説によるとさあ、多分お腹の大掃除なんだと思うんだあ」

「お腹の大掃除？」

「うん。腸にはさあ、便秘じゃなくってもウンチが溜まってると知ってるう？　僕も毎日ちゃんと出るからさあ、全然便秘じゃないんだけどねえ、それでも毎日少しずつ溜まっていくんだと思うんだあ。それが一定量を超えると一気に出るんじゃないかなあって」

「それと童貞とどう関係するんだ！」

まさか目の前の、一生女に縁のなさそうなムツリネチっ子田倉に先を越されたチェリー坂城くんは、なかなか話が進まない様子にイライラし始めた。

「でねえ、いつもは苦しいんだけどねえ、それでも時間掛けて頑張っただけスツキリ出るんだけどさあ、そのときは一時間踏ん張って

も出きらないっていうかあ、お腹もちよつと痛かったんだよねえ。
まあそのまま帰っても良かったんだけどさあ、生徒がみんな帰っち
やったわけでしょお？ これはチャンスかもって思ったわけえ」

「何の？」

「えええゝ？ 決まってるじゃあん。僕沢村先生好きだったからね
え、もし保健室に行っていたらさあ、二人っきりで話せるかなあつ
て思ったわけえ。でねえ、保健室に行つてこっそり扉を開けて入っ
たわけえ」

なぜにこっそりだ……

「そしたらなんとお！ 衝撃的映像が目の前にい！」

そこで言葉を区切るネチっ子田倉は、当ててみると言わんばかりに
私と坂城くんをにまにまと交互に見た。

「体育の先生と不倫！」

「ぶぶう」

「校長とやってた！」

「ぶぶう」

「一人エッチ！」

「ぶぶう」

「3P！」

「ぶぶう」

「んじゃ4P！」

「ぶぶう、二人ともハレンチなことばかりい」

お前が一番ハレンチだろうがよ。

フォーメーション・トライアングル

「正解はあ、ハナクソほじってたんだよねえ」

「鼻くそ？」

「そおう。あの綺麗な沢村先生がさあ、目え見開いてえ、物凄い顔して人差し指でぐりんぐりんやってさあ、僕呆氣にとられてしばらく見てたんだよねえ。沢村先生全然気付かなくてさあ、しかも取った鼻くそをさあ、手の平で丸めてピンって飛ばしてたんだよねえ。で、そのとき思わず『あ』って言っちゃってさあ、沢村先生が恐る恐る振り向いたんだよねえ。僕に見られたことが分かると急に泣き出してさあ、僕にしがみ付いてさあ『お願いだから誰にもいわないで』ってゝねえ」

あんな綺麗で上品そうな沢村先生が鼻くそか……そりゃ見られたらショックだわな。

「でえ、いいですよ黙ってますよお。その代わり……って交換条件持ち出したんだあ」

ねちっこさが更に倍増した。

「まさか良太、その条件ていうのは……」

「そおう。せつくすう」

「ちよっとお、それホントなの？ 何か信じらんないなく確かに鼻くそはバラされたくないけど、そんなんで生徒とエッチなことなんてするか？」

その目撃者が美少年ならまだしもこいつである。ネチっ子である。にわかには信じ難い。

「僕もさあ、最初はそんなつもりなかったんだよねえ。最初に言ったのは『先生のアソコを見せて』だったんだあ。おっぱいはさあ、エロ本でもビデオでも見れるけど、アソコだけは日本じゃ見れないでしょお？ 絶対モザイクだもんねえ。だからさあ気になって気になっ

てしょうがなかったんだあ。」
それがいがい見れるチャンスが訪れたってわけえ。そしたら先生真っ赤な顔しちゃってさあ、『見せてあげるから絶対黙ってね』って、白衣はそのままでパンティストッキングだけ脱ぎ始めたんだよねえ。あ、もちろん脱ぐところも見たかったから、僕は床に寝そべってさあ、顔の上に跨いでもらって見てたんだあ」

このど変態めが……

「でえ、先生パンツも脱いじゃったわけえ。そしたら立ったまま『これでいい？』っていうからさあ、『そんなんじゃ駄目ですちゃんと広げて見せて』って言ってさあ、先生をベッドに寝かせてえ、脚をM字に広げてえ、じっくり観察してたんだあ。」

そしたらさあ、僕何にもしてないのにさあ、勝手にだんだんぬらぬら光ってきたんだよねえ。だからさあ、ふーって息吹きかけてさあ、『先生濡れてきたよ』って教えてあげたんだよねえ。『そんなこと言わないで……もういいでしょ？』っていうからさあ、僕はこのときばかりに『中の方も見てみないと』って言って、アソコ広げて指入れたんだよねえ。

そしたら先生感じちゃってさあ、あんあん言い出してさあ、僕のアソコももうガチガチでさあ、指を出し入れしながら夢中でアソコ舐めてたんだよねえ、そしたら先生起き出して、僕の身体押さえつ

けてさあ、ズボンとパンツ下ろして上から乗っかられちゃったんだあ。

白衣のまま腰振ってさあ、ちょーやらしかったなあ。僕も割とすぐいっちゃってさあ、『先生出ちゃうよお』なーんてエロ漫画みたいなセリフ言ったらさあ、先生も『いいのよ一杯出してえ!』ってこれまた安いエロ小説みたいなセリフ言っちゃってさあ。だから先生が今妊娠してたら僕の子かもしれないねえ。うふふふう」

まじか……ネチっ子田倉の話に不覚にも私は濡れまくってしまった。坂城くんも黙ったまま股間を大きくしている。

私は二人を置いて先に帰り、二階に駆け上がると、でいるど改めエバを取り出した。ウサギちゃんのように仁王立ちした男にふえらちおをし、後ろから攻められる気分を味わいたく、エバを壁に取り付けようと思ったのだ。

しかし部屋の壁には壁紙が貼ってあり、吸盤を取り付けられそうな場所がなかった。窓硝子の位置も腰より上だ。唯一付きそうな、表面がつるつるとした場所は入り口の扉だけだった。本当はしっかりとした壁が良かったのだが背に腹は変えられない。

私は制服のスカートを下ろし、既に股間の部分がぐしょぐしょのパンツを脱ぎ捨てた。扉に背を向け右手でエバを持ち、取り付ける高さを調節する。えいやっと扉に押し付けて、私はまずふえらちおの特訓を始めた。

ウサギちゃんのやり方を思い出し、玉をさすりながら顔を前後させていたが、木の扉がだんだんあのメタボハゲオヤジに見えてきたの

でそこそこで終了。次に後ろを向いて手を添えて、エバを私の中に導いた。お尻を扉に擦りつけるように上下させる。左手はブラジャーの中の乳首をまさぐり、右手でクリトリス。うん、我ながら完璧。フォーメーション・トライアングル、ここに完成。

無我夢中でソルフエージュに勤しんでいると、「千夏！ 何暴れてんの！」という母の声がした。どうやら扉が予想以上にガタガタと激しく音を立てていたらしい。「も、もうちょっとで終わるから！」と言って、すぐにいった。

善は急げとか言った

そういえば沢村先生は三年の三学期、学校に来なくなっていたなあと、母特製の必殺ビーフシチューをはふはふ食べながら思い出す。

なぜ必殺かというと、母曰くこれまでの人生で、これを食べさせて落ちなかった男はいないのだそうだ。「お父さんなんか凄かったのよ。私と会うときは必ず食べさせてくれて泣きついてきたんだから。私よりビーフシチューと結婚したって感じ?」。どこまで本当かは定かではないが、確かに美味しい。かなり美味しい。

料理の出来る男が増えた感じのする昨今だが、それでもやはり基本的に女の手料理というのは男に対して強力な武器だと思う。これは男が男で女が女である以上、永遠に変わらない気がする。夏休みあたりに伝授してもらおうとしよう。

沢村先生は保健室の先生なので普段顔を合わせる機会も少なく、さほど気にしていなかったが、田倉との一件で、生徒としかも校内で猥褻な行為をしたことに責任を感じて辞めたのかもしれない。田倉が悪いのか先生が悪いのか、それとも両方悪いのか、それは私にも分からない。

次の日学校に行くと、坂城くんがどんよりと暗い顔で俯いていた。昼休みになると私と田倉を校舎の裏へ引っ張っていった。何だ何だどうしたどうした。

「お前ら今日放課後会議な」

それだけ言うと、さっさと行ってしまった。

「何なのよあいつ。田倉何か知ってる？」

「さあねえ何だろうねえ」

相変わらずねちねちととらえどころのない奴。

「しかも言うことがそれだけだったら教室でもいいじゃない。わざわざこんなところまで連れ出して。B定食が売り切れたらどうしてくれるのよ！」

日替わりB定食は、さして美味しくないメニューを取り揃えた学食の中でも、突出して絶大な人気を誇るものなのだ。他のメニューは確かに安いのだが、麺類はうどん、蕎麦、ラーメンのどれもが茹で過ぎているし、カレーは煮詰まりすぎていて小学校の給食の方が百倍美味しい。その中で神の如く燦然と輝きを放つのが日替わりB定食である。

鯖の塩焼き、鰯大根など渋いものからエビフライ、とんかつ、天ぷら盛り合わせなどボリュームのあるものまで幅広く、ご飯も味噌汁もお新香もお変わり自由で350円という、考えられない、いや、高校生の懐具合を考慮しまくった値段設定なのだ。

当然赤字覚悟の目玉商品なので一日限定三十食なのである。一クラス42人×10クラス×三学年＝1260人、その七割が学食を利用するとして882人。つまり882÷30＝29.4、およそ30倍の狭き門なのだ。学食派にとってB定は必ずゲットしたい一品だ。

その昔、運よくゲットした生徒が、値段を吊り上げて転売する、い

わゆるダフ屋行為を働いていたこともあるという。もちろん今では禁止されているが。確実にB定を落とすためには、お昼休み直前のチャームが鳴る前に教室を出るという、先生に叱られること覚悟の大胆なフライングキッズもいるくらいなのだ。ちなみになぜかA定食はない。

すっかり出遅れた私に、当然B定食は残っていなかった。仕方がないのできつねうどんとお握り一個（鮭）でお昼を済ませた。

放課後、私と田倉は他の生徒が帰るのを待っていた。すると坂城くんが立ち上がり、「いくぞ」と声を掛けてきた。

「行くってどこに？」

「あ、今日も覗くんではよお？ 行く行くう」

「えー私パス。一回見ればもういいや」

もちろん私も人のエッチには興味があった。しかしそれは「どのように行うのか？」という純粹な興味であって、男共のように、それを見て興奮するから見たかったわけではないのだ。それに一番見たかったふえらちおのやり方が分かったのだ。後はいつか来る本番に備えてトレーニングを積むだけだ。盗撮とかビデオとかもういいや。

すると坂城くんは溜め息をついた。

「実はな、そのことで相談があるんだ」

私達は坂城くん連れられ、学校の裏手にある、ブランコと滑り台と鉄棒のある、日本式ステレオタイプの公園に行った。こんな近く

に公園があつたなんて知らなかった。住宅街の中にあり、駅からの通学路からは外れているので、他の生徒の姿は見当たらない。

「聖子さんに見付かった」

「何が？」

「だから、カメラが」

「ふーん、残念だったね」

「ふーんてお前なあ！ 何を他人事みたいに」

「だって他人事だし。で、怒られたわけ？」

「怒られた」

「つーかさ、そんな簡単に見付かるところに隠したの？ バカだねー」

「んだと！」

「まあまあ二人とも」

ネチっ子がやっと口を開く。

「まあまあじゃねえぞ！ 元はといえば良太、お前がカメラ取り付けようって言い出したんじゃないか！」

「えええー確かにそうだけどさあ、学校サボってまでカメラ買いに行こうって言ったの坂ちゃんじゃないかあ。ノリノリだったじゃないかあ」

「なにをー！ お前だって善は急げとか言っただろうが！」

「まあまあ二人とも」

今度は私が仲裁。なんだかなあ。

世界中のどんな言語の民族にも

「要するに、聖子さんに見付かって、怒られた。謝ったんでしょ？
じゃあもういいんじゃない？ これに懲りて二度とやらなければ」
「あのなあ、そんな簡単に終わってるんだったらわざわざこんなと
こにお前ら呼び出すかよ」

「じゃあ何があったのよ。お客さんに見つかって訴えられたとか？」
「むしろそっちの方が……いやそれもまずいけど……ああああ！！
！」

坂城くんは頭を抱えてしゃがみ込んだ。

「もう！ 何一人で喚いてんのよ！ ちゃんと説明しないんだった
ら帰るけど？」

「待て待て、言うから。実はさ、聖子さんに交換条件持ち出された
んだ」

「交換条件って？」

「昨日の良太の話と同じ」

「昨日の話……ああ、パンツ見せろって言われたの？ いいじゃん
そんなくらい。ずばっと男らしく見せつけてやれば」

「ちげーよ！ その先！」

「その先は……えええ！？ まさか……」

「やらせろって」

「やらせろって……それ男のセリフだよな？」

「『坊ちゃん、黙っててあげるからやらせて』ってあの顔であの歳
で……あああ！ 怒られて二、三発引っ叩かれた方がどんなに楽か
……」

遂に坂城くんは鼻水流しながら泣き出した。うーむ、聖子さんかあ、

確かに私が男だとしてもかなり厳しいかも。

「で？ もうやっちゃったの？」

「やるかバカあ！ 保留にしてもらってんだよ。ちょっと考えさせてくれて言ってる」

「へえ、いつまで？」

「今日」

「今日ねえ……ま、どうせやらなきゃいけないんだから早い方がいいんじゃない？」

「うううなんでオレがこんな目に……初めての相手が聖子さんなんて絶対嫌だあああ！ ……あ、そーだ！ 良太、お前もう経験済みなんだから代わってくれよ。な？ な？」

「バツカじゃないの？ そんなのすぐバレるじゃない」

「だからさ、何だかんだ理由付けて目隠しとかしてさ、良太には部屋の押入れなんかには隠れてもらってだな、行くぜ！ ってときにバトンタッチ」

「僕だってやだあ」

「そこを何とか！ 頼む！ お前だって共犯者なんだからさ！」

「筆おろしがさあんな妖怪じゃあさあ、トラウマになっちゃうよお」

「え？ お前昨日、童貞卒業したって……」

「筆おろしって何？」

意味が分からない。

「あははあれはさあ」

「ねえねえ筆おろして何ってば！」

「うっせーぞ岡崎！ 男が初めてやることだ！」

「なるほど……てことは……あれえ？ 田倉昨日沢村先生とエッチしたって」

「うっそでえす」

ネチっ子田倉は両手を広げ親指だけを頬に付け、ウーパールーパーのようにひらひらさせ、ついでに舌も出して、世界中のどんな言語の民族にも通じるであろう、完全に人をバカにした仕草を試みせた。

「っのヤロウ！ 待ちやがれ！」

そして追い掛け回す坂城くん。体格の良い坂城くんが、なよなよした田倉を追い掛け回す様は、さながらシマウマを狙うライオンの図。しかしシマウマは予想外にすばしこく、ライオンは遂に追いつけなかった。

ぜえぜえ言いながら戻るライオンのオス。あ、そうか、狩をするのは雌ライオンだもんね。雄はサボって見てるだけだもんね。その後から飄々とネチっ子シマウマが来た。予想外の体力と足の速さにちよつと見直してしまった。

「嘘ってどういうこと？」

「嘘は嘘お。二人とも信じたわけえ？ あんな話い」

「ちよつと待ってよ、どっから嘘なのさ？」

「ホントはねえ、パンツすら見せてもらえなかったんだよねえ。でもハナクソはホントお。『先生黙っててあげるからパンツ見せてえ』って言ったらさあ、ハナクソの時よりさらに怖い顔してさあ、『こんのクソガキヤ調子こいてんじゃねえぞごるあ！』ってドスの聞いた声で言われてさあ、お腹三発殴られたんだよねえ。うずくまったらシャツの襟掴まれて、『言ったらブっ殺す』って耳元で言われてさあ、その恐怖と殴られた衝撃で残りのウンチが出たんだよねえ」

何だよ、嘘かよ……まあ沢村先生がネチっ子の子供を身籠る可能性はなくなったということは喜ばしいことだが、まさかあの上品な顔でそんな暴力行為を働くなんて……

「沢村先生ってさあ、昔レディースの頭だったらしいよお。でもさあ、あんな綺麗な先生がさあ、あんな乱暴な言葉遣いとか行動とかするもんだからさあ、何だかコーフンしてきちゃってえ、ウンチしながら起っちゃったんだよねえ。だから実はあの日、学校で抜いちちゃったあ。へへへ」

へへへじゃねーよ……そうか、ネチっ子はドMだったのか……っーか再び泣き出したチェリー坂城。何かもう、面倒くさいな。

ラブホの必須アメニティ

「あーじゃあさ、二人で聖子さんとすれば？ 盗撮の話を持ちかけたのは田倉なんだから、やっぱ共犯だと思うよ。だからここは二人で頑張って……」

「岡崎千夏さんも共犯だよお？」

「聖子さんと三人で……って何でよ!？」

「だあってそうでしょお？ 一緒に見てたんだからあ」

「私はいんたたちに無理矢理連れられて……」

「でもさあ、盗撮と分かったのにちっとも止めようとしなかったじゃあん。アレと一緒にだよ。運転手が酒飲んでるの知ってて黙って助手席に乗って送ってもらうっていうやつ」

だからどうした。責任転嫁すんな。

「でも聖子さんはエッチがしたいんでしょ？ 女の私がいたってどっちみち意味無いじゃん」

「だからさあ、初体験が聖子さんじゃあトラウマになるからあ、岡崎千夏さんで筆をおろしてから聖子さんっていう流れならいいんじゃない？ どう坂ちゃん」

「まあ、それならどうにか凌げるかもしれん……じゃあ早速だけど岡崎、いいな？」

「いいな？ じゃねー！ あんたらバカじゃない!？ どういう理論よ!？ なーんで私がそんなことで処女失わなきゃいけないのよ!」

すると途端に二人の顔に影が差した。

「あーやっぱり処女なんだあ」

「やっぱり処女か……」

「何でがっかりしてんのよ！ 訳わかんない！ とにかく私帰るからね！」

鞆を拾い、二人の間をすり抜けようとしたそのとき。

「ちょ！ 何すんの！ 離しなさいよね！」

「駄目だ。岡崎、何かいい方法考えろ」

「何で私が……」

「一緒になって楽しんでたんだからさあ、当然じゃない？ それに昔から言うでしょお？」

「な、何がよ！？」

「三人寄ればあ文殊の知恵え」

私は一人、ブランコでぶらぶらしながら考えた。何だって私が……とはいえ確かに一緒になって見ていたのは事実だし、実際勉強にもなった。でもなあ、いい方法たってなあ……あ、そうだ。

「ねえ」

「お！ 何か思いついたか！？」

チェリー坂城は木の枝で地面に落書きをしている。こいつは……

「つーかあんたら何も考えてないでしょ」

「そんなことないそんなことない。な 良太？」

「……」

「寝てんじゃねえよ良太！」

頭を引っ叩かれた田倉は、涎を垂らしながら顔を上げた。

「はあ……まあいいわ。まず状況を整理する。聖子さんは坂城くんとやりたい」

「うわあ、言葉にするだけでおぞましい」

「黙って。んで、坂城くんはやりたくない。でもやらないと盗撮を両親にバラされてしまい下手したら裁判沙汰。ここで最終確認ね。」

「バラされるのとやるのとどっちの方がよりダメージが大きいのか？」

「そういう風に言われると、どっちも大ダメージなんだけど、両親にバレると今後の生活にも影響が出るから……でもやるのは一回きりだから、それさえ乗り切れればいいのかな……」

「じゃあやるってことでいいのね？」

「……ああ」

「でもないやだ」

「ああ」

「ということは、聖子さんに『坂城くんとやった』と思わせることが出来ればいいってことでしょ？」

「そうだけど、そんなこと出来んのか？」

「さっきさ、目隠しすればって言ってたじゃない。あれを使う」

「例え見られてないとしても、他にやる奴なんていないぜ？ 熟女好きのデブ専なんて知り合いにいないし……」

「高校生でそんな奴いるわけないでしょ！」

「分かんねーだろそんなの。現に良太だって高一で、いや中三で既にMの素質バリバリだったってことが発覚したじゃねーか」

「……まあそれは置いて、とにかく更に第三者なんか入れないわよ、ややこしい。そうじゃなくって道具を使うのよ」

「道具？」

「そう、バイブ」

「バ……岡崎お前！ そんなん持ってたのか！？ オレ達まだ高校生だぞ！ 十五の夜だぞ！ 処女なのは何てスケベな女なんだ！」

おい！ 良太起きろ！ 岡崎はバイブで毎日オナってるらしいぞ！」

「ホントにいい？ 岡崎千夏さんのエッチい」

「ななな何言ってるのよ！ 持ってるわけないでしょうが！」

「じゃあその発想はどっから来たんだよ」

「坂城くんちラブホテルでしょ！ そういう玩具の一つや二つ置いてあるでしょうが」

「ふ」

「ふ？」

「ウチをそこらのラブホと一緒にすんなよ。大人のオモチャはおろか、コンドームだって置いてないんだぜ」

「何で大威張りなのよ！ せめてコンドームくらい常備しときなさいよね！ ラブホの必須アメニティでしょうが！ ったく、全く以って役に立たないわね。いいわ、お姉ちゃんのを借りてきてあげる」

「え？ 岡崎って姉貴いんの？」

「いるよ。10コ上だけど」

「ってことは二十五か……なあなあ美人？」

「スッゴイ美人。私に似て」

「マジで！？ 同級生のスッゴイ美人のお姉さんがバイブで夜な夜なあんなことこんなことしてるだなんて……ああ、そんなAVのようなシチュエーションが本当にあったんですね神様……岡崎い！」

「なによ」

「頼む！ オレをお前んちの養子にしてくれ。そして毎晩お姉さんのお手伝いをさせてくれ」

チェリー坂城は土下座して私を拝む。

「あーら残念だったわね。とっくに結婚して出ってたわよ。子供も二人産んだし」

「くっそ！」

坂城くんは地面を思い切り蹴りつけ舌打ちをした。見事なまでの地団太である。何か、だんだんバカが正体を現し始めてるんですけど。

「なに本気で悔しがつてんのよ。とにかく、明日持つてきてあげるから、今日はお腹痛いとか言って誤魔化して何とか逃げ切るのよ」

一人芝居夢芝居

家に帰りサフバとエバを机に並べた。この場合やつぱりエバだろうな。サフバは小突起があるからそれが当たれば明らかに本物のペニスではないことがばれてしまう。

しかしなあ、せっかく美しき姉からの高校入学祝いで貰った大事な物をなあ、あの聖子さんに……ああ、なんという可哀想な運命。私は肌色のエバを手に取り、優しく頬ずりした。

できれば使いたくないなあ。まあでも終わったら綺麗に洗えばいいか。エバは非電動型なので、水で丸洗いできるのが魅力なのよね。もちろんコンドームも被せてと……は、コンドームだ。どうしよう。私持っていないし、坂城くんちにも無いって言うし、田倉が持っているとも思えない……やだやだ私の大事なエバを、あの聖子さんに生で挿入するなんて！ 仕方ない。

「え？ コンドーム？」

決戦の日、放課後作戦打ち合わせのために再び裏公へ

「そう、買ってきてよ。コンビニに売ってるでしょ」

「やややだよ」

「何だよ！ 私の大事な物使わせてあげるんだから、ちょっとは協力なさいよね！」

「私の大事な物お？」

は！ しまった、つい口が滑って本当のことが……

「私の姉の大事な物って言ったの！ つべこべ言わず買って来い！」

「しょうがねーな……じゃあ行くか、良太」

「えゝ僕も行くのお？ それって怪しくないかなあ」

「何がだよ」

「だってさあ、男同士でさあコンドーム買いに行ったらさあ、完全にホモだと思われるよお？」

「じゃ、じゃあお前一人で行って来いよ！」

まったく意気地なし共め。これでもう坂城くんは完全にないな。格下げ決定。次から坂ちんと呼ぼう

「別に良いよお」

「え？」

それだけ言うと、田倉は飛び跳ねながら公園を出て行った。そして十分後。

「ハイ、これえ」

「おおお、コンドームだ、本物だ」

やけに感動している坂ちんを冷ややかな目で見つめる私。私に襲い掛かった時はさんざん処女を罵倒したくせに、自分は童貞でコンドームすら見たことないなんて。

「ななな何だよ」

「ホント、残念だわ。今となってはもうどうでもいいから言っちゃうけどさ、私坂ちんに一目惚れしてたんだよね」

「坂ちんて言うなって！」

「うっさい！ だからさ、坂ちんとなら初エッチしてもいっかな」

って思ってたんだけど、見掛け倒しもいいとこだよ。自分の撒いた種のくせしてコンドーム一つ買ってこれないなんて。田倉の方がよっぽど男らしいわ」

チェリー坂城は下を向いて歯をぎりぎりと言わせている。全く、こんな情けない奴だと思わなかった。一方私に褒められた田倉は、いつもと変わらずへらへらしている。

「ま、いいわ。じゃあこれ貸してあげるから、大事に使ってよ。壊したりしたら私が怒られるんだからね！」

私は鞆から改造したエバを取り出した。男共の邪悪な歓声が上がる。

「す、スゲーなこれ……これがバイブか？」

「坂ちゃん違うよお、これはねえデイルドって言うんだよお」

さすが田倉。よく知ってる。

「そうよ。これはでいるど。バイブはモーターも付いてて形も複雑だからね。で、この布で腰に固定して。手を離しても出来るように、布を取り付けてきたんだから」

昨日の夜私は、着物の帯くらいの幅の、1メートルくらいの長さ布を用意して、その真ん中に小さな穴を開け、そこにエバを通し、腰の後ろで結べるように工作したのだった。

「ホントはペニバンがあれば完璧なんだけどねえ」

田倉がにやにやという。

「ペニバンって？」

「ペニスバンドお。要は岡崎千夏さんが作ったやつ of 既製品ってところだねえ」

「へえ、そんなのあるんだ。でもさ、ペニスを装着するってことはさ、女の人が付けるってことだよな？ 男には元々付いてるんだから。どうやって使うの？」

「それはねえ、基本的にはレズの人が使うんだよお」

「あ、そっか。女の子同士か。基本ってことは応用編もあるの？」

「あるあるう。女の人がさあ、自分の彼のアナルを調教したい時だねえ」

「あなる？」

またまた新しい言葉だ。最近、新しい単語が増えてきて、それはそれでいいのだが、辞書を引いても載っていないことが多いので、意味が分からずに困っているのだ。電子辞書を持ち歩こうかな。

「ここここお」

田倉はズボンの上から自分の肛門を指差した。

「え？ これをお尻に入れるの？ 痛そう……」

「だって男同士ならそれが普通だし、女のアナルに入れたがる男もいるんだからあ男のアナルを調教したい女の人がいっても不思議じゃないでしょお？」

女が擬似ペニスを纏い、男のお尻に入れる……うーん、倒錯！ 今の私にはまだ上級すぎてついていけないな。それより。

「じゃあこれで道具は揃ったわけだから。後は頑張れよ！ 龍馬！」

もうこんな情けない男は龍馬呼ばわりで充分である。

「ついに呼び捨てかよ……っってお前らちょっと待て待て……!!」

公園を立ち去ろうとする私と田倉を、龍馬は後ろから捕まえた。

「？」

「きょんとするな！　そしてオレを一人にするな！」

「何よ、私は道具、田倉はコンドームをそれぞれ調達したんだから、あとは龍馬、あんたが演じるだけでしょ？　見事なチームワークじゃない」

「そ、それはそうだが、一応シミュレーションとかさ、練習が必要だろ？」

龍馬は既に泣きそうである。

「シミュレーションたって出たところ勝負なんじゃないの？」

「バカヤロウ！　聖子さんと普通にセックスするならそれでもいいけどな、今回は目隠しさせて、オモチャだつてばれないように入れないかならないんだぞ！」

それもそうだ。でもシミュレーションたつてなあ……すると隣でネチっ子が前髪をふんつと跳ね上げて手を上げる。

「はいはあい、じゃあさあ、こういうのはどうかなあ？」

ここから田倉の一人芝居夢芝居が始まった。

じゃあな、良い夢見ろよ

『坊ちゃん、ようやく観念したのね、さあ始めようか』

『その前にさ、聖子さん、オレ、女に目隠しさせないと起たないんだよね』

『あらそう。ま、いいわよそのくらい。それはそれでコーフンするしね。でもその前に坊ちゃんのアソコ、拝ませてよ。何十年かぶりにしゃぶりたいわあ。若い男のアレ』

——ここで坂ちゃんのズボンに手をかける聖子さん。しかし突如キレる坂ちゃん。

『何様だと思っただ！ オレ様のちんぽはなあ、お前みたいな年増のメス豚に見せるような、安っぽいちんぽじゃねえんだ！ 入れてもらえるだけ有難いと思え！ バシっ』

——ここで聖子さんに張り手を一発かます。頬を押さえてよろける聖子さん。

『おらおら！ さっさと脱ぎやがれ！』

——坂ちゃんの思わぬドS振りに、怯えながら服を脱ぎ始める聖子さん。

『バカかお前は！ 何、上から脱いでんだよ！ ババアの垂れた汚ねえおっぱいなんか見たいわけねえだろ！ ケツだけ出しゃいいんだよ！』

——震えながらスカートと、やけに透け透けの勝負パンツを脱ぐ聖

子さん。

『おら、これ付けろ』

——アイマスクを渡す坂ちん。念のために部屋の電気も消す。そしてバッグから岡崎千夏さん特製改造ディルドを取り出し装着。

『壁に手えつけよ。おら行くぞ！ ふんふんふんふん！』

『ああああ！
坊ちゃん！
いくいくいくいくうううう！
！！！！』

——前戯もキスもないが、チョー——久し振りの、そしてこの先二度とないであろう、若い男とのセックスに、あつという間に昇天する聖子さん。泡を吹き、気絶している間に道具をしまい、立ち去る坂ちん。そして部屋を出る前の決め台詞。

『じゃあな、良い夢見ろよ』

完璧だ……私と龍馬は錆びた鉄棒の下に並んで体育座りをし、田倉の熱演を観賞していた。田倉は聖子さんと龍馬の二役を、声色を使い分け立ち位置を変えて、見事にやってのけたのだ。

あのネチっ子が、これほどの役者だっただなんて……目頭が熱くなる。龍馬も感動に声も出ず、涙を流し、田倉と抱き合っていた。

「よし、じゃあ行ってくるぜ」

「頑張って！」

「坂ちゃんフアイトお」

私と田倉は、やはり心細い龍馬のために結局アフロディーテまでついていった。敬礼をし、ホテルに入る龍馬。

「吉報待ってるからね〜！」

「健闘を祈るう」

勇ましく戦場へ向かう龍馬の背中に、激励の言葉をぶつけた私達は、そのまま帰宅した。

「どうだったどうだった？」

次の朝、教室で龍馬に声をかける。田倉のシナリオは完璧だったが予定は未定。実際には上手く行かなかったかもしれない。現に龍馬は浮かない顔をしている。

「やっぱりバレちゃった？」

「いや、ほぼ良太の芝居と同じように進んだんだが……」

「えー！　じゃあオモチャって気付かれなかったんだ」

話の本質はかなりアダルティだが、言葉だけでは何のことか分かるまい。クラスメートがいる中、私たちは会話を続けた。

「気付かれなかった。まあ十中八九成功はしたんだが……」

「やったじゃん！　これでお咎めなしなんですよ？　もっと嬉しそうな顔しなさいよ」

「……まあいい。放課後反省会な」

龍馬はそれっきり口を閉ざしてしまった。聖子さんにバレずに事が済んだんだから、万々歳じゃないのかな。何であんな暗いんだろ？

道具に頼ってばかりじゃ、無人島に行ったとき困るもの

そして放課後、私たちのミーティングスペースとしてすっかり定番になってしまった学校裏の公園。略して裏公。今日は私と田倉が体育座りで龍馬の言葉を待つ。龍馬は下を向き、むっつりと黙りこんでいたが、私たちの無言のプレッシャーに耐えきれず遂に重い口を開いた。つーかなんで重いのが理解できないんだけど。

「あ、とりあえずこれ返すわ」

龍馬は鞆から私の大事なエバを取り出して手渡した。特に損傷は見当たらないので一安心である。

「まあ、細かいところは端折るが、だいたい昨日の良太のシナリオ通り事は運んだ。むしろあまりにもすんなり行き過ぎて怖いくらいだった。突如Sキャラに変身するのにはかなり勇気がいったが……」

「よく言うわよ。私のこと散々バカにして強姦しようとしたくせに」「えええ？ 坂ちゃん岡崎千夏さん強姦したのお？」

「してねえよ！ ま、まああれはだな、なんつーか照れ隠しだ」

「はあ？」

「お、おほん！ とにかくSキャラ、目隠し、オモチャ装着、ここまでは滞りなく行ったんだ。聖子さんが気絶するところもな」

「何よ、じゃあ最後までノープロブレムじゃない、モウマンタイじゃない」

「その、途中に大問題が発生した」

「もったいぶらないでさっさと言いなさいよ。帰るわよ」

「実は……間違えた」

「間違えた？ 何を？」

「……穴」

「穴？ 穴を間違えるってどういうこと？」

「入れちゃったんだよ」

「いいじゃない。それが目的だったんだから」

「ケツに」

「え？」

「だーかーらー！ おまんこじゃなくてケツの穴に入れちゃったんだよ！」

「ってことはさあ、坂ちんまさかのアナルセックスう？」

「そういうことだ。さすがに俺も肛門にあんなにすんなり入るなんて思わなかったからさ、最後まで気付かなくて。後で聞いたら聖子さん、昔は相当アナルセックス好きだったらしい。何か、普通にやるより却って良かったみたいでさ。逆に感謝されちゃったんだよな。ま、怪我の功名、雨降って地固まるってやつだな」

な……なに威張ってんのよ！ 私の、私の愛しのエバが、これからどどん色んな技を開発して修行を共にするエバが！ あのミニラみたいな五十路の聖子さんの、排泄物が通過しまくったお尻の穴に入っただなんて……全身の血が引き、気を失いそうだったが、ある事を思い出し首の皮一枚で意識を保った。

「ででっでっでもコンドームは付けてたんでしょ？」

「悪い、焦ってたのと暗かったので完全に忘れちゃったんだよな」

頭を掻きながら照れ臭そうに、しかも悪びれずに言う龍馬に私は切れた。

「ざっけんじゃねえぞこるあああ！」

そして右手に持ったエバで私は龍馬の頭部と顔面を殴打し続けた。あまりの出来事に抵抗できず頭を抱える龍馬。そして私を止めに入

るネチっ子。

「うう、いってゝゝなんだってそんなに怒ってんだよ、大丈夫だよ、石鹼で洗つといたから」

「はあ、はあ、大事な物だって言ったでしょうが！ ババアの肛門にチョコで突っ込んで許されるとでも思ってたんの！？」

私は可哀想なエバをしまうと、鼻息荒く裏公を後にした。

あああ、何ということだ。神様お許し下さい。私は鞆からエバを取り出し机に立てた。やっぱり貸すんじゃないかった。これが五十路女の使い込まれた大腸の出口に、直接入ったなんて……

私はそつと鼻を近付けてみる。微かに石鹼の香りがした。使用後洗ったのは嘘じゃないようだ。でもなあ、いくら綺麗にしてもなあ……少なくともふえらちおは出来まい。私は泣きながらフアブリーズを満遍なく吹き付けた。

こんなことならもつとふえらちおの特訓をしておけばよかった。そうか、これは崇りだ。せっかく美しき姉がふえらちおの特訓用に送ってくれたのに、私が無視してソルフエージュを敢行したために起こるべくして起きたエバの崇りだ。

ごめんなさいごめんなさいごめんなさい。私は屹立するエバに首を垂れ涙を流して謝った。ふと見上げると、何とエバも涙を流しているではないか！ ああ……お許しになってくださるのね……って実はかけすぎたフアブリーズが垂れてきたただけなんだけど。

まあいいか。これで龍馬も救われたわけだし。ふえらちおはまあいいや。好きになった人のをうんと舐めてあげよう。愛があればきつと上達するはず。私はサフバを取り出してスイッチをオン。ういいいんと回る様を眺めてスイッチオフ。よく考えたら私、自分の手ではしたことないなあ。これを期に、自らの肉体のみでソルフェージュを行ってみるか。

道具に頼ってばかりじゃ、無人島に行ったとき困るものね。私は制服のシャツを脱いでブラジャーを外し、スカートのままパンツを脱いで、手動によるソルフェージュに取り掛かった。

その鄙びた感が堪えない

最近は学校ですっかり私と龍馬と田倉の三人行動である。龍馬はもとも一人だったからいいとして、田倉はムツトリオを結成していたはずだ。残る二人を放っておいていいのだろうか？ 少々心配して聞いてみると、

「いやあ、だってさあ、坂ちゃんと岡崎千夏さんといったほうがさあ、実践的で面白いんだもおん」

だそうである。ならいいけど。かく言う私も叩き上げの女子達とは未だ心を通わせることが出来ず、表面的な付き合いでしかない。ネチっ子の言うとおり、私も彼らといったお陰で、色々と勉強できるので、何だかんだで楽しかったりする。

しかし私たちの会話の中心は世に言うシモネタであり、自分たちは十五歳のクセして話題は十八禁である。したがって学食なんかでお昼を食べながら、おおっぴらに会話は出来ない。周囲に気を配り、なるべくそれと分からないように、一般的な言葉に置き換えての大人の会話はなかなか気苦労が絶えない。

結果、三人で頭を寄せ、ひそひそと会話をした後大爆笑、みたいになることが多く、何か変な意味で一目を置かれている気がする今日この頃。

そんなこんなで六月も終わり七月頭の期末テストが終わる。ここは高校生らしく、三人で点数の見せ合いなどをしてみる。龍馬は予想通りバカだった。赤点が三つもある。しかし絶対私がトップだと思

っていたのに、意外にもネチっ子が総合得点で一意に輝いた。

「良太って頭良いんだな」

龍馬が心の底から尊敬の眼差しを送る。確かに三人の中では一番だが、学年の中では中くらいなわけで、どっちかってーと龍馬が出来なさ過ぎなだけなのだが。

「あ、それよりさ、今度ちょっとしたイベントがあるんだ。お前らも来ない？」

龍馬が切り出した。

「イベントって何よ」

「何でも大学の映画サークルがさ、ウチのホテルでさ、撮影したいんだって」

「あんな鄙びたラブホで？」

「その鄙びた感が堪えないらしいぜ。最初は『まさかウチみたいなところ』って冗談だと思って親父も相手にしなかったんだけど、毎日熱心に頼みに来るからさ」

「まああの切なさは逆に今時珍しいもんね」

「どんな映画なのお？ やっぱりポルノお？」

「さあ、そこまではわかんねえけど」

「でもさあ、大学生のうちからA Vに走るってどうよ？ もっとこ
う、あれじゃない？ 官能的ミステリーみたいな。乱歩みたいな
やつ」

「呟みたいなのとかあ？」

「ああ谷崎ね！ そうそう、そういう文学的エロスみたいなのが大
学生っぽい！」

「？ ランポ？ マンジ？ って何だ？」

私とネチっ子が小説の話題で盛り上がる中、およそ読書とは縁のない龍馬は一人置いてけぼりである。当然放置。

「でもさ、そんな撮影現場に私たちがいたら邪魔なんじゃない？」

「あーなんかさ、もしかしたらエキストラで出てもらうかもしれないから、むしろいてくれたほうが助かるって話だったぜ」

「おおーうということはさあ、もしかしてその映画がさあ、ぴあフィルムフェスティバルとかで賞取ったりしたらさあ、カンヌとか招待されちゃってさあ、僕たちハリウッドデビューしちゃうかもお」

しないしない。どんだけ飛躍してんだ。

撮影が行われるという土曜日、午前中で学校が終わると私達はアフロディーテに向かって歩き出した。

「どんな感じの人たちなの？」

「頼みに来たのは二人だけだったけど、まあ、普通だったぜ」

「どんな映画なんだろうねえ」

ネチっ子田倉はいつもにまにまと笑っているが、今日はまた一段と口角が上がっている気がする。映画の撮影というイベントに昂ぶっているのかもしれない。

「ねえねえ田倉ってさ、映画好きなの？」

「好き好き。かなり好き」

お、ということは田倉はひょっとして映画オタクなのか？

「へー良太、お前映画なんか見るんだ。エロビデオしか見ねーと思
ってた」

私も。

「どんなのが好きなの？」

「僕はねえ、パトリス・ルコントが好きなんだあ」

「パリス・ヒルトン？ 映画出てたっけ？」

「違う違うう。パトリス・ルコント。ルコントはねえフランスの監
督なんだよお。髪結いの亭主とか知らない？」

「聞いたことない」

映画なんてCMで流れてるのしか知らないからなあ。ハリーポッタ
ーとかポニョとか。まさかこのネチっ子が私の憧れの国、フランス
の映画を知っているだなんて……やば、ネチっ子が少しばかりカッ
コよく見えてきた。いかんいかん。私は目を擦り首を振る。

まさか二回目とか期待してたりして

「ルコントはねえ、何といってもまず絵が綺麗なんだよねえ。色使いと言ってもいいかなあ。そしてその美しい世界で繰り広げられる目くるめく官能の世界。彼はエロスをあそこまでの美に昇華させた、素晴らしい監督なんだよねえ。」

ルコントで有名なのはねえやっぱり髪結いの亭主なんだけどさあ、僕が一番好きなのはねえ、イヴォンヌの香りっていう映画なんだあ。ストーリーはちょっと複雑で分かりづらいんだけど、これはルコントの中でも一番色が多彩で、最初から最後まで、まるで絵画を見ているように本当に美しいんだよねえ。

でねえ、簡単に言えば避暑地での若い男女のひと夏の恋のお話なんだけどねえ、サンドラ・マジャーニっていう女優さんが本当に綺麗なんだあ。他に出てる映画は知らないんだけどさあ、僕は世界一美しい人だと思ってるんだよねえ。

それでえ、この映画で最も印象的なシーンがさあ、そのカップルがが船に乗り込んだときでさあ、甲板の上でワンピースを着たサンドラ・マジャーニが海を眺めながら風に吹かれているんだけどねえ、その風が彼女のスカートを捲ってしまうんだよねえ。でも彼女はそれを押さえることなくわざと男に見せつけているんだあ。それだけでも充分エロチックなのにさあ、彼女はそのとき下着を着けていないんだよねえ。僕はあんな綺麗なお尻は他に見たことがないなあ」

歩きながら熱っぽく映画を語る田倉に、私はただただ聞き入ってしまった。何だか本当に田倉が少しイイオトコに見えてきた。鬱陶しいと思っていた前髪は、夏の風にさらさらと爽やかに靡き、その微

笑みは、全てを包み込むような優しさを帯びている。

龍馬はふーん、とかへえ、とか興味あるんだかないんだか、バカ面で頷くだけだ。入れ物だけは良いが底が浅過ぎる坂城龍馬と、見た目は残念だが、知れば知るほど奥が深い、スルメのような田倉良太を見比べる。私はだんだん分からなくなってきた。本当にイイオトコってなんだろう？

アフロディーテに着き、入り口で靴を脱いで上がる。狭い受付の奥に、聖子さんがいた。ああ、私の大切なエバが、この人の肛門に……せっかく忘れていたのに私は弛みきっているに違いないお尻を想像し悪寒が走った。

聖子さんは、いつもは若者に二言三言余計なことを言うくせに、今日は龍馬の顔を見て「お帰り。もう来てるわよ」とだけ言って頬を赤らめている。うん、気持ち悪い。まさか二回目とか期待してたりして。そのときは龍馬、自力で乗り切れよ。

階段を上り、三階の一番手前の部屋「アルテミス」の扉をノックする。すると中からぼさぼさ頭に黒縁メガネ、破れたジーンズに襟のよれたTシャツという、冴えない要素を凝縮したような、背の低い男が出てきた。

「あ、どうも」

「あ、どうも」

顔を知っている龍馬が冴えないボサ男くんと微妙な挨拶を交わす。大学生と会えると聞いて、ちょっと期待してたけど、がっかり。ま

あ別に大学生だからイイオトコとは限らないけどね。

二人は見詰め合ったまま微妙な沈黙が続く。私と田倉は交互に彼らの顔を見比べるが、突っ立ったまま事が進まない。業を煮やした私が口火を切る。

「あ、あの、もう撮影始まってますか？」

「え？ ああ、それがさ、今女優待ちなんだよね」

「そうなんですか？ じゃあまだなんですわね。ところでどんな映画なんですか？」

「まあ立ち話もなんなんで、どぞ」

アルテミスに入ると、中にもう一人、男の人が座って雑誌を読みつつお茶を飲んでいた。私たちが入ると立ち上がり挨拶をしてきた。

「あ、どうも、こんにちは、この度は撮影にご協力頂きましてありがとうございます」

そう言って私に右手を差し出す。さ、爽やか……かかかカッコいいいい！！！！

イニシャルKK

さつき出迎えたボサ男とはまるで違い、背も高く、緩くウェーブした髪に二重のはっきりした瞳、すっきりした鼻に、ちよつとぽってりとした唇。全体的に甘めのマスクだが、口の周りと顎に生やした髭が、ワイルドさを演出する良いアクセントとなっている。山椒は小粒でもぴりり。

服装も淡いピンクのシャツに濃いブルーのジーンズという、ラフながらも清潔感のある感じ。何よりその笑顔があああ……私はえへらえへらしながら差し出された手を両手で握っていた。するとそれを遮るように龍馬がずずいと私の前に出しゃばり、彼と繋がれた手を断ち切った。

「いいえ、こちらこそ。貴重な撮影の現場にお招きありがとうございます」

いつになく丁寧な言葉とは裏腹に、龍馬は敵意むき出しの視線を送る。背は二人とも同じくらい。握る手に力が入っているのか、ぷるぷる震えだし、顔は見る見る赤くなった。なに張り合ってるのよ、バカ。

「よろしくう」

さらにそこに割って入る田倉。こいつもライブル視するのか？ しかしネチっ子はいつも通りだった。ボサ男は部屋の隅でしきりに携帯で話している。恐らくその女優に早く来るように催促しているのだろう。

「私、岡崎千夏と申します！」

イイオトコがいればテンションが上がるのは当然のこと。私はさっそく彼の隣に座り話しかける。龍馬のときは何も出来なかったけど、これからは積極的に行こう。

「霧夜京助です。よろしく」

そう言って彼は私に名刺を差し出してきた。右横にブルーの、下にはオレンジのラインが入った、オシャレな横書きの名刺には「ジョルジオア・ル・マーニ大学映画研究会部長 霧夜京助 Kyosuke Kiriya」とあった。

名刺！ 大学生なのに名刺！ しかもあの超頭良いジョル大生！？ しかももしか私が日々お世話になっている新明解国語辞典を書いた金田一大先生と同じ名前！？ しかももしかかもその金田一先生と同じイニシャルKK！！！？ いやが上にも私のテンションはさらに上がりまくる。

私は既に彼にしなだれかかるように身体を密着させている。依然として男性との距離の取り方は肉体的にも精神的にもよく分からないが、ここは制服姿の女子高生という特権を活かして大胆に迫ってみよう。傍から見たらかなり鼻の下が伸びていることだろう。

京助さん、良い匂い……彼の身体からは、柑橘系の爽やかな香りが微かに香った。カッコイイ上にジョル大生で、しかも良い匂い。好き！ あなたが好き！ 何かもう、映画とか撮影とかどうでも良いからこのまま私を無人島に連れ去って！ 私を好きにしてくれ！

「あ、あの京助さんて……」

「それで、どんな話なんですか？」

うっとりとその吸い込まれそうな瞳に、本当に吸い込まれるように顔を近づけながら話しかけつつもう少しで彼の唇に到達しそうなところで、バカ龍馬が話しかけてきた。ちっ、邪魔すんじゃない、と睨んだが逆に睨み返される。おおコワ。田倉と龍馬は床の間で体育座り。龍馬に話しかけられてさり気なく私から身体を離す京助さん。龍馬は後で往復ビンタだな。

「うん、今回は十五分くらいのショートムービーにするつもりなんだけどね、主人公は妄想激しいストーカーのOL。毎朝電車で会う名前も知らない男に片想いして、次第に彼の後をつけ回すようになるんだ。しかしある日彼が恋人とデートしているところを目撃してしまう。デートの最中も尾行を続けるOL。やがて二人は一軒の旅館に入っていく。OLは二人のいる部屋の隣の部屋を取る。そして壁に耳を付けて様子を伺う。二人は当然のごとく愛し合い始めるんだが、壁を伝って微かに聞こえる声に、OLは自分がいま彼に抱かれているところを想像しながら自らの身体を慰める……」

体育座りの奴らは京助さんの話に盛り上がる股間を隠そうと必死だ。全く、何でもいいんだな。そんなバカとネチっ子を尻目に、私は爽やか京助さんとの会話に戻る。

「あ、やっぱり！」

「やっぱりって？」

「きつとそういう谷崎みたいな文学的官能映画なんじゃないかなーって話してたところなんです！」

「へえ、まあそうだよな、ホテル使わせて欲しいって聞いたら、そういう風に想像しちゃうよね。谷崎っ婆いかどうかはよくわかんない

いけど」

「でも、何でこんな寂れたラブホテルを選んだんですか？ もっとオシャレなところか、旅館という設定なら、ホントの旅館を使えば良いのに」

「あんまり今時っぽくしたくなかったっていうかさ、ちょっと昭和な匂いを出したかったんだよね。もちろん和風建築の本格的な旅館の方が良かったけど、都内で探すとなると難しいし、宿泊費もそれなりにかかっちゃうしね。それにたかが大学生のサークルの撮影に協力してくれそうなどころもないし。そんなとき、池袋に古風なラブホテルがあるって聞いたもんだから。外観はイメージとは少し違うけど、部屋はほぼ理想に近かったんだ。だからここに決めた」

「そっか、こんなしょーもないホテルでも役に立つんだね」

「岡崎お前！ 人の家のことしょーもないとか言ってるじゃ……」
「ごめんごめん！ お待たせえ！」

龍馬の言葉を遮って、髪の長い、タイトスカートのグレーのスーツを着た、化粧っ気は薄いが美人といえれば美人といえなくもない、そしてやたらとナイスバディな女が威勢よく現れた。

同じ女として、あんなものを

「おせーぞ！」

ボサ男が苛立たしげに言う。

「ごめんごめん、昨日朝までバイトでさ、寝坊しちゃった」

しかし臆することなくぺろっと舌を出す。

「この子達は？」

スーツ女は私たち三人を指差す。「この子たち」って言う上から視線の言い方にムツと来た。

「彼らがここを提供してくれたんだよ」

「あ、そうなんだ！　ありがとうね！」

……やっぱムカつく。バカとネチっ子は膝を抱えたまま軽く会釈をしただけだ。若い年上の女に接した事がないせいだろうか、押されている。まあいいわ。私は私で京助さんと親密になるという使命があるのだから。

「ねえ京助さん、さっきの話からするとこの部屋のシーンは、そのOLが一人で妄想するところなんですよね？」

「そうなるね」

「じゃあ私たちの出番はないってことですよね？」

「ここではないけど、早めに終わったら別のシーンも撮ろうかなって思っているところ。そこでは人が多い方が良く、彼にはそう伝え

ただんだけど……もし用事があるようならいてくれなくても全然構わないよ。拘束するのも悪いしね」

「あ、いえいえ！ どーせ暇ですから！」

「あのお」

ここでネチっ子がそろりそろりと手を上げる。別に教室じゃないんだから。

「ん？」

「カメラとかの機材はないんですかあ？」

確かに。京助さんに見とれて気にならなかったが、映画を撮るという割には大袈裟な準備は何一つ見当たらない。

「ああ、カメラはこれ」

京助さんはバッグからホームビデオ用の小さなカメラを取り出した。

「もちろん本当は良い機材を揃えたいと思うよ。でもお金ないからね、しばらくはこれで我慢かな。画質よりも脚本とストーリーで勝負。それにね、最近の一般家庭用のカメラもなかなか侮れないんだよ。パソコンで編集も出来るしね。これを三台くらい別の角度から同時に回して、後で編集っていうのが今のところのパターンかな」

「なあ、早くやろうぜ」

カメラのセットを終えたボサ男が痺れを切らす。とりあえず入り口から入ってくるところを撮るといので、私達は部屋の奥に移動した。そして体育座り×3。

「じゃあ香織は一端外に出て。入ってくるところからね」

「あ、あの」

私は恐らく、いや確実にこの二人も聞きたいはずの事を聞いてみた。

「何？」

「あの人、ここで、その、するんですよね？ 恥ずかしくないんですか？」

「まあ本当にするわけじゃないし。それに彼女は女優志望なんだから、人前でそれくらいの演技するのなんて出来て当たり前だって」

マジですか……いくら撮影とはいえ、演技とはいえ、人前でのソルフェージュ。恐るべし女優魂。

スーツ香織は神妙な面持ちで襖を開けた。そして壁に耳を付ける。目を閉じて隣の様子を聞き入っている。そしてジャケットのボタンを外し、ブラウスのボタンも外す。左手が自分の胸をまさぐる。

ふと隣を見ると、バカとネチっ子は当然元気盛り盛りで、口をあけて赤い顔をしている。やがて彼女の右手はスカートの中へと入っていった。眉間に皺を寄せ、口をあけながら右手が股間でもぞもぞと動いたかと思うと、あっ、と言って、いった。終わりのようだ。

何か違う……あんなのとてもソルフェージュと呼べないわ。あの人がやったことあるのかしら。京助さんとボサ男は、今のシーンを再生して、まあ良いんじゃないかの的な発言をしている。

いいのか？ 本当にそれで良いのか？ あんたたちの映画魂は、あなたの女優魂はそんなものなのか？ それが恋焦がれた相手を思いながら、すぐ隣での情事を感じながらするソルフェージュなのか？

すると、私の想いが通じたのか、ボサ男が「香織、もう一回行こうか。もうちょっと情熱的にやってみて」と言った。どうやら監督はボサ男らしい。

「じゃあ、壁に耳を付けるところからね。よーい、アクション！」

スーツ香織は先程よりは大胆に動き、息遣いも粗く、声も出ている。しかし……どう見ても演技ってバレバレだ。私は遂に我慢が出来なくなった。同じ女として、あんなものをソルフェージュとして世に送り出すなんて。私は、情けないソルフェージュを披露するスーツ香織につかつかと歩み寄った。

トゥームレイダーのアンジェリーナ・ジョリー級に

「ストップストップ！」

「岡崎何やってんだよ！」

男たちの怒声が響く。

「な、何よあんた、撮影の邪魔しないでよね！」

スーツ香織が怒る。

「香織さん、あなた、そんなんでよく女優志望とか言えますね。本当のソルフェージュはそんな甘っちょろいもんじゃないんです」

「そ、ソルフェージュ？」

私は彼女の前に座り、ストッキングとパンツをずり下げて、脚を開かせた。そして背後に回り、左腕で彼女の首をホルドし、右手をクリトリスに当てた。スーツ香織の股間はまるで湿っていない。

「バカにしてんの？ 全然濡れてないじゃない！」

「ちょ、ちょっと止めて、苦し……あ、あんたたち何ぼーつと見てんのよ！」

スーツ香織は男たちに助けを求めるが、誰一人止めようとしなない。バカとネチっ子はまあ何もしいとは思っていたけれど、京助さんとボサ男まで動かない。それどころかカメラを回しているようだ。望むところよ。私の完璧なソルフェージュテクニクを、DVDにして売り出すつもりかな？

「あなた、やったことないでしょ、ソルフエージュ」

スーツ香織の耳元で妖しく囁いてみた。

「だ、だからソルフエージュってなに……あ！」

最近の私は、無人島対策として道具を使わずにソルフエージュを行っているのだが、まさかこんなところでその力を発揮できるとは。同じ女の身体だ、基本的なツボは心得ている。私の右手指は、女性器に関しては全てを知り尽くしているといってもいいだろう。何たってスーパーエリートですから。

「いい？　まずはここをこう」

「あ！」

「んで、ここ」

「ああ！」

「ときどきここことも」

「あああ！」

「で、しばらくはここかな」

「ああああ！」

「ちよっと寄り道して」

「あああああ！」

「あとはここでスパートをかける」

「あああああ！！！」

スーツ香織は股間から潮、口から泡を吹き、白目を剥いていった。

その後しばらくスーツ香織は意識を取り戻さず、結局撮影は中止になってしまった。ぬるい演技に我慢できなかったとはいえ、結果的

に迷惑をかけてしまったことに変わりはない。私はボサ男と京助さんに謝った。

「いや、正直あれじゃあ使えないから、却って良かったかもね」

ボサ男が言った。

「そうだな。香織のやつ、『濡れ場は任せといて!』何て言ってた割に、全然リアリティなかったもんな。これで少しは心を入れ替えるんじゃないか?」

と京助さん。さらに、

「なんだったら代わりに千夏ちゃんやる? 迫力あるシーンが撮れそうだし」

と爽やかに言われ、私は一気に赤くなってしまった。

「いえいえいえいえとととんでもない! お邪魔しましたあ!」

私は逃げるようにホテルを去った。

日曜日、朝、知らない相手からメールが来た。中を見ると、

『香織です。昨日はお疲れ様でした。で、もし良かったらお昼でも一緒にどうかな? 色々相談したいこともあるし。お返事待ってます』

何でアドレス知ってんだよ。私を知ってるのはバカとネチっ子だけだから、どっちかが教えたのか……それにしても馴れ馴れしい女だな。まあいいや、どうせ暇だし、奢ってくれるんなら付き合っても良いか。

午前十一時に池袋のいけふくろうで待ち合わせる。すると今日はジーンズにTシャツの香織さんが待っていた。Tシャツは身体にフィットしていて、トゥームレイダーのアンジェリーナ・ジョリー級にデカイおっぱいが更に強調されている。

これがエリート官僚特有の驕りという

「こんにちは」

「良かった～来てくれたんだ。とりあえずお茶でもしよっか？」

私達は駅前のドトールに入った。

「昨日はみつともないとこ見せちゃったね」

「いえ、こちらこそ、出しゃばってすみませんでした」

「いいのいいの！ 確かに昨日の私、ひどかったもんね。女優失格もいいところ。ところで気になってたんだけど、ソルフエージュって何？」

私は名前の由来を説明する。

「あっはっはなるほどね～そっかそっか。でも千夏ちゃんの指、凄かった～ホント気持ち良かった。あんな意識飛んだの初めてだし」

ふん、私より年上のクセして情けない……は！ これがエリート官僚特有の驕りというヤツか！？ いかんいかん、気を付けよう。

「ところで相談したいことって何ですか？」

「あゝ実はさ、私と付き合ってくれないかな」

「え？」

コーヒーならたった今付き合ってますけど……ってそういうことじゃないよねきつと。

「千夏ちゃん可愛いし、それに超絶テク持ってるんだもん。あんな

風にコテンパンにイカされたのなんて生まれて初めてだったから。しかも年下の高校生に……かなり屈辱的だったけど、それも含めて心身ともにメロメロになっちゃった」

ほぼ初対面の相手に対しての、しかも同性への告白だというのに、香織さんは爽やかな笑顔でさらりと言ったのけた。

「ええ？　ちょちょちょちょっと待って下さいよ、女ですよ？　私」

「分かってるよそんなの」

「香織さんまさか世に言う……」

「ビアンじゃないの。バイね」

びあん？　ばい？　あああ分からん！　辞書を持って来ればよかった。

「要するに男と女、どっちでもイけるってこと。私、京助と付き合ってるけど、最近何か物足りないからそろそろ別れようかと思ってたところ。そしたら千夏ちゃんの登場でしょ？　これはもう運命ね」

香織さんは私の手を握る……ってええ！？　京助さんと付き合ってるって言った今？　私の京助さんと！？

「かかか香織さんホントに京助さんと……」

「うん、同棲してる」

ずどどど同棲！？　学生なのに同棲！？　ななな何てハレンチ極まりない……でも素敵な響き。いいなあ……京助さんと同じベッドで寝てあんなことこんなこととして裸で抱き合ったまま眠って甘いキスでお目覚めでモーニング娘のデビュー曲そのままモーニングコーヒーなんか飲んじゃったりして……

「らららぶらぶじゃないですか香織さん……」

「ちょ、ちよっと千夏ちゃん？ 涎垂れてるけど大丈夫？」

は！ いかんいかん、つい妄想モードに突入してしまったわ。

「やだな、同棲って聞いて何か変なこと考えてたでしょ？ まあ確かに最初はね、毎日のようにしてたけど。最近じゃ寝る場所も別々なよ。お互い別に嫌いになったって訳じゃないんだけど……分かるでしょ？ そういうの」

いえ、分かりません！ 何たって自分バーチャルソルジャーですから！ あんな素敵な人と同じ屋根の下に住んでいて、別々に寝るなんて信じられない。

「千夏ちゃんは？ ストレート？ 彼氏いるの？」

「い、いえ、いませんけど……」

「まあいても良いけどさ、軽い気持ちで付き合ってくれば良いから。ね？ お願い」

香織さんは更に強く私の手を握り、顔を近付けてきた。メイクもナチュラルでパーツにも全体的にも派手さのない顔だが、女優志望なだけあって目力がある。顔の位置をずらしてもホーンテッドマンシヨンのゴーストのようにどこまでもついてくる視線。私は瞳を逸らせない。

「そんなこと言われましてもですね……」

「だってあんなことした千夏ちゃんが悪いんだから。責任取つてよね」

「責任って言われましてもですね……」

「私ね、確かに自分ではしないからソルフエージュ？　は上手くないんだけど、相手にしてあげるのは男女問わず好きなんだよね。特に女の子には評判良いんだけど。どう？　試してみない？」

香織さんの瞳が一際色っぽく濡れている。

「たったた試すんですか？」

「そうよ、だって私だけあんな恥ずかしい目に遭わされるなんて不公平だわ。しかも人前で」

「それは撮影だから……」

「はい、じゃあ決まりね！　行こ！」

「どどどこへ？」

「決まってるじゃない。ホテルよ。もちろん昨日みたいなどこじゃなくて、ちゃんとしたところ」

いきなり三人合意の上の三角関係って

私は香織さんに手を引っ張られて強引にラブホテルに連れて行かれた。これが男の人なら多分断って振り切って逃げるんだろうけど、相手が女性なので警戒心も弛み、昨日私が人前でいかせてしまったこともあり、何となく断りきれなかったのだ。

私たちは池袋の西口、即ち芸術劇場方面、即ち龍馬の家の方のホテル街を歩く。綺麗な建物の中へ連れて行かれた。香織さんは慣れた様子で部屋を決め、ずんずん私を引っ張って行く。

ああ、これが本物のラブホテルか……と見回していたとき、ふわりと良い匂いが漂ったかと思ったら、いきなり頬を両手で挟まれてキスされてしまった。しかも舌が絡みつく、ちょーエッチなキス。龍馬のガサツなのとは大違いでかなり手馴れている。

香織さんは舌を器用に動かしつつ、両手は私の身体を優しく撫でながら服を脱がしていく。いかん、抵抗できない。これが噂のフレンチキスカ……「フレンチ」という響きから、長らく日本人の多くが、「ちゅっとするだけの軽いキス」と勘違いしていたキス。

香織さんは一度口を離すと、今度は唇を軽く噛んだり舐めたりし始めた。そして焦らすように唇がつかず離れずを繰り返す。私は堪らず舌を出し、自らキスを要求するようになっていた。そんな私を見て妖しく笑う香織さん。

唇も口の中も、身体中の全神経がそこにあるかのようにかなり敏感で、キスだけで意識が朦朧としてきた。ああ駄目だ。これが実践なのです、戦場なのです、現場なのです……私はもう、香織さ

んのなすがまま。服を脱がされ下着も剥ぎ取られ、身体中のありとあらゆるところにキスをされ、恥ずかしい格好をさせられ、さんざん弄ばれた。

戦場では常に臨機応変に対応できなければ、思わぬ形で反撃される。一瞬の判断ミスが命取りとなるのだ。頭では分かっていたつもりだけれど、やはり実戦は甘くなかった。素っ裸でベッドでぼーっとしている、

「あ、もう休憩時間終わっちゃう。じゃあね千夏ちゃん、またね」

笑顔でそう言うと、私のオデコにフレンチじゃないキスをして、香織さんは去っていった。

服を着てホテルを出ると、ぐううとお腹が鳴った。ひどい、お昼ご飯を食べてくれるって言ったのに、自分だけ私の身体を満足するまで食べ尽して後は放置だなんて。私は高校生だ。ゆえにお金はない。したがってお昼は……諦めるか。

電車に乗って家に帰ると誰もいなかった。仕方がないので、台所の奥にあったカップヌードルを取り出した。日清カップヌードルは絶対にして唯一無二の味だな……と、啜りながら私はさきほどの衝撃的な出来事について考える。果たしてあれは性行為なのだろうか？

確かに性器を触られて性的な快感を得たのだから、相手が女だとしても性行為なのだと思う。そうすると私は「性行為をした」のだから「処女ではない」ということになる。

でもなあ、何か実感ないんだよなあ。香織さんの指や舌はこれまで

にない快感をもたらしたわけだが、処女喪失（この言葉もなんだかな）とは、私の中では「男性器が女性器に挿入されること」と解釈されているわけで、そういう意味では私はまだ処女なんじゃないかなあ。

物理的にすんなり挿入が出来る状態が処女じゃないとするならば、ソルフエージュを嗜む世の女性は、男性と交わりがなくても処女ではないことになってしまふ。ということは、処女か処女じゃないかというのは精神的なことなのか？ 分からないことは辞書引くに限る。食べ終えたカップヌードルと箸を流しに置き、部屋で新明解国語辞典を開く。

「処女——成年に達した女性が、性的経験をまだ持たないこと。また、その女性」

性別が定義されていないということは、初めての相手が同性であっても性行為としてみなされるわけで、つまり私は処女ではない、ということになる。初めてが女かあ、うーん、微妙。男の人とするときに備えて、美しき姉に指示を仰ぎ、厳しい特訓に耐えてきたんだけどなあ……

出来れば京助さんみたいな人が初めてだったら良かったのに。そういえば香織さん、京助さんとはもう別れるとか何とか言ってたなあ。ということは私にとって京助さんと恋人同士になるチャンスかも……

ん？ 待てよ。すると私は二人と付き合うってことなのか？ しかも香織さんと京助さんが万が一別れなかったら、毎回三人でエッチするのかな……うわあ、乱れてんぞこりゃあ。私の人生初のラブストーリーが、いきなり三人合意の上の三角関係ってどうなんだろう……

僕ら思春期真っ只中なんだから

月曜日、もやもやするまま学校へ行くと校門に二人が立っていた。ネチっ子だけでなく龍馬もにまにましてる。私が近付くと、一層にやにやして行く手を阻んだ何だ何だ？

「お早う、オナ崎さぁん」

「よ！ オナ崎！」

「ななな何よそれ！ 変なあだ名とか止めてよね！」

「だってお前さ、女優に指導するくらいなんだから、当然毎日オナニーしてるんだろ？ 隠したって無駄だぜ。だからこれから岡崎改めオナ崎な」

「あ、そうだあ、せっかくだからさあ下の名前もさあ、『ちなつ』じゃなくてえ、『オナつ』にしようよお」

「お、良太ナイスアイデア！ じゃあ今日からオナ崎オナつな！」

「ば、バカ！ オナオナ言ってるじゃないわよ！ 全っ然原型留めてないじゃないの！ 全くだでさえ暑くてダルいの、余計なことで疲れさせないでよね！」

私は二人を突き飛ばし、肩を怒らせて教室へ向かった。するとしつこく追いかけてくる二人。

「やっばこの間のオモチャ、お前のだったんだな。だからあんなに怒ってたんだ」

昼休み、学食でカレーライスを食べながら龍馬が言った。

「あーあーはいはいそーですとも。悪い？」

「お、ついに認めたな」

「ねえねえ、女の人にはさあ男の十倍気持ち良いって言うんだけどさあ、ホントお？」

きつねうどんのきつねを箸で摘み、染み込んだ汁だけちゅうちゅう吸って、再びつゆの中にきつねを戻しつつ田倉が言う。汚いなあ。

「んなこと私が知るわけないでしょ！」

「でもさ、オナニーだけでセックスはまだなんだろう？」

福神漬けをぱりぱり齧りながら龍馬。

「それなんだけどさ……」

「ええ！？ 香織さんにヤられた！？」

「ば、バカ！ 声がでかいっつーの！」

私は同時に叫んだ二人の頭を引っ叩いた。騒がしい学食が一瞬静まり返り、視線が私たちに注がれた。しかしすぐにがやがやし始めたが。

「悪い悪い。でもそれってどうなんだ？ 女同士でもやったことになんのか？」

「辞書で調べた限りでは別に性別関係ないみたい」

「ふーん、じゃあオナ崎はついに処女卒業か……」

「おめでとう、オナ崎オナつさあん」

二人は音が出ないように、控えめな拍手をした。あんま嬉しくない。

「でもなあ、実感ないんだよなあ」

「あのなあ、毎日オナってる時点で半分処女捨ててるようなもんだ

ろ。実感あるって言うのはな、オナニーもしたことなくて、ファーストインサートがちゃんぽで、血が出てすっげえ痛くって、三日くらい歩き方が変、って言うのがロストバージンの本当の実感だ」

頬杖と溜め息をつく私に、珍しくバカ龍馬がまともな意見を言う。

「なるほど。まあいいか。気持ち良かったし」

「えーじゃあさあ、オナ崎オナつさんはさあ、レズってことお？」

「田倉あんた次その呼び方したら往復ビンタね」

「オナさんこわあい」

「略してんじゃねえ！　つーか私はストレートですノーマルです！」

「でも香織さんにやられて感じたんだろ？」

「まあそうですけど……じゃあ私も香織さんと同じでどっちでもいいけるのかなあ？」

「良いなあ……」

ネチっ子が指を銜えて私を見る。

「何がよ？」

「だあってさあ、男でも女でもいいってことはさあ、単純に二倍恋人候補がいるってことでしょお？　てことはさあ、人生2倍楽しいってことだもんねえ」

「いや、そういうこととは違うんじゃないかな……だって基本的には男の人が好きなんだし。別に綺麗な女の人見たってエッチしたいとか思わないし、好きになったりしないよ？」

「だからあ、今まで気付かなかっただけでえ、香織さんによって開花したんじゃないかあ。僕ら思春期真っ只中なんだからさあ、今こそが、自分がノーマルかホモかレズかバイかSかMかスカトロかっていう性の方向性をさあ、自覚し始めるときなんじゃないのかなあ？」

「そーだそーだ！ 岡崎お前はバイだ！ 二刀流だ！ 二丁拳銃だ！ でなきゃ何の抵抗もなく女同士でキスなんかできるか！ 知ってるか？ アメリカの娼婦はな、おまんこは許してもキスだけは絶対にさせないんだぞ！」

「何それ？」

「何って……よ、要するにだ、それだけキスは大事だってことだ！」

なーにが大事よ。私には押さえつけて無理矢理したくせに……まあでも龍馬の言うことも一理あるかもね。確かに香織さんのキスは抵抗なく受け入れられたわけだし、色々されても嫌じゃなかった。ただ、自分からしようとは思わなかったけど。

「ねえ、それより龍馬、次の撮影の日の連絡とかあった？」

「え？ ないけど。何で？」

「何でって……」

「坂ちゃん鈍いなあ。オナさんはあ霧夜さんに会いたいんだよね」

さすが田倉。この男には隠し事は出来ない気がする……

「あーあのスカしたヤロウな。そーいやお前、やたらベタベタしてたもんな。でもいいのか？」

「何が？」

「だって今お前には香織さんがいるんだろ？ それで霧夜と付き合いったりしたら二股じゃね？」

「いや別に香織さんとは付き合ってるってわけじゃ……あ！ そうだ！ あんたたち私のアドレス教えたでしょ！？」

二人してそっぽを向いとぼける。

「勝手に教えてんじゃないわよ！」

「だってよ、『私のあんな姿見たんだから、あの子のアドレス教えなさいよね』って怖い顔して迫るもんだから、つい、な？ 良太」

「そうそおう。まさかあんな間近でレスプレイ見れると思わなかったからねえ。ギブアンドテイクってヤツだよお。それにさあ、そのお陰でさあオナさんも処女卒業できて恋人も出来たんだからさあ、結果オーライじゃなあい？」

「何が結果オーライよ！ 初めての人は霧夜さんって決めてたのに！」

「オレじゃなかったのかよ……」

まあでも初めてとかだんだんどうでもいい気がしてきた。

やむにやまれぬ事情により現在封印中

「つーかさ、香織さんと霧夜さんって付き合ってるんだって」

「ええ？　じゃあ香織さんは霧夜がいるのにお前と浮気したってこと？」

「まあそうなるかな」

「んで今度はお前が霧夜と付き合ったりした日にゃあ……ああ！　混乱してきた！」

頭を抱える龍馬。

「そうなんだよね。私もどうなんだろうって思うんだけど。でも香織さんは、もう霧夜さんとは別れるって言ってたし、それに私に彼氏がいても構わないって言うし」

「凄おい！　オナさんチョー欲張りい」

ネチっ子が手を叩いて喜ぶ。

「な、何が？」

「だあってさあ、同時に彼女も彼氏もいるってことでしょお？　男とするせつくすとさあ、女とするせつくすはさあ、きつと気持ちよさが違うと思うんだよねえ。でもさあ、普通の人にはさあ、どっちかとしか出来ないわけだからあ、両方の快感を知ることとはできずに死んでいくわけじゃなあい？　それを両方手に入れられるんだからさあこれ以上の幸せってないんじゃないかなあ」

ネチっ子は本当に羨ましそうに私を見る。

「待ってよ。別にまだ霧夜さんと付き合うって決まったわけじゃな

いでしょ。私みたいなガキ相手にしてくれないかもしれないし……
っーか龍馬」

「あん？」

「教えなさいよ」

「何を？」

「決まってるでしょ。霧夜さんのアドレス」

「知らん」

「はあ！？ 何で！？ 連絡取り合ったりしてたんでしょ！？」

「連絡取ってたのは監督の方だから」

監督って……あのボサ男か……

「何よ！ 人のアドレス香織さんに勝手に教えるわ京助さんのアドレスは知らないわ、全く、この役立たず！」

私はテーブルを手で叩き付け、食堂を後にした。

午後、私は休憩時間になっても二人とは顔を合わせなかった。ちょっと言い過ぎたかな……と反省しつつ放課後を迎える。しかし意地っ張りの私はそのまま二人を置いてさっさと帰った。帰りの電車で携帯が鳴る。龍馬からのメールだった。

「霧夜のアドレスと番号」

とだけ書かれたメールには、京助さんの連絡先と一緒に添付されていた。やった！ でもどうやって手に入れたんだろう？ わざわざボサ男に聞いてくれたのかな。とにかく龍馬には明日ちゃんとお礼を言おう。

さて、どうしたものか。私は携帯を前に悩む。アドレスは聞いたものの、何てメールすればいいんだろう？　もしくはいきなり電話した方がいいのかな？　しまった、こういうときのために相談できる同性の友人を持っておくべきだった……あ、そうか、今こそ美しき姉だ。私は早速宮崎の姉に連絡を取り指示を仰ぐことにした。

「あらちーちゃん、やったじゃない！　ついに好きな人が出来たのね、おめでとう！」

「ありがとう。でもさ、どうやって近付けばいいのかよく分かんないんだよね」

「そうね。フィジカル面ばかり鍛えてメンタルな部分は疎かにしてきてしまったものね。恋愛で大事なのはまず、敵を知ることよ」「敵？」

「そう、男は敵よ。そしてそれを倒して初めて自分のモノにすることが出来るの。どんな人なの？」

「とっても爽やかな大学生。しかもジョル大」

「ジョル大生？　凄いいじゃない。どこで知り合ったの？」

「へへそれはまあ色々複雑な事情がありました」

「まあいいわ。お名前は？」

「京助さん」

「金田一先生と同じだなんて良い名前ね」

「でしょお？　漢字も一緒なんだよ」

「そう……それで京助さんとはどこまで？　フェラチオは？　済んだの？」

「え！？　そんな、いきなりふえらちおするの？」

「当たり前じゃない。男を一撃で倒してモノにするにはフェラチオが一番なのよ。銜えてもらって喜ばない男なんてこの世に存在しないの。そのためにディルドを送ってあげたんじゃない」

ああそうだったのですね、あれにはそんな深い意味があったのです

ね。私はふえらちおを甘く見ていました……しかしお姉さま、せっかく頂いたでいるどエバは、やむにやまれぬ事情により現在封印中なのです……

「で、でもまだ一回しか会ってないよ？」

「あらそうなの？　じゃあフェラチオは次会ったときでもいいけど。ちーちゃんいい？　男を倒す方法は一つしかないの。それはね『こいつとやりたい』って思わせることよ」

「そうなんだ……じゃあ相手がエッチしたいって思ったら私の勝ち？」

「そうよ。でもすぐにしちゃ駄目よ」

「そうなの？」

「男はね、一回エッチすると『こいつはオレのモンだ』って思い上がるから」

「じゃあどうするの？」

「そこでフェラチオよ。何だかんだでエッチは拒みつつもお口でしてあげる。そうすると『何でフェラはよくってセックスは駄目なんだ！』って相手はモンモンとし始める。『女にとってはセックスよりフェラチオの方がハードルが高いはず』って男は思い込んでいるからね。そうなったらもうこっちのもの」

ここで私は龍馬の「アメリカの娼婦はキスはさせない」という話を思い出す。

街で手を繋いで歩くだけで警察に職務質問される時代だった

「ねえお姉ちゃん、キスは？　いつすれば良いの？　ふえらちおより先？　後？」

「あら、後に決まってるじゃない。最後よ」

「ってーことはエッチよりも？」

「もちろん。フェラチオ↓セックス↓キスが正しい順番なの」

「そうなの？　なんか……一般的な順番とは逆なんだね」

「だから良いんじゃないの。世の中の女の子が恋人が出来ずに悩んでいるのは本当に正しい順番を知らないからなの。まずキスをして、エッチして、エッチに慣れてきたらそのうちフェラチオ、って言うのが常識かもしれないけど、それじゃあ駄目なのよ。だってそれだと男にとっても予定調和でしょ？」

『あ、この子いいな』って思い始めたら、まず最初は手を繋ぎたくなる。次にキスしたくなる。で、エッチしたくなる。で、付き合いた始めたらフェラチオを要求するようになる。これが男の思考回路なの。まあ本能のルールと言っても良いかもね。

だからそれに合わせて行動してたら『都合の良い女、詰まらない女』で終わっちゃうわけ。恋愛は戦争よ。しかも基本的に惚れた方が立場として弱いんだから、正攻法で行っても返り討ちに会うだけでしょ？　奇襲をかけて一気に攻め落とさないかね」

「あーでも……そーだ、お母さんはさあ、悩殺ビーフシチューでお父さんをゲットしたんでしょ？　そういう風に料理とかは駄目なの？　その方が攻撃しやすいというかハードルが低いというか……」

「何甘ったれてるの。全ては時代のせいなの。お母さんの頃は街で手を繋いで歩くだけで警察に職務質問される時代だったのよ？　もちろんラブホテルなんて便利な施設はないし、普通の旅館に泊まる

のだって夫婦でなければ認められなかったんだから。 そんなときにいきなりフェラチオなんかしちゃったらオーバーキルじゃない」

「おーばーきる？」

「要するに、やりすぎってこと。蟻と戦うのに核爆弾使うようなものね。でも今は違う。女子高生の九割が援助交際して女子大生の八割が一度は素人モノAVに出た経験を持ち専業主婦の七割が人妻専用出会い系サイトに登録してセフレを探す時代なのよ。もちろん外でエッチするのなんて当たり前。青姦輪姦どんとこい！ ってなものでしょ？」

これだけ性が解放されてしまったのだから徐々に距離を縮めて少しずつ親密になっていく、何て悠長なこととしてたら憧れの彼は他の女の子に銜えられて持っていかれちゃうわよ。インターネットの普及が示すように、世界はスピードの時代となったのだから。恋愛だって例外じゃないのよ」

お魚くわえてドラ猫のタマが思い浮かんだ。あ、そうか、だから女は不倫とかすると奥さんに「何よこのドロボウネコ！」って言われて張り飛ばされるのね。

「でもさ、いきなりズボンとパンツ脱がせるのって難しくない？」

「そこがちーちゃんの腕の見せどころじゃない。頭使わなくっちゃ」

「えーそんなこと言ったってどうすれば……あ、ねえお姉ちゃん」

「なあに？」

「お兄さんのときはどうだったの？ いきなりふえらちおできた？」

「うふふそれは秘密……って言いたいところだけど、いいわ。特別に教えてあげる。旦那さんとの出会いはね、新型インフルエンザで私が40度の熱を出したときなの」

「やっぱり病院なんだ。お兄さんお医者さんだもんね」

「そう。でね、高熱で朦朧とする中、タミフルを貰いに行ったとき、

診察してくれたのが旦那さんだったの。名前を呼ばれてふらつく身体で診察室に入った瞬間、彼の背後に羽衣を纏ったヴィーナスが現れたのよ。そしてこう言ったの。『あなたはこの人と結婚できなければ一生一人身で寂しい人生を送るでしょう』って」

ヴィーナスが見えたのは熱のせいなんじゃ……

「私は即決したわ。今この場で彼をモノにするって。だって、次に診察に来たときに、また彼が診てくれるとは限らないから。ここで私が幸運だったのが、ブラジャーをしていなかったことね。病気で家で寝込んでいるんだから当然といえば当然なんだけど」

「何でノーブラが幸運なの？」

「だって聴診器を当てるときに私のおっぱいが露になるじゃない。

私のおっぱいはサイズこそ普通だけど、その形の良さと乳首の形状及び乳輪の色とバランスが絶妙で、これまで付き合ってきた男たちは百人が百人褒めてくれたのよ」

「え！？ お姉ちゃん百人の男の人と付き合ってきたの？」

「やあだあちーちゃんたら、そんなわけないでしょ？ 例えよ例え。でね、彼が聴診器を持って私がTシャツをまくったとき、彼の目が一瞬光ったのを私は見逃さなかった。普通、お医者さんならおっぱいなんて見慣れてるし、ましてや仕事中なんだからいちいち変なことを考えたりしないんだけど、そのときの彼は確実に私のおっぱいに興味を持った目をしたの。それを見て『これはいける！』って確信したのよ。

私はよろける振りをして彼にしがみ付いたの。そして見詰めること10秒。私の顔は、熱のお陰で違和感なく切なくも情熱的な表情となり、微かに口を動かして、唇を彼の顔に近付ける。私はその隙に彼のズボンのベルトを外し、ファスナーを下ろしペニスを取り出した。キスすると思わせてさらによろける振りをしてフェラチオね」

す、凄い……インフルエンザに罹り高熱で生死の境を彷徨っている
状況においてなお、獲物を絶対に逃がさないその執着心。さすがお
姉さま……

焦らして焦らして焦らしまくるのよ

「彼のペニスは既に大きくなっていたわ。ま、おっぱいの勝利ってところかしら。一分くらい銜えてあげて、そのときはそれで終わり」

「最後までしてあげなかったの？」

「ああ、言い忘れたけどね、銜えてもフィニッシュまで持ってっっちゃ駄目よ」

「え？　じゃあお兄さんのペニスは大きいまま診察終了？」

「そうよ。いい？　フェラチオをしても絶対に最後までしっちゃ駄目。これだけは守ってね」

「どうして？」

「男はね、やたら女とエッチしたがる生き物なんだけど、自分が出した途端に冷たくなるの。好きな女の子とヤルためにはあの手この手使って努力を惜しまないけど、エッチして精子を放出すると扱いがぞんざいになるのよ。ま、ペニスの勃起の状態と、情熱が比例してるのね。単純な生き物よ」

「でもさ、それっていかせないで終わりにしちゃうんでしょ？　何だか可哀想」

「ちーちゃん、敵に情けは無用よ。相手を倒すまでは常にモンモンとさせておくの。そのモンモンが即ちちーちゃんへの欲情の大きさなんだから。一度でも出しちゃったら男の気持ちがりセットされてしまつて、これまでの努力が泡と消えてしまうの。それに相手を気持ちよくさせて最後までいかせてあげるのなんて、付き合ってからいくらでもできるでしょう？　それまでは焦らして焦らして焦らしまくるのよ。絶対に発射させちゃ駄目」

「なるほど……それで、お兄さんとはその後どうなったの？」

「家に電話が来たわ。『明日も診察に来てください』って。で、私は確信したの。この人は私に会いたいんだなって。そこまですれば王手飛車角取りで私の勝利は決定的。翌日病院に行ったら予想通り

彼の方から告白されたわ」

ううむあの誘蛾灯のごとき黙って立っているだけでも男をおびき寄せてしまう程の美貌の持ち主の姉でさえ、敵を倒すために病に侵されてもなお攻撃に打って出るとは……：しかしである。美しき姉の場合は相手が医者であり、おっぱいを見せるというジャブが功を奏したからこそそのふえらちお成功なわけで、これが例えば、京助さんとドトールに行って、コーヒー飲みながらのふえらちおはかなり難しい……

ということは、まずはふえらちおを可能とするシチュエーション、即ち、二人きりでなおかつ周りに人がいないという状況を作り出さなければならぬ。くそう、ふえらちおだけでも難しいのに、さらにその前段階で既に暗礁に乗り上げている……：そうか、だから恋は一筋縄にはいかないものなのね。

「あ、龍馬、昨日はありがとね」

次の日、私は連絡先を覚えてくれたお礼を言った。

「わざわざ監督に聞いてやったんだから感謝しろよ。それで？　いっつ会うんだ？」

「いやーそれがさ、どうやって誘ったものか……」

「何だよ情けねえな。そんなの簡単だろ」

「え？　どうすんの？」

「オナってるって自画撮りしてメールで送れば食い付くに決まっている。なんたってお前はオナ・マスターだからな」

「ばばバツじゃないの！？　それじゃ変態丸出しじゃない！」

「えーでもさあ、霧夜さんさあ、オナさんのオナニー凄い見たがっ

てたよお」

ネチっ子が会話に加わる。

「ま、まじで!?!」

「うん。だあってさあ、香織さんじゃ良い画が撮れないからさあ、あの後オナさんで行こうか、みたいな話してたんだよねえ」

「ああしてたなそういえば。じゃあ早速行くか」

「行くってどこへ?」

「体育館裏の便所がいいだろう。あそこならほとんど生徒も来ないし」

「そおうだねえ」

「だから何で?」

「何でじゃねーよ。オレ達が撮ってやるから。だって自分じゃ手が震えて上手く撮れないだろ? 思う存分いっちゃっていいぞ」

バカとネチっ子がにまにましながら頷いている。

「上手くって……何であんたたちに私のソルフェージュ披露しなきゃなんないのよ! バカ!」

「えーだって、なあ良太?」

「うんうん」

「だって何よ!」

「オレ達も見たい」

「見たい見たあい!」

「そんなの知らないわよ!」

「親友なんだから見せてくれたっていいだろ」

「どういう理屈よ! そんなの見せられるわけ……」

ここでふとある考えが浮かんだ。

「いいわよ」

「え、ホントか!？」

「うん。あんたたちも自分でしてるところ見せてくれるんならね」

「ええ!？」

途端に赤い顔で股間を押さえるバカとネチっ子。

「当たり前でしょう。人のだけ見るなんてそんな虫のいい話通るわけじゃないじゃない。まず龍馬がやって、次に田倉ね。しっかり録画してあげるから。そしてら見せてあげる」

「いや、さすがにそれは……なあ？」

「オナさんのエッチいい」

そそくさと退散する男たち。ふん、情けないわね。

一回しか会ってないのに豪華三本立ては引くよね

そうなんだ、京助さん、本気で私のソルフェージュを撮りたかったんだ。

私は家に帰ると、パンツを下ろし、左手で録画モードにした携帯を持ちながら右手でソルフェージュを行った。携帯がぶれないようにすると集中できず、なかなかいけない。ようやくいって、再生してみると、ブレまくって天井とか壁とかが映っていて、何がなんだかさっぱりだった。

あ、そうか、どっかに固定しとけばいいのか。机に携帯を置き、画面を確認する。枠内に入るように、身体の位置を調整し、録画開始。そしてソルフェージュもスタート。二度目なので割と早めのフィニッシュを迎える。

再生してみると……おお！ ばっちりじゃないですか！ 調子に乗った私は、サフバを使ったバージョンと、エバを使ったバージョンも撮ってしまった。

エバはふえらちお的には封印中だったが、あの心地良さは代え難いものがあつたので、三回薬用石鹼ミューズで丁寧に洗った後、お父さんの大事に飲んでいるシングルモルトウイスキー山崎12年をティッシュに浸してそれでアルコール消毒をし、さらにフアブリーズを吹き付けて、ようやくソルフェージュ的には解禁にしたのだった。床にエバを固定し、お座りの格好でソルフェージュ。やっぱいいわ、これ。と思いながらの撮影であつた。

三つのムービーを撮ったわけだけど、果たしてこれを本当に憧れの

君に送るべきかどうなのか……と躊躇っているところへ電話が鳴った。びくつとして出ると、なんと相手は京助さんだった。

「千夏ちゃん？　こんにちは。霧夜です」

「きよきよきよ京助さん！？　どどどどうしたんですか？」

「ごめんねいきなり。実はさ、ちょっと話しがしたいんだけど……会ってもらえないかな？」

キターーー！　まさかの展開！　京助さんの方から会いたいと言ってくれたなんて……ああ神様、これも私の日頃の行いが良いせいなのですね？　私がいまだにもラブリーでキュートな女子高生だからなのですね？

「出来れば早い方が良いんだけど……明日の放課後とか時間ある？」

「ありますあります！　なくてもあります！」

「良かった。じゃあ五時にいけふくろうで」

よっしゃあああ！　私はベッドの上で渾身のガッツポーズを決め、はしゃいで飛び跳ねたついでに天井に頭をぶつけた。

これで何なく「ミッション1、京助さんと二人で会う約束を取り付ける」突破！　危なかった……あとコンマ数秒電話がかかってくるのが遅かったらソルフュージュ画像を三本セットで送っているとこだった。さすがに一回しか会ってないのに豪華三本立ては引くよね。まあこれは切り札として取っておきましょう。

それにしても京助さん、話って何だろう？　やっぱり撮影の事かな？　それとも……

『千夏ちゃん！　初めて見た瞬間、キミの瞳に恋してしまったんだ

！　お願い！　僕と付き合ってください！』

なんてね、えへへ〜もしくは……

『千夏、キミのソリストとしての素質はこの前の指使いで充分伝わった。でもいいのかい？　いつまでも一人ヨガリで』

『一人ヨガリ……？』

『そうさ。今のキミは井の中の蛙だ。見せてあげよう、めくるめくハーモニ―の世界を！　そして一緒に奏でよう！　僕と愛のシンフォニーを！』

奏でる奏でるう〜う〜うへへ〜は！　こうしちゃおれん！

期せずして京助さんと二人で会う機会を得たのだ。ここで何とかふえらちおを実行しなければお姉さまに叱られてしまう……よし、決めた。今から特訓よ！

デヴィッドカッパーフィールドばりの早業イリュージョンが

決行するシチュエーションは明日会ったときに考えるとして、とにかく相手に反撃する暇を与えぬ内に、電光石火でふえらちおの体勢まで持っていていけるようにしておかないと。

私は両親の寝室に忍び込み、お父さんのスーツのズボンとベルトとパンツ（白ブリ）を拝借した。ふとゴミ箱を見ると、縛って捨ててある、ブルーのコンドームを発見してしまった。うーむお父さんとお母さんはまだまだらぶらぶなのですね……いいことだ。

しかし、避妊しているということは、私に妹及び弟は未来永劫出来ないということの意味する……少々寂しくもあるが、まあ今生まれて来てよね、十五歳以上離れちゃうしね、美しき姉に至っては、自分の子供より年下の妹とか弟になっちゃって、何がなんだか訳分かんないもんね。

部屋に戻りお父さんのズボンをベッドに置く。そしてパンツを中に入れ、ズボンのチャックを閉める。ベルトも締める。エバをパンツの中に入れて準備完了。ベルトを外し、チャックを下ろし、パンツの中からエバを取り出すことが出来て初めてふえらちおが可能な状況となる。

私はストップウォッチを右手で持ち、左手だけで以上の工程にとりかかる。なぜ左手だけかというと、基本的にいきなりのふえらちおは奇襲攻撃なのだから、相手の目を見ながら両手を使って「うふふ舐めてあげよっか？」などと悠長にやっている場合ではない。私との会話に夢中になっている内に脱がせ、相手が「ん？ 何だろう？」と思ったときにはもう銜えられている、という状況が望ましい。

この一連の動作を違和感なく行うには、やはり片手で出来るに越したことはないだろう。それも敢えて利き手とは反対の手で行うことにより、一層の相手の油断を誘うのだ。『まさか左手だけで？ そんなバカな……』と気付いたときには後の祭り。ペニスは私の口の中でその膨張を止められない。

右手でアイスコーヒーを持ち、ストローを吸っている間に左手でペニスを取り出す。ストローを吸っていた口がいつの間にかペニスを吸っている、みたいな、デヴィッドカッパーフィールド通りの早業イリュージョンが出来れば、ドツールでも周りに悟られずにふえらちおが可能かもしれない。

「よいい、スタート！」

私は一人で掛け声をかけ、時間を計りつつ特訓を始めた。しかし作業は難航を極める。

そもそも片手ではベルトが上手く外れない。実際に人が穿いている状態とは異なるから力の入れ具合もよく分からないし。チャックはまあ割と簡単に下ろせるが、その次の白ブリは、これがラスボスだと思って全力で倒したと思ったら、その後に真のラスボスが出てきちゃって、もうHPもMPも回復系アイテムも全然残ってねーよ！ っていう状態で戦いに挑まなくてはならないくらい手強かった。

ブリーフの正面は、生地が折り重なっていて、その取り出し口から左手のみでペニスを出すのはほぼ不可能に近かった。脱がせちゃえば楽なんだけども……私は10回目のトライの後、全くタイムが縮まないことに苛立ちを覚え始めていた。

ちょっと休憩しよう。何か良い方法があるはずだ……あ、そーだ、ここで私は二点、実際と異なるであろうポイントに気付いてしまった。

その一、京助さんは白ブリなんか穿かないのではないだろうか？

その二、でいるどエバはオールウェイズ常に勃起状態だが、ふえらちお前のペニスはまだ小さくて柔らかいのではないだろうか？

その一に関して。京助さんはオシャレでイケメンな大学生だ。少なくともブリーフはないだろう。とすると残るはトランクスかボクサーブリーフとなる。トランクスであれば短パンみたいな物だから、恐らくかなり開放的であるに違いない。そうすれば取り出すのも比較的容易に出来そうな気がする。

しかし、ボクサーブリーフって何だろう？ ブリーフっていう名が付くくらいだから、やはりしっかりと固定されているような気はするのだが……いいや、明日龍馬にでも聞いてみよう。

その二に関して。当たり前だが普段からいつ如何なるときも、公衆の面前でオールウェイズ勃起状態の男はまずいない。ということは取り出す時点では大きさも硬さもさほどではなく、融通も利きそうで、今想定しているよりもかなり出しやすいと思われるのだが……

さらにさらに、京助さんはジーンズだったわけで、ベルトをしていない可能性もある。となると「ジーンズでノーベルトでトランクス」というのが私にとって最高の条件となる。少なくとも、今の訓練状況よりはだいぶ難易度が下がることは確実だ。と、いうわけで特訓終了。明日の本番に備えて早めの就寝。

原田知世さんの言うとおり、冷たいカフェオレで一息入れよう

「え？ パンツ見たいのか？」

京助さんと会う前に、ボクサーブリーフの正体を知っておきたかったので、放課後二人を校舎の裏の公園、略して裏公に呼び出した。

「見たいっていかさ、ボクサーブリーフってどういうのかなって思ってたさ」

「オレはトランクス派だぜ」

そう言って龍馬はズボンをすんとん、と下ろし腕を組んで仁王立ち。黒のパンツの股間にはニタリと不気味に笑う髑髏が描かれている。

「趣味悪いなあ。田倉は？」

「ボクサーでえす」

「お、やったね。見せて見せて！」

「恥ずかしいけどお……どおぞ！」

田倉も制服のズボンを下ろす。すると紺地に赤のボーダー柄のボクサーの股間は既に盛り上がっていた。

「ちょっと！ 何で元気なのよ！」

「だあってさあ、ちょーエッチなオナさんにさあ、パンツ見せろとか威圧的に言われたらさあ、そりゃあコーフンしちゃうよねえ」

「どんだけMなんだコイツは……まあいいや。」

「これどういう構造になってんの？」

私は田倉のパンツを、中身に触れない程度にところどころ指で摘んで上から下から見てみる。

「ああそんなあオナさあん……」

「変な声出すんじゃない!」

田倉のパンツはさらにむくむくと成長を続ける。

「別に特別なもんでもないぜ。ブリーフに脚が生えたようなもんだ」
パンツ丸出しで腕を組みながら龍馬が言う。

「ふーん、そうなんだ。なるほど……ね!」

「ね!」で田倉のペニスをパンツの上からデコピンしたりして。

「ああああ! あゝあ……」

声を上げたかと思ったら、田倉は急に情けない顔になってしまった。

「あ、ゴメンゴメン、痛かった?」

ちょっと悪乗りが過ぎたかな?

「出ちゃった……」

「出たって……えええ!?!」

見ると、パンツの中ではペニスが何かの生き物のようにひくひくと蠢き、徐々に染みが広がってきた。

「ちょっと！ 何こんなところで出してんのよ！ バカ！」

「あああオナさんに犯されたあ……」

「ったくしょうがないわね……っーかあれだけでいくってどんだけよ」

「岡崎、そもそも何で男のパンツのことなんか知りたいんだ？」

一人股間を抑える田倉をよそに、龍馬と会話を再会。

「これから京助さんと会うんだ」

「お、ついにデートか。でもそれとパンツと何の関係が？」

「うふふそれはねえ、秘密！」

「あああオナさんにレイプされたああ」

「ちよっと人聞きの悪いこと言わないでよね！ とにかく急ぐから、じゃね！」

パンツ姿の男たちを残し、私は池袋へ向かった。いけふくろうに着くと、既に京助さんは来ていた。やあん今日も爽やかああ素敵いいイイオトコおお……いかにいかに、つい涎が。ここで気を抜いてはいけないのだ。なんといっても今日の私には大事な使命があるのですから。

「あ！ 千夏ちゃん！」

日本の夏のじめじめした鬱陶しい暑さを忘れさせる笑顔で振り向いた京助さんの背後にいるいけふくろうが、ローマ神話の恋愛の神、キューピッドに姿を変えた。

あああお姉さま、見えました！ 私にも愛の神が……するとキュー

ピッドは優しく微笑みながら私に向けて矢を構え、弓を引く。瞬きをした次の瞬間、黄金に輝く矢が寸分野狂いもなく私の心臓を貫いた。好き！ 大好き京助さん！

「ここっここっここにちは」

「ごめんね、わざわざ来てもらって」

「そんな全然いいんです。というかむしろありがとうございます」

「え？」

「いえいえこっちの話です。あははは」

「ま、とりあえずコーヒーでも飲もうか」

私たちは駅前のドトールへ向かった。やっぱりドトールである。黒船的来襲によりあつという間に日本全土を席卷したスタバに押され気味だが、日本の元祖本格的コーヒーチェーンといえばドトールなのだ。ちなみにドトールの意味は、ブラジルにある街の名前ね。

店に入ると京助さんは、当たり前のように私の分のアイスカフェオレも一緒に買ってくれた。さすがジョル大生紳士だわ……あ。

京助さんがコーヒーを乗せたお盆を手に向かった先は、なんと二人用のテーブル席である。つまり私と京助さんは向かい合って座る形となり、はつきりいつてここでのふえらちおはいくら引田天功でも不可能だ。むむむ仕方ない、この場での作戦決行は保留にするか……

「ど、どうしたの？ 千夏ちゃん、怖い顔して。具合でも悪い？」

「あ、いえいえ何でもないんですあははは……」

危ない危ない、行動を起こす前に悟られては全てが台無しだ。あまり股間ばかり見詰め過ぎないように注意しないと。とりあえずここではふえらちおはなし、即ち「のーふえら」なわけだから、ごく自

然に京助さんとの会話を樂しむべし。原田知世さんの言うとおり、冷たいカフェオレで一息入れよう。

「それで、お話ってなんですか？」

「ああ、それなんだけどね、千夏ちゃんを是非撮らせて欲しいんだ」
「やっぱりそうなのか……京助さん、何が何でも私のソルフェージュを撮りたいのね。とりあえず昨日撮った三本立てを見て貰った方がいいのかな……私は鞆から携帯を取り出し京助さんに手渡そうとした。」

活動内容は当然極秘で

「あ、あのこれ……」

ちょっと恥ずかしいけど、お姉さまのおっぱいジャブ同様、京助さんをモンモンとさせる、私なりの一つの攻撃となってくれることを期待しつつ。

「ん？ 何これ」

「昨日試しに撮ってみたんですけど……撮影ってあれですよ？ こないだの香織さんの代役というか……」

「ああ違う違う！ そんな、いくらなんでも高校生にあんなシーン頼むわけにいかないよ」

「でも京助さん、私のソルフェージュを何が何でも撮りたいって聞きましたけど……」

「ソルフェージュ……？ この前のは確かに香織じゃイマイチだけどね。あれはもう少し脚本を練り直そうってことになったんだ。そうじゃなくてさ、僕の友達でバンドをやってるヤツがいてね、今度の曲に映像付けてユーチューブで流そうって話になってさ。僕が撮影を頼まれたんだけど、曲を聴いて真っ先に浮かんできたのが千夏ちゃんだったんだ」

「え？ それってプロモーションビデオってことですか!？」

全く予期していなかった発言である。私は即座に携帯を引っ込めた。

「まあそんな大袈裟なものでもないけどね。ネットで動画を流してちょっとでも見てくれる人が出てくればバンドとしてアピールできるから。それより今試し撮りしてきたって言ってたけど……何を撮ったの？」

「あ、いえいえ何でもないです。ちょっとした手違いというか場違いというか……」

あぶねーあぶねー。

「そう。それで、どうかな、出てくれる？ もちろん強制はしないけど、千夏ちゃんが駄目だったらまた別の女の子を探さないといけないから」

「どんな感じの曲なんですか？」

「そうだよ。分からないとなんとも言えないよね。ここに持ってきたからちよつと聴いてみて」

京助さんは、MDウォークマンを取り出し私に貸してくれた。イヤホンを耳に挿し込み、再生させる。すると聞こえてきたのは、ギターの音が軽快な、アップテンポで耳ざわりの良い、自然に身体が動き出すような、そんな曲だった。

男性ボーカルの、ちよつと高めのハスキーな声も曲に良く合っている。メロディも覚えやすく、二回目のサビの部分では、自然に口が歌っていた。ノリノリの私を見て京助さんも嬉しそうだ。聴き終えると私はイヤホンを外し、京助さんにプレーヤーを返した。

「どう？」

「凄い！ 素敵ですね！ 爽やかで夏っぽくて……プロなんですか？ この人たち」

「んーまあセミプロってとこかな。地元のライブハウスでやってて、ファンもそこそこいるみたいだけど」

「いいんですか？ 私なんかで」

「もちろん！ バンドの連中にはさ、どういう画にするかは霧夜に任せるって言われてるんだよね。で、これを聴いたときに千夏ちゃ

んしかないって思ったわけ。歌詞も少女の片想いを歌ったものだし、軽快で元気一杯な感じがぴったりだなって」

私がプロモーションビデオの主演……ああ、スカウトされるってこういう気分なのね……メインで撮られると思うとちょっと恥ずかしい気もするけど、何より愛しの京助さんのたつてのお願いだ。断る理由はないわ。

「やりまっす！」

ぐっと拳を握りガッツポーズしたら肘がテーブルにぶつかり、コーヒーが零れそうになった。

「本当！？ 良かった。ありがとう」

「いつ撮るんですか？ どんなの撮るんですか？」

「イメージとしては片想いの相手へ告白できずにいる少女が、その想いを海に向かってぶつける……そんな感じでいこうと思ってて。外の撮影だから天候も読めないし、時間帯も朝とか夕方とか色々試してみたいんだよね。だから出来れば二、三日泊りがけで近場の海岸に行きたいと思ってるんだけど……夏休みに入ってからとかどうかな？」

キタキタキタキターーーー！ ふえらちおを待たずしての京助さんとお泊り愛！ こんなにも上手い具合に事が進むなんて怖いくらいだわ……ああ、やっぱりさっき見えたキューピッドは本物だったのですね。

「でも泊りがけはまずいかな？ まだ高校生だし」

「全然まずくないです！ 親には部活の合宿って言いますから！」
「千夏ちゃん、何か部活やってるの？」

「やってません！」

再びガッツポーズ。

「だ、大丈夫？」

「大丈夫です！ 今日からどっかの部活に入ったことにしますから！」

こんなチャンスは滅多にないのだ。愛しの京助さんのためなら自ら進んで親にも嘘をつこうではないか。万が一お母さんに「何部？」って聞かれたら「ソルフエージュ部」とだけ言っておこう。活動内容は当然極秘である。

全盛期のキング・カズよろしく

話が終わると、京助さんは用事のため、もう行かなければならないとのことなので、私たちはドトールを出た。駅までの短い距離を並んで歩く。うろう手……手を繋ぎたいっつ！

あ、でもなあ、手はどうなんだろう？ ふえらちおより先でもいいのかなあ。美しき姉的思考からいくと、一般的に難易度の低い方が後だから……となるとキスよりも後だから……最後の最後ということになるな……などと考えている内に池袋に到着してしまった。

「じゃあ詳しいことはまた連絡するから」

京助さんは西武線の改札を颯爽と通り抜けて行ってしまった。私はその背中に小さく手を振る。

あーなんかいいなあ、こういうの。好きな人を改札で見送るという、ちよっぴり切なくて、でも次会える日が待ち遠しくて。これが山下達郎のサイレントナイトな世界なのね……と脳内センチメンタルジヤーニーしていると、いきなり後ろから抱きつかれ、そのまま耳たぶを軽く噛まれた。

「ぎゃあああ！」

と悲鳴を上げて振り返ると、そこには妖しい目をした女、ナイスバディ香織の顔があった。胸が必要以上に私の背中を圧迫している。

「かっか香織さん！ 何するんですかいきなり！」

「あーら私たち恋人同士なんだからこれぐらい日常茶飯事でしょ？」

それより千夏ちゃん、京助と二人でこそそと何の相談？」

「な、何でもないです！」

「愛しの彼女に隠し事はダメダメよ」

いや別に愛しくないし、彼女って認めてもないですし。

「ちょっとした打ち合わせです。さうとと……あ！　もうこんな時間！　それじゃ私はこれで……」

と、全盛期のキング・カズよろしくキレキレの体重移動で身体を反転させてすり抜けようとしたら案の定、腕を掴まれた。そして今度は正面から抱きしめられ、頬を寄せてきた。

「打ち合わせねえ……京助と海に撮影旅行に行くんでしょ？」

生温かい吐息混じりの、耳元で囁くような言葉にぞぞぞと全身に鳥肌が立つ。

「ええ！？　何で知ってるんですか！？」

「だってさっき隣で聞いてたから」

「じゃ、じゃあドツールで隣に座ってた女の人って……」

私と京助さんの左隣に、微動だにせず同じ体勢で、サングラスをかけたまま日刊スポーツの同じ紙面を読み続ける女の人がいたのだった。若干不自然な雰囲気ではあったが、私は京助さんと距離を縮めるのに忙しかかったので、注目している暇はなかったのである。

「ふふん、同棲している京助でさえ気付かない完璧な変装！　ま、これくらい女優なら出来て当然ね。じゃあ行きましようか」
「ど、どこへ？」

「決まってるじゃない。愛し合う恋人達が行く場所なんて一つしかないわ。ホテルでメークラブ」

ラブを「ラゝブ」と溜め息混じりに伸ばし、「ブ」を「ヴ」と下唇を噛んで卑猥に発音する香織さん。この人見かけはナチュラルなのにちょーエロイいいい！

「ややややです駄目ですって！　こういうことはもう……」

「どうして？　だって千夏ちゃん、帰ったらどうせソルフエージュするんでしょ？　自分でしたって私がしてあげたって変わらないじゃない。ううん、私がしてあげた方がずっと気持ち良いはずよ。この前ので分かったでしょ？」

「それはそうなんですけど……」

「じゃ、決まりね」

帰ったらするのは事実だけど、それは京助さんを想いながらのソルフエージュであって、香織さんにされるのはまた違うと思うんだけどな……と考えているうちに、強引に引っ張られてホテルでベッドイン。そしてまたもやいやらしすぎるフレンチキスから始まる香織さんのめくるめくエロスの世界。

「全く京助のヤツ、私という女優が傍にいるのに、千夏ちゃんに撮影のオファーするなんていい度胸してるじゃない」

「あ！」

「まあでも設定がティーンエイジャーだから仕方ないかしら？　千夏ちゃん可愛いしね」

「ああ！！」

「でもでも私だって制服着れば、まだまだいけると思わない？」

「あああ！！！！」

「だいたいこの間のストーカーOLのショートムービーだって、私

に断りもなく脚本勝手に書き直して!」

「ああああ!!!!!!」

「私のソルフェージュシーン削るってどういうことよ!? あれから結構練習したのに!　せめてそれを見てからにしないよね!」

「ああああ!!!!!!」

そして私は……死んだ。

「あーすっきりした。じゃね、千夏ちゃん!」

香織さんは愚痴りながら散々私の身体を弄ぶだけ弄ぶと、一人ストレスを発散させて晴れやかな表情でおでこにキスをして部屋を出た。裸で横たわる私。快感が引いてくると、変なところに力が入り過ぎていたのか、ところどころ関節が痛い。

朝からうきうき浮かれまくりのウゴウゴル―ガ

帰りの電車で思う。

香織さんとのエッチは確かに自分でするよりも気持ち良いが、その分、終了時に来る肉体疲労も大きい。ほどほどにしておかないと……というか私はこれでいいのだろうか？ 好きな京助さんにはふえらちおすらできずにいるのに、好きでもない、しかも女の香織さんにはすっかり身体を許している。まあ先に手を出したのは私だから自業自得と言えなくもないんだけどね……

ま、でもいいや。とにかく京助さんと愛の撮影旅行に行くことは決定したのだ。小学生の頃から七月後半になれば自動的に訪れる夏休み。かつてこれほどの高揚感と共に待ち遠しく思ったことがあっただろうか？ 否。

「おっはよ〜」

当然次の日は朝からうきうき浮かれまくりのウゴウゴル―ガである。校舎の入り口でもたもとと上履きに履き替えているバカとネチっ子の頭を引っ叩き、私は颯爽と教室へ向かった。

「何だ何だ、随分とご機嫌じゃねえか」

「あゝさてはオナさあん、霧夜さんと何かあったんでしょお」

「えへへへへへ分っかるううう？」

「にやにやしやがって気持ち悪いな……ひよっとしてついにやったのか？」

「告白してオツケーされたとかあ？」

「分かった、霧夜と香織さんと3Pで新たな快楽の境地を開拓したとか？」

「あ、いいなあそれ。僕も混ぜて混ぜてえ」

「バカ、違うわよ。実はね……夏休みにね、旅行に行こうって誘われちゃったのおおおおお！ でへでへいいでしよいいでしよおお」

今の私の顔は、初孫を抱いて相好を崩しまくっている頑固ジジイよりもだらしない。

「おい良太、行こうぜ。こいつ暑さにやられたらしい」

「だねえ。オナニイしすぎで脳が麻痺しちゃったんだねえ。可哀想にい。熱中症にはねえ水分補給とねえ、あと塩を舐めるといいらしいよお」

冷ややかに私を見下ろし、去り行く男達。

「ちよちよちよと待ちなさいよ！ 何で信じゃないのよ！」

「信じるわけないだろうが。だいたい付き合ってもいないのになんていきなり旅行に誘うんだよ」

「そ、それは私がラブリーでキュートな女子高生だから……」

「オナさんどうせあれでしょお？ 撮影絡みでしょお」

う……なんでこいつはいつもこんなに鋭いんだ……？

「でででもいいじゃない！ 京助さんと二人っきりでお泊り旅行には違いないんだから！」

「ははははは」

「あははははあ」

明らかに人を馬鹿にした笑い方。何なのこいつら！ ムカつく！

「岡崎お前、本気で二人っきりで行けると思ってたのか？」

「ど、どういう意味よ？」

「撮影なんだろ？ だったら当然監督も一緒に決まってる」

「あ……」

しまった。ボサ男の存在なんかすっかり忘れてた……

「ふ、ふん！ それくらい想定範囲内よ！ 撮影が終わったらボサ男にはガンガン酒飲ませて潰して私は京助さんとイイ感じになって一気にカタをつけるんだから！ そのために日々ストップウォッチ片手に特訓してるんだからね！」

「特訓？」

「あ、こっちのこと。とにかく！ 今度の旅行で必ずや京助さんを落とすんだから！ ま、あんたらはせいぜいエロビデオ鑑賞会に明け暮れる夏休みでも送るんでしょうけどね！」

そして終業式。一学期が終わった。

「じゃあね〜〜ばっははああい！ 良い夏休みを〜」

私は軽やかに龍馬と田倉に別れを告げ、家に戻ると早速明日からの旅行の準備に取り掛かった。

二泊三日だから、着替えはそれぞれ二つずつでよし。エバとサフバは……置いていくか。バスタオルと歯磨きセットと、あ、あそうだ、京助さんには制服持ってきてって言われてたんだ。撮影は制服姿でするらしいから。あとは、海だから当然水着。

ふふふ少しくらいは遊ぶ時間もあるだろうと思い、この日のために池袋丸井にてラブリーでちよいエロなビキニを買っておいたのですよ……これで無邪気に抱きついたりして京助さんにジャブを打っておいて、岩場に誘い込んでのふえらちおというのもアリね。

は！　そうよ、そうだわ！　泳ぐときは京助さんだって当然水着なんだからペニスを取り出すのは普段着よりかなり楽チンなはず……ああ！　海に撮影旅行の真意はそこにあったのですね！　素晴らし過ぎる神の采配！

いかん、こういしちゃおれん。私は完全に解禁となったでいるどエバを部屋の扉にくっつけて、明日に備えてふえらちおの特訓を、顎が外れる寸前まで行って、そのままソルフェージュへと流れ、明日に備えて早めの就寝。

穢れなき夏の快晴の空に

次の日、朝六時、車で迎えに来てくれるというので浦和駅前で待機。

今日のいでたちは、やや丈が短めの、白のワンピースに、ヒールのあるサンダルで、コンセプトは「確かに軽井沢の別荘は好きよ。でも、毎年同じ景色ばかりで飽きちゃったな……だからたまには海に行きませんか？ お父様。お姉様もそう思うでしょ？ とちよっぴりわがまま言っちゃう夏のバカンスの爽やかお嬢様風」。

カッコイイ京助さんのことだから、ポルシェとか乗ってきたりして……なんて考えていると、目の前のロータリーに白いバンが止まった。助手席の窓が開き中から京助さんが顔を出した。

「千夏ちゃんお待ちせ。後ろに乗って！」

相変わらずイイオトコの京助さんの奥に、ハンドルを握るボサ男が。そうか、京助さんの車じゃないのか……まあいいわ。晴れてカップルとなり、初デートのときはオープンカーでバラの花束抱えて迎えに来てねダーリン。と、後ろのスライドドアを、ふんつと勢いよく開けて中を見た瞬間、私は固まった。

「よう岡崎！ 晴れて良かったな！」

「オナさんおはよう」

「やあん千夏ちゃん、そのワンピース可愛い〜！ 早く脱がせた〜い！ ほら、乗って乗って！」

後部座席で私を迎え入れてくれたのは、満面の笑顔のバカ龍馬とネチっ子、そして香織さんだった。悪夢だ……これは一体何の冗談な

のだ？

「あ、あの、京助さん、撮るのって私だけなんじゃ……」

「そうなんだけどね、何だかよく分かんないうちに話が広まっちゃって。まあせっかく行くんだから大勢の方が楽しいかなって」

「は、はは、そうですね……」

顔面が引き攣る。香織さんは今回の話を知っているからまだしも、何でこいつらまでいるのだ？

「あんたたち何邪魔しに来てんのよ！　いろんな意味で！」

「えーだあってねえ？　坂ちゃん」

「そーだそーだ！　こんな面白そうないイベント、参加しないわけにはいかないからな！」

「まあそうカリカリしないの。千夏ちゃん、ポッキーでも食べて」

「はあ……」

と振り向くと、口にポッキーを銜えた香織さんの顔があった。口に挟んだポッキーごと私に差し出す。

「あ、あの、新しいの下さい」

「何言ってるの？　恋人同士なんだから、二人で端から食べあって、最後はキッスっていうのが定番でしょ？」

「じゃ、じゃあいりません……」

「えーそう？　残念ね……じゃあ飴玉は？　はちみつきんかんのど飴。口移ししてあげる」

ポッキーを軽快に食べ終わると、香織さんは飴を取り出し口に放り込んだ。そして舌の上に乗せたまま私に顔を近付ける。だからいらねっつーの！

「あ！　じゃあオレ貰います！」

「僕も僕もお！」

「あゝら、あなたたちチェリーボーイズにはまだ早くってよ！」

ドーターじゃなかったらやるのかよ……

「そういえば香織さん、岡崎と付き合ってるんですよね？」

「そうよ！私たちとっても愛し合ってるんだから。ね？」

ね？　じゃねーよ……無視無視。

「はいはい！　質問質問！　香織さんてえ、バイなんですよねえ？　男の人と女の人とお、どっちのせつくすの方が気持ち良いんですかあ？」

ネチっ子のヤツ、朝っぱらからなんちゅーこと聞いてんだ。穢れなき夏の快晴の空に懺悔しろ！

「そうねえ、私はどっちゃかっていうと、してもらよりしてあげる方が好きだから……まあ、でも今のところ一番気持ち良かったのは、千夏ちゃんの超絶テクかな」

「おおおっう！」

あんたもマジに答えなくっていいんだよ……くそう、何でこいつらこんなに楽しそうなんだ……帰りたくなってきた。せめて京助さんの隣に座ればなあ……すると香織さんが運転席に乗り出してボサ男に話しかける。

「ねえ監督、ちょっとコンビニ寄らない？　朝ご飯食べてないから

お腹空いたし飲み物も買いたいし」

お、ナイス提案。私も朝食抜きだし。そういえば監督って名前何ていうんだろ？

「そうだな、じゃあ次のコンビニで止まるから、飲み物とか食い物とかトイレ休憩とか各自済ませておけよ。高速乗ったらそのまま海までノンストップで行きたいから」

訳してタイム・オブ・ラブ

間もなく赤と黄色の看板の郊外でお馴染みの、デイリーヤマザキ発見。冷房の効いた車内から外に出ると、ムワツと熱く湿った空気が全身を包む。駐車場で伸びをしていると香織さんに後ろから抱きつかれた。全くこの人は、所構わずだな……

「千夏ちゃん何か食べる？ 買ってあげる」

「い、いやいいですよ、自分で買いますから」

貸しを作るとこの先段々と私に対する欲求の要求がエスカレートしそうだしね。

私は香織さんの腕を振り切って店へ向かった。中では既に男四人がめいめいの買い物を済ませていた。バカとネチっ子は、SM雑誌を立ち読みしていて、ネチっ子が「この縛り方はねえ……」と龍馬に解説していた。こいつらも所構わずだな。私はサンドウィッチと午後ティーのミルクティーを買った。駐車場に戻ると京助さんとボサ男が外で立ち話をしている。

「京助運転変わってもらっているか？ 俺ちよつと寝たいから」

そう言うとボサ男は後部座席に乗り込んだ。そして京助さんが運転席に座る。ん？ こここれはいわゆるチャンス到来ってやつなんじゃないんですか！？

「前乗ってもいいですか？」

私は今日イチのキュートな笑顔を作ると、京助さんの返事を待たず

にドアを開け、助手席に座り込んでしまった。やった！ 思いがけず京助さんの隣キープ！ 後から戻ってきた香織さんが後ろで文句を言っているが聞こえない聞こえないアーアー。

ネチっ子はさっきの雑誌を購入したらしく、「この縄師がさあ国宝級でさあ……」と、まだ龍馬に解説していた。そして車は滑り出し、間もなく高速に乗った。

私は自分のサンドウィッチを広げ、食べ始める。ふと見ると京助さんの買ってきたおにぎりとお茶が袋に入ってたままだ。

「京助さん、食べますよね？」

と、私はおにぎりの包装を剥がしつつ、聞いてみる。

「うん、あ、でも置いといて。隙を見て食べるから」

「えー隙があったてもう高速ですよ？ 赤信号なんてないんだし。じやあ私が食べさせてあげます。ハイどーぞ」

私はドキドキする心臓を悟られないように、おにぎりを前を見ている京助さんの口元に持っていた。「ありがと」と言って、ぱくりと齧りつく京助さん。おおお！ ここここれが好意を持つ者同士にのみ許される「ハイ、アーン」の儀式なのですねっ！ ああこうやって二人の中は深まってゆくのね……

「あ、じゃあさ、千夏ちゃん、ついでにお茶もくれる？」

ハイハイもちろん喜んで！ 何なりとお申し付けくださいませませ！ 私はペットボトルの蓋を空けるとそのままそっつと京助さんの口元に持っていた。

「いや、これはさすがに自分で飲むよ」

苦笑いと共に、左手でペットボトルを掴み、一口飲んで私に手渡した。私はそのペットボトルの口をじっと見詰める。今これを私が飲んだら、かの有名な間接キッスってヤツですよ……ああ！ しい！ 間接でもいいから京助さんとキスしたい！ ようし、ここは一つ勇氣リンリン振り絞って……

「ちょっと貰ってもいいですか？」

「え？ うん、いいよ」

ややややった！ 私は京助さんの飲んだ場所と同じ部分に口を付け、一口飲んだ。そして更に私は気付いてしまった。さっき京助さんが齧ったおにぎり。こっちの方がもっと強烈な間接キッスを体感出来るのでは……？

「お、おにぎりもちよつと食べたいかなうなんて……はは」

「どうぞ」

よっしゃああああ！ 私は京助さんの齧ったおにぎりを手に取り、その歯形と寸分違わぬ場所目掛けて歯を当て、かぶりついた。ああ、ついに私は京助さんの一部を体内に取り込むことが出来たのね……感動に浸り、サンドウィッチを食べようとしたとき、更に更に気付いてしまった。

この私の歯形くっきりの食べかけサンドを京助さんにあげたなら、相互間接キッスということに……つまりお互いの唾液を交換したという事になり、これは即ち、限りなく本物のキスに等しいのでは……？

「あ、じゃあお返しにサンドウィッチあげます」

さり気なく言って、私は食べかけ卵サンドを京助さんの口元へ持っていく。

「お、ありがとう」

大きく開けた口の中に、私はサンドウィッチを押し込んだ。すると更なる奇跡の展開が！　なんと閉じかけた京助さんの唇が私の指に当たったのだ！　私の指はついに京助さんの核心に触れたのだ！　私の左手の人差し指と中指に、はみ出たマヨネーズと、そして確認は出来ないが確実に京助さんの唾液が付いているはず。

「あ、ゴメン、指食べちゃった」

いえ！　とんでもないです！　私の指なんぞでよければいくらでも！　小生岡崎千夏、むしろ有り難き幸せ！

私はさりげなく、しかし幸せに浸りながらその指先をできるだけ可愛らしく舐めた。それにしてもさっきから随分静かだな……と、後ろを見ると、何のことはない、全員眠っていた。ふははは、そうだそうだその調子！　私と京助さんの愛の時間、略して愛時、訳してタイム・オブ・ラブを邪魔する者は何人たりとも許さんからな！　大人しくしておれよ！

まさかソルフェージュ連続10セット

思いがけず京助さんと二人きりの空間になった。これを見事にしている。

ああ、今なら京助さんも抵抗できないからな、ふえらちお出来るんだけどな……でも運転中はさすがに危ないよな……京助さんがいった途端に事故って全員逝った……なんてまじでシャレにならないでしょうがない、ドライブ中も「のーふえら」で。ここはひとまず会話を弾ませようではないか。

「ところでこの海に行くんですか？」

「そういえば言っていなかったね。茨城にね、ちょっとした穴場があって、そこだと人もほとんど来ないんだ」

「へえ、この時期にそんな場所があるんですね」

「うん、前にも一回撮影で行ったんだけどね」

「京助さんて、どれくらい映画撮ってるんですか？ 部長っていうくらいだから、結構ベテランなんですよ。部員もやっぱり多いんですか？」

「ああ、それなんだけども、実は僕と北川の二人だけなんだ。あ、北川って監督のことね」

京助さんは、ハンドルを握ったまま首を捻り、後部座席で腕を組み、なぜか眉間に皺を寄せて苦しそうに寝ているボサ男をチラ見した。

「え！？ 二人！？」

「もともとは映画部っていう大きなところに入ってたんだけどね、やり方が気に入らなくて二人で抜けたんだ。そこは物凄い体育会系でさ、脚本も撮影も何もかも上級生の決めた通りにしか出来ないんだ。

もちろん技術的なこととかは先輩の方が経験してるから教わることも多いし、部員も多いから運営費も結構あって、機材も充実してるんだけどね、とにかく下級生は雑用ばかり。

プロの世界で仕事としてやってるならそれでも納得できるかもしれないけど、まあ言っちゃえば所詮素人だからね。楽しくやりたいと思うのが普通でしょ。映画が好きで、自分たちで考えたストーリーを好きなように撮る。そういうのが理想だったから。まずは楽しむことが第一。そういう中からいろんなアイデアも湧いてくると思うし。あそこにいたら、下手すると撮りたいものも撮れずに卒業ってことになっちゃうからね。それじゃあ意味無いじゃない？」

そっか、二人っきりのサークルなのか。だからお金もなくてカメラも小さいやつなのね。

「今回の話だってあのままあそこにいたら多分頼まれなかったし。これでバンドのメンバーが気に入ってくれたら、そこから他のバンドも『ウチのプロモーションビデオも撮ってくれ』なんてことになるかもしれないしね。そうやって色んなジャンルの人たちと映像作っていったら面白いかなって」

「じゃ、じゃあ私、結構責任重大ですね……」

「大丈夫だって！ そんな硬くならなくていいから。自然体でいてくれるのが一番」

「せせせセリフとかあるんでしょうか？ 今から発声練習とか腹式呼吸とか……」

私は正面を向き、大きく口を開けてあーえーいーうーえーおーと声を出してみる。

「ないない！ だって音楽が乗っかるんだから」

「あ、そっか」

「ただちよつと肉体的にハードかも……」

「え！？　そうなんですか！？」

「あはは、まあでも千夏ちゃん若いんだから問題ないと思うけど」

肉体的にハード……何だろう？　まさかソルフエージュ連続10セツトとか……あ、今回は爽やか系だからそういうのじゃないよね。まあいいわ。京助さんの未来は私の双肩にかかっているも同然！　納得いくまで何度でも撮り直して頂戴！

やがて車は高速を降りて一般道に入り、前方に海が現れた。なぜ人は海が見えてくると気持ちが昂ぶるのだろうか？　やはりDNAは母なる海に帰ることを望んでいるから？　そして京助さんは一軒の民家の前で車を止めた。

「ふわわわわ、着いたのか？　おい、良太起きろ！　到着っぽいぞ！」

龍馬が大きな欠伸をした。ネチっ子は涎を垂らして爆睡。

「ここがお世話になる民宿ね」

「ここ……ですか？　どうみても普通の家にしか見えませんが……」

私たちの目の前には、お盆に帰ったときの両親の実家のような、大きいけれど別にこれといって特筆すべき点の見当たらない、ごく普通の一軒家が建っていた。

「老夫婦が二人で住んでるんだけどね、夏の間だけ民宿として宿を提供してるんだ。でも宣伝とかしてるわけじゃないから口コミで知

る人ぞ知るって感じだね」

「ねえ千夏ちゃん、見に行こう？ 海」

「わわわちよっと香織さん……」

私は香織さんに引っ張られ、夏季限定民宿のすぐ前にある砂浜に連れて行かれた。京助さんが穴場というだけあって、人はほとんどいない。三日月のように湾曲した砂浜は、2〜300メートルくらいの長さだろうか、両脇を岩場で区切られていて、プライベートビーチさながらである。

「わあ素敵！」

香織さんが言うように、ゴミもほとんどなくて、波と風の音と、ときおりカモメの鳴き声が聞こえるだけの、静かな砂浜だった。

「こんなところで千夏ちゃんとエッチしたら最高に気持ちいいんだろうな」

だから何でだよ……

そんな優しさ見せたらもう知らない

「お世話になります」

「はいはいいらっしゃい」

私たちが荷物を持って民宿の玄関を開けると、柔らかな、仲の良さそうな老夫婦が出迎えてくれた。

「お部屋は二階ね。お食事は七時でいいかしら？ お風呂はいつでも入れるようにしてあるから。それじゃあごゆっくり」

それだけ言うと二人は部屋の奥へと戻って行った。みしみしと音を立てながら階段を上がり、板張りの廊下を歩く。突き当たりの入り口を開けるとそこは二十畳ほどの部屋が二つ並んでいた。真ん中は襖で仕切れるようになっている。

「凄ーい、広ーい！」

香織さんは荷物を投げ出すと、いきなり畳の上をごろごろと転がりました。それに倣ってバカとネチっ子も転がりだす。小学生かっっ！

「まあ基本雑魚寝なんだけど、一応奥が女子、手前が男子の部屋ってことでいいか？」

ボサ男が確認のため、私と香織さんを見る。

「うんうん！ 良い良い！」

香織さんが手を叩いて飛び跳ねる。

「え、いや、それはちょっとまずいんじゃない?」
「何でまずいんだ?」

龍馬と田倉がにやにやしながら聞く。くっそう、こいつら……

「まずくないわよね?」　じゃあ女子チームはさっそく布団敷きましようか、千夏ちゃん?」

香織さんは私の背中を奥の部屋へと押し込むと、ぴしゃりと襖を閉めてしまった。

「んふふようやく二人つきりね!」

そして絡みつく視線で私に抱きつきエロエロフレンチキス炸裂!というところで隣からノックと共にボサ男の声がした。

「おゝい、すぐ撮り始めるから。制服に着替えといて」

「は、はい!　ちょ、香織さん、ダメですってば!」

「着替えるんでしょ?　じゃあ手伝ってあげる」

「だ、大丈夫です……あ!」

「ほら、バンザイして」

「じ、自分でやりま……ああ!!」

「あら、千夏ちゃんどうしたの?　パンツもびっしりよ?　取り替えた方がいいわ」

「と、取り替えませ……ああ!!」

「ついでにブラジャーも外しとく?」

「な、何ですか……あああ!!」

「うふふ冗談よ」

「冗談って、外してるじゃないです……ああああ!!」

「はーい、じゃあ靴下履かせてあげますからねー」

「そ、そんな格好しなくても履けま……あああああ！……！！！！！」
「じゃ、早く準備してねー」

結局香織さんは私を裸にし、右足だけ、しかも途中まで紺のハイソックスを履かせただけという意味不明の格好をさせたまま、部屋を出て行った。これから撮影だというのにちよーぐったり……呼吸を整えて制服を着て男部屋に行くと、バカとネチっ子が妙に爽やかな笑顔で出迎えた。

二人とも私の顔を見て大きく頷き、右手をぐっと握り親指を立ててバッチグーのサイン。こいつらまさか、私と香織さんの音声のみでソルフエージュしたんじゃ……

「準備オッケー？　じゃあ行こうか」

ばん、と京助さんが手を叩く。あああ京助さんの前で痴態を晒してしまった……つーか京助さんは香織さんが私とこんなことをしているのをどう思っているんだろうか。別れたからもう関係ないのかな……でもまだ一緒に住んでるんだよね。ということとは、今でもエッチしてる可能性もあるわけで……ああ！　もう！　よく分かんない！　とにかく今は撮影に集中しよう！

「千夏ちゃん、とりあえず走ってみようか」

カメラを構えた京助さんが爽やかに言う。私は砂浜をたったたつと軽やかにジョギングした。

「あーそうじゃなくって、全力で往復して」

え？ 全力っすか？ まあそうだよ。こんなヌルい走りは要らないよね。私は人気の無い砂浜を岩場まで走り、折り返して反対側の岩場まで思いっきりダッシュした。既に陽は高くカンカン照りの上に、砂に足を取られ普通に走るより十倍疲れる。汗ダダーである。しかしこれも愛する京助さんのため、負けてなるものか。

「オッケー！ 良い感じ良い感じ」

300メートル級の砂浜を三往復半してようやくお許しが出た。膝がぐくぐだ。そのまま砂の上に崩れ落ちた。聞こえてきたきちゃっきやと言う声にふと視線を上げると、カメラの後ろでバカとネチっ子と香織さんが膨らませたビーチボールで遊んでいる。しかもいつの間に着替えたのか、三人とも水着だ。くっそーお前ら、後で覚えておけよ……と睨みを利かせていると近付いてきた足が目の前で止まった。

「千夏ちゃん、大丈夫？ ちょっと休みなよ」

しゃがんで私の顔を覗き込んだのは誰だろう京助さんである。しかも冷え冷えのポカリと乾いたタオルを持って。京助さん……ただでさえ好きなのに、そんな優しさ見せたらもう知らないからね！

この時点で元気百倍である。渡されたポカリスウェット500ミリリットルをぐんぐんと一気に飲み干してタオルで汗を拭う。私は何度打ちのめされようともファイティングポーズをとり続ける明日のジョーの如く立ち上がり、完全復活したのだった。

「大丈夫でっす！ なんとって現役ピチピチ女子高生ですから！ さあ次行きましょう！」

遙か百万億度の彼方の星のように

しかしその後の撮影は容赦なかった。飛んだり跳ねたり踊ったり、ラジオ体操第一第二に腕立て伏せや腹筋背筋スクワット、走り幅跳びに反復横飛び、果てはスライディングまでさせられた。

爽やかな笑顔で次々と過酷な指示を出す京助さんが次第にビリー隊長に見えてきた。ああ、こんなことなら強がらずに休んでおけば良かった。京助さんに膝枕してもらってお昼寝したい……とついに力尽きて私は砂浜に寝転がった。もう無理です。もう限界です。私は普通の女の子に戻ります……

「今日はこのくらいにしておこうか」

砂を噛み、閉じかけた瞼に映ったのは、優しい京助さんの顔だった。そして差し延べられた手を見詰める。京助さん自ら手を繋ぐチャンスをくれたのに、なのにもう腕が上がらない……すぐ目の前にある大きな手が、遙か百万億度の彼方の星のように遠い……

「立てる？」

「立てません」

今の私の肉体で唯一正常に動かせる口ではっきりとそう言った。すると京助さんは私の身体を支えながら起こし、腕や顔や制服についた砂をはらってくれた。そして背中を私に向けたと思ったら、私の身体が宙に浮いた。おぶってくれたのだ。

「とりあえず宿に戻ろうか」

そういえば遊んでいた三人の姿が見当たらないな、と振り返ると、既に海の中ではしゃぎまわっていた。撮影終了と共に海に入ったのだろう。

しかし今の私は世界中のどんな身勝手な人間も許せるほど穏やかな気持ちだ。大好きな人に優しく背負われているのだから。これ以上のほんわかした幸福感はなかなか得られまい。私は京助さんの、シャンプーと少し日に焼けた匂いのする髪に鼻を埋めた。

京助さんはそのまま民宿の玄関を上がり、二階の部屋まで運んでくれた。そして畳の上に私を横たえる。

「シャワー浴びてきた方がいいんじゃない？」

確かに。身体中汗まみれの砂まみれだ。でももう動きたくないや……潮の匂いのする心地良い風が波の音と共に私の髪をさわさわと撫でる。瞼が重くなり、うとうととしかけたところで唇に柔らかい物が触れた。ああ、京助さん……やっぱり私のこと……

京助さんは何度か軽く唇を触れさせると、ゆっくりと私の制服を脱がせ始めた。そんな恥ずかしい……しかし小指も動かせないほど疲労困憊の私は抵抗できない。いや、例え元気だとしても京助さんが求めるなら抵抗する気などないのだ。下着も脱がされ、裸になった私。まどろむ中で、京助さんの唇が、手が、私の身体中に優しく撫でる。疲れと眠気と気持ち良さで、私の心と身体は完全にとろけてしまっている。

ふえらちおよりもキスとエッチが先になりそうだが、そんなこともうどうでもよかった。この時よ、永遠に続け、と京助さんに身を委

ねていると頭の上で声がした。

「うふふ可愛い、千夏ちゃん」

これは……女の人の声！？ はっと目を開けると、逆さまの顔があった。真上から見下ろしていたのは、膝枕をしながら私の髪を撫でていた香織さんだった。

「かかか香織さん！？ あれ、京助さんは！？」

「下でみんなとお茶飲んでるわよ」

「いいいつの間に入れ替わったんですか！？」

「え？ そうねえ三十分くらい前かしら。京助に聞いたら部屋で寝てるって言うから様子見に来たの。さっきからあんなことこんなことしてるのに、全然起きないんだもん。よっぽど疲れたのね」

何ということだ。夢うつつの中での情事は愛する京助さんとはなく香織さんだっただなんて……やはり現実はそう都合良くはいかないのね。

「これからみなでお昼食へに行くことにしたから、その前に汗流してきたら？ あ、あと明日も撮るみたいだから制服洗っというあげるね」

またも裸の私を残し、香織さんは私の制服を持って部屋から出て行った。

あーこれから出かけるのか、ダルいなあ……私はウチのよりは大きいけれど、それでもやっぱり一般家庭用の域を出ない湯船に浸かりながら思う。中学校の修学旅行以来の早起きをして車で二時間の移動に加え、香織さんに襲われた後のビリーズブートキャンプをこな

したのだ。さっき少し寝たとはいえ未だ疲れは取れない。出来ればこのまま夕食まで眠りたいなあ……

旅行のお趣味はあハダカの付き合いい！

お風呂から上がると立ちくらみがして脱衣所でしばらくへたり込んだ。あ、そうだ、ちよつと疲れたから私のことは気にせずみんなで行ってきてって言えばいいのか。そうだそうしよう。

でも待てよ。そうすると「えー！？ 千夏ちゃん大丈夫？ 私が見病してあげる」って香織さんが残りそうだな……これ以上香織さんに攻められたら正直持たない。ここでの第一希望は、「無理させてごめんね千夏ちゃん。僕が添い寝してあげる」って京助さんが責任を感じて言い出してくれることなのだが、そう上手くは行くまい……あーもうどうでもいいや。とにかく今は寝たいの！

「私部屋で休んでるのでみなさんで行ってきてください」

お風呂から上がり、食堂でまったりしている面々にそう告げた。すると案の定、香織さんが「大丈夫？ 具合悪くなったら大変だから私が付いてあげる」と言い出した。すると「いや、僕がちよつと無理言い過ぎたから僕が見てるよ」と京助さん。おお！ これはひよつとして第一希望が叶うのか？

しかし更にボサ男が発言。「いやいや今回の企画の責任は俺にある。だから俺が責任持って看病する。お前らは食事に行つて来い」と見かけからは想像できない責任感溢れる発言。更に更に龍馬が「いやいやいや、ここは普段から岡崎の扱いに慣れているオレ達に任せてください」と力強く言った。

ああみんなありがとう。たくさんの人に愛されて私は幸せです……
これも全て私がラブリーキュートガールなお陰なのです。お父さんお母さんに感謝します……ということで誰もが私の面倒を見ることを譲らず、結局お昼ご飯に行くのは中止になってしまった。ごめんよみんな。

部屋に戻りボサ男が敷いてくれた布団に横たわる。すると全員が、私の布団を中心に車座になった。いやそれはちよつと落ち着かないんですけど……四方から見詰められて眠るなんて何だか悪い夢見そうだなあ……などと思う間もなく私の意識は遠退いていった。

眠りが浅くなってきたところで身体に圧迫感。お腹が重い……何か
が私の身体に乗っかっている。しかし朦朧とする意識の中、瞼は開かず身体も動かない。するとその物体は徐々に上へ上へと移動してきた。私の唇と鼻の頭に生暖かく湿った感触。どうやら顔を舐められているようだ。ということは、これは……

「もう、香織さん、いい加減にして……」

と、目を開けると、そこにあつたのは香織さんとは似ても似つかぬ顔だった。ひよろひよろと長く伸びた白い髭、小さな口と桃色の濡れた三角形の鼻、頭の上に付いた垂れた耳。私が目を開けると、そいつは手で頬をぽんぽんと叩いた。白と茶色の毛に覆われたその正体は猫である。

「お前、どっから来たんだ!? うにやうにやうにや」

突如現れた可愛らしい訪問者に疲れも癒される。手を握っても嫌が

らないので、私はニクキュウをぷにぷにぷにして楽しんだ。

「ここの猫だよ」

その声に振り向くと京助さんが寝そべったまま肘をついて枕にしていた。改めて部屋を見渡すと全員寝ている。全く、看病してくれるとか言ったくせに……っーか京助さんも寝てたのね。まあ静かだし風も気持ち良いし、仕方ないか。窓の外では空がオレンジから赤へのグラデーションを作っていた。もうすぐ夜が訪れる。結構な時間寝ていたらしい。

「へー猫飼ってたんですね。気付かなかった。それにしても人懐こくて可愛いですね。名前は何ていうんですか？」

ちよっとぽっちゃりの猫を立たせて、それぞれの手と握手。そのまま抱き上げてみる。結構重かった。ふさふさの毛を撫でまくる。

「名前のことは親父さんの話を聞くといいよ」

意味深に微笑む京助さん。何だろう、何か秘密でもあるのかな？首を傾げて愛らしい顔をまじまじと見詰めていると、猫は私の手の中からすると抜けた。そして寝ている面々の、それぞれの顔を一舐めずつして部屋を出て行った。それを合図に、全員が目覚めます。

「お、いつの間にか寝ちまったな……腹減った……メシの前に風呂に入ってくるか」

上半身を起こした龍馬が寝ぼけた目を擦りながらバッグからタオルを取り出す。立ち上がり部屋を出るところで「僕も行くう」とネチっ子が追いかけていった。「何だよ！狭いんだからオレが出てか

らにしる！」と突き放す龍馬に、「旅行のお趣味はあハダカの付き合いい！」と訳の分からない叫び声をあげるネチっ子。二人はやかましく階段を下りて行った。仲良しだなあ。

香織さんは猫に舐められて一度は起きかけたが再び横になって目を閉じている。ボサ男は部屋の隅でタバコをふかし煙で輪っかを作る練習をしている。隣で雑誌を読んでいた京助さんが立ち上がって部屋を出ようとした。

「どこ行くんですか？」

「ん、ちょっと散歩」

「あ、私もお供していいですか？」

京助さんは軽く頷き歩き出す。私はその背中を追った。

ようし良い風向きだ！ 北北東に進路を取れ！

夕焼け空の下、波の穏やかな砂浜を並んで歩く。京助さんは沈思黙考、何も語らず。

沈みかけたオレンジ色の光が照らす、京助さんの顔を見上げる。甘過ぎずそして辛過ぎない理想的なマスク。何て素敵なのかしら……でも、と私は思う。でも京助さんのこと、ほとんど何も知らないのよね、私。

知っていることといえば、ジョル大生ということと、映画サークル部長ということくらい。あ、あと香織さんと同棲していることか。ま、別にね、好きな食べ物とか嫌いな食べ物とか聞いたところでね、ふーんそうなんですかーって感じだしね。

そんなことよりも京助さん、やっぱり香織さんのこと好きなのかな……そう言えばここに来てから香織さんと会話してるところってほんとに見えないなあ。

香織さんは今、私に夢中なわけで、仮に京助さんがまだ香織さんに未練があるとしたら、京助さんにとって私は嫉妬の対象ということになる？　というか、香織さんは私が好き、私は京助さんが好き、で京助さんが香織さんを好きだとしたら、見事に片想いトライアングルの完成じゃない……恋の一方通行、人生は残酷だ。

憶測で物事を進めても仕方がない。ようし、ここは一つはつきりさせようじゃありませんか。外野の大勢いる今回の合宿、二人でゆっくり話せる機会はそう多くはないからね。

「京助さん」

「ん？」

「香織さんのこと、その、まだ好きなんですか？」

立ち止まって困惑したような顔で私を見る京助さん。やっぱり……

「千夏ちゃん、何言ってるの？」

「だってまだ一緒に暮らしてるんですよ？」

「確かに一緒に住んでるけど……」

「香織さんはもう、お互いの気持ち冷めてきた、みたいなことを言っていたんですけど、違うんですか？」

すると京助さんは、きょとんとした表情の後、いきなり笑い出した。

「な、何で笑うんですか！？ 私は真剣に話を……」

「あはは、ごめんごめん。だって冷めるも何も、香織は僕の妹だよ」
「？」

え？ イモウト？

「あいつはさあ、ときどき意味もなく嘘をつくから気を付けて。そっか、千夏ちゃんにはそんな風に言ってたのか」

ななな！？ 何だって香織さんは私にそんな嘘を……くそう！ してやられた！ あの女、後で覚えてろよ……いや、今はそんなことはどうでもいい。とうことは京助さんと香織さんは恋人同士ではないことが確定したのだ。これで少なくともややこしい恋の三角定規は回避できた。では更なる質問を続けようではないか。核心に触れ

るクエスチョンを。

「あの、京助さんて、かかか彼女いるんですか？」

きゃー！ 聞いちゃった！ ついに聞いちゃった！ だけどこれで彼女いるって言われたらどうしよう……いや、恋は戦争よ！ ラブ・イズ・ウォーよ！ 彼女がいたらいたで奪うべし！ 人生は短いのよ！ もし「いる」って言われたら、このまま押し倒してのふえらちおに持っていくしかないな。

「彼女はいないよ」

え！？ ホントですか！？ 男に二言はないですよ？ ややややった！ ようし良い風向きだ！ 北北東に進路を取れ！ 天は我に味方している。このまま一気にふえらちおへと流れ込んでしまえば、あるいは今晩中にも京助さんから告白される可能性も無きにしも非ず……そしてモンモンとした京助さんは堪らず私の身体を求めて……よっしゃ！ 行くぜ！ 私は京助さんの腕を取り、岩場へ連れ込もうとした。しかしそのとき。

「おーいお二人さーん！ ご飯できたぞー！」

と、宿の方からボサ男が叫ぶ。ちっ。邪魔しやがって……お前も香織さん同様、後で処刑決定ね。

結局またもやのーふえらのまま京助さんと民宿に戻ると、食堂には全員集合していて、テーブルには既に料理が並べてあった。お刺身盛り合わせ、天ぷら、魚の煮付け、炊き込みご飯、味噌汁、胡瓜の漬物。うーん、美味しそう。見た瞬間ぐるるるとお腹が鳴った。

「いっただつきまーす！」

私たちは勢い良く箸を伸ばす。ご飯と味噌汁以外は大皿に盛られているため、油断していると取られてしまう可能性大だ。とりあえず私は大好きなハマチの刺身を三、四枚茶碗に確保した。

「あ！ 岡崎てめえ！ ハマチごっそり取ってるんじゃない！」

「うっさいわね！ そういう龍馬だってさっきから海老天ばかり食べてるじゃない！ 野菜も食べなさいよね！」

「あーやっぱり胡瓜ってえ、漬物の王様だよねえ」

「良太お前！ 胡瓜全部食ってんじゃないよ！ あ！ だから岡崎！ 鰯のたたき、かつさらって行くなって！」

「いいでしょ！ お刺身大好きなんだから！ 龍馬にはツマあげる。ハイ、てんこ盛り盛りね！」

「勝手に乗せん！ ツマだけで食えるわけねーだろ！」

「でえ、茄子はあ漬物の女王様あ」

「だから何でお前は漬物ばっか食ってんだよ！」

「はいはい、喧嘩しないの。なくなったらまた追加してあげるから」

宿のおばあさんが、地獄絵図の様相を呈している私たちの食卓を見て微笑んだ。もっともがつっているのは私たち高校生組みで、大学生組はさすがに大人の貫録、落ち着いて箸を口に運んでいた。おばあさんの言う通り、なくなるとどんどん追加されてくるのが分かり、次第に私たちも落ち着いて食事するようになった。魚も新鮮だし、料理は素朴な味付けだが、どれもこれも美味しかった。

お前はアラビアンキャット

すっかり満足して膨れたお腹をさすっていると、おばあさんが熱いお茶を持ってきてくれた。そして奥の台所から、おじいさんが顔を出す。

「足りんかったらまだ作るけど？」

「もう充分です。ご馳走様でした！　美味しかったです」

そこへさっきの猫がのっそりと食堂に入ってきた。

「あ、そうだ、この猫なんて言う名前なんですか？」

私はおじいさんに尋ねた。猫はお皿に盛られたキャットフードをかきかき食べている。太り気味でダイエット中なのか、少々量が少ないようだ。あつという間に食べ終えたとおばあさんの足元に擦り寄って、更なる餌を催促している。

「おや、そっちのお兄さんがたは去年も来たんだから知っとうが」

おじいさんは京助さんとボサ男の顔を交互に見る。しかし二人はニヤニヤしたまま黙っている。あくまでおじいさんに話をさせる気なのだろう。

「それがですね、教えてくれないんですよ。何か、秘密でもあるんですか？」

「ああ、あのことか。そう、こいつは不思議な猫だな。よし、腹ごなしに話してやろうか」

おじいさんはテーブルに着き、お茶を啜ると話し始めた。

「こいつの名前はな、シャーベットだよ」

「シャーベット？　可愛いけどあんまり名前にするような言葉じゃないですよね……何でなんですか？」

しかしおじいさんは私の質問には答えずに話を進めた。

「こいつが来たのは四年前になるかな。今日みたいに夏の穏やかな海の日だったなあ。ワシが岩場で釣り糸を垂らしていると、海に向こうの方から見慣れない物が近付いて来たんだよ。最初はゴミかなんかがプカプカ浮かんでるのかと思ったんだが、どうも動物らしいことだけは分かった。何かが泳いで来ているとな。」

ようやく確認できるところまで近付いてくると、なんと猫だったんだな。水面から頭だけ出して犬掻きならぬ猫掻きで必死に泳いでくるんだ。ワシは釣竿を放っぱり出して岩場の先端まで駆けてつたよ。そして思わず手を振ったんだな。おーいつて。するとこいつもワシを認めてだな、進路をワシに定めたわけだ。

長い距離を泳いで随分と疲れてたんだろう、何度か沈みかけたんだ。ワシはそりやもう必死で応援したな。頑張れー！　あと少しだ！　ってな。あとほんの数メートルってところに来たとき、ワシは網を取ってきてそれで無事掬ったんだ。こいつはな、海に向こうからはるばる泳いで来たんだよ」

「ええ！？　海に向こうって、ここ太平洋ですよ？　ってことはアメリカから来た……とか？」

「海から来た猫……正にウミネコー！！」

龍馬の渾身の駄洒落はあまりの寒さに完膚なきまでに全員からスル

ーされる。

「ワシも最初はそう思ったんだが、実はこいつはもっと遠くから来たんだよ」

「どこですか？」

「アフリカ大陸の北の方だな」

「アフリカ！？ でも何でそんなことが分かるんですか？」

「シャーベットはな、小瓶を銜えたまま泳いできたんだ」

おじいさんは、青く透き通る、直径3センチ、高さ10センチほどの小瓶を食器棚から取り出してきた。先端の口にはコルクで蓋がしてあり中には紙が入っていた。おじいさんは蓋を開けその折りたたまれた紙を取り出し、テーブルに広げた。無地で厚手の紙は、少し黄ばんでいてところどころ染みがあった。そしてそこにはまるで読むことの出来ない文字のような、模様のようなものが書き連ねてあった。

「これは……何語ですか？」

「ワシも全く分からんでな、息子に聞いてみたんだが、どうもアラビア語らしいんだな」

「あ、そうかあ。アラビア語だからあ北アフリカなんですねえ」

ネチっ子が合点がいったように叫んだ。へえ、アラビア語って北アフリカなんだ。よく知ってるね。

「そう。でな、ついでに息子がアラビア語が元になっている言葉をいくつか教えてくれたんだが、その中で気に入ったのがシャーベットだったんだな。夏に来たこともあって、それを名前にしたってわけだ」

腹を上に向けてごろごろとおねだりをするような格好のシャーベツトを見る。そうか、お前はアラビアンキャットなのか……いやでもなあ、さすがにアフリカから泳いでは来れないよなあ。瓶の中の手紙はアラビア語だから、外国から来たことは間違いないさそうだけど。恐らく船に紛れ込んでいて、ここら辺の近くを通ったときに海に飛び込んだんだろうな。

及川ミッチーも真っ青なほどの超ロマンチックな

「でもさあ、あの手紙何を書いてあるかさあちょー気になるう」

部屋に戻りみんなで布団を敷いているとネチっ子が言った。

「そんなの簡単だ。あれはラブレターだ」

龍馬が自信たっぷり言い切った。

「何で？」

「そりゃあそうだろう。瓶に詰めて猫に託し海に放すなんてロマンチックなことするんだから内容もロマンチックに決まってる。ロマンチックと言えばラブレター」

「単純だなあ」

「何だと！　じゃあ他に何がある？」

「だってさあ、あんな不確かな方法でラブレターを渡そうとするかなあ？　ほぼ100%相手の手には渡らないじゃん。確かに及川ミッチーも真っ青なほどの超ロマンチックな行動ではあるけどさ、もっとうこう、どこの国の誰が見ても納得できるような内容だと思うけど？」

「じゃあ例えは何だよ？」

「うーん、そうだな……世界平和を伝えるメッセージ……とか？」

「世界平和ねえ」

「もしくは願い事が書いてあるとか。きっとエジプト辺りの砂漠の村の七夕的行事でそういうのがあるんだよ。願い事を瓶に詰めて後ろ向きに投げて戻ってこなかったら叶う、みたいな」

「願い事かあ。オナさんいいセンいってるかもお」

「でしょでしょ？」

「あれじゃない？ 文通友達募集」

腕を組んで黙って話を聞いていた香織さんが口を開いた。

「文通ですか？」

「そう。きつとあれを書いた人は、知らない国の誰かと文通したかったのよ。恐らく流した瓶は一つじゃないわね。海に放つんだから途中で沈んだり、永遠に彷徨ったりしてどこにも流れ着かない可能性のほうが大きい。だからきつとたくさんの瓶に自分の住所と名前を記した紙を詰めて流したのよ」

なるほど……それならまだ理解出来るな。

「だったらさ、あんな訳分かんない文字じゃなくてせめて英語で書かないと駄目じゃね？ 実際奇跡的にこのじいさんが拾ったのに解読できないんだから。モヤッと感だけが残るだけじゃねーか」

龍馬が半ば怒り気味に言う。確かにそうだ。せつかくこうして異国の地に手紙が届いても拾った人が解読できなければ意味が無い。まあアラビア語の出来る誰かを探し出せばいいんだろうけど、そこまでする気にもなれないよね……

「千夏ちゃん、これ覚えてくれる？」

枕を抱いてごろごろしていると、京助さんに文字の印刷された紙を渡された。今回の歌の歌詞だ。

「明日さ、歌ってるところを撮りたいんだよね」

「え！？ 私が歌うんですか！？」

「もちろん声は乗らないけど。でも実際に歌わないとリアルじゃないでしょ？」

私は京助さんにMDプレーヤーを手渡された。イヤホンを耳に挿し、何度も再生させる。歌詞を見ながら口ずさみ、覚えたところは見ないようにする。メロディも言葉もシンプルな歌なので、六回目くらいでほぼ暗唱できるようになった。私はその後も寝転がったまま再生を繰り返す。これでもう完璧、と思ったところで瞼が重くなってきた。

朝日の明るさで目が覚めた。耳にささったままのイヤホンを抜き、部屋を見渡す。みんなひどい寝相だった。布団は並べて敷いたのに、体の向きも寝る場所もてんでばらばらだった。

香織さんはタオル地のワンピースを着ているにもかかわらず、膝を立てて見事なM字開脚でパンツ丸見えだ。龍馬に至っては、入り口から上半身だけ外に出ている。布団すらないところでよく寝れるなあ。ぼーっと眺めていると、私はある異変に気付いた。股間が盛り上がっているのだ。

全く龍馬のヤツ、夢でもエッチなことばかり……とネチっ子を見ると同様に盛り上がっている。揃いも揃ってしょうがないわね、これだから発情期の男子高校生は……と、ボサ男を見るとやはり右に倣えである。真面目そうに見えてこの男も意外と……と京助さんを見るとなんとなんと京助さんまで元氣ハツラツだった。あの爽やかさの権化のような京助さんまで……何ということでしょう。四人の男が四人とも寝ながらにしてコーンしているのです。ビフォアフター風に言ってみたりして。

それにしてもこの現象はどう説明すればいいのだろうか？ 世の男性は眠ると必ずエッチな夢を見るのだろうか？ そんなはずないよね……とも言い切れない。なぜなら私は女だからね。女に男の思考回路が100%理解できるはずもなく。

私は布団の上をずりずりと匍匐前進し、一番近くにいるネチっ子の勃起の度合いを右手の指を広げて計る。次にボサ男、龍馬と回って最後に京助さんの股間を測定した。厳正なる審査の結果、最も測定値が大きかったのは……京助さんだった。

「かっちかちやぞ」みたいに筋肉が盛り上がって硬くなったものだ

素敵だわ京助さん。メンズノンの表紙を飾っても違和感のないほどに爽やかなあなたが、穿いているスウェットを突き破りそうなほど元気なペニスの持ち主だったなんて。

ここで私はふと思う。これは正に今世紀最大級のチャンス到来なのではないだろうか？ 今ほど任務を成功させる可能性が限りなく高い瞬間はないのではないだろうか？ このまま京助さんのスウェットとパンツをずり下ろして銜えれば、ふえらちおが出来るのだ。当初あれほど困難を極めると予想されたミッションが、文字通りのミッションインポッシブルが、あっさりと至極簡単に完了してしまうのだ。

しかし本当に大丈夫だろうか？ 事が上手く行き過ぎるときは、必ずやどこかに落とし穴があるはず……は、そうだ、例えこのままふえらちおを強行したとしても、京助さんは夢の中なわけで、ふえらちおに気付かないのではないだろうか？

気付いてもらえなければ当然意味が無い。お姉さまの言うふえらちおの真の目的は、銜えることにあるのではない。相手の裏をかき、奇襲に出ることにより、敵のロマンスの牙城を一気に崩すことにあるのだ。寝込みを襲ったところで何の意味も成さないので……

それと同時に私の中には今、これまでにない欲望が芽を出しむくむくと育ち始めているのも事実だ。それはただひたすら純粋に「好きな人の性器に触れ、口に含んでみたい」という欲求だ。更に許されるならば、この愛しい人の大きくなったペニスを私の鍛え上げた膣に入れて快感に浸りたい。そして一刻も早くバーチャルソルジャー

からの脱却を図りたい。

周りを見渡す。みんな規則正しく寝息を立てていて、まだ誰も起きる気配がない。これは正しく試練だ。目の前の一時の誘惑に負け快楽に身を堕とすか、当初の計画通りに実行し、確実に任務を遂行できるか――

ああ！ もうダメ我慢できない！ このときをどれほど待ち望んで来たことか。私は京助さんに許可なく入れることをたった今決めた！ それじゃ京助さん、失礼しちゃいます、とスウェットとパンツに手をかけ下ろそうとした正にそのときだった。

「千夏ちゃん、何してるのかなー？」

不意に聞こえた声に心臓が凍りつき顔を上げると、いつの間に起きていたのか、壁にもたれた香織さんが不敵な笑みを浮かべ、私を見ていた。

「あーっ！ これはですねえ、何というかそのー！ 人体の神秘についての研究です」

「ええ？ 研究？」

バカにしたように半笑いで問いかける香織さん。いかん、このままでは私が京助さんに夜這いならぬ「朝這い」したことを報告されてしまう。そうしたら京助さんに嫌われてしまうかもしれない……ここは何としても誤魔化さねば。

「そうです。夏休みの自由研究です。テーマは『眠る男は必ずエッチな夢を見るのか？』です」

口から咄嗟に出たにしては上出来じゃない? 「アンドロイドは電気羊の夢を見るか?」的なね。しかし。

「見るわけじゃない」

「な……何で言い切れるんですか! 香織さんだって女なんだから男の夢の中まで分かるわけないでしょ!」

「あのねえ千夏ちゃん、男のペニスが朝大きくなるのは別に興奮しているからじゃないのよ」

「え? 違うんですか?」

「レム睡眠とノンレム睡眠って知ってる?」

「はあ、何となく聞いたことがありますね」

「ノンレム睡眠は深い眠りで脳を休めるの。反対にレム睡眠は浅い眠りで身体を休めるのね。この二つが90分で1セットになって、それを何回か繰り返すのが人間の睡眠なの」

へーそうなんだ。だから六時間くらいの睡眠時間だと寝起きが良いって言うのね。まあ私は十二時間くらい寝たい感じですが。

「目覚める直前は当然浅い眠りだからレム睡眠でしょ? 夢を見るのもこのときね。でね、レム睡眠のときは身体が休んでいる状態だからコントロールが利かないわけ。そうするとね、ペニスに血液が流れ込んで勃起するのよ。だから本当なら朝だけじゃなくてレム睡眠のときはだいたい勃起してることになるわね」

「え!?! 勃起ってペニスに血が流れて起きる現象なんですか!?!」

「そうよ。ペニスには海綿体っていうスポンジ状の組織があって、それに血液が流れ込むと大きくなるの」

そうなのか。勃起とは「かっちかちやぞ」みたいに筋肉が盛り上がって硬くなったものだとばかり思っていたのだが……うーむ、勉強になるな。メモリたい。私が感心していると香織さんはじわじわと

迫ってきた。嫌な予感。

「ち・な・み・に、アサダチは男だけに起きる現象じゃないのよ」

「え……」

「当然でしょ？ 女だってレム睡眠があるんだから、女性器にも血液が流れて勃起するの。千夏ちゃんのここも例外じゃないわよ」

そう言うと香織さんは私の寝巻き代わりの短パンの、太腿から手を差し込んできた。

「あ、ちょ、香織さん、駄目ですってば」

「さっきの痴漢行為、京助にバラすわよ」

「痴漢ってそんな……！」

頬を寄せ耳元で囁きそのまま耳たぶを甘噛み。くそう！ 完全にしくじった！ よりによってこの人に弱みを握られるだなんて……

普通あんなの人生で一回だ

「隣に行こっか」

香織さんはにこにこ顔で奥の女子の部屋に移動する。私も仕方なくついていく。昨日の到着した時点では、男女別々に寝ることになっていたのだが、結局面倒臭くなり男子部屋でみんな雑魚寝をしたのだ。

襖を閉め、ときばきと布団を敷き、香織さんは裸になった。そして私の服も脱がせると後ろから抱きついてきた。背中に柔らかなおっぱいと乳首が感じられる。そしてそのまま私を四つん這いにさせた。今回はフレンチキスはスルーである。香織さんの指が私の敏感な部分を刺激する。

「や……あ！」

「ここね。ここが千夏ちゃんのクリトリス」

「それくらい知ってま……ああ!!」

「ほら、勃起してるでしょ？」

「そ、それは香織さんが触るか……らあああ!!!!」

「声出すとみんな起きちゃうよ？」

「そんなこと言ったって……ああああ!!!!」

「どう？ 私の話、自由研究に使えそう？」

「つ、つか、使えま……す！ ありがとうございまし……たあああああ!!!!!!」

あー……もー……朝から疲れた……

「そう、良かった。じゃ、私お風呂入ってくるから。やっぱり旅の

醍醐味は朝風呂よねえ」

香織さんはノーブラノーパンのまま脱いだワンピースを被ると、るるゝと鼻歌を歌いながら自分の下着を持って出て行った。隣の部屋の男たちはまだ目覚めていないようだった。

今何時だろ？ 部屋には時計が無いのでよく分からないけど、空の感じからしていつも起きるより少し早いくらいかな。このまま起きるかもう一度横になるか考えていると、入り口からひょっこりと愛らしい顔を覗かせている者がいた。シャーベットだ。

「おいで！」

私は男たちを起こさぬように、小声で叫び、両手を広げて思い切りウェルカムのポーズを取る。ああ、何で猫って見るだけでテンション上がるのかな……シャーベットは、未だ入り口で寝ている龍馬のお腹を踏んづけて部屋に入ってきた。

大の字になり仰向けで眠るネチっ子の横を通り過ぎようとしたとき、ぴくん、とヤツの股間が動いた。それを見逃さずに反応したシャーベットは歩みを止め、ネチっ子の股間の前の足の間に腰を下ろした。その不自然なまでの盛り上がり为首を傾げて不思議そうに眺めるシャーベット。

すると再びぴくん、と動いた。一瞬びくつと怯んだシャーベットだったが、得体の知れない物への恐怖心より、猫の本能が勝ったのだろう、シャーベットは前足でネチっ子の股間に一撃を食らわせた。猫パンチである。するとまたぴくんと動き、それを見てシャーベットは手を出す。

ぴくん猫パンチぴくん猫パンチぴくん猫パンチ、と何度も繰り返す。私は笑いを堪えるのに必死だった。できればこの様子をカメラに収め、素人面白ビデオの投稿番組に応募したい。やがてネチっ子の口からううつと呻き声が聞こえてきた。それから股間は動かなくなり、やがて萎んでしまった。レム睡眠が終了したのだろうか。敵を倒し、満足したシャーベットは、にゃ、と小さく鳴くと、来たとき同様龍馬を踏んづけて出て行ってしまった。

「それにしても何で旅行に來ると朝飯いっぱい食っちゃうんだろうな？」

みんなで朝ご飯。龍馬は席を立ち、茶碗に五杯目のご飯をよそっている。内容は日本の宿の朝食の定番、魚の干物、納豆、生卵、海苔、ご飯、味噌汁、梅干、漬物。しかし五杯はいくらなんでも食い過ぎだろ、と思いつつも私も二杯目に突入である。

「それはさあ、ゆっくり出来るからだよね」

ネチっ子が今朝もぼりぼりと全力で漬物を頬張りながら言った。そんなに漬物が好きだとは知らなかった。

「普段は朝ギリギリまで寝ててさあ、のんびり食べてる時間ないからねえ。それよりさあ、僕今朝さあ、夢精しちゃったあ」

味噌汁を片手に持ち、へらへら笑いながらネチっ子は言った。ムセーって何？

「良太マジかよ。今頃？ 遅くね？」

「もちろん第一回目はあ中一のときに済んでるけどねえ」
「ねえねえムセーって何？」

私は男の会話に割り込んだ。

「一回目って、普通あんなの人生で一回だろ？」

「えー？　そうかなあ、大人だってさあ二週間ぐらいさあ我慢してたらさあ溜まりに溜まって出ちゃうんじゃない？」

「ムセーって何ってば！」

ようやく振り向いたネチっ子と龍馬は、私の顔を見るなり溜め息をついた。何だ何だ？

「岡崎お前なあ……はあ」

「オナさあん……はあ」

「な、何よ」

「前から言おうと思っていたことを、今この場ではっきりと言ってやる。岡崎、お前は処女の時代から毎日オナニーするような、この上なくエロい女だけだな、言葉を知らなさ過ぎなんだよ。お前がオナ・マスターであることは認めてやる。だがしかし、それだけだ」

「それだけって？」

「要するにさあ、身体ばっかり鍛えてさあ、勉強は出来ない筋肉バカってことだよ。オナさんは筋トレの代わりに毎日オナニーに励んできた。つまり筋肉バカのエロバージョンだねえ。エロバカ、もしくはオナバカだねえ。もっと色々勉強した方がいいよお」

こ、こいつら黙って聞いてりゃ……

ここはちょっと泣きを入れてみる

「べ、別に知識なんかなくたってエッチは出来るでしょ！」

そこで香織さんが口を挟む。

「あら千夏ちゃん、人間が思考能力や言語を発達させたのは、他ならぬエロスのためなのよ。人間がね、色んな言葉を操ったり想像することが出来るようになったのは、より次元の高い快楽を追い求めてきたからなのよ。インテリジェンスⅡエロスなの」

「そうそう！ 良いこと言った香織さん！」

龍馬が腕を組みうんうん頷いている。ふん、何さ何さ、よってたかって馬鹿にして。

「はいはいそーですか。そりゃー悪うござんした。で？ 結局ムセーって何なのよ」

「夢精は文字通り夢の中で射精することだ」

「夢の中でってことは……ええ！？ 田倉あんた寝たままイっちゃったってこと！？」

「そうだよお。夢の中にさあ、オナさんが出てきたんだよねえ。でさあ、オナさんは手にボクシンググローブをはめてるんだけどねえ、身体が小さいんだよねえ。ちょうど猫くらいかなあ。それでさあ、僕のアソコをサンドバッグ代わりにしてさあ、真剣な顔してビシビシパンチを繰り返すんだけどさあ、小さいから力も大した事なくてえ、逆に凄く気持ちいいんだよねえ」

私はさっきのシャーベットの見事な猫パンチを思い出し、再び笑いが込み上げてきた。うくくくく、こ、こいつは猫に殴られていった

のか……萎んだのはレム睡眠が終わったからじゃなかったのか……だ、ダメだ、まじで腹筋痛くなってきた。腹を抱えたついでにテールブルの下を見るとシャーベットが寝そべっていた。

「どうしたの？ 千夏ちゃん」

香織さんが私の異変に気付く。

「え、あーいえいえなんでもありません……ってそーだ、香織さん！」

京助さんの恋人だなんてよくもまあイケシャーシャーと言ってくれたわね！ と文句を言おうと思ったが、せっかくのみんなで食べる美味しい朝ご飯が台無しになりそうなので、個人的なクレームは空気を読んで止めておいた。うん、私ってオットナ……。しかし香織さんは首を傾げ私の言葉の続きを待っている。

「……猫って可愛いですよね」

「？ そ、そうね。でも千夏ちゃんの方が可愛いわよ」

「そりゃどうも」

何だこの会話。

「よっしゃ千夏ちゃん、いっちょ飛んでみようか」

午前中の陽を浴び、海風に髪をなびかせた京助さんが、どうしようもないくらい爽やかな笑顔で言う。朝食後に一息入れた後、私たちは早速撮影のため海に出た。ボサ男と京助さんに連れて行かれたのは、砂浜の端に位置する、ごつごつとした岩場の上の方だった。ボ

サ男的にはここからダイブする姿をどうしても撮りたいののことだった。

「え、トブんですか……」

何だかんだで3メートルくらいありますよこれ。

「で、でも、万が一水深が浅かったりしたら、死んじゃいますよね？」

「それは大丈夫だ」

ボサ男が胸を張る。

「俺が昨日、反対側の岩場とか、とにかく使えそうな場所を全て潜って確認した結果、ここだけは深いことが分かったから。しかもここだとカメラの位置的にも完璧なんだ」

横で京助さんも頷いている。この二人を一日見ていて思ったんだけど、京助さんがボサ男に意見してるところって見たことないんだよね。言いなりってほどではないんだけど、何か、この二人の空気って、ちよっと普通じゃない感じがする。

「というわけだから、後ろ向きで行ってみようか」

「ええ！？ 後ろ向きって、背中から飛び込むんですか！？」

ただでさえ怖いのに、後ろ向きって……

「それはそうでしょ。上から撮るんだから。岩場の先端に後ろ向きに立って、そのまま海に向かって倒れていって。ちなみに一発勝負だから。制服が濡れちゃったら撮り直しできないからね」

そういうのを余計なプレッシャーっていうんだよ！　と心で悪態をついていると、二人は更に一段高い岩場に上り、カメラを固定している。

「心の準備が出来たら言ってね！」

そんなもん一生出来ませんがな……とりあえず私は恐る恐る先端へと歩を進めた。腹這いになり眼下の海を覗く。波は穏やかだし、大袈裟に騒ぐほどの高さではないのかもしれない。それでも階段を二、三段すっ飛ばすのとは訳が違う。でもまあここまで来たんだからやるしかないか。撮影を快く引き受けたのは自分自身だし。私は立ち上がり、先端の不安定な岩の上に立った。目を閉じ胸の前で腕を組む。すると上から京助さんの声が。

「千夏ちゃん、そんな硬くならないで！　リラックスリラックス！」

くっそー勝手なことばかり……女優って毎日がこんな生活なのかあ、大変なんだなあ。とりあえず目を開けて、腕をだらんと垂らす。……は……す……は……は……は……やっぱ無理。このまま後ろに倒れるなんて有り得ないっしょ。ここはいっちょ泣きを入れてみるか……と諦めかけた瞬間、頭上の岩から何かが私目掛けて飛んできた。

その見覚えのある、全身毛で覆われたそいつは正しくシャーベット！　私と目が合うと、にゃああああ……！！　と叫び、一直線に私の胸に体当たりしてきた。私は驚きと、物理的衝撃で怖さも忘れ、シャーベットを抱えたまま海に飛び込んだ。

対ギヤル曾根用の丼だ

「うーん、シュールだ」

海に突き落とされた私はシャーベットを抱えたまま海から上がると、そのままお風呂に直行した。さっぱりして部屋に戻ってくると、さっきの映像をカメラのまま再生していた京助さんが呟いた。

「お前はホント、海が好きなのねー」

私は隣で何事も無かったかのように欠伸をしているシャーベットを撫でる。あのタイミングで、しかも私に向かって飛び込んでくるなんて、ほとんど奇跡だ。

だいたい、この子がいなかったら私は、罰ゲームで10メートルの飛び込み台に立たされたが、結局怖くて飛び込めず泣きを入れ、非難ごうごう雨あられ、顰蹙買いまくりのKYお笑い芸人のような目で京助さんから見られていたことだろう。感謝の意を込めて、改めてシャーベットの頭をよしよししておく。

今日はみんなでお昼を食べに、車で10分ほど行った場所にある魚料理が評判の、民宿兼食堂に行った。私はおススメの「鯛丼」を注文した。ご飯の上にこれでもかと鯛の刺身が乗っていて、真ん中に卵黄が盛り付けてある。そこに特製の刺身醤油をかけて食べるのだが、少し甘味のある醤油が卵黄と絡み合い、最高に美味しかった。

食べ終えて宿に戻ってくると、次第に雲行きが怪しくなってきた。

「不味いな」

ボサ男が部屋の窓から空を見上げていた。雨が降ることを心配しているのだろう。予定でいくと午後は、私が歌うシーンを撮ることになっている。ボサ男がタバコを銜え、火をつけると、ぽつりぽつりと水滴が水面に落ちてきた。ぼーっと眺めていると、あつという間に雨は強さを増し、ボサ男が一本吸い終える頃には、しとしとと、梅雨時のような本降りになってしまった。

魚料理が美味しいと言っているにも拘らず、カツ丼大盛りを注文したバカとネチっ子は、「まさかあんなデカイ丼で来るなんて……」「あれ絶対さあ対ギヤル曾根用の丼だよお」と苦しそうにお腹をさすって寝転がっている。香織さんはもはや海を諦めたのか、ペディキュアを塗りだした。そして窓辺で静かに相談する京助さんとボサ男。

「千夏ちゃん、雨天決行で」

意見がまとまりミーティングは終了したのだろう、京助さんが私にそう告げた。

「この雨の中撮るってことですか？」

「うん。よく考えたらさ、順番間違えちゃったんだよね。本当なら飛び込む前に歌のシーンを撮るべきだったんだ。そうじゃなきゃ制服使えなくなっちゃうもんね。でも結果的には降ってくれて良かったんだけど」

今さら気付くなよ。っーかせっかくお風呂入ったのにな……

ボサ男と京助さんは、カメラとラジカセと大きいパラソルを持って

砂浜に出た。私は海水に濡れたままの制服に再び袖を通す。物凄く不快だったが、外に出るとすぐにずぶ濡れになり、大して気にならなくなった。履いていても意味が無いと思い、靴と靴下は脱いで玄関に置いてきた。気温は高く、雨も冷たくない。学校の帰り道、突如夕立に見舞われたときのような感覚。私は何だか楽しくなってきた、裸足のままで雨の中、海岸を走り回る。

「好きな人への想いを雨にぶつけるように歌ってみて」

京助さんが、立てたパラソルの下でカメラを三脚に固定しながら言う。折りたたみ式の椅子の上にラジカセを置くと、ボサ男が頷いた。それが合図となり、雨の音に負けないくらい大きなボリュームでイントロが流れ出した。

私は波打ち際に、肩幅よりも大きく脚を広げて立ち、真っ直ぐカメラを見据えた。そして大きく息を吸い込んでから歌い始めた。私はその場から動かず、ただひたすら声を張り上げた。

歌の中の少女の、伝えたくても伝えられない気持ちは、私の京助さんへの想いと重なった。そして音楽が鳴り止んだ。上手く歌えたのだろうか？ カメラから二人に視線を移すと、真っ直ぐ私を見たまま動かない。NGなのかな……髪から水滴を滴らせたまま立っていると、我に返ったようにボサ男が叫んだ。

「サイコーだ！」

夜になると雨が止んだので、夕食の後みんなで花火をした。夜の闇の中、ばちばち光る花火を追いかけ、線香花火の膨れて落ちる玉に手を出すシャーベット。遠くアフリカから海を渡ってやって来た、好奇心旺盛でチャレンジャーなこの猫が運んできた手紙には、一体

何が綴られているのかな……感傷に浸りつつ、次々と火を点けていく。一瞬の煌めきは瞼の裏に残像となり、それさえも儚く消えてしまおう。やがて花火が全部なくなると、綺麗な浜辺を汚さぬように、全て片付けた。

宿に戻る道すがら、私は香織さんを掴まえた。個人的クレームをつけるためである。

「香織さん、何ですぐバレるような嘘をついたんですか？」

「ああ、京助から聞いたのね。何でかな……自分でもよく分かんないけど、嫉妬して欲しかったんだと思う」

「え？」

「だって千夏ちゃん、京助のこと好きなんでしょ？ 自分の好きな相手が違う人間を見てるって切ないものよ。だから私が京助と付き合ってるって言えば、ちょっとは妬いてくれるかなーなんて」

暗くて表情は読み取れなかったが、香織さんの声はいつになく寂しそうだった。

「でもね、京助とは付き合えないわよ。絶対に」

「な、何で言い切れるんですか！？ そんなの分かんないじゃないですか！ それに京助さん、彼女はいないって……」

「彼女ねえ……確かにいないけど。ま、これ以上は私の口からは言えないわ。本人から聞いて」

このままフレンチキスの嵐か！？ と身構えたが、意外にも香織さんは私に背を向けて行ってしまった。

ウォーミングアップが足りないイチロー

部屋に戻り布団を並べて敷く。今日はそれぞれが自分の布団に納まって横になっている。いわゆる川の字だ。順番は入り口に近い方から、京助さん、ボサ男、龍馬、ネチっ子、私、香織さん。

薄明かりの中、私は一番遠くにいる京助さんの方をちらちらと見る。京助さんは顔をこちらに向けている。そしてボサ男は私に後頭部を向けている。つまり二人は向き合っているのだ。嫌な予感がした。さっきの香織さんの言葉を思い出す。

「京助とは付き合えないわよ。絶対に」。そして昨日の京助さんの言葉。「彼女はいないよ」。「彼女は」の「は」が気になる。さらにいつも一緒にボサ男と京助さん、ボサ男の言うことに逆らわない京助さんを思い出す。まさか二人は……いやいやそんなはずないわ。何たって飛ぶ鳥落とす勢いのイケメンジョル大生ですから！……ってそんなこと何の説得力も無いよね。

眠るバカとネチっ子の頭を飛び越して、再び京助さんの方を見ると、恐れていたことが、絶対に見たくない光景が目の前で展開されていた。薄暗い中だが私は見逃さなかった。ボサ男と京助さんが、おやすみのキスをしている場面を。

「お世話になりました」

「はいはいこちらこそ。また来年いらっしやい」

翌朝、宿の玄関でに終始こやかだったおじいさんとおばあさんに挨拶をする。私は昨夜の光景が衝撃的過ぎて、あまり眠れなかった。

昨日の曇天模様とは打って変わって一点の曇りなく晴れ渡る空が恨めしい。がっくりと肩を落としていると、足元にシャーベットが擦り寄ってきた。

「おおシャーベット心の友よ、ハートブレイカーな私を慰めに来てくれたのかい……」

頭と身体を撫でようとしたら、尻尾をびしびしと私の脚に打ちつけ、そのまま手からずりりと抜けて散歩に行ってしまった。しどい……

「じゃあ香織の『り』からね。ハイ！ 龍馬くん」

「り？、り、り、臨時休業」

「うう？ 『う』ねえ……飢え死に……しそうな浦島太郎う！」

「なによそれ。また『う』？ う、う、う、ウォーミングアップが足りないイチロー」

「香織さんこそ何すか。イチローなら寝起きで打席に立っても三割打ちますよ。ろ、ろ、ロマンチックな……ローマ法王！」

「えええまたうう？ 牛い……いや、丑三つ時のお……ウーピーゴールドバーグうう！」

「あははは何それ！ 真っ暗な中からウーピー出て来んの？ 尼さんの格好で歌って踊りながら？ コワい！」

いやいやいいじゃん「ウシ」で。何で色々くっ付けんのよ。帰りの車中でバカとネチっ子と香織さんはしりとりで盛り上がっている。当然そんな気分とは程遠い私は、「放っというてオーラ」を全開にして後ろの席で一人ぐったりとしていた。

運転席のボサ男と助手席の京助さんを交互に見る。この二人がデキてただなんて……はあ。私の恋はまたしても儚く散ってしまった。

男を見る目が無いのかなあ……

京助さんはホモだった。もしくはゲイだった。ホモとゲイって何が違うんだろ？ ジョージマイケルはホモっていうよりゲイっていう方が似合ってる気がする。髭が生えてるから？　ということは京助さんも髭があるからゲイなのか……？

オカマは女の格好をしてる男の人、もしくはオネエ言葉を使う人だよ。カバちゃんとかイツコーさんとか。最近カバちゃん見ないけど。

そんなことより二人が恋人同士ということは、当然エッチもしてるわけで、すると京助さんはボサ男にふえらちおし、ボサ男は京助さんのを銜えている……更に二人のペニスはお互いの肛門に……いやあああああ……！！！！

危うく京助さんの、ボサ男の肛門に出入りしたペニスを口に含むところだったわ。危機一髪で香織さんに救われたわ。感謝。しかし人の好みはそれぞれだもんね。私が勝手に京助さんに恋してただけで、京助さんが悪いわけじゃないもんね。

そうよ、これだけ科学も医学も化学も発達した世の中なんだから、男が男を好きになったって不思議じゃないわ。よし、これからはイオトコが現れたら、好きになる前に確認しよう。「あなたはゲイですか？」と。お姉さま、千夏はまた一つ経験値を上げました。そして。そしてさよなら京助さん、さよならひと夏の恋……

後輩芸人にあっさりと人気を奪われた芸暦二十年の未だ全国区になりきれない彼

「あっちーだりー」

タンクトップに短パンで、私はベッドに大の字だ。真夏の爽やか系セクシーショットですな。表では蝉が大合唱である。窓を開け放し、小学生の頃から愛用している扇風機がカコカコと首を振る自分の部屋で、最近マイブーム全開の「南国白くま」をラッコのようにお腹の上に乗せて、小さい木のへらですくっては食べ、を繰り返していた。既に三つ目だ。また買ってきてストックしておこう。

「夏と冬、どっちが好き？」という、どうでもいい質問が日本人は好きだったりする。「千夏」という名前のお陰で相当の夏大好きっ子に見られがちだが、私は別にどっちも好きではないし嫌いでもない。唯一つ言えるのは、「暑い中でアイスを食べるのが好き」ということ。

撮影旅行から帰ってきて、まだまだ夏休みは始まったばかりにも拘らず、私はすっかりやる気がなくなってしまった。宿題もソルフェージュも。まあね、元々勉強なんてやる気ないけどね。それにソルフェージュに至っては自分で言うのもアレだけど、既に神の域だしね。夏休みだから香織さんからガンガン誘われるのかと思いきや、携帯はウンともスンとも鳴らなかった。

ミッションに失敗し、失恋したことをお姉さまに報告しようかと思ったが、冷静に考えれば考えるほど「これは本当に失恋なのだろうか？」という疑問符が太く濃く大きくなっていった。それは、私は京助さんの、1%、ほんの薄皮一枚を見て「好きになったつもり」になっただけだと気付き始めたから。

想いを伝えてもいなければ断られてもいない。ショックだったけど傷付いたわけではない。失恋ではないということは、私は恋をしたということにならないのだ。ではあれは一体何だったのか？ あれが世に言う、「恋に恋して夢見る少女」状態だったのだろう。

白くまばっかり食べているといい加減お腹を壊すので、三個でやめておこう。今摂取したカロリーを消費するために、当初の予定では公園でジョギングをするつもりだったけど、やっぱりダルいので中止した。運動がダメなら、残る手段は一つしかない。私は机の引き出しを開ける。

一週間ぶりに見るエバとサフバ。そしてところどころと手前に転がってきたコイツは……ローターだ。ソルフエージュ初期にはよく使っていたローターだが、次第にサフバへと移行し、でいるどエバの出現以降は、めっきり出番の減ったローター。

私はその巨大なカプセルの形状のローターを手に取り久し振りにスイッチオン。手の平でぶぶぶと鳴く姿は、後輩芸人にあっさりと人氣を奪われた芸暦二十年の未だ全国区になりきれないベテランコンビが、久々にゴールデンタイムの番組に出演し、本人達は自信满满で新ギャグを披露したのに、受けがイマイチだった時のように哀愁が漂っていた。

何だかちよっぴり切なくて愛おしくなり、私はローターでソルフエージュをすることに決めた。エアコンを入れ、窓を閉める。面倒なので全裸になって、ベッドの上で四つん這い。後ろからローターを当ててみる。

おお、これはこれでなかなか……それはまるで、以前よく聞いていたCDを数年ぶりに引っ張り出してきて、埋もれていた音を改めて発見をしたときのような、懐かしくも新しい感覚によく似ていた。

あとちよつとでいく、というときに、枕元で携帯が鳴った。が、今がクライマックスなわけで着信は当然無視。久し振りのソルフェージュを終え、息が整ってから携帯を開くと、着信は龍馬からだった。

二回目以降は痛みが伴うの

電話を折り返すとすぐに龍馬は出た。

「よう岡崎。一緒に宿題やんねえ？」

「えええ宿題い！？」

「どーせ毎日オナってるだけなんだろう？ 良太も呼ぶからさ、三人で手分けすれば早いじゃん」

「んーまあそう言われればそうだけど……」

「じゃ決まりな！」

一方的に切られてしまった。それにしてもどういう風の吹き回しだろうか？ あの勉強大嫌いなバカ龍馬が、自ら宿題をやるうだなんて。でもまあいっか。いずれやんなきゃいけないんだし。確かに三人で分担すれば労力は三分の一で済むしね。安易な考えで私は着替えて手提げ袋に宿題を詰め込み、龍馬の住む「ニューアフロディーテ」へ向かった。

「龍馬アンタ、騙したわね」

私とネチっ子を誘ったのは宿題のためではなかった。先に来ていたネチっ子は、机に向かう龍馬の隣に椅子を持ってきて、教科書に線を引き引き、あれこれ説明していた。

「頼むよ！ 来週なんだよ追試」

何のことはない、このバカは、一学期の赤点教科の追試に備えて私とネチっ子を家庭教師代わりに呼んだだけなのであった。

「勉強教えて欲しいんなら最初っからそう言いなさいよね！」

「だってお前、オレが正直に言ったら来てくれたか？」

人に教えるなんてダルいから行かないっちゃ行かないけどさ。

「私が来なくたって田倉がいるんだからいいでしょ！」

「それは違うぞ岡崎」

龍馬は椅子に座ったままふんぞり返る。

「何がよ」

「良太は理系が得意、岡崎は文系が得意、だろ？ だからそれぞれ得意分野で力を発揮した方が効率もいいじゃん。それに宿題のことだって嘘じゃない。オレの追試対策が終わったらみんなでやるつもりだったんだから」

「へへへじゃあ聞くけど、龍馬は何の教科を担当してくれるのかな？ 世界史？ 数？？」

「ほ……」

「ほ？」

「保健体育」

「……」

「あ、ゴメン、それは岡崎の方が得意だったな」

笑顔を作りわざとらしく頭を掻く龍馬の頬を、私は無言で張り飛ばした。それを目の当たりにして股間を膨らませるネチっ子。人が殴られても興奮するのかよ……

「まあいいわ。こうなったらちゃっちゃと終わらせて、早く宿題やりましょう」

それから私とネチっ子は一時間毎に交代で、龍馬に数学と英語と古文を休む間もなく教えていった。数学はネチっ子、古文は私、英語は二人で左右からサウンドスピーカーの如く。「腹減った」とか「もう限界だ」という龍馬のグチは一切無視した。トイレ休憩もなし。昼前に来たはずだが、気が付けば時計は午後七時を回っていた。

「ま、まじでもう無理……」

ついに龍馬は机に突っ伏して動かなくなった。それを見て私とネチっ子にも疲れが一気に押し寄せる。脳が疲れると私の身体はソルフェージュを欲するのだ。だから今も結構したい感じなんだけど。そういうば男子はどうなんだろう？ やっぱり毎日するのかな？ 私は目を閉じて両手でこめかみをぐるぐるマッサージしているネチっ子に聞いてみた。

「ねえ田倉ってさ、毎日する？」

「何をお？」

「ソル……じゃなかった、オナニー」

「するよお」

「へえ。それってさ、普通なの？」

「そうだねえ、まあ男はだいたい毎日するんじゃないかなあ」

「ふーん……一日何回くらい？」

「基本的にはあ一回だと思うよお。だあって何回もしたらさあ痛いからねえ」

「え！？ 痛いの！？ どんな風に？」

「んー何て言うかあ、鈍痛う？ 無理に起たせるとアソコがジンジンする感じかなあ。男はさあ、一度精子を放出したらさあ、す

ぐには起たないんだよお。女とは違うんだよお」

知らなかった……私なんか連続で五回くらいはイケるくちなんだけどな。そうか、一度いったら二回目以降は痛みが伴うのか。なんだか可哀想ね、男って。あ、だからお姉さまはしつこく「ふえらちおしてもフィニッシュまで持っていつちゃダメ」って言ったのか。男にとって「いく」ことは結構重大事件だったのね。

「でもさあ不思議だと思わなあい？」

ネチっ子はベッドに腰を下ろし、部屋の冷蔵庫から勝手に取り出したペットボトルのアクエリアスに口を付けている。龍馬は机の上で口を開けて死んだままだ。

「何が？」

私も負けじとカルピスを取り出す。

「人間ってえ何でオナニーするのかあ」

なぜ男は日常的にソルフュージュを行うのか？

「え？ そんなの気持ち良いからに決まってるじゃん」

「そうなんだけどさあ、でもそれだけじゃあない気がするんだよねえ」

いつになく真剣な表情のネチっ子。

「基本的にさあ人間の欲求にはさあ、全て意味があるでしょお？」

「基本的欲求って、食欲とかってこと？」

「そおう。食欲、睡眠欲、性欲。生きるために食べるんだしい、疲れを取るために眠るう。子孫を残すためにせつくすするう。欲求を満たされればさあ、気持ち良いのは当たり前なんだよねえ。つまり、欲求を満たすことが目的であってえ、『気持ち良い』っていう感覚はオマケみたいなもんだと思うんだあ。それなのにさあ、オナニーはさあ、気持ち良くなること自体が目的みたいになってるじゃない？ それってさあとっても不自然な気がするんだよねえ」

結局宿題は出来なかった。涎を垂らして眠る龍馬を置いて私たちは解散した。帰りの電車の中でネチっ子の言っていたことを思い出す。ソルフュージュに目的があるかどうかなんてこれまで考えたことも無かった。ただ単純に快感が得られるから行っていただけだ。ああ見えてネチっ子って色んなことを考えてるんだなあ……ううむ、やっぱヘンなヤツ。

分からないことは聞くか調べるかするしかない。私は電話を取り、美しき姉の番号を押した。

「あらちーちゃん。どう？ 例の彼には何回くらいフェラチオできた？」

「あーそれがですねー」

「もしくは一回で撃チンさせたとか？」

「いやー実は……」

私は京助さんとの顛末をおおまかに話した。

「そう……それは残念だったわね……でも焦っちゃだめよ。いつかちーちゃんにもヴィーナスを背負った運命の人が現れるわ。じゃあね」

「あーあーあー！ ちょっと待ったー！」

「ん？」

「今日電話したのはそのことじゃないの。ソルフエージュには何か意味があるのかなって」

「意味？」

「うん。目的っていうか。ただ気持ち良くなるためだけにするんじゃないような……」

「もちろんあるわよ」

「え、やっぱりそうなの！？ どんなどんな？」

「うふふ、ついにちーちゃんもそこまで考えるようになったのね。

姉として嬉しいわ」

本当はネチっ子が言い出したことは内緒である。

「男の場合は分かりやすいわ。精子の鮮度を保つためよ」

「精子の……鮮度？」

「そう。ある昆虫学者がね、ちーちゃんと同じように、『なぜ男は日常的にソルフエージュを行うのか？』って疑問に思ったわけ。そ

して一つの答えに辿り着いたの。それは『精子には消費期限がある』ということ。だから古くなった精子は排出して、体内には常に新鮮で活きの良い精子を蓄えておかなくてはならないと。男が毎日のようにソルフエージュするのはそのためね」

「鮮度って何か関係あるの？」

「大有りよ。活きの良い精子の方がより深いところまで進めるんだから、古い物より妊娠する確率が高くなるじゃない」

「へ〜」

「それに新鮮な方が頭の良くてイケメンもしくは美人な子が生まれそうでしょ？」

そうかあ？

「だから私は必ず一回ソルフエージュさせてからじゃなきゃ旦那さんとはエッチしなかったのよ」

「ええっ！？ お兄さんはお姉ちゃんとエッチする前には必ず自分でしてたの！？」

「そうよ！そうすれば常に出来立て生まれたてホヤホヤの、元気一杯の精子を受け取れるからね〜」

「あ、でもさ、男の人って連続ですると痛いつて聞いたんだけど」

「ふふん、そのくらいで泣きごと言ってるようじゃあ私のことを愛しているとは言えないわね」

美しき姉って結構ドSなんじゃ……は、まさか私もその血を引いている？

「その代わり、ソルフエージュは私も手伝うわよ！主にフェラチオだけど。あ、ときどき手でもしてあげてたわ」

あの美しき姉に見詰められながら手で擦られるのか……ネチっ子な

んて10秒持つまい。

「あのさ、今思ったんだけど」
「何？」

「1ラウンド目はコンドームで避妊して、2ラウンド目に中で出せば良いんじゃない？　そうすればエッチも二回楽しめるし、活きの良い精子も受け取れる。一石二鳥でメデタシメデタシじゃん」

「やっぱりまだまだ子供ね、ちーちゃん」

「な、何よ」

「いい？　人間のエッチっていうのはね、ただ出したり入れたしてイったら終わりっていう、発情期の動物みたいに単純なものじゃないのよ。最終段階に辿り着くまでの過程を楽しむ、それが人間のエッチなの。他の動物よりも知能が高くなり、道具を使い、言葉を喋り、想像する力が備わったのは、全てより高い次元でエッチをし、快感を高めるためのよ」

どっかで聞いた話だな……

「ソルフエージュ党」を作って政界に

「時間をかけて、イメージネーションを働かせ、お互いの気分が最高潮に達して初めて合体する、これぞ人間のみに与えられた特権なよ」

そうか、お姉さまのふえらちお作戦には、そういう意味合いが込められているのか。

「なるほど」。男がソルフエージュする理由は分かった。じゃあ女の場合は？」

「女はね、なかなか複雑なのよ。そもそも女はみんながみんな、ソルフエージュをするわけじゃないの。ちーちゃんみたいに毎日する人もいれば、週に一回とか、月に一回の人もいるし、全くしない人もいる」

「ええ！？ あんなお手軽で気持ち良くなれるのにしない人がいるの！？ 信じらんない」

ソルフエージュを知らないまま死んでゆく女性がいるとしたら、人生大損だ。もっとソルフエージュの素晴らしさを国民に訴えかけなければ。大きくなったら「ソルフエージュ党」を作って政界に殴りこもうかしら。マニフェストは「毎日ソルフエージュを嗜む淑女には、バイブ、デイルド、ローターのいずれかを無料配布」もしくは「女性用アダルトグッズに市民権を与え、伊勢丹や三越などのデパートの一階で販売する」などなど。

「ちーちゃん、そもそも膣の中の粘液には精子を殺す作用があるって知ってる？」

「何ですと？」

セックスは子孫繁栄のための行為なのに、精子が入り口でいきなり虐殺されるってどういうこと？

「基本的に膣内はバイ菌の繁殖を防ぐために、強い酸性の粘液で守られてるのね。でもその結果、酸は精子の侵入も防ぐ形になってしまった。ソルフエージュをすると当然粘液の分泌量も増える。ということは、ソルフエージュを頻繁に行う女性は、より一層精子の受け入れを拒絶する傾向にある……」

「つまり無意識の内に『妊娠したくない』って思ってるってこと？」「そうね。でもそれって裏を返せば『たくさん男の人とエッチしたい』ってことにもなるのよ」

「どうして？」

「だって、普通、妊娠したら結婚するでしょ？ 結婚したら一般的に考えて夫以外の人間とはエッチしない。つまり単純に考えて、独身女性よりもエッチの頻度は下がる」

そうかなあ、結婚して十年経っても毎日ラブラブな夫婦っていないのかなあ。あ、でも隣で子供が寝てたら思いつき出来ないか。

「えーじゃあさ、妊娠を避けつつたくさん男とたくさんエッチをするためには、膣内殺菌力強化の必要性がある。だからソルフエージュをするってこと？」

「ま、極論だけどね」

「お姉ちゃんは今でもソルフエージュするの？」

「そうね、以前ほどじゃないけどときどきするわ」

「お兄さんと出会った頃は？」

「毎日してた」

「でもデキちゃった」

「そういうこと。なんだかんだでソルフエージュって、男も女も気

持ち良いからするんだと思うわよ」

何だよ、結局振り出しに戻っちゃったじゃないか。半分釈然としな
いまま電話を切り、夕食を食べ、お風呂から出るとメールが来てい
た。京助さんからだった。もう終わったはずなのに、京助さんの名
前を見るだけで一瞬胸が締め付けられる。もしかして……なんて考
えたり。しかし文面は、さほど意外なものではなかった。

「編集終わったから千夏ちゃんに見せたいんだけど、いつがいい？」

二日後、私は池袋のドトールで京助さんを待っていた。カフェラテ
ホットを飲み始めて五分後に究極的爽やか笑顔で現れた京助さんの
背後には、やはりヴィーナスは見えなかった。

「ごめんごめん、待った？」

「いえ、さっき来たばかりです」

ああ、これが愛するダーリンとの会話だったらどんなにか楽しいこ
とか……いや、もういい加減踏ん切らねば。京助さんは私の向かい
に一端荷物を置きアイスコーヒーを買ってくると、鞆からCDを取
り出した。

「いやあ、思ったよりかなり良い仕上がりでさ、バンドの連中も凄
く喜んでくれて。で、これ焼いてきたから」

そう言って私にCD・ROMを手渡す京助さんは、いつになく興奮
気味だ。とりあえず私は無事役目を務め終えたようで、ひとまず安
心。

「今見てみる？ パソコン持ってきたけど」

京助さんはノートパソコンをテーブルに置き、にこにこ私を見る。

「あーどうしようかな……やっぱ帰って一人で見ます」

「そう？ そうだね、苦労したもんね、落ち着いてじっくり見た方がいいかもね。何はともあれありがとうございました。千夏ちゃんのお陰で良い作品が撮れました」

深々と頭を下げる京助さん。

「何かお礼がしたいんだけど……今度食事でもどうかな？」

ああそんなカッコイイ顔でさらりと誘われたら私の決意が……ダメよ千夏、ここで流されたらダメ。この人はゲイなのよ。いくら小指一本で逆立ちしたまま腕立て伏せしたところで、この人があなたのことを好きになる可能性はゼロなのよ、私の中の天使が囁く。

なーに言っちゃってんの！ ゲイだろうが何だろうがアンタまだコイツのこと好きなんでしょ？ ヤリたいんでしょ？ 付き合えなかったっていいじゃない、食事の代わりにエッチしましょうって今すぐ言うのよ！ 私の中の悪魔が囁く。

本当の姿はパンツも脱げないほどの清純派

「い、いえ、そんな、大したことないですよ。それに私も楽しかったし」

辛うじて天使の勝利。

「京助さん」

「ん？」

私は立ち上がり彼に手を差し出した。きょとんとしたままその手を握り返す京助さん。

「ありがとうございました」

ぐっと握手をしてお辞儀をした。そして私は京助さんの顔を見ずに店を出た。これで本当にさようならだ。

『ちょっとアンタ何でしゃばってんのよ！』

『あなたこそ何様のつもり？ 千夏はそんな子じゃないわ！』

『ははん！ 猫被ったってバレバレよ！ こいつは毎日オナってるオナ・マスター・ヨーダなのよ！ ヤリたくってうずうずしてるんだから！』

『それはあなたのような悪魔が取り憑いているせいよ！ 本当の姿はパンツも脱げないほどの清純派なんだから！ ようし、こうなったら出すしかないわね、最終奥義を』

『何い！ そ、その構えは禁断の……』

私の中の天使と悪魔がまだやり合っていた。あの、もう終わったん

ですけど……

家に帰り早速お父さんの部屋へ侵入する。我が岡崎家で唯一DVDを見ることが出来るのは父所有のパソコンしかないのだ。テレビは未だブラウン管で、もちろん地デジ非対応型。附属しているのはDVDプレーヤーではなくビデオデッキである。是非とも草なぎクンには直々に両親を説得しに来て欲しいものだ。

パソコンを起動させて私は固まった。いきなりパスワードだ。自分しか使わないのにパスワードを設定するだなんて……きっとこのパソコンの中にはあれやこれや、家族にも言えないような、卑猥で恥ずかしいモノたちが蠢いているに違いない。

仕方がない、私は適当に打ち込むことにした。お父さんの生年月日、名前をローマ字で、会社の名前、自宅の電話番号、携帯の番号、メールアドレス……おかしいな、あ、そっか、自分のことばかりとは限らないのか。とゆーことは……

私は台所で、恐らく小柳ルミ子の影響だろう、ストレッチをしながら夕食の準備をしているお母さんにチラリと目を向ける。なるほどなるほど。ハニーのね。

お母さんの誕生日、携帯番号、メアド、旧姓……うむむ、おっかしーな……は！ まさかパスワードは愛しい娘の名前！？ やだーダデイったらーメタボのクセしてそんなアメリカナイズされた、シヤれたことしちゃってーとにやけながら私は「china tu」と打ち込んだ。これが正解だったらちよつと感動かも……という思いはあっさり裏切られる。

「お母さん、パソコンのパスワードって知ってる？」

どうしようもないので援軍を頼むことにした。お母さんは右足を流しの上にかけて、爪先までピシッと水平に伸ばしながら超音速で玉葱をスライスしていた。もう少しでソニックブームが発生しそうな勢いである。右手と包丁が残像を描き、切られた玉葱は、一度30センチほどの高さに舞ってからまな板に着地している。美しい放物線。そうか、これがリアル二次曲線なのね……

「ねえお母さんてば」

「ん〜？ ん……っばあ〜はあ……はあ……何？」

「な、何で息止めてんの？」

「玉葱はね、息を止めて切ると泣かなくてすむのよ」

「へ、へ〜そうなんだ。それよりさ、パソコンのパスワード教えて」

「あら千夏、知らないの？」

「うん知らないよ。だって使ったことないし」

「そう……それは残念ね」

それだけ言うとお母さんは再び息を吸い込んで止めて、オニオンスライス、略してオニスラ作成に取り掛かる。いやだから。

「教えてってば」

「私だって知らないわよ」

彼女は息を止めたまま、ヘリウムガスを吸ったときのロボットのような声で、抑揚無く言った。知らないんなら初めからそう言ってよね……仕方ない、お父さんの帰りを待つか。恥ずかしいから出来れば誰にも知られず一人で見たかったんだけどな。

部屋に戻ると着信があった。携帯を開くとネチっ子からだった。珍しい、番号は教えているものの、これまでネチっ子からかかってきたことは一度も無い。

「もしもーし、田倉？」

「あ、オナさあん、出来上がったんでしょお？ こないだのプロモーションビデオお」

「え、何で知ってるの？」

「教えてもらったあ」

「誰に？ 監督？」

「香織さあん」

ナゼ香織さんがネチっ子に……まあいいか。

「さっき京助さんにDVD貰ってきたんだけどまだ見てないんだよね」

「見たい見たあい！ あ、そうだあ、坂ちんところで鑑賞会やろうよお。テレビもさあ液晶で大きいしさあ、音も良いからさあ」

一発目は自分一人だと思ってたんだが、確かにどうせ見るなら画質も音質も良いに越したことは無い。飛行機の中の、小さな画面とイヤホンで映画を見ると、どんな名作も面白さ十分の一になってしまうように、小さなパソコンで見たら感動も薄まってしまうかもしれない。

「よっし！ じゃ明日みんなで見るか！」

水曜の朝、白い金魚は赤い金魚を追いかける

次の日の午前中、私はネチっ子と池袋で待ち合わせてアフロディーテを訪れた。靴を脱いで受付を見ると、そこに聖子さんの姿は無かった。代わりに座っていたのは、大口を開けたバカ面で居眠りする龍馬だった。

「すみませ〜ん、休憩っていくらですか？」

私は窓ガラスを叩いて聞いてみる。その声に身体をビクッとさせて目を覚まし、慌てる龍馬。半分椅子からずり落ちた。

「……ふがつ、あ！ きゅ、休憩ですか？ え〜と二時間で三千円です……って何だお前らか。冷やかしは帰れ帰れ」

寝ぼけた声と顔の龍馬に、私とネチっ子は顔を見合わせて笑った。

「何で龍馬が店番やってんの？ 聖子さんは？」

「ふあゝあ、実家帰ってる。一週間違うだけで飛行機代が半額になるとか何とかで、早めの盆休みだど。ったく親父のヤツ、追試が近いってのにこき使いやがって……でもまあバイト代くれるっていうからいいけど。つーか何しに来たんだ？」

「これこれ、この前撮ったやつ。一緒に見ようよ」

「お！ もう出来上がったのか？ よっしゃ見ようぜ！」

DVDを見せた途端にテンションが上がり、完全に目覚めた龍馬は、受付から出てきた。

「でも受付は？ 放っというていいの？」

「いいっていいってこんなシケたホテル、ドーセ誰も来ないんだから」

龍馬は受付に「御用の方は鳴らしてください。超特急でお伺いいたします」と書かれたメモと、金色で半球形の手の平サイズの、いわゆる「ザ・呼び鈴」的な呼び鈴を置いて、私たちと部屋へ向かった。

DVDを手渡すと、龍馬はプレステ2の本体にセットした。私たちは液晶アコースの正面に、並んで体育座り。

「じゃあ始めるぜ」

龍馬がコントローラーを手に再生させる。

「どきどきするなあ……」

画面が一瞬真っ暗になった後、文字が浮かび上がる。「ビーグルス 水曜の朝、白い金魚は赤い金魚を追いかける」

「どっちがタイトルだ？」

龍馬が腕を組み呟く。えええ一目瞭然でしょうが……と思ったが、よく考えたら私も、バンド名も曲名も知らされてなかったのだった。撮影時に歌詞を渡されたときもタイトルは記されていなかった。

軽快なイントロが始まり画面は明るくなった。そこには、雨の中で半ば睨むようにしてこちらを見詰める私がいた。そして歌いだす。ちょっと切なそうに苦しそうに、想いの全てをぶつけるように。ただ声はもちろん私のものではない。

砂浜で仁王立ちで叫ぶように歌う姿の私が主軸となり、ときおりリズムに合わせて、走っているところ、飛び跳ねる姿、いつの間に撮ったのか思いつき笑い笑っているところ、そして疲れ切ってスローモーションで砂に倒れるところなどが挟み込まれる。あんなにキツかったビリーズブートキャンプは微塵も出てこない。まあ筋トレやラジオ体操の映像を早回しで入れたらコミックバンドになっちゃうか。

軽いギターサウンド中心のシンプルなメロディは心地良く、サビの歌詞も覚えやすい。いつの間にか龍馬とネチっ子も首でリズムを取りながら口ずさんでいる。そして曲が終わりギターの最後の音がフェードアウトしていく。無音になり完全に曲が終わった後に映し出されたのは、私がシャーベットと共にゆっくりと背中からダイブする姿だった。ちょっと驚いた顔でシャーベットを抱きかかえたまま海に沈んだところで映像は終了した。

「おおお爽やかだあああ!!!」

龍馬が叫ぶ。

「凄おいオナさんカッコいいいいいい!!!」

ネチっ子もベッドに上って大はしゃぎ。そして興奮した二人は私の手を取り、ぶんぶん振り回す。しかし私は冷静だった。

「う、うん、想像以上に良かったね」

「何だよ岡崎、こんなカッコよく撮ってもらったのに嬉しくねえのか?」

「嬉しいけどさ、何っーかこれ、私しか出てこないじゃん。普通プロモーションビデオって、少しくらい本人達が登場するもんじゃな

い？　なのにこれ、100%私なんですけど……いいのかなあ？」

予想していたのは、よくあるパターンの、バンドメンバーの演奏しているシーンがメインで、ところどころ私の姿が挟み込まれる、というものだったのだが。

「ええ、そんなのさあ、関係ないと思うよ。要はさあ、音と映像がいかにマッチしているかっていうのがさあ、重要なわけでしょお？　そう考えたらこのビデオはさあ、これでほぼ完璧なんじゃあないかなあ？」

確かに京助さんの作品だから私があれこれ言う筋合いはないし、バンドの人たちも気に入ってたと言ってたからいいのかな。

「そーだそーだ！　カルピスだ！　ポカリだ！」

龍馬が意味不明のことを叫ぶ。

「え？　どゆこと？」

「だーかーらー！　ポカリとかカルピスのCM級に爽やかだっつてんの！　これあれだろ？　ユーチューブで流すんだろ？　全世界同時配信だろ？　ポカリの人が見たら、CMのオフアーとか来るんじゃないね？」

「えええ！？　オナさんついに芸能界デビューうう！？　そのままハリウッドお！？」

お前はどんだけハリウッドデビューさせたいんだ。未だ興奮冷めやらぬ龍馬とネチっ子をよそに、私は、これだけ自分自身が全面に押し出された映像が、ネットで世界中に配信されるのかと思うとちょっぴり不安になった。まあでも無名のバンドの映像だもんね、アク

セスもそんなにないだろうしね、見る人も限られてるよね。

ワンソルフェージュに三十分

二人の熱気に包まれた龍馬の部屋で、あれこれ思いをめぐらせていると、遠くでリンリンリンリンとせわしなく鳴っているのが聞こえてきた。

「誰か来たんじゃない？」

「まじで……あ、ホントだ。ちよつと行ってくる」

受付に行くために龍馬は部屋を出ていった。ネチっ子はベッドから立ち上がるとプレステからDVDを取り出し、ケースにしまった。

「オナさあん、これ貸してえ」

「え？ いいけど……どうすんの？」

「ウチのパソコンでえ、コピーしてくるう」

「何い！？ 田倉あんたパソコン持ってるの？」

「あるよお。高校の入学祝で買って貰ったあ」

「いいな……私も欲しいな」

そうすればこの記念すべき私の晴れ姿を、いつでも好きなときに見ることが出来るのに。まあ別に毎日見るわけじゃないけど。それに「自分専用のパソコンがある」っていうだけで、頭良くなった気分になれそうだし。何となく。

「田倉は何に使ってんの？ パソコン」

「えー？ そうだねえ、基本はエロ動画見てるかなあ」

やっぱりな……

「でもさ、ああいうのってお金かかるんじゃないの？ 大丈夫？」

「平気だよお。ほとんどのアダルトサイトはさあ、無料のお試し版があるからねえ」

「お試し？」

「うん。三分くらいの短い動画がいくつかあってえ、タダでダウンロード出来るんだよねえ」

「ああ、要するに予告みたいな感じでしょ？ ハイライト的な映像を見せて、さあここから！ ってところで終わっちゃって、欲求不満にさせて購入させるっていう手口。そんなんでよく満足できるね」
「それがさあ、そうでもないんだなあ。ハイライトっていうよりは分割だねえ」

「分割？」

「そおう。分かりやすく言うとお、三十分モノのビデオがあるとするでしょお？ そうしたらそれを毎日三分ずつ公開していくってことお。でもタダで見れる代わりにさあ、公開してる期間は割と短いんだよねえ。例えばさあ、オナさんがさあ、三十分オナニーしてる動画があるとするでしょお？」

何で私を例えに出すんだよ。しかもワンソルフエージュに三十分もかけるわけないだろっ！！

「それをお、チャプター1からチャプター10まで分割するう。当然1から順に公開するんだけどさあ、それぞれが三日とか一週間とかしか公開してないんだよねえ。だからチャプター4が見れる頃には1はもう終了してるう。そして当然その頃にはまだ9とか10は見れないんだよねえ」

「ああなるほど。要するに焦らされてるわけね。それを全部一気に見たいと思ったら購入するしかない」と

「そういうことお。まあでもさあ、そんな問題はさあ、毎日チェックしてればなんてことないんだよねえ。もちろんさあ、会員しか見

れない動画もあるからねえ、それを見たかったらお金払うしかないんだけどお。僕は無料版で充分だねえ」

ふうん、そうなのか。

「でもお、最近の僕はあもっばら動画投稿サイトだねえ」

「アダルトサイトと何が違うの？」

「普通のアダルトサイトはさあ、サイトごとにさあ、ジャンルが決まってるんだよねえ」

「ジャンル？」

「素人モノとか女子高生とか人妻とかOLとかロリータとかあ。だから色々なジャンルを見たいと思ったらあ、それぞれのホームページを開かなきゃならなくてえ、これが結構面倒だったりするんだあ」

「投稿サイトは違うの？」

「違うんだなあ。それぞれのジャンルが勢揃いしててとっても便利なんだよねえ。もちろんちゃんと分類されてるよお。しかもいろんな人が投稿するからあ、毎日たくさん新しい動画がアップされててえ、飽きることもないしねえ」

「あのだ、基本的なこと聞いて良い？」

「なあに？」

「ジャンル分けてそんなに重要なわけ？」

結局は男と女がセックスしてる映像なんでしょ？ どれほどの違いがあるっていうのさ。

男って全員おっぱいの大きな女の子が好き

「もぉ〜オナさぁん、しっかりしてよぉ」

ネチっ子は腰に両手を当てて頬を膨らませている。私が同じポーズをすれば「チャーミングかつキュートに怒る女子高生」だが、ネチっ子がやると、残念ながら気持ち悪いだけだ。

「熟女好きがさぁロリータモノ見ないでしょぉ？ S Mが嫌いな人だっているでしょぉ？ 盗撮にしか興奮しない人だっているでしょぉ？ 巨乳が好きじゃない男だっているでしょぉ？」

「え！？ 男って全員おっぱいの大きな女の子が好きなんじゃないの？」

「ええええええ！！？？ そんなところから説明しなきゃいけないのぉ？」

「す、すみません……」

って何で謝んなきゃいけないのよ！

「巨乳はさぁパツと見目を引くから思わず見ちゃうだけでえ、胸の大きなことがぁ、その女の子のことを好きになる要素にはならないんだよぉ」

「で、でもグラビアアイドルはみんな胸おっきいじゃない」

「だあってあれは完全にビジュアル100%だもん。芸能人なんだからさぁ、好きとか嫌いとかとは全然別次元の話でしょぉ？ 単純に見ただけで勝負なんだからぁ、顔が良くてスタイルがいいのは当たり前、その上ある程度のおっぱいの大きさは無いと受けないからねえ」

そうなんだ……良かった。私は自分のやや小振りの胸を見下ろして、文字通り胸を撫で下ろす。

「でえ、僕の見てる投稿サイトはあ、巨乳、貧乳、素人、美少女、ロリータ、OL、人妻、熟女、女子高生、コスプレ、痴漢、盗撮、野外、SM、スカトロ、バイオレンス、フェチ、レズ、ゲイ、自画撮りの二十項目に分かれてるわけえ。それでさあ、その日の気分に合わせてチョイスするか、もしくはハシゴするって感じかなあ」

「ハシゴって？」

「色んなジャンルのをバーツとさらって行って、一番グつときたところで抜くってことお」

「ねえ、ゲイとかもあるんだ？」

「あるよお。もちろん僕はパスだけどねえ。あとスカトロも無理。一度興味本位で覗いていたけどさあ、ヤツら本気で飲んだり食べたり塗りとくったりするからねえ。しかも笑顔でえ。とてもじゃないけど見てらんないなあ。それとSMもさあ、結局は縛ってばかりでワンパターンだからねえ、本当のSMってさあもっと違う気がするんだけどなあ……」

ネチっ子が遠い目をしている。確かに一般的な認識としてのSMは、縄で縛ってロウソクを垂らすとか、女王様が鞭を振るうとかだけど、私もそれだけじゃないような気はする。本当のSMってなんだろう？

そういえば龍馬のヤツ遅いなあ。何やってんだろ？ 団体様でも来たのかな？ とそこへ慌ただしく部屋に戻って来た龍馬はなぜか半べそを掻いている。

「頼むく助けてくれく」

「お帰り。遅かったね、どうしたの？ 外人の団体ツアー客でも来

た？ 『オオウ！ コレガ！ ニッポンノ！ トラディショナル
ホテル デスカ！』とか言って」

「アホか！ 違ーよ！ いくらダメだっつっても全然帰らねーんだ
よあいっら！ 岡崎お前説得してくれ！」

訳が分からず受付に行ってみると、そこには黄色く丸い帽子を被り、
ランドセルを背負った男の子と女の子がしっかりと手を繋ぎ、背筋
を伸ばして並んで立っていた。

そんな前からラブホに行く計画を

「えっと、彼らはいわゆる小学生……だよな？」

私は龍馬の耳元で一応確認する。背の低い大人のコスプレという可能性も、万に一つは有り得るかもしれないからね。しかし龍馬は大いに頷いた。

「ここがラブホって知ってて来てるわけ？」

小声でもう一度確認。親とはぐれ、道に迷って助けを求めに来ただけかも知れないからね。だが、さらに大きく頷く龍馬。メガネをかけた男の子と、肩まで伸びた真っ直ぐな黒髪が印象的な女の子。二人とも利発そうな顔をしている。きっと優等生だろう。学級委員長と副委員長といった感じだ。

「どうしたのかな？」

私はなるべく威圧感を与えないように、頑張ってキュートスウィートスマイルを作り、膝に手をつき屈んで優しく話しかける。

「ですから先程からそちらのお兄さんに何度も説明しているように、僕たちは深く深く愛し合っているのです。将来結婚の約束もしているのです。れっきとした恋人同士なのです。それなのに小学生であるという理由だけで性行為が許されないなんて、そんな理不尽なことがあっていいのでしょうか？」

男の子は書いてきた文章を読み上げるようにはっきりと言い放った。青年の主張ならぬ少年の主張。続きまして少女の主張。どうぞ。

「そうです。ママとマーくんは六年間クラスも一緒、席も隣同士、お互いの家も歩いて三分以内、そして何より」

少女ママはそこで言葉を切り、大きく息を吸った。そして。

「苗字が二人とも佐藤なのです。現代の物質的には恵まれたけれども幸せを感じている人が少ない日本の社会の中で、こんな偶然あるでしょうか？　これはもう奇跡と呼ぶに相応しいのです！　森進一と森昌子のように、結婚したって苗字は変わらないのです！　しかもイニシャルも同じMS!」

背伸びをしながら一際大きな声で言い放つママ。なるほど佐藤さんですか……奇跡ねえ。日本にはかなりの数の佐藤さんがいらっしやると思うのですが……

「つまりあなたたちは、その、エッチがしたいってこと？」

一度顎を上げてから完璧にシンクロナイズされた深い頷きを見せる少年マーちゃんと少女ママ。

「お家じゃダメなのかな？」

「両親も兄弟もいるのです。無理に決まっています」

マーくんがキツパリと言う。まあね、確かに実家じゃ難しいよね。小学生がセックスか……どうなのかな。でも私も中学に入ったばかりでソルフエージュしてたから……それにどっかの国では八歳の女の子が子供を産んだって話を聞いたことあるしな……

成人した男と小学生の女の子のカップルだったら完全に犯罪だけど、

お互い同い年で二人が合意してれば問題はないような気もするんだけどな……まずい、全員が私に注目している。次の発言を求められていることがこれほどひしひしと伝わってきたことはこれまでの人生で一度もないぞ。何か言わなきゃ……

「と、ところで何でランドセルなの？　今は夏休みだね？」

とりあえず話題逸らし作戦の方向で。

「今日は登校日だったのです」

「そ、そうなんだ。大変だね小学生って……はは」

話題終了。作戦失敗。どうすっかな……あ、そうだ。

「で、でもさ、ここ、こんなボロいところだけど、これでも一応ホテルだからお金かかるよ？」

いくらだっけ？　と龍馬を振り返る。三千円だ、となぜか龍馬も小声で返す。

「もちろん承知の上です」

すると少年マークくんは、ランドセルを肩から下ろして開け、中から白い顔にオレンジの服を着て「気を付け」をしている世界のアイドルミッフィーを取り出し私に手渡した。手の平にずしりとした重み。中でジャラジャラと金属の擦れ合う音がする。貯金箱だった。

「その中に五十円玉がちょうど六十枚入っています」

「これって、お小遣いをコツコツ貯めたんじゃないの？」

「はい。僕たちが付き合い始めた三年生の終わりの三月から、二人

で五十円玉を出し合って毎月百円ずつ貯めてきたのです。今月で三十ヶ月が経ちました。ぴったり三千円あるはずです」

そんな前からラブホに行く計画を立てていたのか！？　どんな小学生だ一体。呆れて固まっている私の手からマークくんはミッフィーを取り上げると、身長の上半分以上もある顔の部分をぐりぐりと捻り、胴体と切り離し始めた。

ミッフィーは、せっかく貯めたお金をこんなところで使って欲しくないとはかりに抵抗を続け、なかなか外れない。力が入ったマークんの顔は次第に赤くなってきた。隣で少女マミが両拳を握りしめ、マークくん頑張って、と聞こえないほどの声でエールを送っている。

しかしマークくとミッフィーの攻防はそう長くは続かなかった。なぜならミッフィーの身体は塩ビのような柔らかい素材だったので、それに気付いたマークくんが胴の部分を凹ませるとあっけなく顔が外れたからだ。

その途端、ジャラジャラと零れ落ちる五十円玉。しかし床のすぐ上での開封だったので、六十枚の硬貨はバラバラになることなく、その場に鈍く光る銀色の小山を作った。

「ひーふーみーよー……」

マークくんは床の上で五十円玉を数え始めた。十枚ずつ積み上げられた小さな銀色の塔が次々と出来上がる。そして六つ目の塔が完成しようとしたそのとき。

「あれ？」

マーくんの動きが止まった。隣を見ると少女マミは顔を背けてガタガタ震えている。何だ何だ？

あれで腹巻と鉢巻をしたら完全にバカボンのコスプレが完成

「一枚足りない……」

「さっき落ちたときどっかに転がったんじゃないのか？」

腕を組んで見下ろしながら龍馬が言う。

「そんなはずありません」

龍馬を見上げて言い切るマークくん。私もそう思うな。ミッフィー解体現場を一部始終見ていたが、硬貨は一枚たりとも転がったりはしていない。すると少女マミは突如泣き出した。

「ご、ごめんなさいマークくんごめんなさい……」

「どうしたんだい？」

困惑した顔でマミを見るマークくん。

「今月の……今月のお小遣い、全部使ってしまったて……どうしてもガリガリくんマンガー味が食べたくなって、それで……それで……本当は五十円玉を入れていないのに、入れたって嘘を……」

「マミちゃん……」

「せ、せっかく楽しみにしていた性行為なのに……六年生の夏休みにしようねって二人で固く誓った性行為なのに……わた、私、取り返しのつかないことを……」

さあどうするマークくん、ここで男としての器が試されるぞ。怒り出すのか？　と思ったが意外にもマークくんはそっと優しくマミの肩を抱いた。

「そっか、正直に打ち明けてくれてありがとう」

「怒ってる……よね……き、嫌いになった？」

「バツカだなあ、そんなこと言うマミちゃんがますます好きになったよ。可愛いヤツ！」

人差し指でマミの額をとん、と突いて笑うマークくん。うーん、こいつぁ大物になる可能性大だな。

「よし、じゃあこの2950円で、ステーキランチでも食べに行こう！ だからもう泣くのはおよしよ」

「うん！」

マークくんは屈んでランドセルを開け、床の上の五十円玉をざざざざざとかき入れた。そして立ち上がり再びランドセルを背負うと、マミの手を取りまるで私たちなど最初から存在しないかのように、一瞥さえもくれずに去って行った。私の足元では、顔と胴体を切り離されたミッフィーが私を悲しそうに見詰めている。いいなあステーキ……

「お父様、お願いがあるのですが」

家に帰り、夜私は、食卓を囲む中、テーブルの向かいでいつも通り白いランニングにステコ姿で椅子の上に胡坐を掻きながら、巨人ヤクルト戦に夢中になるあまり、食べようとした冷奴が口に運ばれる直前に逃げるように箸から零れ落ちたことにも気付かず、そのまま何も掴んでいない箸をやや力んで噛んで、しかめっ面をしているマイダディに話しかけた。

「おつといけねえ」

運の悪いことに冷奴は、テーブルではなくダディの弛んだ太腿を包むステテコに落下してしまったようだ。組んだ左足をそのまま持ち上げ、さらには上半身を屈めて顔と足を近付け、唇を突き出すダディ。どうやら崩れた絹豆腐を直接吸い込む作戦に出たようだ。

だが通常の身体の柔軟度であれば、どんなに頑張っても太腿と口とは決して接触することはない。しかし顔を紅潮させながら、まだ太腿に乗った元冷奴と格闘するマイダディ。私は再び声をかけた。

「あのーお願いがあるんですけど」

やがて標準的人間の身体の限界に気付き、諦めて布巾で太腿を拭うマイダディはようやく顔を上げ私を見た。そして一言。

「ダメだな」

「な……まだ何も言っていないじゃん！」

「どーせアレだろう？ 何か買ってくれて言うんだらう？」

う、完全に読まれているわ……あれで腹巻と鉢巻をしたら完全にバカボンのコスプレが完成するような、すつとぼけた格好のクセしてそういうところは鋭いのよね、ダディって。

「バレてしまったのなら仕方ない。単刀直入にいきます。パソコン買って」

「パソコンねえ……何に使うんだ？」

「ネットとか」

「それから？」

「えと……め、メール？」

「自分で使うんだろう。何で疑問形なんだ？ 後は？」

「DVD見る」

「それだけか？」

「まあ、後は使っていくうちに色々と学んで用途を増やしていく方向で……」

「やっぱりダメだな。目的がそんなぼんやりしてるようじゃ。はい、プレゼン終了」

「えええ何でええ買って買ってええ友達だってみんな持ってるんだえええ？」

こうなったらパワープレイよ！ 私は大声を出して小学生みたいなねだり方をする。しかももちろん効果はなかった。

「欲しい物があるのなら、まず自分の力で手に入れようと努力しなさい」

バカボンダディは、胡瓜とクラゲの和え物を肴に黒霧島ロックをちびちびやりながら父親らしいことを言う。前歯に白胡麻が一粒挟まっていた。

「それに小遣いだってやってるだろう？」

「そんなのお昼代で消えちゃうよ」

「バイトは良い社会勉強になるぞ」

「ええだって高校生なんてさあ時給安いんだよ？ パソコンに辿り着く頃には卒業しちゃうよ……あ、そだ、良いこと思い付いたよ」

奴隷募集（男性限定）

「何だ？」

「エンコーでもしよっかな。私って可愛いから上手くいけば一回でパソコンゲット出来るぐらい貰えるかも」

もちろんそんなことをする気など毛頭ないが、ちょっと脅かしてお金を引っ張り出すつもりで上目遣いに言ってみる。しかしバカボンは余裕しゃくしゃくで、芋焼酎を舐めている。

「無理だな」

「な、何でよ！ さっき欲しい物は自分で手に入れろって言ったじゃない！ 私は今すぐ欲しいの！ 時給800円じゃ何百時間かかるか分かったもんじゃないわ！ パソコンのためなら一回や二回、オッサンの相手するくらい……」

そこでバカボンは真面目な顔になり、いいか千夏、と私の言葉を遮った。そして焼酎のグラスを置くと私を正面から見据えて言った。

「お前は私と母さんの間に生まれた娘だ。素晴らしい娘だ。だから人の道に外れるようなことだけは絶対にするはずがない」

バカボンは再び視線をテレビに戻し、ヤクルト打線の不甲斐なさにぶつぶつと野次を飛ばし始めた。面と向かってそんなことを言われたのは初めてだったので、ちょっとじーんと来てしまった。そのとき肩にそっと触れるものがあった。振り返り見上げると、後ろに立っているお母さんの微笑が私を優しく見下ろしている。そして瞼を閉じながらゆっくりと頷いた。

全く、私も信用されたものだ。食事を終え、部屋に戻りベッドでごろりと横になる。親に信用されていると思うとそれだけで悪いことは出来そうにない。あゝあ、でもどうしようかな、手に入りそうにないと思うとますます欲しくなるのが人間の常と言うもの。

仕方ない、ここは地道にバイトするしかないか。マミとマークを見習ってこつこつ貯めていこう。額に汗して得たお金で手に入れたパソコンはきつと愛着もひとしおで、大事に使うことだろう。私は求人情報を見ようと寝転がったまま携帯を取り、開いた。すると途端にメールを着信した。

「女子高生の皆さんへ！ 何もしないで楽々高収入！ 2〜3時間、いつも通りに街をぶらぶらするだけで三万円貰えちゃう！？ 気になったアナタは今すぐ空メールを送信してね！」

ま、まじで……三時間で三万円ってつまり時給一万円ってことだよな。普通のバイトの十倍以上。オイシ過ぎる。しかし。怪しいニオイがぶんぶんするな。どう考えたってイカガワシイ方向だよな、これって。でもな「街をぶらぶらするだけ」っていうのが気になるよな。これが例えばどっかの部屋に連れて行かれるとかだったら完全にヤラれちゃいそうではあるのだが……

私の親指は空メールしてみたい衝動に駆られている。しかし送信してしまったら、やるやらないに拘らず、この先も危ないバイト情報や出会い系とかのメールがバンバン来ることは免れないだろう。

あーでも気になるーせめて内容だけでも知りたい！ どうかしてこっちのアドレスを悟られないように相手の情報だけ手に入れることは出来ないかものだろうか……お、そうだ、閃いちゃった。

人間考えれば何かしらアイデアは出てくるものなのね。よし、この手でいってみるか。

「オナさぁん、これ絶対さぁヤバい仕事だよぉ」

次の日私はネチっ子を呼び出して胡散臭さ満点のメールを見せた。そう、何を隠そう私はネチっ子の携帯から相手業者に空メールを送信させることにしたのだ。そうすれば無力な小市民の、か弱きイチ少女でしかない私の身は護られつつ、気になる内容を知る事が出来るのだ。一石二鳥である。

「普通じゃないことは私にだって分かるよ。だから男の子のあんたに頼んでるんじゃない」

「ええ〜でもなぁ……」

「田倉だって気にならない？　どんなことすんのか」

「なると言えばなるけどさぁ……そんなんならさぁ、僕のところにはさぁもつと凄いのが来たよぉ」

携帯を開き、過去のメールを探し始めるネチっ子。

「ほらぁ、これえ」

ネチっ子は沖縄限定の、緑でイボイボのゴーヤーを被ったキューピーちゃんストラップがぶらぶらと揺れる真っ赤な携帯を手渡してきた。どれどれ……

「件名　奴隷募集（男性限定）」

まじっすか……

エロしべ長者

『月に300万円お渡しします。私は小さいながらも都内で会社の経営をしている38歳の独身女性です。この不景気の中でも業績は好調で、仕事が多忙なため通常の恋愛をしている暇がありません（出会いもほとんどありません）。経済的にはある程度成功したものの、性的に満たされず欲求不満が続いております。このままではストレスで仕事にも影響を及ぼしかねません。』

そこでこの度、私に飼われてもいいという忠実な奴隷を募集させていただくことにいたしました。限定一名。条件は18〜35歳までの健康で、24時間いつでも私の呼び出しに応じられる方です。私は都内在住ですが、現時点で都内にお住まいでなくとも構いません。住居はこちらで用意いたします。私は自分で言うのもなんですが、歳の割には童顔で十歳は若く見られます。友人からは「胸の小さいほしのあき」とよく言われます。興味がある方はとりあえずメールして下さい。直接お会いしてお話しさせて頂きます』

「……スゲ〜〜〜！ 田倉あんたやりなよ！ 高校生でいきなり年収3600万だよ！？ 内閣総理大臣並の収入だよ！？ しかも部屋まで準備してくれるって！」

「あのねえ、十八歳以上って書いてあるでしょお。ってういうかあ、こんなのさあウソに決まってるじゃあん」

「え〜〜そんなの分かんないよ〜結構いるらしいからね。お金はあるけど独り身で寂しい女性って。それにさあ、ほしのあきだよ？ ほしのあき！ しかも田倉あんたDMなんだからさあ、奴隷やってお金貰えるなんて最高の、いや究極の人生じゃない。これ以上の幸せなんてないわよきつと。連絡してみれば？ つーかしていい？」

どんな人か見てみたいし」

私はネチっ子の携帯の送信ボタンに手をかける。

「あゝ！ ちょっとおオナさぁん！ 何勝手に……」

「お前らウルセー！ー！」

それまで黙々と机に向かっていた龍馬が振り向いて叫ぶ。

「だいたい何でオレんちに集まるんだよ！ 話があるんならよそでやれ！ オレは明日追試だっつってんだろ！ 気が散るんだよ！」

「えゝだあって……ねえ？」

「そうだよお……ねえ？」

それは仕方ないことなのです、いかんともし難いことなのです、と言わんばかりに私とネチっ子は目配せをする。

「何が『ねえ？』なんだよ！」

「涼しくってタダでお茶とか飲めるとこ他にないもん」

私は龍馬の部屋の冷蔵庫からジョージアを勝手に取り出して、やっぱり缶コーヒーはコーヒーじゃないわね、と脳内で悪態をつきつつ飲んでいる。

「オレの部屋はお前らの喫茶店じゃねー！ー！」

バカ龍馬の逆鱗に触れてアフロディーテから追い出されてしまった私とネチっ子は、しょうがないので近くのドトールへ入ることにした。

「ねえお願い！ とりあえず返信してみてよ。それ奢ってあげるから」

目の前でオレンジジュースをストローでちゅうちゅう吸っているネチっ子に私は手を合わせて拝んだ。すると顔を上げ、きらーんと目を光らせるネチっ子。

「ジュース代はいいからさあ、見せて欲しいなあ」
「何を？」

嫌な予感。

「パンツう」

やっぱりな……コイツの人生は、人に何かを頼まれると常にエロいことと交換なのか？ 田倉良太よ、お前はエロ藁しべ長者、略してエロしべ長者なのか？

「それにさあ、よく考えたらさあ、オナさん僕のパンツ見たよねえ。しかも強制的にい」

「あ、あれはボクサーブリーフがどういものか知りたかっただけで……」

「嫌なら帰ろっかなあ」

ち、足元見やがって……

「分かったわよ。じゃあいくよ？ ハイッツ！」

ネチっ子の向かいに座る私は、他のお客さんに悟られないように椅

子から脚をずらし、ソファにもたれかかるネチっ子に見えるようにワンピースの裾を一時持ち上げて下ろした。

「えええ！？　そんだけえ！？」

「そうよ。見えたでしょ。可愛いでしょ」

ネチっ子は難しい顔をして目をきつく閉じている。

「ああ、瞬きしてて見逃したあ。思い出せないよお……オナさんも一回！」

「贅沢言ってんじゃないわよ！　高いんだからね私のパンツ！　ほら、さっさとメールして！」

「ひどいいやっぱりオナさんドSだあ」

と言いながらも嬉しそうなネチっ子。何か、コイツといると、どんな自分のSな部分が引き出されていく気がする今日この頃。

純度100%の下着フェチ

「ねえどの人だろ？」

「ううん、そおだねえ……まだ来てないんじゃないかなあ」

私とネチっ子は、待ち合わせ場所に指定された池袋東口にある、グリーン&サマー&年末ジャンボ発売時には、師走の上野アメ横級にバカみたいに人だかりの出来る宝くじ売り場前に現れるであろう相手の様子を、近くの柱に身を隠しながら観察することにしたのだ。

もちろん見るからにヤバそうであればこのまま退散するつもりである。

現在午後二時、待ち合わせ時間ちようどになったが、未だそれっぽい人は見当たらない。昨日、ドトールにてネチっ子的には納得のいかない私の瞬間パンチラの後無理矢理メールをさせると、ものの五分で相手から返信が来たのだった。内容はこうである。

「お返事ありがとう。早速だけど明日とか時間あるかな？ もし明日でオッケーなら『OK』ってメールして。ダメなら希望の日時を返信して。来るときは制服姿で、高校のバッグも忘れずに。あと換えの靴下とパンツを一つずつ持ってきて。パンツは履いてるのと色が違う物、靴下も普段紺のハイソなら持ってくるのはルーズ、みたいにカブらないようにしてね」

靴下とパンツを持ってこさせるということは、穿いてるのを買い取るとかそういったことなのかな。それじゃあいわゆるブルセラと変わらないし、もしそうだとしたら脱いで渡してお金を受け取って終了なわけで、所要時間は10分とかからない。「2〜3時間街をぶ

らぶら」という事前情報ともかなりの食い違いが生じる。私の考察を述べるとネチっ子がもつともらしいことを言った。

「きつとそれはさあ、汗とかニオイをさあ、染み込ませるためにさあ、ある程度の時間歩かせるんじゃないのかなあ？」

納得できそうな意見だが決定的な見落としがある。それはブラジャーだ。下着が欲しいのであればパンツとブラジャーのセットの方が良いに決まっている。しかしこれにはネチっ子反論。

「ブラジャーなんかいらないよお。だあって特にニオイも汚れもないしねえ」

「ニオイと汚れがそんなに重要なのかい？」

「えええオナさん本気で言ってるのお？ ニオイと汚れがブルセラの醍醐味じゃあないかあ。下着マニアはさあ、『ああ！ あんな可愛い顔してるあの子がパンツのこんなところをこんな風に汚して、こんなにクサイニオイを発しているだんなって！』っていうギャップで興奮するわけでしょお？ 単純に下着が欲しいんならデパートでもスーパーでも行って新しいの買ってくれば済む話じゃないかあ。まあそんな『純度100%の下着フェチ』なんて世の中にほとんどいないと思うけどお」

なるほど……要するにあれね、V6のコンサートに行つて岡田クンの汗を拭いたタオルが欲しいと思うのと同じね。イジリー岡田がグラビアアイドルの楽屋に侵入して、嬉しそうに使用済みの歯ブラシのニオイを嗅いだ後、高速でペロペロするのと同じなのね。

でもなあ、脱いだパンツと靴下ワンセットで三万も貰えるとはにわかには信じがたい。まあ私レベルの激カワJKならそのくらいの金額が相場なのかもしれないが、実際にどんなコが来るかなんて相手

にも分からないわけで、当日現れたのが又つくんみたいな冴えない中年のオッサンの女子高生だったらどうすんだろ？

それに使用済みの下着&靴下が欲しいのであれば、渋谷辺りをうろついている女子高生に声をかけて、「新しい下着買ってあげるからそれ売ってくれない？」と直接交渉した方が早そうな……などと考えているとネチっ子の携帯が鳴った。相手からのメールのようだ。

「ごめんね、もう来てる？ 私は今着いたところ。黒いベースボールキャップにサングラス、グレーのTシャツにジーンズが私」

昨日も思っただが、どうも文章が女性的なんだよね……と、宝くじ売り場を見ると、文面通りの姿の人が、シヨルダーバッグを提げて一人で立っていた。

「あの人……だよね」

「あの人……だねえ」

きよろきよろと首を動かして周りを伺っているその人は、華奢で小柄で、そして胸が膨らんでいた。

「あれ女……だよね」

「女……だねえ」

「まあいいわ。行ってくる」

相手が予想外の女性だったので、とりあえず力づくでどうこうすることはなさそうだと判断し、私は意を決して会うことにした。おっとその前に。

「あのさ田倉、バレないように来てくれない？ で、何かヤ

バそうな感じになったら速攻で助けて」

「ええ〜？　もう大丈夫だよお。女の人一人なんだしい。それに街中で周りにも人がいるんだからさあ、いざとなったらあ大声出せば平気だよお」

「うるさいうるさい念には念を入れるの！　もしかしたら待ち合わせには女の人を使って油断させておいて、とある場所に連れて行かれたらそこには大勢の男が待ってていきなりレイプ！　みたいなことかもしれないでしょ！」

「そんなに不安ならさあ最初から首突っ込まなきゃいいのに……」
そりゃそうだ。それはそうなのだが悲しいかな人間とは物欲があり、そのためにお金欲が欲しい生き物だ。ついでに「怖い物見たさ」という名の好奇心も持ち併せている。

「つ、つべこべ言わないの！　じゃあ頼んだわよ！」

『ちい散歩』のちい

私は緊張の面持ちで一歩ずつ彼女に近付いた。鼓動が早くなる。彼女まであと五、六歩、というところで、私が待ち合わせている人物だとすぐに気付いたのだろう、彼女はうんうんと頷き、手を差し出しながら歩み寄って来た。

「こんにちは。良かった、来てくれないのかと思った」
「こ、こんにちは」

私はその右手をぎこちなく握る。

「そんな硬くならなくていいよ。でも意外だな」
「何がですか？」
「こんなカワイイ子が来てくれると思わなかったから」

こっちこそ意外です、と喉まで出かかった。彼女はサングラスを外し、にっこりと微笑んだ。その屈託のない、素敵な笑顔にちよぴりドキっとしてしまう。彼女の身長は私より少し低い。白い肌の顔は身体同様小さくて、手の平に隠れてしまうほどだ。

大きな口と睫毛の長いぱちりとした瞳、スツとして丸っこくない鼻。キャップの後ろからは一つに結んだ焦げ茶の髪が、書きやすそうな、毛先の揃った筆のように真っ直ぐ伸びていた。

ハーフと言っても通じそうな、純日本人ぽくない顔立ち。まさにエキゾチックビューティー。年齢は、間近で見てもよく分からない。私と同じくらいにも見えるし、もっとずっと大人にも見える。綺麗な女性に可愛いと言われて私は嬉しくなり、警戒心が少し弛んでし

まった。

「あの、それで一体何をすればいいんですか？」

「とりあえずお茶でも飲も？」

私の質問には答えず、エキゾチックビューティーはつかつかと早い足取りで駅前の横断歩道を渡り、ドトールへと入った。お、この人もドトール派なのか……それだけで少し親近感を覚える単純な私。

「私はエフ。あなたは？」

「ち……」

そこまで言いかけてやめた。いくら相手が親しみやすそうな、かつ魅力的な女性とはいえ、どんな人物で、これから何をさせられるのか分からないこの状況では、本名を容易く教えない方がいいかもしれない。個人情報流出は極力防がねば。そのために携帯だってネチっ子のを使ったんだから。

「ちいです」

「チイ？」

「はい。『ちい散歩』のちい」

「あっはっは面白いね、チイちゃん」

「ところでエフって本名ですか？」

「そうだよ。エフ。私、お姉ちゃんが三人いるんだけど、みんな英語一文字で表せる名前なんだ。アイ、ケイ、ユウ。お父さんに理由を聞いたら『これからのグローバルな時代、アルファベット一文字で書ける名前の方が、外国に行ったとき色々と都合がいいだろうと思う』だって。」

私たち姉妹、未だに誰一人日本から出たことないし、国際交流な

んかしてないから誰もその恩恵にはあずかってないけど。で、四番目に生まれたのが私なんだけど、もう日本名っぽいのがなくて困ったってお母さんが言ってた。だったら四人も産むなって感じだよ
ね」

頭を小さく左右に振って、音楽を聴いているかのようにリズムを取りながら楽しそうに話すエフ。私は頭の中でA B Cの歌を歌った。

「I」と「K」と「U」以外で名前になりそうなのは……

「エル、とかどうですか？」

「ええ？ まあアリだけど、デスノートだよ。ちょっと恥ずかしいかも。そういえば昔もエルって女の子が主人公の漫画があったな。顔は可愛いしおっぱいも大きいんだけど、背が高くて凄く身体の大きな女の子と、ちよつと情けない感じの男の子のラブコメだった気がする。今で言う草食系男子の走りみたいなの。知ってる？」

私は横に首を振る。そんなん知りませんかな。

「じゃあ……エヌとか」

あ、そういえば坂本の九さんがいたっけ。

「まあエヌとかエムならエフの方がいいかな。言っとくけどカタカナじゃないから。ちゃんと漢字なんだよ」

「そうなんですか？ どんな字を書くんですか？」

エフは私の目を見ながら一口カフェオレを飲み、「ナイショ」と口を動かし悪戯っぽく笑った。う……何か、私やバいかも。エフの掴み所のない妖しさにちよつとやられ始めている気がする。やっぱり私も香織さんと同じでバイなのかな……いかんいかん。私はほとん

ど残っていないグラスに口を付け、中の氷を頬張りガリガリと噛み砕き、気持ちを引き締めた。

「それで、何をすればいいんですか？」

龍の巣に護られたラピュタの如く、絶対に侵食不可能

「早い話がね、パンチラを撮らせて欲しいんだ」

エフは人懐っこい笑顔でさりとらった。異国情緒溢れるエフの大きな口から発せられた「パンチラ」という言葉は、どこか、全く別の意味の外国語のように聞こえた。例えばロコモコとかクスクスとかナシゴレンといった、暑い国々の食べ物のような。しかし、どんなに爽やかに、かつにこやかに言ったところでパンチラは所詮パンチラである。

「それは、写真撮影ってことですか？」

「ううん、ビデオだよ。ほら、メールに『街中ぶらぶらして』ってあったでしょ？ だからチイは普通に道を歩いたりデパート行ったり、もちろん買い物したっていいよ。普段通りにしてくれればいいの。そのすぐ後ろを私がついてって、バッグに入れたカメラで撮るから」

エフはソファに置いてあるバッグのファスナーを開け、中のカメラを私に見せた。うーむ、そういうことか、パンチラか……確かに「何もせずにお金が貰える」という内容に嘘はないようだ。

「あの、それって顔も出ちゃうんですか？」

「顔も撮るって言ったらやらないでしょ？」

「そうですね」

「大丈夫。脚とスカートの中しか撮らないから。チイは可愛いから顔出しOKなら、お金倍出してもいいけんだぞ」

楽しそうな笑顔で試すように私を見詰めるエフ。倍ってことは六万

か……パソコンにぐつと近付く金額ではあるが……と、そこで店に一人の男が入ってきた。

肩からサマーセーターを羽織りポケットに手を突っ込んで、斜め上を向き、不自然に口笛なんか吹いている。今どきそんなヤツいないっつーの！ しかも石原裕次郎を気取っているのか全く似合っていないサングラスまでかけたその正体は、皆様ご存知ネチっ子田倉良太！

あまりにわざとらしすぎる変装&尾行に思わず吹き出しそうになってしまった。エフが首を傾げて不思議そうに私を見る。おおっといけない。私は顔を真面目モードに切り替え、視線をエフに戻す。

「ま、まあ今回は顔出しはNGってことで」

「じゃあパンチラ自体はオッケーってことね。じゃあ早速行こっか」
腰を浮かせバッグを肩にかけようとするエフ。しかし私にはまだ聴いておきたいことがある。

「あ、あの」

「ん？」

「持ってきた靴下とパンツはどうするんですか？」

「ああ、それはね、途中で置き替えて欲しいんだ。靴下とパンツが変われば、パンチラにおいては別人になるでしょ？ そうすれば二人分撮ったことになるからね。もっと欲を言えば制服も別のがあれば最高なんだけど。もしやうがないよね、違う学校の制服持つてる子なんていないから」

なるほど、そういうことだったのか。買取りじゃなかったのね。早く仕事に取り掛かりたい、そんな感じで席を立とうとするエフだが、

動こうとしない私を見て、再びバッグを置き、仕方ないな、という風に軽く溜め息をついてソファに腰を下ろした。

「もう一つ聞いていいですか？」

「何でも」

「そんなのが売れるんですか？」

「当然。売れなきゃやらないよ、こんなこと。盗撮モノは色々あるけどやっぱり王道のパンチラは今も昔も大人気」

「色々って、他に何があるんですか？」

「胸チラとかトイレとか、後はラブホに仕掛けるとか」

私は以前アフロディーテで盗撮した、コスプレ麗子ちゃんを思い出した。元気に、そして幸せに暮らしているだろうか……

「あと最近はビデオボックスとかもあるかな」

「ビデオボックス？」

「うん。個室でエロビデオ見て一人エッチしてるところを撮るの。テレビの画面にカメラが仕掛けてあるんだよね。椅子に座って、全裸になってあれこれしてるハズカシイところがバッチリ映ってる」

「え？ 女の人がアダルトビデオ見て一人でするんですか？」

ちよつと、聞いてないわよそんな話。ソルフエージュとは外界との接触を一切断ち、ただひたすら己の世界に没入することによってのみ、より高みへと昇りつめることが可能となる、神聖な行為である。その世界は龍の巢に護られたラピュタの如く、絶対に侵食不可能な、正に聖域そして文字通り性域なのよ！

それなのに視覚的聴覚的要素に頼らなければソルフエージュが出来ないなんて、何たる怠慢！ ああ我がソルフエージュの師、我が美しき姉よ、この脆弱にして軟弱な精神が蔓延った世界に何卒御慈悲

を……

「最近はそういう女の子が増えたみたいだね。私は行ったことないけど。ま、あとはマッサージとか家庭教師とか試着室とか色んなシチュエーションがあるけど、ヤラセっぽいのが多いんだよね。だってマッサージに来たオッサンがおっぱいとかあそことか触ってきたらおかしいと思うのが普通でしょ？ でもなぜかみんな大人しくやられちゃう」

とつくにカフェオレを飲み終えたエフは、水滴の付いた小さなコップを手に取り、水を一口飲んだ。

「ねえチイ、そもそも盗撮が男どもに受けるのは何でだと思う？」

パンチラのこと分かってるって感じ

「え？ それは……見てはいけない部分を覗けるから？」

「その通り。要するに『相手が撮られていることに気付いていない』というところに盗撮の本質があるわけだね。テレビのドッキリ番組を見れば一目瞭然だよ。ターゲットはカメラにも仕掛け人にも、そしてもちろんハメられてることに一切気付かない。だから見る方は楽しい。」

盗撮も同じ。見てる側が最も興奮するのは撮られている人が全く気付いていない、つまりヤラセじゃない状況、『本当に盗み見てい』る』という状況なんだよね」

「でも、これからやろうとしているのは、撮られる側の私がかつて、つまり、盗撮じゃないんですよね？」

疑問をぶつけた私の顔を、エフは眉を弓なりにし、目を見開いたまま凝視している。

「チイのこと盗撮するなんて、私、一度も言っていないよ？」

そういえばそう。エフは「パンチラを撮る」と言っただけで「盗撮する」とは一言も言っていなかった。そもそも仕事として依頼する時点で、それは盗撮ではない。

「本当はね、盗撮の方がリアリティあっていいんだけど、リスクーでしょ？ ターゲット探しも面倒だしね。それにほら、マシーミたいになっちゃうと困るでしょ。だからこうやってメールでバイトを募集してるってわけ。それにパンチラは上手く撮ればヤラセでも割と本物っぽく見えるしね」

もういいよね？　と言って立ち上がったエフは、さっさと店から出て行ってしまった。どうやら少々せっかちな性格のようだ。店から出る前に、私は尾行を頼んだネチっ子が気になり自動ドアの前で店内を振り返る。

すると顔からはみ出すほど大きなサングラスをかけたままの裕次郎ネチっ子は、左手にコーヒークップを持ち、右手の人差し指と中指を揃えて伸ばし、額に当てる。そのまま軽く前に出し、「グッドラック」的なポーズをした。あんなに嫌がったクセに、ノリノリじゃねーかよ……

「基本的にチイの好きにしてくれて構わないんだけど、ちょこっとだけ希望を言わせてもらえば階段よりもエスカレーターとか、あとショップで服とか選ぶときもあまり歩き回らない方がこっちとしてはやりやすいかな」

店の外に出ると、既にスタンバイオッケーのエフが、再びサングラスをかけて立っていた。要するに、あちこち動き回るよりかは一所にじっとしている方が撮り易いということなのだろう。

「じゃあどうぞ。どこへでも」

にっこり笑うとエフはバッグを手にとって私の背後に回った。自分一人なら何の気なしにぶらぶら歩き回るんだけど、撮られてと思うと、どこへ行けばいいのやら。まあいいや、とりあえずパルコでも攻めてみるか。

再び駅前の交差点を渡ろうと信号待ちしていると、視界の隅の方で

裕次郎ネチっ子がドトールから出てくるのが見えた。どうやらエフの三步後ろ辺りにいるようだ。

何だよ、さっきのはグッドラックのサインじゃなかったのかよ。とりあえず安全は確認できたから尾行は中止してくれていいんだけどな……でも自分が頼んだんだし、そんなことまで分かんないよね。仕方ない、極力気にしないようにしよう。見ると笑っちゃうしね。

パルコに入り、注文通りエスカレーターに乗った。ま、言われなくてもダルいから階段を使う気なんてさらさら無かったけど。特に欲しい服もないが、一応不自然じゃない程度にTシャツやらワンピースやらを広げてみる。

一緒についてくるエフは、さり気なくバッグだけ私の傍に置いて、自分も服を選ぶ振りをしている。なるほど、これはカメラの上に立ってってことなのね。エフの要求をいち早く察知した賢い私は、スカートの中がバッチリ映るだろうベストポジションに素早く移動した。

その後もゆっくりとインテリアを見たり、アクセサリーを手にとったりして過ごす。パルコに来てから一時間くらい経っただろうか、ショップを一通り回るとエフに後ろからとんと肩を叩かれた。

「オッケーオッケー。良いねチイ。良い動きだね。欲しいときに来てくれるし。パンチラのこと分かってるって感じ。前にもやったことある？」

「ないですないです」

私は顔の前でぶんぶん手を振った。

「なんてね。じゃあさ、パンツと靴下置き替えてきてもらっていい

かな？
「

ワカメちゃんはオールウェイズパンチラだった

私はトイレに入り便座に腰かけて換えの下着をバッグから取り出した。パンツを白から淡いピンクへ、靴下を紺のハイソックスからルーズソックスへと穿き替え、脱いだ物を丸めてバッグに押し込む。

ルーズソックスは中学生のとき以来だ。もう二度と穿かないと思っていたので、久々に足を通すと少々恥ずかしい。ついでに用も足しておく。

「お待たせしました」

「お、いいねいいね。あ、出来たらさ、スカートちょっと短くしてもらっていい？」

「え、既に結構短めだと思うんですが……」

今どきJKの私は、当然ながらスカートは短めに設定してある。とはいっても常識の範囲内で、超ミニというわけではないけれど。

「ほら、ルーズコギャルでしょ。で、コギャルワカメちゃんじゃない」

「ワカメちゃん？」

「スカートが短すぎて普通にパンツ見えちゃってる状態をワカメちゃんって言わない？ 今度サザエさんよく見てみて。ワカメちゃんって常にパンツ見えてるから」

へえ、そうだったんだ。ワカメちゃんはオールウェイズパンチラだったのね。知らなかった。今度使ってみようっと。私はスカートの腰を二回ほど折り曲げてみる。ぎりぎりワカメちゃんではないが、階段で少し角度があれば確実に見えてしまう長さだ。

「そうそう良い感じ。あ、でさ、今度はしゃがんだところも撮りたいんだよね」

「しゃがむんですか？」

「うん。またさっきみたいにバッグを置くからさ、適当に商品選ぶ感じでカメラの手前でしゃがんでみて。そうすると前からのパンチラも撮れるでしょ。後ろからばっかりじゃ飽きられちゃうからね」

パルコはもう全部見たのでそのまま通路を渡り西武に移動する。細長い建物をゆっくり歩き、エスカレーターに乗り上の階へ。私はロフトをうろつくことにした。普通に服を選ぶときにはしゃがんだりしないからね。ロフトなら棚の低い場所にもこまごました物が置いてあるからそういう動作も不自然ではないだろう。

しかし、さすがにちよつとスカートが短すぎるのか、いつもより多めに男の視線が太腿辺りに注がれている気がする。でもこれも仕事だ。もうすぐお金が貰えるのだ。恥を捨てて割り切って行こう。

ロフトもほとんど見尽くしてそろそろ疲れてきたな、と携帯を見ると、時間は既に五時を回っていた。まだ撮るのかな……縫い包みコーナーで、カピバラさんと戯れていると、ようやくオッケーの声がかかった。

「チイお疲れ！」

「終わりですか？」

「うん。完璧完璧。お陰で良い画が撮れた」

満足そうな笑顔のエフ。私も釣られて笑ってしまう。しかしそれも束の間、エフはチラッと一瞬視線を私の背後に移し元に戻すと、急に真面目な顔になり私の耳元に口を寄せてきた。

「ところでさ、さっきからずっとチイのことジーっと見て、つけて来る変なヤツがいるんだけど、気付いてた？」

あ、ヤツのことすっかり忘れてた。

「もしかして、チイのストーカーかなんか？ 迷惑してるんなら話つけてきてあげるよ」

「あ、彼は別にそういうんじゃないくて……」

私の言葉が終わるのを待たずにエフは、私の3メートルほど後ろにいた裕次郎ネチっ子に向かって真っ直ぐ歩いて行った。まさかの展開に固まるネチっ子。エフはビビッて動けないネチっ子の耳を掴むと、そのまま私のところまで引っ張ってきた。

「イタタタタ」

「お前さあ、ずっとチイのことつけてただろ。警察突き出すぞ」

「ちちち違うよお、オナさあん助けてえ」

裕次郎ネチっ子の情けない声がデパートに響き、近くにいた客が注目し始めた。

「何が違うんだ？ 迷惑防止条例で訴えるぞ？」

あのにこやかで陽気なエフはどこへやら、かなりドスの効いた声と、華奢な身体からは想像できないほどの力で耳たぶを掴んだまま、空いていた左手でネチっ子の腕を捻り上げている。その豹変振りに呆気にとられてしまい、しばらくの間、口を開けたまま苦痛に歪むネチっ子の顔を眺めていた。

「あ、エフさん、そいつはですね、私の友達です」

「え？ ホントに？」

私の言葉にようやく耳と腕から手を離すエフ。しかしネチっ子の左耳たぶは、痛々しく真っ赤に腫れ上がっていた。

「はい、実は……」

お前の書く曲ってさあ、前からどうかと思ってたんだよね、なんつーかオレ達の

私はメールが送られてから、今に至るまでの経緯を話した。怪しいメールだったので、ネチっ子の携帯から返信したこと、待ち合わせ場所にもついてきてもらったこと、そして危険な目に遭ったことのため尾行を頼んだこと。

「ごめんなさい。ちょっと不安だったものだから、つい」

「なくんだ、そういうことだったの。なら良かった」

事情が分かり笑顔に戻ったエフ。しかしそれとは対照的に、未だ耳を押さえ肘を擦り眉間に皺を寄せているネチっ子。

「ゴメンゴメン、痛かった？」

エフは、悪びれず痛がるネチっ子の頭をくしゃくしゃと撫でた。

「じゃあこれ、バイト代」

「やった！　ありがとうございます！」

早速中身を拝見する。約束通り一万円札が三枚入っていた。それを見てにまにましている、エフはバッグを肩にかけ、じゃあね、と立ち去ろうとしたがすぐに立ち止まり振り返った。

「あ、そうだ、ってことはこのアドレスはチイのじゃないんだよね？　チイ可愛いし、センス良いから多分またお願いすると思うんだ。だから連絡先教えてくれる？」

私から携帯を取り上げると、エフは勝手にアドレスと番号を交換し

てしまった。登録が完了すると今度こそじゃあね、と手を振りながら去って行った。

「田倉あんたねえ、尾行下手過ぎでしょ。つーか何なのそのサングラスは……」

とネチっ子を見ると、顔を赤らめてぼーっと突っ立っていた。エフが見えなくなってもまだ手を振り見送っている。

「ちょっと聞いてんの？ 田倉？ おーい良太くーん？」

顔の前で手を振ってみるが一向に反応のないネチっ子。耳を強く引っ張られ過ぎておかしくなったのか？ するとサングラスを取り一言呟いた。

「好き……」

好きって……えええ好き！？ まさか痛めつけられて惚れちゃったわけ！？ 恐るべしドM精神。ネチっ子のだらしない顔から視線を下ろし、股間を見ると……思った通り今にもジーンズを突き破りそうなほどの完全体であった。

「おめでとう！ かんぱーい！」

エフと仕事をした翌々日、私たち三人はジョナサンのドリンクバーでささやかな祝杯を上げた。龍馬が赤点だった三科目全てにおいて見事に及第点を取ったのだ。

「まあこれも全て私の教え方が素晴らしかったお陰だね。感謝し給

えよ」

隣に座る龍馬の肩を、上司が部下にするようにぼんぽんと叩く。

「何を偉そうに……教えてくれたのなんかたったの一日だけじゃねえかよ。しかもあんな拷問みたいなやり方で。今回は完全にオレの実力だっつーの。それはそうと、さっきからおかしい人がいるんですけど」

龍馬は向かいに座るネチっ子を顎で指し示す。ぼんやりと焦点の定まらないネチっ子は、氷を入れたグラスに熱いエスプレッソを注いだ後メロンソーダをプラスし、更に頼んだバニラアイスを浮かべた、世にも恐ろしい飲み物をぐるぐるとストローでかき回しながら無言で飲んでいる。

「気持ち悪いなあ……でもちよっとちようだい」

人間とはなぜこんなにも下らない好奇心という名の欲求が備わっているのだろうか？ 軽い自己嫌悪に陥りつつ私はネチっ子からグラスを奪取すると、焦げ茶と白のマーブル状の、表面にはアイスの脂肪分の隙間からメロンソーダの炭酸が、申し訳なさそうに弱々しく弾ける液体に口を付けた。

エスプレッソの苦味とインチキなメロンフレイバーとソーダとろけるバニラが口の中でハーモニーを奏でることは決してなかった。氷もアイスもエスプレッソの熱にやられてだらしなく溶けきってしまいい温いことこの上ない。

「うええマズっ」

軽い自己嫌悪は予想通り瞬く間に後悔へと変わった。

その飲み物はなんというか、上京して五年、バイトでカツカツの生活をしてながらも何とか食い繋いでよ

うやくメジャーデビューにこぎつけ、さあこれから、というときに、お前の書く曲ってさあ、前からどうかと思ってたんだよね、なんつーかオレ達のスタイルじゃなくね？ とツアー初日にドラマーが今さら音楽の方向性の話を蒸し返してボーカルと衝突、一気に陰湿なムードになり、一触即発、このままでは空中分解も免れない勢いで、でもその後誰も発言できずメンバー全員が座り込んで押し黙ったままの状況がかれこれ二時間続き、ついたばかりの新人マネージャーがどうしていいか分からず楽屋の前でオロオロ、みたいな味がした。

私が渋い顔をしていると、龍馬が「オレも一口」と同様に愚かな好奇心に駆られ私からグラスを奪う。そして見事に返り討ちに遭い撃沈、しかめっ面をしている。

「何だよ良太！ 悩みがあるんなら話せって」

何事も無かったかのようにグラスをずずいとネチっ子の方へ押しやりながら龍馬は努めて明るく言った。

「原因はだいたい分かってるんだけどね」

ジンジャーエールでお口直し。

「え？ 岡崎お前、知ってんのか？」

「うん」

「何だ？」

「恋煩い」

一触即発空中分解危機一髪下リンク

「お、恋ってことは好きな女ができたのか？　どんなヤツだ？」

私は一昨日のエフのいきさつをざっと龍馬に説明した。

「ふーん、エキゾチックでバイオレンスな盗撮を生業とする女か……」

違うぞ龍馬。「バイオレンスな盗撮」じゃないぞ。まあちよっぴりバイオレンスな要素も持っている女性ではあるが。というか、盗撮すらしてないぞ。合意の上の撮影だぞ。お金だって貰ったしね。すると龍馬は冷ややかな目で私を見下ろす。

「岡崎お前、オナニーだけに飽き足らず、ついにパンチラバイトなんか始めたのかよ……なんか段々よからぬ方向に進みつつある気がするのはオレだけか？　オナ・マスター・ヨーダがダークサイドに堕ちたらダースベーダー以上に邪悪な存在になるんじゃないかねーか？」

ダークなヨーダ。ダークヨーダ。ヨーダーク。そんな恐るべき発想はルーカスおじさんにもなかったに違いない。いつになく真面目な顔で発言する龍馬に私は少なからず不安な気持ちになった。

「それはまあいいとしてだ。とにかく恋することは良いことだ。好きな女がいる、それだけで人生三割増しで素晴らしいことだと思うぞ」

他人事のように言って普通のオレンジジュースを飲み氷を噛む龍馬。テーブルの向こうでズビズビとストローでグラスの中を吸い尽くし

たネチっ子はやはり無言のまま立ち上がりドリンクバーへ向かった。

今度こそまともな飲み物だろうと戻ってきた彼の手を見ると、何と
またもやエスプレッソ+メロンソーダ。そして座るや否や「御用の
方は押してください」のボタンを連打し、苦笑いの店員のお姉さん
を呼びつけ、メニューを開き黙ってバニラアイスを指差す。

ほどなく運ばれてきたアイスを躊躇うことなくグラスに落とし入れ
かき回し、「一触即発空中分解危機一髪ドリンク」を再び作製して
いた。それを無表情のままちゅうちゅうとストローで吸い込むネチ
っ子。ひょっとしてこの飲み物は……私の頭にはある考えが浮かん
だ。

バニラアイスのエスプレッソがけは、苦味と甘味と冷たさと温かさ
が口の中で渾然一体となる美味なるスイーツである。そしてメロ
ンソーダフロートと言えば、今も昔もお子様ランチのお供として欠
かせない、子供に大人気の飲み物だ。普段からよく分からないこと
を考えているネチっ子だ、意味もなくこんな気持ち悪い物を作り出
すとは考えに難い。しかも二回連続で。これにはきつと何か意図が
隠されているのかもしれない。

エスプレッソをエフ、メロンソーダをネチっ子と置き換えてみる。
その明らかに反発し合う異質な物同士を、互いの唯一の接点である
バニラアイス、即ちこの私の介在によって二人の間を取り持つて欲
しい、そういうメッセージが込められているのだろうか？

私は真意のほどを探ろうと、ネチっ子の、特にこれといって特徴の
無い目や二のついた瞳を覗き込む。むむむ……しかし当然ながら何
一つ読み取れない。私はエスパーマミじゃないからね。

ネチっ子は相も変わらずムツツリでスケベで根暗で気持ち悪い男だ。気持ち悪いのだが、今はもう、れっきとした私の友人であることをここに認める。友人の恋は応援してあげたいと思うのが普通だ。そして今回のような状況であればきっと私は役に立つだろう。

しかしである。手放して友人に協力できない自分がいるのもまた事実だ。なぜならば、私はエフに非常に興味を持ってしまったから。その興味が、単に人間としての興味なのか、それともほんの僅かでもそこに恋愛感情があるのかは今のところはっきりしない。

ただこれだけは言える。私はエフにもう一度会いたい。会って話が見たい。そしてあの妖しくも人懐っこい笑顔を目の前で見たい。

「ま、思い詰めてたところでどうにもなんねーんだからさ、とりあえず三人で会ってカラオケなりボーリングなりして親交を深めていけばいいんじゃない？」

三杯目のドリンクバーで野菜ジュースをチョイスした龍馬が再び興味なさそうに言う。

「ちょっとー龍馬、さっきから発言が冷たいくない？」

「え？　そうか？」

「そうだよ。アンタの親友が恋に悩んでるんだからさ、もっと親身になってあげなよ」

「親身とか言ったって恋愛なんて基本的に当事者以外の人間がどうこう言ってもどうなるもんじゃねえだろ。だからオレにはどうすることも出来ないしどうするつもりもない。良太の思うように行動すればいい。法の範囲内でな。それにな、そもそも理解できん」

半分に減った野菜ジュースをテーブルに置き、龍馬は腕を組む。

帯付き百万円の札束を目の前に出されても

「何がよ？」

「一目惚れってヤツ。岡崎、お前も霧夜に速攻で惚れたみたいだけどさ、一回会っただけでどうして好きになれるんだ？」

「え？　だってカッコいいもん」

私は目を閉じて京助さんの爽やかカッコイイ笑顔を思い浮かべた。

「要するに見た目だけで中身は一切関係ないんだろ？　そんなの好きとは言えないね」

「じゃあ何回会ったら好きになっていいのさ。十回？　百回？　一億飛んで三十三回？」

「揚げ足取りやがって……一億回飛んで……って何で飛ぶんだよ、デーモン閣下か！　とにかくそんなに会えるわけねえだろ！　人生八十年、何日あると思ってんだ」

「何日あるの？」

「え？　そりゃあ三六五×八十だから……まあそんな感じだ」

「何がそんな感じよ。バカ。百年生きたとしたって三万六千五百日しかないわよ」

「分かってんならそんなこと聞くな。とにかく！　会う回数だけが最重要項目じゃないけど、愛とか恋とか、人が人を好きになるってのはもっとこう、同じ時を過ごしてだな、同じ経験をしてだな、二人で楽しい思い出を作ってたな、段々と盛り上がっていくもんなんじゃねーの？」

「へえ」

私は目を見開いて龍馬の顔を思わず見詰める。

「な、何だよ」

「案外ロマンチックなんだね龍馬って」

「あったりめーだろ。クリス・チャンディオール高校のミスターロマンチックといえば坂城龍馬……」

「私のことレイプしようとしたけど」

「な！ まだ根に持ってるのかよ！」

「当然。見た目以上に乙女の心の傷は深いのよ。というわけでここは強姦魔龍馬の奢りね。勉強も教えてあげたんだし。私お腹空いてきちゃった。あ、そろそろお昼だよ、すいませーん！ 黒毛和牛風ハンバーグステーキランチ一つ下さーい」

「あ！ てめえ勝手に注文してんじゃねーぞ！ 誰が金出すった。お前こそパンチラで稼いできた汚い金で奢れよな！」

「失礼なこと言わないでよね！ 現役ぴちぴち激カワJK岡崎千夏様のパンチラなんだから三万くらい貰って当然でしょ！」

「さささ三万！？ お前パンツ見せただけでそんなに貰ったのか！？ ここ岡崎の奢り決定な！」

しまった。つい乗せられて喋ってしまった……すると龍馬はなぜかがつくりと肩を落とす。

「はあ、いいよなあ女は」

「何よ突然」

「身体を売れば簡単に稼げる。もしオレが女だったら金持ちのオッサンとやりまくって荒稼ぎだな。目標は高校三年間で一千万。いや、年収一千万か」

「バツカじゃないの？ そんなに稼げるわけ無いじゃない。さっきはダースベーターがダークサイドでヨーダがどうのこうの言ってたくせに、自分が女だったら援助交際とかやるわけ？」

「オレは大丈夫。しっかりしてるからな。でもお前の場合は心配だ」「何を根拠に。わけ分からん」

「わけ分からんといえなさ、すげー不思議なんだけど、女って普段はハゲだのクサいだの汚いだのキモいだの言ってるくせに、よく平気でオッサンとセックスできるよな。いくら金貰えるからって、腹が出たオッサンの汚ねーちんぽを平然としゃぶるなんてマジで信じられん」

「私だってお金くれたって嫌だよそんなの」

「でも実際そういうことをやる女はたくさんいるわけだろ？ エンコーに限らず、AVだって風俗だって大雑把に言えば『若い女が金貰ってオッサンとやる』ってことじゃねーか」

「若い男の子を買う女の人だっているでしょ」

私はネチっ子に送られてきた「奴隷募集メール」を思い出す。「胸の小さいほしのあき」に是が非でも会ってみたいものだ。

「そりゃいるさ。いるけど人数っていうか、比率は全然違うだろ？ 九対一くらいでオッサンの圧勝だろ？ あ、九対一で思い出したけど、ゲイとレズの比率も九対一なんだぜ。つまりこの世の同性愛者は圧倒的に男が多い」

何だよそのトリビアは。今は関係ないだろ。でも脳内で「87へえ」くらいはいったけど。

「帯付き百万円の札束を目の前に出されても、聖子さんのおまんこは、オレには舐められんよ」

やれやれと溜め息を吐き出しながら頼杖をつく龍馬。確かに男が女を金で買うという行為は、昔から世界中のいたるところで行われてきている。褒められたことではないが当たり前といえれば当たり前、不思議といえれば不思議、人権を無視していると言われれば、それもまたそうなのかもしれない。

「女の方はさあ、せつくすするときはさあ、男がちんちんにしか見えななんだよお」

いつの間にか二杯目の空中分解ドリンクを飲み干していたネチっ子が喋った。ようやくこっちの世界に戻ってきたようだ。そして戻ってきたと思った矢先の意味不明の発言。

「男ってさあ、別に好きとか嫌いとか友達とか初対面とか関係なくさあ、見た目がタイプだったら『やりたい』って思えるんだよねえ。でえ実際せつくすできるう。つまりい、極端に言えばさあ、男がせつくすするのに必要なのはさあ、女の人の顔やスタイルといった外見だけってことなんだよねえ。単純に可愛いからやりたいんだよねえ。」

でもさあ、女の方は基本的にはさあ、男の人と会ってもさあ、いきなりやりたいとは思えないと思うんだよねえ。例えそれがどんなにイイオトコだとしてもさあ、頭の中ですぐにせつくすとは結びつかないんだと思うんだよねえ」

龍馬も京助さんも、初めて見た瞬間にエッチしたいと思ってしまった私って……

相手の男が途中でニコちゃん大王に変身しても

「男はさあ『見た目』という条件をクリアしてればさあエロスウィッチがすぐ入るう。じゃあ女の人のエロスウィッチがさあオンになる条件は何かっていうとお、それが『恋愛感情』だ思うんだよね。つまり好きであればさあ相手の男がイケメンだろうがブオトコだろうが興奮できるう。そしてそれ以外にもう一つ、女の人のエロスウィッチをオンに出来るものがあるんだなあ。それがお金え。」

見た目がハゲだろうがデブだろうがクサかろうが『好きという感情』もしくは『お金』のいずれかが相手の男に備わっていればさあ、エロスウィッチはオンにできるんだよねえ。でえスウィッチオンで一端興奮しちゃうとさあ、せつくすの最中はさあどんな相手だろうと男はみんな一つのおつきなちんちんになっちゃうんだよねえ。そこにはもう外見も人格も地位も何も無いんだよねえ。だから『まさかこの子が！？』っていうような美少女でもさあ、平氣の平左でオッサンのちんちん銜えちゃうんだよねえ」

おつきなちんちん？ 私と龍馬はぼかんである。口を開けてただネチっ子の顔を見詰めた。

「良太、何言ってるんだ？」

「田倉、何言ってるの？」

「男はさあせつくすする前も最中もいく瞬間もお、女の人の容姿はさあ、重要でしょお？ 若くて可愛いと思っていた子がさあ、実は狸でえ、ピストン運動の最中にコニシキに化けたらさあ、急速に萎んじやうもんねえ。でも女の人はさあ、一端エロスウィッチが入っちゃえば相手の男が途中でニコちゃん大王に変身してもさあ、そのまま最後までせつくす続行できると思うんだよねえ」

ニコちゃん大王って確かオシリ……だよ。名古屋弁話す。だがや。

「えっとそれってつまり、エッチが始まると男より女の方が我を忘れて夢中になっちゃうてこと？」

「そういうことお。男はさあ、いくら気持ちよくなってもどこか冷静な部分があってえ、自分を制御できるんだよねえ。でも女の方はさあ、一端エロススイッチオンになるとアウト・オブ・コントロール、制御不能、その代わりさあ、男よりも深くて広い快感を得られるんだよねえ」

すぐにエロモードに入れるが、快感レベルの浅い男、エンジン始動まで時間がかかるが、一度火がついたら燃え尽きるまで止まらない女、そういうことかしら。

「なるほど……分かったような分からんような……それより良太、今後の方針を決めた方がいいんじゃないのか？」

「方針ってえ？」

「そのエフって女のこと」

「何でえ？」

「何でって……好きなんだろ？ 恋焦がれてるんだろ？ だったら積極的に行かないと」

少し苛立たしげに龍馬が言う。

「さっきから二人の話聞いてるけどお、なあんか勘違いだよねえ」
「勘違いって？」

「基本的に僕ってさあ、綺麗な女の人是一次見ただけで好きになるんだなあ。だから世の中の八割くらいの女性は好きってことだねえ」

ようやくいつものにまにま顔に戻ったネチっ子。八割ってあんた、ストライクゾーンただけ広いのよ。

「え、でもさ、田倉今日会ったときからボーっとしてたじゃん。あれってエフさんのことしか考えられない、好きな人のことで頭も胸も一杯、みたいなことじゃないの？」

「単なる寝不足だよ。昨日さあ、いつも通り投稿サイトを見てたらさあ、いっになく各ジャンルの動画が精鋭揃いでさあ、あれもこれもって見てたらさあ、結局六回も抜いちゃってえ、いつの間にか朝が来ててえ、寝不足だしアソコはジンジンするしい、みたいなあ」

えへへへへーと照れ笑いするネチっ子。何だそれ……

「じゃ、じゃあその気持ち悪い飲み物は何なのよ！ まともな精神状態で作れるとは思えないわ」

「え？ これえ？ これはさあ、最近のマイブームなんだよねえ。コーヒーって苦いからさあ、飲めなかったんだよねえ。でもさあ、大人になっても飲めないとかさあ、困ると思うんだよねえ。だから何か他のジュースで割ったら飲めるようになるかもしれないと思ってえ、色々試した結果、メロンソーダに落ち着いたんだよねえ」

「ば、バニラアイスは？」

「そんなの決まってるでしょ。トッピングう」

私と龍馬が本日二度目のぽかん状態で固まっていると、「お待たせしましたー」と店員のお姉さんが元気良く黒毛和牛風ハンバーグステーキランチをテーブルに置いて去って行った。そしてネチっ子の止めの一言。

「あのお姉さんも……好き」

橙色をした角の丸い三日月のように愛らしい

八月に入り既に上旬も半ばを過ぎた。来週はお盆だ。お盆には美しき姉が帰省するはずだ。美しき姉は今も変わらずその美さを、かの宮崎の地においても遺憾なく発揮しているに違いない。もっとも人妻で母親の身、あまり発揮し過ぎて無駄に男共を誘き寄せてしまってもお義兄さんが泣くことになってしまうので注意が必要だが。

私ももう十五歳、そろそろあの美貌を保つ秘訣を教わった方がいいかもしれない。

まだ午前中だというのに太陽は相変わらず夏バテ知らずで気温は三十三度を軽く越えている。エアコンを切ったサウナのような部屋で額にじっとりと汗を浮かべ、膝を折り曲げ背筋を伸ばし正座をしながら本日二個目の南国白くまの、橙色をした角の丸い三日月のように愛らしいみかんをスプーンで掬ったところで携帯が鳴った。ディスプレイに表示された名前を見て、私は口に入れかけたみかんをそっと元に戻し電話に出た。

「チイお早う」

「エフさん！」

心待ちにしていた相手からの電話とはこんなにも嬉しいものなのか。一緒に仕事をしてから一週間が過ぎようとしている。私は幾度となくメールを打つか電話をかけるか逡巡したが、たった一度会っただけの間柄、友達と呼べるほどに親しくなったわけではないので携帯を開いて「エフ」という名前を眺めるに留めておいたのだ。そして待った。別れ際にエフの言った「多分またお願いすると思うんだ」という言葉を信じて。

「どう？　また稼がない？」

「今度もパンチラですか？」

「今回はちょっと違うんだ。今から出られる？　お昼がてら打ち合わせしようよ」

私は二つ返事で出かけることにした。白くまの残りを急いでかき込むと、舌と喉の奥が冷たさで麻痺した。

例の如く池袋東口宝くじ売り場前で待ち合わせ。十二時二十分。約束の時間の十分前に着いた。今日は隠れずに堂々とエフの登場を待つ。その間ついでにロトシックスを1、2、3、4、5、6という、当たったら奇跡の中の奇跡、ミラクル・オブ・ミラクルとしか言いようのない番号を塗り潰し、百円玉二枚を売り子のおばちゃんに手渡して一枚購入。

「待った？」

私の正面から手を振りながら現れたエフはやっぱり小柄で、前と同じ黒いキャップにジーンズとTシャツ、スニーカーという、飾らな過ぎる格好だった。違うところといえば、サングラスをかけていないことと重そうなシヨルダーバッグを提げていないことだけだ。

せっかくの美人なのにもったいない。ちょい甘目の花柄のワンピースとかちょー似合いそうなのに。打ち合わせが終わったら二人で服を見て回るのも良いかもしれないな。目鼻立ちのはっきりとしたエフは、少々派手な色使いの服でも違和感なく着こなせるに違いない。

私の選んだワンピースを持って、二人で一つの試着室に入る。狭い

密室の中で、私はエフをバンザイさせてTシャツを脱がせ、ジーンズのファスナーを下ろし、白くすべすべとした形の良い脚を一本ずつ抜いていく。下着姿のエフをじっくり観察していると、いつもは自信たっぷりのエフが頬を赤らめて俯く。

早く着せて欲しいのに、私はワンピースを手を持ったまま知らん顔。懇願するような目で私を見るエフ。でもまだダメよ。まだまだよ。ほらほらさあさもつとよく見せてご覧なさい。あなたの恥ずかしい姿を。私の視線に耐え切れず、やがてエフの息遣いが荒くなつて……

「チイ？ 何だかよだれが垂れてるけど？」

おつといけねえ。エフが下から私の顔を覗き込む。何を想像してんだ私。これじゃ香織さんと変わらないじゃないか。そういえば香織さん、本当にどうしたんだろう。撮影旅行以来全くの音沙汰なしである。私にはもう飽きて、新しい彼氏か彼女か、はたまた両方が出来たのかもしれないな。

「蕎麦でいい？ 近くに美味しいお蕎麦屋さんがあるんだよね」

質問しておきながらエフは、私の返事を待たずにすたすたと歩き出す。そうか、エフは蕎麦好き……と。脳内メモに書き留めておく。

エフは駅前の大通りを抜け、裏手にある南池袋公園の、更に裏通りの六階ほどの建物の中へ迷うことなく入っていった。

「あ、あのエフさん」

私は駆け寄って背中に声をかける。

「ここってマンション……ですよね？」

「マンションだよ」

お蕎麦屋さんに行くんじゃないのかな？ 戸惑う私に構うことなくエフはエントランスを進み、エレベーターのボタンを押した。一階に止まっていたエレベーターの扉はすぐに開く。

すると目の前に「更科」と白く染め抜かれた藍色の暖簾が現れ、くぐると中で蕎麦生地を延し棒で延ばしているお爺さんが「へいらっしやい！」と威勢よく声をかけてくる。驚くべきことに、エレベーターの奥は蕎麦屋になっていたのだ、などということは全く無くて、乗り込んだのは至って普通の狭くて四角いエレベーターである。エフは最上階である「6」のボタンを押した。

って風間さんがシレっと言うくらい危険なプレーで

エレベーターから一番近い601号室の、くすんだ臍脂色の、何の変哲も無い鉄製の扉を、呼び鈴も押さずにエフは開け、入って行った。

閉まりかける扉を手で押さえつつ首を突っ込むと、そこにはおよそ一般のマンシヨンの物とは思えないほど広い土間があった。エフはまるで自分の家に帰って来たときのようにごく自然にその先の板張りの床に腰掛け、スニーカーを脱ぎ、碁盤のように正確な正方形の格子状に整然と仕切られた下駄箱に入れて中に上がった。下駄箱には何足か靴が入っている。

ここがどういふ場所なのか今いち飲み込めずにいる私は、おあずけを食らったまま放置され、飼い主はどうか行っちゃって、でも目の前には餌がてんこ盛り、お腹も空いたし食べたいなあ、勝手に食べたら後で怒られるかなあ、でもなあ、何だかんだ言ってもボク犬だしなあ、という葛藤に涎だらだらで、もじもじきよろきよろする黒ラブのように、玄関の外側でどうしていいのか分からない。

「何してるの？ 入りなよ」

私がついてこないことに気付き、エフが振り返り手招きをしている。ようやく御主人様のお許しが出たので、私は一步、扉の内側へ足を踏み入れた。ぎこちなく靴を脱ぎ部屋の中へ上がった。そしてその光景に立ち尽くす。行き先を知らされずにどこでもドアを開いたときの気分とはこういうものかも知れない。

そこは家ではなかった。長方形の明るい空間は奥の奥まで広がって

いる。床には正方形で淵のない琉球畳が数え切れないほど敷き詰められ、チェスの盤のように美しい市松模様を作り出していた。その周囲には古いお寺の縁側を思わせる、つやつやと深い飴色の板張りになっている。

琉球畳の上には、通常の畳くらいの大きくて脚の短い、明るい色の木の、装飾を排除したシンプルなテーブルが六つ等間隔に置いてあった。手前から二番目のテーブルではOL四人組が、一番奥のテーブルでは老夫婦が、それぞれ談笑しながら箸で摘んだ麺を啜っている。私はそこでようやくここが蕎麦屋なのだということを理解した。

「いらっしやいませ」

はっとするほど鮮やかな藍色に染められた作務衣を来た店員がエフに声をかけた。にこやかに笑うと目尻に何本もの皺が走る、人の良なおじさんランキング堂々第一位の鶴瓶師匠みたいな顔をした小柄な男性は、ぱっと見る限り店員の中で一番年上のようなうだ。店長かもしれない。

二人は和やかに言葉を交わしながら奥へと進む。私もそれについて行く。板張りの通路の右側は細長い厨房になっていて、中では若い男性が三人、黙々と作業していた。中央で包丁を握っている店員は、物珍しそうに厨房の様子を覗いている私と目が合うと、包丁の動きはそのままに、にっこりと微笑み頷いた。かかカッコイイ、男前の上に料理上手だなんて……

ああっと、これはいけませんねえ、タイミングも完全に遅いし、足にいつてますねえ、しかもスパイクの裏見せてますからかなり悪質です。どうですか、出ますかねえ風間さん。いやこれはもうボールじゃなくて足首ですからね、恐らく本人もカード覚悟でしょうから

出るでしょう。

って風間さんがシレっと言うくらい危険なプレーでレッドカードで一発退場させられてしまうほどの反則だわ……は、いかんいかん、どうして私はイイオトコを見るとすぐに意識が百万光年の彼方に飛んで行き、現状を見失い、日常茶飯事を投げ出し、ふにゃふにゃへろへろとろの役立たずな脳味噌になり下がってしまうのだろうか？

おっかしーなー前まではこんなことなかったのにな。高校生になって世界は一変してしまったのかしら。それとも今までの私が井戸の蛙だっただけで、元々世界にはイイオトコがたくさん生息していたのだろうか。

あ！ いつの間にか二人がいなくなっている！ と思ったら、奥の方で手を振るエフがいた。更にさっきの鶴瓶師匠が戻ってきて、あちらでございます、と席を案内してくれた。そこは個室になっていて、椅子のあるテーブル席だった。二人で食事するにはかなりゆったりとしている。

「びっくりした？」

悪戯っ子が罍を仕掛けて見事成功したときのように笑うエフ。そんな笑顔もまた素敵だわ。

学食のふやけたタヌキ蕎麦が蕎麦の世界の全てだった

「そりゃ驚きますよ。まさかこんなところにお蕎麦屋さんがあるだなんて」

「さっきのおじさんがオーナーなんだけどね、蕎麦好きが高じて店出しちゃったってよくあるパターン。あのおじさん、都内のあっちこっちに不動産持ってたさ、ここもその一つなんだけどね、新たに店舗探すの面倒だからって、自分のマンションのワンフロアを改装しちゃったってわけ」

「でも看板も何も無いですよね？」

「完全に趣味だからね。それに一見さんお断りで、紹介が無いと入れないんだ。まあ断るまでもなくこんなところにふらっと立ち寄る人なんかいないんだけど。その代わり味はピカ一。ホント美味しいから期待していいよ。趣味で店出して、そこそこの蕎麦だったら寒いけど、何度かグルメ雑誌にも載ってるんだ。もちろん店の名前も場所も匿名だけどね」

エフがそこまで喋ると、オーナー鶴瓶師匠がお茶と小皿を二つずつ運んできた。

「こちらは自家製の蕎麦味噌です。お野菜をつけてお召し上がり下さい」

A4ノートを縦に半分にしたくらいの、緩く上向きに反った、乳白色の角皿には、一口サイズの可愛い人参と、胡瓜、蕪、エシャレットとが瑞々しく並び、その隣に蕎麦味噌が小さく山に盛られていた。私は胡瓜を手に取り蕎麦味噌をつけて齧る。粒々の残る、甘みのある味噌は、生野菜によく合っている。

「甘い味噌にピリツと唐辛子が効いてて美味しいですね。私始めて食べました。このつぶつぶは何ですか？」

「それが蕎麦の実だよ。それをごりごり石臼で挽くと蕎麦粉が出てきて、捏ねて延ばして細く切る蕎麦の出来上がり」

「へえ、そうだったんですね」

「ちなみにその野菜たちはここで採れたんだよ」

「え？　ここで？」

エフは、外からの光を柔らかく通している障子を開けた。すると本来はベランダである場所には一面土が敷き詰めてあり、緑色の植物達が顔を出していた。畑である。六階のベランダの外には都会の街並みが霞んで見えた。

「凄い！　こんなところで野菜作ってるんですね！」

「もっと言っちゃうと、そのお皿もオーナーが作ったんだ。陶芸もやってるから」

私はまだ野菜と蕎麦味噌の乗っている角皿を、注意深く持ち上げて、色んな角度から見てみた。厚手の陶器は、言われてみれば確かに既製品にはない、手作り独特の暖かみを感じられた。

「えーじゃあこのお店の物ほとんどオーナーさんの手作りってことですよ？　凄いこだわりの……」

燃え盛る炎の上のフライパンへと一度卵を落としたなら、黄身を割り白身を焦がしてしまうことは必至、目玉焼きすらまともに作れない私は蕎麦を打ち、野菜を育て収穫し、皿まで焼いてしまう鶴瓶師匠に感心しきりである。

「ま、全部暇な金持ちの道楽だけだね」

「エフさん詳しいんですね。よく来るんですか？」

「うん。毎日」

「えええ毎日！？ そんなに通い詰めてるんですか？」

「だって家から近いし美味しいし」

「じゃあエフさんの家ってこの辺なんですか？」

「この辺っていうか、この五階」

「こののって……ここがエフさんのマンション！？ まじですか！？」

「そんなに驚くことでもないでしょ。私の住んでるマンションのオーナーがたまたま蕎麦好きで、たまたま私の住んでるマンションの最上階に店を出したっていうだけのことだから」

冷静に考えれば確かに目ん玉ひんむいて椅子からずり落ちるほど驚愕の事実ってわけでもないか。それにしても。

「メニューってないんですか？」

私は辺りをきよろきよろと見渡すが、それらしき物は一切見当たらない。

「ないよ。完全におまかせだから。あのオーナーはね、店に入ってきたときの客の顔を見ただけで、その人が今どんな気分で何が食べたいのかが分かるんだ」

ま、まじっすか、超能力だわ読心術だわエスパーマミだわ。多芸多趣味な上に超能力者でお金持ちだなんてどこまでも凄い人だわ、と今度こそ心から驚いていると、蕎麦を運んできた鶴瓶師匠が細い目をさらに細め、苦笑いをして立っていた。

「勘弁して下さいよエフさん。お嬢さん、この人の言うことはあま

り信用しないように。料理は私のその日の気分です。今日は鴨せいろです」

なーんだ、ちょっと本気にしちゃった。鶴瓶師匠は私とエフの前にそれぞれお盆を置いた。丸いザルの上には、ぴかぴかと光る、灰色をした蕎麦が、早く食べてもらいたくて仕方がない、といった様子で盛られている。麺のところどころに黒い粒が見える。

「この黒いのは何ですか？」

蕎麦といえば白い蕎麦しか知らない私は鶴瓶師匠にたずねた。

「胡麻です。うちでは蕎麦に黒胡麻を練りこんである胡麻蕎麦を出しています。それではごゆっくり」

本物の鶴瓶師匠と違ってあまりお喋りでないオーナーは、個室の目隠しとなっている暖簾をくぐり、去って行った。

「この汁につけて食べるんですよね？」

これも鶴瓶師匠作と思われる、ご飯茶碗より少し小振りの、楕円形をした黒い器には、つけ汁と共に、薄切りの鴨肉と軽く煮込まれた長葱が入っている。

真ん中に乗せてある黄色い柚の皮が、清々しい和の香りを放っている。うーん、美味しそう。いただきまーすと早速箸で蕎麦を摘んで汁に浸し、ずずずと啜る。弾力のある、つるつるとした蕎麦は、噛むたびに胡麻の風味が鼻から抜けた。鴨の出汁が効いた汁と相まってちょー美味い！

「山椒入れるともっと美味しいよ」

エフは、アクリル製の手の平サイズのミルを、器の上でごりごり回している。はらはらと、削られた山椒の欠片が温かい汁に着地すると、湯気と共に和風スパイス独特の良い香りが漂ってきた。私も真似してごりごりごりごり。

「あ！ ホントだ！ 山椒って鴨とバッチリ合うんですね！」

鴨は葱しか背負わないものだと思っていた。世の中にこんなに美味しい物があるとは知らなんだ。七味を大量に振りかけて味を誤魔化さねば完食不可能な学食のふやけたタヌキ蕎麦が蕎麦の世界の全てだった私にとって、これは正に革命に等しい衝撃である。蕎麦の明治維新や、文明開化やー！ と叫ばずにはいられない。私は夢中で蕎麦を啜り、ざるの上はあっという間に片付いた。

女の脚は男を誘き寄せるための最大の

「足りなければおかわりしたら？」

にこにこ私を見るエフ。おかわり……したいな。でもな。

「あのーこって結構高いんですね？」

趣味でやっているとは言え、かなり手間暇かかっていそうだ。それなりの金額はするだろう。この間のバイト代はまだ残っているものの、パソコン費用として取っておきたいのでなるべくなら無駄遣いは避けたい。まあこれだけ美味しければ無駄ではないのだが。するとエフは、大きな口を大きく開けてあははは、と楽しそうに笑い出した。何か面白いこと言ったかな？ 私。

「チイ、お金のこと心配してるの？ 大丈夫だよ、ご馳走するから。高校生を誘っておいて割り勘なんてケチなこと言わないって」

さすがは大人の女性である。それを聞いて安心しきった私は、調子に乗って二回もおかわりをしてしまった。喉越しの良い、きりりと冷えた蕎麦は、いくらでも食べられそうな気がした。

「ご馳走様でした」

食った食った。ふんぞり返ってお腹をさする、お行儀の悪い私。てへ。それにしても美味しかったな。是非とも美しき姉にも食べさせてあげたいな、と食後の蕎麦茶を啜っていると、鶴瓶師匠が何かを持って再び現れた。

「蕎麦アイスです」

おおおデザートまで出てくるのか……私は朝から白くまを二つも食べてきたことなどすっかり忘れて、その香ばしく冷んやりとした濃厚な甘味を堪能した。あーこれぞ至福の時間ですな。

「でね、今度は脚を撮らせて欲しいんだよね」

満腹でまったりと完全に気を抜いているところへエフは唐突に話を切り出した。

「脚……ですか？」

「そう。こないだ見たら、チイかなりイイ脚してたから。男はかなりグっとくるはず。チイは百年に一人の逸材だね」

蕎麦茶を啜りながらエフは言う。またまたーそんな褒めたって何にも出ませんぞ旦那、と脳内謙遜しつつもエフに褒められると単純に嬉しいのでにやにやしてしまう。

「また制服着るんですか？」

エフは笑みを絶やさずうんうんと頷く。制服姿で脚を撮るのかあ。パンチラの時も脚は映っているわけだから、それほど大差ないような気もするのだが……求められている物が今一つ理解できず、曖昧に首を傾げる私を見てエフは補足を始めた。

「今度はね、『盗撮風』じゃないんだ。室内でソファや椅子に座ってもらって、下半身だけを撮る。脚を組み替えたり、開いたりしてもらってから、もちろんパンチラ的要素もあるけどね。あと靴下を脱いだり穿いたり」

「靴下を脱ぐんですか？ そんなのが面白いの？」

「そうだよ。女子高生がルーズ脱いだり穿いたりするところなんて普段じっくり見られないんだから、JKマニアには堪らない一品だね。さらにハイソックスとかストッキングも脱ぎ穿きしてるところを撮る。前も言っただけど、顔出しOKならその分お金出すし、こっちとしても有難いんだけど」

「さすがに顔は……」

「だよ。オツケーオツケー。絶対映らないようにするし、万が一映ってもモザイクかけるから」

「でも本当にそんなので興奮するんですか？」

パンチラはまあ何というか、男は子供の頃からスカート捲りとかするほどパンツ好きだし、大人になれば「覗いている」というスリリングな状況が加わりより興奮の度合いを高める、ということが理解できないでもないが、エッチもソルフエージュもない脚だけの映像ってどうなんだろう。

「チイ、男はね、女の脚が大好きなんだよ。女だってそれを分かってるから男の視線を集めるようにファッションを進化させてきたんじゃない。ミニスカートから生脚を覗かせ、ストッキングで艶めくシルエットを作り出し、ハイヒールで脚のラインを不自然なまでにエロティックに強調させる。女の脚は男を誘き寄せるための最大の武器と言ってもいいんじゃないかな。」

それにさ、脚だけに限らず色んな身体の『部分』が好きな男も多いんだ。いわゆるフェチってやつだね。脚もその一つだけど、男はみんな基本的に女の脚が好きだから、あんまりフェチとは言わないよね。もっと局部的というかパーツというか。

例えばお尻とか唇とか手とか。腋フェチなんてのもいるな、あと

足の裏とか口の中とか。それにフェチは身体だけとは限らない。分かりやすいので下着とか靴とか、とにかく常識的な範囲の性行為をせずに、身体の一部や、女性の身体からは切り離されている何かでイける人はフェチってことだね」

エフは話すとき、無意識に頭が左右に小さく動いてしまうようだ。その大きな口からは、色んな言葉たちが、歌うようにぽんぽんとリズムカルに飛び出してくる。私は話に頷いてはいるものの、エフの口元ばかりを見ていて内容はほとんど聞いていなかった。

恋愛なんて振り回したり振り回されたり、結局疲れて終わりじゃない

変わらない日常を送っていると、色んな場所で「会うだけでホッと
する人」とか「顔を見るだけでうきうきしちゃう人」という人物が
出てくる。

それは、学校の友達や先生のように、向こうも私を知っている場合
もあるし、よく行くコンビニの店員や、朝、電車でときどき同じ車
両に乗り合わせる渋いサラリーマンというように、こっちが一方的
に知っているだけのときもある。

性別や年齢は関係ない。世に言う「癒し系」である。もちろん相手
は、自分が誰かを癒しているなどとは露ほども考えていないに違
い。というか考えてたら嫌だけど。

今日で会うのは二度目だが、間違いなくエフは私の癒し系の人であ
る。日々会いたいなあとと思うし、会えれば嬉しいし、こうして二人
で時間を過ごせればなおのこと幸せな気分になれる。好きか嫌いか
で言えば当然好きなのだが、この感情が恋愛的なものかどうか
は未だよく分からない。まだ私が小さい頃、美しき姉がどこへ行く
にも一緒について行きたいと思う気持ちと似ているかもしれない。

顔が好きで声が好きで話し方が好き。そして何より興味がある。こ
の人は何でこんな仕事をしているのか。

「じゃあチイ、明日また制服着て来てくれる？」

いつの間にか話が終わっていた。

明くる日、池袋、宝くじ売り場前。今日もまたあの蕎麦が食べられるかと期待したが、待ち合わせたのはこの間と同じく午後二時で、お昼は過ぎてしまっていたため残念ながら諦めるしかなさそうだ。エフは私に会うなり腕を組み唸った。

「うーん、チイやっぱ似合うわ、制服。あ、当たり前か、現役だもんね」

あはははと一人楽しそうに笑うエフにつられて笑う。

「どこで撮るんですか？」

「私の部屋」

おっと、ついにエフのお部屋訪問ですな。わくわくどきどき。すたと先に歩き出すエフについていく私。エフと行動を共にすると、自分が飼い犬になったような錯覚に陥るのは気のせいだと信じたいたい。道すがら、そういえばエフの苗字って何だろうと思う。マンションに着き、玄関前で表札を見たのだが、残念ながらプレートには何もかかれていなかった。

「上がって」

実はここも何かの店だったら面白いな……例えば本格的なタイ料理屋で、中から本場のタイの人がネイティヴなタイ語で挨拶してきて、わけ分からないうちに座らされて、日本語なしでタイ語オンリーのメニューを渡されて、適当に注文したら激辛タイカレーが出てきちゃって、運んできた本場のタイの人は傍でニコニコして立って私が食べるのを見てるもんだから、半ば無理矢理スプーンで掬って食べてはみたものの、あまりの辛さに口からは火がぼーぼー顔中汗だー

だー、みたいな。

などと考えていたが、中はいたって普通のマンションだった。ファミリータイプのようでいくつか部屋があり、一人で住むには広過ぎる。ん？ 何で私はエフが一人で暮らしていると決め付けているのだ？ 家族と一緒にかもしれないし、恋人と住んでいるかもしれないし、場合によっちゃあ結婚している可能性もある。奥から「エフママーおかえりー」って幼稚園に上がったばかりの娘が出てきたりして……

しかし私の中のエフ像は、「男？ 昔はいたわよ、それなりにね。でも最近なんかそういうの面倒くさくって。親は『もういい歳なんだから早くいい人見つけなさい』とかって言うけど、別に男に頼らなくたって生きていけるしね。恋愛なんて振り回したり振り回されたり、結局疲れて終わりじゃない。私は今の生活が気に入ってるし邪魔されたくないわけ。ま、そのうちなるようになるんじゃないの？」という、人生を達観しちゃってる桃井かおり風。

廊下をひたひたと歩き部屋の奥へ進むとそこには……しんと静まり返り、誰もいなかった。

「エフさんて、ここに一人で住んでるんですか？」

私は、質素ではあるが至って普通のダイニングとリビングを見渡した。

「そうだよ」

やっぱりな。第一印象の勝利だ。桃井かおりだ。パンチラ動画を撮

って売っているエフが、親兄弟と共に、ほのぼの家族日本代表の主婦であるサザエさんのような暮らしをしているはずはないのだ。しかし。

「今はね」

エフは意味深にそう言葉を付け足した。今はってことは、以前はファミリ―もしくはブラザーもしくはシスターとほのぼのの生活だったのか？ ほのぼのライフとパンチラライフ、略してパンチラライフを並行させていたとでも言うのか？

確かにワカメちゃんはおールウェイズパンチラである。しかしそのパンチラとこのパンチラには、好み焼きで白飯食うのは当たり前やんか何抜かしとんねんこのボケナスが、と言い張る関西人と、そんなこと言っただってキミ、炭水化物に炭水化物の食事なんて栄養が偏って仕方ないだろう？ と澄まして言う関東人くらい巨大で分厚い隔たりがあるのだ。

ほのぼのサザエさんと男の欲望の矛先であるパンチラはどう頑張っても結びつかない。同一平面上には存在し得ないのだ。正に陰と陽、決して出会うことのない空に浮かぶ太陽と月のように。

鼻の穴も一緒にぶくぶくしてる

「じゃあ早速だけど、チイ、そこに座って」

私の脳を駆け巡る思いを知ってか知らずか、まあ知らないんだろうけど、エフはカメラを構えて準備万端である。私はリビングに置いてある、大人三人がゆったりと座れそうな革張りのソファに寝そべった。座るところには、ウサギみたいな白いふわふわが敷いてあって気持ちいい。

私はエフに言われるまま、仰向けになったりうつ伏せになったり足を折り曲げたり開いたり閉じたり座り直して内股になったりガニ股になったりした。そしてルーズソックスを脱いで穿いて脱いで紺のハイソックスを穿いて脱いで薄い黒のストッキングを穿いて脱いだ。制服でストッキングは新鮮だったので、もう一回穿いてみる。

「良いね、チイやっぱ最高だよ」

靴下を穿いただけなのでどこら辺が最高なのかはやっぱり良く分からないが、喜んで頂けて何よりだ。それにしてももう終わりなのか？ 所要時間にして三十分、この前のパンチラからすると随分短い気がするが……

「ちょっと場所変えようか」

「変えるって、外に出るんですか？」

するとエフは無言のまま、ソファの向かいの、リビングの壁にある引き戸を開けた。目の前の光景に再び嘔然とする。このマンションに来て二度目のどこでもドア体験である。

誰が決めたのか知らないが、日本のファミリータイプのマンションのリビングの隣は畳の和室と相場が決まっている。掛け軸のかかった床の間か、お婆ちゃんの仏壇でも置いてあるのかと思いきや、現れたのは、見慣れた大きな黒板に教壇、普段使っている木とパイプの机と椅子、つまり学校の教室だった。教室といってももちろん広さは普通のマンションの一部屋分しかない。机も横三列、縦二列の、コントのセットのような感じだ。

「机の上に座ってくれる？」

呆氣に取られて声も出ない私に構うことなく指示を出すエフ。ま、まあね、その道のプロだもんね、部屋を改造するくらい普通だよ。カメラマンが自宅の一室を現像する部屋にしたり、自宅でピアノを教えている先生が、旦那さんに内緒で防音室こしらえちゃうようなもんだよね。

突っ込みどころは多々あるが、仕事なんだし、ここは大人にならないとね。私は異空間に繋がっていきそうなミニ教室に、少々ビビりながら足を踏み入れる。そして机にお尻を乗せて、足をぶらぶら。

「お、いいね、そのぶらぶら。じゃあそのストッキング脱いじゃおっか」

私は座ったままストッキングをずり下げた。

「そのまま机の上で体育座りして……そうそういいね。じゃあ脚伸ばしてくれる？」

するとエフは、私の足の裏にカメラを近付けた。

「ちよちよつとエフさん、何してるんですか？」

「昨日言ったじゃない。足の裏フェチがいるって。これはそのフェチ用の分。チイ、足の指開いたり閉じたり出来る？」

話聞いてなかったからな……しかし足指開閉ならお任せあれ。小学生の頃、散々鍛えて出来るようにしたんだから。私はあらん限りの力を込めて、足指グーパーを繰り返した。久し振りの動作に既に小指がつりそうだ。我ながら見事な開閉だが、実はこれには弱点がある。それはパーのとき、一緒に鼻の穴も開いてしまうことだ。

忘れもしない、あれは今日みたいに暑い、小学五年生の夏休みだった。厳しく長い特訓の末ようやく足指グーパーが出来るようになり有頂天の私は、早速美しき姉に見てもらおうと部屋を訪ねたがデパートに出かけていておらず、二番目に見せたかったお母さんも買い物で、仕方がないから唯一家に残っているステテコランニングのバカボンダディに、感動が薄れぬうちに見せてやろうと思ったのだ。

きつと一緒に喜んでくれるに違いないと、バカボンの目の前で得意気にグーパーを繰り返していると、言い放った一言が「千夏お前、鼻の穴も一緒にぷくぷくしてるぞ」だったのだ。ショックだった。しかし足の裏に集中しているエフはそのことに気付かないようだ。

しかもパンチラで殉職

ごとおおとミルが豆を挽く音が台所から聞こえてきた。こぼこぼと水が沸騰し、粉々になった豆にぽたぽたと垂れると、部屋中に香ばしいコーヒーの香りが広がった。

「じゃあこれ今回の分ね」

エフはコーヒークップと共に、茶色い封筒を持ってきて手渡した。中を見ると前回と同じ三万円が入っていた。

「何か……本当に良いんですか？」

下半身を撮らせているとはいえ、基本的に疲れるようなことは何もしていない。それに今回は一時間足らずで終わってしまった。時給三万である。ファミリーマートやマックで同じ金額を稼ぐとしたら何日もかかるだろう。

「チイ遠慮してんの？ 大丈夫だよ、正当なモデル料だから」

モデル料といえば聞こえはいいが、あっけなく大金を手にしてしまうと、どこか後ろめたさが残る。同じ撮影でもパンチラじゃなかったら後ろめたくないのかなあ、と、ミニ教室の席に座りコーヒークーに口を付けながら考える……コーヒークー美味い。

「それにしても凄いですね」

私はミニ教室を改めて見渡す。どこで仕入れたのか、学校と同じ仕様の黒板の右下の日付欄には、白いチョークで「七月二十日（月）」

日直 あみ ゆみ」とハートマーク付きの、ギャル全開の文字で書かれている。

「ほら、基本女子高生だからね、やっぱり教室っていうシチュエーションは重要なんだよね。何人も女の子集めて撮るときなんかは特にな。見る側もセットだって分かってても背景が教室ってだけで盛り上がるから。かといって本物の学校に『パンチラ撮影するんで教室貸してください』なんて言い出せないし。それならいっそのこと部屋に作っちゃった方が早いよねって話になったんだ」

話になった？ 誰と？ エフが一人でやってるんじゃないの？

「ねえエフさん、そもそもこの仕事始めたきっかけって何なんですか？」

するとエフはカップを置いて立ち上がり、初めて見せる、少し寂しそうな顔で教壇に立った。

「この部屋はね、お姉ちゃんの形見なんだ」

形見って……えええ！？ じゃあお姉さんと一緒にやってる……？

いや、形見ってことはお姉さんはもう……

「アイって、一番上のお姉ちゃんんだけど、あれほどパンチラに、しかもJKパンチラに情熱を燃やした女はいなかったな。文字通り命懸けちゃって……バカなヤツ」

エフの目には薄っすらと涙が浮かんでいる。私はアイ姉さんの話が気になって仕方がなかったが、エフは窓の外の池袋の街並みを眺めたままそれ以上口を開こうとしなかった。沈黙の中、私がコーヒー

カップを机に置く音だけが教室に響いた。いたたまれなくなり、私は残り半分のコーヒを一気に喉に流し込むと、ご馳走様でした、と言ってエフの部屋を後にした。

あーちょー気になるー。アイ姉さんの身に一体何があったのか。というか、そもそも姉妹でパンチラのプロフェッショナル、プロパンチラシスターズ、略してPPSってどうよ？ PSPとニアミスだし。しかもパンチラで殉職って……状況が全く理解できん。ここは一つ、見る側のプロに聞いてみるか。

次の日、エロ動画視聴のプロであるネチっ子呼び出しアフロディーテに向かった。入り口で靴を脱いで上がると、受付には懐かしい顔があった。

「あれ？ 聖子さん帰って来てたんですか？」

私が話しかけると聖子さんは面倒くさそうに週刊現代から顔を上げ、老眼鏡と思しき眼鏡をずらして不機嫌な表情でこちらを窺った。

「何だ、あんた達かい。お盆なんてみんな同じ時期に取るからどこ行っても人だらけなんだよ。一週間ずらすだけで快適に過ごせるってのに、まるで分かっちゃいないんだから。全く馬鹿ばかりだね」

いやそんなこと言っただけですね、仕事の都合上、お盆にしか休めない人もたくさんいるわけで。

「龍馬くんいますか？」

「ふん、何言っただい、いるから来たんだろ。坊ちゃんどこにお土産あるからあんた達も食べな」

相変わらず世の中の全てにケチをつける、ひねくれたおばさんではあるが、わざわざお土産を買ってきてくれたと聞いて少々テンションが上がった。私達はホテルの廊下を進み、龍馬の部屋、即ちダイダロスの扉をノックする。しかし中から返事はない。

「あれ？ いないのかな？」

「どうせさあ、昼寝でもしてるんだよお。入っちゃお入っちゃお」

なぜか嬉しそうに勝手に侵入するネチっ子。部屋を見渡すと、案の定、龍馬はベッドで腹を出し、涎を垂らして眠りこけていた。

十五だからエロ才子

「あああ、これじゃなあい？」

机の上に置いてある、いくつかの箱入りのそれらしき物をネチっ子が目敏く見付けて手に取った。

「見して見して」

私はネチっ子の手からお土産を奪い取る。

「ラフテー饅頭、ミミガー煎餅、ゴーヤー……シュークリーム！？
くっそーゴーヤを使えば何でも沖縄土産になると思っているな……
あ、つーことは聖子さんって沖縄の人だったの！？」

「何で驚いてるのお？　じゃあさあ、どこの人だと思ってたわけえ
？」

「いや別にどこでもいいんだけどさ、沖縄出身の人って周りにいないからちよつと意外だなと思っただけなんだよねってお前は話聞けよ！」

自分で質問しておいたくせに答えには一切興味を示さず、ネチっ子にはにまにましながら早速「ミミガー煎餅」を開封し、一枚手に取っていた。

「うわあこれえ、完全に耳の形だあ」

うわあとか言いながらもさすがはDMネチっ子、大変嬉しそうである。私も一枚摘んでみる。ミミガー煎餅は、正に豚の耳をそのままプレスしたような、謳い文句に偽りのない、素敵にリアルなお菓子

である。

一口齧る。指で持った時点でしっとりとした感触が存分に伝わって来たので粗方予測はしていたものの、それでも煎餅としての威厳を失っていないことを期待していたのだが、やはり口当たりもしっとり、というかほぼスルメだった。

「んー濡れ煎餅みたいだなあ」

ネチっ子は目を閉じて首を上を向けながら味わって食べている。濡れ煎じゃねーよ。明らかにスルメだろがよ。まあ味はそれなりだけど。次行こう、次。私はラフテー饅頭の包装紙を容赦なくびりびりと引き裂き、箱の中身を引っ張り出した。普通の饅頭と同じくらいのサイズの四角い角煮が八個、個別包装されている。一つ開封して半分ほど齧った。そして悲鳴を上げた。

「何よこれ、ちょー甘いんだけど！」

「オナさあん、何言ってるのお？ 饅頭なんだからさあ、甘いの当たり前じゃない？」

同じくラフテー饅頭、略してラフマン、もうちょつとでラフマニノフ、を躊躇うことなく食べるネチっ子が言った。何言っちゃってるのはそっちだろ。肉まんという、手に取るだけで幸せになれるあの癒し系饅頭を知らんとは言わせない。

「だってこれ、どっからどう見ても豚の角煮でしょうが。しょっぱい系のお菓子じゃないの？ つーかスゲー脂っこいんですけど」

甘ったるい上に脂っこくて、口の中が一気に気持ち悪くなった。慌てて冷蔵庫を開けて飲み物を探す。さっぱりと、おいしいお茶が欲し

かったがこういうときに限って品揃えが悪い。全く以って役立たずである。

ぱつと見お茶は見当たらない。仕方ない、水でもいいやと注意深く上から順に見ていくと、見慣れぬ絵柄の350ミリリットル缶のところで視線が止まった。シークワーサージュースとある。これもお土産か。私は冷蔵庫から出して、プルタブを引いた。一口飲むと、甘味と酸味のバランスがちょうど良い、柑橘系の爽やかな風味が口に広がり鼻から抜けた。うん、これは美味い。

ぐびぐび飲んでいると、ネチっ子は、聖子さんチョイス沖縄土産最終章である、「ゴーヤーシュークリーム」に手を付け始めた。箱の中にはやや小振りのシュークリームが可愛らしく並んでいる。外から見た限りでは怪しい点は見受けられないのだが……

「あ、うまあい」

恐れを知らぬネチっ子が、一口食べてにまにまと嬉しそうだ。

「ちょっと見せて」

私はネチっ子のシュークリームを持つ右手を顔の前に引き寄せる。歯形のついたその中のクリームは淡いパステルグリーンで、そこでゴーヤが控えめに主張している以外は至って普通のシュークリームのような。私も一つ頂こう。ほんのり青い苦味が感じられる程度で、多分言われなければゴーヤだとは気付かないかもしれないな。ま、アレと同じだね。うなぎパイ。

一通り食い散らかすと、ようやく龍馬がお目覚めである。

「ん……ん？　　んん！？　　あー！　　何だお前ら勝手に食いやがって！」

「だって聖子さんの許可は貰ってるもんね」

「いくら聖子さんの土産でも、オレに渡された時点でオレの物だろうが！　食いたいんならオレの許しを得るのが筋だろうが！」

お土産のお菓子ごときでいちいちうるさいな。器の小さい男め。

「し、しかも岡崎テメエ！　大事に飲んだたシークワサーを開けやがったな！」

龍馬は泣きそうな顔になった。

「ああこれ、これが一番美味しかった」

私はにつこり可愛く笑って、最後の一滴まで飲み干したシークワサージュースの空き缶を顔の横で振って見せた。

「数が少ないから毎日三分の一ずつ飲んだのに……つーか何しに来たんだよ！」

「何って……なんだっけ？」

私はネチっ子の顔を見る。

「僕知らないよお。オナさんが悩みがあるって言うから来たんだよお」

「あ、そだ、思い出した」

沖縄土産の思わぬ奇襲に盛り上がりすぎて、本来の目的が土星のリング辺りまで飛んで行ってしまった。気を取り直して私は、アイ姉

さんがなぜパンチラ撮影で死ななければならなかったのかを、パンチラに理解ある二人の若者に問い質した。

龍馬は難しい顔をしているが、完全にポーズであることはお見通しなのだ。ネチっ子に目をやると、眉間に皺なんか寄せちゃって、いっつになく真剣な表情をしている。さすがネチっ子エロ神童、いや、もう十五だからエロ才子かな？ どっちにしてもすすきりと納得のいく解答が得られそうだ。

ガキの頃は自分が世界の中心だ

「あ、分かったぞ」

先に口を開いたのは意外にも龍馬だった。なーんだ、ちゃんと考えたのね。

「あれだ、階段落ち」

「階段落ち？ 銀ちゃん？」

「誰だよ銀ちゃんて。だってパンチラだろ？ 駅かなんかで階段上ってる女子高生追っかけてって、撮影に夢中になるあまりバランス崩して後ろに転倒、打ち所悪くてそのまま、みたいなさ」

うーむ、なるほど。有り得くはないか。すると今度はネチっ子が手を上げた。

「はいはい、それならさあ、東京駅からさあ、デイズニーランドに行くときにさあ、物凄おく長あいエスカレーターがあるんだよねえ。距離が長いからロングスパンでの撮影が可能だし、きつとそこじゃないかなあ」

「いや、長いエスカレーターなら池袋にもあるぞ。ハンズの横のサンシャインの地下に繋がってるヤツ。つまりこういうことだ。そのアイって女はエスカレーターの下で獲物が来るのを待っていた。そこヘナイスなミニスカJK登場。すかさずぴったり後ろに張り付いて、撮影開始。あと少しで地上に到達、ってところでそのミニスカイケイケ盛り盛りJKが盗撮に気付き後ろを振り返った。焦ったアイは思わず身体のバランスを崩し落下」

可能性はくはないが、今いち腑に落ちない。

「んーでもさあ、そんな長いエスカレーターで上から落ちてきたら他の人たちも巻き添えになるわけでしょ？ 下手すりゃ何十人も乗ってるかもしれない。だとしたら結構な大事故だよね？ テレビのニュースでも大々的に報じるだろうし……池袋でそんなことあったっけ？」

「そんなのお前、オレ達が小学生くらいのときの出来事かも知れないじゃねーか。ガキの頃は自分が世界の中心だろ？ 世の中のニュースなんて関心ないし覚えてないって」

「うーん、でもなあ……」

「何だよ。完璧だろ。これにて一件落着だろ」

「だってさあ、アイ姉さんはパンチラのプロだよ？ そんな素人みたいな単純なミスするかなあ」

「あのなあ、どんな経験豊富なライフセーバーだって溺れて死ぬかもしれないんだぞ？ 山登り一筋三十年、登頂回数四百回超のベテラン登山家だって、天候を読み間違えて雪崩に巻き込まれたりするんだぞ？ いくらプロフェッショナルでも一瞬の隙を突かれたら即命取りになるんだぜ？」

龍馬は鼻息荒く言っただけだ。山と海はそりゃあ常に死と隣り合わせだけども、わけでもパンチラですよ？ 命のやり取りが頻繁に発生するとは考えにくいなあ。すると納得のいかない私に見かねたのか、はいはい、とネチっ子が手を上げる。どうやら新たな意見を発表するらしい。皆さん静粛に。

「つまりさあ、こういうことなんじゃあないかなあ。アイさんはさあ、きつと悪の組織と戦ってさあ、敗れたんだと思うよお」

「悪の組織い！？」

私と龍馬が見事にハモった。また何を言い出すのかと思えば……す

るとエロ才子ネチっ子はベッドに寝そべる龍馬をどかし、その上にぴよんと正座のままで飛び乗り、えへん、と空咳をし、口を麻生さんみたいにひん曲げて、語り口調で話し出した。

「それは今から三年前のこと、都内を中心にある組織が暗躍し、一般人が被害に遭う事件が次々と発生していた。その悪の組織の名前を『モニカ』と言う。モニカと言っても元祖カッつけシンガー吉川晃司の初主演映画『すかんぴんウォーク』の主題歌にして彼のデビュー曲である『モニカ』とは一切関わりの無いことをここに明言しておこう。

ここである『モニカ』とはイタリアはウンブリアのペルージャ、チッタ・ディ・カステッロにて産声を上げ、数々の映画に出演し、その人間離れた妖艶さで世界中の男たちを虜にした正にイタリアの至宝、モニカ・ベルッチに由来するのである」

な、何か話が壮大になってきたんですけど……っかそれだけのセリフ、よく噛まずに言えたね。

「では何ゆえその組織がモニカを名乗るのか？ それは組織を牛耳る頭領というのがこれまたモニカ・ベルッチに負けず劣らずの美人というか美少女で、通り名をクレオパトラと言った。クレオパトラと言えば、最近になって何やら鼻が高いの低いのと賛否両論あるものの、世間では世界三大美女の一人で知られている。

何を隠そう本家モニカ・ベルッチは、以前『ミッション・クレオパトラ』という、タイトルからしてどうかと思われる映画に出ているわけですな。ま、私は実際見たわけではないので内容についての意見は控えさせて頂きたい。つまり、組織の頭が美人で、美人と言えばクレオパトラ、で、クレオパトラに関する映画に出ていたのが

モニカ・ベルッチ、とこういう三角形が成り立って、その悪の組織は『モニカ』と相成ったわけでございます」

そこで言葉を区切ると、ネチっ子は軽くお辞儀をした。私と龍馬はもちろんベッドの下に体育座りで、カバのように口を開けて見上げ、ネチっ子の語りをただただ聞いている。田倉良太よ、お前は一体何者なんだ……

こんなことなら常日頃から下着にも気を使うべき

「さてさて、一般市民の、とりわけサラリーマンのオジサン連中を恐怖のどん底に叩き落とした『モニカ』の正体とはこれ即ち女子高生の集団だったわけです。美少女コンテストに出場すればぶっちぎりで優勝間違いなしの頭領、クレオパトラの下に集結したのがこれまた飛びっ切りの美少女ばかりで、しかも全員偏差値も抜群に良いときたもんだ。

表向きは『美人揃いの秀才集団』として知られていたこのグループ、当然懂れる女の子は数知れず、当時の女子高生の間では『モニカ』に入ることが一つのステータスになっていたわけですな。一見すると容姿端麗成績優秀品行方正良妻賢母の彼女達は学校の垣根を超えて行動を共にしていたわけでありますが、では裏で一体何をやっていたのか？ 皆さんも薄々お気付きのことと思われませんが、どうですか？ お分かりですか？ え？ お分かりにならない。ではご説明いたしましょうかね。

悪名もプライドも高いモニカでございます。万引きなんてセコいことはやりません。狙うはそこその金を持った中間管理職の中年サラリーマン。会社に行けば使えない部下の責任を取らされ上司に叱られる毎日で、家に帰れば妻と娘に煙たがられ休みの日でも休まらない。もちろん性生活なんて何十年も無縁無縁の無縁仏で、かといって風俗に行くほどの勇気もない。

そんなベルトコンベアーに乗ったような毎日ではありますが、ある日の仕事の後、いつも通り帰宅ラッシュの山手線に乗り込みますと、目の前からまだあどけなさの残る顔なのに、カラダは既に一人前で、制服の短いスカートからは白くほっそりとした脚を惜しげ

もなく晒している一人の女子高生が乗って来るじゃありませんか。乗客は絶えず後から後から乗ってくるもんだからさあ大変、可愛らしくもいやらしいぷりぷりのお尻が股間にぎゅうぎゅうと当たり、さらさらとした若い娘の髪の毛の匂いが鼻の下をくすぐってくる。

痴漢と間違われやしないかと内心冷や冷やしつつも、ああ、こんな可憐な美少女とあんなことこんなこと出来たら天にも昇る想いだろうな、股間も心もスツキリするだろうな、などとよからぬ妄想に耽ってしまうわけですよオジサンは。するとその考えを見透かすように少女が振り返るではありませんか。いよいよ俺も冤罪で逮捕かと動揺するオジサンの耳元に唇を寄せて彼女は囁いた。

『お父さん、私お腹空いちったな』。お父さんなんて言ってるけどもちろん本当の娘なわけがない。実の娘も年頃は同じくらいだが、狭い家なのにクサイのキタナイのと半径3メートル以内には絶対近付かない嫌われようだ。これは周りの人に聞かれても怪しまれないようにと彼女なりに配慮した発言だったわけですね。

最初言っていることが理解できなかったお父さんではありますが、電車が次の駅に到着すると、『行こ?』と大きな瞳を輝かせ、可愛い娘はお父さんの手を引き引き降りようとする。そこで初めてお父さんが付いた。は、もしかこれが巷で噂の逆援助交際、略して逆エンかと。お父さんの心臓は、まるで初恋の相手にラブレターを渡す中学生の如き波打っておるわけです。可愛い娘はホームの階段を降り、するすると改札を抜け、街に出ると迷うことなくホテル街へ。

あれ? お腹が空いたんじゃないのかな? でもまあ一戦交えた後に食事をすればいいか、と暢気に構えるお父さん。引っ張られるままにあれよあれよとラブホテルに到着。頭をよぎるのは新婚当初のいじらしさは欠片も無くなり、この頃じゃオジサンである自分よ

りも腹が出て、すっかり女を諦めて雅山みたいになっちまった口うるさいだけの妻の顔だが、そんなものは目の前の可愛い娘への欲望の下、象が蟻を踏み潰すかの如く一瞬にして消え去ったわけでございます。

久し振りに、本当に久し振りに我が息子の出番が、日の目を見るときが来たのだ。穿き古したパンツだけど大丈夫かな、こんなことなら常日頃から下着にも気を使うべきだった……と悩む間もなく可愛い娘においでおいでと誘われるがまま部屋へ入ると、お父さん、そこで意識が無くなった。次に気づいたときは、雀がちゅんちゅんカラスがかあかあ、カーテンの隙間からは朝の光が漏れている。

はて、私は一体どうしたのだろうか？ 朦朧とする意識の中、お父さんは記憶の糸を辿る。昨夜は確か、可愛い女子高生に連れられてここまで来たはずだ。果たして私はあの子とちよめちよめしたのだろうか……とパンツの中を確認するものの、我が息子はいつもと変わったところは見られない。ふと鞆に目をやると、なぜか開けっ放しで、まさかと思い財布を確認すると……きれいさっぱり現金が無くなっていたのでございます」

エロ才子ネチっ子いよいよ口が滑らかである。だんだん話が見えてきたので合いの手でも入れてみるか。

昼にツケ麵食ってきた

「それってつまり、強盗ってこと？」

「さすがは聡明なお嬢様、さようでございます。またの名をオヤジ狩りとも言いますな。一人がターゲットに接近し、上手いこと言ってホテルに連れ込む。部屋にはあらかじめ仲間が待機していて、これから可愛い娘とちよめちよめできるぞと有頂天のオジサンが部屋に入ったところで殴るなり催眠剤を使うなりして意識をなくしちゃうわけです。」

モニカの一味はこうして鬱憤ストレス溜まりまくりのしがない中年サラリーマンに狙いを絞ったってわけ。後に判明したことが、実際被害に遭ったオジサンは、相当数に上っていたんだが、事件はなかなか明るみに出なかったんだな。なぜなら被害を届け出るオジサンが皆無だったからねえ。何だって殴られて現金抜かれて警察にも行かずに泣き寝入りしていたのか？ そりゃあそうだ、だって相手は高校生だもの。警察に訴えに行ったところで『児童買春しました』って白状するようなもんだから。逆に自分が捕まっちゃう。

それともう一つ、モニカはターゲットを選ぶ際、注意していたことがある。それはね、左手の薬指だ。そう、結婚指輪だねえ。尻に敷かれっぱなしのウダツの上がないオジサンが、女子高生に誘われてホテルに行ったなんて口が裂けても尻が裂けても怖い怖い奥さんの前で言えるはずもないときたもんだ。モニカの思惑通り、既婚者ばかりを狙った効果は絶大で、犯行発覚の遅れに拍車をかけたってわけだ。かくしてモニカの犯行はメンバーの増員と共に拡大の一途を辿るんだねえ。

しかし被害者のオジサン連中も黙っちゃいなかった。そこはテク

ノロジーの発達した二十一世紀、便利な便利なインターネットと言うものがあるじゃありませんか。にちゃんねるだのさんちゃんねるだのミクシイだのセクシイだの、匿名性をいいことに、モニカにヤラれたオジサンたちがあることないこと言い始めた。これが一期ネット上で結構な話題となったわけだが、それでもヤラれるオジサンは減るどころか増える一方。

もちろんこのニュースを知ったオジサンは、明日は、いや今晚は我が身と各々気を引き締めて出勤するわけだが、ストレス満載の毎日に、突如舞い降りた天使のような美少女の誘惑に打ち勝つことは土台無理な話だった。しかもこの頃になるとモニカのメンバーは百人を下らないと言われ、制服も違う女の子が、時を同じくして色々な場所で声をかけるもんだから外国から持ち込まれたインフルエンザみたいに防ぎようがなかった。

モニカの一の特徴は、『特徴のなさ』だったんだねえ。キーワードはたったの二つ、即ち『美少女』と『高校生』だけ。学校も学年も関係ない。中には中学生も混じってたなんて噂もちらほら。とにかくこの組織は近付けば消えてしまう蜚気楼のように捉えどころがなかったってえわけだ」

「でもよ、モニカは表向きは礼儀正しいお嬢様軍団だったんだろ？ それと犯罪とどう結びつくんだ？ ネットで話題になるって、被害に遭ったオッサンも『モニカ』って名前は知らないわけだろ？」

意外にも龍馬は話を理解していたようだ。

「おっとそこのお兄さん鋭いねえ、さては単なるイケメンじゃあないね？ 昼にツケ麺食ってきたね？ その通り！ オジサン連中が話題にしたのは『都内を中心に、組織的逆エン強盗を働く女子高生がいるらしいから気を付けろ！』ということであって、その当時は

モニカの『モ』の字も出て来なかった。これらの犯行がモニカの仕業によるものと判明したのは、クレオパトラ以下主力メンバーが捕まった後の話であって、オジサンたちがネットでやいのやいの言っていたときには、モニカは『美少女秀才軍団』として、表向きは街を闊歩していただけなのさ」

「でもさ、そんな可愛い子達が固まって行動してたら目立つでしょ。周りの人たちに顔が知られちゃう可能性も出てくる。そうしたら強盗もやりにくくなるんじゃない？」

「おやおやここにも頭脳明晰な探偵さんがおいでだよ。おーい！山田くん、座布団じゃなくて座椅子持って来て！ 仰る通り、クレオパトラとその側近たちは一般人にもそこそこ顔が知れていた。特に普通の女子高生の間ではカリスマ的存在だったからねえ。」

しかし多くの黒い組織がそうであるように、トップは決して自ら手を染めない。実際に犯行を行っていたのはモニカヒエラルキーの下の方、いわば平社員、即ち『平モニカ』達だったんだねえ。クレオパトラはその上ガリを全て自分の手元に集めさせ、それを百何十人のメンバーに分配してたんだ。詳しいことは分からねえが、クレオパトラはかゝるピンはねしてたって話だよ。噂じゃ月に七桁稼いでいたそうだ」

七桁と聞いて龍馬がいちじゅうひゃくせんまんと指を折る。

「じゅうまんひゃくまん……百万！？ 月収百万！？ てことは年収一千万越えか！？ オレの目標をあっさりクリアしやがって……くそっ」

グーで腿を叩き本気で悔しがる龍馬。相変わらず馬鹿だなあ。そんな龍馬を尻目にエロ才子ネチっ子は、一際声を高くした。

ご褒美にアメちゃん

「天網恢恢疎にして漏らさず、新たな病原体が出現すればそれを撃退する新薬が登場するように、悪が蔓延ればそれを討つべく正義もまた現れるのが世の常というもの。法では裁けずともお天道様は決して見逃しやあしないのよ。そう、お察しの通りここで登場致しますのが稀代の女盗撮師、コードネーム『I』であります。」

Iはそのあまりにも見事な、そして斬新かつ革新的なパンチラ動画により世の男共、とりわけオジサン達から絶大な支持を受けておりました。中でもIを一躍パンチラ界のスターダムに押し上げたのが、これまで完全にタブーとされていた『校内潜入モノ』でございます。これは文字通り女子高に通う生徒が自らカメラを携え盗撮師と化し、教室や廊下など学校の至る所で友人知人同級生から後輩先輩まで可能な限りの盗撮を行うという、見付かれば正に死刑に等しい制裁は免れない危険極まりない行為でありますな。

当時まだ高校生だったIは、女子高に通う自らの立場を最大限に活かし、世の男性共の下半身を満足させるために敢えて自らこのタブーの中に飛び込んだわけです。これぞプロフェッショナル。やんやんやの拍手喝采、男の股間はスタンディングオベーションの雨霰。

しかし、ハーフのような美しい顔立ちと、明晰な頭脳と明るく誰とでも分け隔てなく話す人懐こさを併せ持つIは、当然クラスでも人気者で、誰も彼女が鞆にカメラを隠し持っているなどと疑わなかったわけだ。まあIでなくとも同じ学び舎で机を並べて共に泣き笑いする友達が、まさか自分を盗撮しているなんて夢にも思いやしませんかね」

ニヤリと笑うネチっ子。しかしである。

「おいおいちょっと待てよ、パンチラ盗撮で一体どうやってモニカ軍団と戦うってんだ？」

そーだそーだ。龍馬の言う通りだ。だがネチっ子はドMのなせる業なのか、反論されても大変嬉しそうである。

「お、ナイスリアクションだねえそのイケメンお兄さん、そういうのが欲しかった！ ご褒美にアメちゃんやろか、ほれ。いいからいいから、若いんやから遠慮すなや」

ネチっ子はいつの間に仕込んでいたのか、ポケットから本当に飴を取り出し龍馬に手渡した。戸惑いながらもそれを受け取る龍馬。いいな、はちみつきんかんのど飴。

「さあてお立会い、ここからが見物だよ。Iはいかなる方法でモニカに勝負を挑んだのか？ だーけーどその前に、なぜIがモニカと戦おうと思ったのか、その経緯をお話せねばなりませんな。」

そもそもIはパンチラ界のスターではあったものの、所詮は裏社会のしがたないイチ盗撮師でしかないわけでございます。盗撮以外に何の特技もないし、格闘技の経験があるわけでもない。有り触れた普通の女子高生に過ぎないのです。いくら自分を支持してくれているオジサン連中が被害に遭っているとは言え多勢に無勢、わざわざ無謀という名の正義感を振りかざして危険を冒す必要性は全くないんだな。

しかしである。ここに一つの悲しい物語があった。それはIがま

だ小学生の頃の話。夕食時、美味しそうに湯気を立てる食卓の前で、Iはいつものようにパパの帰りを待っていた。優しくってカッコイイ自慢のパパ。家族全員で食卓を囲むのが日課だったのだが、どうしたのかその日はいつになってもパパは帰って来ない。

九時になっても十時を過ぎても玄関のチャイムは鳴らず、『アイ、ただいま』という自分を包み込むような声は聞こえてこない。目の前の食事はすっかり冷え切ってしまった。『先に食べよう』と言う母の言葉にも耳を貸さず毎日パパとの夕食を楽しみにしているIは、頑なにパパの帰りを待ったのである。だがついに愛しのパパは戻ることなく時計の針は十二時を回り、Iはどうとう夕食を食べることなくテーブルに突っ伏して深い眠りへと落ちてゆく」

「そ、その親父は結局どうなったんだ？」

拳を握り、生唾をぐくりと飲み込みネチっ子の話に喰らいつく龍馬。ちよっと可愛い。

デビュー曲は『恋するクレオパトラ』

「残念ながら次の朝、公園で変わり果てた姿で発見された。Iの大好きなパパは、何者かに暴行されて、命を落としたのである。その後犯人はすぐに判明した。それは当時、中年サラリーマンばかりを狙いオヤジ狩りを繰り返していた女子高生のグループだったんだねえ。」

彼女達の手口はこうだった。まず一人が夜道を歩くオジサンに接近し、エンコー話を持ちかける。誘いに乗ったオジサンが彼女について行くとなにやら人気の少ない公園へ辿り着いた。ホテルじゃないのかなと不審に思っただけのことを訪ねると、『ホテルじゃお金がもったいないし、時間もかかるから、外で済ませちゃおう?』と可愛い顔して答えるではありませんか。

それもそうかな、制服着たままもまたアリかな、と下心で鼻の穴をぷくぷくさせながらオジサンさらについて行くと、そこには複数人の仲間が待ち構えているのです。後悔先に立たず、あつという間に囲まれて殴る蹴るの暴行を受け、気を失っている間に財布を奪われてしまう」

「そ、それって……」

人のこと言えないな、私も思わず手に力が入ってしまった。

「そう、モニカとほぼ同じ手口だ。もっともスマートなモニカはそこまで暴力的なことはやらなかったがねえ。」

さあて、話を戻してIのパパである。優しくカッコイイパパは、妻を愛し娘を愛し何より家族を大切に作る誠実なパパの中のパパだ。

相手が誰であろうと、そんな簡単に誘惑に負けるようなちやちな男じゃあないんだな。しかし声をかけたその女子高生は自分の容姿に絶対の自信があり、これまでついて来なかったオジサンはいない。今回も楽勝じゃんと話しかけたところ、I パパはまるで取り付く島もない。

あっさり断られてしまい屈辱を受けたと思い込んだ彼女はすかさず仲間を呼び寄せて、I パパを力ずくで暗い公園の中へ引きずり込んだんだな。いつも通り軽く痛めつけて金を奪い取るだけのつもりが、当の彼女は逆上していて加減が利かなかったのだろう、力が入り過ぎたのと打ち所が悪かったのと、I パパは二重の不幸に見舞われてこの世を去ってしまったってわけだ」

「じゃあその事件でアイ姉さんは女子高生に恨みを持ち、盗撮に走ったってこと？」

「そうさその通りさ。ま、ささやかな抵抗だがね。でも仕方ない。何の力もない少女が、たった一人で世の女子高生達に立ち向かうにはそのくらいが限界だったからねえ」

「でもよ、悪いのはそのグループだけだろ？ 何でそいつらに直接仕返ししなかったんだ？ 他の女子高生は何も関係ないんだろ？」

「そのグループはねえ、全部で六人だったんだが、I パパを殺してしまったことに焦り戸惑い後悔し観念した。そして捕まって恥を晒すくらいならいっそのこと……って思ったかどうかは今となっては闇の中、死人に口なしだね」

「え！？ 死んじやったの！？」

「マンションの屋上から仲良くお手々繋いであの世にダイブしちゃったってわけ。だからI は犯人に直接仇を討つことは不可能となってしまう。かといって大好きなパパを殺された恨みは日を追うごとに増すばかり。」

そうして小学校を卒業し、中学を出て自らも憎むべき存在である

女子高生になった。やがて高校生活も残り僅かつてときに現れたのがモニカだったんだな。勘の良いIはオジサン連中が騒ぎ出す少し前からモニカが怪しいと踏んでいた。Iは早速モニカの正体を暴くことを決意する。何しろ高校三年生にして盗撮歴は六年を超えてるんだ、尾行するのはお手の物、クレオパトラの後をつけ、あつという間にモニカのアジトとそして、美少女形無しの卑しい顔付きで札束を数えるクレオパトラの裏の顔を突き止めちゃったんだな。

疑惑は確信へと変わり、これで闘争心に火が点いた。モニカの存在は幼き日の愛するパパを襲ったあいつらと完全に重なった。しかも偶然か天の悪戯か、クレオパトラとIは同い年。パパ見ててね、必ずこいつらを地獄の底に突き落としてやるから、Iは仏壇に飾られた、若過ぎる笑顔のパパの遺影に手を合わせて復讐を誓ったんだねえ」

ちよいと失敬、と言って才子ネチっ子はペットボトルのポカリで喉を潤した。

「これで役者が揃い舞台は整った。その頃になるとクレオパトラとその側近である通称四天王はティーンオブファッション誌を賑わせるようになっていた。ま、これは必然的な流れだね。何たってクレオパトラは女子高生の間では既に有名人であり憧れの的だ、業界が放っておくはずがない。その顔はあれよあれよと露出度を増し、日を追うごとに有名になり、都内から関東一円、ついには全国区になって、高校卒業と同時に正統派美少女アイドルグループとしてデビューも決まっちゃった。ちなみにデビュー曲は『恋するクレオパトラ』。

さあ、面白くないのはIだ。大好きなパパを殺したあいつらと同じことを繰り返す憎むべきクレオパトラが、裏では悪行三昧のクレ

オパトラが、空高く燦々と輝く真昼の太陽の如く皆の視線を一身に浴び出したんだからねえ。女子高生への復讐心と共に育ちひたすらパンチラ盗撮という裏社会を歩いてきたIは、このニュースを聞くと阿修羅のごとき形相となり憤怒の炎に包まれた」

清純派女子高生カリスマモデルが実は

だが落ち着け。急いては事を仕損じる。クレオパトラが全国的な有名人になりつつあるのはむしろ好都合なのではないか？　ここでクレオパトラの裏の顔を暴き、でっかいスキャンダルを一発打ち上げればデビューは御破算、いいえそれだけに止まらない、犯罪に手を染めていたんだ、社会的にも抹殺できるだろう。風向きは悪くない。待ってなさいクレオパトラ、二度と這い上がれないように完膚なきまでに叩きのめしてあげるわ……

相手に不足はない。Iは最大級のダメージを与えるためにはどうすればいいか考えた。時間はない。本格的にデビューを果たし、芸能人となってしまつてはガードも固くなり、近付くことさえ困難になつてしまうからね。そしてIは大胆な行動に打って出た。高校三年生の二学期という時期に、何とクレオパトラのいる高校に編入しちゃったんだねえ。灯台下暗し。確実に一撃で仕留めるためには敵の懷に飛び込んだ方が得策だと考えたわけだ。

それにしても普通、そんな時期に、しかも高校で転校なんて有り得ない話だ。しかもクレオパトラの高校は進学校で、普通に入学するのだって難しいのに。しかし天はIに味方した。その理事長がなんとIのパンチラ動画の大ファンだったんだなあ。顧客リストに理事長の名前を見付けたときのIの喜びようといったらなかったねえ。Iは早速女子高生トイレ盗撮未公開シーン特典付きDVD（無修正）を手土産に、あっさりと入学の許可を得ちまつたってわけだ。全くロクな理事長じゃねえな。もちろんそれだけじゃなくIだって全国模試で常にトップテンをキープするほどの頭脳の持ち主だ、実力的にも問題はないんだけどね。

ここからIの幸運の齒車はどんどん加速する。理事長の配慮、というかIの理事長に対する無言の圧力によりクラスまでクレオパトラと一緒にしてくれたんだねえ。さあこれで第一の関門にして最大の難関は見事突破した。後はクレオパトラと仲良くなってプライベートの秘密を探るかもしくはI自らもモニカに入り、悪事を暴くか……しかしもはや有名人、ただでさえ取り巻きの多い上に表と裏の顔で人一倍忙しいクレオパトラだ、いきなり現れた私なんかを相手にするだろうか、そう思っていたところ、まだまだ天は見放さない。

その日の放課後、教室で一人策を練っているところに話しかけてきたのが誰だろう、クレオパトラ本人だったんだねえ。Iは持ち前の明るさと話術とクレオパトラとはまた違ったタイプの美しさであつという間に彼女を虜にしてしまった。二人は一気に親密になり、忙しいクレオパトラは時間が空けばIと会い、仕事中也休憩時間にはメールをして来た。Iは何故クレオパトラが自分に興味を持ったのか不思議でならなかった。恐らく高校で転校生が来るなんて珍しいからだろう、くらいにしか考えていなかったんだが、そうじゃないんだな、これが。

年の瀬も迫り空っ風の吹き荒ぶある日曜日、完全にオフだったクレオパトラは自宅にIを招いた。こないだ雑誌の特集でシフォンケーキ作っただよね、で、それからちよつとハマっちゃって家でも焼くようになったんだ。I食べに来てよ。電話でそう言うクレオパトラにIは二つ返事でOKした。もちろんたくさんの盗撮用カメラを設置するために。

Iは苛立っていた。最近のクレオパトラは既にデビューに向けて身辺の整理を始めていたのだ。『モニカ』の頭領も二代目に引継ぎ引退し、アジトにも滅多に顔を出さなくなっていた。金ももう受け取っていないようだし。このままでは裏の顔は暴かれることなく完

全にキレイな身体で芸能界デビューを果たしてしまう。それだけは
何としてでも阻止せねば。こうなったら家中にカメラを設置して風
呂やトイレのシーンを撮り溜めて、デビューと同時にネットでバラ
撒くか……

クレオパトラは一人暮らしだった。高校生のクセにこんな高そう
なマンションに住みやがって、ドアのチャイムを鳴らしてクレオパ
トラが出てくるまでの、憎しみと妬みの入り混じったIの顔は見る
に耐えない醜いものだったに違いない。クレオパトラは完全にIを
信用していた。二人でケーキを食べ、お茶を飲み、傍から見れば仲
の良い女子高生のガールズトークだ。

しかし何故かIは突然睡魔に襲われ始めた。何でだろう、眠くな
ってきちゃった。いいよI、きつと疲れてるんだよ、ベッドで休み
なよ。肩を支えられて寝室に運ばれるI。どのくらい眠っていたの
だろう、Iは朦朧とする意識の中目を開ける。違和感。思わず自分
の身体を見渡すと着ていたものが全て脱がされていた。はっと横を
見るとそこには同じく裸で横たわるクレオパトラがいた。賢いIだ、
状況を理解するのにそう時間はかからなかった。そう、クレオパト
ラは同性愛者だったのだ。

Iは心の中で快哉を叫んだ。清純派女子高生カリスマモデルが実
はレズビアン、これは一大スキャンダルだ。するとクレオパトラは
白くすべすべとして背中と肩を震わせ涙を流しIに言った。ごめん
ねI、私、転校してきたあの日から、教室に現れたあの日からIの
こと好きになっちゃったんだ、でも話しても理解してもらえないと
思ったから、睡眠薬で眠らせて無理矢理……ヒドイよね、嫌いにな
ったよね、でももう止められなかったんだ、Iが欲しくて欲しくて
……Iはその肩をそっと抱いた。大丈夫クレオパトラ、嫌ったりな
んかしない、私もあなたのことが好きだから。するとクレオパトラ

の表情は、どんな雑誌でも見せたことのないくらいの輝きを放った。
危ない危ない、私までこの女の虜になるとこだった」

「まじかよ……アイ姉さんまで……」

口を手で覆い、本気で驚く龍馬。いやだからね、これはね。

パンストOLシリーズ 逆セクハラ編

「それから二人の情事は加速度的に増えていった。クレオパトラはIの身体を貪った。Iはもちろんその一部始終を寢室のあらゆる角度からカメラに収めていた。Iは同性愛者ではなかったが、この憎むべき相手を地獄に叩き落とすためだったらそんなことは大したことではない。それに、クレオパトラは単純に美しかった。

年が明け身も心も完全にIに溺れたクレオパトラは、いつものようにIを部屋に招き、キスをした後であるものを持ち出した。ね、これ使ってみない？ スッゴイ気持ち良くなれるらしいよ、特に女は。そう言っただけに広げたのは白い粉、紛れもない麻薬である。クレオパトラはモニカの『仕事』の金で、麻薬にまで手を出していたのだ。戸惑う表情を作りながらもIは内心勝利を確信した。

カリスマモデルが同性愛者というのは確かにスキャンダルではあるが、それ自体は違法でも犯罪でもない。性が解放された現代ではむしろカミングアウトした勇氣に拍手が送られる可能性だってある。しかし、そこに麻薬が加わればどうか、これはもう火を見るより明らかだ。それからというものの、二人で身体を重ねるときには毎回コークを使うようになっていった。Iもそのこれまでとは比べものにならない快感に、思わず使命を忘れるようになるほどだった」

「まじかよ……コーラでセックスが気持ち良くなるのかよ……今のうちから飲んどこうかな」

いやだからね、コークってコーラのことじゃなくってね。

「これで準備は整った。Iはその後クレオパトラの恋人を演じ、やがて卒業、クレオパトラ&モニカ四天王は満を持して華々しいデ

ビューを飾った。そのこれまでにないレベルの美少女振りに、連日テレビや雑誌を賑わすクレオパトラ。デビュー曲『恋するクレオパトラ』も史上初の一千万ダウンロードを記録し話題沸騰。Iは多忙を極めるクレオパトラとはもはやメールのやり取りすら出来ない状況だったが、もはや彼女に用はない。矢は完成したのだ。それも核爆弾級の破壊力を秘めた矢が。

Iの目は一点に狙いを集中し、両腕は弓を引き絞っている。あとはタイミングだ。Iは待ったんだねえ。クレオパトラの顔が、女子高生だけでなく一般市民にも浸透するのを。そして機は熟した。誰もが国民的アイドルと認識し始めたそのとき、Iは矢を握る手を離した。あらゆる動画サイトに二人の痴態と麻薬を使用している場面を、嫌というほど流したのだ。

容赦のないIの攻撃はこれだけに止まらない。Iはモニカの下の方のメンバー、即ち汚い仕事を行っている者とも接触し、顔は写さないという条件でその悪事を洗いざらい喋らせ、その動画も流しまくった。もちろんクレオパトラの指示でやっていたということも」「しかしなあ、いくらなんでもやり過ぎじゃね？　そもそもI姉さんはクレオパトラに個人的な恨みはないわけだし」

龍馬がもつともな意見を言う。しかしネチっ子は完全無視。凶星を突かれたか？

「ダメーじは計り知れないほど大きかった。そりゃそうだ、国民的美少女と言ってもいいほどの彼女が実は同性愛者でしかも麻薬にまで手を出していたんだからねえ。デビュー後、マスコミを賑わせたクレオパトラは、動画流出後もマスコミを騒がせ続けた。もちろん後半はスキャンダラスな記事ばかりだがね。

麻葉常習の疑惑が持たれると、家宅搜索が行われた。そしてあつけなく大量のコカインが見付かった。クレオパトラはもはや完全な依存症に陥っていたのである。それを知ったIは少しだけ心が痛んだ。どうせ麻葉でぼろぼろになるのなら、この一時だけでも夢の中にいさせてあげてもよかったかな……と」

「それはつまり、I姉さんもクレオパトラが好きになっちゃったってこと？」

そこでにやりと笑うネチっ子。

「さうあそれはどうかな？　ま、これにて女子高生への復讐劇は幕を閉じるわけだが、残ったIはどうしたか？　クレオパトラを破滅へと追いやり、モニカの悪事をバラした張本人だ、恨まれるには充分すぎる理由がある。しばらくはホテルを転々とし、身を隠して過ごしていたIだが、ある日コンビニへ行こうと外を歩いていると大勢の女に囲まれた。モニカの残党だ。ついに見付かった。」

辛うじて逃げるI。しかし残党は何十人といて、逃げてでも逃げても執拗に追いかけてくる。ついにIは高層マンションの屋上へ追い詰められた。このまま捕まれば辱めを受けリンチに遭うだろう。しかし覚悟は出来ていた。どうせ酷い目に遭うのならいっそのこと……

逃げるだけの生活にはもう疲れた。それに、私の手で巨大な悪の組織を壊滅させたのだ。これ以上望むものは何もない。パパ、私やったよ、そう言ってIは屋上のフェンスによじ登り満足気な顔をして躊躇うことなく空へ身を投げたのさ」

そしてネチっ子の長く悲しい物語は幕を閉じた。私も龍馬もはしばらく口を利けなかった。何という想像力だ。若干詰めの甘いところはあるものの、この話を私が質問した後、即興で考えたのだとした

ら、紛れもなく目の前のムツツリスケベは天才である。

「って〜いうさあ、映画をさあ、撮りたいんだよねえ」

ベッドでの正座を崩し、ポカリの残りをぐいぐい飲み干した後、ネチっ子はいつものにまにま顔で言った。

「映画って？」

「僕の夢はさあ、映画監督だからねえ。今話したのはさあ、『パンチラ女子高生シリーズ 悲しみ編』なんだあ。色々あるよお。『パンストOLシリーズ 逆セクハラ編』とかねえ」

なんだよ結局AVかよ。余計なことを言わなければ良い感じで終わってたのに。

食事中の一挙手一投足にも細心の注意を払うのです

すっかり暗くなってしまった。結局アイ姉さんのことはよく分らないままだ。ま、そりゃそうだ。そんなこと部外者同士で推測したところで答えに辿り着くはずもない。エフに関してただ一つ分かっていることは、パンチラ撮影を始めたきっかけは、アイ姉さんであること。これはほぼ間違いない。やはりどこの家でも姉の影響力は凄いなあ。

ただいまあ、と玄関を開けると肉と醤油の焼ける香ばしい、食欲をそそる匂いが私の鼻へ吸い込まれ胃袋を刺激してきた。賑やかな声の中から聞こえてくる。足元を見るとお母さんは絶対に履かないような、フェミニン全開のヒールの高いサンダルがきちんと揃えて脱いである。ということは……私はスニーカーを脱ぎ散らかして食堂へ走った。

「お姉ちゃん！」

「あらちーちゃんお帰り。先に頂いてるわよ」

一年振りに見る美しき姉はやはり美しかった。その美貌には磨きがかかっているようだがしかし、今の私は単なる腹減り高校生、ハングリーティーンエイジャーである。姉の美の秘訣を聞き出すのは後回しである。要するに花より団子である。食卓の中央にででんと鎮座する料理は、日本人ならみんな大好きな（お肉が嫌いな人を除く）アレである。

「あ！ すき焼きだ！　ずっりー！　何でもっと早く教えてくんないのさー！」

皿の上の肉は既に半分にまで減っている。もたもたしていたら野菜しか食べられなくなってしまう。するとお母さんが台所から野菜をテニコ盛り盛り盛りに盛った大皿を手に現れた。

「何言ってるの。何度もメールしたでしょ。今日はお姉ちゃんが帰って来るからすき焼きねって」

なぬ？ 私はバッグから携帯を引っ張り出す。二十件のメールは全て母からであった。うーむ、ネチっ子のパンチラJK悲しみ物語にすっかり惹き込まれてしまったからなあ、全く気付かなかった。

「でも何で急に？ 今日来るなら前もって言ってくればいいのに」

私は早速着席し夕食に参戦した。向かいでビール片手に肉を摘むバカボンダディは父親の威厳を保つべく鍋奉行と化している。鍋の中を整理整頓し、野菜はどれから入れるだの、その肉は今入れたばかりだから勝手に食うなどの言っている。

私はバカボンの仕込んだ鍋の中の肉を「まだ早い！」という言葉に無視し、いいのいいの、牛肉なんだから。煮すぎたら硬くなっちゃうでしょ、しゃぶしゃぶだって鍋に入れたら秒殺で食べるじゃない、と脳内で言い訳し、入れた傍から引き上げて、生卵に潜らせ口へ放り込む。とろける食感、それでいて肉本来の旨みが凝縮されているこれは正に……

「宮崎牛よ。お姉ちゃんが持って来てくれたの。100グラム千円だって。こんな良いお肉、生きている内には二度と食べられないからしっかり味わってね」

グラム千円！　どうりで美味しいわけだ。さすがは我が美しき姉、帰省の手土産にもこの心配り。ああどこまでもイイオンナですな。惚れ惚れしますな。鼻高々ですな。しかし、さっきから気になっていることがあるのですが。

「あのーお姉ちゃん、質問があるんですけど」
「なあに？」

美しき姉は、バカボンの許しが出た適度に火の通った宮崎牛を優雅に摘み上げ、生卵に潜らせると口元へと運んだ。予想外に肉が大きく、美しき姉は大きな口を開けざるを得ない。何とか口の中へ収めたものの唇の横に黄身が付着してしまった。美しき姉は、あら、と言ってその肉の油で光る黄身を、赤い舌先でちろり、と舐め取った。

うおおエロいっす！　さすがは師匠！　なるほど、食事中の一挙手一投足にも細心の注意を払うのですね！　その地道な積み重ねがやがては大量の男を誘き寄せることへと繋がるのですね！　いやーやっぱライブの師匠は勉強になるなーってそうじゃなくって。

「お兄さん&ちびっ子の姿が見えませんが……あ、仕事で忙しいから後から来るとか？　で、ちびっ子達はもう寝てる？」

すると美しき姉は、やはりバカボンの許しが出た長葱を鍋から引き上げながら言った。事も無げに。

「離婚したのよ」

「リコン……えええまじで!？」

「まじで」

美しき姉は、箸に挟んだままの長葱越しに私の顔をまじまじと見る。

負けじと焼き豆腐越しに見返す私。美しき姉妹が見詰め合い、視線が正面衝突すること約三十秒。ぽたり、と長葱から汁が垂れた。

「お姉ちゃん」

「なあに？」

「ウソでしょ」

「あら、よく分かったわねえ」

「だってお姉ちゃんがお兄さんと別れるなんて有り得ないもんね。ちびっ子もいるんだし」

「うふふ、ちーちゃんには敵わないわね。ま、人間だもの、時には意味もなく嘘をつきたくなるものよ」

わっはっはとすき焼き囲んで家族水入らずの大爆笑。なんだこの家。

男は種、女は土

心行くまで宮崎牛を堪能した私は、美しき姉と一緒にお風呂に入ることにした。食べ過ぎて腹が出ちった。

私が幼い頃はよく身体を洗ってくれたものだが、最後に二人で湯船に浸かったのはいつだっただろうか。中学に上がってからもう入っていない気がする。とにかくしばらく振りであることに間違いない。

「旦那さんがね、たまには羽根を伸ばしておいでって言うてくれたのよ。家族とも積もる話もあるだろうして。急遽今日にしたのはね、飛行機が取れなかったからなの。いつもは二ヶ月前にしっかり予約しておくのに、今年に限ってうっかりすっかり忘れてたわ」

美しき姉は私の背中を流しながらそう言った。

「でもお兄さん一人でちびっ子たちの面倒見れるの？」

「大丈夫よ、お婆ちゃんのところに残けてきたから」

「えーってことはお兄さんも一人？ 案外自分が羽根を伸ばしたかったんじゃないの？」

「ま、それもあるでしょうね。結婚なんかしちゃうと毎日顔を合わせざるを得ないからね、新鮮さを保つためにはたまには会わない時間も必要なのよ」

今度は私が美しき姉の背中を流す。シミも大人ニキビもない、白く滑らかな背中だ。

「大丈夫かな？」

「何が？」

「浮気とかしてたりして」

冗談ぽく言ってみる。

「そうねえ、どうかしらねえ」

「ま、お姉ちゃんみたいなのが奥さんなんだから他の女なんかに走ることはないか」

「あら、そんなの関係ないわよ。恋人や奥さんがいくら美人でイイオンナでも浮気する男はするものよ。美人女優と結婚したお笑い芸人が、何人も浮気で離婚してるでしょ？」

お、そういえばそうだった。全く、男ってヤツは……と舌打ちしていると、身体を洗い終えた美しき姉は立ち上がり、湯船から洗面器にお湯を汲んで肩から石鹸の泡を流しだした。美しき姉の身体は子供を二人産んだとは思えないほどのプロポーションを維持している。アムロちゃん並みである。私たちは二人並んで狭い浴槽に入り、体育座りで湯の中に身体を沈めた。

「いいちーちゃん。基本的に浮気願望のない男なんていないの。男は常に種を撒きたいと思ってるんだから」

「種？」

「そう。つまり精子ね。で、土壤が子宮。男は種、女は土。母なる大地ってよく言うでしょ？ 手の平に種を一杯持てれば撒きたくなるのは当然の欲求よね」

「じゃあお姉ちゃんはお兄さんが浮気しても許せるの？」

うふふん、と美しき姉は妖しく笑いながら一言。

「殺す」

こ、怖えー。。

「ま、許せる許せないは人それぞれ意見があるでしょうからね、そのことを議論しても仕方がないでしょ？ オスは色んな土に種蒔きをしたという欲求は常にある。そしてこれは例えばガリレオガリレイでも覆しようのない事実なの。私が言いたいのはねーちゃん、男の人と恋愛するときはそれを踏まえておかなければダメよってことなのよ」

言い終えると美しき姉は、ざばあ、と勢い良く立ち上がった。

「ねえちーちゃん熱過ぎない？ お湯」

「そう？ お風呂大好き日本人の平均的湯温の四十三度ですが何か」
「んもう、自分だって顔真っ赤なクセしてなに江戸っ子爺さんみたいなこと言ってるのよ。いい？ ぬるめのお湯にゆっくり長く浸かるのがお肌にも身体にも良いのよ。覚えておいてね」

そう言うとき美しき姉はお風呂から出てしまった。なるほど、熱い湯に耐え日々精神を鍛錬することこそ我が美学、とかいって自分の世界に浸ってたけど全く意味がないのね。よし、これで一つ美の秘訣を聞き出すことに成功したぞ。後でメモしておこう。

熱い湯とは早速オサラバして、追いかけるように私も風呂から上がる。脱衣所では白い肌をほんのり桜色に染めた美しき姉が、裸のまま髪を拭いている。私は洗面台の前に立ち、自分の胸を見た。小さい。

パイよつ

「お姉ちゃん、ちょっと」

と腕を引っ張って美しき姉を隣に立たせる。若い女の胸が並ぶ。おっぱいが四つ。パイおつが四つ。パイよつ。

うーむ、と思わず唸った私。さすが自慢するだけのことはある、美しき姉のおっぱいは、丸くて柔かそうで、それでいて張りがある。大き過ぎず、かといって小さすぎない乳首は、ちびっ子とお兄さんに散々吸われたであろうことを微塵にも感じさせない素晴らしい出来栄えだった。更にその周りを取り囲む乳輪はバランスも色も絶妙であった。天晴。

「何よちーちゃん、おっぱいがどうかしたの？」

「私もお姉ちゃんみたいなおっぱいが良かったな」

「あら、ちーちゃんのだって可愛らしいじゃない」

「お言葉ですがお姉様、可愛らしいというのは裏を返せば貧弱なことなんじゃーないんですか？」

「やあねえ捻くれちゃって。大丈夫よ、まだまだ成長期なんだから。いくらでも大きくなるわよ」

いくらでもって、別に無限の巨乳になりたいってわけではないんだけどね。

「それに胸の大ききさなんて、男にとっては大した問題じゃないのよ」

そう言えばネチっ子もそんなこと言ってたっけ。

「大なり小なり膨らんでればそれでいいの。おっぱいなんか気にするくらいなら、脚に磨きをかけなさいね」

「脚？」

「そうよ。女性の脚はエロスの極致なのよ」

そう言えばエフもそんなこと言ってたっけ。

「自分が思っている以上に男は女の脚に注目しているのよ。だから日頃から手を抜いちゃダメ。脱毛やスキンケアは当然のこととして、特に注意が必要なのは虫刺されね。蚊に喰われた痕があるだけで男の中ではエロスポイントが減点されてしまうのよ。だからなるべく長ズボンのパジャマを着るようにしなさいね。寝ているときが一番狙われやすいんだから」

そうなのか……夏はいつもパンツ一丁か、ソルフエージュしてイって下半身丸出しのまま寝てたからな……うーむ、やはり師匠の言葉は重みが違いますな！

お風呂同様これまた久し振りに同じ部屋で寝ることにした。かつての美しき姉の部屋は、お母さんの長年の趣味である、社交ダンスのド派手な衣装置き場と化し、足の踏み場もないくらいだ。とてもじゃないが私の部屋と同じだけの面積があるとは思えない。というわけなので、私の部屋のベッドの隣にもう一枚布団を敷いた。

「お姉ちゃん、実はね、私」

電気を消した暗がりの中で美しき姉に話しかける。闇は人の心を開放させる。何かを打ち明けたという衝動に駆られる。夜中にラブレターを書いて翌朝読み返すと、この世の物とは思えないほどの恐

ろしい文章になっているのは、夜の闇のなせる業なのだ。

「処女じゃないんだ」

むくり、と美しき姉が上体を起こす気配がした。

「あら、そうだったの？　ということは既に彼氏がいるのね。おめでとーちゃん。どこのどなた？　ひょっとして前に話していたジオル大生がゲイからバイに守備範囲を広げたとか？」

「そうじゃないの。彼氏はいないの」

「え？　じゃあ付き合ってもいない人としちゃったの？　確実にモノにするまではフェラチオで悶々とさせなさいってあれほど言ったのに」

「女の人なんだ」

「え？　女？　女の人としちゃったの？」

「うん」

「そ、そうなの……相手が女じゃ確かにフェラチオは無理ね……といことは、ちーちゃんは、その……アレなの？」

珍しく動揺する美しき姉。私は香織さんと何度かしてしまったことを話す。

「レズビアンってわけじゃないと思うんだよね。基本的には男の人とエッチしたくしょうがないし。それに自分からは女の人とエッチしたいとは思ったことはないしね。だけど、女の人にキスされたり身体を触られても特別嫌だとは感じなかった。おかしいのかな、私」

いつの間にか美しき姉は布団から抜け出し、私のベッドに腰掛けて

いた。

「大丈夫、別に変じゃないわよ。ちーちゃんまだ若いんだから、色んなことに興味を持つのは当たり前だし、どんどんチャレンジしていい年頃よ。恐れずに進みなさい」

アドバイスの仕方に若干のずれが生じている気がしないでもないが、否定されずに済んだので私は一安心である。持つべきものは大人な姉である。美しき姉は私の頭を自分の胸に押し当てて、髪を撫でてくれた。うーん、良い匂い。

「ところでちーちゃん、その香織さんだっけ？ 気持ち良かったの？」

美しき姉の口調が変わった。挑戦的な感じだ。何だろう、この胸騒ぎ。

「え？ ああ、そうね、結構何度もイカされたし、自分でするのはまた違った種類の気持ち良さというか……」

カーテンの隙間から差し込む、薄い月の光に、美しき姉の瞳がきらりと反射した。

「ふうん、違う種類の快感ねえ……ちーちゃんバイブはどこかしら？」

そう言って美しき姉は天井の蛍光灯からぶら下がる紐を引っ張った。ちかちかと点滅した後、いっきに明るさが部屋に広がり思わず目を覆う。

「え？ バイブ？ 机の引き出しだけど……どうするの？」

私の質問には答えずに、美しき姉は立ち上がると無言のまま引き出しからバイブを取り出し、ういいういん、と無表情のままスイツチを入れては切り、を繰り返した。その姿はまるで、チェーンソウを振りかざし、罪もない人々に襲い掛かる冷酷無慈悲なジェイソンのようである。

私はかつてない美しき姉の様相に恐怖心を抱き身を硬くした。ベッドの上で身体を起こし、両腕で自分自身をきつく抱きしめ、壁際まで後退する。しかし狭い部屋の小さなベッドだ、逃げ切れるわけがない。

「お、お姉ちゃんどうしたの？ 何か怖いよ」

「ちーちゃん、本物の快感がどういいうものか、じっくり教えてあげるわ」

ソルフエージュは極めたと思って天狗になってる

右手にバイブを握り締め、美しき姉は無表情のまま抑揚なく答える。まずい、やられる……その顔が一瞬にやり、と氷の微笑を浮かべたかと思った次の瞬間、美しき姉は私に飛び乗ると、パジャマのズボンとパンツを一気に引き摺り下ろした。

そしてゴール前に固まる五人のディフェンス陣を、瞬きする間に置き去りにしてしまうメッシのような素早さで身体を翻し、私の背後に回った。抵抗する間もなく私の両腕は背中に回されて固定されてしまった。そして美しき姉は自分の両足を私の太腿の内側に入れ、そのまま大きく開いた。私の身体は、小さな子供が母親に抱かれておしっこをするような、あられもない格好のまま身動きが取れなくなってしまった。

「ちーちゃん、あなたソルフエージュは極めたと思って天狗になってるみたいだけど、まだまだまだ教えていない場所がいっぱいあるのよ」

美しき姉は耳元で艶っぽく囁いた。全身の毛と産毛と陰毛が逆立ち鳥肌が立つ。いや別に天狗とか……なってたかも。

「ソルフエージュも分かってない役者崩れの女には、一生気付けないポイントがね」

崩れるも何も、まだ役者の卵でこれからなんですけど……などということはこの際どうでもいい。美しき姉の左手の指は、既に私の股間をまさぐっている。な、何という触り方……と同時に振動するバイブがゆっくりと入ってきた。

「お……おとおお！」

「もちろんまだまだ全部は教えてあげないけど」

「ね……えええええ！」

「例えばことか」

「い……いいいいい！」

「これもまだ知らないはずよ」

「ちゃ……あああああ！」

「あら、ここもまだ気付いてなかったの？ 三年間も何してたの？」

「ん……んんんんああああ！」

「ふう、やっぱりちーちゃんはまだまだね。もっと精進なさい」

美しき姉はバイブを抜き去りスイッチを切るとベッドに放り投げた。かくして私は大量に体液をほとぼしらせ、口から泡を吹き、白目を剥いて気絶したのだ。ものの一分でこの有様である。お、恐るべし我が師匠……

「その香織さんって方に会ったら言っておいて。いつでも受けて立つって」

意識が遠退く中で、美しき姉は確かにそう言ったのだった。

目覚めると部屋に美しき姉の姿はなかった。布団は三つ折りに、タオルケットはきちんと畳まれその上には枕が置かれていた。私は下半身を見る。するとパンツもパジャマも身に着けていた。無意識の内に穿いたのかしら、とも思ったが今までそんなことをした試しがない。

更には昨夜確かに濡れまくったシーツもさらさらの乾いた物に取り

替えられている。どうやら気絶している間に美しき姉が取り替えてくれたのだろう。正に至れり尽くせり。細やかな心配りもイイオンの必須条件なのですね……

階段を下りて食堂へ行くと、お母さんと美しき姉が優雅にコーヒーを飲んでいた。バカボンは仕事に行ったのだろう。

「あらちーちゃんおはよう」

妹に向かって朝の挨拶をする美しき姉の周りはソフトフォーカスがかかったようにきらきら煌めいている。例えば気心の知れた家族しかない実家でも一切の手抜きはない。私やバカボンのように下着姿でうろうろしたりしないのだ。さすがである。朝から八月の夏真っ盛り全開の暑さの中でも何と涼しげな……と思っていいたらエアコンが作動しているのだから涼しいのは当たり前であった。

「おはよう。お姉ちゃんありがとね、シートとかパンツとか」

「いいのよそんなこと。それよりぐっすり眠れたでしょう？」

そう言えばいつもよりすっきり目覚めた感じがする。心なしか身体も軽い。

「昨日のはねえ、快感とともに快眠をもたらすツボなのよ」

「ええ！？ あんなどこにツボがあるの？」

「当たり前じゃない。人間の身体なんかツボだらけなのよ」

するとそれまで黙って聞いていたお母さんが口を開いた。

「あらお姉ちゃん、あのツボを千夏に教えたの？」

「あのって。お母さん知ってるの？」

すると二人はおほほほうふふとコーヒーカップの中のコーヒーを揺らしながら楽しげに笑った。よく分らんが私も取り残されまいと、あはははと笑い家族団欒に混じっておく。何だ何だ？

手淫の起源

「知ってるも何も、私だってお母さんから教わったんだから」

ねー、とお母さんと目配せを交わす美しき姉。

「お、お母さんからって、じゃ、じゃあお母さんもソルフエージュするの!？」

「ソルフエージュ? あら、今はそんなお洒落な呼び方するのね。そうよね、千夏ももう十五になるものね……じゃあそろそろ話してもいい頃ね」

「話すって、何を?」

「そもそも女の手淫の起源はね、遠く秦の始皇帝の時代まで遡るのよ」

始皇帝? 手淫の起源? お母さんは何を言っているのだ? 美しき姉はにこにこただ黙っている。

するとお母さんは立ち上がり台所へ向かった。そして糠床や味噌、醤油といった調味料のストックしてある床下収納スペースの蓋を持ち上げた。がさごそと何やら探しているようだ。やがて手に朱色と藍色の布に包まれた、二つの筒状の物を持って戻ってきた。それをテーブルに置く。再び席に着くと、お母さんはその二つの筒に向かって手を合わせ恭しくお辞儀をした。

「これを千夏に授けます」

改まった様子のお母さんは両手でずいとそれらを私の方へと押しやる。

「これは何？」

「朱色の方が『手淫の書』、藍色の方が『性技の書』」

「はい？」

意味を全く理解できずにいる私をよそに、お母さんはそれぞれの布をふんわり優しいタッチで解いていく。すると中からはそれぞれ巻物が現れた。

「ここにはね、中国四千年の歴史が生み出した、性技の全てが書かれているの。孔子の時代から女の子孫にのみ代々受け継がれてきたと言われるとっても貴重な巻物なのよ」

さつき秦の始皇帝って言ったじゃん。若干時代違うけど？

「そしてこれは現存する巻物の中で対で残っている唯一の物なの。いわば国宝級ね」

本当かよ……私は恐る恐る巻物に手を伸ばす。すると指先が触れる寸前、お母さんの手が、私の右手の甲をばしっと叩いた。

「いって！」

「ちゃんとミューズで手を洗ってからにきなさい！」

急に厳しい口調になるお母さん。私は仕方なく流しへ向かい、オレンジ色の薬用石鹸で手を洗う。そんな大事なもんなら漬物とかと一緒ににしまつとくなよな。

両手を清めた私は改めて「手淫の書」を手取る。私のまだ知らないソルフェージュの技の数々がここに記されているのかと思うと途

端に指が震えてきた。蝶々結びの紫の紐を解き、テーブルの上にころろと転がし中を見た。こ、これは……

「どう？ 凄いでしょ」

得意満面のお母さんであった。しかし。

「漢字しか書いてないんですけど」

「それはそうよ。だって中国四千年だもの。千夏、頑張って解読してね」

面倒くせー。

「えーじゃあさ、どうしてこれが手淫とか性技のことが書かれてるって分かったの？ お母さんもお姉ちゃんも読めないんですよ？

全然関係ない巻物かも知れないじゃん」

するとお母さんはふふん、と得意気に鼻を鳴らした。

「私のお母さん、つまり千夏のお祖母ちゃんはね、若かりし頃中国に旅行したことがあったのよ。そのときに中国語を勉強したの。だから最初の百行位はお祖母ちゃんが解読して、その内容を私に教えてくれたのよ」

「えーそんなんだったら全部訳してくれればいいのに。百行たった前半も前半、ほんの一部じゃん」

「しょうがないじゃない。お祖母ちゃん、巻物のことなんかずっと忘れてたんだから。お祖父ちゃんが死んだとき、遺品の整理をしていたらこれが出てきて思い出したんですって。でね、せっかくだから全部解読して私に教えようと思ったらしんどいんだけど、老眼で目が疲れちゃって百行でギブアップ。ま、それでも破壊力抜群の技

がこれでもかと書き連ねてあるんだけど」

「なんでお祖父ちゃんが持つてるのさ」

「それは……ねえ？」

お母さんは急に顔を赤らめ、美しき姉に同意を求めた。美しき姉はさつきから微笑んで頷くばかりだ。

「お祖母ちゃんとお祖父ちゃんにも青春を謳歌した血気盛んな時代があったんだから、二人で読んで、あれこれ試してたんじゃない？ 若気の至りってやつよ」

女にだけ受け継がれるってさつき言いませんでしたっけ？ 男の人にも見せていいわけ？

「ってーことは、お祖母ちゃんが最初に解読したってこと？ そんな遙か昔から受け継がれてきてるの？ お祖母ちゃんのお母さんとかお祖母ちゃんのお祖母ちゃんとかそれよりも前の人はただ持つてただけってこと？」

「そうじゃないわ。この巻物を初めて日本に持ち込んだのがお祖母ちゃんなのよ」

気合入れるためにウンケルも飲んでた

「え？　だってさつき女の子孫につて……」

「その中国旅行のときにね、お祖母ちゃんは古ぼけた一軒の骨董品屋に入ったんですって。陶器や調度品をあれこれ見ていると、その女将さんが店の奥からこの巻物を持ってきて、『これは先祖代々伝わる国宝級の巻物です。本来なら私の娘に受け継がせるはずだったのですが、残念ながら私には五人の息子がいるものの、娘には恵まれませんでした。これも何かの縁です、是非あなたにお譲りしたい』って言ってきたんですって。」

お祖母ちゃんも『そんな大事な物を受け取るわけにはいきません』って一度は断ったんだけど、『私はこの素晴らしい書物を国内だけに留めておくことは罪だと考えています。日本の女性にも先人達の生み出した驚くべき技の数々を知って欲しいんです』って真剣な眼差しで迫られて、その熱意に負けて譲り受けたそうよ」

「あのお譲り受けたって、タダで？」

「タダな訳ないじゃない。国宝級よ？　あの頃のお金で確か……百元とか三百元とか言ってた気がするわ」

日本円でどのくらいかは分かんが、どう考えたって国宝にしては安過ぎるだろ。ゼッテー騙されてるよお祖母ちゃんもお母さんも……

「でもさ、何で私なの？　お姉ちゃんが持ってもいいんじゃない？」

「それはね、『自分の末娘が十五になったとき手渡す』っていう掟があるからよ。まあ私の場合はお祖母ちゃんが忘れてたから受け取ったのはそれよりずっと後だったけど。それに後世により長く伝えるためにはお姉ちゃんより妹である千夏に受け継がせた方が合理的

でしょ？」

別にどっちだって一緒じゃん。つーか私が結婚して娘をもうける可能性は100%じゃないんだし。それだったら既に娘のいる美しき姉に渡した方が……ってこんな胡散臭い巻物に何マジになってんだ私。

眉唾物のとっても怪しい巻物だが、取りあえずそれらを受け取った私は部屋へ戻った。ベッドの上で「性技の書」を紐解きころころりと広げてみる。やっぱり漢字だらけだ。上から少し押し潰されたような字体が中国っぽくて愛嬌がある。

手淫の書はソルフエージュについて、性技の書は、男のどこをどうすれば気持ち良くさせることが出来るのか書かれている、らしい。ホントかな……意味の分からない達筆な漢字の羅列を眺めていると、部屋の扉がこんこん、とノックされた。

「ちーちゃんちょっと出かけない？」

美しき姉である。

「いいけど。どこに？」

「ランチでも取りましょう」

「あれ？ 朝ご飯食べたんじゃないの？」

「まだよ、コーヒー飲んでただけ」

「ふーん。そんならお母さんも誘って一緒に行こうよ」

「お母さんは社交ダンスの大会があるからって出かけたわよ。気合入れるためにユニケルも飲んでたわ」

それでいつもよりお母さんのメイクが派手だったのか。私は顔を洗
いTシャツとジーンズに着替えると、美しき姉と家を出た。日差し
の照りつける中、住宅街を並んで歩く。こうして二人で出かけるの
は本当に久し振りだ。

「どこに行く？」

「そうねえ、あ、ホテルのバイキングとかどう？」

「バイキング？ そんなのあった？」

「あるわよ。ホテルといえばバイキングなんだから」

美しき姉はよく分からない理論を押し通し日傘を優雅に差しなが
らてくてくと歩いていく。やがて大通りを渡り、駅の商店街に程近い
カルバンク・ラインホテルの目の前で立ち止まった。

カルバンク・ラインホテルは県内でも一、二を争う高級ホテルであ
る。かのマンチェスターユナイテッドのメンバーも日本で試合を行
う際に泊まったという噂を聞いたことがある。三十階くらいありそ
うな高さと、ズッシリと重みのある外観は、威圧的でさえある。非
力な女子高生には縁もゆかりもない場所だ。

「お姉ちゃん、まさかここ？」

「そうよくたまにはいいでしょ？」

「そんなーカルバンク・ラインに来るんなら先に言ってよー」

「あらどうして？」

「もうちょっとオシャレしてきたのに」

「大丈夫よ。バイキングなんだし。それにちーちゃん可愛いから平
気よ」

またもや理不尽な理論をゴリ押しし、美しき姉は躊躇う私を置き去
りにしたまま入り口へ向かった。ドアマンがお辞儀をしながら扉を

開ける。私は恐縮しながらフロントを横切った。

「自然食バイキングですって。ここにしましょう」

店内は木目を活かした白木を基調とした。和を感じさせる視覚的にも触覚的にも柔らかな内装で落ち着ける。時間は午前十一時を少し回ったところで、客の数はまばらだ。

食材は有機農法で育てられた野菜や果物や無添加の飼料を与え、広い敷地内を自由に走り回らせてストレスなくのびのびと育てた豚や鶏の肉などを契約農家から仕入れた物だけを使っている。調理の際も化学調味料を一切使わない、身体に優しく美味しい料理というのがここの売りらしい。

私たちはさっそく大皿に盛られた色々な料理を少しずつ木のプレートに乗せていった。肉じゃがや、ひじきの煮物、切干大根、鯖の味噌煮、いんげんの胡麻和え、きんぴらごぼうといった、メニュー的には有り触れた家庭料理だったが、そこはプロの料理、家で食べるのとは一味違って滋味豊かで身体に優しい味である。

いくらなんでも伸ばし過ぎ

「ねえお姉ちゃん、あの巻物って本当にそんなに凄い物なの？」

私は柔らかに煮えた大根を箸で切り分けている美しき姉にたずねる。

「さあ、どうかしらね」

それを箸の先に挟み。口元でふうふうと息を吹きかけながら答える。

「さあって、じゃあやっぱりお姉ちゃんもお母さんの話、信じてないんだ？」

口の中へ入れた大根をゆっくりと味わって飲み込んでから美しき姉は言った。大根も、こんなイイオナノ口に入ることが出来ればきつと幸せに違いない。

「いいちーちゃん、私にとってはね、あの話が嘘でも本当でもどっちでもいいことなのよ。ただああいふ三国志の時代から連綿と受け継がれてきた、みたいに壮大な物語が背景にあった方がファンタステックでロマンチックで素敵だと思うの。それにあの話をしていくときのお母さん、とっても嬉しそうだったでしょう。だからそれでいいのよ。ときに真実は語られない方がみんなが幸せになれることもあるのよ」

素晴らしい解釈、さすがは大人である。ただ三国志とは言ってなかったような気がするが。

「それにね、ソルフェージュの技をお母さんから教わったっていう

のは事実なんだし……あ、もうこんな時間。そろそろ行かなくっちゃ」

「え？ 行くなってどこに？ 買い物かなんか？」

「違うわよ。マレーシアよ」

「マレーシア？」

「そ。パンコール・ラウっていう小さな島があつてね、そこは島全体が一つのリゾートになっていて宿泊客とスタッフ以外は島に入れないんですって。緑豊かな自然と、エメラルドの海が広がる完全なプライベートビーチがある素敵なところなの。スパやマッサージも充実してて、長期滞在する人も珍しくないそうよ」

「あのお一応聞きますけど、それって常磐ハワイアンセンターとか日光ウエスタン村とかいう系統のところじゃあないよね？」

「うふふちーちゃん相変わらず面白いこと言うわねえ。もちろん東南アジアのマレーシアよ」

「ちよちよちよと待ってよ、誰と行くの？」

「やあだあ一人に決まってるじゃない。せっかく旦那さんが羽根を伸ばしてきて良いつて言ってくれたんだから、思い切つて行つてみることにしたのよ。一度泊まつてみたかったのよね、水上コテージに」

いくらなんでも伸ばし過ぎなんじゃ……

「ちーちゃんも来る？」

「軽井沢辺りなら二つ返事だけど、そんないきなりマレーシアとか言われてもですね……っていうかお姉ちゃん、荷物は？ まさかそんだけ？」

美しき姉の手元にはハンドバック一つである。

「必要な物は全部送ったわ。だって知らない国に着いて重たい荷物

えっちらおっちらってスマートじゃないしストレス溜まるでしょう？
どう？　ちーちゃん今夏休みなんだし、コテージだから一人くらい増えたってお金払えばきっと平気よ」

東南アジア。マレーシア。エメラルドの海の広がる水上コテージ：
：脳内に南国の楽園が広がる。行ってみたいことは山々だが、私には国内から出られない重大な理由があったのだ。

「パスポートないっす」

ホテルを出て駅まで歩く。改札を通ると、お土産楽しみにしててね、と美しき姉は優雅に手を振りながら駅の中へ消えていった。歩き姿も美しい、美しき姉の後姿を見送りながら思うのだ。この大胆な行動も、きっとイイオナナの必須条件なのですね、と。

お手軽、簡単、ちょー楽しい、の三拍子揃った素敵なサムシング

美しき姉が日本を去り、本格的にお盆が始まった。暇である。部活もない、バイトもない、即ち金もない女子高生の夏休みは時間ばかりが蜃気楼のように真夏の熱にどろどろと溶けて、無駄にだらだらと横たわり身体にまとわり付いている。

あーあ、本当なら美しき姉とショッピングやグルメに出かけて何日かはうっほほーいなワンダフルタイムを過ごせるはずだったのに。くそう、こんなことになるのならパスポートを入手しておくべきだった。美しき姉はいつたどのくらいマレーシアにいるつもりなのだろうか。

いくら暑いからといって南国白くまばかり食べ続けていると、胃腸が弱りお腹的にも人間的にも駄目になりそうだ。三つで止めておこう。仕方なく部屋を出た私は、台所でスクワットをしながら中華鍋を振るうお母さんにたずねた。

「お母さん、お金をかけないで楽しく過ごす方法ってなんかないかな？」

「いっぱいあるじゃない」

「例えば？」

「筋トレとかストレッチとか走るとかヨガとか」

「いやーそういう体育会系はちよつと」

「縄跳び二重飛びを連続百回でギネスに挑戦」

「だから体育会系はちよつと！」

「ちなみにギネスブックのギネスはビール会社のギネスのことなのよ」

67へえ。

「だったら図書館に行きなさい。涼しい上にほぼ無限の知識が無料で得られるわよ」

「まー本は嫌いじゃないけどさ、今ひとつ熱中度に欠けるよね」

「何よ文句ばかり。じゃあ昆虫採集は？」

「小学生じゃないんだから」

「絵日記を描く」

「だから小学生じゃないって」

「アサガオの観察」

「小学生じゃねー！」

「ヒルガオの観察」

無視無視。

「ユウガオの観察」

「だーかーらー！」

「うるさいわね、じゃあ創作ダンスを考えて踊るとか」

「えー誰に見せるのさ」

「パントマイムを独学でやってみる」

「難しそう」

「ジャグリングを独学でやってみる」

「道具ないし」

「綱渡りを独学でやってみる」

「シルク・ドゥ・ソレイユかよ。つか落ちたら死ぬしね。しかも何だよその独学シリーズは」

「あ！ とっておきがあるわよ」

「ナニナニ！？」

「絵を描きなさい。鉛筆一本紙一枚一点集中。心頭滅却すれば火もまた涼し。景色でも物でも動物でも何でもいいからそれをじっくり

時間をかけて正確に描くのよ。例えリンゴ一個でも描き終える頃には空は夕日に焼け、ヒグラシが鳴いていることでしょう」

「絵ねえ……そういえばヒグラシの鳴き声ってこの辺じゃ聞かないなあ」

蝉は基本やかましいのでイライラするが、節操のないミンミンゼミとは違いカナカナカナナと、藁葺き屋根と囲炉裏にかけられた湯気の立つ鉄瓶といった、古き良き日本の田舎を思い起させる、切ない声を響かせるヒグラシは哀愁が漂っていて割と好きだったりする。お母さんには色々と提案しさせておいて恐縮だが、やはりどれもしつくり来ない。私が求めるのは、お手軽、簡単、ちょー楽しい、の三拍子揃った素敵なおサムシングなのだ。

こういうときは一人じゃ駄目だ。誰かと話すなり誘うなりした方がきっと良い結果が得られるに違いない。仕方がないな、ここは一つ冴えないチェリーボーイズにでも声をかけてみるか。未だに彼女の出来ないあいっらの面倒を見るのも保護者たる私の役目でもあるからね。私は携帯を手を取った。

「あ、もしもし龍馬？ あんたどーせ暇でしょ？ 今からカップ寿司でも行かない？ モチのロンで龍馬のおごりで。お金ないんだったら百歩譲ってはなまるうどんでも許してあげないこともなくつてよ」

「岡崎か？ 悪いな、オレ今軽井沢で避暑真っ盛りだから。土産は期待すんな。今からこっちで知り合ったテニスサークルのちょーイケてる女子大生のお姉さん達とテニスだから。じゃな」

何ですと……せっかくスーパーラブリークュートJK千夏様がわざわざ電話までかけてやったというのに。つかアフロディーテはどうなってるのよ。聖子さんに任せっきりかお盆で休みなのか。まあ

いいわ。次よ次。

「もしもし田倉？」

「あ、オナさぁん？ 今ねえ、僕どこにいます思うう？」

「どこって、どうせじめじめ湿った部屋でアダルトサイト巡りですよ？」

「それが違うんだなあ。実はハワイに来てるんだあ」

「ハワイ！？」

「うん。僕んちはさあ、毎年夏休みに家族旅行するんだけどさあ、たまには外国も良いよねって話になってさあ、んでハワイい。これからノースショアでボディーボードやってえ、パラセーリングやってえ、で、その後カウアイ島でえロコモコ食ってからバンジージャンプなんだあ。ちなみにハワイの正しい発音はあ『ハワイイ』なんだってえ。じゃあねえ」

そして電話は切れた。お前は語尾伸ばすんだからいつでも正しい発音だろが……きーっ！ どの時もこいつも私に何の断りもなくバカンス楽しみやがって！ しかもネチっ子にいたってはハワイだなんて……羨ましすぎる。あ、ってことはネチっ子の携帯は海外でも使えるのか。

こうなったら白くまを限界まで食べ尽くすしかないわね、と再び居間へ降りていくとバカボンがお馴染みステテコ&ランニング姿で足の爪を切っていた。ぷちんぷちんと切った爪が、下に敷いた新聞紙を無視して好き勝手に辺りに飛び散っている。私と目が合うとバカボンは爪切りをテーブルに置き改まった口調で話し始めた。

今年で結婚二十五周年

「千夏、そこに座りなさい」

「なんでしよう」

「お前一人暮らししてみたくないか？」

「え？」

「お前ももう十五だ。立派に大人の女だ。そろそろ家族から離れて自分一人の力で生活をするという経験も必要だと思うんだが」

いきなり何を言い出すのだこのおっちゃんは。

「どうだ？ 昼まで寝てても口うるさい親にあれやこれや言われることのない、フリーダムでリベラルな生活を送ってみたくはないか？」

高校生の私に一人暮らしを勧めるだなんて何かあったんだろうか。

「そりゃあまあそういう風に言われればしてみたくないこともないけど。でも部屋はどうするの？ 借りるのだってタダじゃないんだし」

「お金の事は心配しなくていい。大事なのはお前の意思だ。お前の気持ちを聞かせておくれ」

バカボンは、これまでに見せたことのない憂いを含んだ微笑の表情を浮かべている。私は事態が飲み込めず思わず台所で股割をしながら糠床を掻き回すお母さんをちらりと見ると、やはり無言で微笑み返された。

胸騒ぎがする。こういう状況はきつとこの先に歓迎されないような

展開が待っているに違いないのだ。そう言えば最近バカボンとお母さんがあまり会話をしていないような気がする。よそよそしささえ感じる。子供たちが手を離れ、生活に一段落した中年夫婦に訪れる危機、これ即ち離婚である。

しかし離婚だとしても私はまだ未成年、どちらかの親に引き取られるとは思うのだが……は、そうか、二人には既にそれぞれ新たなパートナーがいるに違いない。そしてお互い第二の人生、第二の青春を謳歌しようとしているのだ。それなのに私のようなコブ付では昼も、特に夜も思いつきり楽しむことが出来ない。

だからこの際、私に独立を促して体よく追ひ払おうという魂胆なのだろう。うーむ、血も涙もないとは正にこのこと。でもま、お金出してくれるんならいいかな。そっちが第二の青春を楽しむのであれば、こっちは本家本元第一の青春をお気楽気ままに楽しもうじゃないですか。

「分かった。してもいいよ、一人暮らし」

私が答えるとバカボンはよっしゃーとガッツポーズをしながら突如立ち上がり、駆け寄ってきたお母さんとイエーイイヤツフーとハイタッチを始めた。お母さんの手の平に付いていた糠ミソが若干床に飛び散った。呆然とその光景を眺める私。私ってそんなに厄介者のお荷物だったのかと悲しさと悔しさが込み上げ、目には涙が滲み出てきた。

バカボンとお母さんは勢いよく居間を飛び出しそれぞれの部屋へ戻って行った。取り残された私が両手を握り締めわなわなと震えていると、再び両親が現れた。その格好を見て啞然とする。二人とも派手なアロハシャツを着て、手にはスーツケースを持っている。バカ

ボンにいたっては麦藁帽子まで被っている始末。

「いやーさすがに千夏一人残して二週間家を開けるのは気が引けたんだけど、そうかそうか、そんなに一人暮らしがしたかったのか。良かった良かった」

バカボンが麦藁帽子で自分を扇ぎながら捲くし立てた。二週間って何のこと？

「本当ならお盆の間お姉ちゃんがいるはずだったから安心してたんだけど、急にマレーシアでしょ？ 私たちの旅行もキャンセルしなきゃならないんじゃないかって内心ひやひやものだったのよ」

お母さんはハンドバッグからでっかいサングラスを取り出して顔にかけた。

「え？え？ 旅行って何のこと？」

「私たち、今年で結婚二十五周年だからそれを記念して旅行するのにしたのよ。じゃあ千夏、留守番よろしくね」

二人は手と手を繋いで玄関へ向かい、靴を履いた。

「ちよちよい待ち！ 旅行ってどこに？」

すると閉まる玄関の隙間から、バカボンの嬉しそうな口は確かにこう言ったのだった。

「ガラパゴス」

パンチラにシーズンとかある

美しき姉はマレーシア、龍馬は軽井沢、ネチっ子はハワイイ、そして両親はガラパゴス。ガラパゴスってどこだよ。何かあれだよね、ゾウガメとかでっかいイグアナとかごろごろしてるんだよね確か。

私の周りの人たちは旅に出た。そして誰もいなくなった。なのに私は蒸し風呂の如く狭く暑い日本で南国に思いを馳せながら南国白くまを食べるのだ。何だか見捨てられた気分だ。本家白熊も燦々と照りつける太陽や南国の青い海や椰子の木や色とりどりの花を夢見るのだろうか。

あー暇だ暇だ暇な上に家からはみんないなくなっちゃった。これから二週間一人ぼっちかー。ラブラブな彼氏でもいれば家に連れ込んで楽しく過ごせるのにな……よし、決めた。私は金の亡者になるわ。エフに頼んでまたバイトしよう。

夏休みはあと二週間ちよい。そのうち十日間パンチラしたとして、一回三万円だから三十万。前回前々回の分と合わせたら何と三十六万！ おっといきなりスーパーリッチガールじゃありませんか。そんだけあればパソコンにプリンタとデジカメ付けてもお釣りが来るってもんよ。ついでにスキヤナーも購入してあげてもよくってよ。私は意気揚々とエフに電話をかけた。

「あらチイどうしたの？」

「エフさんまたバイトしたいんですけど」

「あーそうなんだ。でもゴメンね。今シーズンのパンチラはもう撮り終わっちゃったから」

えっ、パンチラにシーズンとかあるんですか？

「そうですか……じゃあしょうがないですね」

「でもね、別のでよければないこともないけど」

「別って、例のフェチ系ですか？」

「うん。今やろうと思ってんのがね、ベロフェチとワキフェチ向けのやつ。あとはトイレ盗撮風」

「ベロとワキ……ですか？」

「そう。ベロは口開けてベロ出して、ソフトクリームとかアイスキヤンディとか色んな物舐めるんだ。まあ最終的にはバナナとかフランクフルトとかどうしてもフェラチオ的な方向になっちゃうけど。あとはヨーグルト口の周りに付けてそれを舐め取るとかね」

「ヨーグルト？」

「精液をイメージさせるのによく使うんだよね」

あ、なるほどね。

「ワキの方はね、タンクトップ着て脇の下全開にする感じ」

「え？　ワキ見せるだけでいいんですか？」

そのくらいならイケそうだ。自慢じゃないが私の脇は毛が薄く、滑らかで有名なのだ。

「いや、それじゃさすがに物足りないからね。こっちも自分で舐めてもらうことになるかな。生クリームとか塗ってね」

自分で自分のワキを舐める？　私はTシャツの袖を捲くり実際にやってみた。首が攣りそうだが舌先が辛うじて届いた。

「ただね、この二つは顔出しOKじゃないとキツいんだよね。どう？　それでも良ければ私は大歓迎だけど」

「顔出しですか……あ、最後のトイレ盗撮風っていうのは？」

「これは文字通りトイレにカメラ設置して、おしっこしていると撮るんだよ。こっちは顔はモザイクかけても問題ないけど。どうする？」

トイレか……これってきつとモロ性器が映るんだよね。しかも相当恥ずかしい排泄シーン。いくら顔は出てないとはいえさすがに抵抗あるな……

「ま、考えといて。やる気になったらいつでも電話してよ。じゃね」

「ああエフさんちよつと待って下さい」

「ん？　やっぱやる？」

「そうじゃなくて……仕事抜きで会って欲しいんですけど」

その日の午後、私は例の池袋東口、宝くじ売り場の前でエフと待ち合わせた。バイトは諦めたもののエフと会おうと思った理由は、アイ姉さんの真相が聞きたかったのと、単純にエフの顔が見たかったからだ。

「チイおっはよ」

にこにこと現れたエフは、やはり黒のキャップにTシャツ、ジーンズであった。二人でドトールへ入るなり、私は友人や家族が私を置いて旅行に行ってしまったことを、少々愚痴っぽくエフに話した。

「あはははそっかそっか、それで一人で退屈だったから仕方なく私に連絡したってわけね」

「仕方なくって訳じゃないですけど……」

「いいのいいの気なんか使わなくて」

本当ですエフさんに会いたかったんです、と胸の前で手を組みきらきらお目々で少女マンガ風に言おうと思ったが、何かそれもちよっとおかしい感じなので止めておいた。

「実はちよっと聞きたいことがあるんですけど」

私はアイスカフェラテを飲みながら言った。するとエフは私の顔を見ながらぱちぱちと目をしばたたかせた後、ああああはいはいあのことね、と一人頷き話し始めた。

ネイチャーパンチラシリーズ

「アイのことだよね？」

「え、何で分かったんですか？」

「そりゃ分かるよ。こないだ話が尻切れトンボになっちゃったからね。ま、私がちょっと感傷的になっちゃったからチイも聞き辛かったんだろうけど。聞きたいのはあれでしょ？　どうしてパンチラで死んじゃったか」

私は無言でうんうんと首を縦に振る。実のお姉さんの死因をその妹に面と向かって聞くのは不謹慎な気もするが、あれ以来、頭の片隅に頑固にこびり付いて離れないのも事実だ。エフが話したくないのであれば無理に聞くことはしないが、この様子だと、特に話し辛いという雰囲気でもなさそうなのでこの際だから聞いてしまおう。

「パンチラってさ、基本的にはよくある光景の中で起こるから興奮するんだよね。駅の階段とかデパートのエスカレーターとか電車の向かいに座った女性とか。普段何気なく通り過ぎている何の変哲もない景色が、ちょっとスカート短くて可愛い女の子がいるだけで非日常に変わる。」

男共はなんだかパンツが見えそうだぞ、という予感がして一気にテンションが上がっちゃう。だからパンチラの基本は日常風景の中にあってこそなんだよね。でもね、アイはそれだけに飽き足らず、ついに街を飛び出したんだ」

「街を出た？」

「うん。大自然の中でのパンチラを追求し始めたの。最初は海に行って砂浜でパンチラとかハイキングに行って紅葉の中パンチラとか割と穏やかな感じだったんだけどね、それじゃやっぱ物足りない。」

次第にやることがエスカレートしていったんだ。海に行けば砂浜じゃなくてサーフィンでパンチラとか、スキューバダイビングでパンチラとか、富士山頂上でパンチラとか台風の中とか降り積もる雪の中とかね。一番凄かったのはスカイダイビングかな」

「スカイダイビング!？」

「ま、あれは降下中常時スカートが捲くれ上がってて本当の意味でのパンチラかどうかは賛否両論あるんだけど。とにかくありとあらゆる大自然の中での過酷なシチュエーションでのパンチラを追い求めたんだ。そして辿り着いたのがロッククライミング」

「それって、岩山登るやつですよ」

「そう。その撮影は困難を極めたんだ。まずパンチラに耐え得るビジュアルの持ち主の、女性ロッククライマーを探さないといけなかったからね。次にそのクライマーに制服着せて、パンツを撮ってもいいという許可を貰わなければならない。そして幾多の難問をクリアして遂にロッククライミングパンチラの撮影が始まった。」

向かうは群馬と新潟にまたがって聳える日本のロッククライミングのメッカ谷川岳。ここは世界で最もロッククライミングによる死亡事故が多いことでも有名なんだよね。アイもそのことは知っていたけど、やるなら常にフルスロットル、がアイの信条だったからね。

当日天気は良好、撮影は順調に始まったかに見えたんだ。でも被写体の女性はセミプロのロッククライマーで登ることだけに集中していれば良い。片やアイは、この日のためにある程度のトレーニングは積んだものの、所詮付け焼刃の素人クライマーでしかもカメラを手に持ったのクライミング。最初は何とか食らい付いてはいたものの、じわじわと距離が開き始めたんだよね」

「そんな、撮影なんだからカメラマンに合わせてゆっくり登ればいいのに」

「それはアイ自身が許さなかった。リアリティを追求するアイは、

クライマーに『私のことは気にせずいつも通りに登ってほしい』と頼んでいたんだ。やがて岩山の中腹辺りに差し掛かると、クライマーとの差が10メートルを越えた。さすがに焦ったんだろうね、アイの手が滑ったんだ」

「まさかそこから……」

「いや、そこは根性の塊のようなアイ、プロパンチラーとしての意地が何とか体を踏ん張らせて危機を回避したんだ。そしてクライマーは一足先にゴールし、アイも遅れはしたものの、何とか頂上にたどり着いた。でも力を使い果たして気が抜けたんだろうね、立ち上がった瞬間手からカメラがすり抜けてしまったんだ。アイは咄嗟にそれを拾おうとしてそのまま落下しちゃったってわけ」

そうだったのか。そんな壮絶な最後だったとは。

「ま、もう五年も前の話だけど。でもね、アイの撮った『ネイチャーパンチラシリーズ』、略してネイパンは伝説のパンチラ動画として今でもDVDは売れ続けてるんだよ」

エフは、その悲しい出来事を見知らぬ国で起きた見知らぬ人のニュースを読むように淡々と話したが、きつと心の中では泣いているに違いない。辛いことを思い出させてしまって申し訳ないという思いが私の中に生まれていた。人の不幸な話を興味本位で聞くべきではなかった。私の目からはいつの間にか一筋の涙が流れ出していた。

もってパンツを！

「あれ、チイ泣いてんの？」

「ご、ごめんなさい。私のせいで悲しいことを思い起こさせてしま
って……」

「優しいんだね」

にっこり笑うとエフは手を伸ばして私の涙を親指でそっと拭った。

「大丈夫だよチイ、もう私の中では整理がついてるし。それにさ、
こうしてときどき誰かに話してあげた方がアイも喜ぶんじゃないか
な。私だったらそうして欲しい。生きてるときにエフってこんなこ
としてたんだぜって笑いながらも誰かに語って欲しい。別にさ、
特別凄いことを成し遂げていなくても、死んだ後で自分のことを話
してくれる人がちょっとでもいれば、この世に生まれてきた意味が
少しはあったんだなって思えるんだ」

生まれてきた意味。今私が死んだら私のことを語ってくれる人はい
るのかな。

「あの、エフさんもそうですけど、アイさんがパンチラを始めたき
っかけってなんだったんですか？」

「人助け」

「え？」

「アイには壮大な野望があったの。全世界の寝たきり老人を少しで
も元気にしてあげたいっていつも言ってたんだ」

「寝たきり？」

「うん。あれはまだ私が小学校の頃だったかな、うちのお爺ちゃん
がね、身体を悪くしてからずっと家で寝たきりだったんだ。でね、

うちは両親が共働きだったから、私たちが学校から帰ると順番に世話をしたんだよね。

でね、あるときアイが帰ってきて制服のままお爺ちゃんの体拭いてたら家の電話が鳴ったんだよね。アイは早く電話に出なくちゃって、思わずお爺ちゃんの顔の上を跨いじやったんだ。で、電話から戻ってくるとおじいちゃんの様子がおかしい。なんだか肌に赤みが差している。熱でもあるのかな、とアイが額に手を当てるとお爺ちゃんはこう言ったんだ。『もつとパンツを！』」

お、おじいちゃんたら……

「それでアイは悟ったんだ。今お爺ちゃんに必要なのは甲斐甲斐しい介護でも励ましの言葉でもない、パンチラだ！ とね。それから毎日私たち四人でかわるがわるお爺ちゃんの顔の上をまたいだんだ。最初は良かった。おじいちゃんの食欲も見違えるほど旺盛になったし、よく喋るようにもなった。笑顔も増えたしね。

でも所詮四人のローテーションじゃ限界があるよね。一ヶ月も経たない内に、明らかにお爺ちゃんのテンションにも翳りが見え始めたんだ。飽きてきちゃったんだね。そこでアイは決意した。街に繰り出して色んな女性のパンチラを撮ろうとね」

アイ姉さんのパンチラにはそんな隠された素敵エピソードがあったなんて……私の目頭は再び熱を帯びてきた。

「私はアイについて行って手伝ってたんだけど、真ん中二人の姉たちは受験やら何やらで忙しかったからパンチラとはそれっきり。でもね、アイの執念の盗撮のお陰でお爺ちゃんはみるみる体調が良くなって、撮影開始から一年後、なんと自力で起き上がれるようになった。

ったんだ。あのときの感動は今も忘れられないな。

それでアイは自分のしていることが人助けになることを確信したんだ。だからパンチラを撮り続け、ネットで発信することで、世界中の寝たきり老人たちに生きる喜びを知ってもらおうと心に決めたんだよね。私もそんなアイの背中を見て育ったんだから、ごく自然にパンチラーとなったってわけ」

エフと別れた私は一人、電車で家に向かった。そしてさっきの話を思い返す。全世界の寝たきり老人を救うために、最後の最後までパンチラを撮り続けたアイ姉さん。凄いなあ、とても真似できない。そもそもパンチラが人助けに繋がるなんて思いもしなかったしね。

ただいまあ、と玄関を開けるが当然家には誰もいない。考えてみればこの家で一人っきりで過ごすのは初めてだ。大人になって一人暮らしをすると毎日こんな感じなのか。ちょっと寂しいかも。

手を洗ってうがいをして、さあ何するか。あ、そうだ、夜ご飯だ。誰も作ってくれないからね。バカボンは一応食費として一日千円、二週間分で計一万四千円置いていってくれたので、どこかで食べてもいいんだけど、さすがに一人じゃね。女の子だしね。それに家にはそれなりに食料があるのだ、自炊すればこのお金は丸々私の懐に入るってもんよ。見くびったなバカボンめ。うひひ。

さてさて今晚は何にしましょうかね……冷蔵庫を開ける。野菜室にはキャベツ、にんじん、大根、茄子、ピーマン、キュウリ、りんご、柿。なるほど。冷蔵室には、卵、バター、ジャム、各種漬物、各種調味料、牛乳、ウーロン茶、豆腐など。なるほどなるほど。冷凍室は、愛しの白熊ちゃん×3、肉、魚、パンなどが凍っている。

どうすっかな。私は私の身長を遥かに超えるファミリーサイズの冷蔵庫の全ての扉を開け放ち、その前で腕を組み仁王立ちする。夏の日の冷蔵庫の冷氣って心地良いよね……材料はあるにはあるが、正直何が作れるのかさっぱり分かん。自慢じゃないが料理なぞ小学校の家庭科で作った味噌田楽以来無縁である。そうだ、こういうときこそ料理の本を見ればよいのだ。

私は居間にででんと鎮座する、高さが天井まである本棚を上から順に眺めていくのだが……ない。ないない料理の本が一切ない！ 百科事典とナショナルジオグラフィックとサザエさん全巻とバカボンお気に入りハードカバーのハードボイルド小説ばっかじゃん！

バイスイコーチェイス

くそう、料理上手の親を持つとこれだから……まあ下手くそで毎日マズいもの出されるよりはいいけどね。仕方ねえ。私は再び冷蔵庫と対峙する。とりあえず生で食べられるものは……キュウリとキャベツとにんじんにとって私はウサギかい！ う、ウサギかい！ と一人ノリ突っ込みを二回繰り返してみる。

あ、ソーセージ発見。パンもあるんだから、目玉焼きとソーセージとキュウリにマヨネーズで齧ればいいか。私はまな板を倒し、包丁を握る。キュウリとキャベツをだだだんと適当に切り、冷凍されている食パンをトースターでこんがり焼き、フライパンに卵を割る。

油を敷き忘れて見事こびりついた目玉焼きもどきを何とか救出し、ソーセージを焼いた。そしてそれら一切合財を大皿に盛る。キュウリとキャベツの上からびよよよんとマヨネーズを絞る。何か足りない……あ、コーヒード。コーヒーマーカーに豆と水をセットする。そして出来たものをテーブルに並べた。何だか朝食みたいな夕食になっちゃったけどそれもまた一興。

「朝食の ような夕食 いとをかし」

よし、一句で来たところで頂くとしよう。明日は図書館に行って料理の本を借りてくるかな。キュウリを齧りながら誓うのであった。

次の日の朝、私はちゃりんこ漕ぎ漕ぎ図書館へ向かった。電車にして駅二つ分である。汗だくである。小学生の頃はときどき来ていた、市内でも割と大きな図書館だ。

到着すると入り口に人が並んでいる。ついに図書館にも行列が出来る時代になったのか……と思ってよく分からないままとりあえず並んでいると整理券を配られた。どうやら自習室の席を確保するため皆さん並んでいるらしい。確かに涼しいし静かだもんね。勉強するには最適かも。まあ私は料理の本を借りたらすぐに退散……ん？

あれ？ あの子はどっかで見たような……あ！ 思い出した！ マーくんだ！

小学校六年生のマー君はこの前同級生の彼女マミちゃんと性行為をするためにアフロディーテに来たのだが、二人で貯めた「性行為積み立て貯金」がマミちゃんの「ガリガリくんマンガ一味を食べたい！」という抑えきれない欲求のせいで僅か五十円足りず、結局プラトニックに手を繋いでホテルを去っていったのだった。

私は開館した図書館の中をとことこ歩いていくマーくんの後を追った。マーくんは二階の自習スペースの席に座ると手提げ袋から参考書とノートを取り出し早速勉強を始めるのだった。うーん、真面目だなあ私の小学生の頃は……まあいいか。私は知らない振りをして彼の隣の席に座った。しばらく彼の熱心な勉強姿を見たあと、私は耳元で囁いた。

「今日はマミちゃんと一緒にじゃないの？」

その瞬間ぴたりとマーくんのシャープペンシルが止まる。そしてゆっくりと首を動かし私の顔を見た。私はにっこりと、スピッツのマサムネさんの歌声のような、この上なく爽やかな笑顔で彼の視線を受け止めた。するとマーくんは、そのまま首を元に戻し、何を思ったのか、始めたばかりの勉強をやめ、机の上を片付けると私を置いて足早に立ち去った。私は慌てて後を追いかける。

「ちよちよちよと待ってよマーくん！」

私の呼びかけを完全に無視し、彼は図書館から出ると自転車に跨った。

「マーくんでしょ！？　ねえねえマーくんだよね！？」

ひょっとして他人のそら似か？　確かにそれほど見た目に特徴のある子じゃなかったので、これだけ拒絶されるとだんだん自信が持てなくなってきたが、ここまで来たら引き返せない。

私は既に走り出しているマーくんを追いつくべく自分のちゃりんこに飛び乗った。立ち漕ぎ全速力で逃げる小学生マーくん。それを追いかけるラブリーJK千夏。みんなゼミがみんな鳴き叫び続ける八月の午前の入道雲の下、自転車によるカーチェイスならぬバイスィコーチェイスが始まったのだ！

「な、何で逃げるのよ！　私よ私！　覚えてない！？」

小学生といえど六年生ともなればそここの体格だ。しかも相手は男子。マーくんとの差はなかなか縮まらない。運動不足がたたって既に膝ががくがくして来た。もうこれ以上は走れん……そう思ったとき、前方を走るマーくんの自転車がききききーっつっつと急停車した。そこでようやく追いつく。振り返ったマーくんは、ひーひーとみっともなく息を切らせる私を見て言ったのだった。

「あー思い出した。アフロディーテにいたお姉さんだ！」

「はあ、はあ、何で……に、逃げ……」

私は自転車を放り投げ、アスファルトの上にへたり込んだ。汗だくだし息切れだし酸欠だし膝が大爆笑だし。まったく何なんだこの子は。

日本の治安神話なんかとつくの昔に崩壊してる

「最近世の中物騒ですからね。日本の治安神話なんかとつくの昔に崩壊してるんです。怪しい人に声をかけられたらまず逃げないと」

「あ、怪しい……ですって……こんなスーパーラブリーハイスクールガール……つかまえて、よ、よく言う……わね……」

「何言ってるんですか。人間見た目は普通でも内心何考えてるかなんて誰にも分からないじゃないですか」

「そ、そりゃ……そうかもしれないけどさ……つかさ、どっかで休まない？」

「お姉さんいくつなんですか？ たったあれだけしか走ってないのに情けない」

「う、うるさい。15だよジューゴ……ところでさ、ここどこ？」

後先考えず追っかけてきたのでいつの間にか見知らぬ土地にまで来てしまったようだ。でもまあ自転車で行ける程度の場所なんてたかが知れているけど。

「僕の家近くです」

「へえ、そうなんだ。この辺なんだ。じゃあなんでこの前池袋にいたの？」

「学校が池袋なんです。じゃあ失礼します」

小学生なのに満員電車で通学とは過酷な……と腕を組んでいるとマ―くんは自転車に跨り漕ぎ出そうとした。私は膝を着いたまま、そのママチャリの荷台を両手で掴んだ。

「ちよちよちよちよい待ち！」

「何ですか。離してくださいよ」

「せっかくこうして偶然の再会を果たしたんだからさ、これも何かの縁ってことでさ、もうちょっとお話でもしようよ」

友人も家族もこぞって旅立ってしまった今、悲しいかな私には話し相手がいない。そして暇過ぎる。こんな状況では例え小学生でも相手になってももらいたいと思うのも致し方のない所。

「ええ〜？ 僕忙しいんです。宿題やらないといけないし……」

「じゃあ図書館戻る？」

「今さら戻っても席は空いてないでしょう。はあ、お姉さんのせいで静かで涼しい環境を失ってしまった」

「何で私のせいなのよ。自分から逃げたくせに。つか宿題なんか家でやればいいじゃない」

「駄目ですよ」

「何で？」

「うちは10人兄弟の大家族なんです。下は幼稚園から上は大学生までいるんですが、家は狭くて当然自分の部屋なんかありません。家には必ず誰かしらいて、うるさくてとてもじゃないけど勉強なんかできませんよ。それに」

「それに？」

「冷房がないんです」

「そ、そっか、それはキツいかもね……」

「だから僕は毎日朝一番で図書館に並んで席を確保し、夕方閉館になるまで勉強しているのです」

「偉いねえ。あ、じゃあさ、ウチ来ない？」

「え？ お姉さんの家ですか？」

「うん。今さ、出払っちゃって誰もいないんだ。だから静かだしクーラーもあるよ」

「それってまさか……」

「なに？」

「逆ナンってやつですか？」

マーくんはやや後ずさりし、守るように両手で自分の身体を抱きしめている。

「あのねえ、今をトキメク激カワJK千夏様がなくんでよりによって小学生ナンパしなきゃいけないのよ！　　ったく失礼しちゃう」

「冗談ですよ。じゃあ行きましょか」

マーくんはフレームレスのメガネをきらりと太陽光に反射させると、颯爽とママチャリのサドルに跨った。何だ何だこの落ち着き払った小学生は……私、完全に遊ばれてる？

見知らぬ場所だと思っていたが、一本道を抜けると、知っている大通りに出た。私とマーくんは、黙々と自転車を漕いだ。そして懐かしの我が家に到着。

「へえ、一軒家なんですね」

「うん。あと25年ローンが残ってるってバカボンが言ってた」

「バカボン？」

「ああ、マイダデイのこと。そっくりなんだ。さ、上がった上がった」

「お邪魔します……ああやっぱり」

「やっぱりって？」

「友達の家に遊びに行くと、必ず自分の家とは違う、何とも言えない匂いがしますよね。あれって不思議じゃないですか？」

「そう？　違う人間が違う物食べて違う生活習慣で暮らしてるんだから、同じ匂いの方がかえって不思議だと思うけど？」

「なるほど。確かに犬だって相手を匂いで識別しますもんね」

「いや、それとはまた違うけど……まあいいや。何か飲む？」

私はリビングのエアコンを最低温の19℃にセットし、風を最強にした。マーくんは膝を直角に曲げて背筋を伸ばしてソファに座っている。

「温かいお茶頂けますか？」

「ええ！？ このクソ暑いのに！？」

「駄目ですよ、暑いからって冷たいものばかり取っていたら。体温が1℃下がるだけで身体の免疫力はガクンと落ちるんですから。特に女性は冷え症になりやすいんだから気を付けないと」

「へ、へえ、そりやどうも」

私は一旦冷凍庫から取り出した南国白くまを、そっと元に戻し扉を閉めた。

ラブホテルの休憩料金リサーチ済みの小学生

「あのさ、マーくんて昔からそんな喋り方なの？」

「ええ、そうですよ」

「いつぐらいから？」

「そうですね……幼稚園の頃のお誕生日会のビデオがあってこの前見ましたが、やっぱり今と変わらないしゃべり方でした」

「幼稚園からそんななんだ……ねえ、浮かない？」

「は？」

「いや学校とかでさ、そういう丁寧な話し方する奴ってあんまいないでしょ。まだまだガキンチョなんだから。だから周りから浮かないかなーって」

「どうですかね。別に気になるようなことはないですけど。僕が気付かないだけかもしれませんね。ま、どっちにしてもこれまで特に問題はありません」

急須に茶葉を適当に入れ、ポットのお湯を注ぐ。しばし待って湯呑茶碗に注いで、マーくんの目の前へ運んだ。

「はいどーぞ」

「あ、ありがとうございます」

湯呑を差し出すとマーくんはふうふう言いながら、熱い茶を美味しくそうに飲み始めた。あんまり美味しそうに啜るので、私も飲むことにした。「熱い緑茶を美味そうに飲む選手権」があればダントツの優勝だろう。小学生部門で。

「そうだ、聞きたかったんだけどマミちゃんはどうしたの？ せっかくの夏休みなんだからさ、どうせなら一緒に宿題すればいいのに。」

あ、そっか住んでるところが違うからそう毎日は会えないのか」

するとマーくんは湯呑をテーブルに置き、両腕で頭を抱え込んだ。何だろうと見てみると、肩を小刻みに震わせて嗚咽を始めたのだった。

「ママはちゃんは……ママはちゃんは……あああ!!!!」

「ちょっとマーくん? ど、どうしたのよ!？」

マーくんは俯いて泣き続けている。私はマーくんが落ち着くまで待った。10分ほどして顔を上げたマーくんは、メガネを外し、ティッシュで涙を拭いた。そしてとつとつと話始めたのだ。

「結論から言いますと、ママちゃんとは別れました」

「えー? 結婚の約束までしてたのに?」

「ママちゃんは……穢れていたのです!」

「なにそれ?」

「僕たちはあの日、アフロディーテを去った後、積み立てたお金を使い、『ステーキのどん』でライスとスープがお代わりし放題のステーキランチを堪能しました。そしてママちゃんの家で宿題をすることにしたのです。ママちゃんの家にはお爺さんとお婆さんが一緒に住んでいて、お母さんもいつも家にいるのです。しかしその日、ママちゃんの家に行くと、誰もいなかったのです」

「出かけたんだ?」

「ええ、テーブルにメモがありました『三人ではとバスツアーに行くから留守番よろしくね』と。どうやらお爺さんとお婆さんは前からバスツアーに行きたかったらしいのです。でも外国人にも大人気のこのツアーはいつも予約で一杯で、なかなか行くことができなかったのです。しかしこの日たまたまキャンセルが出て、キャンセル待ちをしていたママちゃんのお母さんに連絡が来たのだそう

小6で二ケタは

「服を全て脱いだ僕たちは、お互いの身体を触り合いっこしながらベッドに寝転んだのです」

「そそそそれでそれで!?!」

「ちょっとお姉さん、近いです」

「あ、ごめ」

思わず身を乗り出してしまった。この子たち、ホントにやったのかな……

「僕は自分の陰茎が大きくなったことを確認すると、ランドセルから避妊具を取り出したのです」

「えええ!?!?!? らららランドセルにコンドーム入れてるの!?!」

「当然です。いつ何時マミちゃんと性行為をする機会が訪れるかわかりませんからね」

「つか、そんな持ち歩いてたら学校で持ち物検査とか……まあいいや、続きをどうぞ」

「初めての装着で手間取りましたが、マミちゃんは『急がなくていいから、落ち着いて』と優しく見守ってくれました」

「ねえねえ、さっきっからさ、良い感じのラブラブなのろけ話にしか聞こえないんだけど、どこに別れる原因があるわけ?」

「まあ聞いてください。やっとのことで避妊具を装着し終えた僕は、いよいよ合体の行為へと移ったのです。仰向けに寝ているマミちゃん足を開き、僕は彼女の股間に自分の股間を押しつけました」

「つつつついにその時が来たのね……」

「すると何ということか! 僕の陰茎は、マミちゃんの膣の中にすっぽりと入ってしまったのです!」

そこでマークくんは再び目頭を押さえて泣き始めた。性交が成功して（お。ナイス駄洒落！）何を泣くことがあるのか？

「何だよ、それが目的だったんでしょ？ いいじゃない、上手く行っただから」

「だって……だって……そんなすんなり入るってことは彼女は初めてじゃない、つまりマミちゃんは処女じゃなかったんです！」

ああ、そういうことか……確かに小学生の同級生の彼女が処女じゃなかったらショックかもね。

「で、でもさ、マークくんはマミちゃんのことが好きで、マミちゃんはマークくんのが好きなんでしょ？ そんなさ、処女とかどうでもいいんじゃない？」

「いいわけないじゃないですか！ 僕が好きなのは純潔なマミちゃんなんだ！ そんな、他の男と関係を持つような、穢れた女に興味はない！」

「へえ、じゃあさ、そこで中断したわけ？ 性行為」

「……いえ、あまりの気持ちよさに、思わず射精してしまいました」
「なによ、やることやってんじゃない。そんなんで文句言う資格ないわよ」

全く、子供も大人も男は男だな。身勝手な人種め。

「僕もその時はそう思いました。例え僕の前に男がいたとしても、今こうして彼女と交わってしまったのだから、全て水に流そうと。しかし僕がマミちゃんを許せなかったのは彼女が嘘をついたからなんです」

「嘘って？」

「マミちゃんは自分を処女だと言い張ったんです。僕は彼女が正直

に話してくれれば、例え何十人と性行為をしてこようとも許すつもりだった。それなのに……」

小6で二ケタはないだろ。つーか小学生の話す内容じゃないな。

「でもさ、初めてだってすんなり入る子もいるんだよ？ それだけで処女じゃないって決めつけるのもどうかと思うけどな」

「確かにそういう話がないわけでもありません。しかし限度というものがあるでしょう。膣の中に一度も陰茎を入れたことがなければあれほど無抵抗な挿入は不可能です」

無抵抗って……

「それに、マミちゃんは物凄く濡れていました。経験のない女の子であればあそこまで体液が溢れ出ることはないはずです。なぜなら、女性の体液の量は快感に比例するからです。処女であれば快感を知らないはず。だとしたらあんなにたくさん体液が出ることはないのです」

マーくんはメガネきりんで言い放った。まあ確かに一理あるかも……ん？ ちょっと待てよ、それはもしかして……

当たり前前田のクラッカー炸裂

「マーくん、マミちゃんは処女よ」

「まだ言うんですか！　これだけ証拠があるというのに！」

「いえ違うわ。マミちゃんはね、ソルフエージュを行ってきただけなのよ。そう、マーくんとの性行為がムーズに、気持ちよくできるようにね」

確かにマミちゃんとは一度会っただけだ。しかしあのマミちゃんがマーくんに嘘をつく、ましてや他の男とエッチをするなんて（小学生だっつーの！）、私にはどうしても信じられなかった。だとすると答えは一つ。そう、私と同じだ。

私はマーくんのマミちゃんに対する誤解を解くべく女のソルフエージュについてこんこんと説明した。マーくんはいちいち頷いて聞いている。

「ソルフエージュ……ですか」

「そうだよ。マーくんだったってしたことあるでしょ？」

「ありません」

「え？　ないの！？　あれだけエッチに興味津々なクセに？」

「僕は最初の射精はマミちゃんに捧げると固く心に誓っていたのです」

まるで禁欲主義者だな。ネチっ子と龍馬にも見習って欲しいね。

「最初って、でもさあ……」

私はネチっ子と龍馬が「夢精」について語っていたのを思い出す。

それを指摘するとマーくんはややムキになって反論した。

「夢精は自分の意識とは関係ないでしょう！ 女性の初潮と同じです！ あれは単なる生理現象であってそこに性的な意味は含まれません！」

「まあまあ落ち着けて。でもさ、マミちゃんはさ、マーくんのためを思って予行練習してきたんだからさ、それは分かってあげないと」

「予行練習……か」

「そうそう。ぶっつけ本番でエッチして、痛がったりするところを見せてマーくんをがっかりさせたくなかったってこと。私だってその気持ち分かるよ。大好きな人と初めてエッチするとき無様な姿なんか見せたくないもんね」

「じゃあお姉さんはもう好きな人と合体したんですか？」

「お、おほほほ当然よ当然！ 当たり前田のクラッカー炸裂よ！ あの時の彼の気持ちよさそうな顔……予行練習しといてホンッと良かったって心から思ってるわ」

「そうか……そうだったのか……ごめんマミちゃん！ 僕が悪かった！ ありがとうお姉さん！ 僕、これからマミちゃんの家に行って謝ってきます！」

マーくんは嬉しそうに叫ぶと、あっという間に出て行ってしまった。今日はとってもいいことしたな私。若干脚色はあったものの、ウソも方便というからね。よし、若者の恋愛の悩みを解決したご褒美として……白くま食べようっと。

ガッキーに勝っちゃった

目の前で天に向かってイグアナが口から煙を吐き出している。バカボンのガラパゴス土産の、イグアナ型のお香立てだ。

30センチくらいの竹筒の根元にお香を立てて火を点けると、その竹筒にしがみついたイグアナちゃんの口から煙がもうもうと出てくる仕掛け。爬虫類独特の鱗状の皮膚の作りがやけにリアルで今にも動き出しそうだ。部屋中に南国の甘ったるい花のような、エキゾチックな香りが充満している。

「はあ」

そしてイグアナちゃんに釣られて煙ならぬ溜息を吐く私。やっとこさ退屈して余す夏休みが終わって今日から新学期、気分一新、心機一転、二学期こそ素敵な恋をするぞ！と意気込んで登校したまではよかったのだが、そんな私を待ち受けていたのは予想だにしない事態であった。

二学期始業式。まだまだ暑い九月の空の下、学校の最寄り駅である西武線椎名町駅で降りて爽やかに登校する私。ここは住宅街なのでこの時間帯の通学路には基本クリス・チャンディオール高校の生徒しかいないのだが、気のせいか何だかみんなが私をじろじろ見ているようないないよな。

やだー夏が過ぎてより一層美しさに磨きがかかっちゃったかしらー姉妹揃って美人っていうのも疲れるわねー私って罪な女ねーなどとちよっと浮かれ気分で学校の門をくぐると……

「きゃああ千夏様よ～～！」

「うおお千夏様だ～～！」

「歌って歌ってえええ！」

「踊って踊ってええええ！」

なななな！？ あっという間に何十人もの生徒に囲まれもみくちゃ状態に。先生に助けられて何とか無事教室に辿り着いたものの、廊下を歩いてもトイレに行っても体育館で校長先生の退屈な話を聞いている時もみんなが私を見る見る見る……

下校時は、またパニックになるといけないとのことで、担任の先生の計らいで他の生徒が帰るまで私は職員室で待機。しかも念には念を入れて裏門から出るようにという指示まで出されてしまったのだ。これじゃまるでヒット曲連発しまくってた頃のチェッカーズもしくはローラースケート転がしまくりの全盛期の光ゲンジじゃない。訳が分からず憔悴しきった私はすっかり腹ペコ状態でとぼとぼ裏門から出ると、そこには懐かしい顔が二つ。

「田倉！ 龍馬！ うえええええん」

私は半ベソ掻きながら思わず二人にしがみついてしまった。

「まさかこんなことになるなんてな」

冷蔵庫から取り出したペットボトルのアクエリアスをぐいぐい飲んでから龍馬が口を開いた。私たち三人は、とりあえずアフロディーテの龍馬の部屋で緊急ミーティングを開くことにしたのだ。

「一体全体何がどうなってるのよ!？」

ネチっ子と龍馬が悪いわけではないのだが、群衆の好奇の目に晒された私はかなり苛立っていて思わず語気が荒くなってしまった。するとネチっ子が相変わらずののんびり口調で説明を始めた。

「何かねえテレビで流れたらしいんだよねえ」

「テレビ? って何が?」

「僕はさあハワイ行ってたから見てないんだけどさあ、あのプロモーションビデオが深夜番組で放送されたらしいんだよねえ」

「え? だってさ、あのバンド、ビーグルスだっけ? メジャーデビューもしてないんでしょ? なんてそんな無名のバンドの映像がテレビで流れるわけ?」

「その番組っていうのがさあ、全国のライブハウスを回ってさあ、今激アツな旬の新人バンドを発掘するっていう内容でさあ、先週か先々週か分かんないけどビーグルスを取り上げられたって訳え」

「ふーん……まあそこまでは分かった。でもそんな深夜のバンド番組なんてみんな見てると思えないけど?」

「良太、順番が逆だ」

それまで話を聞いていた龍馬が口を開いた。

「逆って?」

私は一口カルピスを飲み下した。

「ビーグルスを取り上げられたからあのビデオがテレビで流れたんじゃない。ユーチューブが先だ。バンドの存在を知ってもらうためにあのビデオを撮ってユーチューブに流すっていうのは岡崎も知ってるだろ?」

「うん」

「それが理由はよく分かんが、『なんか面白い動画がある』ってあのPVがネットユーザーの間で話題になって物凄いアクセスがあったらしいんだ。それでビーグルスは俄然注目を集めた。で、その番組がユーチューブ経由でビーグルスに目をつけたってわけだ。まあビーグルス的には予想外の大成功ってことになるな」

「そうそうそれそれえ。僕もハワイで何回か見たけどお、見たたびに再生回数がウナギ登りい！　僕が見た時点で9万回後半だったから、多分今はもう十万以上アクセスがあるんじゃないかなあ」
「じゅうまんあくせす……って凄いの？」

パソコンやらないからな。バカボン買ってくんねーし。だもんでそれがどのくらいの破壊力なのかはイマイチ分りかねる。きょとくん、な私に龍馬が補足説明。

「岡崎、お前を見に一月で十万人が家に押し寄せたと思えばいい」
「まじで……そいつあすげえや……でもさ、何でそんなに人気が出たわけ？　何度も言うけど無名のバンドなのに……何で？」

「ネットの世界はさあ、有名無名関係なくちよつとしたきっかけで爆発しちゃうからねえ。特に動画はさあみんな日夜動画サーフィンしてるから面白ければすぐ話題にのぼるしねえ。それにさあ実際のプロモーションビデオはかなりの出来だし、音楽も歌もキャッチーでストレートで歌詞も女の子に受けそうだし、それに何といってもオナさんの魅力全開だからねえ。人気が出ても不思議じゃないよねえ」

「お、おほほほ、ま、まあね」

普段、自分では超激カワJKとか言うくせに、面と向かって褒められると弱かったりする私。

「あ、ちなみにオナさんのテンションがさらに上がるプチ情報」

「なにかしら？」

「ちよつと前にさあガッキーがポッキーのCMしてたの覚えてるう？」

「あー知ってる知ってる『とってもいいじゃんってきりすてコギヤル』ってやつでしょ。ガッキー可愛いよね」

「そうそう。そのさあ『ポッキー極細ダンスダンス編』っていうCMの再生回数がさあ8万9247回なんだあ」

「ままままじで！？ ガッキーってガッキーでしょ！？ 国民的超美少女の！？」

「うんそうだよお」

「やべ私……どうしょ……ガッキーに勝っちゃった」

千の夏に乗って

「はああ」

イグアナちゃんは既に煙を吐き尽くしたようで、天を見上げながらじっと動かない。ガッキーに勝ったという事実は確かに嬉しかったが、これからしばらくあんな状態が続くのかと思うとやはり憂鬱だ。ソルフェージュをする気にもなれん。

ネチっ子と龍馬は「俺たちが守ってやるから」と頼もしい言葉をかけてくれたが、多勢に無勢、今朝のように大勢で押し寄せてきたらどうにもなるまい。それに、二人と行動を共にしているのは学校にいるときと放課後の少しの間だけだ。朝や帰りの通学電車や休みの日まで一緒にいてと頼むわけにもいかない。

まあ考え過ぎかな。別にアイドルになってデビューしたわけでもないもんね。それに実際のアイドルだって普通に高校には通ったりするわけだし。一般人の私のことなんかすぐに飽きてすっかりさっぱり忘れて来週辺りにはいつもと変わらぬ平穏な学校生活に戻っていることでしょう。

そうそう、思えばいいところよ千夏。所詮何の取り柄もない小市民ですからね。ま、こんな風にちやほやされることなんて滅多にないんだから。長い人生これもいい経験。有り難く受け止めようじゃありませんか。ねーイグアナちゃん。

しかし次の日、時代の寵児となるのもまた一興、などのんびり構えていた私を待ち受けていたのはさらに悪化した事態だった。

池袋で埼京線を降り、いつものように西武線に乗り換える。ホームへの階段を駆け上がって出発寸前の電車で軽やかに飛び乗った。一息ついて顔を上げると、本能が何かを感じ取り、ざわざわと足元から全身に鳥肌が立った。車内が異様な空気に包まれていることに気が付いたのだ。私は電車の中で一瞬にしてクリス・チャンディオール高校の生徒に取り囲まれてしまっていた。

狭い空間に同じ制服の人間がぎゅうぎゅうに詰まっている光景はなかなか気持ちが悪い。しかも生徒たちは、私の身体の右側に男子生徒、左側に女子生徒とまるで紅白歌合戦もしくは水と油の如く真つ二つに分かれて睨み合っていた。これがどういう状況なのか、すぐには全く理解できなかったが、電車が発車し彼らのやり取りを聞くうちに徐々に事態が飲みこめてきた。

「ささ、千夏様ここは危険です。こちらへどうぞ」

「いえいえ千夏様、こちらの方が安全でございますわ」

私は電車の中で、まるで綱引きの綱のように両腕を男側と女側に引っ張られている。「痛い！」と叫ぶと両者は同時に手を離れた。

「申し訳ありません千夏様。全く、野蛮な男どもには参りますよね」

「何を！ お前らそうやって千夏様を自分たちのモノにしようとしているな！ 千夏様はみんなのアイドルだぞ、そうはいくか！」

「何を言ってるの！ そっちなんかムサ苦しい男ばかりでしょうが！ 千夏様を欲望の対象としてしか見られないケダモノたちの集りでしょ！ ああヤダヤダ汚らしいですわ。千夏様、一刻も早くここから……あ！ 千夏様どこへ！？」

椎名町に電車が着き扉が開くと、私は一瞬の隙を突いて一触即発状態の男と女の群衆を掻き分けホームへ飛び出し全速力で改札を通り抜けた。後ろではまだ、男と女の大群の、押し合いへしあいケンケンガクガクが続いている。

「待ってください千夏様！ ほら見ろ！ やはり千夏様のことは我々『サウザンドサマーズ』に任せておけばよいのだ」

「な〜にがサウザンドサマーズよ。気取っちゃってバツカみたい！」

「馬鹿とは何だ！ 千夏様のお名前は『千』の『夏』と書くのだぞ」

「知ってるわよそんなこと。何でも英語にすりゃいいってもんじゃないでしょ！ 男ってホント単細胞ね。そんなミジンコ程度の知能しかない愚かな男どもは引っ込んでなさい！ 千夏様はね、気高く賢いお方なんだから同じく気高く賢い同性の私たちに任せておけばいいのよ。千夏様を心からお慕い申し上げるこの『千の夏に乗っての会』にね！」

「ははん！ お前らこそあの歌のパクリじゃねーかよ！ 気高く賢い女性が聞いて呆れるわ！ いいか、よく聞けそもそも俺たちはな……」

私は校門には向かわずに途中で進路を変えて、学校裏の公園に逃げた。朝の公園では小さな子供を連れた若いママが何人か集まって話している。私はベンチに座り込み、息を整えた。

「な、な〜にがサウザンドサマーズよ……」

深い呼吸と共に口を吐いて出たのは、女たち、即ち「千の夏に乗っての会」の子が言っていたのと同じセリフだった。な〜にが千の夏に乗っての会だか……

てんのうずあいる

状況を整理しなくてはならない。私は目の前の砂場で小さな女の子がよたよたと歩き回っているのを眺めながら考えた。

彼らは要するに、私のファンクラブ的な存在のメンバーだろう。そしてそのファンクラブは二つある。元々一つだったのが分裂したのか、それとも最初から別々の団体だったのかそこまでは分からないが、とにかく「サウザンドサマーズ」と「千の夏に乗っての会」という二つの組織が誕生した。

そしてその二つの組織は、理由はよく分からんが、「サウザンドサマーズ」は男、「千の夏に乗っての会」は女というふういきつちりと性別で分かれたようだ。

「サウザンドサマーズ」と「千の夏に乗っての会」……面倒臭いから「男組」「女組」でいいや。「男組」と「女組」は私のファンであるという点では同じだが、思想が違うのか、政策が違うのか、はたまた単に性別が違うからなのか、とにかくいがみ合っている。まあ自民党と民主党みたいなもんかな……

「つかさ、ファンクラブって！」

パニックとイライラが込み上げて来て、思わず大声が出してしまった。砂の山を作っていたさっきの女の子が、プラスチックの小さなスコップを握りしめたまま首を傾げて不思議そうに私の顔を見る。

「だってさ、私別にアイドルでも何でもないんだよ？　おかしいよね？」

私はその子に話しかけていた。女の子は、だーだーと言いながらよちよちと私の方に近付いてくる。くりくりの純真な黒目で真正面から見据えられると私の心は幾分落ち着きを取り戻しつつあった。その子があんまり可愛いらしいので思わず両手を差し出し、両手を取ろうとした。

すると、若い女性が砂場の向こうから砂煙を捲き上げながら猛スピードで駆け寄ってきて、自分の愛娘が丹精込めて作り上げた砂山を、初めからそんな物はそこに存在していないかの如く一瞬の躊躇いもなく踏み潰し、私の目の前からその小さな身体を抱き上げた。

メイクを落としたら消えて無くなりそうな、描いただけの細い眉を寄せ、露骨に迷惑そうな顔を作る。彼女は私を一瞥すると、他のママがいる場所へと戻って行った。私は伸ばした両手の行き場を失ったまま固まっている。

何さ何さ！ 人を変質者みたいに！ 別にあんたの子供さراوحうなんてこれっぽっちも思っちゃいないわよ、失礼しちゃう！ アイドル扱いされたり人攫い扱いされたり……一体全体何なのよー！
！！ と頭を抱え込んでいると足音が近づき、二つの黒い男物の革靴が私の視界に入って止まった。

「ここだと思った」

「オナさん災難だったねえ」

「教室に來ないから心配してたんだ」

龍馬がいつになく優しい口調で話す。

「龍馬！ 田倉！ 私……私もう学校に行けないよお！」

そして半ベソ掻いて二人にしがみ付く。これじゃ昨日と全く同じ展開じゃないか。

「大丈夫だって。言ったら？ 俺たちが守るって。それによ、今だけだって。こんなことそう長くは続かないって。だからさ、行こうぜ？」

「まあさすがにさあ朝の電車の中まではどうしようもないけどさあ、学校にいる間は常に傍にいて……」

ネチっ子がそこまで言うのと、大勢の人間の塊が砂埃を上げて公園の中をこっちに向かって走ってくるのが見えた。平穏な朝の公園の、ほのぼのした日常を乱暴に掻き乱されて不機嫌になった若い母親たちはそれぞれ我が子を連れて退散してしまった。その普通じゃない様子に気付いた龍馬とネチっ子が身構えると、私たちはあっという間に何十人という女子生徒に囲まれてしまった。

「何なのよあんたたち！」

私が声を荒げると、群衆の中から一人の女子生徒が前に出てきた。今どき前髪一直線にパツツンの見事なまでのおかつぱ頭、黒縁眼鏡、私偏差値70で全国模試では常にトップテンキープしてます志望校はもちろん東大ですっていうオーラ全開の優等生を絵に描いたような人物である。見覚えがあるなと思ったらこの人物は、さっきまで電車の中で男組と言いつ争っていた張本人だったことを思い出した。

「千夏様、先程はお見苦しいところをお見せしてしまい、大変失礼いたしました」

私に恭しく頭を下げる。

「わたくし、千夏様の真の親衛隊『千の夏に乗っての会』代表の天王洲愛瑠と申します」

彼女は「真の」をことさら強調して言った。ん？ てんのうずあいる……？ なんつー派手な名前だ。見た目と全く合ってねー。つーかどっかで聞いたような……

「もちろん本名ではありません。いわば代表者としての役職名といったところです」

あ、そっか、駅の名前か。しかし何で天王洲なんだろう？ 最寄駅か？

下心100%なのです

「痛って！ な、何だお前ら！」

「わあああああああ」

天王洲愛瑠に気を取られている隙に、龍馬とネチっ子が他の女子生徒たちによって力づくで地面に押さえ付けられ後ろ手に縄で縛られていた。苦痛と屈辱に顔を歪める龍馬。一方DMネチっ子というのは、叫び声を出してはいるものの、大勢の女の子に痛めつけられて予想通り嬉しそうだ。こんな状況だというのにしょーもない奴め。

「ちょっと何してんのよ！ 放しなさいよね！」

ネチっ子はこのまま死んでも本望かもしれないが、とりあえず龍馬は助けないと。龍馬に近付こうと一歩足を前に出した瞬間、それ以上身体が動かなくなった。背後に立っていた別の女子生徒が、左右からそれぞれ私の両腕を掴んだのだ。私は首だけ回して叫ぶ。

「だから何なのよ！ 放せっての！」

すると天王洲愛瑠が腕を組んで、もがく私の前に立ちはだかった。

「いいですか千夏様、よくお聞きください。もはやあなたは自分一人の身体ではないのです。校内の、いえ、いずれは日本の国民的スターになれるお方。異性との交流はスキャンダルに発展しかねません。これからは一切の男という男を千夏様の傍から排除いたします」

「馬鹿なことやってんじゃないわよ！ その二人は私の大事な親友なのよ！」

天王洲愛瑠は溜め息をつき大袈裟に首を振って見せた。

「はあ……まだお分かりにならないのですか？ 男は欲望の塊なのですよ？ この二人が千夏様に近付いたのは隙あらば自分のモノにしたいからに他なりません。下心100%なのです。さあお前たち、連れて行きなさい！」

天王洲愛瑠が一際高い声を上げると、女子生徒たちが一斉に動き出した。軍隊並の機敏な動きでいつの間にか足まで縛られた龍馬とネチっ子を担ぎ上げる。

「やめろおお!!」

龍馬の悲痛な叫び声が私の耳を通り胸に突き刺さる。苦しい。ごめんね龍馬、私のせいでこんな酷い目に遭わせちゃって……

「やあめえてええええへ」

続いてネチっ子の、言葉とは裏腹の歓喜の叫び声が私の胸に突き……刺さるか……い！

「何なのよあんたたち！ あの二人に手え出したらただじゃおかないかね！」

「ご安心ください千夏様。排除するだけで危害を加えるつもりはございませんから。さあ、そんなことより学校へ参りましょう」

天王洲愛瑠は事が思い通りに進んで満足なのか、険しい顔から一転、にっこりと笑うと先頭に立って歩き出した。私は依然両腕を取られ

たままだ。これじゃ逮捕されて連行される犯人じゃないか。

「ええい！ 放さんかい！ 自分で歩くっつの！」

しかし私の声が聞こえているのかいないのか、左右の女子生徒は力を緩めようとしなない。

「ちょっと天王洲愛瑠！ 何とか言ってよね！」

「これは失礼致しました。おい、お前たち、千夏様を解放しろ！」

その声を聞いた途端に手を離す女子生徒。しかも無表情のまま。これじゃまるで主人の命令にしか従わないロボットのようだ。どうも様子がおかしいな……しかしとりあえずは大人しくしていないと何をされるか分かったものじゃない。私は天王洲愛瑠と並んで物言わぬ女子高生の群衆の先頭を歩き、校門へ向かった。

学校に入るとまた今朝のように男組、即ち「サウザンドサマーズ」の連中が押し寄せて来て一悶着あるのかと身構えたが、校庭も校舎内も怖いくらいに静けさが漂っていた。まあ授業中の学校なんだから、このぐらい静かなのが当たり前なんだけど。でも何か違う。何だろうこの違和感は。

天王洲愛瑠に促されて教室に入ると、違和感は現実味を帯びた。既に一時間目は始まっているにもかかわらず、そこに生徒は一人もいなかった。さらに教壇に立っている担任の先生は、遅れて教室に入ろうとする私たちに目も向けず、直立不動で教室の後ろを真っ直ぐ見据えたままだった。そのあまりの凝視振りに、後ろの壁に幽霊でもいるのかと何度も目を擦ってみるが、いつもと変わらぬ教室だった。

私はいよいよ怖くなり逃げ出したかったが、教室の入り口からは「千の夏に乗っての会」のメンバーが後から後から入ってくるため、私はほとんど室内に押し込まれる形になった。そして彼女達は迷うことなく一人ずつ着席すると、そのまま充電の切れたロボットのようピクリとも動かなくなってしまった。

「ちょっとこれってどういうことなの？　なんで全員女子なのよ。男子は？　それに先生も何で黙ったままなの？」

質問には答えずに、天王洲愛瑠は私の背中をゆっくりと、しかし逆らえないように力を込めて押した。仕方なく自分の席に着席すると、天王洲愛瑠は私の隣の席に座った。

もはや私の頭の中は、得体の知れない恐怖と混乱とハテナマークで溢れ返っていた。完全に許容オーバーである。私が一躍時の人となり校内のアイドルとして注目を集め、ファンクラブが出来てしまった、ここまではまだ何とか理解できる。しかしこの状況はどうだ。不可解なことが起こり過ぎている。

まず第一に、何で他のクラス的女子までもが授業中にうちのクラスに入ってきて堂々と着席しているのか？　第二にうちのクラスの男子はどこへ行ってしまったのか？　第三にそれについて担任の先生が何も言わないのは何故なのか？　第四に、その担任は、なぜ未だに直立不動の姿勢を崩さず一言も発しないのか？

今この教室の中で、生徒四十二人プラス先生一人の計四十三人中で、自らの意思で行動できる人間はたった二人しかいない。即ち私と隣でここにこしながら黒縁眼鏡を拭いているこの女だ。怖い。何だこれ。ホラー映画じゃないんだから。私は唯一この事件――そう、これはもう事件と言っていいたろう――の鍵を握る人物である天王

洲愛瑠を、宇宙からの未知なる生命体に遭遇した時のような、怯えた表情で見詰めた。

幼稚園児で念を送るとかいう発想に至る

「やだ、千夏様ったらそんな顔で見ないで下さいよ」

「せ、説明して」

「説明って、何をですか？」

天王洲愛瑠は勝ち誇った顔で見返す。私はいえ、さっきまでの威勢はどこへやら、自分でも分かるくらいに震える声を絞り出すのがやっとだった。

「ととつととぼけるのは止めてよね。どう考えたって異常でしょうが。これまさかあなが全部……仕組んだこと……なの？」

「あら千夏様、仕組んだなんて人聞きの悪い。元はと言えば千夏様、あなたが原因じゃありませんこと？」

「わ、私は別に何も……ただちょっと動画が話題になっただけだし……ってだからそうじゃなくって！ おかしいでしょこの状況！ つーか何で先生まで何も言わないのよ！」

遂に恐怖心が限界値を越え、緊迫の糸が切れた。私は拳を机に叩きつけ、この春に赴任してきた現国担当の、未だにリクルートスーツを着て学校に通ってくる就活中の学生みたいな若い女性担任に向かって叫んだ。

「千夏様落ち着いて。いくら叫んでも無駄ですわ」

天王洲愛瑠は私を諭すように言った。これが落ち着ける状況かつつ！

「いいですわ。千夏様には全てお話ししましょう。実は私はこの世の

支配者となるべく生まれてきた存在なのです」

えええなんだよこのパツツンおかつぱ娘は藪から棒に。やだよもう、まゝた変テコなのが出てきちゃったよう……まあいいや、もうどうにでもなれ。とりあえず聞いてやろう。この場の主導権はあんたのもんだ。続きをどうぞ。

「もう薄々お気付きになっているとは思いますが、私には人の行動を操る能力がありますの」

コラコラよい子はそんなデンジャラスな発言をさらりと口にしちゃダメなんだぞ。しかし。

私は天王洲愛瑠から視線を外し、くると教室を見回した。相変わらずリクルート先生は直立不動だし、女生徒たちは着席してからというものの背筋を伸ばして膝に手を置き前を向いたまま、誰一人言葉を発していない。この状況を見ると天王洲愛瑠の発言もあながち嘘ではないようだ。だがこれだけの人数を意のままに操るだなんて、そんなことが可能なんだろうか……戸惑う私をよそに天王洲愛瑠は話を続けた。

「初めて自分が人と違う存在だと気付いたのは幼稚園の頃でしたわ。私に通っていた幼稚園では毎年夏になるとドジョウすくいをやるのです。膨らませて作る、ビニール製の小さなプールに水を張り、その中に飛び込んできゃっきゃきゃいいながら捕まえる。ま、ドジョウすくいと言うよりはドジョウと戯れてるという方が近いですわね。でも私はそんな光景を、いつもプールの外から冷やかな目で眺めていました。何故なら未だにそうなのですが、私は動物と触れ合うことが好きではないからです」

天王洲愛瑠はそこで一旦言葉を区切った。ふーんそうなんだ。猫の肉球とか最高なだけだな……お、ということとは、いざとなったらハムスターの一匹でもけしかければ危険な目に遭わされずに済むのか？

「もちろん先生や友達はそんな私を見て『面白いから一緒にやろう』と声をかけるのですが、嫌なものは嫌ですわ。私は頑としてプールには入らなかったのですの。だからと言ってただ眺めているのも退屈だったので、念を送ることにしたのです」

幼稚園児で念を送るとかいう発想に至るのが凄いですな。さすが世界の支配者になれるお方は違いますな。それでそれで？

「男の子が一匹のドジョウを捕まえようとしたので、私はドジョウに向かって『逃げろ！』と念じましたわ。するとどうでしょう。ドジョウは彼の手をするりと抜けて逃げて行ったのです。もちろんぬるぬる滑るドジョウですから、そう簡単には捕まりません。だから単なる偶然かもしれない。だから捕まりそうなドジョウを見るたびに『逃げろ！』『逃げろ！』と何度も念じてみたのです。ドジョウは次々と園児の手をかわして逃げ回り、遂に誰も捕まえられなくなってしまうたのですわ。」

そこで今度は先生が園児にいいところを見せようと、プールに入ったのです。私はずっと念じ続けましたがそこは大人です。小さな子どもと違って動きも速いし、ドジョウの動きを読むこともできる。しかしこれはもはや先生とドジョウの対決ではありません。私と先生の勝負ですわ。私の念力で何とか逃げていたドジョウたちではありませんでしたが、泳ぎ疲れたのか一匹のドジョウが遂に追い詰められてしまったのです。そして先生はここぞとばかりに両手でその身体を

しっかりと掴んだのです」

ほうほう。ではこの勝負、先生の勝利ってことでよろしいですか？

「でも絶対に捕まって欲しくない私はそのときそれまで出したこともないような大声で叫んでいましたの。『逃げろ！』と。するとその瞬間、信じられない光景が目の前で繰り広げられたのですわ。何とプールの中のドジョウが全て水中から飛び上がってプールから飛び出したのです。

びっくりした先生は捕まえていたドジョウを手放してしまいました。ドジョウたちはそのままグラウンドをくねくねと進むと、ぞろぞろと門から出て行ってすぐ近くの水路へと逃げてしまいました。パニックになる園児と先生。当然捕まえるところではありません。

結果、私の勝利ですわ」

「や、でもさ、それはそのーなんだ、天王洲が急に大声出したもんだからドジョウもびっくりして飛び上がったんじゃないかな？」

「そうですね。千夏様のおっしゃる通り、そのときはそういうことでその不思議な出来事も処理されたと思います。自分の能力に關してもまだ確証が得られたわけではありませんでした。園児たちに捕まえられなかったのもドジョウの実力が上回っていたからかもしれないですね。だからそのときはあまり深く考えなかったのです。その後は特に変わった事もなく、小学校に上がる頃にはドジョウのこともすっかり忘れておりました。本格的に自分の能力に目覚めたのは小学校三年生のときですの」

西日暮里田端ちゃん

さてさてさっきから「〜ですの」とか「〜ですわ」って、柿の種にチョコレート塗っちゃうくらい外見とミスマッチな喋り方が気になって仕方ないんですけど……まあね、世界の指導者ですからね、そのくらいはね。それでどうした小学校三年生時代。

「当時私は動物嫌いのせいもあって友達が少なかったんですの。さらに男の子からは軽くイジメっていうんですか？ それにも遭っていましたわ。ほら、子供の頃って単純で理性が利かないから本能的に何でも動く物に興味を持ちますでしょ？ 特に小動物系。今は虫も触れないような大人でも、小さい頃は素手で平気でバッタを捕まえたりしてたってお話はよく聞きますものね。」

小学校ってたいいどこでもウサギとか鶏なんかを飼ってますでしょ。それで飼育係の当番が回ってくるじゃないですか。そういうときでも私、一切お世話しませんでしたから。そういう意味でも苛められていたのは自業自得と言えなくもないのですけれど。それに見た目もこの通り地味ですものね。ターゲットにしやすかったのでしょうね。その頃から男という人種は大嫌いでしたわ」

お、世界のプレジデント天王洲、ついに自らの容姿を地味と認めたな。そうか、苛められてたのか。しかも男嫌いときたか……なんか、暗い話にならなきゃいいけど。

「あれは動物園に遠足に行ったときですわ。もちろん私は動物園なんか行きたくもなかったのですが、当時学校で唯一仲の良かった西日暮里田端ちゃんが」

「待て待て待て待て今何と？」

「え？　ですから同じクラスの西日暮里田端ちゃんですわ」

「それは本名かい？」

「もちろんですわ」

ゼッターウソだ。嘘八百だ……別に駅名にこだわる必要もないと思うのだが。

「その西日暮里田端ちゃんがですね、前日から熱を出して遠足に行けなくなってしまったのです。西日暮里田端ちゃんは動物が大好きで、遠足をとっても楽しみにしていました。しかし熱は当日の朝になっても下がることはなかった。そこで西日暮里田端ちゃんは電話越しに涙ながらに訴えてきたのです。『愛瑠ちゃん……お願いだから私の代わりに遠足に行ってきて欲しいの。そして帰ってきたら熊さんやラクダさんやペンギンさんのお話を聞かせて……』と。」

だから本来なら腹痛で休む予定でしたところを急遽変更して行って参りましたわ。当時から血も涙もない私ではありましたが、さすがに唯一無二の親友の病床からの願いを無下に断るわけにはいきませんでしたから」

血も涙もない小学生ってどんなんだよ。家なき子か？　つーか自分で言うな。

「今どきの小学生なんて動物園くらいでは大して喜ばないもの。それでもそれなりにわいわいがやがやと賑やかに動物たちを見て回っておりましたの。すると例のいじめっ子軍団が、何やら檻の前で騒ぎ始めたのですわ。何かと思えば、檻の中では三匹のトラが揃いも揃ってお昼寝中だったんですね。動き回るところが見たかったのか、いじめっ子たちはトラに向かって『悔しかったらこっちに来てみろ』だの『お前らなんかぶっ飛ばしてやるぞ！』だの口々に叫んで

いるのです。全く愚かしい。

そんな馬鹿は放っておいて、さっさと素通りしようとしたそのとき、あの光景が甦ったのです。そう、ドジョウすくいの光景が。今よ、やるのよ愛瑠、頭の中でもう一人の私が言いましたわ。私はやや離れた所に立ち、三匹のトラに意識を集中しましたわ。そして念じたのです。『怒れ、そしてこの愚かな者共を噛み殺せ』と」

おいおいいくらなんでも噛み殺せは物騒じゃありませんこと？

「するとどうでしょう。それまで静かに寝息を立てていた三匹のトラが一斉に目を見開き、牙を剥きだしていじめっ子の方に襲いかかってきたのです！ もちろんトラは檻に入っているし、その周りにも柵があるので誰も怪我などいたしません。しかしあまりの唐突なトラの突進にいじめっ子たちは腰を抜かしてしまったのです。そして情けないことに、全員が失禁していたのですわ」

そこでおほほほと口元に手を当てて笑う天王洲愛瑠。楽しそうだな。

「何事かと学年中の生徒と先生がすぐに集まってきましたわ。もちろんその日以来いじめっ子たちの地位は完全に失墜し、私は晴れて自由の身となったのは言うまでもありませんことよ」

そこまで話し終わるとキンコンカンコンとチャイムが鳴った。プレジデント天王洲の一時間目の授業終了！

フォーブスの長者番付に載っちゃうくらいの金持ちのみに許される発言

休み時間になったのに誰一人立ち上がりず教室から出ようとしない。校舎中が静寂を保っているところを見ると、学校中がこの教室と同じ状況のようだ。リクルート先生もマネキンの如く微動だにせず。まじで怖えよっっ！　ここは蠟人形の館かよっっ！　デーモン閣下助けてくれよっっ！　と一応突っ込んでみたものの恐怖心は拭えない。本当にこの人たち大丈夫なのかな。

「自分の能力を確信した私は、遠足の次の日、元気になった西日暮里田端ちゃんを連れてペットショップへと足を運んだのです」

「あのさ、そのアニマルコントロールの話はまだ続くの？」

「ええ続きます。学校で飼っているウサギと鶏が交尾するかどうかを試した話、理科の実験で使うカエルを捕まえに行って返り討ちに遭った話、林間学校で出会ったシマリスと日本カモシカとの壮絶なバトルの話、それから……」

「はいはいはいはいそこまで。あんたが目指しているのはドクタードリトルかい？　支配するのは人間でしょ？　だったらヒューマンコントロールの話聞かせてよね」

と言ってから若干の後悔。シマリスとカモシカのバトルの話はちょっと聞いてみたい気もするが……まあいいや。

「分かりましたわ。ではご要望にお応えして、断腸の思いで数々の素敵エピソードを端折らせて頂きます。哺乳類爬虫類鳥類魚類から昆虫節足動物天然記念物絶滅危惧種に至るまで数々の動物で自分の能力を試した私は、いよいよ人間の行動操作へと範囲を広げたのですわ」

「おお、遂に来たな。マインドコントローラー天王洲！　よ！　大

統領！ 日本一！ さてさてどんな話が飛び出すのかな？」

半ばヤケクソ気味に目を光らせ揉み手とかしてみたりして。

「その結果がこれですわ」

「……ん？」

「ですから、人間の行動を操作した結果が今の状況ですわ」

おいおいおい冗談はパツツン過ぎる前髪だけにしてくれよな。

「またまたーもつとこう色々あるんでしょ？ ここまで来て隠さな
くったっていいじゃん。例えばお気に入りのカフェのイケメン店員
を自分に惚れさせたりとか、中学校の全女子生徒憧れのバスケット
部キヤプテン独り占めしちゃったとか」

「男は嫌いですわ」

「あ、そか。じゃあ、親に好きな物何でも買ってもらったりとかお
小遣い倍額にさせちゃったりとか」

「私、お金にもお金で手に入る物にも興味ございませんことよ」

「なにー！？ ここにきてまさかの「お金で買えない価値がある」宣
言！ 今のはまさに、フォーブスの長者番付に載っちゃうくらいの
金持ちのみに許される発言だぞ。てことはまさか天王洲愛瑠は超の
付く大金持ちのお嬢様！？ それならこの貴族風味の変テコな語尾
も納得がいくな。ここは一つ穏便に事を済ませて仲良くなっておい
た方が得策かも知れぬ……」

「じゃあ本当に人間に試したのは今回が初めてなの？」

金持ちの知人ができるかもしれないという下心により私の声のトーンは柔らかさを帯びている。しかしどうしたとか、猫撫でな私

をよそに、これまで人生の成功者の如く勝ち誇っていた表情から一転、天王洲愛瑠は目に涙を一杯溜めて大声を上げて泣き出してしまった。

「どうしよう千夏様！ フリーズですわ！」

そして私にしがみ付く。

「ちょいちょいちょい待ちどうしたの一体！？ ふりーずってファブリーズ！？」

「本当はこんなはずじゃなかったんですのゝ助けてください！」

助けろったって助けて欲しいのはこっちなんですけど、と戸惑う私を差し置いて天王洲愛瑠は辺り構わず泣きじゃくりながら話し出した。まあ周りを気にしたところで蠟人形の館ですけどね。以下はその内容をまとめたものである。

イチコロとか言ってみてえ

天王洲愛瑠は実は高校入学当初から私のことが気になっていたらしい（香織さんと良いコイツといい同性にばかりモテるのはナゼだ：）。何とか私に話しかけるきっかけが欲しかったのだが、クラスも違うし見た目も地味な自分は相手にされないと思い込み、私に近付くことは半ば諦めかけていた。

そこでこれまで動物に対してしか行っでこなかったマインドコントロールを初めて人間に試す決意をしたのだという。しかし、仮に私に対するマインドコントロールが成功し、私が天王洲愛瑠に好意を寄せたとしてもそれは決して本心ではないし、いつかその効果が切れたときに後悔するかもしれないという思いが能力の使用を躊躇わせた。

行動に移せないまま迷っていると、やがて私は龍馬とネチっ子と行動を共にするようになった。当然この二人は天王洲愛瑠にとって邪魔な存在であることは言うまでもない。そこでまず私に対して能力を使う前に、龍馬とネチっ子を排除すべくマインドコントロールを試してみたのだが、意外なことに一向に変化が現れなかったのだ。彼女は自分の力は人間には使えないと知り、マインドコントロールも私のことも一旦は諦めたのだった。そこへ例の動画事件が持ち上がったのだった。

天王洲愛瑠も当然ユーチューブでビーグルスのプロモーションビデオを見ていたわけで、ワタクシ岡崎千夏あまりにも突然過ぎる話題沸騰振りは知っていた。だから二学期になり学校が始まれば、私のことが少なからず注目されるであろうことは容易に予想できたのだ。

これですます岡崎千夏は自分から遠い存在になってしまふ……と悲嘆に暮れて登校した天王洲愛瑠。予想通り皆の視線を集める私。しかし、それを遠巻きに眺めながら彼女は無意識の内にこれまでにないほどの強い念を群衆に対して送り続けていたのだった。

それは即ち「お前ら全員私の千夏様から離れろ！」という嫉妬の塊の念だった。その黒々とした強力な負の念は、一瞬にして群衆に対して効力を発揮し、天王洲愛瑠は彼らをこれまで操作してきた動物たちよりも遥かに容易く操れるようになっていたのだった。その力は凄まじく、特に私に関心のない生徒や先生たちをも巻き込んでしまったようだ。

全校生徒を操作できれば天王洲愛瑠が私に近付くのは簡単だ。そこで彼女はまず、生徒たちを操作しやすくするために組織化を図ったのだ。それが「千の夏に乗っての会」だ。組織の名目は何でもよかったが、ファンクラブということにしておけば私にもすんなり受け入れてもらえるだろうと考えたのだ。

かくしてファンクラブの代表となった天王洲愛瑠は晴れて堂々と私に近付こうとしたのだが、ここで予期せぬ事態が発生してしまった。それがもう一つのグループ「サウザンドサマーズ」だった。

男女関係なく全校生徒をまとめて組織したはずなのだが、どういうわけか男だけが自分のコントロール圏から外れ、思うように操作できなくなってしまったのだ。恐らくこれは自分の男性と女性に対する意識の差から来たものだと思われる、と彼女は自己分析している。

つまり、極度に男子を嫌うあまり、男性に対しては「コントロールの対象」から「憎むべき敵」へと変化してしまったのではないかと。

その感情がそのまま男たちに伝播してしまったのではないかと言うのだ。

真相は当の彼女にも解りかねるようだが、とにかく支配下にある女組とそれに敵対する男組に分裂してしまったのは事実。まずはこの男たち、つまり「サウザンドサマーズ」を何とかしないことには安心して私に近付くことができない……とここまでは何とか理解した私である。

「あれ？ 男組と言い争ってたのって今朝だよね？ で、あんたその後すぐ公園に現れたよね？ ってことはあの僅かな時間で男組をどうにかしたってこと？」

話題が男退治に変わった途端、天王洲愛瑠は頬に涙の跡が残る顔を上げ、得意満面の笑みを浮かべて私を見詰めた。そして言い放った一言が、「男なんてイチコロでしたわ」だった。

「イチコロってナニしたの！？ ねえナニしたのお！？」

しかし私の問いには答えず意味深にくっくくと含み笑いをするばかりの天王洲愛瑠であった。うおおおちょー気になる！ イチコロとか言ってみてえ！ 一体全体何したのさ！ ってまあそれは置いといて。とにかくこの状況を何とかしないと。

なるほど、水玉ね

実はこの教室に入るまでは生徒たちは完全に天王洲愛瑠のコントロールの下にあったのだという。しかし教室に入って着席し、私と話している内に天王洲愛瑠はある異変に気付き始めたのだ。まずい、群衆に対して自分の意思が通じなくなっている、自分の力が及ばなくなっている、と。

それでも最初は時間が経てば回復するだろうと安易に考えていて、私への話を続けつつ彼女らに念を送っていたのだが、待てど暮らせど生徒も先生もピクリとも動かなくなってしまったのだ。

そう、何を隠そうこの蠟人形の館状態は、天王洲愛瑠の意図したものではなく、まさしくアウト・オブ・コントロール、即ち制御不能状態が招いた結果だったのだ。緊急事態の中、私にそれを悟られないように会話を続けてきたが、それももう限界に達したらしい。先程の天王洲愛瑠の突然の感情の乱れようは、お手上げ状態の表れだったのだ。

私は席を立ち、左隣に着席している女子生徒の頬を人差し指で突っついてみた。若く瑞々しい頬には弾力があり、指を放すとすぐに元通りになった。体温も感じられるし呼吸もしている。どうやらちゃんと生きているようだ。顔の前で手を振ってみる。瞬き一つしない。目の前でぼん、と手を叩いてみる。彼女の鼻先を掠めるほどの至近距離にもかかわらずやはり目は開いたままだ。

恐らくここに着席してから一度も瞼は閉じられていないのだろう。ドライアイが心配ですね。私は彼女の制服のスカートを大胆に捲っ

てみた。なるほど、水玉ね。

「ちょっと千夏様！ 何なさってるんですか！？」

「え？ あ、いやあ、ホントに動かないのかなと思ってさ」

次に私は机の間に進み、教壇に向かった。リクルート先生は左手に名簿を抱え、右手を机に軽く乗せたままの姿勢で立っている。リクルート先生は顔は地味だが何気にナイスバディなのである。この際なので一度やってみたかったことを実行に移すことにした。

私は先生の真後ろにぴたりと立ち、両手を腕の間を通して前に回す。そして先生の胸をふにふにと両手で揉んでみた。いわゆる「手ブラ」ですな。お、これは意外と……いや、想像通りと言うべきか……なるほどなるほど。

「だから！ お止めくださいってば！」

「まあまあ。一応ね、確認よ確認。それにさ、こうやって刺激を与えたら意識が戻るかもしれないでしょ？」

「何したって無駄ですよ……どうしよう私、とんでもないことを……このまま皆さんの意識が戻らなかったら全員死んでしまいますわ……そうになったら私……私……」

天王洲愛瑠は再び泣きそうである。まあその気持ちも分からんでもないが、今の私にはそれよりもやるべきことがあった。

「ねえお腹空かない？」

その発言が意外だったのか、天王洲愛瑠は涙を流すのを止め、口を開けて啞然とした顔で私を見た。

「だってさ、何だかんだでもうお昼だし。それにさ、昔から言うでしょ。腹が減っては戦は出来ぬってね。何か食べれば気分転換にもなるし、新たな解決策も生まれるかもしれないでしょ？」

支配者っていえばナポレオンじゃなくってやっぱあっち

私と天王洲愛瑠は物音一つしない静か過ぎる廊下をぶらぶらと歩き、食堂へと向かった。

「ねえねえてんのーずってさあ」

「千夏様、名字で呼ぶのは止めてください」

「あそ。じゃあプレジデントってさあ」

「何ですかプレジデントって！」

「え？ 大統領って意味だけど気に入らなかった？ じゃあナポレオンってさあ」

「なんで急に個人名なんですか！」

「あ、そうだよね、支配者っていえばナポレオンじゃなくってやっぱあっちだよね、ごめんごめん。ヒトラーってさあ」

「いい加減にしてくださいよ……」

「冗談だよ冗談。あんまり落ち込むと身体に悪いぞ……ねえ何か変な臭いしない？」

食堂に行くには一旦校舎から出て校庭を横切らなければならないのだが、外にいるにもかかわらず辺りには異臭が立ち込めていた。食堂に近付くにつれ、その臭いはだんだんと強くなっていく。

「何だか焦げ臭いですわ」

「あ！ 大変だ！」

臭いは食堂の厨房から発生していた。コンロの火があちこちで点けっぱなしのままになっていて、その上に乗っている巨大な寸胴鍋やフライパンからは黒い煙がもうもうと立ち昇っていたのだ。

「とにかく消さないと!」

私と天王洲愛瑠は厨房に飛び込み手分けしてガスコンロの火を全て止めた。危うく火事になるところであった。しかし換気扇が回っていたため煙も食堂に充満することなく、大事には至らなかった。

「あぶねー。そっか、食堂のおばちゃんたちも停止してたのか……
恐るべしヒューマンコントローラー天王洲愛瑠」

とりあえず当面の危機は回避されたのだ。再び空腹を思い出した私は何か食べられそうなものが残っていないか物色し始めた。

「お、これ底の方は焦げてるけど上の方はいけそうだ」

私は皿を取ってきてご飯をよそい、寸胴鍋の中に入っているカレーを盛った。

「てんのーずも食べる? カレー」

「だから名字は! ……はあ、何でもいいですわ」

「じゃ決まりね。福神漬は? 入れる派?」

「入れる派」

「だよねーやっぱカレーには福神漬だよねー。でもさバカボンってさあ、おっかしいんだぜ。あ、バカボンてのはウチのダディのことなんだけど、あいつさあ、カレーには絶対に福神漬断固拒否のクセしてさあ、チャーハンには入れるんだぜー」

食事の時間になり徐々にテンションの上がりつつある私は一人で喋りながら天王洲愛瑠の分のカレーも盛りつけた。蠟人形の館による恐怖心はとくに消え、不謹慎ながらもわくわくしてきたのである。これはあのときの感覚に似ている。そう、子供の頃、台風で停電し

たときの感覚だ。

蒸し暑い夏の日、夕闇が訪れた頃、遠くで雷が鳴り響いていた。黒い雲は一瞬にして空を覆い尽くし、やがて雨が降り出した。雨足はすぐに勢いを増した。風も強く吹いている。雷は轟音の間隔を徐々に狭め、耳を塞がなければならぬほどまでに接近した。そして何回目かのぴかっ……どどーん、の直後、家中が一瞬にして真っ暗になった。

停電を予期していたお母さんは、居間のテーブルに既に並べ終えた何本もの蝋燭に火を灯し始めた。ゆらゆらと揺れる小さな灯りたちを見つめていると、吸い込まれてしまいそうだった。壁には美しき姉やバカボンの大きな影が揺れている。いつもの見慣れた場所が、一瞬にして別の空間へと移動してしまったかのような錯覚に陥る。

暗がりの中でお母さんはテーブルにお皿を並べ始めた。湯気の立つお皿には、焼うどんが盛られていた。お母さんは停電のときは、理由は分からないが決まって焼うどんを作っていた、そんな記憶がある。

そしてお母さんの作る焼うどんは、ソースの味ではなく、醤油ベースの味付けで、きりっとしていてとっても美味しいのだ。久しぶりに食べたいな、あの焼うどん……

古今東西の物語で危機を脱する方法はコレ

「千夏様！ 千夏様！？」

ぼんやりと目を開けると目の前にパツツンな顔があった。何だ、天王洲愛瑠か。

「大丈夫ですか？」

「え？ 何が？」

「だって、ここに座った途端眠ってしまったようでしたから」

「ああ大丈夫大丈夫。ちょっと昔のことを走馬灯のように思い出してただけ。さ、食べよ？ いっただっきまーす」

「それならいいんですけど……頂きますわ」

煮詰まり過ぎて濃厚なカレーを口に運ぶ。お腹ぺこぺこだからか悪くない味だ。積極的にスプーンを口へと運ぶ私とは対照的に、目の前の天王洲愛瑠頂は、試験の問題がさっぱり分からなくてやる気のない受験生のように、皿のカレーとライスをぐるぐると掻き回すばかりだ。

「要はさ、想いの強さでしょ？」

私は福神漬をぱりぱりと前歯で噛み砕きながら言った。天王洲愛瑠は視線をカレーから私に移し、続く言葉を待っている。

「自分で言うのもなんだけどさ、てんのーずの私に対する想いが大きかったからこそ強力な嫉妬心が生まれて生徒たちを操作できるようになったんだよね？ そしててんのーずは自分の思い通り生徒たちをコントロールし、今まで声をかけることすらできなかった私と

こうして面と向かって会話をしている。つまり願いが叶ったってわけだ。するとどうだろう。それまでの他の生徒に対する嫉妬心は消え、それと共にてんのーずの念力も効力を失ってしまった。その結果がこの蠟人形の館状態。違う？」

綺麗にカレーをたいらげた私は、天王洲愛瑠を見詰めたままコップの水を半分ほどぐいぐい飲んだ。

「でも……そうなのだとしたら……効力を失ったのだとしたら……その時点で元に戻るのが普通ではありませんこと？　こんな風に動けなくなってしまうなんて、動物たちのときにはなかったことですし……」

「思うにこれは一抹の不安の現れなんじゃないかな」

「不安……って？」

「うん、とりあえず今はこうして面と向かって二人っきりの時間を過ごしてるけどさ、生徒たちが解放されて普段の生活に戻ったら、別の誰かが私に近付くかもしれない。そんで私もその人の事が気に入ったら深い仲になってしまいかもしれない。それはてんのーずにとっては耐え難い事。だからそうならないようにてんのーずは無意識の内に生徒たちの行動を制限してしまっている……とまあこれは私の勝手な解釈だから実際のところはどうか……ん？　どした？」

向かいに座っていた天王洲愛瑠は何か閃いたのか、スプーンを置いて勢いよく立ち上がるとテーブルを回り込み、私の隣に席を移した。さっきまでの不安に駆られて泣きそうな表情はどこへやら、目からんらんと輝いている。嫌な予感。

「でしたら答えは簡単ですわ！」

天王洲愛瑠は顔と身体を私に向けて、胸の前でお祈りするように手

を組み目を閉じている。何かを待っているポーズだ。

「何……してるのかな？」

「古今東西の物語で危機を脱する方法はコレと相場が決まっていますわ」

「なんでしょ？」

「愛しい人のキスですわ」

キスして。まじかよこのパツツン……本日二度目の藪から棒だぞ。

「何でそうなるのかな？」

すると天王洲愛瑠は祈りのポーズはそのままに、右目だけ開いて言葉が続けた。

「あら、千夏様がおっしゃったんじゃないやありませんか。私の不安を解消すればこの状態もたちまち解決するのだと。そのためには千夏様は証明せねばなりませんことよ」

「何をでしょう」

うふふっ、と天王洲愛瑠は片目だけで気持ち悪く笑う。なかなか怖えな。こういうキャラ、いつか見たホラー映画に出てきた気がする。殺してもバラバラにしても甦って襲いかかってくるヤツ。

「もちろん私への愛ですわ。千夏様の愛が証明されれば私の不安はなくなり幸福感に包まれる。すると皆さんは元の姿に戻る。そして私と千夏様の永遠に続く愛の日々が始まるのですわ」

やべーこのパツツン本気だよ……今さらながらの後悔。軽々しく余計なことを口走ってしまった。しかし後悔してももう遅い。天王洲

愛瑠は、右目と左目を交互に開閉しながら、さあ、さあ、と徐々にその距離を縮めてくる。逃げる私。迫る天王洲。

「わわわ！ わーー！」

座ったままの状態で反り返り過ぎた私はバランスを崩し椅子ごと後ろに転倒してしまった。ここぞとばかりに馬乗りになる天王洲愛瑠。

「うふふ覚悟はいいですわね？」

「いやいやいやいやよくないよくない待て待て待て待てちょっと待て！」

「嫌ですわ。待ちません」

私の肩を押さえ付ける天王洲愛瑠の目は明らかにギラついている。その予想以上の力に、もはや逃げることは不可能に等しい。欲望の塊は男じゃなくなってお前の方だろう！

「わーかった！ する！ するから！ せめて私のタイミングでやらせて！」

ましてやとっても気持ち良いアレ

その途端、ふっと天王洲愛瑠は力を抜き、私から離れた。遂に私は観念した。キスしたくらいでこの状況が打破できるとは思えないというのが本音だが、まあね、別にね、女の子とキスするくらいね、香織さんとも何度もしてるしね、チュッと小鳥のようにやっつけばとりあえずこいつもこの場は納得するだろ。

身体を起こして立ち上がり、私は真正面に立つ天王洲愛瑠の両肩に手を置く……よく考えたら龍馬のときも香織さんのときも向こうからで、自分からキスしたことってないなあ。

「ねえ、眼鏡外してくんない？」

はつきりいって天王洲愛瑠に黒縁眼鏡は全然似合っていないなかった。パツン過ぎる前髪と、似合わない眼鏡の組み合わせの少女が、真面目な顔で目を閉じている姿は滑稽そのものだ。このままだと笑いが込み上げて来て震えてしまい、上手くキスできそうになかった。

「千夏様が外してください」

天王洲愛瑠は目を開けずに口だけ動かした。んだよう、めんどくせーな……私は両手でレンズの脇の黒く太めのフレームを掴み、天王洲愛瑠の顔から眼鏡を引き抜いた。

「じゃあ行きます」

深呼吸を一つ。意を決して顔を近付ける。鼻先がぶつからないように少し首を傾げる。天王洲愛瑠の荒く生温い鼻息が私の頬を掠めた。

そして唇と唇が触れたその瞬間。

「ま、まぶし……」

食堂全体に強烈な閃光が走った。私は思わず身体を振り目を塞ぐ。数秒か数十秒か、しばらくじっとしていた私は、薄らと瞼を開き始めた。もはや光は去ったようだ。目が慣れてきて、視力が戻った私の視界に映ったのは床に横たわる天王洲愛瑠だった。

「おい！ てんのーず！ しっかりしろ！」

私はしゃがみ込んで天王洲愛瑠の上半身を抱き起した。

「ん……」

「大丈夫か！？」

「あ、千夏……様」

これまでにない程の穏やかな表情を見せた天王洲愛瑠は、私にしっかりと抱きついたまま再び目を閉じて動かなくなってしまった。まさか……

「し、死ぬてんのーずー！ー！！ 死んじゃったらあんなことやこんなことが出来なくなっちゃうんだぞ！ ましてやとっても気持ち良いアレとかー！ー！」

私はピクリとも動かなくなってしまった天王洲愛瑠の閉じられた瞼を無理やり開き、頬をばちばち叩いた。すると天王洲愛瑠は頬を真っ赤にしながらゆっくりと目を開けた。

「……痛いですわ千夏様」

「んだよ脅かすなよう。私は今の光でてつきり力を使い果たしちゃったのかと……つーか何だったんだろ今の強烈な光は」

「千夏様」

「ん？」

「とっても気持ち良いアレって何のことですか？」

「え？ あーそれはだな……アレっていうのはそのー何だ……」

ソルフエージュに決まってるが、このパツツンにはまだ早過ぎるだろう。答えに詰まっていると、後ろで叫び声が聞こえてきた。

「あらやだ！ こんな焦がしちゃって！」

「何よこれ！ 味噌汁が干乾びてるじゃない！」

振り返るとマネキンの如く動きを止めていた食堂のおばちゃんたちが一齐に息を吹き返し、厨房の中の思いもよらぬ惨劇に慌てふためいていた。私は目を見開いて咄嗟に天王洲愛瑠の顔を見る。

「やった！ やったぞてんのーず！」

「やりましたわ千夏様！ やっぱり愛する人のキッスの効果は絶大ですわ！ というわけでもう一度……」

天王洲愛瑠は抱きついたままその両腕を私の首の後ろに回した。そして恐ろしい力で私の顔を自分の方へと引き寄せる。

「やややめろっての……このこの！」

「止めませんわこんなチャンス……滅多にござ……いません……ここよ！」

私は近付いてくるタコみたいな唇を何とか阻止しようと、天王洲愛瑠の頬を手の平で挟んで押し退けている。頬が潰れて持ち上がりキ

ツネ目になった天王洲愛瑠は、朝青龍そっくりでかなり笑える。

「ええい！ 調子に乗るんじゃない！」

私は渾身の力を込めて、襲いかかる天王洲愛瑠を振りほどいた。

「そんなことよりみんなの様子見に行かないと」

「ふ」

「ふ？」

「もうどうでもいいことですわ」

「何がよ？」

「千夏様が私のモノになった今、他の人間がどうなろうと知ったことじゃありませんことよ。むしろ千夏様以外の人間なんて全員死んでしまえばいいんですわ」

「いつどこで何時何分地球が何回回ったとき私がお前のモノになったん……だー……！！！！」

いい加減頭に來た私は立て膝付いてやる気なさ氣に座り遠い目をした天王洲愛瑠を強引に持ち上げ、柔ちゃんばりのキレイキレイの一本背負いで床に叩き付けた。「ぐはっ」という言葉と共に白目を剥き口からは泡を吹き、天王洲愛瑠は今度こそ動かなくなった。

最後含み笑いしやがった

私はおぼちゃんたちが混乱する食堂を後にして、校舎へと走った。すると廊下中に女子生徒が溢れ出し、パニックに陥っている。

「何で私ここにいの！？ 私のクラス三階なんだけど」

「てか男子は！？」

「てかてかあたし朝から今までの記憶ないんですけど！？」

「てかてかてかチョードライアイでマジウケるんですけどく瞼開かねっつーの！」

「てかてかてかてかアタシのスカート捲ったのどこのどいつ！？」

「てかてかてかてか……」

「静かに！ しーずーかーに！ ほら、各自自分のクラスに戻りなさい！」

先生たちは混乱を収めようと必死だ。しかし先生自身も何が起こったのかは把握していないだろう。でもまあこれでひとまず山は越えたわけだ。死人も出なかったし。めでたしめでたし。残るは男子生徒と……は！ 龍馬とネチっ子！ すっかり忘れてた！

私は再び食堂に戻り、未だに白目を剥き、脚を広げてパンツ丸出しで倒れている天王洲愛瑠に駆け寄った。上半身を起こし、肩を掴んでぐわんぐわん揺さ振った。

「ちよっとてんのーず！ 龍馬と田倉はどこなの！？ 白状なさい！ ついでに男子たちはどこやったのよ？」

「た……」

「た？」

「いいいくかん」

「体育館？　体育館なのね？」

それだけ聞き出すと私は天王洲愛瑠の肩から手を放し駆け出した。後ろでごちん、と大きな音がした。倒れた天王洲愛瑠が床に頭をぶつけたのかもしれないが、まあ色んな意味で人間離れしたあいつのことだ、死にはしないだろう。

「おい開けてくれー！」

「誰かー！」

「ヘルプミー……いや、ヘルプアス！」

校庭を横切って体育館に行ってみると、入り口の扉をガンガン叩く音と、野獣のような雄叫びが絶え間なく中から聞こえてきた。体育館の扉は一つしかない。私は重い鉄の扉を開けようとしたが、ビクともしなかった。外から鍵が掛けられているようだ。

私は即座に職員室へ向かい、目の前にいたジャージ姿のよく知らない先生に事情を説明すると、よく知らない禿げ上がった先生は「よっしゃ！」と言って鍵を持って一緒に体育館について来てくれた。扉を開けると、正月早々福袋を求めて行列をなしていた客が、開店と同時にデパートになだれ込むかの如く物凄い勢いで男子生徒が我先にと飛び出してきた。

男どもの顔が次々と目の前を通過するのだが、待てど暮らせど龍馬とネチっ子の姿が見当たらない。やがて出てくる男子が途切れ途切れになり、遂に最後の一人と思われる男子生徒が出てきた。まさかあの二人は別の場所に監禁されているんじゃないかと胸騒ぎがしたところで中から聞き覚えのある声があった。

「岡崎！　ここだ！」

その方角に目をやると、体育館の隅で龍馬とネチっ子がぐるぐる巻きにされたまま転がっていた。私は駆け寄って縄を解く。

「全く薄情な奴らだ。縛られてるつてのに完全に放置だもんな……やっぱ友達作った方がいいのかな」

龍馬が苦々しく言った。

「でもさあもうちょつとキツく縛ってくれてもいいよねえ。特に股間からお尻にかけてえ」

ネチっ子が嬉々として言った。バカ。

かくして男子生徒も解放された。そして緊急全校集会。生徒は体育館に集まるようにという校内放送が流れた。男子生徒の中にはまた閉じ込められるんじゃないかと拒否反応を示す者もいたが、女子生徒もいるし先生もいるので渋々ついに行った。

体育館に入り、全校生徒が揃ったところで一人の先生が壇上に上がった。あの禿げたジャージオヤジはまさしくさっき私と体育館に鍵を開けに行った先生だ。まさか校長先生だったとは。すると禿げジャージ校長はのっけから衝撃の一言を言い放った。

「えーと、今日起こった出来事は……忘れてください」

その言葉に体育館中の生徒が吉本新喜劇みたいになんぞこけた。なんだそりゃ。

「正直言って私にも何が起きたのか分からないのです。朝学校に来たところまでは覚えているのですが、その後の記憶がない。次に意識が戻ったのは職員室の中でしたが、時間がやたら過ぎていて。朝に目を閉じて次に開けたら昼過ぎていた。恐らく皆さんもそうでしょう。これは誰に説明を求めたところで明快な回答は得られないでしょう。だから忘れてください。他言無用です。まあ誰かに喋ったところで信じてはもらえないでしょうがね。ふふん。以上」

「今笑ったぞあいつ！」「最後含み笑いしやがったぞ校長のクセに！」「何がおかしいんだ、学校始まって以来の事件だというのに！」「不謹慎だぞ！」周りの生徒が口々に叫ぶ中、禿げジャージは拳を口に当て、くっくくくと肩を小刻みに震わせながら壇上から降りて退散してしまった。だから何がおかしいんだよ……。そして私たち生徒もその場で解散、今日の授業は中止、帰っていいことになった。

無制限って意味が違っ

「それにしても偉い目に遭ったぜ」

三人で校門へ向かう途中、龍馬が縛られて凝ってしまった首と肩を解すように回しながらばやいた。

「ごめんね二人とも、私のせいでこんなことになっちゃって」

「岡崎は悪くないって」

「そうそおう、オナさんのせいじゃあないよお」

「悪いのはあの女だ。俺たち男子を監禁したあの黒縁パツツン女！

あのアマ今度会ったらただじゃ……どした？ 岡崎」

龍馬の言葉に思わず立ち止まる。両脇を歩く二人は、私を置いて、二、三步先に行ったところで振り返った。

「やば、忘れてた」

「忘れてたって何を？」

「てんのーず」

「てんのおずう？」

龍馬とネチっ子が首を傾げる。

「ああ！ あのアマのことか！ 確か公園で偉そうにそう名乗ってたもんな。マジでぶっ飛ばしてやる。どこだ？ どこにいるんだ？」

「あのさ龍馬、怒る気持ちは分かるけどさ、その、許してあげてくれないかな」

「無理だな。あんな屈辱的なことされたのは生まれて初めてだ。しかも女に。それに岡崎、お前が一番酷い目に遭わされたんじゃない

のか？」

「まあそうなんだけどね……」

確かに天王洲愛瑠がしたことは一步間違えれば大きな事件に繋がりがねないことではあった。しかし結果的に誰も傷付いていないし――まあ龍馬は精神的ダメージを受けたけど――何というか、天王洲愛瑠は私の中で憎めない存在になりつつあった。それに。

「龍馬、本当に女の子殴るわけ？　もしやったら友達やめるけど？」

どんな理由があるにせよ、女を殴る男なんて最低だ。

「ぐ……わーかったよ」

「ホント？」

「ああ、殴らねえよ。でも許したわけじゃないからな」

龍馬は不貞腐れてそっぽを向いた。

「さーすが龍馬！　ありがとう！」

私は龍馬の肩に手を置き、背伸びしてその不貞腐れた頬にチュツとキスをした。龍馬はびっくりして私を見る。

「あー！　ずるうい！　オナさん僕にもお！」

「あんたは縛られて喜んでたでしょうが！」

私は、ネチっ子が気持ち悪く差し出してきた頬をぎゅうつつねった。

「まだいるかな……」

全校生徒がすっかり帰ってしまった校庭を横切り、私たち三人は食堂に来ていた。全ての生徒をチェックしたわけではないが、私が見た限りでは天王洲愛瑠は先程の全校集会に顔を出していなかった。ということは、一人で先に帰ったか、まだ食堂にいるかのどちらかである。

あるとき私は天王洲愛瑠に一本背負いを決めた後、さらに後頭部をぶつけさせてしまったのだ。肉体的なダメージは思う以上に大きかったかもしれない。出来れば食堂にいない方に賭けたかった。ここにいなければ、少なくとも自力で動ける、つまり私のしでかしたことは大したことではないということになるからだ。

もし万が一未だにここで倒れているとしたら、意識不明の重体とか、結構ヤバイ状態なんじゃ……。まさか打ちどころが悪くてそのまま……。なんてことがありますように。

おばちゃんたちも引き上げた食堂は、しんと静まり返っていた。恐る恐るさつき天王洲愛瑠といった場所を覗くと……。げ。まだ倒れてる。自分でぶん投げといてなんだが、とりあえず助けないと。

「おい！ てんのーず！ しっかりしろ！」

このセリフさっきも言ったような気がするな。私は先程と違って、天王洲愛瑠の上半身を優しく抱き起し、頬を軽く撫でるようにひたひたと叩いた。しかし反応はない。

「頼むよー目え開けてくれー！」

このまま意識が戻らなかったらどうしよう。一気に不安が押し寄せる。

「死んでんじゃねえのか？」

龍馬が追い打ちをかける。

「ちょっと変なこと言わないでよね！ 身体だって温かいし、息だって……」

天王洲愛瑠が呼吸をしているかどうかを確認しようと、私が顔に耳を近付けたそのときだった。「頂きですわ！」という声が聞こえた途端、私の唇は何かで塞がれてしまった。訳が分からず固まっていると、数秒の後、唇は自由になった。はっと気が付くと、目の前には満足気に舌なめずりをする天王洲愛瑠のいやらしい顔があった。

「千夏様、やっぱり来てくださったのですね。こんなにも愛されて私、幸せですわ」

そして抱き付こうとする天王洲愛瑠。ようやく唇を奪われたという事実に気付いた私は、脳の配線がぶっちんと音を立てて十本くらいまとめて切れた。そして奴の右腕に、電光石火の腕ひしぎ十字固めを食らわせた。

「い、いい痛いすわ！」

「おらおらあ！ 騙し討ちみたいな真似しやがってええ！ てめえあんまフザけたことやってお！ 腕もぐぞこるああ！」

「お、お止めください千夏様！ ギ、ギブですわ！」

「ギブなんか認めねえ！ 無制限一本勝負じゃこるああ！」

「無制限って意味が違っ……ちよっとそこ！ 千夏様を止めてよね

「！」

天王洲愛瑠は傍に突っ立って傍観している龍馬とネチっ子に助けを求めた。

「は、はは……岡崎、もうそのぐらいでいいんじゃないか？ そいつマジで脱臼するぞ」

と龍馬。

「いいなあ……」

と指を銜えるネチっ子。

異形の者たちによる世にも恐ろしい禍が

「なあ岡崎」

「なに？」

「いいのかそれで」

龍馬は私の右腕に抱き付き、しなだれかかるようにして歩く天王洲愛瑠を指差した。私と龍馬、ネチっ子と天王洲愛瑠はとりあえず学校から出て、とりあえずアフロディーテ方面への大通りをぶらぶらと歩いている。

「そこの馬鹿面したあなたたち、早くここから立ち去りなさい。さもないと三代先まで異形の者たちによる世にも恐ろしい禍が降り注ぎましてよ」

天王洲愛瑠は私の腰に腕を絡ませながら龍馬とネチっ子を見上げ、黒縁眼鏡のレンズを夕日に反射させながら言った。

「……いいのか岡崎、放っておいて」

再び龍馬が言った。ネチっ子はいつも通りのにまにま顔に戻っている。

「いいっていか何て言うか……と、とりあえずさ、どっか入んない？ 何か疲れちゃった。ブドウ糖補給しないと」

「そうですねさすが千夏様ですわ。私も今、全く同じことを考えていたところですよ」

「ははは……」

龍馬は力なく笑った。

こういうとき、いつもであればアフロディーテに集まってミーティングとなるのだが、さすがに会って間もない天王洲愛瑠に、龍馬がラブホテルに住んでいることを知られるのは避けたかった。私は駅前の喧騒が近付くと、適当に見付けたファミレスへと向かった。

サイゼリヤに入り席に座る。当然天王洲愛瑠は私の横でべったりで、向かいに龍馬とネチっ子が座る形になった。私はさっきカレーを食べたのでお腹は減っていない。ドリンクバーだけにしておいた。

縛られっ放しで昼ご飯を食べていない龍馬とネチっ子は、よっぽどお腹が空いていたのだろう、ハンバーグやらドリアやら海老フライやらを矢継ぎ早に注文し、運ばれてくると無言のまま猛然と平らげ始めた。食べ終えて落ち着くと、龍馬が口を開いた。

「おい天王洲、お前はそもそも何なんだ？ 今回の事件だってお前が首謀者だろ」

「私はこの世の支配者ですわ」

しれっと答えるその姿に、龍馬は口を開けたまま死んだ魚の目で私を見詰め「こいつは何なんだ？」と訴える。私は苦笑し首を振った。するとこれまで何も言わなかったネチっ子が、海老フライの海老の尻尾だけをかき集めて口に放り込み、バリバリと噛みながら言った。

「その子はさあ、てんのおずじゃあないんだなあ」

「え？ 違うのか？ じゃあ何なんだ？」

龍馬がすかさずネチっ子を見る。

「ああそっか、そう言えば天王洲愛瑠っていうのは芸名とかって言うってたもんね」

私は公園での発言を思い出した。すると天王洲愛瑠はずっと私から身体を放し、緑茶を啜った。

「……何のことかさっぱりですわ。私、生まれも育ちも天王洲愛瑠でございますよ」

急に白けた顔付になり、そっぽを向く天王洲愛瑠。私は右手を伸ばし、その顎を掴んでこちらに向かせた。そして満面の笑みで質問をする。

「お嬢さん、お名前は？」

「で、ですから、私は……」

「はいはい、僕知ってるう」

ネチっ子の発言に、天王洲愛瑠はキッと睨みを利かせた。

「何で？ 田倉こいつのこと知ってるの？」

「知ってる知ってるう。友達と同じクラスなんだよねえ」

友達？ ああ、以前一時期行動を共にしてたトリオ・ザ・ムツツリの連中か。

「僕が休憩時間にその友達のクラスに遊びに行くときあ、いつも物凄い顔でさあ教室の隅っこから睨んで来る女の子がいたんだよねえ。初めは気のせいかなった思ってたんだけどさあ、あんまり毎回続くもんだからさあ、これはもう偶然じゃあないなあって思ってたさ

あ、友達に名前聞いたわけえ」

そこでネチっ子はグラスを手に取りメロンソーダをストローで吸った。まさかこんな所で本名が暴露されるとは思っていなかったのか、天王洲愛瑠は身を固くして下を向いたままだ。私と龍馬は話の続きを待つ。

「だってさあ、僕のことをさあ好きな女の子の名前くらい知っておきたいもんねえ」

「ちょ、ちよつと待ちなさいよ！ 何でこの私がアンタみたいな根暗オタクを好きにならなければいけないんですの！？ 思い上がるのもいい加減にしてくださいさらない？」

天王洲愛瑠はカッと目を見開き顔を紅潮させて、唾を飛ばしながらネチっ子に反論した。しかしそんな天王洲愛瑠の攻撃を、闘牛士の如くさりとかわすネチっ子。

「うん、最初はさあそう思ってたんだけどお、すぐに違うって分かったんだよねえ。だってさあ、僕と坂ちゃんとオナさんで歩いてるとお彼女必ず物陰からじつと僕たちの方を見てるんだけどお、オナさんが単独行動になるとさあ、そっちばかり見てたからねえ、涎垂らしながら。だから彼女が好きなのはオナさんでえ、僕と坂ちゃんは邪魔だから睨んでるんだって気付いたんだあ」

ネチっ子はほぼ氷だけになったグラスの底を、未練がましくストローでずびずび吸っている。

「え、マジかよ、俺全然分かんなかった。何だよ良太、そんなことがあったんなら言ってくればいいのに」

龍馬が負けじと野菜ジュースを啜る。

「言ってもよかったけどさあ、見てる以外は何もしてこないから別にいっかなって思ってたさあ」

「で？ 肝心の本名は？」

痺れを切らした私が身を乗り出すと、天王洲愛瑠は縋るような目付きで私に抱き付いてきた。

チラ具合も絶妙

「千夏様！ それだけはお勘弁を！」

「何でよ。いいじゃん別に。高校生のクセに芸名名乗ってる方がどうかと思うよ？」

私はネチっ子にアイコンタクトを送り、先を促した。

「じゃあ発表しまゝす。彼女の名前は、『松竹梅子』でゝす」

「マツタケ……ウメコお!？」

ネチっ子の予想外の発言に思わず龍馬とハモってしまった。さらにネチっ子は鞆からシャーペンを取りだすと、ご丁寧に紙ナプキンに漢字でその名前を書き記した。

「松……竹……梅子……な、なんとまあおめでたい……うっくっく」

「ほらあ！ 今千夏様笑ったでしょ!？」

「わ、わら、笑って……なんかいないって……くっく」

駄目だ。面白すぎる。腹筋が痙攣起こしそうだ。名字が松竹はいいとして、梅子って。しかもそのパツンで。親がギャグで付けたとは思えん。

「もういいいですわ！ こんな屈辱耐えられませんことよ！ この場で死にますわ！」

そう言うとき天王洲愛瑠改め松竹梅子は、龍馬がハンバーグを食べるのに使っていたナイフを冷めきった鉄板の上からさっと掴み取った。くるりと刃先を自分のお腹に向け、そのまま切腹をする姿勢を取っ

た。

「ま、まあ落ち着けて、悪かったって。いいじゃん別に、縁起良
いし、それに可愛いと思うよ、梅子。うぷ」

私は松竹梅子の頭をポンポンと叩いた。私に可愛いと言われて嬉し
かったのか、梅子は頬を膨らませながらも手にしたナイフを大人し
くテーブルに置いた。

「ま、天王洲でも松竹梅でもいいけどさ、納得いくように説明して
くんねーかな」

龍馬が頬杖を付いて氷をがりがり噛み砕きながらだるそうに梅子を
睨む。

「ショウチクバイじゃございませんことよ。それに私は何もしてい
ませんわ」

「まだ白を切るつもりかよ……お前のせいでな、俺たちはもとより
男子生徒が大変だったんだぞ！」

龍馬はテーブルから身を乗り出し梅子の制服のブラウスに掴みかか
った。

「まあまあ」

私は鼻息荒い龍馬を宥める。

「全く野蛮ですわ」

「何を！」

「まあまあまあ」

「本当、愚かしい。これだから男という生き物は」

「んだと！」

「まあまあまあ」

「男なんか滅びてしまえばいいんですわ」

「言わせておけば！」

「まあまあまあ落ち着けつつってんだよお前らしい歳こいて公共の場所で声張り上げて喧嘩なんかしてんじゃねえよ他のお客様に迷惑だろコーヒーと迷惑は人にかけてちゃいけないって習わなかったのか？」

何事かと様子を見に来たウェイトレス（バイト）が口を開く前に、私は二人の間に割って入り、互いの顔を引き寄せて、小声で抑揚なくしかし威圧的に諭した。そして何でもないんです大丈夫ですから、という意味を込めてウェイトレス（恐らく大学生）にキュートスウィートスマイル全開で頷いてみせた。うん、ナイス私、大人な対処。私は洪々と着席した龍馬に問いかける。

「ねえ龍馬、その男子生徒ってどうなったの？」

そういえば梅子は「男なんてイチコロでしたわ」発言をしていたっけ。そのことも聞いておかないと。

「踊ってたんだよ」

「踊ってた？ って何を？」

「ポツキードダンス」

「はい？」

「朝から延々とポツキードダンス踊ってたんだよ」

「どゆこと？」

「知るかよ。俺たちが体育館に運ばれたときは既に全男子生徒が隊

列組んでシンクロ日本代表も真っ青なほどの一糸乱れぬ演技を誰に見せるともなく披露してたんだからな」

「どゆこと？」

私は首を捻り、今度は隣にいる梅子に聞いた。

「千夏様、そんなに知りたいんですの？」

「うん知りたい」

「仕方ありませんわね……大したことじゃございませんことよ。電車での諍いの後、パンチラ部隊で誘導しただけですわ」

「あゝ」

「何ですの？ 千夏様」

「パンチラ部隊の詳細を教えて頂きたいのですが」

「はあ、今回だけですわよ、千夏様」

「恐縮です」

「パンチラ部隊は文字通りスカートひらひらパンツチラチラ見せながら愚かな男共を誘き寄せる部隊ですわ。もちろん美少女を厳選しての配置、スカートの丈もギリギリ、チラ具合も絶妙、パンツもJKの定番の白で統一、これで馬鹿な男たちの視線は釘付け、そのまま体育館へ練り歩くのです。その様子はまさにハーメルンの笛吹き
の如く、でしたわ」

梅子は得意気に解説を続ける。

「そのまま体育館に閉じ込めておくだけでもいいのですが、まあそれも退屈でしょうから、ポッキードダンスを踊らせて差上げたのですわ。まず美少女パンチラ部隊が先頭に立ってお手本を見せる。パンチラにすっかり心奪われた男共は当然真似をする。踊りをすっかり覚えたところでパンチラ部隊は退散。あとは身体が勝手にルーティーンワークですわ」

梅子の解説が終わると龍馬が口を開いた。

ビルゲイツと孫さんを足して三で割ったくらい

「超怖かったんだぜ……なんせ三百人以上の男子高校生が『♪オシヤレば〜んちよう〜う』ってニキビ面全開かつ変声期を終えた野太い声で歌いながらエンドレスであのラブリーなポツキーダンスだからな」

「え？ それって一個前のヤツ？ 確か今は……」

「いきものがかりい」

ネチっ子が合の手を入れる。

「そうそうあのノリノリのヤツってそんなことはどうでもよくってあれ？ 梅子、男はコントロール圏外じゃなかったの？」

「知りませんわそんなこと。ま、男なんて単細胞ですから。言いましたでしょ？ イチコロだって」

うーん、パツン黒縁の梅子が男を見下す態度はなかなか見ものである。男に対してこれだけの上から目線の暴言を連発しているにもかかわらず、あんまり腹が立たないのは私が女だからというだけではなさそうだ。

「コントロール？ ってなんだよ」

龍馬がすかさず突っ込んできた。

「だから言いましたでしょ？ 私は世界の支配者ですよ」

「お前なあ、いい加減に……」

「龍馬ちよっと」

駄目だ、埒があかん。私は席を立ち、再び怒りだしそんな龍馬を引っ張って、トイレ近くの席から離れた場所に連れ出した。

「何だよ」

「実はさ、あいつ、動物とか操れるんだよね」

突然の私の告白に、龍馬は当然きよとんである。

「何言っちゃってんだ岡崎まで」

「いいから聞いて。で、今回の事件は、梅子の強力な嫉妬心によって集団を操作する力を手に入れたために起こったことなのよ」

「まさかお前、松竹梅の世界の支配者とかいう戯言信じてるんじゃないだろうな」

「何て言うか、普通じゃないのよ梅子は」

「まあな、パツツン黒縁のクセにあの高飛車な態度は確かに普通じゃない。名前もやたらめでたいしな」

「そうじゃなくて……それもあるけど……龍馬も見たでしょ？ 目の前で生徒たちが梅子の思い通りに動かされてるところ」

「まあな、確かにあれは尋常じゃなかったが……あれじゃねーの？ 大金ばら撒いて言うこと聞かせてたとか」

「あ、大金！」

「わ！ 何だよいきなり叫ぶなよ」

「そうだった。忘れてた。梅子はさあ、私の見立てによるとビルゲイツと孫さんを足して三で割ったくらいの大金持ちのお嬢なんだよね」

「マジか？ そいつあ凄えな。ってーことは仲良くしておいた方が後々……」

「でしょでしょ？ だからさ、今回のことはさ、とりあえず水に流してさ」

「ううむ、長いものには巻かれろか……俺もすれちゃったもんだ」

腕を組み自分の爪先を見るともなく見ながら龍馬は小さく溜め息を吐いた。意見がまとまり二人緊急ミーティングはこれにて解散。私はさすが席に戻ろうとしたのだが、その襟首を龍馬が掴んで引っ張った。

「わったった何すんのさ！」

「おい岡崎あれ見てみろ」

「なにになに？ あら」

引き止められた私は、テーブルに残されたネチっ子と梅子の様子を壁の陰に隠れ、覗いてみた。すると。

「なんだあれ？ メッチャ会話弾んでません？ どゆこと？」

私は私の頭の上に顎を乗せ、同じ姿勢で覗いてる龍馬に尋ねる。

「知るか。こっちが聞きてーよ……お、松竹梅が歯茎剥きだしで爆笑してるぞ……こえー」

「何話してるんだろ。すっげー気になるね」

「松竹梅め、男なんか死ねばいいとか言ってたクセに……」

「ま、あれじゃない？ 田倉はジャンルの男っていうより変態だからさ、梅子もとっつきやすいんじゃない？ いわゆる波長が合うってヤツ」

「変態同士意気投合か……よし岡崎」

「ん？」

「偵察だ」

そう言うと龍馬は腰を落とし、梅子の死角をキープしつつ抜き足差し足で二人のテーブルに近付いていく。ヒゲダンスみたいな格好に

なっている龍馬は十分怪しい人物ではあるが、私もあの二人のトークは気になってしょうがないので、龍馬を見習ってヒゲダンススタイルで近寄った。カトちゃんケンちゃんここに復活、である。

私と龍馬は低空姿勢を保ったまま梅子に悟られないように二人の座る席の隣のテーブルに腰を下ろした。背中合わせに梅子が座っている。ネチっ子と梅子は向かい合っているため、私たちの姿はネチっ子からは丸見えだが、梅子には見えていないはず。私と龍馬は振り返り、そのまま会話を続けるようにという意味を、アイコンタクトに身振り手振りを交えネチっ子に伝えた。

「おほほほいやですわ良太さんったら面白い方ですわね。そんなことありませんことよ……って千夏様、何をなさっているのですの？」

二人の会話に耳をそばだてていた私と龍馬に早々と気付いた梅子は振り返り冷ややかな視線を投げてきた。

「え？ あーいやそのーあ、席間違えちった。さ、龍馬、戻ろう戻ろう」

ちっ、バレちゃあしょうがない。私と龍馬は、飼い主にいたずらが見付かった子犬のように背中を丸め、すぐごと二人のいるテーブルに戻る。私たちが姿を現したせいで、梅子とネチっ子の会話は途切れてしまった。とりあえず四人して各自のドリンクを飲んでいる。

「ところで松竹、男がそんなに嫌いなのに何で共学に来たんだ？」

お、ナイス沈黙打破、さすが龍馬。質問された梅子は別注文したバニラアイスを浮かべて作成したメロンソーダフロート（飲み物の好みまでネチっ子に似て来てるぞ）をストローで飲みながら上目使い

で龍馬を見た。

「もちろん男など視界に入るだけでもストレスで胃潰瘍になる可能性大な、百害あって一利なしの存在には変わりありませんことよ。でも世界征服のためには男という生き物の性質を知っておかなければならないこともまた事実。ですから敢えて私は苦汁を舐めたのですわ」

そんなに苦しそうにも見えないが……って言う割には今さっきまで一応男子のネチっ子と爆笑トーク展開してませんでしたっけ？

「ふーん……で、具体的にどうやって支配するわけ？」

アイスコーヒーにガムシロップを入れ、ストローでぐるぐる掻き回しながら龍馬が興味なさそうに聞いた。

「ですからその方法を探っていくために共学の高校に入ったんですわ。もちろん私一人では少々しんどいので、千夏様にもお手伝い頂きますけど」

梅子にはやりと笑うと、私の腕にしがみ付き、「ねー」と馴れ馴れしく頭を肩に乗せてきた。

「私世界征服とか興味ないから。悪いけど他当たってくれる？」

私はその鬱陶しい頭と身体を押し退ける。

「もう、そんなこと言っちゃイヤイヤですわ。私のマインドコントロールの能力と千夏様のカリスマ性を持ってすればこの世界は思い通りですことよ。世界は私と千夏様を中心に回り始めるのですわ。

頑張りましたよね。そして征服した暁には世界の中心で愛を叫び合
うのですわ!」

叫ばない叫ばない。

新メニュー「大阪セット」

「あああここでお別れですわ寂しくって死んでしまいそうですわ……御機嫌よう千夏様」

次の日の朝、梅子は学校の最寄り駅である西武線椎名町の改札口で私の到着を待ち構えていた。例によって腕を掴みしなだれかかるようにしてそのまま学校までくっついて歩き、自分のクラスに到着すると、泣きそうな顔で大袈裟な挨拶をして教室に入って行った。朝から肩が凝ってしょうがない。

「朝からラブラブだな」

龍馬が半ば呆れた顔で言う。

「ああもう！ 鬱陶しいんですけどまじで」

「だったら本人にはつきりそう言えばいい」

「言ってるよ。でもいくら言っても逆効果と言うか打たれ強いと言うか聞く耳持たないというか自己中というか……まあ全部なんだけど」

ちなみに昨日の事件の真相は、全校生徒にとってはもちろん闇の中なのだが、あの全校集会のときの禿げジャージ校長の含み笑いを伴った意味深な発言によって「実は全部校長の仕組んだドッキリなんじゃないか？」という方向で噂が広まりつつあった。

そしてエンドレスポッキーダンスによって全校の男子の八割が筋肉痛になり、六割が喉をやられて声が出なくなっているのは言うまでもない。

さらに一躍校内のアイドルとなった私ではあるが、もう連日のような騒動にはならず、注目の度合いも減り、学校は平和な日常を取り戻しつつあった。やれやれこれで一安心、と思っていたのだがそれも束の間であった。

「オナさぁん、これこれえ」

少し遅れて登校してきたネチっ子は、身体の前に大きな紙袋を抱えながら教室に入ってきた。そしてそれを私の机にどさっと置いた。

「何これ？」

「ファンレタあ」

「ファンレター？」

「そおう。さっき下駄箱のところであ、三年生がさあ怖い顔して待ち構えててさあ、何かと思ったらあサウザンドサマーズ代表のなんとかって人でえ、オナさんに届けて欲しいっていきなり渡されたんだよねえ」

「まじで。っーかサウザンドサマーズは生きてたのね……」

紙袋は、デパートで大きな買い物したときくらいのビッグサイズのもので、その中に色とりどりの封筒が何十通と入っていた。

「やったじゃねーか岡崎。男選びたい放題だぞ」

「選り放題つつたつて……知らない人ばっかだし……」

私はとりあえず上の方の封筒を何枚か掴んで裏返して見た。どの封筒にも学年とフルネームが記されている。

「贅沢言ってんじゃねーよ……お、これ写真が入ってるぞ」

龍馬は興味津々で勝手に封筒を開け始めた。そこには便箋と共に3センチ×4センチ大の小さな写真が入っていた。

「何で証明写真やねん……あ、これもだ」

何通か封筒を開けてみたのだが、全てが証明写真入りだった。しかも写真の裏には「会員番号35」というように、ファンクラブのナンバーまで書いてあった。

「いいんじゃないの？ 一人ずつ面接していけば。で、気に入った奴を残していつて、最終的に五人くらいに絞ってさ、ウィークデイは日替わりで付き合えばいいじゃん」

龍馬が他人事のように言う。

「何で五股かけにゃならんのじゃ。つかさ、ファンレターってことはあの動画を見て表面的に気に入っただけであって、別に私の人間性を好きになったってわけじゃないんでしょ？ それに万が一この中の誰かと付き合うようなことになったらさ、その人サウザンドサマーズのメンバーにボッコボコにされるんじゃないの？」

「お、いいねえ岡崎、その自信過剰の上から目線な発言。早速パツツン松竹に感染したか？」

「ちよつとやめてよね……あ、そーだ、松竹って言えば田倉あんた昨日梅子とやたら楽しそうにしてたけど、何話してたの？」

「そう言えばそーだった。あんな堂々と男嫌い宣言してる奴と何で盛り上がったんだ？」

龍馬も加勢する。

「ええ？ 別に普通に話してただけだけどお？」

「その普通に会話できるのが凄えんじゃないか。教えろ良太」

「いいけどお」

とネチっ子が口を開いたところでチャイムが鳴り響き、リクルート先生が教室に入ってきてホームルームが始まってしまった。

「動物が好きって言うからさあ、動物にまつわる話をしてたんだよねえ」

カツカレーのカツの衣を剥がし、それをスプーンに巻き付けながらネチっ子が言った。只今昼休み。私と龍馬とネチっ子はいつものように食堂でランチ中。

「え、ちょっと待ってよ、動物嫌いって言ってただけど、梅子」

私とネチっ子に対して言うことが正反對ってどういうこと？ 虚言癖の持ち主か？

「そうなのお？ 梅ピョンやたらさあ動物に詳しいからさあてつきり大好きなのかと思っただけどお」

梅ピョンでネチっ子……そう言えば昨日、梅子も「良太さん」って言ってたな。いつの間にそんな間柄に。

「梅子が動物のことをよく知ってるのはさ、散々実験してきたからなんだよね」

私は天ぷらうどんの磯辺揚げ風ちくわ天をつゆに浸してから少し齧

った。青海苔の風味が鼻から通り抜ける。

「実験って何だよ」

二学期から始まった新メニュー「大阪セット」をようやくゲットした龍馬が背後から現れた。「大阪セット」というのは焼そばとお好み焼きがセットになっている、粉モン好きソース好きには堪らない一品である。安くてボリュームがあるので育ち盛りの腹ペコ金欠男子高校生には嬉しい限りである。デビュー間もないが、若干の行列ができるほどのなかなかの人気商品だ。

おいおいちょっと待てよ、お好み焼きは大阪かもしれないが、焼そばは特に関係ないのでは？　という突っ込みはご遠慮願いたい。関東人にとっては「お好み焼き」という響きさえ含まれていればそれだけでもう気分は大阪なのである。

「ま、いや。そんで？」

私は衣がユルユルになりつつあるカボチャ天を口に放り込み、ネチっ子に話の先を促した。

戦闘中に、しかも雄同士でエクスタシー

「うん。でねえ」

「いやだから実験って何だっつーの」

コストダウンのため生地の厚さで具の少なさを誤魔化そうとしていることが見え見えのお好み焼きを頬張りながら、龍馬がネチっ子の言葉を遮り私を見る。

「それは昨日話したっしょ。梅子は動物の行動を操れるって。アニマルコントロールー梅子」

「岡崎お前、本気でそんなの信じてるのか？」

「まあ六・四くらいで……って今はそんなことどっちでもいいでしょうが」

「そうだな、それについてはまた後ほど検証するということ。じゃあ良太続けろ」

「うん、でさあ、梅ピョンがさああんまり得意気に話すもんだからさあ、僕もいつになく対抗心が出てきちゃってえ、ついつい語っちゃったんだよねえ」

「何を？」

「オナさんさあ槍形吸虫って知ってるう？」

「知らん」

私はうどんを五、六本銜えたまま首を振った。龍馬の肩につゆが飛び散ったが気付いていないので黙っておこう。

「羊に寄生する寄生虫なんだけどお、その羊の体内に入るための作戦がさあ、恐ろしくも凄いだよねえ」

う……食事中に寄生虫の話か……せめて帰省中の話がよかったな、なんてね。

「槍形吸虫はさあ最終的には宿主である羊に辿り着きたいわけなんだけどお何てったって寄生虫、自分の身体は小さいからねえ、大して移動もできないしねえ、そのままじゃあ羊の身体に潜入するのは難しいことは百も合点承知の助なんだよねえ。そこで考えたのがさあまず蟻の身体に侵入することだったんだなあ」

「へえ、で、その蟻を羊が食うってことか。頭良いな」

げっぷを連発しながらもボリューム大のお好み焼きをようやくやっつけて、焼そばに移行した龍馬が口を挟んだ。つーかバランス良く食べなさいよ。

「そおう。まず蟻を中間宿主として選んだってわけなんだけどお、事はそう単純じゃあないんだなあ。だって羊は蟻を食べないからねえ。じゃあどうするかあ。そこで洗脳なんだなあ」

「洗脳？」

いかにも梅子の好きそうな言葉だ。恐らくこのキーワードでネチっ子の話に興味を持ったに違いない。

「蟻の体内に侵入した槍形吸虫はさあ、蟻の脳をハッキングしてえ行動を完全に支配してしまうんだなあ。それでえ、羊の大好物の草の先っちょに登らせるわけえ。でえ、蟻はその葉っぱの先端でさあ、羊が食べに来るまで朝も昼も夜もひたすら待ち続けるんだよねえ」

「まじで……」

うどんが端からつるん、と滑り落ちた。

「要するにさあ、この時点で蟻は完全に槍形吸虫の乗り物と化しているってことなんだよねえ。まあバスジャックみたいなもんかなあ。乗客だと思って乗せたら、拳銃持ったとんでもない奴だったあ、でえ、強引に行き先決められてえ、みんな道連れえみたいなあ」

「怖えー何だその話。ってことはつまり、俺たちも実は寄生虫に操られてるだけかもしれないってことか？」

「そうかもしれないねえうふふう」

久しぶりに気持ち良さそうに気持ち悪く笑うネチっ子を見た。

「ちょっとー田倉あんたそんな話したらさ、梅子のヤツ、『人類を支配する寄生虫』とか生みだしかねないじゃないのさ」

「あはははそうかもねえ。でえ、もう一つはさあ、アカシカの話い」「それもまた洗脳の話か？」

「違うう。アカシカのオスはさあ、オナニイの仕方がとっても変わってるんだよねえ」

「ええ！？ 鹿がオナニーすんのか！？」

歯に青海苔付けた龍馬が食い付いた。寄生虫にソルフエージュ……優雅なランチタイムの話題としては全く以って相応しくないな。

「するするう。人間だろうと動物だろうとおオナニイなんだからさあ、大なり小なり自分の性器を擦るのが普通でしょお？ でもアカシカはさあ、何と角を地面に擦りつけてするんだよねえ」

「角？ って頭の角？」

あ、思わず乗っちゃってしまった。

「そおう。頭に生えてる硬い角お。あれをねえ地面にすりすり擦り付けるとお不思議なことにイっちゃうんだなあ。性器には一切触れ

てないのにだよお」

「でもよ、鹿に限らず動物の角って言ったら敵と戦ったりとか、あと仲間同士の喧嘩とかで使うためにあるんだろ？」

「そおうでえす」

「じゃあアカシカは戦闘中に、しかも雄同士でエクスタシー！ なわけ？ 見てみてえ！」

何とか焼そばを食べきった龍馬が一人悶絶。私は人間の雄がペニスをぶんぶん振り回し、ぶつけ合って戦っているところを想像してしまった。先に射精したら負け、みたいな。戦争の形がそんなんだったら世界は平和なんだけどな。

「それがさあ、どういうわけかあ喧嘩のときは気持ち良くならないらしいんだよねえ。その辺はさあすっぱり割り切ってさあ、きつちり切り替えてるんじゃないかなあ」

恐るべしアカシカの精神力。ネチっ子が話し終わると三人の空間に沈黙が訪れた。それぞれが難しい顔をして物思いに耽っている……振りをしているところにそう言えば、と龍馬が口を開く。

学級委員長とかアイツでよくね？

「松竹のヤツ、あんだだけ岡崎にべたべたのクセに昼休みは近寄って来ないんだな」

そう言えばそうだ。短い休憩時間ならともかく、昼休みは一時間もある。一緒に食事まで出来る絶好のチャンスであるにもかかわらず、梅子は現れなかった。

「梅ピヨンはさあ弁当派なんだってえ」

「へえ、じゃあお母さんが毎日作ってくれるんだ」

それはそれで羨ましい限りだ。よその家の弁当ってどうして魅力的なんだろうな。きっとアレだな。いつもとは違う予測不能のおかず、自分の家とは違う味付けや盛り付けが新鮮だからだろうな。

「自分で作るって言ってたけどお」

「え、まじで、すげーな」

料理などまるで管轄外の私にとって、同級生が毎朝弁当を作ってくるとするのは月が消滅するくらいの衝撃である。

「でもよ、あいつお嬢なんだからわざわざ作らなくってもよさそうなんだけどな。むしろ学校にケータリングとかしてたら尊敬するんだけどな。あ、ひょっとしてあれか、花嫁修業の一環ってやつかあれ？ でもあいつ男嫌いだから結婚はできないはず……」

龍馬が意味もなくぼきぼきと割り箸を折りながらぶつぶつと言う。するとネチっ子がすぐさま反論してきた。

「ええ？ 梅ピョンはお嬢なんかじゃあないよお。母子家庭でえ隙間風の入る六畳一間の風呂なしアパートにいお母さんと二人暮しつて言ってたよお」

「なななんですよ！？」

「おい岡崎、どういうことだ。事前情報と大きく食い違う点があるようだが？」

龍馬が目を細めて睨んできた。

「ただだってさ、お金にもお金で手に入る物にも興味ないって堂々とマスターカード宣言してたからさ、私はてっきり孫さんの次の次くらいの資産家の娘かと……えええ隙間風えええ！？」

「何だよ、俺は長い物に巻かれるために怒りの剣を鞘に収めたんだぞ。ヤツが俺を札束で巻いてくれないんなら仕方ない。やっぱぶっ飛ばしに行っていいか？」

「あんたアホでしょ。赤の他人に何をどんだけ期待してたかは知らないけどね、何度も言うように男が女の子を殴っていいわけじゃないしょうが」

母子家庭ということは……そうか、梅子の両親は彼女が幼い頃に離婚したに違いない。離婚の原因は父親の度重なる浮気ね。それを知った母親は、彼にそのことを追求するのだが、父親は謝るところか逆切れし、暴力を振るうようになったのだ。当然梅子はそんな身勝手な暴力的な父親を憎むようになり、ひいては男という存在全てに対して嫌悪感を抱くようになった……有り得るな。

と、そのとき背後に殺気！ 私はすかさず振り返る。するとそこには正座した学ラン丸坊主鉢巻集団が黒々と食堂の床を埋め尽くしていた。何だ何だこいつらは。すると群れの先頭に座っているリーダー

「いらしき男が、腿の上に手を置き、瞬きせずに私を見詰めたまま口を開いた。」

「千夏様お早う御座います！」

声でかつっ！ つーかもうお昼だけどねっっ！

パブリックな空間であるみんなの食堂に、団体で正座という異様な光景だけでも目を引くのに、さらに坊主鉢巻の多分リーダーである男は大声を張り上げてしまったため、もはや学生のみならず、生徒に交じってラーメンを啜ってスーツに汁を跳ね飛ばしてる先生や調理中の食堂のおばさんまでもが手を止めて注目し始めた。

「ちょっとー止めてよねこんなところでそんなことすんの。みんな見てるでしょうが。つーかあんた誰よ？」

皆の注目を集める推定リーダーの視線の先には私がいるわけで、おのずとこの騒動の中心人物は私になりつつある。やってられん。すると意外にもネチっ子が口を挟んできた。

「ああ！ この人この人お」

「何がよ」

「今朝ラブレター渡してきた人お」

いつの間にファンレターがラブレターになったんじゃい、という突っ込みはさて置く。ということはつまりこいつらは……

「申し遅れました！ 私、サウザンドサマーズの代表、奥田玉夫と申します！ この度は小生のこの運命的な名前のお陰でサウザンドサマーズ略してサウザンズの代表に就任することができました！」

身に余る光栄有り難き幸せ」

「へー団体名略しちゃっていいんだ。で、オクダタミオだっけ？
それのどこが運命感じちゃう名前なわけ？」

「タミオではありません。玉夫です。だって千夏様と同じではありませんか」

「おくだたまお。おかざきなつ……え、
何が？ どころが？ 全然違うと思うけど」

「イニシャルT・Oでございます」

「あ、なるほど……ってそんだけ！？ そんなイージーな理由で
リーダー決めちゃっていいわけ？」

と他のサウザンズメンバーを見ると、皆うんうんと頷いている。何
というか、たりのいからよお学級委員長とかアイツでよくね？ みた
いなノリで決めた感満載な雰囲気漂っているのは気のせいだろう
か……

「は！ まさかイージューライダーとかけてるとか！？」

「とおっしゃいますと？」

「イージーリーダー、イージューライダー、イージューライダー……
…なんちて」

「……」

「お、おほん！ それで、何の用？」

「今朝お渡しした我々の熱き想いをしたためた数々の手紙、お読み
頂けましたでしょうか」

「うん」

「おおお！ 有り難き幸せ！」

「読んでない」

「おおおぬか喜び……」

「つかさ、盛り上がってるとこ悪いんだけどさ、止めてくんない
かな、そのファンクラブとかファンレターとかっての。別に私、ア

アイドルでも何でもなし」

「そんなご無体なことおっしゃらずに。これから私たちは千夏様の手となり足となり働き蜂のように身を粉にして働く所存でございます！ 何なりとお申し付けくださいませ！」

「……ふーん、何でも言うこと聞くんだ」

「はい！ 何なりと！」

「じゃあさ、サウザンドサマーズとかいう団体、今すぐ解散してくれる？ 解散って言うってもあれよ？ 『家に帰るまでが遠足です。みなさん怪我のないように気を付けて帰りましょう。では解散！』の解散じゃないわよ？ 解体ね解体、分解、バラバラ。鬱陶しくてしょうがないんだよね。あ、休み時間終わっちゃう。龍馬、田倉、行こ？」

「そ、そんな殺生な……あ！ 千夏様！ お待ち下さい！」

焼却炉の裏で一人楽しくランチを

私はだんだん腹が立ってきた。実際に声を出して歌っていたわけでもないし、キレキレの踊りを披露したわけでもない。何の特技もない、どこにでもいるか弱きイチJKなのにファンクラブだなんて。

最近の奴らはちよつと話題になったらすぐアイドル扱いで勝手に盛り上がりやがる。バツカみたい。ファンになるんならビーグルスの方でしようが。全く、お門違いも甚だしいったらありやしない。

ぷんぷんぷりぷりしながら廊下をずんずん歩いていくと、後ろから龍馬が声をかけてきた。

「おい岡崎いいのかよ。ああいう連中はよ、あんま邪険に扱うと何しでかすか分かったもんじゃないぞ」

「関係ないわよ。文句あんらかかってこいつつの。何がサウザンズよ、ホンつと下らない。何で男子ってこんなどうでもいいことにエネルギー注ぎ込むんだか。石川遼クンを見習えってーの！」

「なあなあせつかくだからよ、見るだけでも見てみれば？」

次の休み時間、龍馬が今朝のファンレターを引っ張り出してきた。

「いいよ面倒くさい。それに全員丸坊主だしね。私坊主嫌い」

「そうなのお？ オナさん髪型で男を判断するわけえ？」

龍馬に倣ってファンレターを次々に開封し、中の証明写真を机の上に端っこからきっちり隙間なく並べ始めたネチっ子が絡んで来る。

「今までは何ともなかったけどね、ついさっき嫌いになった。あいつらのせいで」

「へええ、じゃあさあ禿げはあ？」

「ハゲ？ ハゲはいいよ別に。ウエルカムウエルカム。シヨーン・コネリーばりに似合ってたね」

「はあ……オナさあん、無茶言わないでよお。シヨーン・コネリーより禿げの似合う男なんてこの世に存在しないってえ。せめてブルース・ウィリスう」

「やめてよねダイハードとか暑っ苦しい。何かもう、ブルース・ウィリスが出てるっていうだけでその映画見る気しないんだけど。それより田倉あんた、写真と手紙バラバラにしちゃったら誰がどれ書いたか分かんなくなっちゃうじゃない」

「ええ？ だってどうでもいいんでしょお？」

「まあいいけどさ……」

すると手紙を順番に読んでいた龍馬が声を上げた。

「お、こいつ凄えぞ。『僕の父は最近バラエティ番組に引っ張りだこのあの弁護士です。母はあのスターが出てるCMでお馴染みの美容整形外科医院を経営しています。よろしくお願いします』だってよ。こりゃあかなりのボンボンだな。仲良くしとくか」

「龍馬あんたいつかから金と権力に尻尾振るようなダサイ男に成り下がったのよ。つかそれ、凄いのは両親であって本人は何も努力してないんでしょ？ しかもよろしくって何のことよ。まじでムカつく」

「そうですわ！ ようやく千夏様も男という生き物の下らなさにお気付きになったのですね！ 私は嬉しゅうございますわ！」

忍び足で背後に近付き、いきなり耳元で叫んできたのはご存じ松竹

梅子である。

「わー！ 脅かすなっつの！ つーか梅子何してんの！？」

「決まっていますわ。千夏様に会いに来たのですわ」

言い終わると梅子はすかさず隣の席の椅子を引っ張ってきて、私の腕を取りくつつくように座った。すると龍馬が梅子を指差して言った。

「おい松竹、気を付けた方がいいぞ。あんま岡崎とべたべたしてつとサウザンズの連中に目え付けらるぞ」

すると梅子はおほほほと小指を立てた右手を口元に当てて馬鹿にするように笑った。

「何をおっしゃるのかと思えばウサギさん。注意した方がいいのはあなたの方ですわ」

梅子はすかさず喪黒服三よろしくビシッと龍馬を指差しし返した。梅子の頭上にドーンという文字が浮かんで見える。その余りの不気味さにたじろぐ龍馬。もし「笑うせえるすウーマン」の実写版があったとしたら、梅子以上にドンぴしゃな人物はいるまい。

「な、何だよそれ」

「先程私、焼却炉の裏で一人楽しくランチを取っているとき小耳に挟みましたのよ」

何で焼却炉の裏で弁当だ……

「するとどうでしょう。複数の坊主頭の男子生徒がひそひそと悪巧

みを企てているじゃありませんか。その内容の恐ろしいことと言ったら……おほほとても私の口からは申し上げられませんことよ」
「何でだよ！　そこまで言ったんなら教えてくれよ！」

龍馬憤慨。そりゃそうだ。

「ま、とにかく良太さんともどもお気を付けなされた方がよろしくてよ。あ、チャイムが鳴ってしまいましたわ。では千夏様、また会える日までしばしのお別れですわ」

「あ！　おいちよつと待って……くっそー何なんだアイツは。それにしても俺と良太が危ないってどういうことなんだ？」

「そんなのさあ分かり切ったことじゃないかあ」

自らの身に危機が迫りつつあるかもしれないというのにもかかわらず、ネチっ子がのんびりと言った。

「僕と坂ちゃんはさあオナさんと仲いいからねえ、サウザンズのメンバーからしたら当然邪魔な存在だよねえ」

「え、邪魔ってことは消されるってことか？」

「そうなるねえ」

「おいおいおい穏やかじゃねえな。勘弁してくれよ」

「何よ龍馬、あの連中は何しでかすか分かんないって言ったの自分じゃない」

「まあそうだけだよ。まさか俺たちに予先が向けられるとは思ってもよらなんだ。どうする良太」

「どうするもなにも現時点ではどうしようもないよねえ」

「んなこと言って事が起きてからじゃ遅いんじゃないか？」

「うんでもさあ、かといって何も起きないうちにさあどうこうすることもできないよねえ」

「まあそれもそうだな」

「それにさあ、サウザンズはさあオナさんの言うことは聞くわけでしょう？　それなら学校にいる間はさあオナさんと行動を共にしていれば危ない目には遭わないと思うよお」

「なるほど……何かあれだな、俺たちが守るとか言ったくせに逆に岡崎に守ってもらうことになりそうだな。はは」

龍馬は視線を落とし申し訳なさそうに少し笑った。ネチっ子は樂觀的な発言をしたが、私は梅子の意味有り気な発言が気になって、嫌な予感がしてならなかった。

お前はそんなワガママ娘とばかり付き合ってきた

悪い予感とうものは得てして的中するのが世の常だ。

放課後、いつものように三人で学校を出ると、電柱の上から、見知らぬお宅の垣根の中から、マンホールの中からと、住宅街の道の真ん中の、いたる場所から現れた坊主鉢巻サウザンズの面々に、地引網で引き上げられる魚たちのように、私たちはじわじわと囲まれてしまったのだ。

「これはこれは千夏様、どちらへ行かれるのですか？」

昼間、食堂に現れた奥田玉夫がにやにやといやらしい顔で近付いてくる。即座に龍馬とネチっ子が身構えた。

「え？ 帰るだけだけど？ つーかあんたら私の話聞いてなかったわけ？ 解散しろって言ったでしょ」

私は強がってはみたものの、声と膝が震えているのが自分でも分かった。相手は五十人は下らない。確実にヤバい状況であることは間違いない。

「ほほう帰るだけですか……確か千夏様の通学駅は西武線の椎名町駅ですよ？ この道は有楽町線の要町への道、まるで方向が違いますが……私の気のせいでしょうか」

玉

夫はにやにやを保ちながら言った。こいつ、さっきの感じでは体育会系の暑っ苦しいだけの奴だと思ったのに、意外と厭味ったらしくて理屈っぽい、粘着質な男なのかもしれん。

「別に放課後誰とどこに行こうとあんたの知ったこっちゃないわよ。邪魔だからどいてくれない？ 私忙しいんだから」

しかし玉夫は私の言葉には応えずに、両手を上げるとぽちん、とポール牧師匠師よろしくダブル指パッチンをかました。若干しけた音である。すると私たちを取り巻いていたサウザンズの中でもイカツイ連中が三人ずつ龍馬とネチっ子に歩み寄り、あっという間に二人を羽交い絞めにしてしまった。

「んだよてめーら何しやがる！」

龍馬がもがき叫ぶ。

「いいたあいいやあめえてええ」

ネチっ子もジタバタしながら叫んだ。何かこれ、昨日見た光景と全く同じなんですけど。違うのは相手が学ランの男子高生であることと、ネチっ子が心底嫌がっていることだった。

「ちょっとあんたら何すんのよ！ 放しなさいよね！」

「千夏様、あなたはこれから我々の大切な教祖としての使命がございます。こんな下らない連中と関わりを持つことは金輪際許されません」

「何訳分かんないこと言ってるのよ！ その二人は私の親友よ！何かあったらただじゃおかないかね！」

これも昨日言ったな……

「連れてけ」

玉夫が再びあまり鳴らない指を鳴らすと、柔道部っぽい連中とラグビー部っぽい連中が、龍馬とネチっ子を担ぎ上げ、エイサーエイサーとかけ声をかけながら走り去って行った。追いかけてようとする私の前に立ちはだかる玉夫。

「一体何なのよ！　だいたいあんたたち、私の言うことは何でも聞くって言ったでしょ！？」　だったら今すぐあの二人を解放しなさい！　これは命令よ！」

すると玉夫はやれやれ、という仕草を、ため息交じりに欧米人並みに大袈裟にして見せた。

「千夏様のおっしゃっていることはあれですよ、『愛があれば何でも許される』という屁理屈と同じです。『私のこと愛しているのならこのバッグ買って』だの『私のこと愛してるんでしょ？　だったら仕事なんか休んで今すぐ会いに来て』だの全く聞いてて反吐が出ますね」

玉夫は首を振りながら苦々しく言う。お前はそんなワガママ娘とばかり付き合ってきたのかい？　つーか、何のことでしょう？　いまいち理解できずにきょとんとしている私を見て、玉夫は説明を続けた。

「いいですか千夏様、『愛』という言葉で盾に何でもかんでも要求するのは単なるエゴでしかないわけです。傲慢です、言葉の暴力、即ちリンチです。さっきの千夏様の発言はそれと何ら変わりありません。千夏様は我々サウザンズの頂点に立つという重要な使命があるのです。低俗な考えは今日限りお止めください。今日のところは我々はこれで引き下がります。お一人で少々頭を冷やされた方がよ

ろしいでしょう。おい、行くぞ」

またも玉夫が指パッチンでしけた煎餅のような音を出すと、坊主鉢巻黒集団は、一斉に去って行った。何なんだよお前ら……：杲然と黒い背中を見送っていると、後ろからいきなり抱きつかれた。

「うっわ！」

「だから言わんこっちゃございませんことよ」

「梅子……どどどどうしょ！ 今度こそ本当に連れ去られちゃったぞ！」

私は振り返り、私の胸の辺りに位置する梅子の肩を掴んで揺らした。

「千夏様落ち着いて……まあ、下らない男共が何を企もうと私の関知するところではありませんが、千夏様を悲しませるような卑劣な輩は許すわけにいいきませんわ。さあ、良太さんとその他一名を助けに行きますわよ」

「ででもどうすれば……つか、どこに連れて行かれたのかも分からないし」

「おほほはお任せあれ。だいたいの目星は付いておりますことよ」

梅子は自信たっぷりにそう言うと、私の手を取りずんずんとガニ股で頼もしく歩き始めたのだった。

しかもわざわざブサイクに

「ねえ梅子、どこ行くの？　　つーか何で場所知ってるわけ？」

梅子は質問には答えず、逆に私に聞いてきた。

「千夏様、今朝のファンレターには全て目を通されまして？」

「いや、三、四通しか見てないけど」

「その中にお金持ちの人物がいたのはお気づきになりました？」

「あーなんかそう言えばいたね。親が弁護士と整形美容外科医とかいう」

「そうですね。その男がですね、他のメンバーからは『ボン』と呼ばれていて教団の資金面や施設を提供しているのですわ。ちなみに『ボン』というのは『ボンボン』の略ですわ。そして『ボンボン』というのは……」

「いやいやボンボンの解説とかいいから。つか何それ。資金とか場所とか」

「あら、先程サウザンズが言っていましたでしょ？　千夏様が教祖だって。サウザンズは新興宗教団体ですよ」

「はあ！？　　ちょっと待ってよ、高校生が宗教とか意味分かんないし。私が教祖はもつと意味不明だね。あいつら単なるファンクラブじゃなかったの？　それともあの連中だけ梅子の呪いが解けないとか？」

「……呪いじゃありませんことよ。確かに私のコントロールは解けているはずですよ。それでも千夏様にはあれだけ熱狂的な信者が集まってしまうのです。ご自分の魅力がお分かりになりました？」

梅子は振り返りつつ喋りつつ、交通量の多い大通りの歩道をアフロディーテ方面にどしどし歩いて行く。

「魅力ったってなあ……だったら何で今まで誰も私に声かけてこないのさ」

すると梅子はぐふふと不気味にくぐもった笑い声を発した。

「当たり前じゃないですか。良太さんとその他一名が常に傍にいたのですから。誰がどこからどう見てもその他一名が千夏様の彼氏と思ひ込むに決まっていますわ」

その他一名って……ああ、龍馬か。ええ！？ 私、龍馬と付き合ってると思われてたの！？

「あれですわ」

梅子が不意に立ち止まり、私はその頭に鼻先をぶつけて立ち止まった。

「あれが……本拠地？」

梅子の指差す先を見ると、通りの反対側には事務所とかが入っている、白い六階建てのビルがあった。

「あそこはボンの父親の所有する貸しビルですわ。でもこの不況で全部空き室になっていたので、ボンがここぞとばかりに教団の施設として使わせてくれるように親に頼み込んだのですわ」

「え、まさかあのビル一棟丸ごとサウザンズ！？ 有り得ねー……高校生のクセになんて贅沢な。何か入り口に行列出来てるんですけど。あ、一階は今流行りのラーメン屋とか？」

「あれは恐らく入団希望者ですわ」

「えええもう勘弁してくれよ。普通にスーツ姿のオッサンとかいるし……あれゴスロリ不思議ちゃんじゃね？　うわ、杖着いたお爺ちゃんまで……つーかさ、梅子何でそんなに詳しいの？」

「おほほほ私世界一の千夏様マニアなのですから、千夏様に関することでしたら誰よりも詳しく知ってて当然でしてよ」

梅子は小指を立てた手を口元に当てて自信満々に笑った。

「ま、まあいいや。とにかくあそこに龍馬とネチっ子が監禁されてるのは間違いないんでしょ？　じゃあ行くよ！」

交差点の信号が青に変わったところで勢いよく駆け出そうとする私の身体を、梅子がかっしりと腕を掴んで引き止めた。

「ちょっと放しなさいよ。まさかここまで連れて来ておいて行かないつもり？」

「そうではございませんわ。千夏様、そのまま行ったら危険すぎますことよ」

「何でだよ。私教祖なんでしょ？　あいつら信者なんでしょ？　だったらあそこに並んでる有象無象は平伏して土下座してすんなり道を開けるに決まってるじゃない。中の連中だってしかり。二人の居場所を吐かせて連れ出して、こんなところからはさっさとオサラバよ」

すると梅子は下を向き、首を振った。

「千夏様は全然お分かりになっていませんわ」

「何がよ」

「いいですか？　信者にとって教祖は神ともいえるべき存在なのですよ？　文字通り雲の上の存在。それがいきなりあんな平民が暮らす

場所にふらりと現れてごらんさい。あっという間に囲まれて、それこそ地獄に投げ込まれた蜘蛛の糸状態で、ヨってタカって身包み剥がされてしまいますわ。例えて言うならダンナとの夜の生活がウン十年もご無沙汰の、一年三百六十五日常に欲求不満爆発寸前の熟女の集団の中にヨン様もしくは氷川きよしを放り込むようなものですわ」

「んだよ面倒くさいな。じゃあどうすんだよ」

「これですわ」

梅子はそう言って両手を頭に乗せたかと思うと、そのまま髪の毛を上にもずりりと引き上げた。すると何ということだ！ パツツンな前髪を擁するワカメちゃん的髪型は頭上へと分離し、中からは腰まで届きそうな長い長い艶やかな黒髪がふわりと現れたではないか！

「えええ！？ かかかカツラ！？ ねえ梅子ってカツラだったの！？」

さらに梅子は黒縁眼鏡を外すと、カツラと共に呆然とする私に手渡してきた。

「これで変装なされば千夏様とは気付かれずに建物へと侵入できますことよ……あ、ついでにこれもどうぞ」

梅子はそう言うといきなり自分の口に両手を突っ込んだ。まだ何かする気か！？ 私は右手にカツラ、左手に黒縁を持ったまま凝視していると、信じられないことに梅子は前歯を取り外した。

「い、入れ歯って……あんた一体……」

ここまでくると言葉が出ない。

「ふう、これ顎が結構疲れるんですよ。口も半開きになるから乾いて仕方ないし。でもこれでより完璧な変装が可能ですわ」

梅子にはっこり笑いながら、たった今外したばかりの、透明な唾液が糸を引く前歯の入れ歯を差し出してきた。

「い、いやそれはさすがに遠慮させて頂きますけど……つか、梅子あんた……本当は可愛いかったんだね」

そう、パツンカツラと黒縁と歯茎大きめの入れ歯を外した素顔の梅子は、ストレートの長い黒髪と、クリクリお目々の、ギャルゲーに出てきそうな萌え系ロリ系のなかなかの美少女であった。

「恥ずかしいですわ千夏様、そんなに見詰めちゃあ」

「な、何だってそんな変装してるわけ？ しかもわざわざブサイクに……意味が分からないんだけど」

「それでも私、色々あるんですよ。しがらみやら世間体やらが……ま、私のことはどうでもいいですわ。まずはあの二人を助けないと」

そうだった。梅子のあまりの変貌振りに一瞬頭が真っ白になってしまった。とりあえず私は自分の髪の毛をしまいつつパツンカツラを被り、黒縁をかけた。

「これは本当によろしいんですの？」

梅子が上目使いに見詰めながら、歯茎の部分が濡れて光る入れ歯を差し出す。とてもじゃないが、手に取るのさえ躊躇われる一品である。

「う、うん。気持ちだけ貰っとく」

「そうですか……」

名残惜しそうに梅子はいれ歯を自分の制服のポケットにねじ込んだ。
私は拳を握り締め、気合を入れ直した。

「よし、行こう」

ドラえもとニアミス

私と梅子はビルの前の歩道に出来た行列の最後尾に並んだ。

目の前にはケミカルウォッシュのジーンズに白いバッシュを履き、背中に「絶体絶命」と書かれたよれよれのTシャツを着て手には伊勢丹の紙袋を提げた髪の毛ボサボサの、いかにもくな若い男が、ときどき手元を見詰めながらぶつぶつと何やら呟いていた。

ああ、出来ることなら恭子さんみたいにグッドルッキングメンで周りを固めたかったのに、信者は選べないのね……と悲嘆に暮れつつも私はそいつの背中越しにそおっと手元を覗いてみる。

すると手にはメモ帳があり、そこには小学生が気合入れ過ぎ筆圧高過ぎで書いたために4ページ後ろまでくっきり鉛筆の跡が残っちゃったような文字で、「生年月日」とか「出身地」とか「通っている高校」とかいった項目が見て取れた。一体何のことだろうとそいつの呟きに耳を傾けると、果たしてそれは全て私に関する情報だった。

まじかよ……現住所まで丸裸かよ。個人情報保護法もヘツタクレもクソツタレもあったもんじゃないわ。

それにしても進まないわね、この行列は。とイライラしていると、絶体絶命男は私の祖父の名前、ついには父方の曾祖父の名前まで諳んじ始めた。へえ、虎衛門って言うんだひいおじいちゃんって。ドラえもんとニアミスじゃん。知らなかったなあ。

並び始めて三十分、ようやくビルの入り口が見えてきた。これだけ時間が経てば、当然私たちはとくに最後尾ではなくなっており、

後ろにも長い信者の行列ができています。つーかあんたらはここに、この私に一体何を求めてやって来るのか？

「T O 教……って何？」

ビルの入り口の頭上に、金ぴかに光る文字の看板が掲げられている。意味が分からん。私は隣の梅子に尋ねる。そもそも私が教祖なのに、教団に関する情報を何一つ知らされてないってどうよ？

「イニシャルですわ」

梅子が周りに気を配り、ひそひそ声で答えた。

「イニシャル？ ああ、私のね。つーかサウザンズ教じゃなかったんだね。でも何て読むんだろ？」

「トーキョウですわ」

「東京でトウキョウで。何かさあ、センス悪いネーミングだよね」

と思わず本音が口からポロリと出たところで目の前の絶体絶命男が首だけで振り返り、恐ろしく生気を感じられない目で睨んできた。我らが千夏様を教祖として迎えた「T O 教」をバカにするとは何事だ！ 地獄へ落ちるぞ！ とその目が言っている。おおコワ。ちなみに教祖私なんですけど。

小一時間ほどしてやっとこさっと建物の中に入ることができた。一階を見渡して、行列が遅々として進まない理由がようやく判明した。

まず最初に入信希望者を待ち受けていたのは鉢巻の購入である。ま

るでコンサート会場でアーティストグッズに群がる群衆の如しである。サウザンズの面々が巻いていた、真っ白の無地の、何の変哲もない鉢巻。どうやらこれを頭に巻かないと入信できないらしい。

白い布を掛けただけの、葬式の受付のような長テーブルに、真っ直ぐに伸ばされた純白の鉢巻が山と積まれている。その前には三角札が置いてあり、一見達筆っぽい毛筆で「千夏巻き」と書かれていた。人の名前を無断で使用してチマキみたいな名前付けてんじゃないわよ、とここでも脳内で悪態をついておく。

テーブルの向こう側で、サウザンズのメンバーと思しき学ラン坊主が、いかにも「有り難い物を下々の者に与えてやっている」という完全なる上から目線の体で鉢巻を入信希望者に手渡している。

「千夏様の『氣』が込められた鉢巻だ。これを頭に巻けば、千夏様の『声』を受け取れるようになるぞ」

氣なんか込めてねーっつーの。当たり前だがこんな布切れを頭に巻いたところで私の声が聞こえるはずもない。まあ聞こえたとしても大した内容じゃないと思うけどね。「千夏巻き」はもちろんタダではない。一本二千円。

「二千円で……私に一銭も入って来なかったら訴えてやる」

とりあえずこれを購入しないとこれ以上中へ進めないシステムらしいので、馬鹿馬鹿しいことこの上ないが、私は仕方なく鞆から財布を取り出した。ふと隣を見ると、梅子が呆然と突っ立っていた。

「どうしたの」

私は耳元で囁く。

「お金がありませんことよ」

同じく耳元で囁き返す梅子。早い話が私に出せということらしい。他人に金を支払わせるというのに、その目に恥じらいの色も遠慮の欠片もまるで見当たらない。ここまで堂々としているともはや清々しささえ感じてしまう。

そうだった。天王洲愛瑠改め松竹梅子は、超大金持ち改め隙間風の吹く風呂なし六畳一間に住む母子家庭っ子だったんだっけ。

私たちのこそそとしたやり取りに、テーブルを挟んで立っているサウザンズ一味が怪訝な顔を無遠慮に向けてきた。このままこの場で立ち往生していると追い出されてしまうだろう。私は泣く泣く虎の子四千円を支払い、梅子の分と自分の分の、二本の「千夏巻き」を受け取った。

だがサウザンズの鉢巻売りは、そんな私たちを見てあからさまに溜め息を吐く。何だ何だ金払ってんだから文句はないだろうと周りの入信希望者を見ると、少なくとも一人で二本、多いと十本くらい買っている輩もいた。どうやらたくさん買えば買うほど信仰心が篤いということらしい。アホくさ。

半ばヤケクソ気味に、パツンカツラの上から鉢巻を締める。周囲の「一本しか買わないなんて信じられない……」という剣山顔負けの突き刺さるような視線など構わず右から左へと受け流し、人の流れに沿って次のステージへと進む。

この建物は一階にはあまり部屋がないのか、割と広いスペースが取

られている。しかしその空間のほとんどが、ディズニールンドさながらの、蛇行を繰り返す行列で埋め尽くされていた。これじゃ前に進まないのは当たり前だった。

行列の先頭には、関所に立ちほだかる役人の如く、こちらを向いたサウザンズの一人が立っていて、入信者一人一人に何やら声をかけている。そしてそれに答えるとその先にある階段を上って行けるらしい。ただ順番はまだまだ先なので、こういうやり取りをしているのかはここからでは判断できない。

梅子にアイコンタクトで質問を投げかけてみるが、どうやらそこまでの詳しい情報は持ち合わせていないようだった。亀の歩みではあったものの、だんだんと関所に近付き、私の前があと五人になった。そこでようやく関所で行われていることが判明した。

千夏様のスリーサイズ

「千夏様の出身地は？」

「埼玉県さいたま市浦和区です！」

「よし合格。次！」

「はい！」

「千夏様の好きな食べ物は？」

「え……と、好きな食べ物は……白クマ……南国白クマです！」

「よし合格。次！」

「はい！」

「千夏様のお姉様のご主人の職業は？」

「医者です」

「よし合格。次！」

「はい！」

「千夏様はお父様のことを何と呼んでいる？」

「た、確か……あ！ バカボンです！」

「よし合格。次！」

何ということだ。要するにこれは「岡崎千夏クイズ」である。さっきの絶体絶命男がぶつぶつと私に関する情報を暗記していたのはこのためだったのだ。私に関する情報が、私の知らないところでクイズとして出されている。

白クマが好きなどと誰かに言った覚えはないし、美しき姉の旦那の職業まで調べ上げられているだなんて。ここまで来るともはや恐怖としか言いようがない。

そして私の目の前の人の質問で、危うく声を上げそうになってしま

った。

「千夏様のスリーサイズは？」

おいおいおい待て待て待て待ていくらなんでもやり過ぎだろ。つーか私、自分のスリーサイズなんか知らないしね。だいたいさっきから聞いてれば、教祖様に関しての質問なのにそんな俗っぽい問題ばかり出していいのかよ。

「よし合格。次！」

……あ、私のスリーサイズ聞き逃した。いくつだったんだろ。

「次と言っているだろうが！ 早くしろ！」

はいはいはいはいうるさいな。まったくサウザンズの分際で。あたしや岡崎千夏本人なんだかね！ どっからでもかかって来いやあ！

「千夏様の特技は？」

え？ 特技？ 私に特技なんかあったかしら？

「どうした、答えられんのか？」

こいつマジでムカつく……後で覚えとけよ。教祖の特権フル活用して絶対パワハラかまして島流しにしてやるからな。えっととりあえず特技特技……と。あ、あれか。

「ソルフェージュ」

「何？」

「だからソルフエージュ！」

「貴様、真面目に答えないと千夏様のお怒りに触れて痛い目に遭うぞ？」

いや別に私怒ってないし。美しき姉には足元にも及ばないけどこれでも一応一般レベルは遥かに超越したテクニシャンだからウソじゃないし。

「もう一度だけチャンスやる。千夏様の特技は何だ？」

「だーから、ソルフエージュだってば」

すると目の前の関所の役人サウザンズは右手を高く上げて指を鳴らした。しかしこの指パッチンも、先程の玉夫同様、湿気たカッパえびせんのように生彩を欠いていた。どうやらTO教の指パッチンとはこういうものらしい。などと呑気に構えていると、私の両隣りにはいつの間にか柔道部的イカツイサウザンズ×2が立っていて、そのまま腕を取られてしまった。

「ちよちよちよい何すんの!？」

「こんな簡単な質問にも答えられないような貴様には入信する資格などない! 連れて行け！」

「わーわーわー待てって! う、梅子おおお」

という叫びも空しく、私は両脇を抱えられ、脚をばたつかせたまま階段を降り、薄暗い地下室へと連行されてしまった。

「痛いっつの! 放せっつの! バカバカバカ！」

捕えられながらも私は足をじたばたと動かし、イヤイヤしてもがい

た。その度に私の肘や膝が柔道サウザンズの脇腹や太もものにヒットする。

「暴れるんじゃない！ 玉夫様の指示があるまで貴様はここで大人しくしている！」

二人は地下の廊下に並んだいくつかの扉のうちの一つを開けると、私を放り込み外から鍵を掛けた。

「んだよばーろー！ 私にこんなこととしてタダで済むと思うなよ！ お前らも島流しだかな！」

乱暴に扱われて憤慨した私は口汚く罵り、金属製の扉をガンガンガンと派手に蹴っ飛ばした。足を痛めて一通り体力を使い果たした私は、改めて部屋を見渡す。

ここは六畳ほどの広さの、コンクリート剥き出しの、何もない殺風景な部屋である。地下なので窓もない。天井には弱々しく蛍光灯が一点点いているだけの狭く薄暗い部屋。切な過ぎて、ある意味ハリウッド映画に出てくる凶悪犯が収容されている刑務所の独房よりも酷いかもしれない。と、奥の壁を見ると、暗がりですランを着た男が二人、体育座りで膝を抱え、俯いていた。

二人……はっ、もしかして。すぐに私は駆け寄ってしゃがみこむと、肩を掴んだ。

「龍馬？ ネチっ子？ 大丈夫！？」

私があるまま身体を揺らすと、首がガクンと落ち、腕がだらりと垂れ、膝がだらしなく開いた。しかし反応はない。

「ねえ！　しっかりしってって！　ま、まさか……」

恐ろしく嫌な予感がする。強引に連れて来られて、暴れないように無理やり睡眠薬の類を飲まされたか、もしくはヤバイ薬を打たれて意識をなくさせられているのだろうか。

あいつらはもはやカルト宗教と言ってもいい存在だ。邪魔な人間は平気で抹殺するかもしれない。何度も言うようだが教祖はこの私だけだ。私は立ちあがるとドアに向かって拳を振り上げた。

「くそおお！！　私の友達を廃人にしやがってえええ！！　あいつら絶対許さ……」

「何だ何だやかましいな」

その聞き覚えのある声に振り向くと、龍馬が目を擦ってぼんやりとこちらを伺っている。

「りよ、龍馬！　無事だったの！？」

私は再び龍馬の顔を覗き込んだ。しかし龍馬は怪訝そうな顔をして身を固くする。

「お、お前誰だ？」

「え？　あ、ああ、そか、ほら私」

変装していたことなど完全に忘れていた。私は黒縁眼鏡を外し、素顔を見せた。

「お、岡崎じゃん。どうやってここに？」

「梅子がここを知ってて一緒に来たのよ。それより平気？　薬漬けにされたりしてない？」

私は眼科医が眼科検診のときにするように、両手で龍馬の目の下をぐいっと下げてみた。目が泳いでいる気がしなくもない。ううむ、ヤク中の可能性アリ。

「ええいやめんか！」

「何ともないの？　注射とか打たれてない？」

「何の話だ。暗いし暇過ぎるしで寝ちゃってただけだ。おい、良太起きろ！　教祖様が直々に迎えに来てくれたぞ」

龍馬は隣で自分の肩に頭を凭れ掛けさせて眠る良太の頭を小突いた。

「んん……ふああああオナさんだあ」

「良かった……ホント心配したんだから」

二人の身の安全が確認できた私は一気に緊張感が弛み、ついでに涙線も弛み、ぼろぼろと涙が零れてきた。

ここなら直に床に出しちゃってもいい

「ほらあオナさあん。僕たち別にさあなんともないからさあもう泣かないでえ」

ネチっ子が私の頭をポンポンと優しく叩いた。それが何だか嬉しくて、余計に涙が止まらない。

「でもさあ、なんでこんなカツラ被ってんのぉ？」

ネチっ子が私のパツツンカツラの髪の毛を何本か指で摘んでもてあそぶ。

「ひっく……へ、変装した方がいいって梅子が……」

そのとき部屋の扉が勢いよく開いた。びっくりして涙が止まり、緊張感が再び走る。

「全く、貴様もここで大人しく裁きを待っている！ このニセ信者め！」

部屋の外には私を連れて来た時と同じ柔道サウザンズと女の子の姿があった。サウザンズは小さな女の子の身体を、掴んでいた腕をごとと乱暴に部屋の中に放り投げた。

「梅子！」

ボタンと激しくドアが閉じられるとともに、前のめりになって部屋に転がり込んだのは梅子だった。咄嗟に私は立ち上がり、体勢

を崩しよろけそうな梅子の身体を支えた。

「どうしたのよ？ あんたがあのかイズに答えられない訳ないでしょう」

まあ私は自分自身のクイズなのに不正解だったけど。

「だって千夏様が心配でしたから、わざと間違えて……」

そう言って上目使いに私を見る梅子の目には涙が溜まって潤んでいた。うわあロリロリだあ……こんな捕らわれの身の危機的状況ではあったが、初めて見る梅子のその表情に思わずドキッとしてしまう。

「あ、お二人とも無事でしたのね」

梅子は私にしがみ付きながら部屋の奥に目をやった。

「うん、特に乱暴はされてないみたい」

「それは良かったですわ。とにかく一刻も早くここから出る方法を考えないと」

するとそれまで私たちの会話を黙って聞いていた龍馬が口を開いた。

「あのー質問なんですけど、その子は一体どこのどなたなんでしょうか？」

ああそうだった、説明しなきゃいけないんだった。

「彼女は梅子よ。今までののは仮の姿ね」

「梅子って……えええ！？」

龍馬がとネチっ子が同時に叫ぶ。

「嫌ですわそんなマジマジと見つめないで下さいます?」

梅子は私に顔を埋め、隠れるようにして言った。龍馬はもちろんのこと、大概のことには動じないネチっ子でさえも今度ばかりはかなりの驚きようだった。

「か、かわいい……」

ぼそっと龍馬が呟いた。うん、本来の姿の梅子はちっこくて確かに可愛い。ちよっと、というかだいぶロリータ入ってるけど。つか龍馬、見詰めすぎじゃね? 気のせいかな?

「それでどうする? 何か良い考えある?」

私は三人の顔を順番に見た。龍馬は腕を組んで天井を睨み難しい顔をしているが、ポーズだけなのはお見通しだ。脳細胞はただの一つも活動していないに決まっている。梅子はこの建物の場所は知っていたものの、今さっき初めて潜入したのだから内部のことまでは分からないだろう。私もあり。

となると残る頼みのは綱はエロ才子ネチっ子ということになるのだが……すると私の気持ちに通じたのか、ネチっ子がパッと顔を輝かせた。

「はいはい」

「お、さすが田倉。何か閃いた?」

「簡単だよお。オナさんが教祖様なんだからさあ、堂々と出て行け

ばさあみんな平伏して道を開けるに決まってるう」

「うーん、それなんだけどさ、いきなり教祖が現れると逆にパニックになるんじゃないかってさっきも梅子と話してて、だから私もわざわざ変装とかしたんだけど……」

すると再び柔道サウザンズの怒声と共に扉が開き、先程と同じように一人の人間が転がり込んできた。

「痛ってくつそ……」

「あ！ あんたは」

私は思わず声を上げた。なぜなら四つん這いで呻く男の背中には「絶体絶命」の文字が見て取れたからだ。

「何だ岡崎、知り合いか？」

「知り合いじゃないよ。私たちの前に並んでたんだこの人」

私たちの存在に気付いているのかいないのか、絶体絶命男は、手を着き膝を着き床を見詰めたままぶつぶつ呟いている。

「ジェラートじゃなくてシャーベットの方だったか……」

ジェラート？ シャーベット？ ああ撮影で訪れた海の家猫のことか。どうしてるかなあシャーベット。つかそんな赤の他人には知りようもない超難問まで出てくるわけ？

「あ、あのさ」

このまま放っておくわけにもいかなないのでとりあえずそのよれよれTシャツの背中に話しかけてみる。すると絶体絶命男は四つん這い

の体勢はそのままに、ゆっくりと首だけで振り向き私を睨んだ。

「何だ、お前らも間違えたのか、ふん」

それだけ言うと絶体絶命男は私たちに興味を失ったのか、再び床を見詰めてぶつぶつと呟き始めた。もはや何を言っているのかは聞き取れない。

「どうする？」

私は梅子に耳打ちする。

「関係ありませんわこんな人。置いて行きましょう」

梅子は淡々とした口調で言った。久々に梅子の毒舌が復活。ロリ顔できついことを言われるとより威力が増すような気がする。

「でもさ、一応同じ場所に閉じ込められているわけだし、ある程度は意思の疎通を図って行動を共にしないと脱出の成否に関わってくるんじゃない？」

「そんなことはありませんことよ。そもそもこの方は入信希望でここにいらしたんですから、このままここに留まっけていても差し支えありませんわ」

「まあそうなんだけどさ……」

私はシャーベットをジェラートと答えただけで入信のチャンス逃してしまっただかもしれないこの冴えない男に図らずも同情心が芽生えていた。それにこんなインチキ宗教もどきは早々にぶっ潰すつもりなのだ。一人でもいいから一刻も早くこんな茶番劇から目を覚まさせてあげないと。よし、決めた。

「私、脱ぐわ」

その言葉に即座に反応する龍馬とネチっ子。

「マジかよ岡崎何もそこまでしなくても……いや、お前がそこまで腹を括ったのなら俺たちもその勇氣に応えないとな。俺はいつでも受け止める覚悟はできている。お前の雄姿、しかと目に焼き付けておくぞ。あ、せっかくだから写メ撮っとくか……ああ！ 携帯電話切れてんじゃん！」

「わああわああ遂にオナさんの裸が見れるのかあどうしようかなあ……坂ちんティッシュ持つてる？ まあでもここなら直に床に出しちゃってもいいかあ」

バカ二人の股間は微妙な隆起を見せ始めている。確かに私の言い方が若干紛らわしかったのは認めるが……次いで梅子のコメントをどうぞ。

「千夏様何をおっしゃっているんですの？ 今はストリップなんかしてる場合じゃございませんことよ」

言葉とは裏腹に、手を胸の前で組み、前傾姿勢になり目の中の星が輝きを増した梅子。

「……カツラをね」

と私が言うと、龍馬の火照った顔が一気にシラけ、ネチっ子はようやく見つけたサラ金の広告入りティッシュを取り落とした。そして梅子はというと舌打ちをしながら爪先で地面を蹴りつけている。

「あんたら揃いも揃って……まあいいわ。とにかく、こんな変装は止めて、正々堂々岡崎千夏として正面突破よ！」

言い終わると同時に私は黒縁眼鏡を投げ捨てカツラをズボツと持ち上げた。

「おおお岡崎だ」

「オナさんだあ」

「千夏様ですわ」

……皆さん、当たり前前の感想ありがとう。特に盛り上がりも見せずに変装を解く私。すると私たちのやり取りの間もずっと四つん這いでぶつくさ言っていた絶体絶命男がゆらりと立ち上がる。

「さっきからお前らうるさいぞ。しかもその女！ 我らが神である千夏様を名乗るとは不届き千万な……なななな！？ そそそその顔はまさか本物のちちち千夏様……！！ な、何ゆえあなたのような方がこんなむさ苦しい場所に……ああこれは夢か幻か……」

絶体絶命男は私の顔を見るなりその場に跪き、床に額を擦りつけた。まあ最初っから跪いてたようなもんだけど。私は絶体絶命男の頭の前に仁王立ちする。

「下々の迷える子羊よ。その顔を上げてよく見るのです。あなたの目には何が映っていますか？」

教祖なんてそうそうなれるもんじゃないからねーちよっただけ調子に乗って神様気分を味わっちゃお。すると絶体絶命男は口を半開きにし、涎を垂らしながら言った。

「水色の……」

水色？ 何だ何だ？ 私本当にオーラとか出ちゃってるのかな？

「水色の、何ですか？」

さらに調子に乗った私は、より神々しい声と表情で男に尋ねる。

「パンツが……」

「なるほどパンツが見えるのですね……水色のパンツ……パンツ！
？　こんのどスケベ野郎どこ見てんだあ！！」

思わず頭に血が上った私は、仁王立ちしていた右足を、一度後ろへ助走を付けて斜め前に振り上げた。その超ド級の破壊力で「悪魔の左足」と恐れられ、誰もが壁になるのを嫌がる元ブラジル代表のロベルト・カルロスのフリーキック並みのインステップキックが絶体絶命男の顎にクリーンヒット。コンクリートの狭い部屋に骨と骨がぶつかる鈍い音が響く。絶体絶命男はぐげっ、という音を喉から漏らし、そのまま部屋の隅に転がって動かなくなった。

「何やってんだ岡崎」

龍馬が冷ややかな目で見る。

「え？　あ、だってさ、パンツとか言うから思わず……はは」

梅子も露骨にやれやれという表情をしている。しかし。

「いいなあオナさんのパンツ見た上に顔蹴ってもらえるなんてえ……」

ただ一人ネチっ子だけが指を銜えて羨望の眼差しを絶体絶命男に向けていた。

「と、とにかく正々堂々正体明かして行くからね！ 教祖VS信者の全面戦争よ！」

私は一人気を吐き拳を突き上げた。

「でもよ、こっからどうやって出るんだ？ 外から鍵がかかってんだろ？」

あ、そうだった。するとネチっ子が口を開いた。

「思ったんだけどさあ、オナさんも梅ピョンもその男の人もさあ、そのクイズっていうののお？ に間違えたからここに入れられたんだよねえ。だとしたらさあ、このまま待つてればその内また間違えた誰かが連れて来られるんじゃないかなあ。そしたらサウザンズが扉を開けるからさあ、その隙を狙えばいいと思うよお」

さすがはネチっ子。私もそれが言いたかったのよね。

「でもよ、あいつら柔道部だろ？ しかも重量級。パワー勝負じゃ勝ち目ないんじゃないのか？」

龍馬ったら何を情けないことを……こういう時こそヒロイン（モチ私のことね）を守るのが男ってもんでしょうが！ と喉まで出かったが梅子が真顔に戻り意見を述べ始めたので飲み込んだ。

「皆さん肝心なことをお忘れでしょ。いいですこと？ 先程から一口に信者っておっしゃっていますけど、この建物にいる信者には二種類の人間がいるんですのよ。即ちサウザンズとそれ以外の入信希望者ですわ」

「その二つは何か違うのか？」

龍馬が口を挟む。確かに教祖である私に対して玉夫が敬意払っているとは到底思えないからな。奴につき従っているサウザンズは純粋な信者とは言い難い。

「もちろんですわ。入信希望者及びすでにクイズに正解し、入信を許され人たち、これは純粋に千夏様を崇拝し、千夏様に救いを求めてやってきた者たちですわ。それに比べて奥田玉夫を筆頭としたサウザンズのメンバーは、千夏様をダシにして宗教をでっち上げ、金儲けを企む不純で不潔な連中ですわ」

梅子は苦々しい顔で吐き捨てるように言った。

「あのさ、よく分かんねえんだけど、岡崎がちやはやされ始めたのってつい昨日一昨日の話だよな？ それなのにどうやってこんな短時間であれだけの信者を集められたんだ？ この建物にしたってそうだ。不動産のことはよー分からんが、たかが高校生が一日二日で用意できるとはとても思えない」

龍馬のもっともな疑問に梅子が答える。

「そうではありませんわ。元々奥田玉夫は金儲けのために新興宗教を創りたくてうずうずいていた危険人物なのですわ。でも宗教を立ち上げるためには教祖として相応しいカリスマが必要だった。しかしそう簡単には人々を惹き付ける、強い求心力を持った人間は見付かるはずもなく、奥田玉夫は悶々とした日々を送ることを余儀なくされていた……そのとき彗星のごとく突如現れたのが千夏様というわけですよ」

「なるほど。岡崎は奇しくも自分と同じ高校に通う生徒。玉夫にと

つては絶好のチャンスというわけか」

龍馬が腕を組み、ううむと唸った。

「まさに奥田玉夫にとって千夏様は棚から牡丹餅の救世主。いち早く千夏様の人気に目を付けた奥田玉夫は、二学期が始まる前、つまり夏休みの中に着々と準備を進めていたのですわ。早々と『TO教』のサイトを立ち上げるや否や、同じ学校に通っていることとイニシャルが同じことをことさら強調し、入信すれば千夏様の幸運にあやかれる、さらに徳を積めば直々に千夏様に面会することが出来ると謳って全国から信者を募ったのですわ」

く、下らねえ……っ！か完全に教祖無視のスタンドプレー炸裂なんですから玉夫。っ！か信じるなよそんなこと。

「事を始めるには何かとお金がかかるもの。黒い野望はあるものの先立つモノはない奥田玉夫は金持ちの同級生であるボンに話を持ちかけ、利益を山分けするという条件で資金面での協力を仰いだのですわ」

「それってひょっとして親が弁護士と医者ボンボンのことか？」

「そうですね。先程千夏様にはご説明しましたが、このビルはボンの父親の所有する物件ですことよ。お金は掃いて捨てるほどあるけど毎日が退屈で仕方なかったボンは、奥田玉夫の話に興味津々、二つ返事でこのプロジェクトに参加したのですわ」

「くそ、先を越された……」

龍馬が悔しそうに呟く。こいつはどこまで他人の財産を当てにしているんだ。そんなに金に困ってるのか？

「まあいい。なるほど。それでようやく話が見えてきた。玉夫は岡

崎人気を利用して崇拝者から事あるごとに色んな物を売りつけて金を騙し取るって寸法なわけだ」

「そういうことですよ。サウザンズの面々はどうせボンがばら撒いた金に目がくらんでいいようにこき使われてのいるですわ。だから千夏様への信仰心などというものは欠片もありませんことよ」

別に私如きに信仰とかされても徳は増えませんがね。

「それにしても松竹、何だってそんなに詳しいんだ？」

龍馬の言うことはもつともだ。いくら梅子が私のことに関心があるとは言え玉夫率いる『T.O教』の内部事情には通じ過ぎていると言ってもいい。梅子よ、お前は一体何者なんだ……と探るようにそのロリ顔を見詰めていると、鍵がガチャリ、と音を立て部屋の扉が開いた。

またどこぞの入信希望者がクイズに失敗して連れて来られたのかと、全員が注目しているとそこにはこの騒動の張本人、奥田玉夫が柔道サウザンズを従えて、ニヤニヤと卑しい顔付で立っていた。そしてその口から飛び出したのは誰もが予想だになかった言葉だった。

「喋りすぎだぞ梅子……いや、我が妹よ」

宗教法人は色々と税金の面では優遇されている

「い、妹！？ あんた今妹って言った！？ 梅子それって……」

咄嗟に私は梅子の顔を見た。すると梅子はぎりぎりと歯を食いしばり、鬼の形相で玉夫を睨んでいる。何なんだ一体この二人の関係は……

「おやおやこれは千夏様ではございませんか。こんなところで一体何をされているのですか？」

玉夫は梅子の突き刺さる視線を無視して私に話しかけた。

「はん！ 白々しいったらありやしない！ あんたの悪事は全てまるっとお見通しよ。今から騙されてる信者たちに真実を伝えて解放するんだから！」

私は玉夫に向かって中指を立てようとしたが、今までやったことがなく、瞬時に出来ずにもたついて指が攣りそうだったので、急遽人差し指に変更し、ヤツのムカつく顔をビシッと指してやった。

「おやおやそれは困りましたね……これから千夏様には教祖として色々やって頂くことがあるのですが」

「バカ言ってるんじゃないわよ！ どうわくわくれがあんたみたいな卑劣漢の金儲けの片棒なんか担ぐかっての！ 人の肖像権乱用して勝手に教祖に仕立てといて。ここが片付いたら弁護士雇って訴えてやるからね！ モチ裁判費用は全部あんたが持ちだかんね！」

「まあまあ千夏様、そう声を荒げないで。落ち着いて考えてくださいよ。いいですか？ 今ここにいるだけでも信者は三百人は下らな

い。しかも行列はまだまだ伸びています。今日中に五百人は入信するでしょう。さらにネットで集めた信者はT O教のサイトを立ち上げて二週間程ですが既に一万人を超えているのです。これから益々増えて行くでしょう。彼らは何だかんだで現段階で千夏様のために各自一万円は使っています。まあ最終的には一人頭百万円くらいは吐き出させるつもりですので、少なく見積もって信者を十万人としても十万×百万で一千億ですか。千夏様にはこれだけのお金を集める力があるのですよ？ それをファイにするつもりですか？」

「いいいいっせんおく!？」

思わず声が上擦った。一千億って幾らよ？ じゃなかったどんだけよ？ 一円玉にして積み重ねたらお月様まで届くかしら……月で餅突くウサギさんに会えるかなあ……えへえへと若干下心妄想モードに突入しかけたところで後ろから肩を掴まれた。振り返ると梅子が怖い顔をして睨んでいる。

は、そうだった。こんなゲス野郎のインチキ話に乗っちゃってる場合じゃなかったわ、と正氣に戻ると、今度は龍馬が私の横を通り過ぎ、ふらふたと玉夫の方に歩いて行こうとしていた。私はその腕を取り、振り向いた龍馬を睨んで首を振る。

「ぬぬぬわわわゝにが私のためだ！ 全部あんたらが自分の懐に入れるんでしょうが！ それにね、だいたいからして一人百万も使う訳ないでしょうが！ 税金だってがっばり持ってかれるしね！ 次の年の国民保健とか所得税とかド偉い騒ぎよ！ 盛大に使っちゃって来年になって税金払えなくなつてにっちもさっちも行かなくなるに決まってるんだから！ ざまあみやがれてんでい！」

「宗教法人は色々税金の面では優遇されているのでご心配なく」

あ、あれ？ 私何の話してんだ？

「とにかく千夏様、これから色々スケジュールが詰まっておりますので。さあ参りましょう」

「あんたらまじでバカでしょ。人の話聞いてなかったわけ？　こんなインチキはぶっ潰すって言ってんの！」

「そうですか……意外と物分かりの悪いお方で残念です。ではこうしましょうか。千夏様が教祖として残って頂けるのであればその二人、いや、梅子も入れて三人ですか、彼らの命は保証しましょう。それでももし来て頂けないのでしたら……仕方ないですね。その三人を始末した上で、千夏様には改めて教祖として働いて頂きましょうか。ただしこの場合は言うことを聞いて頂くために少々手荒い扱いとなっておりますが」

「どっちみち私が教祖じゃないのさ！　何をあんたらに都合の良いことばっか言ってるのよ！　いい？　こんな犯罪まがいの茶番なんかぶっ壊してやるって言ってんのよ！　かかってくんなら来なさいよ！　柔道部の二人ぐらい何でもないんだから！　ねえ？」

と私は龍馬とネチっ子の顔を見る。二人とも一応ファイティングポーズをとってはいるものの、遠足の途中でトイレに行きたくなったけど、クラスみんなに笑われるんじゃないだろうか、ボクの大好きな早苗ちゃんに「団体行動中なのにおしっこも我慢できない人って全然男らしくないよね」などと嫌われやしないだろうか、と恥ずかしくて尿意を催したことを言い出せずに必死に堪えている小学生よろしく完全に腰が引けてまるで頼りない。ネチっ子に至っては、構えているというよりお尻を突き出してるだけのようには見ええない。すると玉夫はふふんと鼻を鳴らした。

「二人？　二人ねえ……おい、お前たち、三人を縛り上げて千夏様を六階に連れて行け。ああ、くれぐれも信者に見付からないように外の階段を使えよ」

玉夫がT.O教恒例の湿気た指パツチンを鳴らすと、柔道サウザンズが狭いコンクリートの部屋に入ってきた。きいいいいえええええ！ と半ばヤケクソ気味に、完全に目をつぶったまま奇声を発するネチっ子。しかし。

「う、ウソお……」

何と玉夫の従えて来た柔道サウザンズは二人ではなかった。一人が部屋に足を踏み入れるとまた一人、またまた一人と、後から後から志村けんのコントのように湧き出て来るのだった。奴らが黒い壁となってじりじり間合いを詰めて来る。その数十人以上。既に部屋の半分は柔道サウザンズで埋まっている。しまった、謀られた……遂に私たちは壁際まで追いやられた。

「おやおや先程の威勢はどうしたんですか？」

黒い壁の向こうで姿の見えない玉夫が言った。くそう！ どうしよどうしよ……このままじゃ私は捕まってこいつ等に捌られ弄ばれた上にヤク漬けにされて意識のないままT.O教の形だけの教祖として廃人のような人生を送るんだわ……どうすることも出来ず、しゃがんで頭を抱え込む。そして迫り来る黒い壁が私に覆い被さろうとしたその瞬間。

「ふざけやがって……」

という龍馬でもネチっ子でもない、くぐもったドス黒い声に顔を上げると、何ということだ、絶体絶命男が私たち四人と黒い壁の間に立ちはだかったのだ。すっかりこいつの存在を忘れてたわ……ってそんなことはどうでもよくって！

絶体絶命男は恐らく私と玉夫のやり取りを聞き、自分たち信者は単なる金儲けの為の道具に過ぎないということを知り怒りに震えているのだろう。気持ちは分かる。分かるけどさ、この状況よ？ 多勢に無勢の上、こんな青白いヒョロヒョロの男が無差別級柔道サウザンズ×10に勝つ可能性は万に一つもないのです！

「ふん、何だお前。カッコつけんな」

一人の黒い壁の一言が合図となり、絶体絶命男に一斉に襲い掛かる柔道サウザンズ！

「きゃあああ！」

あああダメだ、あんな連中にまとめて襲われたらそれこそ骨も残らないわ……私は見ていられず再び目を押さえてしゃがみ込む。ぐえっ、とかあぐっ、とかカエルの潰された時のような声が狭い部屋に響く。

絶体絶命男の次は私たちの番だわこれで人生おしまいだなんてああ結局男の人と一度もせずに短い人生に幕を閉じるのねこんなことになるなら龍馬でもいいから一度だけでもエッチしとけばよかった……と、後悔が走馬灯のように頭の中をぐるぐる回っていた。すると程なくして部屋に静寂が訪れた。嵐の前の静けさか。

体育の授業及び運動会を彷彿とさせるネーミングだ

「ま、マジかよ……」

しかし震える私の耳に聞こえてきたのは龍馬の声である。その声に目を開けると、そこには信じられない光景が広がっていた。なんと、部屋の真ん中に一人立っていたのは、私のインステップキック如きで気絶したほど弱っちかった絶体絶命男だったのだ。

彼の周囲には、口から泡を吹き白目を剥いて気絶してる柔道サウザンズの面々が海岸で日向ぼっこをするトドのように横たわっていた。

「くっそ何て奴……」

ドアの向こうに目をやると玉夫が慌てふためいた顔で去っていくのが見えた。

「あ、あんた一体何者なの？」

私は仁王立ちで息を整えている絶体絶命男の背中に声をかけた。絶体絶命男は、建物の外での行列で振り返ったときと同じようにくるり、と首だけを捻じ曲げ私を見た。

しかし怒りに燃え、獲物を狙う獣のようギラついていていいると思われたその瞳は、燃え尽きたかのように澱んでいて焦点が定まっていない。返事がないのもう一度声をかけようとしたそのとき、絶体絶命男は膝を折りガクンと崩れ落ちた。

「ちよちよちよっと大丈夫!？」

私たちはトドの群れ如き床に倒れている柔道サウザンズの肉塊を容赦なく踏みつけ彼の周りに集まり顔を覗き込んだ。どうやら氣を失っているようだ。

「何だったんだ今のは……」

龍馬が呟く。すると横にしゃがんで彼の顔を見ていたネチっ子が突然「あああ！ 思い出したあ！」と叫んだ。

「何よ思い出したって」

「この絶体絶命って字体さあ、何か見たことあると思ってえ、ずうっと考えてたんだよねえ」

「最近色んなTシャツがあるからね。どうせあれじゃない？ ジーンズメイト辺りで同じのが売ってたとかそういうパターンでしょ」
「それが違うんだなあ。思い出せてすっきりい。実はさあハワイイにいたときに何気なく見てた『ディスカバリーチャンネル』なんだなあ」

「何だそれ？」

龍馬が尋ねる。

「坂ちゃん知らないのお？ ディスカバリーチャンネルはさあ世界175ヶ国、35の言語で放送されている世界最大のドキュメンタリー番組なんだよお」

「へえ、そうなんだ。で、それとこの絶体絶命って文字と何の関係があるんだ？」

「うん、僕が見てたときに放送してたのがさあ、『世界の知られざる武術』っていう内容でさあ、そこで取り上げられてたのがさあ日本の佐渡島に一子相伝で人知れず伝わる拳法だったんだよねえ。そ

の拳法の名前がさあ『絶拳』だったんだあ」

「ゼッケン？ 何だか体育の授業及び運動会を彷彿とさせるネーミングだけど……その使い手がこの人ってこと？」

私は未だ意識を取り戻さない絶体絶命男を見ながらネチっ子に尋ねる。

「間違いないと思うよお。テレビに出てたのはさあ顔出しNGみたいでさあ、マスク被ってたからどういう人かは良く分かんないけどお、声からしてもっと年上のオジサンだったから多分この人のお父さんだと思うんだよねえ。だってその人もさあ、やっぱりこれとおんなじ字がプリントされたTシャツ来てたからねえ。それにさあ見たでしょお？ この尋常じゃない強さあ。単純に喧嘩が強いっていうレベルじゃないよお」

「ああ、確かに目にも止まらぬスピードとパワーだった。こんな狭い部屋でこれだけの人数を一度に相手にしたのにただの一発のパンチも喰らってないもんな。凄えなんてもんじゃない。でもよ、ダメージ受けてないのに何で気を失ってるんだ？」

龍馬がひたひたと絶体絶命男の頬を叩く。ネチっ子は隣で解説を続けた。

「それがさあ、絶体絶命っていうのがこの拳法の特徴を表してるんだけどさあ、絶体絶命拳、略して絶拳はさあ、自分が絶対絶命の危機に追い込まれてえ、なおかつ心の底から爆発的に怒ったときにしかその力を発揮できないんだよねえ。でねえ、力を使うとさあ、精神力と体力を極限まで引き出すもんだからさあ、身体に物凄く負担がかかるんだってえ。だから回復するのに数日間は何もできなかったままだよお」

「まじで……」

「しかもお、エネルギーの消費量が半端じゃないからさあ、一年に一度しか力が使えないんだってえ」

「え？　じゃあ彼にとって、今日がその一年に一回ブチ切れた日ってこと？」

「そうなるねえ」

何だかとっても不便な拳法だね。でも良かった……先月辺りにどーでもいいことに怒り狂って力を使っていたらこの状況は誰にも救えなかっただろう。私は感謝の意を込めて絶体絶命男に向かって手を合わせた。

「俺なんかよりも全然細い身体なのに凄い力が出るもんだ」

龍馬は腕まくりをして絶体絶命男と腕の太さを見比べて、しきりに感心していた。

「人間はさあ本来の力の30%しか使っていないんだってえ。でも絶拳の極意はさあ、残りの70%の潜在能力を引き出すことによって超人的な力を発揮するところにあるらしいよお」

一子相伝、70%の潜在能力……どっかで聞いたことあるようなないような。

「と、とにかくさ、柔道サウザンズが息を吹き返さないうちにこっから出ようよ」

私はみんなを促した。

「この方はどういたしますの？」

梅子が深い眠りに落ちている絶体絶命男を指差す。

「もちろん連れて行くわ。なんたって今世紀最大の危機を救ってくれた救世主なんだからね。龍馬！ おぶって」

指名されて嫌そうな顔をしたが、さすがにこの状況で放ってはおけないと悟ったのだろう、観念した龍馬は、腰をかがめると絶体絶命男を背負った。

部屋を出てみると廊下の突き当たりに扉が見えた。そしてその上に非常口の緑のマークがあった。私は急いで駆け寄ると、その鉄の扉の取っ手を回して引き開けた。隙間から伺うように首を出す。サウザンズはいないようだ。上の方から車がひっきりなしに通る騒音が聞こえてきた。顔を上げると既に暗くなっている空が見えた。しめた、ここから外に出られる。

「龍馬と田倉はその人を連れて逃げて」

「岡崎何言ってるんだ。いくら柔道部を倒したとはいえ相手はまだまだ大勢いるんだぞ！ 俺たちも残る。なあ？」

龍馬がネチっ子を見る。

「そうだよオナさぁん。水臭いこと言わないでえ。確かに大して役には立たないけどさぁ、僕も残って戦うよお」

しかし私は首を横に振った。

「いい？ 龍馬と田倉はその人を安全なところまで運んで休ませて欲しいの。気絶した彼をおぶったままじゃ却って危険だからね。そ

れに……」

私はちらりと梅子を見た。

「これは私と梅子の戦いだから」

「けどよ……」

龍馬が何かを言いたげだったが、私はそれを遮った。

「大丈夫だよ龍馬。いざとなれば五百人の忠実な信者がこの千夏様を守ってくれるって。ね？ もたもたしてたらまた玉夫に見付かって、今度はその彼が連れて行かれちゃうかもしれないでしょ？」

自分の手足となる武闘集団を全滅させた絶体絶命男のことを、玉夫は決して許さないだろう。見付け次第それこそ本当に抹殺するかもしれない。私としては窮地を救ってくれた絶体絶命男が玉夫の手に渡ることだけは避けたかった。人質に取られてしまったら、それこそ玉夫の思う壺だ。

「だったらよ、みんなで逃げようぜ」

「それはダメよ。逃げたところで玉夫は態勢を立て直してまた襲って来るに決まってる。叩くなら柔道サウザンズがない今しかないわ。このチャンスを見逃すわけにはいかないの」

私は固い決意と共に龍馬とネチっ子の顔を見て頷いた。

「ほら、早く行って！」

私は名残惜しそうに私を見る龍馬とネチっ子の背中押した。

それはまるで修学旅行先のファンシーグッズ的土産物屋で売られている

「千夏様ヒドいですわ」

地上への非常階段を上って行く、絶対説明男を背負う龍馬とネチっ子の背中を見詰めながら梅子が言った。

「私には逃げろとおっしゃって下さいませんのね」

そう言いながらも私の顔を見る梅子の表情は、言葉とは裏腹に覚悟を決めた笑顔だった。

「あらごめんなさい、てっきり梅子も残りたいものだばかり思ってたから」

私もわざとらしくそう言って目を合わせると、二人同時に吹き出した。

「さてと、じゃあとつとあのインチキ野郎を片付けちゃいますか」

私は両腕を突き上げて、うーんと伸びをした。

「でも千夏様、何か策がありました？ 奥田玉夫はきつとまた何か仕掛けて来るに違いありませんわ」

今度は言葉と同様に、梅子の顔には若干の不安が見て取れた。もちろん策はあった。私は梅子の力を信じたのだ。私の分析によれば、梅子のヒューマンコントロールの力が発揮されるには、二つの条件が揃ったときだ。一つは集団の感情が一つにまとまっているとき。もう一つは梅子が強い負の感情を爆発させたときだ。

そして今の状況は、この二つが揃っている。梅子の力を引き出すのにこれほどの好条件があるだろうか。信者たちの気持はもちろん教祖であるこの私への忠誠心で埋め尽くされているし、今の梅子は、理由はよく分からないけれど玉夫はへの憎悪の念が激しく渦巻いているからだ。

「いい梅子、私が一階に並んでる入信希望者の前に出て行くから。みんなが私に注目したら念じて」

「そんなことしたら大勢の人間が一斉に千夏様の元へ駆け寄って危ないんじゃないでしょうか？」

「だから、そうなる前に梅子が『サウザンズと奥田玉夫をひっ捕らえろ！』って念を送るのよ」

「上手く行きますでしょうか……」

「そのときに忘れちゃならないのが玉夫への憎しみの感情ね。それが強ければ強いほどこの作戦が成功する確率は上がる」

「憎しみ……ですか」

「うん。梅子の能力はさ、嫉妬とか憎しみとかそういうマイナスの感情が爆発したときじゃないと発揮しないと思うの。だから、梅子が何でそんなに玉夫を敵視するのか私にはイマイチ分からないけど、とにかくこれまでの人生で、玉夫に受けた一番酷い仕打ちを思い出して」

梅子は眉間に皺を寄せ、きつく目を閉じて俯いた。恐らく過去の忌まわしき記憶を検索しているのだろう。ごめんね梅子、嫌なことを思い出させてしまって……すると数秒の後、突然梅子は顔を上げ、萌え系ロリ系美少女形無しの阿修羅の如き憤怒の形相で、がああああ！ と地獄の底から這い上がって来た悪魔の断末魔のような叫び声を上げた。髪の毛が逆立っている。

梅子の、何かに取り憑かれたかのようなあまりの豹変振りに思わず後ずさる。叫び終えた梅子は、ふう、と一息吐くとキッと私を睨んで言った。

「行きますわよ」

「は、はい」

その魔人のような瞳に見竦められ、背中にぞぞぞと悪寒が走った。常人の私にも見えそうなほどの黒いオーラを身体の周りに漂わせた梅子は、私の手をがっしりと掴むと、先程柔道サウザンズに連れられて降りてきた階段を、一段一段登り始めた。

私は歩きながら考える。迷える子羊達の前での第一声は何にしようかな、と。一応まだ教祖だからな、あんまシヨボい発言だと信者の忠誠心が下がり、ひいては作戦の失敗に繋がるやもしれぬ……いや、あれこれ考えるのは止めだ。ここはやはりシンプルに行こう。

一步一步登り行くその先に待っているのは、果たして地獄か天国か……踊り場で折り返すと一階の明かりが見えた。あと五段というところで私は梅子の手をぐっと握り、立ち止まる。振り向く梅子に頷いて見せ、大きく深呼吸。手を放し梅子にそこで待機するようにアイコンタクトを送ると、一人最後の五段を駆け上がった。そして。

「私は神だああ！ ……ああーれれれえええ？」

両腕を天に向け高らかにかつ神々しく宣言し辺りを見回すとそこには大勢の子羊の群れが……群れが……一匹もいなかった。

「梅子どうなってんだろ？ 誰もいない」

神の私は情けない表情で阿修羅梅子を振り返る。

「もう暗いですからね。本日の新規加入者は締め切ったのかもしれないわ。二階に行ってみましょう」

私たちはそのまま階段を上り二階に出た。目の前に扉がある。この奥は部屋になっているようだ。私はそっと耳を付けてみる。目を閉じて中の音に集中するが、何も聞こえなかった。

「ここも誰もいないみたい」

私はドアノブに手を掛けて回し、恐る恐る扉を開けた。

「な、何これ……」

会議室のような、だだっ広い部屋の中は、まるで地震が来て台風が通り過ぎたかのように色々な物が壊れ散乱していた。私は足元に転がっていた物を拾い上げる。それは取っ手の欠けたマグカップだった。

「何よこれ……」

白いカップの表面には、私の顔写真が印刷されていた。しかもめっちゃ笑顔。いつ誰がどこで撮ったのよ！ 私の顔はハート型にくり抜かれており、その下には「CHINATU」と、ピンクのギャル丸文字で書いてある。それはまるで修学旅行先のファンシーグッズ的土産物屋で売られている、「KONKICHI」とか言うよく分からないキツネキャラの描かれたマグカップの如きであった。つかさ「TINATU OKAZAKI」の頭文字を取っての「TO教」じゃなかったのかよ。完全にミスプリじゃん。

「あ、そのカップ素敵。一つ頂いていきますわ」

梅子はいつの間にか這いつくばって、床に落ちている中から、破損していないマグカップを拾い上げ、ニコニコと嬉しそうにそれを眺めている。オイ、さっきまでの阿修羅面はどこに消えた。こんなしょーもない小道具に翻弄されおって……

「あ、これもいいですわ」

さらに梅子は色々と物色し、破損がないかどうかを吟味しては拾い集めだした。戻って来た梅子は両腕一杯に色々な物を抱えている。私はそれを一つずつ摘まみ上げた。

「写真集に……タオルに……Tシャツ……ん？　これは……DVD！？　って一体何の映像よ！？　つかこれ、要するに全部岡崎千夏グッズじゃないのさ！　勝手にこんなもんまで作りやがって売りやがってえ……玉夫まじ許さん！　梅子行くよ！」

この部屋は私の肖像権を完全に無視して作られた、「教祖様グッズ」の販売会場なのであった。怒りに燃え、部屋を出ようとした私の足元に数字の書かれたプレートが目に入った。「マグカップ　一万円（税込み）」。

別にパンチラとかそういうのはない

「ちょっと梅子！ そんなの置いてきなさいよ！」

三階に上る階段で、私は、どこから見付けてきたのか大きな紙袋に岡崎千夏グッズを目一杯詰め込み、胸の前で抱えながらよたよたと歩く梅子に怒るように言った。

「い、嫌ですわ。こんなレアアイテム、今を逃したら二度と手に入れませんことよ」

梅子はすっかり玉夫の販売戦略にハマっている。こいつならきつと、玉夫の言うように百万吐き出す良い信者になるかもね。あ、でもお金ないのか。それにしても信者及びサウザンズの面々は一体どこに消えてしまったのだろうか。三階に辿り着くと、そこも二階と同じように階段を登り切った正面に扉があった。先程と同じように耳を付けて中の様子を伺うが、やはり物音一つしない。私は扉を開けた。

「何じゃーありゃー」

その部屋は畳が敷き詰められていて、まるで柔道場のようなであった。どうやら宗教には付き物の、何らかの修業をする部屋だと思われるのだが、問題はそんなことより部屋の奥にある大きな肖像画だった。

「あれも欲しいですわ……」

梅子がうつとりと眺めているそれは、もちろん教祖である私の肖像画であった。だが幅は2メートルくらい、高さは床から天井までもあるその巨大な絵は、完全に「なんちゃって自由の女神」である。

顔の部分だけが私の物になっているのだ。

まったく、教祖としての威厳もオリジナリティの欠片もあったものじゃないわ。どうせ飾るならもっとカッコイイ絵にしろってーの。これじゃ昔バカボンダディが大阪に出張したときにウケ狙いのお土産で買ってきた、バカボンとサザエさんの合体した「サザエボンTシャツ」と大差ないじゃない。

「こ、これ壁に張り付いて剥がれませんわ……ち、千夏様、ちよつとお手をお貸し頂けませんこと？」

梅子は巨大肖像画に挑み始めた。どうやら本気で持って帰りたらしい。半ば呆れつつ私は部屋の奥までつかつかと進むと、無言で梅子の腕を取り、そのまま引きずって部屋を後にした。

そして四階へ。ここには机やパソコン、電話といった事務用品類が置いてあった。まあ見た通りここで色々と事務的な作業をするのだろう。やはり中には誰もいなかったので、すぐに部屋を後にした。五階の部屋はどうやら倉庫として使っているようだ。段ボールの箱が山と積まれている。いくつか開けてみると、箱の中には二階で見たグッズの数々が入っていた。

「あら、ここのは未開封でぷちぷち梱包もされたままの新品ですわ。何ですの……こんなことなら先程必死になって拾ってくることございませんでしたわ……ねえ千夏様？」

知るかつつ！

そして六階へ。このビルは六階建てなので、ここに誰もいなければ、

もう探すべき場所はない。つまり私たち二人以外、このビルには誰もいないということになる（地下で伸びている柔道サウザンズは除く）。再び私は扉に耳を当ててみた。すると、今度は中から気配が感じられた。注意深く聞いていると、どうやら呻き声のようだ。誰かが怪我をして倒れているのかも知れない。

私は梅子に向かって人差し指を口に当てて見せた。そっとドアノブを回し、ゆっくり扉を開く。頭が入る程度に開き、隙間から顔を覗かせる。部屋の壁が、今までとは打って変わって淡いピンク色だった。ソファやテーブルといった家具が見える。しかし人影は見えない。

私は思い切って扉を全開にした。すると扉が何か、硬い物に当たる音と、より一層大きな呻き声が聞こえてきた。部屋に入り扉の死角に当たる部分を見ると、そこには全身ロープで縛られて、猿轡をされ学ランを着た男が横たわって悶えていた。

「何やってんのあんた」

むーむーと半分泣きながら声を漏らしているのは、TO教リーダー奥田玉夫その人であった。私と梅子は怯えた表情の玉夫を見下ろす。こいつのせいでエライ目に遭ったわ。顔を踏んづけてやろうかしら。私は部屋の中を見渡したが、他に人の気配は感じられなかった。

「どうする？ このまま足に重り付けて東京湾に沈めちゃう？」

私は爪先で玉夫の身体を突きながら梅子に聞いた。玉夫が恐怖に引き攣った顔で、激しく首を振る。

「それもいいですわね」

梅子は腕組みして見下ろしながら答えた。

「でもその前に、この状況を説明して頂かないと」

「ああそうだったね。それと私にはグッズの売り上げ金を払って貰わないといけないしね」

仰向けだった玉夫の身体を足で横向きにして、私は猿轡の頭の後ろの結び目を解いた。

「はあ……はあ……か、金ならないぞ。あいつらが全部持ってったからな」

開口一番、怯えながら玉夫は私に向かってそう言った。

「あいつらって誰よ。つーかさ、何で誰もいないわけ？ 二階がめちゃめちゃに荒らされてたけど誰の仕業？ 何でリーダーのあんたがこのザマなわけ？」

とりあえずの疑問を矢継ぎ早にぶつけてみる。

「ええい一遍に質問するんじゃない！ ……というか答えは全部同じだけだな」

「どういうこと？」

「それはこっちが聞きたいくらいだ」

「何よそれ。私たちが知るわけじゃないじゃない。あんま適当なことばっか言っつとこのまま蹴っ飛ばすけど？」

私は地下で絶体絶命男にやったときのように、右足を振りかぶった。

「ま、待て待て！　言うから！　ついさっきまでは平和というか順調そのものだったんだ。入信希望者は後から後から続いてくるし、それに伴って鉢巻もガンガン売れた。そしてクイズに正解し、見事入信した連中にはまず二階のグッズ販売コーナーで、思い思いの品物を買ってもらった。まあほとんどのヤツが全種類購入してたけど……で、買い物が終わると三階の道場で精神を統一し、千夏様の有り難いお言葉を大音量で流す……」

「ちょっとー私、有り難い言葉とか録音した記憶ないんだけど」

「ふ、学校内であんたの色んな声を隠れて録音してたのさ。それを上手いこと繋ぎ合わせてエコーをかければ教祖様のオカルトヴォイスのいっちょ出来上がりってわけだ」

「勝手に録音までしてたのかよ……あ！　ってことはあの売ってたDVDは盗撮した私の姿が映ってるってわけだな！　まじでアツタマ来た！」

私は遂に革靴の底で、玉夫の頬をぐりぐりと踏みつけた。

「や、やめ……だ、大丈夫だって！　別にパンチラとかそういうのはないから！　あくまで爽やか路線だから！」

すると横で梅子が「ちっ、パンチラなしかよ……」と手に入れたDVDを眺めながら悔しそうに呟いた。

「まあいいわ。そのことについては後で家庭裁判所でじっくり話しかうとして……で？　それからどうなったわけ？」

「時間にして三十分くらい前か。突如信者たちが反乱を起こしたんだ。三階で修行していた連中と二階で買い物を楽しんでいた連中と一階にいた入信希望の連中が、いきなり暴れ出し、我々サウザンズに襲いかかって来たんだ……それまでは大人しく言うことを聞いていたのに。全く以って訳が分からなかった。」

分からないが我々サウザンズが標的であることはすぐに理解できた。一応の抵抗は試みたものの信者の数はおよそ五百人、対するサウザンズは三十人といったところ。しかも武闘集団は先程やられてしまったし、まさに多勢に無勢、我々は抵抗する間もなく一瞬のうちに捕まってしまった」

「それってもしかして……」

私はちらりと梅子の顔を見た。梅子はそっぽを向き、知らん顔である。

「我々を取り囲むと、信者の標的はなぜリーダーである私一人に絞られた。他のサウザンズのメンバーは、それ以上危害が加えられないと分かると、『こんなの聞いてないぞ!』とか『楽して儲けるんじゃないかったのかよ!』とか『玉夫、話が違っちゃねーか!』などど口々に罵り、私を見捨てて建物から出て行ってしまったのだ。そして信者は私を縛り上げるとこの部屋に放り投げ、金を奪って……というか元々はあいつらの金だが……去って行った」

いきなり「私たち仲の良いお友達だったよねヅラ」されて

話し終えた玉夫は全てを諦めたような表情でぐったりと項垂れた。要するに、さっき梅子が断末魔の阿修羅の如く叫んだときに、「サウザンズをやっつけろ!」という念が、この建物中の信者に届いていたということらしい。

そしてサウザンズと玉夫を始末すると帰って行ったということは、恐らく梅子のコントロールが解けて我に返ったのだろう。だから私たちが姿を現す前に決着が着いてというわけ。二階のグッズコーナーが荒らされていたのは、そこで乱闘があったからに違いない。

「ということは……これにて一件落着?」

梅子を見る。何だか呆気なかったな。

「そうなりますわね……ま、これに懲りて、二度と下らない考えを起こさないことですわ。行きましょう、千夏様」

玉夫に一瞥をくれてそれだけ言うと、梅子は部屋から出て階段を降り始めた。

「ちよちよつと梅子! いいの? こいつ放っておいて」

「千夏様のお好きなように」

私は「千夏グッズ」が溢れんばかりに入った大きな入った紙袋を抱え去り行く梅子の背中を見詰めたまましばらくその場を動かなかった。地下室で梅子を見たとき、玉夫は確かに「我が妹」と言った。ということはつまり、この二人は兄と妹の関係で、それは即ち身内

で家族と言うことになる。それなのに梅子は激しく玉夫を憎んでいるようだ。

さらにネチっ子の情報によれば、梅子は母親と二人暮らしってことだし……この二人の関係がますます分からなくなってきた。あのパツン黒縁のブサイク変装も何か関係しているのだろうか？

思案に暮れていると、玉夫が床の上でもぞもぞと動き出した。

「なあ、これ解いてくれないか？」

サウザンズ及びT.O教が崩壊した今、この男はもはや羽をもがれた鳥だ。怖くも何ともない。私のこいつに対する怒りは完全に収まった訳ではないが、それよりも今は、梅子との関係性が気になって仕方がない。

「いいけど。その代わり教えて。梅子とどういう関係なのか」

「さっき聞いていただろう。あいつは私の妹だ」

「名字が違うみたいだけど？ それに兄妹の割には随分といがみ合っているように見えるし」

「……分かった。あんたが梅子から私のことをどういう風に聞いているのかは知らんが、これも何かの縁だ。本当のことを話しておこう。まあ、あいつは私のことは一生許してはくれないだろうがな」

そして玉夫は誰もいなくなったビルの六階で、自らの家族に起こった「事件」について静かに語り始めたのだ。

「元々は仲の良い家族だったんだ」

縄から解放された玉夫は、身体をさすりながら立ち上がると、「立ち話もなんだから」と言いながら応接間のような、ガラスのローテーブルを挟んで配置してある革張りのソファに腰を沈めた。私にも勧めてきたので玉夫と向かい合う形でソファに座った。それにしてもここだけ随分と雰囲気が違うな。

「ああ、この部屋はさ、教祖様の専用部屋にするつもりだったんだ。信者との面会に使ったりね。ちよっと、良いだろ」

玉夫は部屋をきよろきよろと見回す私に向かってそう説明した。部屋に置かれている机やチェストとや本棚いった家具は、木製の豪華な彫刻が施された物ばかりだし、壁の色もピンクとはいえ淡く落ちていた色調で、確かに「ちよっと良い」かも。ふうん、と頷きながら一通り部屋を見渡して視線を正面に戻すと、それを待っていたかのように玉夫は話を続けた。

「私と梅子、母親と父親、私たちはどこにでもあるごく平凡な家庭だった。だが不幸は突然訪れた。いや、別に父親も最初からそれを望んでいたわけではなく、結果的に不幸になってしまったと言っべきか。私が中学三年、梅子が一年の冬だった。父親がいきなり会社を辞めてきたんだ」

玉夫は少し開いた膝に組んだ両手を置き、視線を落したまま話し続けた。

「それだけなら特別な話じゃないかもしれない。長い人生の途中で仕事を変えることは誰にでも有り得るからな。ただ、父親の場合は唐突過ぎた。家族の誰にも、母親にも相談はしなかった」

「会社を辞めて……どうしたの？」

「もちろん働くのが嫌になったから辞めたわけじゃない。一家の大

黒柱としてちゃんと収入のことも考えての行動だったんだが、その次の仕事というのが問題ありだった。彼が次に選んだものの、それはマルチ商法の勧誘員だったんだ」

「マルチって……怪しいモノ売りつけるヤツ……だよな？」

「そう。マルチ商法……ネットワーク・ビジネスとも言う。正確にはマルチ・レベル・マーケティング、アメリカが発祥のこの商売は、それ自体が違法なわけじゃない。きちんとした商品を適正な価格で販売している組織も多く存在する。ただその商形態は、ねずみ講と組織の拡大方法が似ているし、勧誘の仕方が強引だったり、取り扱う商品がグレーだったりするから日本ではマルチと言うだけで煙たがられるんだけどね」

「お父さんの売ってた物は……その、『正しい商品』だったの？」

「そうだったらまだ良かったんだけどな。父親が扱ってたのは『水』だった」

「水？」

「癌が治る水。北極海の深海でしか取れない奇跡の深層海洋水で癌細胞を破壊する天然成分が含まれているというもの」

「それって……インチキだよな？」

「もちろん。普通に考えればそんなものは存在しないことは中学生の私や梅子にも分かる。でも父親は話を持ちかけられて、さして疑いもせずに乗った」

「何で？」

「話を持ちかけてきたのが父親の高校時代の同級生だったんだ。まあこれもよくある話なんだけどな。この商売はとにかく自分の『子』を作らなければ始まらない。子を作り、その子が孫を作り孫がまたその下に……ということを繰り返し、組織を拡大することで自分への収入が増える。」

だからマルチを始めた人間がまずやるべきことは、とにかく自分の知っている人間に手当たり次第連絡を取り、話を聞いてもらうこ

となんだ。それこそ名簿が残っていれば幼稚園の同級生にだって電話をかけて来るさ」

幼稚園で……高校生の私でさえそんな幼き日々の友達の名前なんて覚えていないのに。何十年か振りにいきなり「私たち仲の良いお友達だったよねヅラ」されて儲け話持ちかけられてもね。私ならソッコー電話ガチャ切りしてついでにその番号着信拒否で決まり。

「父親は真面目な人間だった。仕事が終われば真っ直ぐ帰ってくるし、休日には家族サービスもする、酒も飲まないし、趣味と言えば碁を打つことくらいだった。競馬やパチンコもやったことがないし、株や投資にも全く興味を示さなかった。四十年の人生、自分の前に続く一本道を脇目もふらず歩いてきた、そんな人だった。だがここで、道端に落ちている、光る物が気になって、つい立ち止まって見てしまったんだ。そしてそれに釣られるように細くぬかるんだ道に足を踏み入れてしまった」

そんなんだったらエビアンかクリスタルガイザーくれって感じ

「光る物って？」

「その高校の同級生の、羨まし過ぎる人生だ。同級生は父親に会ってこう言った。『サラリーマンを辞めて一年で、労働時間は十分の一に減り、収入は十倍になった』とね」

「十倍！」

「実際に通帳まで見せてきたそうだ。真偽のほどは定かじゃないが、少なくとも父親は信じた。しかもその収入は、働いて得たものじゃない。自分は何もしなくても勝手に振り込まれてくる、いわゆる『権利収入』だ。そしてそれは、これから先もずっと続くばかりかその額は増える一方だと言われたんだ」

「そんな上手い話あるわけ……」

「もちろんそう簡単に転がっているわけじゃない。ただあながち嘘とも言い切れない。マルチは組織が拡大していくと、それこそネズミ算式に収入は増えて行くからな。収入のことをちらつかせた後、同級生は商品の説明に入った。彼は高校時代と変わらぬ誠実そうな話し方で、この商品のお陰でどれだけの癌に苦しむ人たちを救えるかを、実際に癌細胞が消えたという実例や、海外の医学博士も称賛しているという話を持ち出して、その水の素晴らしさをこんこんと説明した。

この水のお陰で大勢の苦しむ人たちを助けることができる。僕たちはその対価としてほんの少しの利益を貰うだけだ、と。実際、その水を一本二本売ったぐらいじゃ大した金にはならないんだ。彼は自分が今大きな収入を得ているのは、ネットワーク・ビジネスの最大の特徴だと説明した。つまり通常の小売店のように店舗を構えた場合と比較すると、諸々の経費が大幅に節約できる。その分を販売者に還元しているだけなんだ、と。

だから勧誘が上手く行って、子が孫がどんどん働いて想像もつかないような収入を手にすることがするのは必然であってちっとも後ろめたいことではない。むしろ成功の大きさだけ人々を救った証なんだ。胸を張っていい。人に喜ばれることをしてなおかつ自分や家族も今まで以上の幸せを手に入れることができるんだ……とね」

つまりマルチに足を踏み入れてしまったお父さんのせいで、梅子一家はバラバラになってしまった、そういうことなのだろうか。

「免疫がなかったのが仇となったんだ。例えば過去に一回でもそういう胡散臭い儲け話を持ちかけられていれば、警戒してすんなり信用したりしなかっただろうからね。まあとにかくそういう経緯で父親は『奇跡の水』の販売員となったわけだ。だが、もう薄々気付いていると思うが、これが全く以って上手くいかなかった。同級生の言う通り、最初は過去から現在に至るまでの友人知人に電話しまくったが、誰も相手にしてくれなかった。

そもそも父親は技術職で、営業なんかやったことがないからな。しかも普段もあまり喋らない。良く言えば寡黙、悪く言えば口下手。でも父親は諦めなかった。例え説明が下手でも、この水の素晴らしさが伝わればきつと買ってくれるはずだと。私が受験勉強をしている間、父親は一日中電話に向かってお辞儀をしてたよ」

バカボンダデイがいきなり仕事を辞めてそんなことを始めたら私はどう思うだろう。少なくとも良く思うことはないだろう。だがそんな半ば騙されたような実直過ぎる父親のことを話す玉夫には、憎んでいるとか馬鹿にしているとかそういう負の感情は見取れなかった。まるでどこかの知らない家族の出来事のように、ニュースを読み上げるように淡々と話を続けている。

「一か月もすると父親は全ての知っている人間へ電話をかけ尽くしたんだ。そしてそれと同時にこれまでの人間関係を全て失った。それはそうだ、昨日まで普通に世間話をしていた友達が、いきなり訳の分からない儲け話を切り出したら誰だって離れて行くからね。するとそんな父親の様子を見た同級生はこんなことを言った。『成功へ向けて新たな人生を踏み出すときはそれまでの人間関係を断ち切る必要がある』とね。そしてこうも言った『成功する人間は、周りから理解してもらえない孤独なものだ』。

父はそれを信じた。そして遂に母親の知り合いにまで勧誘を始めたんだ。もちろん母親は大反対し激怒した。だが『周りに理解されない成功者』を目指す父親の耳に、彼女の怒りの声は届かなかった。結果的には離婚をすることになるんだが、それまでの半年間、母親はよく耐えたと思う。だって、勝手に人間関係を崩壊させられただけでなく、家には『奇跡の水』の在庫が山と積まれていたからね」

「え？ お父さんも癌だったの？」

「そうじゃない。奇跡の水の販売員には、毎月ノルマがあるんだ。10リットル入った水の箱が四つ、金額にして八万円分を捌かなければいけないんだ。もちろん父親の買い取った分の何パーセントかは『親』である同級生の収入になっている」

「ええ！？ ってことはつまり一箱二万円もするの！？ さすが奇跡の水ってだけあるね」

「それは売値だ。仕入れ値は一箱一万円。だから売れなければ毎月四万の赤字だ。だがここでも父親は同級生の言う通りにした。彼曰く『最初から買ってくれると思うな。まずは無料で試してもらって、その良さを実感してもらう。多くの人にそうやって飲んでもらえば、その中から必ず継続して買ってくれる人が現れるから。最初は苦しいがそこを乗り切って軌道に乗れば元なんかすぐに取れるから』」

「いや、別にそんなアヤしい水とかいらないし。そんなんだったら

エビアンかクリスタルガイザーくれって感じ」

私はソファにふんぞり返って脚を組む。俯いていた玉夫の視線が一瞬私のスカートに注がれたのを見逃さない。おおっといけねえ、パンツ見えちゃった？　しかし何ごともなかったかのように視線を自分の手元に戻し、再び話し始める玉夫。

「そう、それが普通の反応だ。ただでも貰ってくれる人がいない。でも父親は買い続けた。毎月十箱だ。玄関先にもリビングにもどんな水の箱が積みあがっていった。収入は無い、なのに毎月十万の赤字、そして増える水。夫のせいで友人も失った母親は遂に切れた。包丁を持ち出して、水の入った段ボールを次々と開け、中の容器を切り裂いたんだ。もちろん部屋中水浸しだ。慌てて止めた父親は、とりあえず家にある分は売ってくるからと、その場は何とか宥めた。

そして次の日の朝早く、約束通り父親は水を車に積み込んで出かけて行った。今まで一つも売れず、貰い手もなかったのにどこでどう捌いてくるのか不思議だったが、とにかくそれから一週間、毎日父親は早朝に水を車に乗せてはどこかへ運んで行った。未だお金にはならない物の、家の在庫分がはけたことで母親の怒りは少し収まったんだが、それも束の間だった。その日から苦情の電話がかかってくるようになったんだ。『家の前に勝手に訳の分からない水を置いて行くな』とね。つまり父親は、そこらへんの家の前に、何の断りもなく水を置いて回っていたんだ。もちろんこれからの継続的な販売に繋がることを考慮して、自分の連絡先を書いたメモと一緒に置いてね」

お、お父さんてば……何だかとても切なくなってきた。あ、涙が……出そう。

「これが決定打となった。私が高校一年の夏休み、母親と梅子を出て行った。離婚だ」

「何で……」

「ん？」

「何であんたはお父さんと残ったの？ 名字が違うってことは、要するにあんたは父親を選んだってことだね？ その状況、どう見てもお母さんについて行くと思うんだけど」

すると玉夫はそこで初めて顔を上げ、私を見てふっ、と笑った。

「自分の父親が家族のために頑張っているんだ。当然じゃないか」
「え……」

事も無げに言う玉夫に私は絶句した。だって、それってどう考えたってお父さんが原因で家庭崩壊じゃない。だが、結果的に新しい仕事は失敗に終わったとはいえ、お父さんに悪気はないのだ。家族全員がお父さんを攻撃して見捨ててしまったらそれもそれで可哀想ではある。男同士の絆的な物と息子としての優しさで、玉夫は父親について行ったのだろうか。しかしそんな私の思いを見透かすように、玉夫は言葉を続けた。

「父親について行ったのは、同情したからじゃない。結局父親は、一年間でただの一箱も奇跡の水を売ることは出来ずについてマルチから撤退した。せっかく経済的に成功する道を選んだのに二、三步歩いただけで立ち止まってしまったんだ。もうこれ以上は進めないと自分で限界を決めてしまった。そんな不甲斐ない父親を見て、私は自分ならもっと上手くやれると思った。私はまだ未成年だからな。既成概念に囚われずに金儲けを実行するためには、実際に儲け話に乗った経験を持つ親についた方が良いと判断しただけだ」

「何であんたはそんなにお金が欲しいの？」

すると玉夫は大袈裟に目を見開いた後、口を大きく開けて肩を震わせながら爆笑した。

「何で？ 当然じゃないか。金があれば生きる上での問題の99%は解決できる。よく『心はお金じゃ買えない』とか言うがそんなのは嘘だ。大金積めば人の気持ちだって簡単に動かせる。今の世の中、何だかんだ言っても結局は金を持っている奴が勝ちだ。違うか？ まあ今回の宗教は失敗に終わったが、良い勉強になった。この経験を活かして次は必ず成功させてみせる」

お前は寝言で『私は神だ』とか言っ

外はすっかり暗くなっていた。私は何だかやりきれない気持ちのまま玉夫を一人残し、T.O教本部ビルを後にした。確かにお金は大事だ。お金がなければ生きていけないのも事実。でもお金というのは結局何かを手に入れるための手段でしかない。いくら現金を抱えていても、それらはただの紙切れなわけで、お札自体が寒さや飢えをしのいでくれるわけではない。

玉夫はどこか歪んでいる。それは彼の目的が「たくさんのお金を稼ぐことで何かをしたい」もしくは「何かを成し遂げた証としての報酬」というのではなく「たくさんのお金を手に入れること」そのものだからだ。「手段」と「目的」が拘り変わっているからだ。梅子が嫌うのも分かる気がする。

龍馬とネチっ子と、数日間眠りから覚めないという絶体絶命男のことが気になっていたのでこのまま歩いてアフロディーテに寄ろうかとも考えたが、今日は色々あり過ぎて心身共に疲労困憊。真っ直ぐ帰ることにした。

「あらちーちゃんお帰り。随分遅いのねえ。ダメよまだ高校生なんだから、ニュース23が始まる前には帰らないと」

居間の扉を開けると、美しい姿勢で妖艶に脚を組みながらソファに座り、テレビを見ている美しき姉がいた。

「お姉ちゃん！ いつ帰って来たの？」

「夕方よ。それにしてもちーちゃん何だかとっても疲れてるみたいだけど大丈夫？」

「うーん、あんまりダイジョバないかな……ちよつとここんとこ激動の日々だったから」

「そう。マレーシアのお土産話があったんだけど……また今度にする？」

「ごめん。明日ゆっくり聞かせて。今日はもう寝ます。お休みなさい」

「そうね、それがいいわ。お休み」

美しき姉の顔を見て気が弛んだのか、一気に疲れが出てきた。私は夜ご飯を食べていないことに気付いたが、それより早く横になった。二階に上がり部屋に戻るとお風呂にも入らず、制服のままベッドに突っ伏した。

部屋に漂う花の香りで目が覚めた。カーテンの向こうが明るい。香りの正体はバカボンのガラパゴス土産のイグアナちゃんだった。誰だ勝手に人の部屋の線香炊いたのは……天を見上げ、今にも獲物に食いつきそうな口からもくもくと煙を吐き出している。

ベッドの上にむっくりと身体を起こし、時計を見ると既に十時を回っていた。やべ、大遅刻だ！ と一瞬焦ったが何を隠そう今日は日曜日だったことをカレンダーで確認。寝癖の髪もそのままに、ぼやけた目のまま階段を降りて居間に行くと、バカボンがテレビを見てげひやげひやと笑っていた。画面に目をやると、爆笑問題太田がデীব・スペクターに必要な以上に激しく突っ込んでいる。サンデージャポンである。

「おはよう」

「ああ、千夏か。おはよう」

半開きの口でだらしく笑い、テレビに釘付けのまま私の顔を見ずに適当に返すバカボン。

「あれ、お姉ちゃんは？」

「ああ、帰ったぞ……げっひゃっひゃっひゃコイツばっかでー」

「帰った！？　って宮崎に！？　だってつい昨日マレーシアから帰国したばかりなんじゃないの！？」

「ああその通りだ。本当はここへは寄らず、そのまま成田から羽田に向かう予定だったらしい。だが乗り継ぎが上手くいかないとかで昨日はウチに泊まったんだ」

「ええーそんなーせっかくマレーシアの水上コテージ及び諸々の話が聞けると思って楽しみにしてたのにー」

するとそこで初めてバカボンが私の顔を見た。

「何を言っているんだ。お前の帰りが遅いのが悪いんだろう。普通に夕食前に帰ってきていればあんな話やこんな話も聞けたのにな。可哀想に」

何だよ可哀想って、どんな話したんだよ。夕食と聞いて昨日の夜から何も食べていないことに気付く。気付いたら一気に空腹感が全身を駆け巡る。

「とにかくお腹空いたな。ねえ何かある？」

「まあ何かしらはあるだろうな」

何でこのオッサンはいちいち癪に障る返答してくるんだろうね。無いんならお母さんに適当に作って頂こう。

「お母さんは？」

「お姉ちゃんと一緒に羽田についてったぞ。何でも第二ターミナル限定のお菓子やら何やら買ってくるとか言ってウキウキとな」

「えーずるーい！ 何で私も誘ってくんないのさ！」

「線香まで炊いて散々起こしたって言ってたぞ。でもお前は寝言で『私は神だ』とか言って、ちっとも起きなかったということだが？」

う……昨日の悪夢がそのまま悪夢に現れたか。くそーいいなー私も空港限定スイーツ色々見て試食しまくってみたかったな。まあいいわ、いない人のことをあれこれ言っても仕方ない。とにかく今は食料を探さないと。お、カップヌードル塩味発見。まさに救世主だな。

ポットのお湯を注ぎ三分待って、蓋を開ける。湯気と共に食欲をそそる良い匂いが立ち昇る。ヌードルを啜りながら昨日の出来事を思い返す。

とりあえずフアンクラブ及び宗教問題は決着が着いたと考えて良いのだろうか。龍馬とネチっ子は無事逃げおおせただろうか。あ、そうだ、絶体絶命男だ。どこに連れてったのかな。まあ恐らくは龍馬がアフロディーテに運び込んだのだろう。それと気になるのは梅子だ。先に一人で帰っちゃったけど、玉夫とのこともあって、いつになく真面目な顔してたからな。よし、ここは一つずつ片づけて行こう。

ヌードルを食べ終わると、私は引き続き「アッコにおまかせ」を見ているバカボンを残し部屋へ向かった。そして鞆から携帯を取り出し龍馬に電話した。

「もしもし龍馬？ 絶体絶命男の様子はどう？」

「お、岡崎、無事だったか。とりあえず客室に寝かしてるけど、あ

れ以来ピクリとも動かん。でもちゃんと呼吸はしてるし脈も正常だから、このまま安静にしとけば大丈夫だと思うが……それより信者とか玉夫はどうなった？」

私は昨日、龍馬たちと別れてからのことをかいつまんで話した。

「まじかよ……やっぱ松竹はタダもんじゃねーんだな。でもよ、信者が我に返って、サウザンズも崩壊ってことで事態は収まったんだから、ひとまずこれで良かったんじゃないのか？」

「……かなあ。うん、そうだよ、そーだそーだ。ところで田倉は？　そこにいるの？」

「いや、今朝早く帰ったぞ。一応、絶体絶命男と岡崎のことが気になってたみたいで昨夜はここに泊ったんだけど、松竹が電話してきて岡崎は大丈夫だって言うし、絶命男も変化なしだからな」

「そっか。あー何かもう疲れたな。アイドルも教祖もうこりごりだ」

「そうだな……なあ岡崎」

「何？」

「疲れてるところ悪いんだが、その、相談に乗って欲しいことがあるんだが……聞いてくれるか？」

何だ？　龍馬にしては随分と腰が低い感じだな。

「別にいいけど。何よ」

「電話じゃちょっと。出来れば出て来て欲しい。今ならもれなく俺行きつけの店でハンバーガーランチが付くぞ」

「へえ、龍馬が奢ってくれるなんて珍しい。分かった。いいよ、行く行く」

別に奢ってくれなくたって話くらい聞くのに。日清カップヌードル

塩味を食べたばかりの私だが、そこは何といっても十五歳の育ち盛りの胃袋、まだまだ入りまっせ。しかもハンバーグとか久しぶりだし。

異国の者同士の閉ざされた心が、その殻を破り

「ここはご飯とスープはおかわり自由だから。ガンガン食ってくれ」
「ってゆーかここ……」

池袋西口の芸術劇場前の広場で落ち合うと、龍馬は先に立って裏道に入り、細い路地を迷うことなくずんずんと進んで行った。そして一件の小さな店の前で立ち止まると、暖簾をくぐりながら引き戸を開けた。ハンバーグ屋で暖簾と引き戸いう時点でどうかと思っただが、入ってみて感じた違和感は現実へと昇華した。

「立ち食いって……」

店舗の面積は驚くほど狭かった。下手すると私の部屋より狭いかもしれない。カウンターのみの店は、客が五人も入れば満席である。そしてカウンターの奥では彫深め色黒めの、ジョンカビラ並みに濃い顔の中東系の、髪と髭がもじゃもじゃのオジサンがデューク東郷ばりの鋭い眼光で私たちを睨んでいた。

そして険しい表情のまま彼は、聞き取れない程の大きさの低い声で「イラシャイマッサー」と片言で発した。一応客として認めてくれたらしい。だがしかし。サービス業だろ、もうちょつと声張れよ……そして客に対して愛想笑いをしてくれ。

「なかなか良いだろ？ 巷で今大流行の立ち飲み屋なんだけどさ、昼は激安ハンバーグ定食出してるんだ。しかもこれが結構美味い」

「何でこんな店知ってんのさ。まさか龍馬、お酒飲むの？」

「飲むわけないだろ」

「じゃーどうやってここ見付けたわけ？」

「ここは池袋だからな。表通りにはそれこそ数え切れないほど店が立ち並ぶわけだが、俺は地元民だからそういう誰の目にも付くような店には行きたくないわけだ。ほら、なんつーかさ、『隠れ家的な店』ってさ、やっぱ惹かれるだろ。だから暇があると路地裏を探索して自分だけの店を探すのが最近のマイブームってわけだ」

「はは、隠れ家ねえ……まあ奢りだし、美味しければ文句無いけど、龍馬のセンスって……つーかさ、まだ注文してないよね私たち。何か既に調理始めてる気がするんですけど彼」

私たちが話をしている間も作業は進行しているようだった。カウンター越しの厨房の中のデューク中東は、フライパンに乗せたハンバーグの片面を焼き終わったと見え、ひっくり返しもう片面を焼く工程に入った模様。傍らには盛りつけ用のお皿も用意されている。

「あ、ここはさ、メニューないからな。昼はハンバーガーランチのみ。メニューを一つだけにしとけば日本語が出来なくても簡単でいいだろう?」

「まあそうですけど……じゃあ夜は? お酒出すんならさすがに料理一品って訳にもいかんでしょう」

「それは大丈夫だ。俺もそこが気になってさ、一回夜に来て外から覗いてみたんだけど、どうも奥さんがいるらしいんだよね」

「奥さん?」

「日本人の。その奥さんが通訳してるんだ。しかも結構盛り上がってたぜ」

「へえ。夫婦立ち飲み居酒屋か……それはそれで仲良さそうで羨ましいな」

この一見人を殺してそうなほど鋭く冷徹な目つきのオッサンの奥方とはいかなる人物なのか非常に興味深いところだ。案外こういう強面な男に限って肝っ玉母さんの奥さんに尻に敷かれてたりするん

だよ、などと妄想を膨らませていると、「オマタッセー」という明らかにアクセントの位置がずれている、低く呟く言葉と共に目の前にハンバーグとポテトサラダ、そしてご飯と味噌汁の乗ったお盆が置かれた。見た目はいたってシンプルなハンバーグだが、そこは出来たて、美味そうである。

「いただきます」

私はカウンターに置いてある割り箸を一膳引っ張り出して割り、とろりと艶やかなデミグラスソースのかけられたハンバーグを挟んで切り取った。うむ、柔らかい。そのまま口へ運ぶ。

「こ、これは……」

目が見開き動作が止まる。思わず箸を落としたそうになった。ちらりと隣を見ると、龍馬がしたり顔で頷く。それはいつも家やサイゼリヤで食べるハンバーグとはまるで違うものだった。もちろん肉のジューシーさや柔らかさはある程度想像できていた。小さいとはいえ異国の地で店を構え、商品として提供するくらいなのだから。問題はその味だ。

一言で言えば複雑。微塵切りの玉葱の入ったタネは、噛むごとにその表情を変えた。香辛料だ。これまでに経験したことない様々なフレイバーが喉を通り鼻から抜ける。不思議な味。でも、一口また一口と食べるごとにクセになる味。私はいつの間にか黙々と脇目も振らずに箸を口へ運んでいた。するとカウンターに落とした視線の中に前からぬうつと褐色の右の手の平が現れた。ハッと顔を上げるとデューク中東が冷酷な視線で私を見詰めたまま口を開いた。

「オツカワリー」

もはや日本語には聞こえないオリエンタルな響きのその言葉に誘われるように、私は空になったご飯茶碗をその手に差し出した。すかさずジャーからご飯をよそい、私の前に再び置き頷いた。これまで決して交わることのなかった異国の者同士の閉ざされた心が、その殻を破り初めて分かち合い溶け合い重なり合った瞬間だった。

しかし龍馬がロリコン趣味だった

最後まで表情を崩さなかったデューク中東に手を振りながら店を出て、私はお腹を摩る。結局促されるままご飯と味噌汁を二杯ずつおかわりしてしまったのだ。体形が変わっちった。

「いやあ美味かったね。ごちそうさま」

「だろ？ あれで五百円だぜ」

「この世知辛いご時世の中、あのクオリティとボリュームのランチでワンコインとは……ううむ中東パワー恐るべしだな。で、話って何？」

「まあ歩きながらじゃ何だからよ、どっか入るか」

どっかと言えばドトールに決まっているのだ。私はホットのカフェラテ。龍馬はアイスティにガムシロップを入れている。向かい合って座りカップに口を付ける。いつ話を切り出すのかさっきから待っているが、龍馬は俯いたままストローでグラスをぐるぐるかき混ぜるだけで一向に喋り出す気配がない。私は遂に痺れを切らせた。

「ちょっとーいい加減にしてよね。いつまで黙ってる気？」

「ん？ あ、ああそうだな……あのさ、松竹って何で学校来るのに変装なんかしてたんだ？」

「え？ 梅子？ さあ、私も理由は知らない。これから聞こうと思ってたとこだけど。何で？」

「そうか……いや、まあなんつーかその、あれだよな、素の松竹って思ったより……」

「可愛い、でしょ」

龍馬が急に顔を上げ頬を赤らめる。バカなくせにいつも自信だけは

たっぷりの龍馬のこの齒切れの悪さ、そしてこの話題。もう分かってしまった。はいはいそーゆーことですか。

「へええ龍馬がねーまさか梅子にホの字とは。いやはや時代も変わったもんですなあ」

私はニヤニヤと笑みを浮かべた。

「え、あ、な、何でバレたんだ？ 岡崎お前、エスパーか？ つか今どきホの字とか言わなくねえか？」

「あのねえ、そんな態度したら誰でも分かるっつーの。しかし龍馬がロリコン趣味だったとはねえ……」

「バツカ言うなよな！ 同い年じゃねーかよ！ ……まあ見た目は確かに幼いけど」

「あの時でしょ。地下室で変装解いたとき。龍馬スッゴイ見たもんねー梅子のこと」

「そそそそんなに見てたか？」

「うん。口半開きでヨダレ垂れてた」

「マジかよ！？ しくじった……つーかさーあのギャップに完全にやられたんだよな。まさかブサイクに変装してるなんて思いもよらなかったからよ、油断してる所にすっぽりと入り込まれたって感じだな」

「ふうん。でもなー梅子の男嫌いは相当なもんだよ。どうすんの？

自分で言うのもなんだけど、実際私のことが好きなんだし。女にしか興味なかった絶望的じゃない？」

「だーかーらーそこを何とか聞き出してくれ！ ほら、中学生高校生の子供ってよ、女子高とか行っつと別に同性愛者じゃなくってもボーイッシュな先輩に憧れたりとかあるだろ？ 今の松竹も岡崎がちよっと話題になったから、憧れから何となく好きなんじゃないかと思ひ込んでるだけかもしれないだろ？ いわゆるファン心理っ

てヤツ」

「うーん、そうねえ。でも男なんか滅びればいいとか言ってるしな……」

「松竹が真の同性愛者なら俺もきっぱり諦める。でも単なる男嫌いだとしたら、俺が好きにさせてみる！」

龍馬はグツと右こぶしを握り、宣言した。その自信はどっから来るんだか。まいいか。梅子は確かに面白いヤツだけど、私に恋愛感情持たれてもそれはそれで面倒だしね。それにあの極端な男嫌いの原因も知りたいし。恐らくは玉夫のせいだとは思うんだけど。

「分かった。どっちにしても私も梅子に聞きたいことは色々あるからね。それとなく探ってみるよ」

「ホントか！？ サンキューサンキュー！ 上手く行ったらまたハングバーグ奢ってやるから！」

出会って以来過去最高の満面の笑みを浮かべた龍馬は、テーブル越しに私の両手をがっしりと握りこれでもかというくらいの感謝の意を表したのだった。

今日の私の下着の色と柄までお見通しだと考えておいた方がいい

ハンバーグとコーヒーで満たされた腹を抱えドトールから出ると、頬を上気させてぶんぶんと手を振る龍馬と別れた。まだ昼過ぎである。お天道様は燦々と頭上で輝き、アスファルトに濃い影を作りその存在感を下界の者どもに知らしめているのである。

私は約束を忘れない内に早速梅子に連絡を取ることにした。携帯を取り出して梅子の名前を探す……ない。そうだった。よく考えたら私は梅子の携帯の番号を聞いていなかった。

どうすっかな。あ、そうだ、ネチっ子なら知ってるかも。何かよく分からんがああの二人意気投合してて仲良いし。私が携帯の履歴の中からネチっ子を探し当て、通話ボタンを押そうとした瞬間、携帯が鳴りだした。びくっとしてディスプレイの番号を見詰める。名前が出ないということは登録されていないということで、これ即ち知らない相手である。私は若干の警戒心と共に電話に出た。

「も、もしもし」

「いやですわ千夏様ったら、そんなに警戒なさらなくってもいいんですのよ」

一度聞いたら忘れられない言い回し。梅子だった。

「お、グッドタイミング。つか、何で私の番号知って……って聞くまでもないか」

そう、愚問である。梅子は「岡崎千夏マニア」であることを忘れてはいけない。恐らく今日の私の下着の色と柄までお見通しだと考え

ておいた方がいいだろう。

「グッドタイミングって何かあったんですの？」

「うん、ちょっと色々聞きたいことがあってさ。今から会えないかな？」

「構いませんことよ」

「じゃあどこで待ち合わせる？」

「そんな必要はございませんことよ」

電話越しに梅子はその言葉を言い終わったとき、私の歩く道の前方10メートル辺りで、電話を耳に当てながら手を振る少女の姿が確認出来た。あの背の低さと髪のは長さは梅子に違いない。

「あれ、梅子も池袋にいたんだ。奇遇だね」

電話を切ろうと耳から話した瞬間、携帯から大きな声が飛び込んできた。

「千夏様、前じゃありませんわ。後ろですわ！」

「え？」

その声に振り返る。するとたった今前方で見たのと同じ姿の少女が、同じ様に私に向かって手を振っていた。これは一体どういうことだ？ 訳が分からずにいると、再び電話から声がした。

「違いますわ！ 前にいるのが本物ですことよ！」

もう一度前を向く。前方の梅子はさっきよりも私との距離を縮めていて、確実に梅子と判断できた。やっぱりこっちが本物か……するとまた電話から声がした。

「騙されてはいけませんことよ！　後ろが本物の梅子ですわ！」

後ろの少女もまた電話をかけながら私に近付いてきており、こちらもやはり梅子にしか見えない。先程食べた中東ハンバーグに含まれる香辛料で、幻覚を見るようになったか……私は歩道を歩くのを止め、建物の壁際まで後ずさりし凭れかかった。右からも左からも梅子が攻めてくる。前門の梅子、後門にも梅子、である。

遂にダブル梅子は至近距離まで迫って来た。するとそれぞれが左右の手を取り、歩道の真ん中に私の身体を引っ張り出して、私を中心にスコットランドの伝統的ダンスっぽくぐるぐると回り出した。目が回ってきて、元々二人だった梅子が分身の術を使った甲賀忍者の如く、今では十六人くらいに見える。

色んな意味で段々と気持ち悪くなってきたので、私は二人の手を強引に振りほどき、その場に蹲った。見上げると、エナメル厚底ブーツに、膝上十センチくらいまでのちよいエロな感じの黒のストッキング、スカートの裾がやけに広がった、肩ひもノースリーブひらひらブリブリの黒いロリータワンピースを来た、腰までありそうなどストレートな黒髪のゴスロリ梅子ズが満面の笑みで立っていた。

「ふ……双子だったのね……」

せり上がる胃液とハンバーグとノンシュガーのカフェラテを辛うじて抑えつつ、私はそれだけの言葉を口にした。そうか。梅子は双子だったのか。まあ双子だったとしても別段驚くに値しないが、あの梅子がもう一人いるのかと思うと何だかちよっと怖くなった。

姉もしくは妹が梅子に負けず劣らずの、更に変テコで強力な特殊能

力を備えていたらどうしよう。私の、いえ日本の、いえ世界の未来に甚大なる悪影響を及ぼさなければいいのだが、と一抹の不安が脳裏をよぎる。すると、前に立った梅子ズは大口を開けて爆笑し始めた。

「いやですわ千夏様、双子だなんて」

左の梅子が言う。

「千夏様、私に姉妹はいませんことよ」

右の梅子が言う。

「え、じゃあこっちの梅子は……誰？」

言葉の内容からすると、どうやら右側の梅子はこれまで私が接してきた梅子と見て良さそうだ。じゃあ左側にいるこの少女は誰なんだ？ ハテナマーク一杯で問い質す私を、さもおかしそうに見詰めながら右の梅子が答えた。

「母ですわ」

「母って……えええ！？ おかかか母さんってこと！？」

マジデスカ……この二人、確かに多少のメイクは施してはいるものの、どこからどう見ても双子にしか見えん。ちょっと待てよ、お母さんってことは、最も若くて何歳だ？

ええと我が国日本における女子の最低結婚年齢は十六歳。十五でやっちゃって十六でデキ婚とすると、梅子が現在十五だから……三十一歳か。えええ三十代！？ 最低でも三十一なの！？ うそお……

いやいやいや違う。違うわよ千夏。梅子には玉夫という兄貴がいるのを忘れちゃダメよ。玉夫が高三だったかな？ とすると十七か十八。十七歳としても三十三……あ、有り得ない。こんな三十三歳。

あまりの衝撃に、通行人の向ける奇異な視線に構うことなく跪いたままアスファルトの地面に指で計算を始めた私を見兼ねて、梅子が苦笑いながら答えを言った。

「母は三十七ですわ」

なっ……高校一年生と言っても完全に通用するゴスロリママ三十七歳……ショック！

「娘がいつもお世話になっておりますわ」

テーブルを挟み、向かって左側に座る梅子ママが私に頭を下げた。私たちは今ドトールにいる。梅子ママが「せっかくだから三人でお茶でも飲みましょう」と提案してきたのだ。私はこの店を出てから三十分と開けず、再び戻ってくる形になってしまった。注文の際、レジの店員が、「あらまたいらしたんですね」的な頬笑みを向けてきたが、これでも泣く子も黙る現役バリバリJKだし奢りなので気にしないことにする。

「いえ、こちらこそ。それにしても何でまた同じ格好なんですか？」

これが今流行りの「友達親子」か。母親が若くて可愛らしいのは大いに結構なことだが、何も格好まで同じにすることはないのである？

「これからイベントがあるんですのよ」

ブレンドコーヒーを飲みながら、梅子ママが言った。

「イベントって、そのー何ですか、コスプレ大会というかミスコンみたいなやつですか？」

コスプレとかアキバとかそっち方面には疎いのでよく分かんが、ゴスロリのイベントって言うくらいだから、全国津々浦々、ゴスロリファッションの少女がどっかのホールに一堂に集結して、「ゴスロリ・オブ・ジ・イヤー」もしくは「ミスゴスロリ、略してミスゴス」でも決めるに違いない。審査員長は日本が世界に誇るカリス

マゴスロリトップモデル「ラスクちゃん（年齢非公開）」が務める。

「あら千夏様、違いますことよ」

脳内でラスクちゃんの容姿や服装をあれこれイメージしていると、右側でオレンジジュースをストローで飲んでいる梅子が口を開いた。

「イベントって言ってもそんな大袈裟なものではございませんわ。まあ説明するより見て頂いた方が早いと思いますわ」

「そうね。折角だから千夏様もご覧になって下さいな」

この二人声までそっくりだー。トイレに立った隙に入れ替わったら、見分ける自信ないぞー。つかお母さんまで「千夏様」っていうのは勘弁して欲しい。

「でもさ梅子、何で私が池袋にいらって分かったの？」

「そんなの決まっていますわ。千夏様のスケジュールは全て把握していますもの」

梅子は水滴の付いたグラスをテーブルに置いたままストローを銜え、上目遣いで私を見る。そのロリロリな瞳にぞくつとする。女の私でさえこれだ。今の龍馬が見たら、感情が一気に爆発してあっちこっちで色んなモノが暴発して身悶えるんだろうな……

「というのは真っ赤なウソですわ。私と母は、毎日曜日になるとこうしてイベントの為に池袋に参上するのですわ。そうしたら偶然千夏様を見付けたもんですから、ちよつと驚かせて見ようと思っただけですことよ」

なーる……しかし気になるのはそのイベントの内容だが、まあ二人

について行けば分かるだろう。

ドトールを出ると、梅子と梅子ママは芸術劇場へ向かって歩き出した。そして建物の前の広場に来ると、二人手を繋いだまま、大きく円を描くようにゆっくりと歩き始めた。最初は私も二人の後についていたが、どうやらイベントが行われるのはこの場所のようだったので、少し離れたところで立って眺めることにした。やがて二人は手を離し、一人は立ち止まり、もう一人はそのまま弧を描き続け、対角線上、つまり円周の中心を挟んだちょうど反対側で立ち止まった。

二人は軽く頷き、それが合図となって再び歩きはじめる。初めは描く円の直径が10メートルほどだったのが、二人はお互い緩やかに螺旋を描くように歩いていたので、徐々に円は小さくなりつつあった。辺りを見渡すと、いつの間にかちらほらと人影が現れ、二人に釣られるように集まって来ている。遂に二人の描く螺旋は終点を迎え、一点に収束し、円の中心で立ち止まった。そして十数人の観客に向き直ると、手の動きを付けて恭しくお辞儀をした。

ははあ、なるほど。イベントって言うよりは大道芸もしくはストリートパフォーマンスってわけね。ここで毎週日曜日のこのくらいの時間にやっているから、知っている人は知っている。そして二人のファンになった人はパフォーマンスの始まりを待っているってわけか。円を描いて歩くのは始まりの合図といったところだろう。私もその観客の一員として、人垣に紛れることにした。

ぴったり並んで深々と頭を下げた二人はようやく頭を上げると、そのまま座り、脚をこちらに向けて地面の上に仰向けの格好で寝てしまった。一体何が始まるんだろうか？ 大道芸だったらジャグリン

グとか風船でプードル作ったりとかだよ。あの格好だから歌って踊ったりするのかな。それならラジカセとか楽器とか音の出る物が必要だと思っただが。どっちにしても道具の類は一切ない。身体一つで出来る何かだろう。

じっと注目していると、二人は同時に上半身を起こした。そして少し首を傾げて大きく口を開け、両手を上に伸ばした。どうやらベッドから起きたところを演じているようだ。なるほど。パントマイムか。すると二人はお互い首を回し、相手の顔を見た。そしてお互いが自分のほっぺたを摘まんだり、にっこり笑ったりと色んな表情や仕草をし始める。

驚くべきは、その細かい表情や仕草が、二人とも寸分違わぬタイミングで展開されていることだった。そこでようやく理解した。つまりこれは鏡合せを演じているのだ。並んだ二人の真ん中に鏡があると想定して、左右反転の動きを同時に行うのだ。なるほど。これで梅子と梅子ママが全く同じ格好をしている理由が分かった。

二人はベッドから起き出して、何もない空間で、至近距離で向き合ったまま、顔を洗ったり歯を磨いたり、着替えたりしている。どうやら出かける支度をしているようだ。パントマイムその物の精度は素人っぽさが抜けな感が否めないが、動作のタイミングが完全に合っているし、何といっても一卵性双生児顔負けなほどそっくりなので、思わず見入ってしまう。もはやどっちが梅子でどっちがママなのかは私には判断しかねる。というか、他の見物人は双子だと思い込んでいるのではないだろうか。

やがて二人は家を出て、道を急ぐようにその場で走る動作をした。時々腕時計を見るジェスチャーをする。大変、このままじゃ電車に乗り遅れて遅刻しそうだ、という状況だろう。すると突然左側の梅

子が立ち止まり、腰に手を当て額の汗を拭い「やれやれ」という仕草をした。右側の梅子は一生懸命走り続けている。右梅子が走る中でちらりと「鏡」に目をやると、左梅子が可愛らしく舌を出して「あ、まずい」という顔をして再び走り始める。そこでくすくすと笑いが起きた。

ははあ、つまりこういうことか。右側が現実の少女で、左側が鏡の中の少女。そして鏡の中の少女は、現実の少女よりも怠け癖があって、動きが大変なときや疲れそうなことをしているときは、右梅子の目を盗んでサボる。それをコミカルに可愛らしく演じるというのがこのパフォーマンズなのだ。

アキーバコスプレイヤー

朝の通学時なので、当然満員電車だ。少女は背中を押されながら何とか乗り込み、必死の思いで吊り革に掴まり身を振らせて窮屈さに耐えている。揺れる電車で身体の向きが変わったとき、左梅子は再び「やれやれポーズ」をして、あろうことか座席に座っている人を立たせて自分が座り、更に鞆からウォークマンを取り出して耳に当ててノリノリで聞き始めた。

再び電車が揺れて、右梅子の態勢が変わり、鏡の方に顔が向きかけると、左梅子は急いでイヤホンを外して立ち上がり、気付かれる前につり革に掴まって、右梅子と同じしかめっ面をして、窮屈な態勢に戻った。鏡の中の左梅子の、バレないように戻るタイミングと表情が何ともキュートで笑いを誘う。

右梅子は鏡の中の自分の様子が何だかおかしいな、と首を傾げつつも電車は止まり、駅を降りて学校へ向かう。どうやらこのまま高校生的一天を演じていくようだ。

学校に着いて授業が始まると、いよいよ左梅子のサボりはエスカレートする。右梅子はきちんと授業を聞いてノートを取り、先生に当てられたら立ち上がり答えているのに、左梅子は隙あらばメールをしたりマンガを取り出して読んだり、果ては居眠りまでしている。体育の授業の、校外を走るマラソンでは、スタートとゴール付近だけ必死に走る振りをして、途中はコンビニに寄り道し、雑誌を立ち読みする始末。

そのくせお昼休みになり昼食の時間になると、鏡の中の左梅子は、隙を見ては右梅子のお弁当のおかずを盗み食いするのだった。左梅

子の身勝手すぎる行動に気付き、遂に切れた現実の右梅子は、鏡の中へ入り込んで、左梅子と大喧嘩を始めてしまう。立ち位置を入れ替わり立ち替わりしながら激しく言い争っている内に、どっちがどっちだか分からなくなってしまう。

そして最終的に鏡から出てきたのは、「左梅子」で、結局ずばらな左梅子が現実の世界の少女となり、真面目な右梅子は鏡の中から出られなくなってしまい、悔しさのあまり地団太を踏んでいるのだった。そこでパフォーマンスは終了した。

二人が再び手を取り合って、深々とお辞儀をすると、いつの間にか最初の二倍くらいに膨れ上がった見物人からはやんややんの拍手喝采だった。梅子と梅子ママは頭を上げると、半円状になって見ていた見物人の両端にそれぞれ近付き、スカートの裾を持ち上げて投げ戦を受け取っていた。

キュートでコミカルな内容だったが、音楽や効果音やセリフが一切ないせいか、とても不思議な世界だった。見物人の中にいたアメリカ人観光客と思しき一団は、「ブラボー!」「アキーバコスプレイヤー!」を連発し、二人と握手をしたり、一緒に写真を撮ったり着ているTシャツにマジックでサインしてもらったりしていた。

ステージが終わった後、未だその空間に残る和やかな空気の中、私は感動のあまりしばらくその場に立ち尽くしていた。やがて全ての見物人が散り散りに去って行くと、梅子と梅子ママは私の下へ近寄って来た。

「千夏様、いかがでしたか?」

「いや、凄かった。まじで。面白かった。感動した」

私は二人の手をそれぞれ取り握手した。

「まさか梅子にこんな特技があっただなんて」

目の前の二人はにこにここと笑ってお互いの顔を見ている。もはやどっちがどっちか分からない。

「では梅子、帰りましょうか」

右の少女が言った。こっちがママか。

「そうですわね……あ、そういえば千夏様、私に何か用があったのではございませんこと？」

お、そうだった。今のパフォーマンスですっかり頭の中からすっ飛んでしまっていた。

「あらあらそうでしたのね。でしたら折角ですから私たちの家に行らっしゃいませんか？ お部屋でゆっくりとお茶でも飲みながらお話したらいいですわ」

ママが言った。

「あーでも……突然お邪魔したらご迷惑じゃないでしょうか」

そのとき私の脳裏にはネチっ子の言った、「隙間風の入る六畳一間の風呂なしアパートに住んでいる」という言葉がよぎっていたのだ。別に良いんだけどさ。どんな所に住んでいようとかさ。この親子楽しそうだしね。でも、生活費を稼ぐためにこのパフォーマンスを行っているのだとしたら……そう思うとちよっぴり切なくなった

りするわけですよ。

結局私は「松竹家のお宅訪問」をきっぱりと断り切れずに、ずるずると二人の家にお邪魔することになった。

日曜昼下がりの池袋駅構内はもろんたくさんの人が行き交っている。そんな中、双子かと見紛うばかりのゴスロリ美少女を両隣りに配って歩く私は、当然注目を集めてしまう。でもまあ都会だからね。こういう女の子も時折見かけるしね。

梅子たちは私を西武線の改札口の方へ引っ張って行く。そう言えば梅子ってどこに住んでるんだろ？

「どこまで買えばいい？」

私は券売機の上の路線図を見ながら梅子に聞いた。

「航空公園ですわ」

「へえ、そうなんだ。ってことは所沢の次だから……330円か」

バッグから財布を出し、小銭を取り出そうとすると、隣にいたママがそれを制した。

「ここは私が払いますわ」

梅子ママは先程のパフォーマンスで得た、ビニール袋に入ってたままの小銭をじゃらじゃらと取り出した。

「でも、さっきもコーヒーご馳走になりましたし……それに」

ここでも隙間風の入る六畳一間の風呂なしアパートが脳裏に浮かぶ。更に、父親の仕事の失敗による家庭崩壊も重なった。たかが電車代330円といえど、貴重なお金に違いない。しかし。

「いいんですことよ千夏様。私たちがご招待するのですから」

反対側から梅子がママに加勢した。結局押し切られる形で、交通費を出して貰ってしまった。若干心が痛む。

世界平和と全人類平等を目指す私たちの崇高で愛に満ち溢れた精神

西武池袋線の急行に乗り、いつも下りる椎名町を通り過ぎる。所沢に着いたところで、西武新宿線に乗り換えて、一駅目が航空公園だった。改札を出ると、視線の先に緑の芝生の大きな公園が広がっている。

「これが航空公園か」

未開の地に足を踏み入れ、感慨に耽っていると、すかさず私を呼ぶ声がした。

「千夏様、こっちですわ」

どうやらゆっくり公園を眺めさせてはくれないらしい。私は先を歩く二人について行った。団地の間を通り、団地付属の小さな公園を抜け、あとはひたすら線路際を歩く。踏切りが近付いたところでママが立ち止まった。

「あそこのパン屋さんのゴマ団子、美味しいんですよ。千夏様にも是非食べて頂きたいですわ。ちょっと寄ってみましょう」

線路の向こうに見える、小さなパン屋を指差しながら、梅子ママは踏切を渡り始めた。いやそんなお気遣いは無用ですってお母様、ゴマ団子よりも生活費に回して下さいな……そんな私の切なる願いも空しく、梅子ママは「人気があるからすぐに売り切れてしまうんですのよ。まだ残っているといいんですけど」と言いながらパン屋へと足を踏み入れてしまった。

「お、本当だ。私、初めて食べたけど美味しいですね、このゴマ団子」

「でしょう？ 良かったですわ。気に入って頂けて」

そう言って梅子ママは私に緑茶を淹れてくれた。梅子は隣の部屋で着替えている。

梅子の家は西武線の線路沿いの、全四世帯の二階建て木造アパートの二階だった。中に入ると家具や家電類は必要最低限しか置かれていなく、女性の二人暮らしとは思えないほど質素だった。ただ、ネチっ子の情報とは違い、六畳と四畳半の和室に、台所、そして風呂もトイレもあったので安心した。まだ九月半ばで暑く、窓を開けているので、隙間風に関しては分らないが。

「それにしても何でああいうことをやろうと思ったんですか？」

私は先程の二人のパフォーマンスのことを聞いてみた。

「ただの暇潰しですわ」

ゴスロリワンピースを脱ぎ、ジーンズとTシャツというラフな格好に着替え終わった梅子が勢いよく襖を開けてそう答えた。

「え、そうなの？」

暇を潰す程度にしては随分と内容が凝っている。練習だって相当積みまなければあのシンクロナイズな演技は無理だろうことは容易に想像が付く。すると梅子は、年代物の卓袱台の前に座ってゴマ団子を齧りお茶を啜る私の隣に、ぺたんと座りにつこりと微笑んだ。

「というのは冗談ですわ。千夏様、シェーカーってご存知ですか？」

梅子はお皿に盛られたゴマ団子の一つ摘み上げて私に尋ねた。

「シェーカー？　ってあのバーテンダーが使うヤツ？」

私は両手を組み上に上げて手首を振り、カクテルを作るバーテンダーの真似をした。

「違いますわ。一八世紀後半から一九世紀後半にかけて、アメリカで発展した共同体ですわ。元々はクエーカー教だったのですが、マザー・アン・リーという人物が率いて分離し、理想郷を作るためにアメリカに渡ったのが始まりですの。俗世間から離れて、完全なる自給自足生活を目指し、男女平等、独身主義、禁欲、勤勉、質素を貫いて共同生活を送ったのですわ。シェーカー教徒は、食べる物だけでなく必要な物は全て自分たちで作ったのですわ。その中でも有名なのが家具。今、日本でシェーカーと言えば、一般的には家具のことを指すんですよ」

梅子はそう言うと、本棚から一冊の大きな本を取り出して正座をして自分の太腿の上でページを捲った。

「便利さを排除し、厳格で質素な生活を志した彼らの精神は、家具や建築の様式にも見事に反映されているのですわ」

ページを広げたまま梅子は、大きく重い本を私に手渡した。開かれたところには、無駄を徹底的に排除したことが一目で伺える、太った人が座ったら折れてしまふんじゃないかと思えるほどの細い丸材

の組み合わせで出来た、木製の椅子の写真が写っていた。

「シェーカー家具の中でも特に有名なのがその椅子ですわ」

「へえ、可愛いね、これ」

塗装も木本来の色を活かした最低限のものに止められている。シンプルではあったが、格子状に編まれた座面と、長い背凭れの上に乗っかっている、二つのラグビーボールのように形取られた部分が、全体の表情を柔らかい物にしていた。ぱらぱらとページを捲る。更に背凭れの長い椅子や、二人掛けの椅子、やはり脚が細いテーブルや、小物入れのような物まで、色々な写真が載っている。どれも簡素なものだけど、全体的にやっぱり可愛い印象だ。小さめのテーブルなんかは、私の部屋にも是非置いてみたいところだ。

「で、これとあのパフォーマンスと何の関係があるの？」

「早い話が人集めですわ」

背後からの声に振り向くと、いつの間にかブラウスとジーンズに着替えていた梅子ママが立っていた。しかし、その姿に啞然とした私。

「か、髪が……カツラだったんですか!？」

なんと梅子ママショートヘアだったのだ。またしてもカツラである。カツラ親子である。私の反応を見て、うふふと楽しそうに笑い、卓袱台の正面に座る梅子ママ。でもこれでようやくどっちがどっちか見分けが付くようになった。

「人集め？」

「そう。私たちの目的はシェーカーのような、完全なる自給自足によるコミュニティを作ること。そのためにはまず、人を集めなければ

ばならない。ですからああやって毎週同じ日時にイベントを行っているのですわ」

梅子ママもゴマ団子を頬張った。

「でも、コミュニティを作るってことは、要するにそれに共感してくれる人間が現れないと意味がないですよね？　あのパフォーマンスを続けていても、確かに人は集まるかもしれないけど、ただの見物人で終わっちゃうんじゃないですか？」

すると二人は顔を見合わせて、難しい表情を作った。

「そうなんですわ……いくら人を集めても、私たちの趣旨を理解して頂かない限りは意味のない行動で終わってしまう。それは分かっているのですが、かといってあの場でいきなり冊子のような物を配布しても逃げられてしまいますでしょう？」

梅子ママが湯呑茶碗を見詰めながら呟くように言った。まあね。通りすがりで大道芸を見に來ただけなのに宗教の勧誘されたらドン引きは必至だよね。するとその後を梅子が引き継いだ。

「そこで千夏様の登場なのですわ。一躍時の人となり、圧倒的なカリスマ性を持つ千夏様が一声かけて下されば、あつという間に何千人何万人と集まることうけあいのですわ。それは既にTO教に集まった信者たちで証明済みのこと」

「それはそうかもしれんけど……いやでもさすがに私如きで万単位の人間が集まるとは思えないが……つかさ、結局さ、ちよつと話題になった私を広告塔として利用するんでしょ？　それだったら梅子のやっтерることって玉夫と結局変わらないんじゃない？」

言い終わるや否や、二人同時に身を乗り出して叫んだ。

「全然違いますわ！」

二人とも私に掴みかからんばかりの勢いである。圧倒された私は、堪らずそのまま背中から畳の上に倒れ込んだ。

「あんな拝金主義の自己中心の塊の強欲な男と世界平和と全人類平等を目指す私たちの崇高で愛に満ち溢れた精神とを一緒になさらないで！」

卓袱台に覆い被さり、とうとう私の胸ぐらを掴んだ梅子ママがさらに叫ぶ。ころんころんと湯吞が転がり畳の上に落ちた。お茶は飲み干していたので畳はそれほど汚れなかった。あんな男って、あんたの息子でしようが。随分な言いようだな。

「で、でもさ、梅子私と会ったとき言ったよね？ 『自分は世界の支配者になるべく生まれてきた』って」

ママに掴まれたまま、隣の梅子を見上げる。すると梅子はふい、とそっぽを向いた。

「記憶にございませんことよ」

何なんだよこいつ……

「千歩譲って仮に私がそのような発言をしたとしても、それは千夏様の気を引くために、仕方なく言ったこと。決して本心ではございませんことよ」

いーや、忘れはしないぞ。お前のあの時の眼は本気で支配者を目指してた眼だ。

「あ、ちなみに玉夫は前夫の連れ子であって、私の実子ではございませんことよ」

いきなり手を放し、冷静さを取り戻した梅子ママが言った。

「もちろん梅子はお腹お痛めて産んだ子ですけど。おほほほ」

何がおかしい……っかそんだけそっくりで血が繋がってなかったら世界七不思議に認定できるっつの。

好きな梅子と結婚できてもエッチは一切なし

何だか変な空気になって来たので残り一つのゴマ団子を口に入れてお茶で流し込み私は早々に松竹家から退散することにした。結局龍馬に頼まれた件は何一つ解決していないが、まあ別に超特急な要件でもないから日を改めて確認すればいいだろう。あ、ブサイクな変装のことも聞くの忘れちった。

それにしても梅子と玉夫、血は繋がっていないし、方向性も真逆とは言え、兄妹で宗教作りたい願望があるだなんて。一体全体どういう家庭環境に身を置けばああいう風に育ってしまうのかな。

私は「駅まで送りますわ」という梅子の申し出を断り、一人航空公園駅に向かった。ホームへの階段を降りると、ちょうど到着した電車に乗って考える。梅子ママは普段何をしているんだろうかと。まさかあのパフォーマンスの上がりだけじゃ、高校生の娘を抱えての生活は厳しいだろう。仕事に失敗した夫からの慰謝料や養育費なんて当てにできないだろうし……うーん、やっぱり謎多き母娘だな、あの二人は。

全人類平等コミュニティか。本気なのかな……本気っぽいな……万が一龍馬が梅子と付き合ったとしたら、自給自足コミュに強制参加か。となると毎日農作業で家具作りか。その上禁欲主義だから、せっかく好きな梅子と結婚できてもエッチは一切なしか……拷問だな。でもま、長い人生それもまた一興か。頑張れよ、龍馬。

所沢で西武池袋線に乗り換える。ぼーっとしてたらいつの間にか終点の池袋に着いていた。改札を抜けると目の前に西武デパートがあ

ったので、私は久し振りに覗いていくことにした。エスカレーターに乗って上の階を目指す。家具売り場に寄って、さっき見せてもらったシェーカーの家具が置いてあるかどうかを確認するためだ。

シェーカー教徒の提唱していた禁欲、勤勉辺りは私にはとても実践できそうにないが、彼らの作った家具を見るぐらいならバチは当たらないだろう、とぐるぐるぐるぐる家具コーナーを隅から隅まで回ってみたが、残念ながらあの可愛らしい椅子やテーブルはどこにも見当たらなかった。きつと一般的なお店では売ってないのかもしれない。

次の月曜日、いつものように学校に行く。二学期が始まってすぐ、色々な濃い出来事があり過ぎて一気に時間が過ぎたような感覚だったが、実際はまだ九月の前半だったりする。椎名町の駅で梅子が待ち伏せしているのかと思ったが、以外にもその姿は見当たらなかった。あんだけべったりとくつついていたモノがいきなくなっって、ホッとした半面、ちよつと寂しくもある、プチアンビバレントな心境で校舎へと歩いた。

「おはよー」

「おう！」

「オナさんおはよう」

教室に入るとお馴染みの龍馬とネチっ子の顔があった。私は今、校内を歩いていると、若干のチラ見をされる程度には注目されているものの、廊下で取り囲まれたり握手してーとかサインちよーだーいとかいきなり写メ撮られたりとかそういった芸能人的な扱いはされなくなっていた。これでようやく再び普通の学校生活が送れるのね。良かった良かった、とほつとして席に着くと、龍馬が近付いて来て

耳元で囁いてきた。

「で、どうだった？」

どうだったとはモチのロンで梅子のことだろう。しかし昨日は収穫ゼロだったからな。

「あーそーそーね、えーとね、昨日は話できなかったんだ。何回か電話したんだけど連絡つかなくてさ」

ばやかした答えで誤魔化すと、龍馬は「そうか……」とがっくりと肩を落として着席した。その姿を不思議そうに、だがしかし、にまにましたまま眺めるネチっ子。この男のことだ、もしかして龍馬の氣持に氣付いているのかもしれないな。

あ、そうだ、三十七歳のママが梅子と瓜二つとか毎週日曜日の昼下がりに芸術劇場前でゴスロリファッションに身を包みパフォーマンスしてるとか世界平和と全人類平等を目指してコミュニティ作るために会員募集中とか玉夫とは兄妹だけど実は血は繋がっていないかったとか、とりあえず入手した情報を教えてあげた方が良いのかな……と腕を組んでいると、

「酷いですわ千夏様！」

聞き覚えのある声と共に椅子に座る背後から唐突に抱きつかれて、その勢いで前にのめり、額を机にしこたまぶつけた。

「いっ……ってーだろーが！」

私は上半身を起こし身体を右に捻り、振り向きざまに右手をグーに

して裏拳をお見舞いしようとしたが、私の拳は空しくも空を切った。梅子は私の攻撃を察知して後ろに飛び退いたのだった。

「先に行ってしまうだなんて。駅でちょっとトイレに行ってただけですのよ」

「知るかつっ!」

やっぱ鬱陶しいな、こいつは。しかも再びブサイクな変装に戻ってるし……チラリと龍馬に目をやると、何か話しかけたそうに口を半開きになっているが、結局何を言っているかわからず梅子の顔を見つめるばかりだ。

痛い上に早速盛り上がりすぎて来てたんこぶ生成中な予感。このキュートな顔に傷跡が残ったら火炙りの刑にしてやるからね……お、そう、この際だから今聞いてしまえ。

「ねーねー梅子ってさ、何でブサイクに変装してるわけ?」

私は教室にいる周りの生徒達に、ギリギリ聞こえるか聞こえないくらいの絶妙な大きさの声で梅子に聞いた。龍馬とネチっ子が興味津々で梅子の顔を見ている。まさかこんな所でそんな質問をされるとは思ってもみなかったのだろう、梅子は珍しく驚いた表情で、周りに聞かれていないかきよろきよろし始めた。

「そ、そのような質問にお答えする義務はございませんことよよよ。さささーとそろそろ授業が始まりますわね戻らないと……」

梅子は動揺を隠せずこない動きで私たちの傍を離れ、教室から出ようとする。私は立ち上がり追いかけて背後から右腕を取り、左腕で梅子の首をホルド、右手を腕から放し、そのまま頭の天辺に

持って行き、手の平でぱっつんなカツラをがっしりと掴む。そして耳元に唇を寄せて妖しく囁いた。

「言わないとこの場で取るわよ、ヅラと出っ歯」

「わ、分かりましたわ」

ようやく観念したのか梅子は私の腕を振り解こうと抵抗するのを止めた。

「実はですね……」

そう言いかけたとき無情にもキンコンカンコンとチャイムが鳴り響く。その音に思わず力を緩めてしまった。

「あ」

一瞬の隙を突いて梅子は私の腕の中からずりりと抜け出ると、そのまま教室から出て行ってしまった。ち、すばしっこい奴め。

これはもう、テロリスト級の文書偽造工作で

その後梅子は休憩時間になっても私たちのクラスに姿を現さなかった。尋問されると思い警戒しているのだろう。仕方ないので昼休みになると、私たち三人は梅子の教室に乗り込んだ。そして一人最後列の隅の机で隠れるようにお弁当を食べようとしている梅子の両腕をネチっ子と龍馬がそれぞれ掴み、私は弁当と水筒を持ち、喚く梅子の口を押さえつつそのまま屋上へ拉致敢行。

「べ、別に大した事情じゃございませんことよ。ちよつとしたファッションですわ」

「嘘つけよ……」

私は梅子の制服のポケットから発見した学生証を見て唾然とした。学生証の顔写真もブサイクバージョンなのである。ということはこの学校に来るときは、必ず変装してこなければならないということだ。完全に身分詐称である。まさかパスポートもこの顔じゃないでしょうね……そんなこととしてたらこれはもう、テロリスト級の文書偽造工作である。

「本当のこと言わないとこのお弁当食べちゃうわよ」

私は龍馬とネチっ子に掴まれて動けない梅子の目の前で、弁当を広げた。唐揚げやタコさんウィンナー、塩鮭に煮物と色とりどりのおかずの豊富さに加えて「人のお弁当」ということもありとっても美味しそうだ。

「わ、分かりましたわ。言いますわ」

私たちの執拗なまでの追及に折れた梅子はようやくその真相を語り始めた。

「実は中学生の頃に、男に付き纏われていたのですわ」

「まじかよ……」

龍馬がすかさず反応する。

「母が」

「え？」

今度は龍馬だけでなく私とネチっ子もすかさず反応した。

「つまりお母さんがストーカー被害に遭ってたってこと？」

梅子は頷く。

「ちょっと待てよ。松竹のお母さんが追いかけてたからって、松竹自身にはあんまり関係ないんじゃないのか？」

龍馬が口を挟む。梅子と梅子ママの、一卵性双生児をも凌ぐそっくりさん振りを知らなければ当然の発言か。やっぱりさつき教えてあげればよかったかな。というか、よくよく考えれば、たとえそっくりでなくても娘の居場所が分かれば必然的に親の居場所も分かるでしょうが。やっぱバカだな。梅子はそんな龍馬を無視し、質問には答えない。そして意外なことを言った。

「相手の男の正体ははっきりしているんですのよ」

「え？　そうなの？」

今度は私が口を挟む。

「元父親ですわ」

「お父さんが……ストーカー……ってこと？」

私の言葉に頷く梅子。それはなかなかショッキングな事実だ。龍馬も同情していることをアピールするために、精一杯の驚愕の表情を浮かべている。

「経済的破綻により家庭を崩壊へと導いた張本人である元父親は、離婚後一切私と母には近付かないという約束をしたにもかかわらず、あっさりとそれを反故にしてしまったのですわ。母と私の住んでいる場所を探し当てると、毎日のようにアパートに現れたのですわ。気持ち悪いったらありはしませんことよ」

梅子は顔をしかめ、吐き捨てるように言った。

「よっぽど未練があったのかもね……お父さん」

一応フォローっぽいことを言ってみる。まあ確かにあれだけ若々しく可愛らしい奥さんなら傍にいて欲しい気持ちも分らないではないな。

「あの男から逃れるために、その後アパートを転々としたのですわ。全くいい迷惑ですわ」

「警察に相談しなかったのか？」

再び龍馬が発言。惚れた女の深刻な悩みだ。ここは男を見せないとな。頑張れよ。しかしそんな龍馬には目もくれず話を続ける梅子。せめて彼の顔ぐらい見てやっておくれ……

「あの男はアパートの前に現れるだけで、執拗に電話してくることもないし、部屋を訪ねるでもなくただひたすら外から眺めているだけ。実害がないので警察はまともに取り合ってくれませんでしたわ。三度目の引っ越しでようやく諦めたのか、あの男が現れなくなったのですわ」

「お、良かったじゃねえか。やっと平和が訪れたんだな。じゃあもう変装する必要はないんじゃないのか？」

何回無視されても喰らいつく龍馬の直向きさに、打ちのめされて何度リングに沈もうとも立ち上がる明日のジョーの姿が重なり、私は段々泣けてきた。ネチっ子はずっとにまにましたまま傍観している。

「千夏様はご存じのように私と母は瓜二つの顔。いつまたあの男が私たちの居所を突き止めて姿を現すかも知れませんか。ですので一応用心のためこうして変装して学校に来ているのですわ。母ももちろん出かけるときは変装していますわ」

そうだったのか……あの極端に物が少なく、質素過ぎる部屋は、何度も引っ越しを余儀なくされ、そしてまた現れるかもしれないお父さんからすぐに逃げられるようにする為だったのか……ああ、ゴマ団子を買ってくれた梅子ママのあの可愛い笑顔の裏にはそんな切ない悲しみストーリーが隠されていたのね。私の涙腺は更に緩み、目に涙が溜まり始めてきた。

「で、でもさ、あんな目立つ場所でパフォーマンスしてたらまた見付かっちゃうんじゃない？」

ストーカー紛いの元父親に居所がバレてしまうリスクを冒してなお成し遂げたいほどのことなのだろうか。その世界平和&全人類平等

は。

「岡崎、何だそのパフォーマンスってのは？ 聞いてないぞ」

今良いところなので今度は私が龍馬を無視した。ここに来て龍馬は女子に無視されっぱなしであるが、男の子だからそのぐらいは我慢しなければならぬのだ。

「あれは止めるわけにはいきませんわ。私たちの使命ですから。それに、家から出るときはもちろん変装していますし、直接池袋には行かずに一度有楽町で降りてからあの格好に着替えて、それから池袋に向かっていくのできつと大丈夫ですわ」

そこまでして……そうか。兄貴は拝金主義の塊の上、危険思想の持ち主だし、父親はストーカーになっちゃうし、そりゃあ男嫌いにもなるよね……と、悲しく辛い過去があるにもかかわらず、理想に向けて突っ走る梅子の姿を目の当たりにして、私の目からはとめどなく涙が零れ落ちるのだった。

「だ、だけど……ひっく、き、昨日はさ、あの後……ひっく、き、着替えないでそのまま帰った……よね？」

たまたま着替えを忘れてただけだよ。それにもう最近はストーカーされてないって言ってたからね、きつともう大丈夫なんだよ。お父さんだってさ、そんなことばかりやってても仕方ないって気付いたんだよ……すると梅子は切なさ感動胸一杯状態の私を冷ややかな目で見て一言、「ちっ」と舌打ちした。

一瞬自分の目と耳を疑った。何でこの状況で舌打ち……あ、そうか。そうだよ、私みたいに日々ソルフェージュばかりやってのほほん

と暮らしてる人間に、下手に同情とかされたらそれは気分悪いよね。ごめんね梅子、でもきつと私たち上手くやっていけるよ。仲良くなれるよ、そんな気がするの……

「疲れましたわ。もう」

「そうだね、疲れたよね。いいんだよ、これからは私に出来ることがあったら何でも言ってみて……」

「冗談ですわ」

「相談にも乗るから……ん？ 冗談って？」

「だから、今のお話。ちよつとしたリップサービスですことよ」

リップサービス……梅子の言ったことが今一つ飲み込めない。冗談ってことは、えーと。

「あのお、それはひょつとして、嘘ってことでしょか？」

恐る恐る聞いてみる。まさか……ねえ。

「当たり前ですわ。あんな作り話、本当に信じたんですの？ 元父親がストーカーって。あの男にそんな甲斐庄あるわけありませんことよ」

口を歪めて半笑いで馬鹿にしたように梅子は言った。龍馬とネチっ子は目を見開き口を大きく開けて固まっている。私は思わず美味しそうなお弁当を落としそうになった。そして沸々と湧き上がる怒り。

「お、お前というやつは……なんだっていつつもいつつもそんな訳の分からないことばかり言うんだ……！」

お弁当を左手に持ち替え、私は梅子の顔面目がけて右ストレートを

繰り出した。龍馬とネチっ子に挟まれて身動きできない梅子の左頬に当たる直前で大きな手の平が、私の拳を遮った。

「そこまでしておけ」

目を細めた龍馬が私を見降ろして低い声で言った。

「邪魔すんじゃないわよ！ このアマア、今度という今度は……」

龍馬はそのまま私の腕を掴み、もがく私の動きを封じている。

「松竹今の内に逃げろ！」

龍馬が叫ぶと同時に私の腕の下を潜り抜けると、梅子は振り向いてあかんべえをしながら屋上から走り去った。

「ちょっと龍馬ホントに良いわけ!？」

屋上で私は、梅子から奪った弁当を頬張り怒りと共に飲み下す。梅子ママ特製弁当は、見た目通り美味かったが、機嫌が悪いと美味しさも半減である。

「何がだよ」

ネチっ子との「昼ご飯買い出しジャンケン」に勝利した龍馬が、私の、というか元梅子の弁当を食べたそうにじろじろ見ながら言った。

「あいつ虚言癖女よ!？」

「何だそんなことか。いいじゃないかあれくらい。可愛い女の可愛い嘘だろ。むしろ微笑ましいね」

ち、色惚けしやがって。

「つーか岡崎お前、昨日松竹と会ってんじゃねーかよ。何で正直に話さないんだ」

「ええ会いましたとも。でもね、龍馬の期待するようなことは聞き出せなかったから会ってないって言ったの。これも可愛い女の子の可愛い嘘でしょうが。うふ」

私は弁当を置き両手でグーを作り顎に当て、無表情のままブリっ子ポーズを決めた。

「それとこれとは大違いだ。お前なあ、恋する男子の純情ハートを

ちつとも理解してないな」

ぬわゝにが純情ハートだ。

「好きな女のことならば、どんな些細な情報でも知りたいもんだろ。何を話したんだ？ パフォーマンスって何だ？」

龍馬は私の顔を覗き込む。私は絶妙にタレの染み込んだ鶏モモ肉の唐揚げを口に放り込み、味を確かめ良く噛んで飲み込んでから言った。

「教えない。自分で確かめれば」

「な、何だと！ それじゃ約束が違うじゃねーか！」

「うっさいわね！ 私は今とおっても機嫌が悪いのよ！ それにね、好きな女と仲良くなりたいたんだっただけで近づく努力しなさいよね！ 幕開けの出だしの初っ端から人に頼ってんじゃないわよ、情けない」

「んだとお！」

「何よ！」

私は立ち上がり龍馬を見上げる。龍馬も立ち上がって私を見下ろす。身長差20センチ強。股間を蹴りあげるには丁度いい具合だ。二人の視線がガッチリぶつかり今にも火花が弾けそうだ。そのとき。

「まあまあ二人とも落おち着ういてえ」

買い出しから戻って来たネチっ子が、のんびりとした声で私たちの間に割って入る。そして龍馬の口には焼きそばパンを、私の口には紙パック入りのいちごミルクのストローを銜えさせた。

「うぐ……ぐっふげっふ」

予想外に喉の奥まで突っ込まれたのか、齧ったパンを抜き取り噎せる龍馬。いい気味だ。私は冷んやりとした紙パックを掴み、いちごミルクをちゅううと吸い込んだ。甘ウマー。

「そういえば良太、お前、何だってあの男嫌いの松竹とあんなに仲が良いんだ？」

パンを口にして落ち着きを取り戻したのか、座り込んだ龍馬がネチっ子に問いただす。

「ええ？ 何でって言われてもなあ、別に普通に話してるだけだよ
お」

右手にカレーパン、左手にアンパンを持ち、それらを交互に口に運びながら答えるネチっ子。彼の口腔では一体どんな味が炸裂しているのだろうか……そして時折、体育座りの膝に挟んだパックの牛乳を幸せそうに吸い込んでいる。カレーと餡子と牛乳、もはやヤツの口の中では宇宙開闢級のカオス的フレーバーが展開されているに違いない。

「そうか……まあな、確かに他力本願じゃいけないよな。自分の恋愛だもんな」

「ええ？ 坂ちんまさか梅びよんのこと好きなのお？」

「あ、しまった……」

慌てて口を押さえる龍馬。つーかネチっ子あんな気付いてなかったのね。

「そうかあそうなのかあでもなあ」

いつになく歯切れの悪いネチっ子。「でもなあ」の続きを私も龍馬も待っているのだが、私たちの視線に気付いているのかいないのかワザと焦らしているのか、アンパン＆カレーパンの反復食いを止めない。

「でも何よ」

痺れを切らした私が口火を切った。するとネチっ子は膝の牛乳を、ずびずび音をさせながら一気に飲み干した後で衝撃の一言を言い放つ。

「生理的に受け付けないって言ってたよお、坂ちゃんのことお」

龍馬の動きが止まった。そして。

「せ……生理って……う、うわああああ！」

「あ、龍馬！」

泣き叫びながら屋上から走り去る龍馬。さすがにちょっと気の毒だな。龍馬とネチっ子、どっちの方が生理的に受け付けないかという質問を、渋谷にいる10〜20代のイケてる女子にアンケートしたならば、99対1の割合でネチっ子の圧勝であることは想像に難くない。龍馬は頭は悪いがあれでも私が一目惚れしたくらい、見た目だけならイケメンの部類だからね。ということは梅子はその残りの一人ということになる。

「ちょっとー田倉、いくら事実でも今のはストレート過ぎるんじゃない？」

「そおんなこといってもさあ、変に気を使ってさあ、期待させるより良いと思うけどお。そもそも梅ぴょんと付き合うなんてさあ、土台無理な話だと思うよお。オナさんだってさあ分かってるでしょお？」

ネチっ子のランチタイムは遂に三個目のパン、小豆&マーガリンに突入している。まあ確かにね、あの超絶変態美少女松竹梅子と龍馬がお手々繋いで街をスキップしながらデートしているところは全く以って想像できないけどね。

「あーじゃあさ、田倉ならどうよ？」

「どうよって何があ？」

「万が一梅子が告白してきたら付き合える？」

すると珍しくネチっ子が動きを止め、眉間に皺を寄せて考え始めた。

「うーーんそうだねえええ……無理かなあ」

「え、無理なの？ 何で？ 話も合うみたいだし素顔は可愛いんだから問題ないんじゃない？」

「もちろん梅ぴょん面白いからさあ友達としては付き合えるけどねえ。確かに僕はさあ、世の中の大半の女性と付き合える自信があるけどさあ、その『付き合える付き合えない』の基準っていうのはさあ、結局性的魅力を感じるかどうかなんだよねえ。一般的に見て美人とかブスとか性格が良いとか悪いとかっていうのはどうでもよくってさあ、女の人をパッと見たときにさあ、エロスが感じられればさあ、僕的には合格ってことなんだよねえ」

何かスゲー上から発言だな。ネチっ子如きに女としての可否を出されるのは癪だが、言わんとしていることは理解できる。かく言う私だって、男をパッと見てキスとかエッチがしたいかどうかで好きに

なるかならないかを判断するタイプですからね。

「ふーん、じゃあ梅子には性的魅力がないってこと？」

「あくまで僕にとってはってことだよお。相手のどの部分にエロスを感ずるかなんてさあ、十人十色、千差万別だからねえ。少なくとも坂ちゃんは梅ぴよんにエロスを感ずたから好きになったんだと思うよお」

なるほどね。じゃあ梅子が龍馬にエロスを感ずれば恋人同士になる可能性もなきにしもあらずか。でも生理的に受け付けないと宣言している時点でその可能性はほぼゼロに等しいのだろう。

「相手が普通の女の子だったらさあ、僕だってもちろん坂ちゃんのことと応援するけどさあ、かなり特殊だからねえ梅ぴよんはあ。下手に手を出して怪我しないうちにさあ、別の人を好きになった方が良くと思うんだよねえ」

恋のダメージを最小限に食い止めようって魂胆が

昼休みが終わりネチっ子と教室に戻ると案の定、龍馬の周りには暗雲が立ち込めたような暗く黒々とした雰囲気漂っていて、とても声をかけられる状態ではなかった。例え惚れた相手でなくても「生理的に受け付けない」発言はかなり堪える。それでも梅子に面と向かって言われるよりはマシだったに違いない。

そのままダンマリを押し通した龍馬は、放課後になると私たちに目も合わさず、そそくさと教室を出て一人校舎を後にした。私とネチっ子が「やれやれ」という風に目配せをしつつ教室から出ると、廊下に梅子が仁王立ちしていた。そして無言で私に向かって手を差し出している。何だ何だ、まだ昼間の続きをヤル気か？ と一瞬身構えたが「お弁当箱」という梅子の言葉を聞いてファイティングポーズを解いた。

私は空になった、ハイスクールガールが毎日持つにはおよそ相応しくないであろう四角いアルミ製の、一切の装飾のない弁当箱を差し出した。梅子はそれを引っ手繰るように私の手から奪うと、鞆にしまった。

「全く、千夏様のお陰でお昼抜きですわ」

「あ、ごめ。でも凄い美味しかったよこれ。お母さんによろしく言っというて」

「何で母にヨロシク言わなければなりませんの？」

「え、だってこれ、お母さんが作ってくれたんでしょ？」

すると梅子は、ふん、と鼻を鳴らして黒縁眼鏡のフレームを人差し

指で摘まみ、クイッと上げてから言った。

「毎日自分で作っていますのよ」

「いやあまじで凄いわ梅子」

まさかあんな美味しい弁当を、毎日自分で作っているだなんて。私は梅子に心底感心してしまった。それを勝手に完食してしまったことへの償いと、敬意を表するために梅子をサイゼリヤに連れて行って何でも好きな物（ただし八百円以内）を奢ってあげることにしたのだが、当の梅子は「気分が乗らないので辞退しますわ」と一人さっさか帰ってしまった。仕方ないのでネチっ子と二人でドリンクバー。

「坂ちゃん落ち込んでたねえ」

ティーバッグのダージリンを濃いめに作り、グラスに氷を多めに入れて、その上からフアンタオレンジを注いで作った、「一触即発空中分解危機一髪ドリンク」に続くネチっ子オリジナルドリンク第二弾、「フアンタステイックスパークリングオレンジテイ」をずびずびとストローで吸いこみながらまるで他人事のようにさらりと言いつつ。あんたの言葉で龍馬はああなったんでしようが。

「まあでもね、どっちにしろ梅子は男嫌いだしね」

とはいえ私にしても、到底梅子と龍馬が上手く行くとは思えないので、龍馬の恋心の傷が浅く済んで良かったと、内心ホッとしている部分も否めない。

「オナさんさあ知ってるう？」

「何を？」

「実は坂ちんってさあ、かなりモテるんだよねえ」

一杯目のファントスティックスパークリングオレンジティ、略してF S O Tを瞬く間に飲み干し、予想通り次も同じ物を作って席に戻ってきたネチっ子が言った。向かいに座ったネチっ子の前に置かれたグラスの中の、赤みの強い透き通ったオレンジ色の液体からは、小さな気泡が止めどなく生まれては上昇し、浮かんだ氷を取り囲んで次々と弾けて消えていく。前回のドリンクとは打って変わって、これはなかなか洒落ていて美味しそうである。

「え、そうなの？」

「そうなんだなあこれが」

にまにまとネチっ子は薄ら笑いを浮かべる。もっともコイツの場合、九割がた薄ら笑いの人生だが。

「ま、あれで見た目だけは良いからね。見た目だけは」

私はことさら「だけ」を強調した。入学当初、一目惚れしたのは懐かしき若気の至り。

「でもさ、何で田倉がそんなこと知ってるの？」

するとネチっ子は「じゃじゃあん」と言って鞆から色とりどり、形もまちまちな封筒の束を、トランプマジックを披露する手品師のようになささーっとテーブルに広げた。全部で五通ある。

「何それ」

「らぶれたあでえす」

「ラブレター？ 二十一世紀の平成時代にこれまた古風な……ってこれ全部龍馬宛でしょ？ なーんでアンタが持ってたんのよ。まさか下駄箱からこっそり……」

「違うよお。ほら坂ちゃんはさあ、教室でも僕ら以外とは喋らないでしょお？ 未だにクラスにも学校にも馴染んでないって言うかあ。だからさあ近寄り難いらしいんだよねえ。そこで僕に恋のキューピッド役を頼んできたんだなあこれが」

目の前のネチっ子の背中に真っ白な天使の羽を生やし、弓と矢を持たせたところを思い描く……残念ながらとても愛らしい天使には見えない。どっちかってーと悪魔の手先って感じ。

「キューピッドでもキューピーでもいいけどさ、要は橋渡し役でしようが。だったらさっさと本人に渡してやりなさいよ」

そこでネチっ子は腕を組んでうーんと唸った。

「渡してあげたいのはさあやまやまなんだけどさあ、どうもメンツ的に坂ちゃんには相応しいとは思えないんだよねえ」

「何でそんなことまで田倉が決めてんのよ！ お前は子供が社会人になってなお下着まで選んでるような、いつまでたっても子離れできない息子溺愛中のヤバイ母親かつつ！」

「そうは言うけどさあ、僕にとって坂ちゃんは大切な友達だからさあ、お付き合いするんならそれなりの人じゃないとねえ」

ネチっ子の言う「それなり」とは一体どういう基準なんだ？ 私はテーブルに置かれた中でも最もオンナノコオンナノコしている、桃色の封筒を手にとった。右下の端っこにイラッと来るほどくりんくりんの丸文字で名前が書いてある。が、他のクラスだろう、初めて

見る名前だ。封は閉じられていない。中の便箋を取り出そうとして躊躇する。

「これやっぱ他人には見られたくないよね」

「いいんじゃないかなあ別にい。僕は見てないけどお」

「え？ 見てないの？」

「見てないよお」

「じゃ、じゃあどこで相応しいとか相応しくないとか判断したわけ？ まさか全員と仲良いつてわけじゃないだろうし……あ、分かった。ドーセルックスだろ。酷い奴だな。何だかんだで外見で合否決めてるんでしょ」

結局男は、見た目が可愛い女に溺れ騙される愚かな生き物なのだ。

「違うよお。こういうのはさあ、外見云々じゃあないんだよねえ。

実際かなり可愛い子からも受け取ったしい」

「じゃあ何なのさ」

「基本的にさあ、第三者に頼む時点でアウトだよねえ。何て言うのかなあ、好きな人との仲を友達に取り持ってもらおうっていう考えがさあ、既に萎えるよねえ。例えばそれが駄目だったときもさあ、間接的に結果を聞いて来るわけでしょお？ 甘い！ 甘いんだよお
おお！」

突如ネチっ子はテーブルを拳で叩いて大声を出した。それを機にさつきから若い母親が必死にあやしても一向に泣き止まなかった近くの席の赤ん坊の泣き喚き叫ぶ声がピタリと止まった。

「じゃあ田倉の審査としては、このラブレターを渡してきた時点で駄目だったってこと？」

「その通りい！ 恋のダメージを最小限に食い止めようって魂胆

が見え見えなんだよねえ。でさあ、駄目だったらじゃあ次の候補行ってみよう！　みたいなさあ。若いんだから当たって砕けろってえのお」

いつになく語気が荒い。過去のトラウマか何かがフラッシュバックしたのだろうか。

「そ、そうかな。でも中にはさ、本気で龍馬のことが好きだけど、どうにも恥ずかしくって直接渡せないって子もいると思うけど……ん？」

全五通のパステルカラーの封筒の表を順々に見ていくと、一通だけ他と異なる物を発見した。そこにはにわかには信じ難い名前が書いてあったので、私は一旦席を立ち、ドリンクバーでエスプレッソを注いで席に戻り、そのまま二口飲んで気持ち落ち着かせてから再びそのパステルイエローの封筒を見た。やはり幻ではなかった。

「これ……『田倉良太様へ』って書いてあるんですけど……」

私は恐る恐るそれをネチっ子の前に差し出した。

「ええ？　ホントにいい？」

ネチっ子は私からラブレターを受け取ると、便箋を取り出して読み始めた。

宇多田ヒカルだって歌っているじゃないか

『田倉君へ』

突然のお手紙ごめんなさい

これを渡すか渡さないか、とっても迷いました

でも、私の気持ちをどうしても知って欲しくて……

入学式の日、一目見たときから田倉君のことが頭から離れません
まだお話もしたことないけど

あなたのことが好きです

学校に来るといつも田倉君の顔ばかり探しています

もし良かったら、お友達からでもいいので仲良くしてください

一年A組 那珂乃紅』

「なかのくれない……って何か聞いたことある名前だな……ああっ
思い出した！ あれだよね？ あの凄い美人だよね？」

「あああれが紅ちゃんかあ。一人飛びきり可愛い子がいたなあとは思ってたんだよねえ」

ネチっ子は表面上は平静を装ってはいるものの、確実に動揺しているとみた。いくら隠したって無駄無駄無駄の織田無道よ。鼻の穴がぷくぷくしているのが何よりの証拠。恐らく人生で初のラブレターに、天にも昇る思いで全身の毛穴という毛穴が全開に違いない。

入学しても間もない頃、休み時間になるとA組にやたらと男子が集まって、廊下から教室を覗いていたことがあったのだ。この那珂乃紅という、くの一(?)みたいな名前の女子生徒の美貌を一目見ようと、一年生のみならず、噂を聞き付けた二年三年の先輩男子までもが群がっていたことは記憶に新しい。要するに学校のマドンナで

ある。源静香である。朝倉南である。

「田倉まじで……ちょっと貸して」

どうにもこうにも信じられない。そもそもこのネッチリネッチリにまにま田倉が、女子生徒からラブレターを貰うという時点で、キャリーオーバー発生中のロトシックスで四億円当たったくらいの衝撃なのに、その相手が校内一のマドンナで、しかも一目惚れって……いやいやいやいやないないない、これはきつと何かの間違いだ。

このラブレターは偽造された物だ。鑑識課に回してやる。公文書偽造で訴えてやる。今すぐ筆跡鑑定してもらおう。よしんば百歩千歩万歩譲って本人直筆による物だとしても。その場合、99・9%の確率で罰ゲームだ。きつと山手線ゲームで負けたに違いない。王様ゲームで王様に命令されたに違いない。罰ゲームでなければ残る可能性はただ一つ。

「これは罠よ。田倉、あんたはカモにされている」

「そおうかなあ。でもさあ、僕なんかを騙してさあ、何の得になるわけえ？」

にまにまがニヤニヤに変わっている。言われてみれば目の前のネッチリを嵌めたところで誰にもメリットはなさそうだ。しかしここで引き下がるわけにはいかない。

「そ、それはそのーあれよ、引っかけて反応見て楽しむんじゃない？」

するとネッチ子は眉間に皺を寄せ、俯き目を閉じた。

「どうした？」

「しっ！」

人差し指を立てて、私の言葉を制する。思考の邪魔をするなど言いたいらしい。どうやら何かを思い出しているようだ。

「大丈夫だよお」

「何がよ？」

「今さあ紅ちゃんがさあ、僕にラブレター渡しに来た時の様子を思い出してただけだよ、とおっても綺麗な瞳をしてたよお」

綺麗な瞳って……どうしたネチっ子、いつもの冷静さはどこに行った？ お前なら分かっているだろう。女はそんな芝居で男を騙すんじゃないぞあ朝飯前なんだぞ！ 宇多田ヒカルだって歌っているじゃないか。「女はみんな女優。か弱いフリしてめっちゃ強い」って！

しかし私のそんな気持ちも空しく、ネチっ子は那珂乃紅からのパステルイエローラブレターを胸に抱き、「らん、らんららんらんらん」となぜかナウシカが幼少時代に歌っていたあの物悲しい旋律を口ずさみ、欽ちゃん走りとスキップを足して二で割ったようなステップを踏みながら、私を一人残してサイゼリヤを後にしたのだった。

私はもう一杯コーヒーを飲んでから、ネチっ子が残していた残り四通のラブレターを集めて鞆にしまい店を出た。そしてその足でアフロディーテに向かった。好きな娘に拒絶されて落ち込んでいる龍馬に、せめてラブレターだけでも渡して元気付けてあげようと思ったのだ。

「しかしなあ……」

歩きながら呟く。あのマドンナ那珂乃紅がネチっ子にホの字とは、地球が逆回転を始め西から太陽が昇り、夜になったら全ての星座の位置が左右反転し、月の見えていない裏半分が顔を出し、潮の満ち引きが混沌を極め世界各地で異常気象が発生、その結果南極が南国になって全ての氷が溶けて肥沃な大地が顔を出し、私の大好きなマングローがたわわに実ったとしても信じられない。

罨か、ドッキリか、はたまた罰ゲームか。那珂乃紅の魂胆は一体何なのか。あれこれとまとまらない考えが、脳内をぐるぐるしている内にアフロディーテに到着。あ、そういえば絶体絶命男はどうしてるだろう。もうそろそろ回復して意識を取り戻しても良い頃だ。あの恐るべき危機的状况を救ってくれたのだ、きちんとお礼を言っておかなくては。

「こんにちは」

靴を脱ぎ、スリッパに履き替えて受付の小窓を覗くと、聖子さんがニヤニヤしながら雑誌を読んでいた。表紙には「薔薇族」と書いてある。どんな内容かは知らないが、かなり夢中で読んでいるらしく、聖子さんは窓越しに立つ私に全く気が付かない。仕方がないので、その小さな窓をコンコンとノックした。

「あらあんだ、久しぶり」

ようやく雑誌から顔を上げ、小窓を開ける聖子さん。

「お久しぶりです。龍馬君、帰ってきてます?」

すると聖子さんは、おや、という顔をした。

「ああ、たった今出かけたとこだよ。ほら、坊ちゃんが連れてきた浮浪者みたいな小汚い男がいたでしょ。あれと一緒に連れ立って行ったよ」

「浮浪者って……絶体絶命男のことですか？」

「さあねえ。名前は知らないけどね。あんまり起きないもんだから死んでんのかと思ったけど生きてたんだねえ。ひゃっひゃっひゃ」

何がおかしい。あんなナリでも私たちの救世主だぞ。そうか、ようやく深い眠りから覚めたのか。二人で出掛けたということはコンビにおやつでも買いに行った……わけじゃなさそうだ。起き上がった立ち上がった恐らく絶体絶命男は、恐らくそのまま帰るつもりに違いないのだ。ということは、向かう先は……

「駅に行っただけですか？」

「さあ。そこまでは知らないけどね。でも坊ちゃん、何だか思い詰めた顔してたけど、学校で何かあったのかい？」

「あったと言えましたが。でもいわゆる青春のページってやつです。若かりし頃には誰もが通るほろ苦き道程です」

一度や二度や三度拒否されたくらいで逃げ出すなんて

聖子さんに別れを告げ、私は池袋駅に向かった。携帯を取り出して龍馬にかけてみる。何も言わずに立ち去るだなんて、カッコ良すぎですわ絶体絶命男さん、せめてお名前だけでも……あれ、繋がらないや。

駅構内は帰宅途中の高校生や大学生やサラリーマンやその他諸々の人間でごった返している。しょうがないよね。池袋だもんね。ここどこへ向かうとも分らない、たった二人の男たちを探し出すのは事実上不可能だ。もう一度龍馬に電話してみる。やはり応答なし。私は諦めて帰ることにした。まあいいや、絶体絶命男のお名前や趣味嗜好等々の個人情報に明日学校で龍馬に聞けばいいか。きつと面と向かってお礼を言われるのが恥ずかしいのだろう。何たって私はちょっと前まで彼の中では神的存在だったのだから。

「大変たいへん！」

次の朝、いつもよりちょっと早く学校に着いたので教室でボケっとしてみると、ネチっ子が息急ぎ切って現れた。机と机の間を通ろうとして、足が纏れて途中で派手に転んでクラス中の注目を集めたが、その恥ずかしさを物ともせず私のもとに駆け寄ってきた。

「これこれえこれ見てえ」

汗だーだーではあはあ言いながら自らの携帯を開いて差し出すネチっ子。何だ何だ。まさかラブレターだけじゃ飽き足らず、マドンナ那珂乃紅からデートのお誘いメールでも来たのか、しかし。

『しばらく旅に出る。親には言っているから心配するな』

「これは……誰から？」

「もう！ 坂ちゃんに決まってるじゃないかあ。今朝メールが来てさあすぐに電話したんだけど全然繋がらなくてさあ」

「旅って……どこに？」

「知らないよお。オナさん何か聞いてないのお？」

「いや全く。あ、そう言えば……」

私は昨日、龍馬が絶体絶命男と出かけたらしいということをネチっ子に話した。

「それだそれえ！ きつとさあ、失恋の痛みから立ち直るためにさあ絶体絶命男についてってさあ、拳法教わって自分を鍛えなおすとか何とかあ」

「まじで……ってことは絶体絶命男の故郷に向かった可能性が高いつてこと？ 彼ってどこの人なんだろう」

「多分佐渡島あ」

「佐渡島……って何県だっけ」

「もおうオナさん無知にもほどがあるう。魚沼産コシヒカリと越乃寒梅の新潟でしょお」

「へえそうなんだ。でもなんで田倉そんなこと知ってんの？」

「ディスカバリーチャンネルでえ『世界の知られざる武術』を見たときさあ、確か佐渡島って言ってた気がするんだよねえ」

「ふうん……でもまあそういうことなら心配いらないんじゃない？ 行き先も分かったし、一人でふらふらしてるわけでもなさそうだし」

「あああ、オナさん何か冷たいい」

「そうかあ？ 大体元はと言えば、田倉がラブレター隠して渡さな

いからこうなるんでしようが」

「えええ！ 何でだよおう！」

「だってそうでしょ。梅子のことは仕方ないとしても、その後ですぐに手紙渡してあげてれば十分フォローになったでしょうが。それをあんたが独断と偏見で……」

「全く、恋に破れたくらいで逃げ出すなんて、情けないったらありはしませんことよ」

私とネチっ子がやいのやいのやっている、背後から声がした。振り向かずともその正体は判明している。

「梅子、自分で振っというてその言い方はあんまりじゃない？」

首だけ捻るとパツツン梅子は腕を組んで仁王立ち。

「知りませんわ。それに男は嫌いだと日頃公言していることは周知の事実。それを知ってなおこの私を振り向かせたいのであれば、それなりの覚悟があつて当然じゃございませんこと？　なのに一度や二度や三度拒否されたくらいで逃げ出すなんて見損ないましたわ。これだから男は嫌いなのですわ」

「え、それってまさか梅子……」

「あ、もうホームルームが始まりますことよ。ではこれにて失礼致しますわ」

言うだけ言うと梅子はそそくさと私たちの教室を後にした。

「ねえねえ田倉、今の梅子の発言からするとさあ、結構満更でもないって感じだよね、龍馬のこと」

「うーんそうだねえ……でも梅ピョンのことだからねえ」

そうだった。これまで私は梅子の数々の虚言に振り回され、そして甚大な精神的苦痛および被害を受けていたのだった。奴の話の凄いところは、どんな嘘でも真顔で話し、そして辻褄が合っているのです。その場では決して嘘と見抜けないことにある。というわけで今回も話半分に聞いておくに止めよう。

放課後、私とネチっ子はアフロデイトへと早足で向かった。一応学校にいる間も、休憩時間に、二人交互に龍馬へメールを送ってみたが、やはり連絡は取れなかった。

「聖子さん！」

私はアフロデイトに入り、入り口でスリッパに履き替えるのももどかしく、靴下のまま受付に駆け寄る。聖子さんは雑誌から顔を上げ、のんびりと窓を開ける。

「あらあらまた来たのかい。坊ちゃんならいないよ。それとも今日は二人でやってくのかい？ 客としてなら歓迎するよ」

その冗談を無視して聖子さんに詰め寄った。

「聖子さん知ってたんでしょ」

両親にも話してあるということは、龍馬は当然聖子さんにも言っているはずだ。ということは、聖子さんは昨日私が訪ねた時点で龍馬が旅に出るということは知っていたはず。白々しく嘘を吐かれたことを思い出して少々腹が立ったので、私の口調はやや感情的になってしまった。すると途端に聖子さんの機嫌が悪くなった。

「何だい、私が悪いってのかい」

ただでさえ怖い顔の、五十路女のしかめっ面に私は怯んだ。

「いや別に悪いとか悪くないとかそういうことじゃなくて……」

「あんたらには黙っててくれって言っただのは坊ちゃんの方なんだよ。責められる筋合いなんかないね」

「聖子さんを責めてるわけじゃないんですけど……」

「じゃあ何だい」

「あの、行き先聞いてませんか？」

「ふん、知らないね。知りたきゃ自分でなんとかしな！ ほらほらここはガキの来るとこじゃないよ！ 客じゃないんならさっさと帰った帰った」

シッシツと手で追い払う素振りをすると、聖子さんはぴしやりと受付の小窓を閉めてしまった。

「難しい人だな」

現在ネチっ子とドトールで緊急ミーティング開催中である。

別に喧嘩を売りに行ったわけではないのだが、結果として聖子さんを怒らせてしまい、何の情報も得られなかったことに反省しつつ、カフェラテ啜る私。そして目の前のネチっ子は、自分にも黙ったまま旅立ってしまった親友に対し、ショックを隠せない様子。

「元気出しながら田倉。大丈夫だよ、学校だってあるんだから、一週間かそこらで帰ってくるって」

さっきからオレンジジュースの水が溶けて上の方が薄まるのも気にせず、心ここにあらずで俯き携帯を弄んでいるネチっ子に激励の言葉をかける。しかしそんな私の優しさに却って心が揺さぶられたのか、ネチっ子は小刻みに肩を震わせ始めた。

「ほらー泣かないの。男の子でしょ!」

と、ハンカチを差し出そうとした瞬間、うううっとくぐもった、不吉で不気味なトーンの声が私の耳に入り込み、全身の毛穴から抜けて行った。鳥肌。泣き方まで気持ち悪いとはさすがネチっ子、思っていたらいきなり顔を上げ、うぶぶぶと笑い出した。つ、遂に気が触れたか、と思ったかどうかやら本当に笑っているらしい。

「ちょ、ちょっと田倉、どうしたの?」

「今週末う紅ちゃんとデェトお決定いい!!!!」

な……まさか携帯をいじってたのは、那珂乃紅とのメールのやり取りだったのか！？ つーかいつの間にそこまで話が進展してたんだ！？

「ちょっと田倉！ デートってどこに……こら待てえ！」

有頂天ホテルも有頂天家族も真っ青なほどの有頂天振りを発揮し、私のことなど完全に視界から消し去ったネチっ子は、昨日と寸分違わぬオリジナルステップでドトールを後にしたのだった。

「これで田倉は完全に俺の虜だな」

呆然とネチっ子の後ろ姿を目で追っていると、背後から女の声があった。声は確かに女だが、言葉遣いが完全に男であることに違和感を覚え振り返ると、そこには眉目秀麗という言葉がぴったりくる、大きな瞳と白い肌、それに長く艶のある栗毛色の髪が印象的な美少女が背中合わせに座っていて、首だけ捻り、勝ち誇ったような表情で私を見ていた。

「ここで会ったが三千里。どうだ見たか岡崎千夏、お前の男のあの浮かれよう、正にグウの音も出まい！ ふはははは！」

「あ！ あんたは……誰？」

なんとなく見覚えはあるものの、こんな人、知り合いにいたのだろうか。制服を見ると、私と同じ物を着ているので恐らく同じ学校の生徒には違いないのだが名前が出てこない。つーか基本的に友達少ないしね、私。首を傾げてその顔をまじまじと見詰めていると、相手は自分の顔を指さして叫んだ。

「俺だよ俺！ マドンナ那珂乃紅！」

「ああ、あなたが紅ちゃんね……っていうか俺って。っていうか自らマドンナって」

そうだそうだ、そう言えばこんな顔だったっけ。それにしても綺麗な人やね。素顔の梅子も美少女だけどそれとはまた違った大人びた感じ。かなりの美人であることは認めるが、男言葉が耳についてしやうがない。

「で、何してんのここで。田倉に用があつたんじゃないの？ 行っちゃったよ？」

しかし店の出口を指さす私の言葉を無視して那珂乃紅はなおも上から目線の上から発言を続行する。

「まあまあ強がっちゃってまあ。悔しいときは泣いてもいいんだぜ？ 岡崎千夏さんよお、ほれ、ハンカチ貸してやろうか」

「はあ。一体何のことでしょうか」

大和撫子な美しい顔が台無しになるほど男言葉を連発しながら那珂乃紅は、後ろの席から自分のカップを持って、私の座るすぐ隣に席を詰めるように、ずずずいと移動してきた。薔薇とバニラの混じり合ったような、甘ったるい香りがふわりと私の鼻を通り抜けた。

「またまた強がっちゃって。我慢は万病の元だぜ？ 病気の原因の九割はストレスからって言うだろ？ 岡崎千夏、アンタ最近人気ハナマル急上昇で随分と調子に乗ってるみたいだが、ま、俺の美貌をもってすればアンタの彼氏を奪うことなんざ朝飯前ってわけだ」

いや、あの、人気赤丸急上昇は一応一段落ついたんですけど……って彼氏って誰が？

「ちよちよちよちよい待ち。あんたさあ、田倉と私が付き合ってると思ってるの？」

「どっからどう見てもカップルにしか見えんだろう」

さらりと言うと、那珂乃紅はカップのコーヒーを、蕎麦を食べるときのように音を立てて啜った。いやいやどっからどう見たってカップルじゃないんですけど……何か激しく誤解が生じている気がする。

「どうやら最愛の彼氏が、ロクに話もしたことないような女にあっさり奪われてショックで声も出ないようだな。ま、恥じることはないぜ。相手が格上の俺じゃ手も足も出ないのは当然だからな。これではつきりしただろう。クリス・チャンディオール高校のマドンナの称号に相応しいのは誰かっていうのがな」

え、別にそんなことをはつきりさせたいとか言いましたっけ？ 私。

「今回のことは大目に見てやる。だが覚えておけよ。今度また俺より目立つようなことしでかしたら彼氏奪うくらいじゃ済まされないからな」

喋りながら立ち上がり、腰に手を当ててぐぐぐとコーヒーを飲み干した那珂乃紅は、空のカップを目の前に叩き付けるように置くと、そのまま行ってしまった。

「一体何だったんだ……」

帰りの電車の中で那珂乃紅とのやり取りを反芻する。ちよつと頭の中を整理してみよう。那珂乃紅に関して分かっていること。

- 一、那珂乃紅はネチっ子にラブレターを渡した
- 二、那珂乃紅は私とネチっ子が恋人同士だと思い込んでいる
- 三、那珂乃紅は自分が校内一のマドンナであることを自負
- 四、那珂乃紅は、最近突如人気急上昇した私に地位を奪われかねないと警戒心を抱く
- 五、このままでは私にマドンナ・オブ・クリス・チャンディオールハイスクールの称号を奪われる危険性があると察知
- 六、だもんで、これ以上私がチョーシこかないように、彼氏であるネチっ子を奪って釘を刺した……

なんだそりゃ。お門違いの濡れ衣もいいとこだ。別に学校のマドンナのポジションなんて例えて言うなら、お笑い芸人「X・GUN」が売れなくなって一時期「丁半コロコロ」にコンビ名を変更したけど、やっぱ再度「X・GUN」へ戻してたこと並みに興味無いしね。

それに赤丸急上昇になったのは半分は偶然で半分は奥田玉夫と梅子の仕業だから私のせいではないしね……ま、私がラブリーキューテイストガールだってことは覆しようのない事実ですから、そこに責任があると言われてしまつては返す言葉ありませんけどね。おほほほ。あ、いかんいかん。一人笑いしてしまつたところをエグザイル風のワルメンお兄さんに見られてしまつたわ。思わず赤面。

ということとは、詰まる所、私はどうすればいいんだ？　というか、向こうが勝手にライバル視してるだけで、別に私がどうこうすることもないのか。いや待て待て。ネチっ子だ。那珂乃紅が私とネチっ子の関係を誤解していることは大したことではない。問題は那珂乃紅が、私に対抗意識を燃やすあまり、好きでもないネチっ子にラブ

レターを渡し、誘惑したぶらかしているところにあるのだ。

許せん。何度も言うが、確かにネチっ子は異性のみならず同性からも敬遠されがちなほどの気持ち悪さを誇る青少年ではある。だがしかし、あれでも私の大切な友人だ。共に戦線を潜り抜けた戦友と言ってもいい。もし那珂乃紅が本気で好きで告白したのならば、友人に彼女ができるかもしれないということで大歓迎だが、今回は事情が違う。

男心を弄ぶなんてマドンナの称号に相応しくないどころか人間としての品格を疑うわ。親の顔が見てみたい。親友をコケにされて黙ってるほど私はお人好しじゃあなくてよ。よっしゃここは一つこの激カワJK千夏さんが、マドンナ気取りの那珂乃紅の、その嘘を吐いたピノッキオよりも高いプライドの鼻をポッキリぽきぽきへし折ってやろうじゃありませんか。

作戦名「紅の豚」の内容を考えなければいけないのだが

とは言ったものの、実際何をどうするべきか……家に帰り、晩御飯を済ませた私は、風呂上がりのベッドの上で座禅を組んで沈思黙考。しかしいいアイデアが浮かばない。こういうときはやっぱアレに限りますな。

というわけで私は引き出しからお馴染みエバとサフバとローターを取り出し、机の上に並べる。どれにしようかなかみさまのいうとおり……私の人差し指はローターで止まった。最近ご無沙汰のローターくん。今日のソルフエージュは彼で決まりねっ。

パジャマのズボンとパンツを下ろし、下半身だけ裸になった私は、仰向けになったりうつ伏せになったり四つん這いになったりM字開脚したりと、自由奔放、色んな体勢でローターによるソルフエージュを行った。散々やって体中に血が駆け巡り、頭が空っぽになる。おおおこれこそ正しく「無」の境地ですね！

一切の世俗的邪念が雲散霧消し、脳内が快晴の空のように澄み切った今なら、那珂乃紅を懲らしめるための素晴らしいアイデアが続々と降りてくるはず……というところで意識がなくなった。

立て続けに三回のくしゃみで目を開けると、窓の外が明るい。朝だ。またやってしまった。ローターを右手に握りしめたまま、下半身丸出しでの睡眠。「ソルフエージュの後は、道具のお手入れを怠っちゃだめよ。自分しか使わないからって放っておくと、雑菌が繁殖しますからね」と美しき姉に耳にタコができるほど言われているのだが、どうにも毎回実行できずにいる。

最近の私は、いった後に強烈な睡魔が襲ってきてしまうことが多いのだ。そしてソルフエージュからの睡眠導入が、天女の羽衣に包まれたような別次元の心地良さで、なかなか抗うことができない。

……なんだか寒気がする。ヤバイ。風邪引いたかも。いや、きつと気のせいだ。そーだそーに決まってる。今何時だろ……五時過ぎか。起きるまでには後二時間ほどある。もうひと眠りすればきつと回復しているに違いない。何たってぴちぴちティーンエイジャーの若い肉体ですからね。それに病は気からって言うじゃない。そうよ、風邪なんて認めないわ。私は何事もなくいつも通りの朝を迎えられることを祈りつつ布団を被った。

そして七時。目覚ましが鳴った。枕元の目覚まし時計を手探りで止め、目を開けて、えいやと掛け布団と一緒に上半身を起こしてみる。うん、ほーら何ともない何ともな……くなーい！ すっげー寒気がするーぞくぞくくらくらするよー頭ガンガンーたたた助けてお母さん……

「いつまで寝てんの千夏、遅刻するわよ！」

時間になっても階下に降りて来ない私の様子を見に、母が部屋へやってきた。

「お、お母さん……私死ぬ……先立つ不孝を許して……」

「何バカなことやってんの。さっさと起きなさい……あら大変、顔が真っ赤じゃない。熱もあるみたいだし、やだ千夏、風邪引いたの？」

「そ、そうみたい」

布団を顔の半分までかぶったまま、くぐもった声で答える。風邪の原因がソルフエージュしっ放しによるものとは口が裂けても言えない。

「ちょっと体温計取ってくるから」

あああ風邪なんて引いたのいつ以来だろう。オツムは人並だけど、器量の良さと元気な身体と優しい性格と可愛い笑顔と、それとそれと……とにかくそれだけが取り柄の私なのに。神様仏様美しきお姉さま、もう二度とソルフエージュしっ放し道具使いっ放しで眠ったりしませんから、だから早く元気な身体に戻して下さいな……

「三十八度五分。随分高いわね。しょうがない、今日はこのままゆっくり休んでなさい。学校には連絡しておくから」

一旦部屋を出たお母さんは、しばらくするとお盆を持って再び部屋に入ってきた。机に置かれたお盆には、小さい土鍋に入ったお粥と、二リットルペットボトル入りのウーロン茶と風邪薬が乗っている。

「まず少しでもいいからこれを食べて、そして薬を飲むこと。それと熱が出た時とはにかく水分補給よ。飲んで飲んで出しまくって体温下げなさい。じゃあ私はのっぴきならない用事があるから出かけるけど、何かあったら携帯に電話しなさいね」

そう言ってお母さんは部屋のドアを閉めて行ってしまった。のっぴきならない事情ってなんだろう……まあいいや、とりあえずせっかく作ってくれたお粥だ、冷めないうちに一口分蓮華によそい、ふうふうしながら口へ運んだ。

食事が終わり薬を飲むとやるものがなくなった。本来なら那珂乃紅

をぎゃふんと言わせるための策、即ち「那珂乃紅討伐大作戦」改め作戦名「紅の豚」の内容を考えなければいけないのだが、今の私は熱でボーっとしている上に頭痛もするので、とてもまともに思考できる状態ではなかった。仕方がないのでお母さんの言い付け通り、ウーロン茶をお腹ががぼがぼになるまで飲み込むと再び布団を被って眠ることにした。

ぱちりと目を開ける。いつもと同じ天井が見える。いくら具合が悪いかからと言って、人間そうそう眠れるものではない。私の体内熟睡メーターは既に満タンである。かといって動き回れる訳でもないののでベッドの上でうつらうつらを繰り返す時計に目をやると、昼の一時を過ぎていた。

たくさん摂取した水分を排出し終えてもう一度体温を測る。三十七度四分。よっしゃ若干下がってる。そして頭痛はだいぶ軽減されているようだ。何気なく携帯を手にとると、誰からの着信もメールもなかった。こんなとき思うのだ。

ああ私という人間は、誰からも必要とされていない目に見えぬ塵芥も同様、存在しているとも言えぬほどの者なのね、と。千夏のセンチメンタリズム発動中……ああもう！ 彼氏欲しいよう！ 那珂乃紅問題が解決したら、今度こそ本気で素敵な恋するんだからっ！

拳を握り締め気合を入れたらお腹がぐぐうと鳴った。朝に食べたお粥はとっくに消化している。温くなったウーロン茶を飲みこむと、食道から胃袋へと伝わって行く様子が感じ取られる。むっくりとベッドから起き上がり、階段を下りて居間へ。とにかく食料を調達しないと、と冷蔵庫を漁っているとピンポンとインターホンが鳴った。

平日のこんな時間に訪れる人種は、新聞屋か浄水器販売員と相場が決まっている。もしくは受信料取り立てのおっちゃん。今日は病気で動けないことになっているので、私は居留守を決め込んだ。まあ例え元気だとしても面倒臭いので出るつもりはないが。

しかし外の相手はしつこくチャイムを連打し続ける。まるで私がかみの中にいることを知っているかの様に。一向に鳴り止まず、このままではノイローゼになりそうなので、この無礼で不埒な訪問者を確認すべく、とりあえず抜き足差し足で玄関まで行き、覗き窓に右目を当てて相手の姿を見してみる。するとそこには予想外の顔があった。

冬の到来に備え餌を口の中に隠したリスの如き

「梅子！ 何してんの？」

鍵を回し勢いよく玄関の扉を開き叫ぶ。

「何してんのじゃございませんことよ。千夏様が病気だって言うからお見舞いに参ったに決まっていますわ。そして差し入れですわ」

ぱつつんカツラと黒縁眼鏡と出っ歯入れ歯の通学バージョンブサイク梅子は、手に提げたビニール袋を軽く持ち上げた。その途端、DNAに刷り込まれた狩猟本能を著しく刺激する肉の匂いが空っぽの胃袋を直撃する。

「けけけケンタッキー！」

私の体を心配して、学校を抜け出してまで駆け付けてくれただけでも嬉しいのに、更に肉塊の差し入れまで持ってきてくれるだなんて、俗に言う「欲しいときに来てくれる」って正にこのことなのね。私は感激と感動のあまり、梅子に抱き付くと、意思とは無関係にふら付き玄関先でくずおれた。

「千夏様しっかり！」

まだ療養中の身であることをすっかり忘れて血圧とテンションが急上昇、そして重力により一気に血液が急降下したため立っていられなくなってしまった。梅子は小さい身体で私の肩を抱きかかえられるようにして支え、居間のソファまで運んでくれた。

「おおおケンタ美味え……」

ソファの上に寝転び腕をだらりと下げたまま、私は梅子が口元に運んでくれるフライドチキンを少しずつ齧って味わう。年に三回くらいは無性に食べたくなるなるケンタツキーである。

「ねえ梅子」

「もう一つお食べになります？」

「それもそうなんだけど、変装解いてくれない？」

精神的肉体的に弱っているのも、単純に可愛い梅子が見たかった。梅子はチキンで脂っこくなった指先をぺろぺろ舐めると、分かりましたわ、と言ってカツラと眼鏡と入れ歯を外した。

「梅子、ありがとね」

私は心底嬉しかった。弱っているときに誰かに優しくされることがこんなにも暖かく幸せな気持ちになれるとは思ってもよらなかった。右手を伸ばし、すぐ傍で床に正座する、艶々の黒髪の梅子の頭を撫でる。梅子は新たに取り出したフライドチキンを持ったままそんな私を見つめ返す。そのくりくりロリロリの瞳はなぜか潤んでいて吸い込まれそうだ。

あ、ヤバ。何だか胸キュン来ちゃったかも。こんなにも梅子を愛おしいと感じてしまう私ってやっぱり同性愛者なのかな……でも。でもいいじゃん別に。男じゃなくても。恋人が女の子でも。自分のことを想い心配しそいつも傍にいてくれる、そんな存在こそ今の私には必要なんだわ。

私はいつの間にか頭を撫でていた右手を梅子のうなじへと回し、小

さく愛らしい顔を自分の顔の方へと引き寄せた。この子とキスしたい、と思い始めている。心臓がばくばく言っている。私の取ろうとしている行動を察知した梅子は、抵抗することもなく身を委ね、顔と顔が近づくにつれ瞼を閉じた。

柔らかい唇が、私の唇に触れる。心臓が痛いくらいに音を立てている。身体が熱くなる。この体温上昇は風邪の熱のせいじゃない。やがて私の唇の間に、梅子の舌が押し入ってきた。私も舌先でそれに応じる。

ああ梅子……高揚による快感と風邪による熱で意識が朦朧としてくる。すると今度は口の中に、唇でも舌でもない、別の感触の物体が入ってきた。何だろうこれは。ぐちゃぐちゃして何だかスパイシーな塩気が……ん？ 塩気？ これはまさか!？」

「ちよちよちよつと梅子！ 何してんのよ!？」

口の中にあつたものを手に出すと、果たしてそれはもはや原形を留めない、見るも無残なケンタッキーの残骸であった。

「あら口移しに決まっていますわ。先程のアイコンタクトは『弱って噛む力もないから梅子噛んでちょうだい』ってことですわよね？ですから口移しなんて本当は下品で嫌でしたけど千夏様のためと思って心を鬼にして実行したまでですわ」

ななな!？」

「千夏様、ご病気の割に食欲がおありのようですわね。ではお次は、このナゲットとポテトと……あ、あと面倒くさいからコーヒーマーも一緒に口移しして差し上げますわ」

そう言うとき梅子はチキンナゲツトを二個、フライドポテトを一掴みして口に放り込み、そのままアイスコーヒーをストローで啜った。食料を口一杯に貯め込んだその顔はまるで、冬の到来に備え餌を口の中に隠したりスの如きである。

頬を限界まで膨らませ、口を閉じたまま梅子はおもひながら顔を近づけてくる。下品で嫌だと言いつつながら、その目はらんらんと輝いている。何が心を鬼にしている。やりたくてうずうずしてたに違いない。ヤバイ、本気だコイツ。この危機的状況は何が何でも回避せねば……しかし熱に侵されて弱り切った身体には抵抗する力も残っているはずもなく、あっさりと梅子に馬乗りされ、両肩を押さえ付けられてしまった。

「ややややめろー！ー！」

真上から梅子の世にも恐ろしい顔が迫ってくる。一瞬、長い黒髪が垂れ落ちて私の視界を遮った。顔でそれを払い除ける。と次の瞬間、梅子の唇が私の唇をぴたりと塞いだ。口だけは絶対に開ける訳にはいかない。しかしそんな私の考えはお見通しの梅子は、こともあらうか指で鼻を摘まんできた。

息苦しさに耐えきれなくなった私は遂に口を開けてしまった。ここぞとばかりに口移しを開始する梅子。続々と注入される咀嚼され混じり合わされた食料たち。それでもなお鼻を摘まんだ指を離さない。ナゲツトとポテトとコーヒーを全て移し終えようと、鼻を解放する代わりに今度は口を手で塞いできた。

恐ろしさと気持ち悪さで遠のく意識の中、私は最後の抵抗を試みる。寝転がったまま両足を折り曲げて、梅子の腹部に当てると、そのま

ま思い切り両脚を伸ばして梅子を上方へと蹴飛ばした。身体が離れた隙に私は急いでトイレへ駆け込み、口の中の物を全てを吐き出して流した。すぐさま洗面台の蛇口を捻り、口を何度も濯いだ。

「ああ気持ち悪かった……はあ、はあ」

やはりあいつは変態だ。真の変態だ。あの容姿と歪んだ愛情表現に騙されて、ちよつとでも恋人にしようなどと考えたことを激しく後悔しながら居間へ戻ると、変態梅子はパンツ丸出しの脚を広げた姿のまま床に横たわっていた。近寄ってつま先で突いてみるがピクリともしない。気絶している。どうやら私の両脚蹴りが思いの外強過ぎたようだ。テーブルの角にでも頭をぶつけたのだろう。まあいいや、このまま放っておこう。

飛んで火に入る夏の虫系がいいね

「酷いじゃありませんこと千夏様」

ようやく意識を回復した梅子が、ソファで横になってぼんやりとテレビを眺める私を見下ろして言った。しかし私はさっきの一騒動でますます具合が悪くなった（主に精神面）ので、後頭部をさする梅子を一瞥しただけでその言葉を無視した。

「せっかくの愛情たっぷりの私の看病をあんな形で拒絶なさるだなんて」

「なーにが看病だ。世にもおぞましく気持ち悪いことしやがって。余計病状が悪化したっつーの。あ、喉乾いたからお茶淹れて」

先程の行為を償わせようと、私は顎と裸足の親指でくいくいと指図し、梅子に緑茶を淹れさせた。ぶつぶつ言いながらも梅子は従順に動き、熱いお茶を持ってきてくれる。なかなか素直である。

「お、サンキュー」

「それはそうとまだ熱はおありですか？」

「え？ ああどうかな。あるようなないような」

額に手を当ててみる。熱くない。あ、自分で自分の身体触ったって体温なんだから一緒か。さっき暴れて汗を掻いたせいで、寒気も治まってきているような気がしないでもない。

「駄目ですわ千夏様、風邪のときは体温は一時間おきに測って折れ線グラフにしないと。体温計はありまして？」

そういえば下に来るとき一緒に持ってきたんだけどどこやったかな……私は体を浮かせてソファの隙間に手をつっ込んだ。あ、あった。

「では行きますわよ」

体温計を手にした梅子は、私のパジャマのボタンに手をかける。

「ええいやめんか！ 何でわざわざ脱がそうとする！」

「そんなことおっしゃられても、ある程度前をはだけて頂かないことには体温計が脇に入れられませんわ」

「あ、そっか。じゃ、脱ぎまゝすってバカ。自分で測るっての。全く。かして」

梅子の手から体温計をもぎ取ると、私は左の脇の下に体温計を挟んだ。このひんやりする感じが寒気を助長してる気がして若干苦手なんだよね。一分程でピピピッと計測終了の電子音が鳴った。結果は……三十七度四分。さっきと変んねー。

「ではもうお暇いたしますわ」

測定結果と顔色を見て私の状態が回復に向かいつつあると判断したのか、梅子は絨毯に散らばった変装道具一式を鞆にしまうと立ちあがって居間を出ようとした。

「え、帰っちゃうの？」

「ええ。そのご様子ならもう看病は必要ありませんわ。明日は学校にいらして下さいね」

せっかくお見舞いに来てくれた人間に今帰られてしまうと、することなしい眠くもないしお母さんもまだ戻って来そうにないし、とに

かく暇でしようがない。梅子の変態ではあるがいないよりはいてくれた方が百倍マシである。ここは何とか引き留めないと。

「あーっつと梅子さあ、実は折り入って相談したいことがあるんだけど」

「何ですか？」

「えーっつとですね、そのーっあれだ、そう！ 紅の豚！」

「紅の豚？」

我ながらナイス思い出し。というかこれしかないでしょう。那珂乃紅問題は現在解決しなければならぬ最優先課題ではあるが、一人で考えていても良いアイデアは浮かびそうにない。こういう復讐系の問題は、梅子ならきつと見事な手腕を発揮することウケアイ。私は居間のドアノブに手をかけ、首だけ捻ってきょとん顔の梅子に作戦「紅の豚」の内容を説明した。

「あら、それは確かにオイタが過ぎますわね」

話の内容に興味を示した梅子はソファに座り直し、私と一緒にになってお茶を啜り始めた。

「しかもよりにもよって良太さんの心を弄ぶなんて言語道断ですわ。千夏様、これはもう那珂乃紅を完膚なきまでに叩きのめし、二度とお天道様を拝めないようにしないと」

ネチっ子が巻き込まれていると分かれると途端に梅子の目付きが変わり語気が荒くなった。お天道様拝めないのはやり過ぎのような気がするが。

「う、うん。そうだね。でもさ、何をどうしていいのやら全然見当もつかないんだよね」

「そうですか？ そんなの簡単じゃございませんこと？」

「お、さすが梅子。どうすんの」

「屈強な男子を四、五人雇って、下校時にさささつと拉致って廃墟と化した人気の無い工場で縛ってマワしてハシタなくアラレもない痴態をビデオカメラで撮影し、無修正でネットで流しまくった上に、あることないこと書いた中傷ビラをご近所中にばら撒けば一丁上がり、二度と立ち直れませんわ」

「えええそんなエゲつない……もうちょつとさあ、なんつーかさあ」

そういう類の誰でも思い付きそうな犯罪系パワープレイじゃこっちが捕まって終わりの気がする。ここは一つスマートな頭脳戦で行きましょうよ。

「などというのは冗談ですわ。私がそんな野蛮な行為をするはずございませんことよ。要するにアレですわよね。ターゲット自らの意思で罠に嵌まる感じがよろしいんですのよね？」

「そうそう。飛んで火に入る夏の虫系がいいね。もがけばもがくほど抜け出せない、蟻地獄の底の底、気付いたときにはしまったもう遅い、みたいな」

「ということはまず、那珂乃紅に関する情報を集めないといけませんわね。千夏様、何かご存知でして？」

「え？ 紅情報？ そうだな……すっごい美人」

「……」

「あ、あとね、常に自分が一番注目浴びてないと納得できないタイプだねあれは。生まれ付きのマドンナ気質っていうの？ やたらとプライドの高い典型的チャホヤ体質」

「はあ。千夏様、そういうことではございませんわ。そんな外から見て誰でも分かるようなことではなくて、趣味嗜好とか恋人及び好

きな男の有無とか嫌いな食べ物とか家族構成に問題アリとか実は不治の病に侵されていたとかそういった一歩突っ込んだところの個人情報ですわ」

「そんなん知りませんがな。昨日初めて喋ったんだから……あ、そうだ」

「何か思い出しまして？」

「喋ったと言えば那珂乃紅さあ、男言葉だったんだよね」

「え？」

「普段からあの口調なのかどうかは知らないけど、私と喋ってるときは完全に男言葉だったよ。俺俺俺言ってたし」

「綺麗な顔に男言葉……それは面白い組み合わせですわね。マドンナを名乗るくらいですから公の場では普通に女性の言葉を使うはずなのに千夏様に対しては男言葉を使った。恐らくそっちが地というか素ですわね」

「うん。私もそう思う。でもさ何でだろ？ 普通に女として生まれて育ってきていれば女は女言葉で育つでしょ。まあ中には敢えて『サバサバした女』をアピールするために男言葉を使う人もいるかもしれないけど、でもそれはあくまで後天的だよな」

「普通に育てば……ということは普通じゃない育ち方をした……」

「兄弟が全員男でお母さんもない父子家庭とか？」

「そうではありませんわ。例えば家の中に男しかいなくても、学校に行けば同性の友達はいくらでもいるはず」

「学校でも女嫌いで男の子とばかり遊んでたとか。かなりの腕白娘で実はガキ大将だったとか。ついでに中学時代はレディースのヘッド」

その後も思い付く限りの意見を交わしたが、ここであれやこれや言っているって始まらない。次第に二人とも言葉少なになってくると、梅子は「独自に調査してみますわ」という言葉を残して今度こそ本当に帰って行った。

だいたひかるって今何してんのかな

明くる朝、私の身体は見事に復活していた。さすがは現役JKである。

いつもと同じ時間に家を出て同じ電車に乗りいつも通りの時間に学校へ行ってみる。ちょっとした違和感。一日休んだ後に訪れる教室は普段と少し違って見える気がするのは私だけだろうか。私だけで思い出した。だいたひかるって今何してんのかな。

「オナさんおはよう。風邪大丈夫う？」

席に着くなりネチっ子が近付いてきた。いつにも増してニヤけ顔である。大丈夫、と聞いてくる割にはさほど心配してくれたようにも見えない。昨日はメールもくれなかったし。

「うん、まあ何とか。昨日梅子がお見舞いに来てくれたんだよね」
「へえ梅ぴよんがねえ。それよりさあ、紅ちゃんどこ行こうか迷ってるんだけどさあオナさんどっか良い所知らなあい？」

やっぱりな。今のコイツの頭の中は那珂乃紅のことで一杯なのだ。まあ無理もないか。あれだけの美人に直接手渡しでラブレターを貰えば、世の男の九割方は天にも昇る思いだろう。

それにしてもどうしたんもんだろう。目の前のオタク的青少年は、すっかり那珂乃紅と付き合えると思ひ込み浮かれまくりだ。だが実際はそんなことはなく、単にこの私に格の違いを見せ付け、悔しい思いをさせるためだけの、駒として使われたに過ぎないのだ。

その週末のデートとやらも本当に行くのかどうかさえ怪しいもんだ。ネチっ子には早めに奴の悪事をバラした方がいいのだろうか。しかしなあ、親友のこの嬉しそうな顔を見るとなあ、もう少しの間だけでも良い夢見させてやりたい気もするんだよなあ。

というか那珂乃紅の本心がイマイチよく分からないんだよね。もし私が那珂乃紅の立場であれば、こんなにも早く敵に手の内を明かしたりはしないだろう。敵が悔しがる姿を思う存分見たいのであれば、何食わぬ顔で奪った彼氏といちゃいちゃするところを、これでもかと思せつける方がよっぽど効果的だ。

一昨日の時点で、私の目の前でネチっ子が自分の手に落ちたところを見ることができたので、あるいはそれで満足したのかもしれない。「今回のことは大目に見てやる」って言ってたしな……

「ここはさあやっぱさあベタベタだけとおランドかシーがいいかなあってオナさん聞いてるう？」

ネチっ子とは机を挟んでの至近距離で相対してはいるものの、私は那珂乃紅の魂胆についてあれこれ思考を巡らせていたので、彼の声は右の耳から左の耳へと中央特快並みのスピードで通り抜けて行ったのだった。

「あ、ごめ。で、どこがいいって？ 上野動物園？」

「もおうそんなの今どき小学校の遠足でも行かないよお。真面目に考えてよねえ」

「だったら映画でも観ればいいじゃん。田倉シネマニアなんだし。ほれ、3Dで今話題騒然のアレ、なんだっけ、エクボーじゃなくって」

「アバターでしょお。そんな昭和時代なオヤジギャグとかいらんない

からあ。つうかそれ、一回言ってみたかっただけでしよう」

へっへっへバレたか。

「ていうかあアバターなんてとつくに上映期間終わってるよお。オナさん情報古い」

「そうなの？」

「まあねえ確かに映画はデートの定番だけどお、それはさあ実際に付き合い始めてからのの方が良いよねえ」

「え、何で？ いいじゃん。ロマンチックでエロチックでスリリングなラブストリーとか見ちゃった日にゃあ、その後お互い身も心も超燃え上がるかもよ」

「だあかあらあそれは正式なカップルの場合だよねえ。映画って一緒に見に行ってもさあ結局上映中の時間は『一人ぼっち』なんだよねえ。だって観ている間はさあ会話もできないわけだし。要するに『同じ時を分かち合う』っていう度合いがさあ低いっていうか薄いんだよねえ。僕たちみたいにさあまだお互いよく知らない場合はさあ、もつと時間と空間を共有できる体験をすることによってさあ、肉体的にも精神的にも距離を縮めて行くことが重要だと思うんだよねえ」

んだよ面倒くせーな。病み上がりの体にネチネチとダルいこと語りやがって。そこまで初デートに対するポリシーがあるんなら初めっから自分で考えろってーの。つーかそれ以前に我が友ネチっ子よ、そなたは那珂乃紅に完全に騙されているのだぞよ……

「じゃあさ、乳搾りとかしてきなよ。マザー牧場辺りで」

半ば投げやりな案を出してみる。するとネチっ子は乳搾りかあ乳搾りねえと東京ウォーカーを片手に席を立ち、ふらふらと教室から出

て行つた。あのーもうホームルーム始まるんですけど。

「あのさ、思ったんだけど直接本人と相談すればいいんじゃない？
あ、ここ行ってみたーい、とかさ、それで盛り上がればそれもまた良しじゃん。そういうのが付き合い始めラブラブカップルの醍醐味っしょ」

昼休みの食堂で福神漬多めのカツカレーを頬張りながら、私は隣で天ぷらうどんのエビ天の衣だけ剥がして食べているネチっ子に話しかける。那珂乃紅の意図が掴めぬ内は、ネチっ子にはまだ黙っていることに決めたのだ。今の時点で下手に本当のところを喋ってしまうと、「紅の豚」作戦に支障をきたすかもしれないからね。よく言うでしょ、敵を欺くにはまず味方からって。

「それはダメだよお」

海老の尻尾を噛み砕くネチっ子。

「なんでよ？」

「デートプラン、特に初デートにおけるプランニングで男の器量が試されるからねえ。ナイスなコースを提供することによってえ一気に男を上げることができるう。つまりこれは試練であるとともにチャンスでもあるんだよねえ。それにさあ紅ちゃんはさあ学校のマドンナなんだからあ、公然と特定の男子と会話するわけにはいかないでしょお」

そう言った後でネチっ子は、チクワ天をストロー代わりにしてうどんつゆを啜った。しかしまだ若干熱くて口の中を火傷したようだ。

なるほど、那珂乃紅のヤツ、上手いこと吹き込んだな。ネチっ子にしてみれば、告白してきたのは向こうなんだし、本人も付き合う気満々なわけだから、クラスは違えど休み時間になれば会ってお喋りしたいに決まっている。

だが那珂乃紅にしてみれば、私を悔しがらせることが（実際はノーダメージだけど）目的であって、ネチっ子と付き合う気などさらさら無いわけだから、別にネチっ子には会いたくもないし話したくない。

かといって告白した手前、あからさまにネチっ子のことを無下に扱うのもこれまた不審に思われてしまう。そこで自らの「校内一のマドンナ」というポジションを全面的に押し出すことによって、「ホントは一緒にいたいけど、立場上おっぱいには会えないの。ゴメンなさい」的状況を作り上げ納得させてしまったというわけか。

声を張っての大西ライオンで締めくくる

「千夏様、大変なことが判明しましたわ」

放課後、ドトールで梅子と落ち合って「紅の豚」作戦緊急会議である。ネチっ子はいえ、その後もぶつぶつとデイトプランを練り続け、授業が終わると大した意見も言わない私などには目もくれず、一人さっさと下校して行ったのだった。

「お、やっぱ重大な秘密が隠されてたんだな。綺麗なバラほど棘があるって〜ね〜」

「実はですね」

「待った」

私は今にも真相が語られようとしている梅子のその口を手で遮った。それでも今日一日無い頭を絞って思考を巡らせていたのだ。まずは私の推理を披露してから真実を聞いても遅くはないだろう。それに私の考えが正解かもしれないしね。

「色々と考えたんだけどさ、意外とこういうことって想像も付かないようなところに事実が隠されてたりするんだよね」

「そうですわね」

「というわけで、辿り着いた答え。『那珂乃紅は実は男だった!』
どうよ?」

都市伝説を語るセシルバーグ並みの眼力で言ってみる。これ結構自信アリマス。

「え? 男?」

「そう。恐らく中学二年生の夏ぐらいだな」

「何がですか？」

「乙女に目覚めちゃったのがさ。那珂乃紅には美人のお姉さんがいるのよ。で、ある日そのお姉さんが留守のとき、好奇心と出来心で姉の制服を着てみる。変な気分になりつつもスカートでスースーする股間がちよっと気持ち良い。調子に乗った那珂乃紅は、ついでに洗面台に行ってお母さんの化粧品を使ってメイクなんぞしてみる。そして出来上がった自分の顔を見てあらびっくり。俺って、俺ってこんなに綺麗な顔してたのか……とね。」

そっからはもう止まらない。走り出したら止まらない。お姉さんの留守の隙を見てはファッション雑誌を読み漁り、お母さんの化粧品を騙し騙し失敬しつつメイクの腕を上げていく。顔をいじるだけに飽き足らず、那珂乃紅はやがて脛や脇に生えるムダ毛も処理し始めた。そして遂にどっからどう見ても女の子にしか見えない姿へと生まれ変わったのだ。

美しく変身できれば誰かに見てもらいたいという欲求が湧き上がるのは当然のこと。完璧に女装した那珂乃紅は、家を飛び出し街へと繰り出した。道行く人が自分に不躰な視線を向けてくる。もしかして綺麗だと思っているのは自分だけで、実は女装しているのがバレてるのかも。やっぱりただの変態にしか見えないのかな……と少々弱気になったところへちよっとワイルドなイケメンお兄さんが近寄って来た。『お前女装とかしやがって気持ち悪いんだよ!』などと罵声を浴びせられるのかもしれない、と身を固くしていると、彼の口からは予想もしなかった言葉が飛び出した」

「何と言ったんですの？」

「『あの、もし良かったらこれから食事でも行きませんか?』とね。そう、ナンパである。女装した那珂乃紅は何と男にナンパされたのだ! もちろんその場合は断ったが、彼の言葉に俄然自信を持った那

珂乃紅はその後も堂々と街を練り歩く。するとどうだろう、来るわ来るわ、下は中学生から上は還暦を迎えていそうなロマンスグレーのダンディまで次から次へとナンパの嵐の雨アラレ、おまけにアイドルだかA Vだか判然としないような怪しげなスカウトまで来ちゃう始末。そう、道行く人が自分を見ていたのは女装がばれていたからではなく、単純に美人だったからなんだな」

「で、それに気を良くした那珂乃紅は、そのまま女としてこの高校に入学したとおっしゃるんですの？ そんなの漫画やドラマの世界じゃあるまいし、すぐにバレて退学ですわ」

「そこはさ、きつとアレだよ。この高校の理事長が伯父さんかなんかで無理クリ女として入学くみたいな」

「それこそ漫画の世界ですわ。それに見た目はまあ良いとしても、声はどうするんですの？ さすがに変声期後の男の声はどんなに頑張っても誤魔化せませんことよ」

「ふっふっふそんな初歩的な質問をされることはとっくにお見通しよ。あれは裏声だわ。世に言うファルセットヴォイスね。毎日裏声で喋っている内に、ごく自然に出るようになったのよ。バカボンダイの友達にも自分の声が高くて気に入らないからって毎日わざと低い声でしゃべってたなら、そっちが普通になっちゃったおじさんがいるんだから。」

上野アメ横の売り子のおっちゃん達だってすっかりダミ声と化しているしね。とはいっても地声はやっぱり男の声だから、驚いたり咄嗟のときは野太い声が出ちゃうはず。それと生まれが男なら男言葉が染み付いちゃってるのも説明が付くでしょ」

「千夏様の話が本当だとして、バレないように毎日気苦労が絶えない生活を送ってまで女装する意味がおりでして？」

「それがあるんだなあ。那珂乃紅はさ、実はいじめられっ子だったんだよね。子供の頃から身体が弱くて学校は休みがちだった。病弱だから背も伸びないし、たまにしか授業に顔を出さないから当然勉

強も遅れてしまう。その上『紅』なんてくの一みたいな名前も手伝って、『バカでのろまのくの一野郎』と散々からかわれていたわけだ。

もちろん友達もできるはずもなく、少年那珂乃紅は次第に『僕なんて生きていても仕方ないんだ……』と自己否定のスパイラルに陥るのである。そんなときに女装と出会ったわけだ。これまで誰も自分には関心を持ってくれなかったのに、女装した途端、予想を遥かに上回る注目の集めようチャホヤされように快感を覚え恍惚たる人生を手に入れたのだから、多少の苦労なんてなくともないさゝ」

と最後は立ちあがって両手を広げ、声を張っての大西ライオンで締めくくる。完璧だ。探偵ガリレオ湯川学級の完璧なる推理。我ながら惚れ惚れするわ。

得意満面鼻高々な私を目の前に、しかし梅子の顔は無表情のままである。自分があちこち駆けずり回ってようやく手に入れた情報を、頭の中だけであっさりと見破ってしまったこの私に言葉もないのだろう。と思っていたのだが、梅子の口から出てきたのは、そんな私のイマジネーション溢れる推理を遥かに凌駕する恐ろしい事実であった。

「では本当のことを言いますわ。その前にまず那珂乃紅は生まれも育ちもれっきとした女ですわ。それと彼女は一人っ子。兄弟姉妹はおりませんことよ」

「な、なんだって……どこでそんな情報を」

「性別や家族関係は戸籍謄本と住民票を見れば一発ですわ」

ブサイク梅子は黒縁眼鏡をきらきらりと光に反射させ、事も無げ

に言っただけだ。

「戸籍……ねえねえそれってさあ、役所で貰ってくるやつだよ？
よく分かんないけど本人じゃないと見してくんない重要書類なん
じゃないの？」

「おっほほそんなの委任状があれば簡単に第三者でも取得できる
んですよ」

高らかにザーマス笑いの梅子。

「え、でも委任ってことはさあ、要するに本人が依頼するってこと
でしょ？　那珂乃紅に書いてもらわないと無理なんじゃないの？」

「千夏様、委任状なんてコピー用紙か何かの適当な白紙に型通りに
代理人に申請してもらう旨を書いて、三文判押せば一丁上がりです
ことよ。筆跡鑑定するわけじゃございませんし」

勝ち誇ったようにコーヒークップに口を付ける梅子。ホントかよ……
：そんな簡単に第三者が見れるのかよ……そんなザルみたいなセキ
ユリティじゃあ個人情報保護法もへったくれもあつたもんじゃない
わ。つーか梅子の言うことだ、私が無知だと思って丸め込む作戦か
もしれん。眉唾の可能性アリ。話半分に聞いておこう。

「じゃああの男言葉はどう説明するのさ」

「あれはですね、那珂乃紅は幼少の頃より少年漫画及び少年アニメ
が大好物で、そういう類の物ばかりテレビで見っていたために男言葉
が口癖となってしまうたのですわ。ちなみにこれは那珂乃紅のお母
様に直接聞いてきたので間違いのない事実ですわ」

母親に突撃取材い！？　裏をかいた奇襲が功を奏するからっていく
らなんでも敵の懷に飛び込み過ぎだろ。しかも親に直接聞くくらい

なら住民票とかいないんじゃない……

「で、大変なことって何さ」

「ええ、実は那珂乃紅は本当に良太さんのことが好きらしいのですわ」

？

「ええと、どうも耳の調子が悪いな。はい、もう一度どうぞ」
「ですから、那珂乃紅はの告白は本物だということですよ」

な……

ヌワラエリヤでおもてなし

「まったくまたまた〜毎度毎度梅子さんの創作妄想虚言ストーリーに騙される千夏さんじゃありませんわよ。冗談はそのぼつつんカツラと黒縁眼鏡と出っ歯入れ歯だけにしろってーの」

ふふふんと鼻で笑い飛ばしながら私は温くなったカフェラテをぐいぐいと飲んだ。

「あら千夏様、何で作り話だと決め付けるんですの？」

「なはははんでってそりゃあそうでしょ。だって那珂乃紅は一目惚れしたって言ってるんだよ？ ご存知の通りあの女は自らを校内一のマドンナと認識しているわけだ。竣工したら634メートルにもなる東京スカイツリーよりも高い高いプライドの持ち主が、自分から男子に告白したという事実だけでも受け入れ難いのに、その相手が選りによってねっちねちネチっ子っ田倉って。千歩譲って女生徒の黄色い声援を一身に浴びるイケメンのバスケット部キャプテン辺りに告白っていうんならまだ納得できるけどね、ないないないない」

私は大げさに顔の前で手を振る。するとなぜか梅子は目に涙を溜めて、絞るような声で言った。

「千夏様、ご自分のお友達なのにあんまりじゃありませんこと？」

「ちよちよい何で梅子が泣くのさ？」

「そんな友人を軽蔑するような千夏様見たくありませんわ」

「いやだから別に軽蔑とかそういうことじゃなくってさ。もちろん田倉は私の大事な親友だからね、女の子に好かれ彼女が出来るんならそりゃあ大いに喜ばしいことだとは思うよ。でもほら、あいつは

どちかってーと第一印象で勝負する感じじゃないでしょ。合コンでお持ち帰りできそうなタイプじゃないでしょ。長く付き合ってみて初めて良さが分かるっていうかさ、後になってじわじわボディブローが効いてくるっていうかさ、噛めば噛むほど味が出るっていうかさ、いわゆるスルメ男子ってヤツ？」

お、いいね、スルメ男子。我ながらナイスネーミング。眼鏡男子、草食系男子に続いてこれから流行る予感。

「そんなの世間では誰もイワユっておりませんことよ。それに良太さんは充分格好良いですわ。坂城龍馬なんかよりよっぽど良い男ですわイケメンですわ」

ネチっ子がイケメン！？ 梅子のさらなる衝撃的発言に私は思わず彼女の額に手を当てた。私の風邪がうつって脳細胞の美的感覚を司る部位が熱に侵されたか？

「何なさっているんですの？」

そんな私の動作を冷ややかな目で見詰める梅子。

「え？ あ、いや、何でもない」

まあいいか。蓼食う虫も好き好きだしね。それに目の前の少女は、母娘でゴスロリファッションに身を包み、パントマイムを披露しながら世界平和目指しちゃう、泣く子も黙る松竹梅子様だしね。

「まあ田倉が一目惚れするに相応しいかどうかはこの際置いてだな、実際どうやって那珂乃紅の気持ち達が本物だと確認したのだね？」

ちよつと上から目線の探偵風に言ってみる。

「お母様がおっしゃってましたわ。学校から帰ってくると毎日のように夕食の一家団欒の席で、『今日田倉君と三回も目が合っちゃった』とか『今日の田倉君は寝癖が付いたまま学校来てた』とか『今日の田倉君のお昼ご飯はキツネソバとタヌキウドンだったんだよ』とか楽しそうに話すのだと」

「ま、まじで……それは正に恋する乙女的視線じゃないですか。っーかさ、さっきから母親に話聞いたって言ってるけど、梅子、那珂乃紅と面識ないんでしょ？　いくら学校が同じだからって、クラスも違う子の家の親と直接会ってよくそんなプライベートなことまで喋ってくれたね」

「今日、区役所で那珂乃紅の戸籍謄本と住民票を取得した後直接家を訪ねるとお母様が対応してくれましたわ。そして学校名と『田倉良太君の友達です』と言ったら急に相好を崩してあっさりと家の中に招き入れてくれましたのよ。ロイヤルコペンハーゲンのティーカップにヌワラエリヤでおもてなしですわ。話が弾んで幼少の頃のこととも色々聞き出せたというわけですわ」

「え、今日って学校は？」

「授業なんかよりも作戦の方が大事ですわ」

シレッと答える梅子。いや、違うぞ梅子。「紅の豚」は確かに重要な任務だが、授業を放棄してまで調査するほどのことでもないと思うぞ。それに学校に行っていないんなら変装しなくたっていいんじゃない？

「でもさ、梅子が訪ねてきたことを、お母さんは那珂乃紅に喋っちゃうんじゃない？　そしたら奴のことだ、梅子にも何か仕返ししてくるかもよ」

母親が、娘のプライベートでデリケートな恋心を、本人の承諾もなしに第三者にペラペラと喋ってしまったのだ。那珂乃紅にしたら母親を許せないのはもちろん、自分の留守中に勝手に家まで押し掛けてきた梅子にも怒りを覚えるに違いない。

「その点はぬかりありませんことよ。変装せずに、名前も『天王洲愛瑠』で通しましたから」

お、出た。懐かしの天王洲愛瑠。

「ふーん……だけどそんなに田倉が好きなら何でもっと早く告白しなかったのさ。入学したときから好きだったんでしょ？ だったら別に夏休み跨いで二学期になるまで引き延ばさなくってもいいんじゃない？」

「そのへんは女心と秋の空ですわ」

「なんだそりゃ」

「好きになったからっていきなり告白できるとは限りませんことよ。自分の中に生まれた恋の種に水をやり少しずつ育てていって、芽が出て葉を付け広がり花が咲き、果実が実り熟したときが告白のときですわ」

「お、詩的だねえポエムだねえ」

「そしてその時がいっ訪れるのかは本人にも予測不能。今回このタイミングでの告白は恐らく那珂乃紅本人も予期していなかったことだと思われますわ」

へえ。

「私の分析によると那珂乃紅は恋に臆病な人種ですわ。確かにマドンナ級の美人ではあるもののその美貌によるプライドが却って仇と

なり、これまで何人もの男からアプローチをかけられてきたにも拘らず『もつと自分に相応しい相手がいるはず』と理想ばかりを追い求める結果、誰とも交際せずにここまで来てしまったに違いありませんわ。

だから本来ならば、まだ良太さんに告白することは考えていなかった。というより告白せずに遠くから見守るだけで満足だったのかもしれない。しかしここへきての千夏様のブレイクに危機感を抱いた那珂乃紅は、奪われかけたマドンナのポジションを奪回すべく告白へと踏み切ったのですわ」

「えーと、ってーことはつまりナニかい。那珂乃紅は、田倉が好きだけど、別に付き合えなくても良かったと。片思いの相手を見ているだけで充分幸せだったと。でも私があんなことになって盛り上がつちやっただから、自分が周りから注目されなくなるかもしれないと思い、私から田倉を奪うことによって自分のポジションを再認識させ私を黙らせた。こういうわけ？」

「そうですわ」

「じゃあさ、私と田倉が特に親しくなかったらどうするつもりだったの？」

「そこまでは知ったこっちゃありませんことよ」

何だかイマイチ府に落ちないまま梅子と解散した。美女と野獣、ノートルダムのせむし男、シラノ・ド・ベルジュラック。美人とブ男の恋物語りは昔から連綿と語り継がれており、悲恋もあれば想いが実ったものの中にはあるだろう。しかしそのどれもが男からの熱烈なアプローチによるものだ。初っ端から美女側からのラブコールというのは聞いたためしがない。

しかし梅子もネチっ子をイイオトコだと言った。那珂乃紅しかり。

今のところ二対一で私の負けである。仮にも梅子も那珂乃紅も間違
いなく美少女の部類だ。その二人が揃ってそう言うのであれば、私
の審美眼が間違っているのかもしれない。だんだん自信がなくなっ
て来たな。よし決めた。このままじゃモヤモヤして仕方がない。那
珂乃紅に直接問い質すことにしよう。

もっと恭子さんみたいな女王様気取りで、グルーピー的取り巻き連中を引き連れ

次の日学校へ行くと、ネチっ子はまたも朝からデートプランに頭を悩ませている模様。かなり神経を集中しているのか、彼の席のすぐ傍を通っても私に気付かない。「散歩の達人」を一字一句見逃さず、睨み付けるように読む真摯な姿勢には感動すら覚える。とても声をかけられる雰囲気ではない。

週末はいよいよ明日である。昨日の梅子の話が本当であれば、明日はマドンナとマジデートということで、それは恐らくネチっ子の人生の中で初めてにして最大のイベントなのだ。

今のネチっ子は、この舞台上で審査員と聴衆の心奪う演奏を披露し見事優勝すれば、夢にまで見た世界デビュー間違いないのビッグタイトルのなかったコンクール本番を直前に控えたピアニストの卵も同然、そっとしておいてやるのが真の優しさというものだろう。

昼休み、私は那珂乃紅の在籍するA組に単身乗り込んだ。乗り込んだ、と言うと勇ましい感じで聞こえは良いが何のことはない、実際は廊下に立ったまま教室の入り口の陰に隠れて顔を半分だけ出し、チラチラと中の様子を窺っていただけである。チキンである。だって他のクラスとか知らない人ばかりだし、友達いないしい、緊張するもんね。

教室の中では那珂乃紅を中心に、十人ほどのクラスメートが男女問わず和気あいあいと談笑していた。なかなかいい雰囲気だ。私的に那珂乃紅は、もっと恭子さんみたいな女王様気取りで、グルーピー的取り巻き連中を引き連れているのかと思っていたのでちょっと意

外だった。

その中の一人の女子が私の視線に気付き、那珂乃紅の肩を叩き私を指差した。笑顔を崩さず、あら、という顔をしたまま那珂乃紅は、ちよつとごめんね、と周りに言っただけで席から立ち上がり私の方へと歩み寄って来た。

「岡崎さん、どうしたの？」

にこにことした那珂乃紅は、先日男言葉を連発した少女と同一人物とは思えないナチュラルかつ女性らしい仕草で私に話しかけてきた。そのあまりの「女」への変貌ぶりに面食らい思わず声の上擦ってしまった。

「え、あ、話があるんだけど……ちよつといいかな」

人差し指を立てて上に向けくいくいと動かし、屋上で話しましょうのジェスチャーをする。私が歩き出すと半歩後ろを黙ってついてくる那珂乃紅。自分で言うのもなんだけど、今の私たちはかなり注目を集めているみたい。

それもそのはず、クリス・チャンディオール高校元祖マドンナとユ―チューブのPVで一躍スターダムにのし上がった二人が並んで歩く姿は今までにない光景で、その迫力に廊下ですれ違う女子生徒は思わず後ずさり道を開け、階段にたむろし箒とチリ取りでスターウォーズごっこに夢中だった男子生徒は、その動作をびたりと止めて私たちに視線釘付けである。

屋上に出る。良い天気だ。初秋の爽やかな風が髪の毛を揺らす。

「それで、話って何？」

周囲にはお弁当を広げる生徒もいる。私は人気のない、屋上の端の方へと歩いて行った。私と二人きりになったにも拘らず、那珂乃紅は男言葉を使わない。やはり学校では可憐なるマドンナを演じることに徹しているのだろうか。

「言葉遣いが違うんだね」

取り敢えず気になるポイントなのでそこら辺から探りを入れてみる。学校では普通に女性として喋っているのであれば、那珂乃紅が、実は男言葉を喋るという事実は私しか知らないわけで、彼女にしてみれば周りの人間にはバラされたくない秘密だろう。弱みを握っておけば、何かと有利に事を進められる。だが、私の発言に少しは動揺するのかと思いきや、当の本人はまるで意に介さない様子だ。

「ええ？ 言葉遣いってどういう意味？」

「しらばっくれなくてもいいじゃん。私しかないんだし」

「言ってる意味がよく分かんないな」

那珂乃紅は眼下の街並みを見詰める。私も釣られて同じ方へと視線を向けた。今日は遠くの富士山が良く見える。やや深めの茶色の髪が風に靡いて白く滑らかな頬が姿を現した彼女の横顔は、うっとりするほど美しかった。

「本気で言ってるの？ この間私と話したとき、自分のこと『俺』って言ってたじゃない」

「冗談やめてよね」

私の方に振り向いて、真顔で答える那珂乃紅。その眼差しは真剣で、

とても嘘を付いているようには見えない。こいつも梅子同様虚言癖の持ち主なのか？ 顔色一つ変えずに嘘を吐き通せるタイプなのか？ それとも私の聞き間違いだったのだろうか。真っ直ぐな視線に思わずたじろいだ。

「ま、まあいいや。それはまあ置いといて。今私が知りたいことは一つだけ」

「なに？」

「別に私のことは嫌いでも何でもいいんだけどさ、那珂乃さん、本気で田倉のことが好きなの？」

その質問に、じっと私を見据えたまま那珂乃紅ははっきりと答えた。

「もちろん本気よ」

その口調、その瞳に嘘偽りはなかった。そして彼女の気持ちの間違はなく本物だと確信したのは、答えた後、彼女の顔が次第に赤みを帯びて、首から上の透き通るような白い肌が、文字通り美しい紅に染まったのをはつきりと見たからだった。

もう疑いを挟む余地はない。それだけ聞ければ充分だった。私は那珂乃紅を一人残しその場から立ち去ろうとして言い忘れたことがあることに気付き、足を止め振り返る。

「田倉の奴さ、あなたが人生で初めての彼女だから、優しくしてやってね」

「え？ だって岡崎さんと付き合ってたんじゃない……」

この人、本気でそう思ってたのか。

「それは那珂乃さんの誤解だよ。じゃ、田倉のことよろしく頼んだよ。それと明日のデート、楽しんできてね」

私は陽の光を横顔に感じつつ、やや気障っぽく言って那珂乃紅と別れた。

カレシロタケシ

「何だか消化不良気味になっちゃったけど取り敢えずこれにて『紅の豚作戦』は終了だね」

放課後、またもや梅子とミーティングである。ミーティングと言えはここ最近はおトールかサイゼリヤだったので、気分を変えて今日はミスドに行ってみる。するとラッキーなことにドーナツ全品百円祭り開催中だった。

「まあでもこれで良かったんじゃないやありませんこと？ 良太さんも騙されたわけではないことが分かったのですし」

「そだね」

私は昔からミスドに来たら必ず注文するゴールデンチョコレートを齧る。しかし。

「ねえ梅子、何かこれ、味落ちたんじゃない？」

どうも生地感じが以前と違うような気がする。

「そうですか？ 千夏様の思い過ごしじゃございませんこと？」

シヨコラフレンチエンゼルシヨコラを一口で一気に半分ほど齧り取り、はみ出た生クリームを口の周りいっぱい付けたままの梅子が興味無さそうに言う。

「そおかなあ……」

確認のためもう一個買ったココナツチョコレートを一口いってみる。私の中でゴールデン&ココナツチョコレートの二つは、ミスのドーナツの中でも群を抜いて好きなメニューなのだ。チョコレートの生地が好きなのはもちろん、ゴールデンのかりかり粒粒とココナツのサクサクシャリシャリが堪らないのだ。ミスドにおける永遠の一位二位。これはいわば2009年世界陸上ベルリンでの女子百メートルにおけるジャマイカ勢の如きワンツーフイニッシュである。

「やっぱ変わったって」

どう表現していいかは分からないのだが、やはり微妙に食感が違う気がする。粉の配合を変えたのだろうか？ これではせっかくのワンツーフイニッシュが台無しである。そんなことじゃ今度の世界陸上、思わぬ伏兵にやられちゃうわよ！ と右手に持ったココナツチョコレートをまじまじと見詰めていると、突然向かいに座る梅子が、私のドーナツ目がけて大口を開けて身を乗り出してきた。

その電光石火の動作に呆氣に取られた後で右手元を見ると、私の愛しのココナツちゃんは、ほぼ刈り取られていた。くっきりと残された歯型が痛々しい。

「こら梅子！ 何勝手に食べてんのよ！」

「だって味に不満がおりなんでしょ？ ですから私が頂いたままですわ。ドーナツだって文句言われながら食べられるより、美味しいと感じてくれる人の口に入った方が幸せというものですわ」

「あああ私のココナツちゃんが……」

仕返しに梅子のドーナツを奪ってやろうと思ったのだが、ヤツは既に自分の分は平らげた後だった。

「でもさ、一つだけ不思議なんだけど」

おかわりいかがですか？ と笑顔の素敵な女子大生風オネエサン店員が、絶妙のタイミングでカフェオレを注いでくれたお陰で、梅子の暴挙によるメンタルなダメージから回復した私は、再び話題を那珂乃紅へと戻した。

「何がですか？」

「男言葉のこと。『こないだと口調が違うね』って言ったらさ、真顔で『何のこと？』って返されちゃって。自分のことを『俺』って言ったことすら覚えてないような感じだったんだ」

「ああそんなこと」

「そんなことって？ 梅子何か知ってるの？」

「言いませんでしたっけ？ 那珂乃紅が男言葉を話すときは非常に興奮した状態にあるときなのですわ。そして本人に自覚症状はない。つまりアレと同じですわ。方言」

「方言？」

「地方から上京してきて何年か暮らしていると、次第に方言が抜けて来ますでしょう？ でも本人は完全に標準語で喋っていると思っ
ていても、あるとき何かの拍子でぼろっと地方の言葉が出てしまう
ことがある。そのとき方言を使ったことは本人の意識には無い。それと同じですわ」

「なる……確かに漫才ばかり見てると関西弁とかうつっちゃうもんね」

「それとはまた違いますけど。ちなみに方言が無意識の内に口から出てしまうのを専門用語で『突発性先天的潜在言語発音症』と言って、医学的にも認められているんですのよ」

「突発性なんて……何だって？」

「突発性先天的潜在言語発音症。つまり脳内に先天的、潜在的に記

憶された言葉は、完全に消し去ることはできないということですわ」
「へええ詳しいね。でもさ、私なんか埼玉生まれの埼玉育ちで関東圏から出たこと無いから、却って方言は懂れるけどね。それに無理に修正する必要もないと思うけど」

「なーんていうのは真っ赤な嘘っぱちですわ」

「ん？ 何が？」

「そんな名前の症状は存在しませんことよ。ホント千夏様って人を信じやすいんですね。でもそんなところが堪らなく可愛いのですけれど」

「なっ」

また騙された！ 言いたい放題言った梅子は、私の怒りが爆発する前に自分の荷物をまとめ、「失礼致しますわ」と言いながらさっさと店から出て行ってしまった。

「千夏、大丈夫なのか？」

家で晩御飯中、今日会社で取引先の営業マンが手土産に持ってきたという酒盗を肴に芋焼酎「魔王」をちびちび舐めているバカボンダイが、おろしポン酢をたっぷり載せた揚げたてできたて一口サイズチキンカツを、今まさに私が口の中に入れようとしているところに唐突に質問をぶつけてきた。

私はバカボンダイの瞳を見据えたまま、とりあえずその質問は置いて、チキンカツをじっくり味わってからご飯を茶碗から箸で掬い取り一緒に口に入れ良く噛んで飲み込み、汁椀を手に取りなめこと豆腐の味噌汁を啜り、三角食べが滞りなく一巡した後でようやく言葉を発した。

「大丈夫って何が？」

先程からバカボンダディがあまりにも美味しそうに酒盗を食べているので、私も箸を伸ばしてちよびっとだけ失敬してみる。

「うええ何これ！？ 辛っっ！ つーか魚臭っ！」

酒盗なる見た目からして純度100%の酒のアテ系珍味は、塩辛よりも塩辛く、塩辛よりも生臭く、とてもじゃないが美味しいなどという感想の出てくる食べ物ではなかった。私の座右の銘である「青は藍より出でて藍より青し」の正に逆である。しかめっ面をしてウーロン茶で口直しをしている私を「子供にゃこの味は分かるめえ」的したり顔で見詰め、再び酒盗を口に運ぶバカボンダディ。ちよつとムカつく。

「明日から夢の五連休で巷じゃ上を下への大騒ぎだぞ」
「え？」

五連休？ 夏休みが終わってまだ間もないというのにそほんなバカ。
カ。

「何だ知らないのか？ 土曜日日曜日に加え月曜日が敬老の日、水曜日が秋分の日、そしてその二つの祝日の間に挟まってる火曜日もついでだから休みにしちゃいましょうよ部長」的なノリで採用された国民の休日、の合わせて五日間。世間ではこれをシルバーウィークと名付けた。ちなみにこの大型連休が次回出現するのは2015年である」

「シルバー……ウィーク」

ずまままマジですか。本気で知らなかった……私は思わずカレンダー

ーを見る。ホントだ。日付が真っ赤っ赤。我がクリス・チャンディ
オール高校は第一と第三土曜が休みである。だから明日の土曜日も
休みなわけで……箸と茶碗を持ったまま身体を捻り、呆然とカレン
ダーを眺めてると、バカボンダディは更に追い打ちをかけてきた。

「まさか現役女子JKであるイイ若者が、せっかくの連休を家でゴ
ロゴロして過ごすなどということはあるまいな？」

酔いも手伝ってか、バカボンダディの目はいつにも増して挑戦的で
ある。ついにはJKが既に「女子高生」の略だから「女子JK」は間
違ってるぞ。

「ももつもモチのロンでスケジュール埋まりまくりに決まってるじ
ゃん何を今さらやだなあお父さんたらあはははは」

「ほおお。では明日からどういう予定が入っているのか発表しても
らおうじゃないか」

「そそっそそんな思春期真っ只中の乙女のプライベートなことな
んだから小学生じゃないんだしいちいち親に言わなくなたっていいじ
ゃん別に」

「そうか、それは残念だな。プレゼンの内容如何では臨時小遣いを
やっても良いと考えていたんだが……そうかそうか言いたくないの
か、じゃあ仕方がない」

「ここっこ小遣い！？　ねえねえいくらくれるの？　教えるからさ、

あ、明日はさ、デートだよデート！　朝っぱらからイケメン彼氏と
デイズニールランド&シーに行くんだ、だから三万ちようだい！」

「ふうん彼氏ねえ……名前は何？」

な、名前！？　この一瞬の間でそんなとこまで考えてねー。

「名前はね、えーとえーと彼氏彼氏……カレシロタケシ、なんつっ

て」

ツマミ系からいよいよ本番の食事に移行したバカボンダディは、中途半端なダジャレで見事撃沈した私に一瞥をくれると視線をテレビに移し、それ以降、私の問いかけに応じることは一切なかった。

劇団甚三紅 第一回公演「黄金の国ジパング」

「くっそーしくじった！ マネーゲットし損ねた！ つーかバカボンめ、私に予定がないことを知った上であんな質問してきたに決まってる。最初っから小遣いくれる気なんてなかったくせに！」

食事を終えて部屋に戻り、実の父親にしてやられた悔しさにベッドの上で一人もんどりうつ。まあ小遣いのことは半分冗談だろうから取り敢えずいいとして、どうしよ、本当に何にも予定ないや。

龍馬は現在絶体絶命男と放浪中（恐らく佐渡島）だし、ネチっ子はまさかのマドンナ那珂乃紅と人生初のデートだし、すると残るは……梅子？ 梅子かあ。梅子ねえ。変態ロリータだけど、それだけに一緒にいる分には面白い存在ではある。でも二人きりで長い時間を過ごす相手じゃないんだよね。なんて言うか、エガちゃんタイプ？

彼の場合、芸風的にもビジュアル的にも予期せぬタイミングで瞬間的突発的に画面に現れると破壊力抜群でとてつもなく面白いけど、じゃあエガちゃんの冠番組とか始まっちゃった場合どうする？ 三十分ないし六十分間出ずっぱりだったら確実にお腹いっぱいだよ、っていうのと似てる気がする。

あらびき団が面白いのは、一回の放送で出演するのが六〜七組の芸人で、なおかつネタの時間も短くテンポが良いからである。ああ、あともうちよつと見たかったな、という絶妙のタイミング。これが毎回三十組四十組と出て来て御覧なさい。食傷気味の消化不良で翌日便秘になること間違いなし、なのである。

まあいいや。明日になってから何か考えよう。さ〜て一つ風呂浴び

てくっかな」と部屋で下着姿になったところで携帯が着信。

「ハロ〜千夏ちゃん、元気だった？」

「香織さん!？」

電話の相手は誰だろう、ビーグルスPV夏合宿以降綺麗さっぱり姿を見せなくなった懐かしのナイスバディ香織であった。下着姿のままでいるとまた風邪を引きかねない。かといって脱いじゃった服を着直すのも面倒だしそもそも電話してるからそんなこと土台無理な話だ。というわけで私はそのまま布団の中に潜り込んだ。

「どうしたんですか今までどこにいたんですか何してたんですかお久しぶりです」

「そんな一気に捲し立てないの。実はね、私が出るお芝居が明日から始まるんだけど、良かったら見に来ない？」

「え、芝居ってことは香織さん、劇団に所属してたんですか？」

さすが役者の卵。学生やりつつ入団しちゃうなんてプロを目指す者はやはり志が違いますな。私が知ってる劇団つーと、劇団四季とワハハ本舗と劇団☆新幹線とあとは……劇団ひとり？

「所属っていうかね、立ち上げちゃったのよ」

「立ち上げた……ってことは香織さんが座長!？ 凄いじゃないですか!」

「座長って言えば聞こえは良いけどね。実際は素人に毛が生えたようなものよ。メンバーもまだまだ少ないし。でもやっぱりね、せっかく芝居するのなら自分のやりたいようにやってみたいじゃない。今までは大学のサークルに入ってたけど、どうもね、方向性っていうか色っていうか私には合わなくて」

「そうなんですか……香織さんの目指すのってやっぱり官能的エロ

ティック女豹系なんですよね？ 杉本彩みたいな」

エロいもんね、香織さん。

「何よ女豹系ってっ！ 別に私は四六時中エロスについて考えてる訳じゃないし誰とでもエッチなことする訳でもないのよ！ 千夏ちゃん私のこと何だと思ってるわけ！？」

「だって香織さん、私と会った次の日に速攻ラブホテルに連れ込んだじゃないですか。海に行った時も脅したりすかしたりあの手この手で私の身体を散々弄んだし」

「モテ……人聞きの悪いこと言わないでよね。それは千夏ちゃんのこと为本当に……それに、私から見たら毎日ソルフエージュしてる千夏ちゃんの方がよっぽどエロいわよ。人のこと言える立場じゃないでしょ？」

ええーそうかなあ私エロいかなあ。こんなに純真無垢でまだ男を知らぬ（女は知ってしまったが）穢れなき身体のうら若き乙女なのに。ソルフエージュは、なんつーかいいわゆる毎日の習慣みたいなもんで、感覚的には歯磨きとかお風呂とかとほぼ一緒なんだけどな。

「そんなことよりどこでやるんですかお芝居」

「ああそうだったわ。場所はね、池袋よ。駅の西口から割と近い所」

これまたお馴染み池袋西口ですか。駅から近い？ もしかして……

「ままままさかの芸術劇場ですか？」

「やあねえ千夏ちゃん、まだ旗揚げしたばかりのプロとも呼べないような小劇団が、あんな大きなところで出来る訳ないじゃない。もうちょっと裏道入った辺りにね、小さい劇場があってそこでやるのよ。知り合いのおじさんが管理してるところでね、お金の無い私たち

に格安で場所を提供してくれたのよ」

「へええあんなところにも劇場があるんですね。ってことは龍馬んちの近くですかね」

「龍馬……ああ前にホテルの部屋を貸してくれた彼ね。そうね、確かにあの近所かもしれないわね。彼は元気にしてる？」

「それがですね……」

私は龍馬が現在、休校して失恋傷心佐渡島ツアーに行っていることを、初めから話すとなると梅子の変装のことから説明しなければならず、そうなるのと千夜一夜物語級に長引くこととなるので、端折ってかい摘んで要点だけを簡潔に話した。

「そうだったの……まあ人生そういうのも大切よね。リフレッシュっていうか心の洗濯っていうか。で、どう？ 明日なんだけど来れそう？」

スケジュールガラ空きの私は二つ返事で快諾したことは言うまでもない。シルバーウィーク初日の予定はこれで決まりねっ。

次の日の午後、電車で池袋まで出て、香織さんからメールで送られてきた住所を頼りに目的の会場を目指す。現在一時半。公演は二時からだ。香織さん曰く、土曜日の今日は昼に一回、明日は昼と夜、で、明後日月曜日が千秋楽で夜の一回、の計四回行うとのこと。

目的地の近くまで来ると、建物の前に十人ぐらいがまばらに集まっていた。どうやらあそこらしい。三階建ての小さな古ぼけたビルの入り口の上には「小劇場縹」という、昔は金ぴかだった違いのない、メッキが剥がれ落ちて錆びかけた、立体的な文字が見て取れた。「縹」ってなんて読むんだろ。

扉の前にはイーゼルが置いてあり、大きなキャンバスが立てかけられている。白のごつごつとした布地には淡いピンクのような、落ち着いた感じの色の絵具で「劇団甚三紅 第一回公演 黄金の国ジパング」とあった。甚三紅って何て読むんだ？ ジンザンベニ？ 一度に二つも読めない漢字に遭遇するだなんて。死んだお爺ちゃん辺りが天国で暇過ぎるもんだから退屈しのぎに孫の漢字能力を試しているのだろうか。

鍋大根やら筑前煮やらけん汁やらへと姿を変えるの

それにしてもなぜ皆さん中に入らないのかが気になる。気にはなるものの、みんなが動かないのでなんとなく私も動き辛い。こういうとき一人で来たことをちょっと後悔する。誰かが傍にいれば会話もできるし、それほど気にならないんだけどな……

私は意識を両耳に集中させ、周囲にいる人たちの会話聞くことに専念した。切れ切れに聞こえた情報を総合すると、どうやら開演は二時半からで、開場が二時ということらしい。携帯で時間を確認するとまだ一時五十分だった。

なーんだ。要するにまだ入り口が開いてないのね。もう香織さんたら、それならそうとちゃんと言ってくれないと。情報は正確に伝えるべきでっせ。

カップルで話し込んだりタバコを吸ったり缶コーヒーを飲んだり本を読んだりして思い思いに過ごす劇団甚三紅の今日の観客たちを尻目に、ちよっと離れたところで一人壁に凭れて空を見上げる。ああ、雲になりたい。好きなときに好きな姿で現れて、風に運んでもらって行きたい場所に一つ飛び。そして消えてしまいたいときは霧となりやがて空気と混じり合い消え去るのだ……などとぼんやり考えてみる。上を向いたまま目を閉じていると、瞼を通して感じられる陽の光が弱まった、ような気がした。

「千夏ちゃん、久し振り」

聞き覚えのある甘い声に目を開けると、逆光の顔が私に覆い被さっている。それはかつて恋焦がれそしてその思いを告げることなく碎

け散ったあの人の顔だった。

「京助……さん？」

「まさかこんな所で会うとはね。香織に誘われたんだ？」

「……」

ヤバイ。ヤバイヤバイヤバイ。一度止まりかけた心臓は即座に収縮を再開する。鼓動が勝手に加速度的に速くなり、瞬く間に心音は平常時の十倍速に到達した。呼吸が止まり身体が固まった。私は瞬きするのも忘れて口を半開きのまま彼の優しく素敵な眼差しを見詰める。

もう完全にふっ切ったはずなのに。この人はゲイで私の想いは絶対に届くはず無いと骨身に沁みて分かっているはずなのに。ダメだよ京助さん。反則だよずるいよ卑怯だよこんなところでぽつんと一人でいる隙だらけの私に声をかけるだなんて……

「千夏ちゃん？ 大丈夫？」

「あ、は、はい大丈夫です。それにしてもどうしたんですか、こんなところで」

精一杯の虚勢を張って努めて冷静を装う。

「実の妹の初舞台だからね。兄としては見ておかないと。それにあの性格だから見に来なかったとなると後でうるさいし」

にっこりと微笑みながら答える京助さん。そうだった。京助さんは香織さんのお兄さんだったんだっけ。ということは今日、彼がこの場にいるのはごく自然な訳で……っ！かどうしよどうしよ会話が續かないよー！

「あ、あの、監督は一緒じゃないんですか？」

京助さん、まだボサ男と付き合ってたのかな……

「監督？ ああ北川のことか。うん、今日は僕だけだよ。そういう千夏ちゃんは？」

「一人です。昨日急に香織さんから電話が来て、それで」

「そっか。じゃあ独り者同士、一緒に見よっか」

そう言う京助さんは、自分の右手でさり気なく私の左手を掴み、やっと開いた劇場の入り口を潜った。え？え？え？何で何で手を繋ぐの？せっかく落ち着いてきた心臓が、再び一気に加速し爆発寸前。ダメダメダメだよ京助さん。でも彼の包み込むような温かく優しい手の感触が私の胸の奥の敏感な部分を刺激し昂らせ、それがじんじんと痛くてでも心地良くてずっとそうして欲しくて振り解けないままの自分がいる。

「千五百円になります」

入り口を入ってすぐのところの受付には、丸い眼鏡をかけたいかにも文学少女時代を送って来たような、ちよつと年上風の女性が立っていた。あ、そっか。お金いるんだ。そりゃそうだよ。芝居だもんね、タダじゃあ見せらんないよね。

「お金お金っ」と

ここでやっと京助さんから手を離すきっかけができてちよつとホッとする。私はバッグから財布を取り出した。このお金が即ち彼ら劇

団員の生活費となるわけだ。つまりはこのお金で人参や大根を買い、鰯大根やら筑前煮やらけんちん汁やらへと姿を変えるのである。そう考えるとなんだかちよっぴり心がジンワリとしてきた。私が千円札を二枚、文学女性に手渡そうとすると京助さんが横からそれを遮った。

「招待券があるから大丈夫だよ」

京助さんが二枚の招待券を差し出すと、文学女性はそれを受け取り点線の入った部分を折り曲げて切り取った。そしてたくさんのチラシと共に半券を返してきた。ぱらぱら捲って見ると、それらは全て、様々な劇団の公演予告のビラだった。

どこの劇団も小さくてお金がないのだろう、手作り感満載である。でも個性的なタイトルや劇団名が多く、なかなか面白そうだと思うとともに、世の中にはこんなにもたくさん、大舞台を夢見る小さな劇団があると知って驚いた。

会場に入る。小劇場というだけあって、舞台と客席との間隔がかなり近い。手を伸ばせば届きそうな距離。しかも舞台といっても学校の体育館のように高くなっている訳ではなく、床の延長線である。階段状の客席は中央が通り道になっていて、左右に十人くらいずつ座れるようになっていて。それが約十段。つまり全部で二百席ということになる。開場したばかりなのでまだ席はガラガラだ。

「いいでいい？」

薄暗い開場の中を、京助さんは左右を見渡しながらゆっくりと階段を上り、最後列の席の舞台から見て右側の一番端の席に座った。せ

つかく知り合いの出る舞台なんだから一番前でも良いんだけどな、
という思いが頭をチラリと掠めたが、もちろん今の思考回路のショートした私には京助さんに意見できるはずもなく、ただ黙って頷き
着席した。

「さすがに一番前で見る勇氣はないからね。目が合ったりしたら香
織もやりにくいだろうし」

独り言のように呟く。

そんなことよりさつき京助さんは何で手を繋いできたのだろう。も
しかしてやっぱり私のこと……いやいやないそれはない。隣に
座るこの彼が同性愛者であることは私が一番よく知っている。だっ
て見たじゃない。海の民宿の夜の布団の中で、ボサ男とキスしてい
るところを。

さっきの京助さんの私に対する行動、あれにはきつと深い意味は全
くないんだわ。きつとあれよ、幼い子供が公園で遊んでいるとき、
「お砂場に行きましょ」と無邪気にお友達を誘い、手に手を取り連
れ立って行くのと同じなんだわ。小学生の兄が、人ごみの中でまだ
小さい妹が迷子にならないように手を引くのと同じなんだわ。そう
よ、そうに決まってる。

過去の想い人に一人妄想し勝手に振り回されていると、会場の照明
が落ちて一瞬の暗闇が訪れた。いよいよ開演だ。今は芝居を観るこ
とに集中しよう。

舞台が照らされると、そこには小さな木製のテーブルとそれに向か
い合うように置かれた二脚の椅子に座った一組の男女が現れた。女
の方は香織さんだ。随分と印象が変わったな、と思ったら、長かつ

た髪がバツサリと切り落とされて、スツキリとしたショートヘアになっていた。自分の知る人が、小さい劇場ながらも舞台に立っていると思うとそれだけで客席にいる私とは違う世界の人なわけで、何だかドキドキする。客席を見渡すと、いつの間にか八割方席が埋まっていた。

男女は共に白い長袖のワイシャツに、白いパンツを穿いている。そして足元は白いスニーカーで、早い話が二人とも全身白である。二人は神妙な面持ちでお互い黙って俯いている。女はナイスバディの香織さんなのでなかなか舞台映えるが、男の方は禿げかかった頭に八の字に下がった眉毛の見るからに情けない中年男で、ときおりちらり、と香織さんの方へ目を向けてはすぐさま下を向き溜息を吐く、を繰り返している。

その又つくくんばりの情けなさがどうにもおかしくて、まだ一言もセリフを発していないのに、ところどころでくすくすという笑い声が起こっている。長い沈黙の後、口火を切ったのは男の方だった。

欠かせないのがカラオキ・スイステム

『今まで黙っていて済まなかった……僕がスパイだったこと』

『はーあ、まさか自分の夫がジェームズ・ボンドだったとはね』

『怒ってる……よね』

『もう怒りを通り越して呆れちゃったわよ。ま、地方公務員にしてはやたらと海外出張が多いという時点で気付かなかった私の鈍さにも落ち度はあるんだけど』

『そんなこと……悪いのは全部僕さ。確かに僕は正体を偽って君と結婚した。でもこれだけは分かってくれ。僕の君への愛は……』

『もうやめましょ。私たちの夫婦生活にはたった今ピリオドが打たれたのよ。さあこれにサインして』

『離婚届か。この忌まわしい紙切れに自分の名前を書き込む日が来るとは思いもしなかったよ』

『今のセリフ、そっくりお返しするわ。それで、今後はどうするつもりなの？』

『今度ボスの指令で来週からジパングに行くことになったんだ』

『ジパング？ ああ黄金が眠ると言われている島国？』

『ああ。極東の小さな国だけあって情報が極端に少ないんだ。とりあえず『サドガシマ』というところで砂金採りをしながら生計を立てようと思っているところさ』

『あら、スパイのクセして任務遂行に必要なお金は貰えないの？』

『ホテルの宿泊費とか』

『もちろんある程度の予算は出るけどね。でも今度の任務は長引きそうだから、日中何もしないでぶらぶらしてたら周りの住民に怪しまれるだろう？ だからゴールドラッシュよろしく出稼ぎにきた外国人という設定で行こうと思っている。』

それにジパングでは砂金を取り放題らしいからね。何でも一年間

働けば、僕たちの国では一生遊んで暮らせるくらいのゴールドが手に入るって話さ。そういう訳だから滞在中目立たないようにするために出来るだけあの国のことを知っておきたいんだが……ひょっとして何か知ってるのかい？』

『ジパングか……あの国には奇妙な文化や習慣が色々あるらしいわ』

『奇妙な習慣？』

『ええ。鎖国を長く続けていたせいで、独特の文化や考え方が発達したらしいの。ジパングは別名『極東のガラパゴス』とも言うのよ』

『それは初耳だな。習慣って例えばどんな？』

『まずは基本中の基本。ジパングの一年は四月から始まるのよ』

『ええ？ 一月じゃないのかい？』

『ジパングでは全てのことが三月で終わりそして四月から始まる。』

三月は別名『別れの月』四月は『出会いの月』と呼ばれているらしいわ。そしてそれは単なる気まぐれではなく自然現象と密接に関連している。ジパン人、あ、ジパングの国民のことね、ジパン人はサクラという花を神の如く崇め奉る民族なのよ』

『サクラ？』

『つまり私たちで言うところのチェリーブロッサムね』

『僕らの国ではあまりお目にかからない花だなあ』

『三月の終わりから四月にかけてこのサクラがジパングの南の方から徐々に北に向かって咲き始める。ジパン人は仕事や学校そっちのけでサクラの開花予報に全神経を集中させるのよ。この時期の新聞やテレビのニュースは開花宣言で一色になるの。ジパン人にとってそれは政治家の汚職事件や芸能人のスキャンダルなんかよりもずっと重要なことなのよ』

『ということは、ジパング全土にサクラが生息しているということなのか』

『そう。さらにジパン人の最上のステータスは、『マイサクラ』を自分の家の庭に植えること。もちろん全ての国民がマイサクラを持

てる訳ではないわ。むしろ持てない人がほとんど。だからサクラが咲き始めると、日本人はこぞってサクラの木の下に集まって、夜通し祈りを捧げるのよ』

『ミッドナイトにサクラに集まり祈りを捧げる民衆……何だか凄く神聖なシーンが目に見えよ』

『ちなみにジパングには約六千種類ものサクラがあるらしいわ』

『それは凄い』

『そしてこのサクラの下で祈りを捧げる行為を日本人は『オハナミ』と呼んでいるわ』

『オハナミ……なんてエキゾチックでオリエンタルな響きなんだ』

『オハナミには準備しなければならないものがいくつかあるわ。まずはお酒』

『神聖な行事にはつきものだからね』

『そしてオツマミ』

『それは何のこと？』

『サクラにお供える食べ物のことよ。あと大人数でのオハナミに欠かせないのがカラオキ・システム。これはサクラの下で歌を歌うために日本人が発明したといわれる世にも珍しいシステムね』
『お祈りに歌は必要だよ。きっとセイクリッドな歌詞なんだろうね。その歌は有名なかい？』

『もちろん。タイトルもズバリ『サクラ』。ナホタロー・モリヤマという、偉大なる日本人の作曲家の手によって生み出された歌で、ジパングの国歌に認定されているわ』

『国歌か。それは覚えてから行った方が良さそうだな』

『そしてもう一つ、これが一番大切なアイテムなんだけど、それはブルーシートよ』

『ブルーシート？』

『ええ。文字通り青い大きなシートね。ジパングでは青い色は『サムライブルー』といって国民にとって最も神聖な色なの』

『え？』でも先日ジパングの国旗を見せてもらったけど、赤と白だ

けで青なんて使われていなかったよ』

『あらあなた、あの国旗の本当の意味を知らないのね。白い部分は島国、つまり国の領土を表し、赤い丸は『日出ずる国』に相応しく太陽を意味する。そして本来ならばその周りを大海が囲むはずだったのだけれど、さすがに国旗として大きくなり過ぎるから省略したのよ』

『ということはつまり、旗の外側は無限に広がる海の青ってことなのか……深いな』

『その通り。ジパン人は国土を幾多の敵から守り続けてきてくれた海を、心から愛し敬い大変誇りに思っているのよ。だからサクラの下にいても海を感じられるようにオハナミを行う際にも必ず大きなブルーシートを広げるのね』

『そうだったのか』

『でもそのお祈りも全てが清く正しく美しい光景ばかりとは限らないわ。サクラはあちこちに咲いているとはいえ、どうせオハナミするなら美しく咲き誇る名所で行いたいと考えるのは当然のこと。そのために水面下では熾烈な争いが行われているのよ』

『争い？』

『そう。サクラの名所でオハナミを行うためにする争いを、ジパン人は『バシヨトリ』と呼んでいるわ。通常オハナミは会社の同僚や学校の仲間と行うことが多いの。でも夜仕事が終わって、さあオハナミに行こう！ と前々から目を付けていた綺麗なサクラの下へ向かうと……オーマイガッ！ そこでは既に別のグループが占領し、オハナミを始めてしまっているではないか！

などという事態を防ぎ、お目当てのサクラで確実にオハナミを行うためには、まだ日も沈まぬ昼間から、場合によっては朝からそのサクラの下に誰かが赴き、『我々がこのサクラを占拠した』ということを公言するために、ナギナタと呼ばれるサムライソードを持って、夜、仲間が訪れるまで仁王立ちして待ち続けるの』

『それはなかなか過酷な任務だな。僕といい勝負だ』

『バシヨトリは持久力と忍耐力を要するため、グループの中でも一番の若い衆に任される傾向にあるわね。もちろんお目当てのサクラに一番乗りできたからといって油断は禁物。ライバルたちがどこから狙っているか分からないから。トイレに行ったり缶コーヒーを買いに行ったり居眠りしたり、そういった一瞬の隙を突かれて失敗に終わることもしばしば。』

その代わり『バシヨトリ』に成功した若い衆は、その夜のオハナミの席で皆から最上級の讃辞を贈られて祝福されるのよ。そして誰もが一度は憧れる、オハナミの席でのお酒の『イッキノミ』をその場でただ一人許されるのよ。イッキノミはグループのメンバーの数だけ行っていることになっているの。つまり人数が多ければ多いほど、バシヨトリをした者は報われてハッピーになれるってことね』

『なかなか複雑なんだね。他にはまだあるの？』

『もちろん。これはまだ序の口よ。五月に入るとすぐに訪れるのが

『コドモノヒ』ね』

『へえ子供かあ、何だかとってもほのぼのした感じがするね』

『ところがどっこい、この日は子供、特に男の子にとって大変な試験が待ち受けているのよ』

『し、試験……？』

ジャイアンの陥落

『この『コドモノヒ』は後に説明する『ヒナマツリ』と双璧を成す、子供にとつての一大イベントね。コドモノヒは男の子、ヒナマツリは女の子が通過儀礼を行うために制定された日なの』

『世界の国々には様々なイニシエーションがあるからね。それで、試練の内容は？』

『コドモノヒになると、各家庭で『コイノボリ』を家の屋根の上に立てるのよ』

『それは一体どういうものなんだい？』

『これはもう文字通り『鯉』が『天に昇る』姿を現した物よ。コイノボリは一本の長いポールに鯉を最低百匹並べて括り付けて空に向けて立てるの。だから男の子たちはコドモノヒが近付くと、こぞつて溪流のある山間でキャンプを張り、鯉釣りに専念するようになる。』

もちろん鯉は体長が大きいほど良いし、数も多い方がより優秀な子供として認められ、大人たちからも称賛される。コドモノヒの前はトータルで一週間くらい祝日が続くんだけど、それは子供に鯉を釣らせるための時間を十分に取っているからなのよ。そして毎年この日を境に子供社会での地位の変動があるの。

それまで身体が小さくて勉強もできなくて泣き虫でいつも苛められていた子が、立派な鯉をたくさん釣り上げ自分の家に誇らしげにコイノボリを立てたことにより、いきなりクラスのボスへと昇格する光景もしばしば。

逆にそれまで威張り散らしていたガキ大将が一匹も釣れないとなると、いきなり最下位に転落、皆の視線に耐えられなくなって転校してしまった、という話もこの時期ならではのニュースね。ジパン

人はこの現象について前者を『ノビタの下剋上』後者を『ジャイアンの陥落』と呼んでいるらしいわ』

『子供の世界もなかなか厳しいね』

『近年ツリキチサンペイという少年がジパングを賑わせているらしいわ。二メートル級のニシキゴイを一晩で千匹釣り上げたとしてワールドレコードに認定されたということよ。彼は今やジパングでは知らぬ者無しの伝説の少年釣り師としてもはやされ、テレビやCMに引っ張りだこ、さらに漫画やアニメにもなったのよ』

『そうか、そんな少年時代から皆がこぞって釣りをしているからジパングは魚やスシを毎日食べているんだね。コドモノヒの儀式はそれだけなのかい？』

『基本的に試練は鯉を取ることだけど、当日男の子はコドモノヒお決まりのコスチュームを着てキャンディを食べるのが一般的ね』

『どんなコスチュームなんだい？』

『真っ赤な生地に金色で『金』と書かれた一メートル四方の布を、裸の身体に巻き付ける。そして右手に斧、左手にキンタロウアメを持って舐めながら、街の中を練り歩くのよ』

『キンタロウアメって？』

『スティック状のキャンディね。大きさは小さな丸太ぐらいで断面にはキンタロウの似顔絵が描かれている。そもそもこのキンタロウというのは、日本人にとって『健康で丈夫な男の子』を具現化したキャラクターなのよ。』

キャラクターと言っても実は過去における実在の人物で、本名はニノミヤキンタロウ。彼は生まれてすぐ雪積り寒風吹き荒ぶ真冬の山に捨てられてしまったのだけれど、尋常じゃない生命力で三日三晩泣き続けていたところを狼に拾われ育てられた野性児で、満十歳になる頃には毎日熊を相手に素手でボッコボコにするほどの腕白坊主だったって言う話よ』

『腕白の域を遥かに超えているね』

『すっぽんぽんに布切れ一枚という出で立ちで男の子を歩かせるのは、病気をしない丈夫な身体になって欲しいという願いが込められているの。実際キンタロウは後年人間に発見されるまで裸で暮らしていたわけだし。それとアメを舐めるのは当然ブドウ糖と果糖の補給ね』

『糖分は必要だよね』

『そして六月。この月は『ツユ』と呼ばれていて、この時期は一ヶ月間朝から晩まで雨が降り続き、日中も空は厚く暗い雨雲に覆われて決して太陽が顔を出すことはないのよ』

『それはスコールみたいなものかい？』

『いいえ。スコールは言わばにわか雨のようなものでしょ。でも『ツユ』はしとしとと冷たい雨がいつ止むともなく延々振り続けるの』
『聞いているだけで気が滅入りそうだな』

『そう。事実この一ヶ月は家の中も湿気だらけでさすがのジパン人もブルーになりがちだわ。あ、今のブルーはサムライブルーとは関係ないからね』

『……』

『だからこの期間は開き直って家の中でキノコの栽培をするのよ』

『それは食費も浮いて家計も大助かりだね』

『シメジ、エノキ、マイタケ、ナメコ、マツタケとジパン人の食べるキノコは色々あるけれど、中でもこの時期とりわけ人気なのがワライタケね。これは名前の通り食べると楽しくなって大笑いしたり踊り出したくなってしまうというハッピーなキノコなのよ』

『なるほど。それでツユのブルーな気分を笑い飛ばそうっていうことか……正に先人の知恵だね』

『七月になりツユが明けて雨が去ると、いよいよ夏の訪れね』

『いいね。僕は夏が好きなんだ』

『大海に浮かぶ孤島のジパング。海を愛するジパン人は当然海で泳ぐのが大好き。でもツユが明けたからと言って勝手に海に入ることには絶対に許されないわ。ここで待っているのが、ある意味ジパング』

での最大の儀式『海開き』よ。

この海開きを待たずして海水浴及びそれに類する行為を行った者は重罪とみなされ少なくとも懲役三十年、あまりにもひどい場合には極刑すら免れない。このことは日本人にとっては幼稚園児でも知っている常識にも拘らず、毎年海開きを前にして勝手に海で泳ぎ捕らえられる無軌道な若者や酔っ払いのサラリーマンが後を絶たないという話よ』

『本当かい？ それは気を付けないといけないな。で、その海開きというのは？』

『あなた、十戒という映画を知ってる？』

『ああもちろん。チャールトン・ヘストンがモーセの役をやった超大作だよ。あの紅海が真っ二つに割れる……ま、まさか』

『そう。『海開き』とはまさにあのことなのよ』

『でもあんな大それたこと本当にできるの？ しかも誰がやるの？』
『ジパングの海辺の村々には『アマサン』と呼ばれる女の漁師が必ずいるの。しかも彼女たちは幼少の頃より海に潜り続け鍛え上げられた肉体と超人的な肺活量によって、素潜りでアンコウまでなら獲ってこれるらしいわ』

『アンコウって確か深海魚……だよ』

『そのアマサンの中でも最も経験豊富な長老的存在のアマサン、即ちボスアマが海開きの儀式を執り行う決まりになっているのよ。逆に言えば、海開きができるようになれば、それはボスアマの世代交代を意味するの。』

ジパングの島の周りにはあちこちに小さな無人島が点在していて、ボスアマは、海岸からその小島まで海を開き、海底を歩いて渡り、無事戻って来れると海開きの儀式は終了、めでたく遊泳解禁となるわけ。

でも高齢なボスアマが行った場合、力が衰えていて持ち堪えられず、島から戻ってくるときにエジプト軍の如く海に飲まれてしまうという悲しい事故も稀に起きるそうよ。そういう場合は次のボスアマが決まるまで、その海での海水浴は禁止となってしまうの』

『うーん、やはり日本人にとって海はサクラに負けず劣らずの、かなり神聖な場所なんだね』

『まだまだ行くわよ。八月は何と言ってもオボンね』

『オボン？』

『十月のジパングⅡウンドウカイ』は引っ掛けね

『八月の十五日が『ボン・デイ』、その前後一週間を『ボン・ウィーク』と呼んでいて、この期間、全てのジパン人は故郷へと帰ることが義務付けられているのよ』

『え？ 皆帰るのかい？』

『そうよ。だからこの期間ジパングでは全ての経済活動が停止するの。ジパングの企業の九割は首都トーキョーに拠点を置いているからね。普段は人口の約半分のジパン人がサラリーマンとしてトーキョーで働いているのだけれど、ボン・ウィークになると一斉に帰省するため人っ子一人いなくなり、眠らない街トーキョーは一夜にしてゴーストタウンと化すのよ』

『大都会から全ての人が消えるなんて、まるでミステリー映画みたいだね』

『このボン・ウィークの静まり返ったトーキョーの光景を歌い、若者たちの間で口コミによって広がりそして近年名曲としてヒットチャートを昇り詰めるまでに至ったのが『ウチャヤマダヒロシ&クールファイヴ』による『トーキョーサバク』よ』

『都会のオアシスとはよく聞く言葉だけど、その真逆の砂漠でくるとはね』

『ボン・ウィークが近付くと、街中の至る場所でこの歌が流れるらしいわ。それを聞くとジパン人は『ああ、そろそろオボンだな』と実感するのよ』

『なるほど……クリスマス前になると街中にサンタが現れたりクリスマスソングが流れるのと一緒になんだね。それで、故郷に帰ってからは何をするんだい？』

『ボン・ウィークはジパン人にとってただの休暇じゃないの。祖先の靈魂を天界から呼び戻して一緒に過ごすことのできる大切な期間なのよ』

『霊を呼び戻すだって？ 一体どうやって』

『山を燃やすの』

『山？ ってあの山？ マウンテン？』

『あのマウンテン』

『それはまた随分と豪快だね。山火事にならないといいけど』

『ジパングの八月は夏真っ盛りでただでさえ暑いのに、地方都市では山を燃やしまくるもんだから、平均気温が五十度を超えることもしばしば』

『いくら夏好きの僕でもそれはちよつと閉口するなあ』

『そしてその燃え盛る山の麓でボン・ダンスを踊るのよ』

『ああやっぱり。そういうスピリチュアルな儀式にダンスは欠かせないからね』

『コスチュームはユカタと呼ばれる民族衣装ね。頭にはハチマキという日の丸が描かれた白い帯を頭に締め、ウチワを背負ってサイケデリックでエキセントリックなダンスを老若男女入り乱れて三日三晩飲まず食わず不眠不休で踊り続けるのよ』

『それはキツイね。ところでそのウチワっていうのは？』

『ワシというジパング独特の厚紙でできた扇形の板よ。大きさはそうね……玄関の扉くらいかしら。踊りながらそれで山を扇ぎ空気を送って火が絶えないようにするの。ちなみにボン・ダンスに使われる曲は『スーダラ節』よ。ここでもカラオキ・システムが大活躍。スーダラ節を歌い踊りながら山に風を送ること三日。その間炎が絶えることなく燃え続けていれば三日目のウシミツドキに、めでたく自分の先祖が山の炎の中から降りてきてしばしご歓談』

『僕も天国のお爺ちゃんに会いたいな。で、そのウシミツドキって何のことだい？』

『ジパングでウシミツドキといえばそれは、一日の中で最もミステリアスな時間帯を指すわ。古くから様々な超常現象は決まってこのウシミツドキに起きるのよ』

『それはちよつぱり刺激的だね。僕もそれに乗り遅れないように正

確な時間を調べておく必要があるな』

『で、九月は飛ばしてと……』

『え、飛ばすの!？』

『十月。この月に入った途端、ジパングの学生たちにとって人生のターニングポイントになるであろう最も過酷な運命が待ち受けているわ』

『ふっふっふ、それなら僕も知ってるよ。ジパングの十月のメインイベントと言えば『ウンドウカイ』だからね。あれは確か学校内で行われるレクリエーションの一つだよ。皆で楽しく、勝っても負けても恨みっこなし、競技が終われば皆トモダチ。和気あいあいとしたイベントなんだからターニングポイントは言い過ぎじゃないかなあ』

『あら違うわよ。それはフェイント。』十月のジパングⅡウンドウカイ』は引っ掛けね』

『そうなの？　じゃあ何なんだい？』

『それはね、『コロモガエ』よ』

『コロモ……ガエ』

『言い忘れたけどジパングにおけるティーンのコロモガエは六月にも行われるわ。コロモガエというのは要するにユニフォームのチェンジね。ジパングの学校では全員ユニフォームの着用が義務付けられているから』

『ということはつまり、サマーユニフォームからウィンターユニフォームに変わるってことかい？　全くもって理に適っているじゃないか』

『事はそんなに単純じゃないわ。ジパングのスクールユニフォームは、大体どの学校も平均して十種類くらいのバリエーションがあるの』

『へえ、年頃の女の子なんかは毎日あれこれ着回せて楽しそうだね』
『何を呑気なことを。いい？　学校に着ていけるのは一種類のみよ。ジパングのスクールに入学すると、まず生徒には各々十種類のユニ

フォームが支給されるの。初めはどのデザインの服を着て行ってもオッケー、好きなものを選んでいいわ。そして六月のコロモガエは、単に今のデザインのユニフォームを夏用に変えるだけだから特に問題はない。

しかし十月の一日のコロモガエ、この日着ていくユニフォームでその学校にいられるかどうかが決まる。ここで生徒たちは日本人的政治を学ぶのよ』

『どういうことだい？』

『十月一日のコロモガエ当日、生徒たちが着ているユニフォームの中で、一番多く着られているデザインのユニフォームを着てきた生徒だけがその学校に留まることができるのよ』

『意味がよく分からないな』

『話を簡単にするためにある学校のユニフォームをA、B、Cの三種類のみとするわね。生徒は百人。コロモガエ当日、Aを着てきたのは二十人、Bが五十人、Cが三十人とする。その場合、学校に残れるのはBを着てきた五十人だけで、残りは即刻退学となってしまうのよ。つまりここで生徒たちは『自分が着たいデザインのユニフォーム』ではなく『皆が着てきそうなユニフォーム』を選ぶ必要があるってこと。これはつまりケインズの言うところの『美人投票』と同じ原理ね』

『それで、退学になった生徒はどうなるんだい？』

『もちろんもう一度受験からやり直しね。』

『そんな横暴な』

『こうやってジパン人は子供の頃から、周囲と同調する大切さを学び、出る杭にならぬように穏やかな人生を送ることを学ぶの。これは学力なんかよりも遥かに重要視されていることなのよ』

『いやあせっかく一度きりの人生なんだから、思いつき飛び出た方が良くと思うけどな。それにそのコロモガエ、退学を免れるための裏工作や騙し合いが確実に横行すると思うんだけど』

『そう、よく気付いたわね。ジパンの政治の本質はそこにあるのよ。表面上は目立たず波風立せず調和を乱さない人畜無害を装いつつ、陰ではしっかりと手を回しコネクションを築き上げる。そうやって生き抜く術を身に付けるのよ。』

だからコロモガエ直前の校内では、表向きは何も知らない振りして水面下ではクラスメートはもちろん、先輩後輩は言うに及ばず、先生や校長や理事長、果てはPTAをも巻き込んだの袖の下や談合のアメアラレ、更には恐喝まがいのパワープレイも飛び出す始末』

『やだなあそんな計算高いティーンエイジャー』

『この経験がジパンの人特有の『ハニカミスマイル』を生み出すのよ』

『そうだったのか。それでそれで、十一月は？』

『はあ、十一月……』

『お、その意味深な感じ、相当風変わりな習慣がありそうだね』

うら若き乙女（プラス十歳）

『も飛ばしてと』

『そこも飛ばしちゃうの!?!』

『ここからが大変よ。十二月』

『いかにジパングといえどクリスマスは祝うんでしょう?』

『あなた何を言っているの? ジパン人は全てブッディストなのよ。サンタクロースのサの字もクリスマススのク字も出てこないわ。クリスマスもクリスマススイブもクリスマススイブも完全にスルーよ。もちろんホテルなんて予約しないしね』

『ホテルって何のこと?』

『それより年末にジパン人が大盛り上がりする一大イベントが控えているのよ』

『へええ何だろう、楽しそうだね』

『それが『ジョヤノカネ』よ』

『ジョヤノ……カネ? カネってお金のことかい?』

『違うわよ。鳴らす鐘よ。教会の上にもあるでしょう? あれのさらに大きな物がジパングの寺院には必ず設置されているのよ』

『あああれのことか。なんたってジパングは黄金の国だからね、つい。でその鐘は……』

『察しが早いわね。その通り純金製よ』

『やっぱりね。もうそのくらいじゃ驚かないさ。で、その鐘をどうするんだい?』

『十二月の三十一日になるとジパン人は最寄りの寺院へ集合する。』

そして鐘の前に一列に並び夜通しその鐘を突くのよ』

『ジパン人は夜通し何かをするのが好きなんだなあ』

『ただ単に突くだけじゃないわ。その年に自分が犯した過ちを叫びながら突くのよ』

『懺悔だね』

『そして迎えたア　ハッピーニューイヤー』

『あれ？　ちょっと待ってよ。さっきジパングの一年は四月からって言わなかったっけ？』

『そうよ。でもいかにジパングといえど西暦まで覆すことはできないわ。だから一月から始まり十二月で終わるといふ世界基準は守っているわけ。そんなところで依怙地になって近隣諸国との関係が悪化したら堪らないものね』

『なるほど、スクールデイズのコロモガエがこういった外交政策にも生かされているわけか……』

『一月一日、この日をジパン人は『シヨーガツ』と呼ぶわ。意味は聞かないでね。世界中の国々が新年を迎えたことを祝うためにこの日から三日間、ジパン人は暴飲暴食の限りを尽くすのよ』

『新しい年をみんなで祝うのはどこの国でも大差ないよね。で、どんな物を食べるんだい？』

『まずは『オセチ』よ。これは『ウルシ』というジパング伝統の塗料で塗られた工芸品の箱に、色とりどりの豪華な料理を詰めたものなの。品数と箱の数は地方や家庭によってまちまちだけど、三十段重ねが一般的ね』

『そりゃ凄い。天井に届きそうだね』

『箱も料理も美しく、ふたを開けたときの様はまるでホクサイのウキヨエを思わせるそうよ』

『それはぜひとも食べてみたいな』

『オセチを作るのはその家に嫁いできたお嫁さんの役割で、豪華さもさることながらたくさんさんの量を作らなければならないのでとても大変なの。家族の人数によっては、私達がクリスマスを楽しく過ごしている頃から仕込みを始めるという話よ』

『女性は大変だ』

『しかもオセチには各家庭に代々受け継がれた伝統の味があって、それを破って好き勝手に料理を作ることとはできないの。なぜなら姑の厳しいチェックが待っているからね。オセチが完成したらまず一

番に姑に見せなければならぬ。塩加減の微妙な間違いや、少しでも手抜きが発覚したらその場でゴミ箱行き、それまでの苦労が水の泡よ』

『うわあ、それに比べれば今まで僕の受けてきた拷問なんて大したことないや』

『そしてもう一つ、ショーガツに食べる料理が『ゾウニ』よ』

『え？ ズウを煮るのかい？ ジパン人は随分大胆だなあ』

『そうそうあの長い鼻が意外と柔らかくってねってバカ。ジパングにゾウなんていないわよ。そうじゃなくって『オモチ』と呼ばれる白く伸びる食材の入ったスープのこと』

『ふうんスープか。オセチに比べると随分質素な感じがするな』

『そう。実際質素で簡単な料理よ。でもショーガツにゾウニを食べるのには深い訳があるの』

『へえ面白そうだ』

『これは今もジパングの女衆にだけひっそりと語り継がれるお話。その昔、器量は良いが料理がとっても下手なうら若き乙女が田舎の大地主の家に嫁ぐことになりました』

『お、何だかすでに泥沼の修羅場の様相が目に見えかね。それでそれで？』

『どこの国でも田舎というのは都会に比べてしきたりを重んじ、よそ者への風当たりも厳しい。さらに美人とあっては男衆は色めき立つわそれを見て女衆は嫉妬の目を向けるわで普通に生活するだけでも大変。』

それでもそのうら若き乙女は自分の夫に尽くし、しきたりを守り何とかその土地に馴染もうと懸命に努力した。そして迎える年末のオセチの仕込み。もちろんうら若き乙女は料理が苦手なことは百も承知で、それまでに頑張って一応日常の食生活には支障をきたさない程度の物を出せるまでになっていた。

でもその田舎は何かにつけて見栄を張る文化があり、オセチ料理も他の地域に比べてずば抜けて豪華絢爛、作り方もとても素人が簡単に手を出せるレベルじゃなかったの』

『うわあどうなるんだらうら若き乙女』

『意地悪な姑から口頭で材料や作り方を教わるうら若き乙女。メモをとり必死に仕込みを始める。でも一度聞いただけで分かるはずもなく、できたオセチを見せると姑だけでなく姑の母親、その妹、とにかくその家系の女たちが『これだから都会の若い娘は』とか『何にもできないくせに、どうせ色目使ってウチの息子手玉に取ったんだろ』とか散々罵られ、せっかくのオセチは目の前で捨てられたわ』
『そんなの僕、絶対耐えられないよ』

『でもここで逃げ出しては相手の思う壺、ぐっと堪えて毎年苛められながらもオセチを作り続けるうら若き乙女』

『頑張れうら若き乙女!』

『月日は流れ十年目のショーガツを迎えようとしていた年末、ようやくその家の伝統的オセチを寸分違わず作り上げたうら若き乙女は今度こそ認めて貰えるだろうと意気揚々と姑に見せに行ったの。でも結果は不合格。何のかんのと正に重箱の隅を突くようにあら探しをされ家畜の餌にされてしまったの。もう悔しくて悔しくてそんな人生に耐えられなくなり、うら若き乙女はその夜一人裏山へ行って首を吊ることを決意したの』

『そんな……というか十年経ったらもう、うら若くないんじゃない……』

『愛する夫に遺書をしたため木の枝にロープを括り付ける。その輪の中に首を入れようとした瞬間、どこからともなく良い匂いが漂ってきたの。釣られるようにその方へ歩いて行くと器に入った一杯のゾウニがあった。思わず手に取ってみると声がしたの。『それを女たちに食べさせよ』と』

『それはつまり料理の仙人的なお爺さんが現れて、オセチの代わりにそのゾウニを差し出したらあまりの美味しさにみんなびっくり、うら若き乙女（プラス十歳）もようやく認められてめでたしめでた

し、みたいな?』

『いいえ違うわ。美味しいのは合ってるけどね。とにかくゾウニを手に入れたうら若き乙女はすぐに家に帰り、寝ている姑を叩き起こしてそれを食べさせた。するとどうでしょう。モチを喉に詰まらせた姑はみるみる顔が青ざめアっという間にあの世行き。うら若き乙女はこれまで自分に辛く当たってきた女たちに次々とゾウニを食べさせ、その家の全ての女たちは窒息死。これでもう自分を苛める者はいなくなりめでたしめでたし』

『それは……めでたいのかい?』

『つまりゾウニという料理は、上手くオセチが作れずに毎年難癖付けてくる姑に対しての復讐の料理なのよ』

『穏やかじゃないね』

『というのは半分都市伝説だけどね。でも実際ジパングでは毎年このゾウニで喉を詰まらせて死んでしまう人たちが後を絶たないらしいわ』

『命を落とすかもしれないというハイリスクを冒してでも食べたい逸品か……よほど美味しいんだろうな』

『そうそう、言い忘れたけどショーガツにジパン人はとってもおかしな行動を取るのよ』

『これまでのことだけでも十分おかしいけどね』

『ジンジャという場所に行ってお金を捨てるの』

『捨てる? その金は今度こそマネーの方かい?』

『そう。日にち的に一番良いのは一月一日とされているけど、三日まではその行為が許されるわ』

『許されるって、自分のお金だろ? なんだって捨てちゃうんだい?』

『そんなの決まっているわ。何たって黄金の国なんだからジパン人は全員リッチピープルなのよ。でもお金に対して罪悪感も感じているの。つまり拝金主義を嫌っているのね』

『金儲けに走る奴は良く思われないってことか……』

『そう。だから生活に必要な分以外のお金はこのときに全部捨てるのよ』

『何だかもったいないなあ』

『ジンジャにあるお金を捨てる箱は『サイセンバコ』と言って、ここに投げ入れられたお金が即ち税金となるの。サイセンバコの中にはさすがのジパン人でもびっくりするような物がときどき投げ入れられているらしいわ』

『例えば？』

『宝くじの一等当選券とか天文学的金額の書かれた小切手とか一万馬券とか土地の権利所とか金塊十キロとか』

『豪快だなあ』

『そして二月』

キミは見かけによらずデシコ・ヤマトナなんだね

『二月と言えば……もちろんバレンタインなんてないよね。なんと
つてブツデリスト……』

『あるわよ』

『あるの!?!』

『バリバリ』

『ばりばり?』

『そうよ。バリバリバレンタイン、略してバリバレよ』

『ばりばれ……でもこれまでは世界を無視した完全スタンドプレー、
全てジパング独自のイベントだったのに、なぜバレンタインはやる
んだい?』

『それはね、ジパングではバレンタインデーが唯一女性からの告白
が許される日だからよ』

『そうなの? 二月十四日以外の日に告白しちゃダメなの?』

『ダメよ。もし見つかったら懲役三年』

『えーまたー』

『というか、それ以前に日本人の女性は大変奥ゆかしく恥ずかし
がり屋さんで、自分から男性に想いを告げるなどというハシタナイ
ことは基本的にできないの。それを日本人は『ヤマトナデシコ』
と呼んでいるわ』

『ヤマトナ……デシコ? 名前? 誰だいそれは?』

『デシコは特定の人物ではなくいわゆる象徴ね。ジパング女の特徴を
兼ね備えた女性をヤマトナ・デシコと言うのよ。ジパング女に面と向
かってこれを言うとしても喜ぶらしいわ。一例として酒の席かな
んかで乾杯しながら『キミは見かけによらずデシコ・ヤマトナなん
だね』みたいな使い方が今風でオシャレ』

『奥ゆかしくて料理上手な女性かあ。今度お嫁さんにするならそう
いう人がいいな。ジパングに行ったらちよっと頑張ろうかな……』

『何ですって？ 何を頑張るの？』

『あ、いやいや何でもないです。で、どうやって告白するんだい？』
『ジパングにおいてバレンタインで告白するには必ず用意しなければならぬ物があるの』

『ひよっとしてチョコレートじゃない？ そう言えば何か聞いたことある』

『残念。正解は豆』

『マメって……マメ？ ビーンズ？』

『イエスビーンズ、ノットチョコレート。大豆ね。イソフラボンたっぷりなの』

『何だか全然ロマンチックじゃない気がするけど、豆をどうするの？』

『投げるのよ』

『え？』

『意中の相手に』

『ええ？』

『思いつきりぶつけるの』

『えええ！？ そんなことして大丈夫？』

『大丈夫かどうかは投げてみないと分からないわ。もしデシコが好きな男に豆を投げつけても怒られなければ相手もその気があるというところで告白成功ね。怒り狂って追いかけてきたり無視された場合は脈なし。どっちに転んでもすぐに結果が出るという、合理的な告白方法よ。もし成功した場合は投げた後の道端に落ちた豆を、二人で拾って食べさせ合うの。年の数だけね』

『拾い食いか……でもそういうちょっと非道德的な行為を共有することによって愛が深まるんだろうな。僕たちももう少し……』

『あーっと！ 忘れてたわ。デシコは豆を投げるときに必ず言わなければならぬフレーズがあるのよ』

『だよね。無言じゃ気持ちは伝わらないし、第一怖いよ。何て言うんだい？』

『ワルイコハイネガー』

『顔が怖いって……それと手に持ってるそれは何?』

『出刃包丁』

『えええお淑やかなデシコの年に一度の愛の告白なのに鬼の形相と包丁って……しかも『ワルイコハイネガー』ってどういう意味なの?』

『さあ遂に來たわよジパング最終月の三月!』

『知らないんだね……』

『ジパングの一年を締めくくる、一大イベント、それが『ヒナマツリ』よ』

『さっき言ってた、『ドコモノヒ』の女の子バージョンだね』

『ドコモじゃないわよコドモよ。この日ジパング人の女の子は『オヒナサマ』と呼ばれチャホヤされて完全なる主役。何をしてても世間は目に見てくれるのよ』

『何をしてもって具体的には?』

『夜更かしとかお泊りとか』

『あはは可愛いなあ』

『あと万引きとかキセルとか』

『ええ犯罪もアリなの!?』

『逆ナンとかエンコーとか』

『えんこー?』

『ただこの日ジパング女子は『ジュウニヒトエ』という伝統的民族衣装を着ることになっているの。これはジパングで昔、貴族が着ていたという豪華絢爛な衣装で、ゴージャスなだけにとっても重いものよ。その重さと派手さは外を歩けば必ず周囲の注目を集めること間違いなし。そんな中でキミは万引きやエンコーができるか!?』

『いや、僕はできないけど……だからえんこーって何?』

『つまりこれは『羞恥心の克服』ね。コドモノヒでは男の子が鯉釣りや実力成果主義の社会を学ぶ。そしてヒナマツリで女の子は人前に出て、物怖じせずアクションを起こすことを身をもって体験す

る。どちらも子供にとって大事なイニシエーションとなり得るのよ』
『なるほどね。一見おかしいな風習と捉えられがちだけど、そこには
きちんと道徳的な意義があるんだね』

『どう？ 参考になって？』

『もちろん。凄く勉強になったよ、ありがとう。でもさ、どうして
君がジパングについてそんなに詳しいんだい？』

『だって……うふふ、今度のボンドガールを務めるのはこの私です
もの。任務に訪れる国の予習は当然のこと、ヨロシクね、ジェーム
ズボンドさん！』

香織さんは勝ち誇ったように言って舞台の袖へと消えていった。そ
してそれを呆然と見送るジェームズ・ヌツくん。そこで照明が落ち、
舞台は幕を閉じた。

六十億の人類の半分の三十億の男性陣の中から

「あの、香織さんに声かけていけないんですか？」

舞台が終わると京助さんはすぐに立ち上がり、逃げるように劇場を後にした。とりあえず追いかける私。

「うん、だって照れ臭いし、それにまだ千秋楽じゃないからね」

外に出ると京助さんは歩く速度を落とした。私は半歩後ろについて歩く。どうしよ、何かこのまま「それじゃっ！」とか言って満面の笑みを浮かべて無邪気に帰れる感じでもないし、かといって私からお茶に誘う気にもなれないし……でもでも元好きな人との久し振りの偶然の再会なわけで、ゲイだと分かってても一緒にいたい気もあるし……ああ！　こういうときはどうすればいいのですかお姉さま！　と胸の前で手を組み天を仰いでいると京助さんが立ち止まり振り返り向いた。

「ねえ千夏ちゃん、これから何か用事ある？」

おおおキタキターー！　天の助けとは正にこのこと、これぞいわゆるフォワードの受けやすさも考慮しまくった、フワッとした柔らかいタッチの足元に吸いつくような俊輔バリのピンポイントクロス！

無いです無いです用事とか。更に言うならこの先四日間何にも無いです！　ノースケジュールノーフューチャー！　と、やっとこさ仕事から帰ってきた御主人に千切れんばかりに尻尾を振る室内犬のようにキャンキャンはしゃいじやいそうな心を無理やり押し留め、

「いえ、特にないですよ」とクールなキャリアウーマンよろしくしつつと言ってみたりする私。

「せっかくだから、ちょっとコーヒーでも飲んで行かない？」

飲みます飲みます十杯でも二十杯でも琵琶湖に満タンのコーヒーでさえ飲み干してみせます！ と声を大にして言いたいところだがこそもグツと堪えて「あ、それもいいですね」などと大和撫子よろしく凜とした態度で答えてみせる私。

歩く度に京助さんのしなやかで綺麗で爪の形が良くてウブ毛が薄くて長い指の大きな手がぶらりぶらりと前後に揺れ動く。人類は二足歩行だからバランスを取るために腕を振るのは当たり前なのよ千夏。でもつでもつその揺れる淫らな（お、そういえば「揺」と「淫」は字が似てるわねっ！）手の平が私を誘惑して止まないのよっ！

ああ繋ぎたい！ そして指と指とを絡めたい！ さっき京助さんがあんなことしなければ私の乙女心ロマンチックハートはもう少し落ちて着いて、炬燵でミカン剥きながら緑茶でも啜っているはずだったのにい！ 大人しく丸くなる猫だったのにい！ もはや私の手は庭駆け回る犬の如く抑えが利かない。

ダメだ、自分にウソはつけん。やっぱ私この人好きです。だってさ、こんなカッコ良いんだよ？ こんなジャニーズも韓流スターもジュノンボーイズも真っ青になって土下座してから尻尾巻いて逃げだすくらいの爽やかグッドルッキングメンなんて滅多にいませんぜ奥さん！

私の針の穴ほどのストライクゾーンに、針の穴に触れることなくド真ん中で突き刺さるほどのイイオトコなんて世界中の六十億の人類

の半分の三十億の男性陣の中から探したって三人もいれば良い方だよね？　って誰に話してんだ私は。

いいや、決めた。繋いじゃえ。時には大胆に。これ今年の目標。九月後半で今年もう終わりかけてるけど。私は半歩分大股で歩き、身体を京助さんの左隣にぴたりと付けた。そして表面的にはさり気無く、でも内心ちょーードキドキで左手をそーっと伸ばし、京助さんの右手を取った。

その瞬間驚いたように私を見詰める京助さん。ヤバ、変な子って思われたかな……でもさっきのお返しだもんね、これでお相手だもんね、全然変じゃないもんね……という私の不安は杞憂に終わる。なぜなら京助さんはにっこりと笑って前を向くと、やはり先程と同じようにごく自然に手を繋いだまま歩いてくれたからだ。

「ねえ京助さん、私たち、仲良しカップルに見えるかな？」

「見えたら困る？」

悪戯っぽく私を見下ろす京助さん。

「あら、困るのは京助さんの方じゃなくって？」

「何でだい？」

「だって、悲しむ女性がたくさんいるでしょうから」

口を尖らせてちよっぴり拗ねたように言ってみる。すると。

「そんな！　何を言ってるんだ千夏！　僕が愛してるのはお前だけだって何度言ったら分かるんだ！」

「どうせ色んなコに同じこと言ってるんで……あ」

京助さんは言いかけた私の口を、その柔らかな唇で優しく、しかし激しく塞いだ。

「ん……」

こんな人混みでそんな大胆なコト……そして十秒間の長いキスの後、京助さんは私の目をじっと見詰めて言った。

「誰に見られたって構わないよ」

「京助さん……」

「千夏ちゃん？」

京助さあん、恥ずかしいよおでもそんなちょっぴり強引で情熱的なトコも好きかも……うへへへ

「ちょ、ちよつと千夏ちゃん？ 大丈夫？」

「え？ あ、あれ？」

京助さんに肩を叩かれて私はようやく現実世界に引き戻された。いかんいかん、好きな人と手を繋いで真昼の街を堂々と歩くというこれまでには無いシチュエーションに、図らずも恋愛幻想妄想ワールドにダイブしてしまったわ。あ、若干ヨダレ出ちった。

「千夏ちゃんに聞いて貰いたい話があるんだ」

お手々繋いでらんららん、人目憚らずそのまま池袋駅まで歩き、

芸術劇場の前を通り過ぎてエスカレーターで地下に入る。私の愛するドトールの宿敵、につききスターバックスとロゴが若干似ている池袋駅構内のエクセルシオールカフェでカフェラテを奢ってくれた京助さんは、コーヒーを一口飲むと、神妙な面持ちで口を開いた。何だろう？ まさか私のこと……

「実は香織のヤツ、妊娠してるらしいんだ」

「ええ！？ ホントですか！？」

シルバーウィーク初日にしていきなりの衝撃発言に思わずカップを落としそうになる。香織さん……あんなに私の身体を弄んだクセに……あ、でもバイって言ってたし、別に彼氏がいたって不思議じゃないのか。でも何だろう、このちくちくと胸の奥を刺すような小さな痛みは。何か、知らない間に恋人を寝取られていたような感じ？ もしかしてお相手は、さっきの舞台のジェームズヌツくん？

「そうなんですか……じゃあ結婚するんですか？」

まあそれならそれでお目出度いお話ですな。高校生って御祝儀いくら出すんだろ。

「でもね、相手はまだ学生なんだよね」

んなこと言っただって、ヤルことやってデキちゃったんだから、ここは男らしく腹括って頂かないと。ただでさえ我が国ニッポンは高齢化社会一途を辿っているのですぞ。一人でも多く産んでもらって若返りニッポンに貢献して頂かないと。つーことでその彼氏、昼間は学校行って、夜は土方なりビルの窓拭きなりやって生活費を稼ぐべし。

「それで、香織さんはどうするつもりなんですか？」

せっかく劇団立ち上げて、さあこれからって時なのになあ。きっとシヨックだろうなあ。でも好きな人の子供なら幸せなのかなあ。自分の身体から子供が生まれて母親になるなんて、まだまだ想像もできないや。

「うん、取り敢えず今は公演のことで頭が一杯だからあまり考えないようにしているみたいなんだけど……それよりその相手っていうのがね、千夏ちゃんも知ってるヤツなんだ」

え？ 私知ってる男？ で、香織さんとも繋がってるって言えば……

などという歯に衣着せぬ浜田ブリトニー的能天気発言は

「ままままさかネチっ……」

「北川なんだ」

キタガワ？ キタガワキタガワ……って監督うう！？ つーかねチっ子じゃなくて良かった〜セーフ。

「だだだって北川さんって京助さんと付き合っ……はっ」

そこまで言っただけで咄嗟に口を塞いだが遅かった。京助さんは切なさそうな瞳で私を見詰める。

「そっか、知ってたんだ千夏ちゃん。香織から聞いたの？」

「い、いえ、聞いたというか何と言うか……」

そおんなあ京助さあん何言っちゃってるんすかあ、夏の民宿でキスしてるとこバッチリ見ちゃいましたからあみくんな知ってますよお二人がデキてることなんてえ、などという歯に衣着せぬ浜田ブリトニー的能天気発言はこの雰囲気ではとてもできそうになく、俯いてカフェラテ啜って言葉を濁す。

というか別に京助さんが男と付き合っていたからどうこうってことは無いわけだし。一目惚れした私としては未だに受け入れたくない事実だけど。

「でもどうして北川さんが香織さんと？ 北川さんだってゲイなんじゃないんですか？」

ここまできたらはっきり言っちゃえ。しかし本物のゲイの人に向かって「ゲイ」と声に出して言うのは想像以上にハードルが高いということを今知ったのである。

「僕もそう思ってた。完全に男にしか興味がなくて。事実、過去にあいつが女と付き合ってたなんて話、聞いたこと無かったしね。とはいえ出会ったのは大学入ってからだから、それ以前のことは喋らなければ本人以外分からないよね。もちろん四六時中一緒ってわけじゃないし、お互い一人のときもあるわけだから付き合い始めた後だって、どこで何してるのかなんて知る由も無いけど」

苦しそうに吐きだすように言葉を繋げる京助さん。私は何と声をかけていいのかまるで分らない。

「でも確かに僕達三人はよく一緒に遊んだし飲んだりした。北川は家にも泊まりに来たこともある」

「じゃ、じゃあそのときに香織さんと……」

すると京助さんは自嘲気味にふふっと笑った。

「今思えばそうなのかもしれない。そうだとしたら僕はとんだピエロだよ」

京助さんの家で三人で飲んでいて、何だかんだと理由を付けて、京助さんにどんどん飲ませる。先に酔い潰れた京助さんの隣で身体を重ねる香織さんと監督……何という背徳！ 裏切り！ 人非人！そして彼氏の隣でその妹と浮気だなんて縛れに縛れた三角関係！超淫ら！

「京助さん……」

何もできないが私は京助さんの手に手をそっと重ねた。

「その……それは単なる浮気なんですか？ 単なるって言い方も変ですけど、何と言うか、いわゆる酒の勢いでしちゃったみたいなの」

お酒を飲んだことはもちろん無いので、酔うと人は欲情するのかなどうかはよく分らん。でももし香織さんとのエッチが酔った勢いで一回だけのことならば、もちろん一回だけでも浮気は駄目だけど、それでも本気じゃなければまだ救いがあるというか……しかし京助さんは私を見て首を振った。

「ずっと二股かけられてたんだ」

あああ思考が混乱する。男二人と女一人の修羅場。女が両方の男と関係を持つならまだ理解できるし、ドラマでもありがちな話でもある。でも一人の男が、もう一人の男と付き合っていて、しかもその妹とも付き合っていて、しかも子供までできちゃって……

この昼ドラも尻尾を巻いて逃げだしそうな泥沼的状况は、処女（心はまだヴァージンなんだからね！）でウブで恋愛経験値が限りなくゼロに近いままの、純情可憐なうら若き現役JK乙女の私にはとても脳味噌が追いつけないハードな展開だ。とりあえずお冷を二度三度口にして気分を落ち着かせる。

「で、でも香織さんは京助さんと北川さんが付き合ってるって知ってたんですね？ なのにそんなお兄さんの恋人奪うようなこと……しかも二人で示し合わせたみたい……酷い、酷いですよそんなの……」

混乱の峠を越えた私の心は激しく掻き回された。行き場の無い感情が涙となって両目から溢れ出す。

「千夏ちゃん」

私の恋した人が、こんな形で深く傷付けられていたなんて。悔しい。しかも二股の相手が実の妹で……涙は後から後から流れ出て、壊れた蛇口みたいに止まることがない。大粒の水滴が俯いた目から直接落ちて、私のスカートに点々と染みを作る。

「そ、それで、京助さんは香織さんを許せるんですか？」

私が京助さんなら、香織さんも監督も絶対に許せないし許さない。殺してやりたいほど憎い。とうか京助さんの立場じゃなくっても相当許せない。それなのに京助さんは、今日、香織さんの初舞台を見に行った。私には理解できない。この世でたった一人の妹の人生初の晴れ舞台だからだろうか？

「許した訳じゃないけど、何て言うのかな、せめてもの償い……かな」

「償い？ 何で京助さんが、何を償う必要があるんですか？ 悪いのはあの二人でしょ？」

混乱と悲しみはやがて怒りへと変わった。隣に座る京助さんは、もちろん私の怒りの矛先を向けるべき相手ではないが、昂った今の私は口調が強くなるのを抑えきれない。

「香織に対してじゃなくって……まあそれも少しはあるのかも知れないけど、それより生れてくる子に悪いことしてしまったなって」

「赤ちゃんに？ 京助さん言ってる意味が分かんないよ」

京助さんは少し困ったような顔で私を見た。涙は止まったけど、きつと私の目は真っ赤っ赤で腫れていて、酷い顔になっているに違いない。

「二人の関係と香織の妊娠を知ったのが昨日だったんだけど、北川と口論になってね、カっとなって頭が真っ白になっちゃって、はっと気付いたらあいつの首絞めてて……慌てて手を放したんだけどもう……」

こんな絶望的な顔の京助さん見たこと無いし見たくないよ。

「そんな……」

私の全身を、重く冷たい得体の知れない何かが駆け巡る。京助さんが人を殺した――唾がうまく飲み込めない。気を落ち着かせようと水の入ったコップを手を取るけど、震えてしまって上手く口まで運べない。

「うそ……ですよ。そんなことって……」

「今から警察に行こうと思ってる。逃げられる訳ないしね」

全てを諦めたような悲しい笑みを浮かべる京助さん。私は喉に鉛を詰め込まれたみたいに苦しい。

「うそうそうそうそやだやだやだやだ」

私は京助さんの腕にしがみ付き、額を押し付けて小刻みに首を振った。もう二度と会えないだなんてそんなの絶対にイヤ！ そりゃ私だって殺したいほど憎いつて思ったけど、でもそれは言葉の綾であ

って本当にそんなことしちゃ……

私の頭を優しく撫でる京助さん。

「今日千夏ちゃんに会えて良かった。本当はね、香織の舞台を見てそのまま自首しようと思ってたんだけど、でもやっぱり誰かに話しておきたいっていう気持ちもあって。大学の連中には僕と北川が同性愛者で付き合ってるってことは言ってなかったから、そこから説明するのもね……そのときふと千夏ちゃんの顔が浮かんだんだ。千夏ちゃんだったらきつと、分かってくれなくても黙って聞いてくれるかなって」

私の怒りはとうに消えてなくなり、再び悲しみが体中を埋め尽くす。私は京助さんの胸に顔を埋めて声を上げて泣いた。周りの人たちが見ているけどそんなこと関係無かった。

「私……私、京助さんのこと好きだったんだよ？ 初めて会ったときからずっと……本気で好きだった。でも京助さんが監督と付き合ってるって知って……それで自分にはどうにもできないし可能性も無いって分かって、だから頑張っただけで……忘れて……でも今日、いきなり目の前に現れて、あんな風に手を繋がれて、凄くドキドキして……それでやっぱり私、この人のこと好きだ、忘れるなんてできないって……それなのにこんなのに……無いよ、酷いよ」

「千夏ちゃん……」

京助さんは大きな手で私の顔の両頬を挟み、親指で涙を拭いた。そして私の身体をそっと引き離すと京助さんは席を立った。

「じゃあそろそろ行くね」

振り返ることなく店を後にする京助さん。どうしよどうしよどうしよ行かなきゃ追いかけなきゃ最後に何か言わなくちゃ今を逃したらもう二度と……

「京助さん！」

人通りの激しい駅構内で少し前を歩く京助さんに向かって思い切り叫んだ。背中を向けたまま立ち止まる京助さん。通行人がじろじろと私を見る。

「いつか……いつか出てきたらまた私と手を繋いで下さい！　ずっと……ずっと待ってますから……だから……」

唇が震え喉の奥が苦しくてもう声にならない。振り返る京助さんは笑って頷いた。堪え切れず再び涙が溢れ出し、彼の姿は次第にぼやけて見えた。そして私はその場に蹲った。

愛の相互アーン（ふうふう付き）

「カーッと！」

背後から大きな声が聞こえた。今誰かカットって言った？ 何だろ？
しゃがんだまま目を擦って後ろを見るとそこには。

「か、監……督……？」

間違いない、このボサボサ頭の、現代における冴え無い男の要素を凝縮したような出で立ちは紛れもなく監督北川だ。あれ？ でもこの人死んだはずじゃなかったっけ？ まさか死にきれず幽霊となつて京助さんに仕返しに来たとか？

訳が分からずに再び前を向くと、京助さんがゆっくりと近付いてきた。そして私の前にしゃがむと、「ごめんなさい！」と手を合わせて頭を下げた。ごめんなさい……って何が？

「どういふこと……ですか？」

再び監督に目をやると、やはり申し訳なさそうな、だが満足気な顔をしていた。そして手に持ったカメラを私に見せるようにちよつと持ち上げる。それが合図となり、店の中からと、さらに京助さんがさっきまでいた辺りからもカメラを持った若い男が姿を現し、笑顔で私達の下へと歩み寄った。

「本当にごめんなさい！」

目の前で今、四人の男どもが座敷で土下座をし、額を畳に擦りつけて謝罪の言葉を繰り返している。私はそれを、壁に凭れ踏ん反り返ってタコわさを摘まみながら見下している。だが気分はちっとも晴れない。

ちなみに四人というのは、京助さんと監督に加え、新しくジョ・ルジオア・ル・マーニ大学映画研会に最近入会したと思われる一年坊主である。坊主といっても大学生だから当然私より年上だけだね。さらに髪型は坊主でも何でもないけどね。

事の顛末はこうである。京助さんと監督は、今度新しい映画を京助さん主演で撮ることに決めたのだそうだ。内容はサスペンスタッチの恋愛もの。なぜ京助さんが主演かというと……他に出る人がいないから。なんとたつてジョル大映研は映画部から分裂した弱小サークルだからね、人手不足には事欠かないわけで。

まあ京助さんはカッコイイので絶対にカメラ映えすること間違いなしだから出た方が良いとは前から思ってたけどねってそんなことはどうでもよくって。

撮影や脚本はそれなりに経験を積んできたけど演じるのは初めての京助さん。リハーサルを何度か行ったもののどうしても固くなってしまいセリフ棒読みで、このままでは映画にならないってんで考えたのが、何も事情を知らない第三者を相手にアドリブを交えてぶっつけ本番一発勝負の芝居をすること。

内容が唐突で過激なだけに、京助さんの芝居が下手っぴだとすぐに相手に気付かれてしまうわけだが、相手がその話を信じてくれれば（ものの見事に私は信じたわけだが）本気の本気で対応することになり、京助さんも演技していることすら忘れて自然に言葉が出てく

るんじゃないかと。これがうまくハマればよりリアルな映像が撮れるだろうということで、満場一致で採用決定。

じゃあ相手は誰にするのか？　ってんで揉めに揉めたところ白羽の矢が立ったのがこの私ってことらしい。京助さんや監督、香織さんとも知り合いだし、前回のビーグルSPVでそのずば抜けた演技力（努力せずとも才能が滲み出してしまうのが天才たる所以なのよ）は立証済みだし、何と言っても現役ぴちぴちJKで初々しく清々しく瑞々しく爽やかで可愛くて美人で美少女でおまけに性格二重丸で非の打ちどころナシ！　と映研サイドの条件を、器から溢れ返って床上浸水するほど満たしに満たしまくっていたのだそう。ま、当然よね、ふふん。

と散々持ち上げられて、さっき「何でも好きなものご馳走するから」と宥めすかされてやってきたのがここ土間土間。即ちチェーンの居酒屋である。相手は、私が寿司とか焼き肉とか「何でも好きなもの奢る」と言ったときの定番をリクエストしてくることを予想していたところ、それを完全に裏切る安上がり路線を要求してきたので、フトコロ的にほっと一安心したらしい。

そりゃまあね、寿司とか焼き肉とか食べたいとは常々思ってるけどさ、それは誕生日辺りにバカボンに交渉すれば十分実現可能だからね。それよりも私は……そう「酒を飲んで酔っぱらって」みたかったのだ。

要するに私は騙されて体良く利用されたわけで、この怒りは酒でも飲まないことには収まりそうにないのだった。更には酔うと本当にエッチしたくなるのか？　という実験も兼ねているのである。いかなる時も探究心を忘れない、さすが私。

「いやあでも千夏ちゃん、ホント凄い良かったよ!」

いつも無愛想な監督北川が、気持ち悪いほどの笑顔で私をべた褒めし、運ばれてきた生グレープフルーツサワーの半分に切られた生のグレープフルーツをぎゅうぎゅう絞り、果汁を注ぎ、マドラーでサワーと掻き混ぜて私の前に恭しく差し出した。私はエリカ様よろしく、ふん、と踏ん反り返ったままそれをグイと飲んでみる……うーん、あんま美味しくないや。

「もっと甘いのないの?」

すると新入部員AとBのうちAが、「じゃあこれなんかどうです?」とメニューを持って勧めてきたのは「カルーアミルク」なる飲み物。何か聞いたことあるな。誰かがそんな歌を歌ってたっけ。じゃあそれで。

程なく運ばれてきたカルーアミルクを一口。うええコーヒー牛乳酒じゃんこれ、甘ったる過ぎ……

「何かさあ、もうちょっとフルーティで私みたいに爽やかで口当たりも良くてかつスウィーティなの無いわけ?」

もはや今の私はマリーアントワネット級のやりたい放題言いたい放題のワガママお姫様。シモベは四人。しかもそのうち一人は飛びっきりのイケメン京助さんときたもんだ。こんなご身分、滅多に味わえないんだから思う存分楽しまなくっちゃ。

サワーやカクテルは、アルコールが入っているせいかなどれもしつくりこない。うーむ、お酒って基本的に美味しくないんだな。仕方ないので一口飲んで別物を注文させる。私の前にはいつの間にか

ほとんど口を付けていない色とりどりのドリンクの入ったグラスがずらりと並んでしまった。

最初に頼んだドリンクは、氷が溶けて上の方が薄くなっている。「お気に召さないようでしたら私が頂いてもよろしいでしょうか？」と新入部員Bが私の前からグラスを取ろうとしたところを「無礼者っ！」と叫んでぴしゃりと手を叩く。

「勝手に飲むんじゃないわよ。これは私の物なんだから、あんたは水でも飲んでなさい」

恨めしそうに正座をしながらグラスの山を見詰めお冷を啜るAとB。
ああ良い気分……

「ところで千夏ちゃん、何か食べない？」

再び監督北川がメニューを差し出してきた。タコわさはとうに食い尽してしまった。確かにそろそろ夕食の時間、お腹は空いている。

「そうね、じゃあ私が喜びそうなお料理注文してくれる？」

トレンディドラマ全盛期の浅野温子風に無意味かつ過剰なまでに髪を掻き上げながら上から目線で言ってみる。まあ単純に品数が多過ぎて選ぶのが面倒なだけだったりするんだけど。

枝豆、サラダに始まり、刺身、鶏の唐揚げ、馬刺し、手羽先、各種串焼き、ピザ、豚平焼き、ホッケ、エイヒレなどなど来る来るわ来るわ未体験ゾーンの居酒屋料理達！ 私はAとBにグラスをどけさせ、代わりに目の前に料理を並べさせた。

「いっただつきまーす！」

このときばかりは花より団子、片っ端から箸を付けては口へ運んだ。そして何品目かの料理を取ろうとして私は、あ、そうだ、と閃いちやったのである。

「京助さん、チコウ寄れ」

それまで黙って水だけ飲んでいた京助さんを隣に座らせる。そして箸を手渡し、私は口を開けた。あの京助さんに対して、まさかの強気の「アーンの要求」である！ しかも無言で！ 内心ドキドキしながらも私は「無言アーン」の姿勢を崩さない。すると何をすべきか理解した京助さんは、ホッケの身をほぐし、一口分割り箸で摘まむと、何と言うことでしょう、ふうふうした後で私の口へと運んだのです！

京助さん直々ふうふう付きのアーンに思わず脳天痺れた！ ホッケウマイ！ で、調子に乗った私は、その箸を京助さんから奪い、今度は私がホッケを摘まみ、ふうふうして京助さんの顔の前へ持っていく、食べさせたのである！ ああ遂に「愛の相互アーン（ふうふう付き）」ここに完成ナリよ……

行けるとこまで行っつけ

私を見詰めながらホットケをもぐもぐする京助さん。急に恥ずかしくなった私は、杏子酒ロックのグラスを掴むと、グビグビッと一気に飲んでしまった。甘くひんやりと、しかし熱い液体が喉から食道を下って行く。

「じゃあ今度はあピザ食べさせて？」

今頃気付いたのだが、杏子酒ロックは甘くて飲みやすいが、ロックと言う名に恥じずアルコール度数がサワーよりもかなり高い。一気に酔いが回り、意識はあるものの呂律は怪しくなり、もはや色んな部分が色んな意味で制御不能になりつつある。

ま、いっかく今日はとことん京助さんに甘えちゃおうっと。私はテーブルに頬杖ついたまま口を開けて、あれがいいこれがいいと次々と京助さんにアーンを要求し続けた。ときどきA及びBがそこに加わって私に食べさせようとするが、「調子に乗るんじゃないよっ！」と一括して断固拒否。私にアーンしていいのは世界でただ一人、京助さんだけだもんね。

マリーアントワネット気分の私が酔っぱらってきたのを見計らったかのように、シモベ達四人も飲み食いを始めた。私はだいぶお腹も膨れてきたし、京助さんに食べさせてもらったり口を拭いてもらったり肩を揉んでもらったりと至れり尽くせりで気分上々だったので、もう何も言わず、好きにさせておいた。

何より今私は、京助さんにしなだれかかり思いつき身体を密着させているのだ。さっきまでの怒りはどこへやら、かなり幸せ絶好調

く。心臓がドキドキしてるけど、緊張から来るのとは違う気がするなあ……お酒を飲むとドキドキするのかな……それに私、随分大胆になってる気がする。酔うと人肌恋しくなるっていうのはあながち嘘でも無いのかもしれないな。

「千夏ちゃん、今日は本当にごめんね」

肩に頭を乗せていた私は、京助さんの顔を見た。

「ホントに悪いとお思ってるんですかあ？」

今はもう全く怒っていないのだが、ちょっと拗ねたみたいに言ってみる。

「うん、思ってるよ」

「えええどうかなあ、反省の色が見えませんか。あんなひどいことされたんだからあ私こんなことぐらいじゃ全然許す気になれない」

調子こいて京助さんの頬つぺたをつんつんしてみる。実際は100%許しちゃってるけど、京助さんを困らせるなんて百年に一度のチャンスだからね。行けるとこまで行っとけ。

「じゃあどうしたら許してくれるの？」

京助さんは私の頭を撫でながら優しく言った。やだ京助さんたらそんなこと、乙女の髪は敏感なんだから。京助さんも酔ってるのかな……ようし、ここは一つ勢いで。

「私のお恋人になってくれたらあ許してあげよう！」

京助さんの目が真剣に私を捉える。その真面目な表情に、お酒のドキドキが緊張のドキドキに変わった。私は後悔した。こんなこと、いくら酔った勢いでも言うべきではなかった。そんなの絶対に有り得ないって痛いほど分かってるのに。

「ご、ごめんなさい、何言ってるんだろ私。ちょっとトイレ行つてきます」

急に酔いが醒め、私は立ち上がろうとした。が、心は醒めても身体中にはしっかりとアルコールが回っていて、足が纏れ、そのまま前につんのめり転んでしまった。テーブルの上のグラスを派手に倒す。その音に向こう側で三人で盛り上がっていた監督北川とA&Bが不意に会話を止めて私を見た。場が沈黙する。

「大丈夫？」

京助さんが、倒れた私に手を差し伸べてくれた。これと似たようなことが前にもあったような……そうだ、夏の合宿のときだ。へろへろになって砂浜に倒れ込んだ私。そこへ優しく手を差し伸べたのも、やっぱり京助さんだったんだっけ。

でも私はその手を取らなかった。そして、何だか急に悲しくなってきた。

「いいんです。京助さん、もう私に優しくしないで」

そうだよ千夏。京助さんはゲイで監督の恋人なんだよ。例え監督と別れたって、例え監督を殺したって、私のことを好きになるなんてことは絶対に有り得ないんだよ。今日のこの飲み会で、もう十分恋

人気分を味わったじゃない。だからこれ以上は……

「いいよ」

京助さんは私を抱き起こしながらそう言った。いいよ、って何が？

「千夏ちゃんの彼氏に……して下さい。だから、今日のこと許してくれる？」

「な、何バカなこと言ってるんですか、止めて下さいよそんな気休め。からかってるんなら今度こそ本当に怒りますよ？　だって京助さんはゲイ……」

すると京助さんは私の首に腕を回した。京助さんの顔がいきなり接近する。私の火照った唇に、柔らかい物が触れる。その感触に、酔いも手伝って全身が蕩けそうになる。唇を離した京助さんは、はにかんだように言った。

「ごめん、それも嘘なんだ」

オア外で？

ふと目を開けると私は布団に包まれていた。どうやらベッドに寝ているらしい。見慣れぬ天井と壁。ここはどこ？ 私は確か居酒屋にいて京助さんとキスをしてそれで……そこから記憶が無い。

とにかく頭ががんがんする。酷く気持ちが悪い。眉間に皺を寄せ、横たわったままゆっくりと首を捻ると、窓際に男の人が立っていた。彼はこちらに背中を向けて外を眺めている。ベッドの上で私ともぞもぞと動くと、毛布の擦れる音に気付き彼は振り返った。

「京助さん……」

窓枠に手を着いて、にっこりと微笑んで私を見詰める。この部屋には私と京助さんの二人しかいない。ということはここはまさか……ホテル？

「目が覚めた？ 千夏ちゃん、お店で酔ってそのまま寝ちゃって全然起きないから。仕方なく……ね」

仕方なく？ 仕方なく何なのだろう。はっ、まさか。私は掛け布団を少し持ち上げて、布団の中を見た。やだ、何で？ どうして？ 裸じゃない私！ しかも一糸纏わぬすっぱんぽんぽんぽんぽんぽんぽん……
ってことはもしや……

「仕方なく脱がせてやっちゃった。だって千夏ちゃん、どこ触っても気付かないから」

そそそそんな京助さん私の許可も得ず……でも京助さんならナニされてもいいかも……でもでもせっかくの好きな人との初体験なのに酔って覚えていないなんてそんなのイヤイヤ。イヤイヤのところ
で首を振ると更に頭ががんがんだので即中止。

いやいや待て待て落ち着くのよ千夏。最上級グッドルッキングメン
かつジェントルメンの京助さんに限って酔い潰れた穢れなきうら若
き純情可憐で無抵抗な乙女を無断で襲うなんて絶対に有り得ない。
私の好きになった人はそんなケダモノじゃなくてよ。ということ
は……

「仕方なく脱がせてはみたものの、千夏ちゃんの身体って全然ソソ
られないからさ、やるの止めたんだ」

そんな屈辱的な！ それなら黙って無理やりにでも押し倒されてヤ
られちゃった方が一億倍マシよ！ 激カワ現役ぴちぴちJKを丸裸
にしておいて何もしないだなんて、銀行に強盗に入った銀行強盗が、
目の前に差し出された現金三億六千万円を、強盗成功目前にして手
も付けずに立ち去るくらい有り得なくてよ！

脱がすだけ脱がしておいて後は放置プレイとは嗚呼何たる恥辱！
あまりの恥ずかしさに顔から火がボーボー、布団を頭から被りもじ
もじしていると、京助さんがベッドの傍へと歩いて来た。

「気分はどう？」

どう？ って尋ねてきたってことは……そそそそれはつまり今私は
エッチした後の感想を求められているってことなのですね？ やっ
ぱり私たちは今夜結ばれたのですね！

しかしへべレケだったからなあ、全く以って何も感じなかったなあ。というか記憶が無いなあ。でもここで京助さんをガツカリさせるような発言をしてしまったら、この先の私達のラブライフに悪影響を及ぼしかねない。

「う、うん、とっても良かったよ」

男は女にコトの後で「良かった」と言われるととっても喜ぶ生き物だって何かの雑誌に誰かが書いてたのをどっかで読んだ気がする。

「そう？　千夏ちゃん全然動かないからちよっと心配だったんだ」

動かない……あ！　以前美しき姉から聞いたことがある。エッチのとき男に任せっきりで自分から動こうとしない女のことをある動物のある状態になぞらえて何とかって言うんだよね。何だっけ何だっけ何かでっかくて海っばいヤツだった気がするんだけど……トド？　違う。マンボウ？　近いけど若干違う。じゃあシャチ？　は結構寧猛だし……そうだ思い出した。

「で、でもホントの私はクジラじゃないですよ！　それに関してはどうちかかっていうと攻撃的でサメっばいってよく言われるんです。今日はたまたまお酒飲んじやってこんななっちゃったから……だから今度は頑張りますから」

布団から目だけを出して私は小声で答えた。

「クジラ？　サメ？」

おかしいな。京助さんがきょとん顔だ。もしかして京助さん、そういうエロトリアビアに関して疎い人なのかな。美人過ぎる女子は却

ってモテないってよく聞くけど逆もまた真なり。イケメン過ぎて誰も近寄らなくって、案外恋愛経験浅いのかも知れない。それはそれで私にとっては嬉しいことだけど。

「あ、いえ、こっちの話です。でも京助さん、ホントにとっても上手でしたよ」

とりあえずここはヨイショしとけば間違いないだろう。

「言ってることがよく分からないな。千夏ちゃん、まだ酔ってるの？」

「いえ、頭痛くて気分悪いけど意識ははっきりしっかりしてるつもりです」

「そう？　じゃあ上手って何のこと？」

ホントに通じて無いのだろうか……あ、ひょっとしてこれっていわゆる巷で大流行の「言葉責め」ってヤツ？　自分は知らない振りして女の子にわざと恥ずかしい言葉を言わせる……もしかして京助さんでDSなのかしら。ああでも京助さんならそれでもいいかも。この恥ずかしさもいつかやがて快感に変わっていくのかしら……もう好きにしてえ！

再び布団を被り悶えていると、京助さんはベッドの枕元に腰かけて、私の髪を撫でてくれた。好きな人が頭を撫でてくれると、こんなにも幸せな気分になれるんだと生れて初めて知った十五の夜。

「ごめんね、確かにお酒飲みたいって言ったのは千夏ちゃんだけど、やっぱり高校生を居酒屋に連れて行くべきじゃなかった。まさかあんな風に一気飲みして酔い潰れるなんて思わなかったから。とにかくお店にいられる状態じゃなかったから酔いが醒めるまでってこと

でホテルに運んだんだ。ベッドに寝かせてしばらくしたら千夏ちゃんいきなり『暑いよー』って叫びながら脱ぎ出すからびっくりしちゃったよ」

……はい？

「どうやら千夏ちゃんは酔うと脱ぐ癖があるみたいだね。しばらくお酒は禁止だね」

「私が……自ら……脱いだんですか？」

「そうだよ」

「それはその……全部？」

「全部」

「下着も」

「下着も」

「ベッドの中で？ オア外で？」

「ベッドの上に立ったまま」

「京助さん……見た？」

するとそこで京助さんの顔が一気に赤くなった。

「ごめん。でも脱いだ後はすぐにベッドに寝かせたんだよ」

アナガアツタラハイリタイ。恥ずかしくて死にそう。やっと思いが通じた好きな人の目の前で、酔っ払ってのストリップショー。何たる醜態。とてもじゃないが、まともに京助さんの顔を見れない。私は再び攻撃を受けた亀の如く布団に潜り込む。

「もしかして千夏ちゃん、僕が何かしたと思ってたの？」

「私……魅力ないですか？」

質問には答えず、布団の闇の中で私は京助さんに聞いた。

「裸になっても触ってくれなかったってことは、そういうことですよね」

「そんなことないよ。千夏ちゃんは凄く可愛いし魅力的だ。でなきゃ彼氏にしてなんて言うはず無いじゃないか。でも今は状況が状況だし」

布団越しに京助さんの声が聞こえる。

「しても……いいですよ」

「え？」

私は布団から顔だけ出して、京助さんを見た。京助さんも私を見詰める。

「千夏ちゃん……」

そして京助さんは私の髪を撫でながら、口付けようと顔を近付けた。心音が音速から光速へと加速する。ああ、好きよ大好きよ京助さん、このまま私を快樂と言う名の天国へ連れてって……とそのとき。

「ちよ、ちよつとヤバ、む、無理です！」

唇と唇が触れる寸前で嘔吐感がいきなり爆発した。私は目の前の京助さんを思い切り突き飛ばし、口元を押さえてトイレへと駆け込んだ。便座に手を着き、何度も何度も戻す。さっき食べた物が全部出てしまったようだ。

裸のまま便器に顔を突っ込んで蹲っていると、後ろからふわり、と

毛布が掛けられた。京助さんは、みっともなく酔っ払った私を、
っと何も言わず介抱してくれていたのだった。

岡崎千夏の男子と交際したときしてもらいたいことランキング第三位

何とか自力で歩けるまでに回復したので、私達はホテルを出た。そこは池袋の駅のすぐ近くのラブホテルだった（龍馬の家じゃないよ）。

居酒屋で飲み始めたのが午後五時過ぎくらいと早かったので、まだ夜はそれほど更けていない。「家まで送るよ」という京助さんの申し出を丁重にお断りし、私は一人電車に乗った。

胃の中の物を全て出しきったので、気持ち悪さはだいぶ軽減されたが頭痛はまだ治まらない。そして体調以上に気分は最悪だった。

「嫌われただろうな……」

優先席に腰かけて私は呟く。酔った上でのストリップショーまでは何とか許してくれるかもしれないが、その後が頂けない。せつかく良い雰囲気になったのに、しかも自ら求めたのに、キスする直前での嘔吐。それも力一杯突き飛ばしちゃったし。あれじゃまるで京助さんとのキスを、断固として拒否したと取られても言い訳ができない。

「もう駄目だ……」

浦和で電車を降り、ふらふらと頼りない足取りで夜空の下、家路へとつく。ただいまーと力無く玄関を開け、そのまま足を引きずるように階段を上り自分の部屋へ。居間でバカボンが何か叫んでる気がするが、どうでもいいや……私はそのままベッドに突っ伏した。

目を開けるといつもの天井といつもの壁に囲まれたいつもの私の部屋だった。携帯を手にとると着信していた。メールだ。

『おはよう。具合はどう？ 二日酔いかな？』

ふおおおお……私は感動で全身が震えた。目には薄らと涙さえ浮かぶ。こ、これが、「彼氏からのおはようメールを枕元で見る」という、「岡崎千夏の男子と交際したときしてもらいたいことランキング第三位」のシアワセパワーの破壊力なのか……ああ京助さん、交際初日にあんな醜態晒しまくったにも拘わらず、私のこと嫌わずに心配してくれてたのね。よし、早速返信をしなくては。でも何て返せばいいんだろ？

例文一、体育会系後輩的返信

『ちわっス！ いやあ昨日はつい調子に乗ってマズっちゃいました
ゝスンマソン！ でももう全然平気っス！ 元氣ハツラツオロナミンCっス！』違う、全然違うぞ。そもそも私こんなキャラじゃないし。

例文二、恋に奥手で控えめな少女的返信

『うん……大丈夫。心配してくれてありがとう。もう平気だから、そんなに気を遣わないで』何か暗いな。どストレートの真っ黒ロングヘアーって感じ。

例文三、天然系元氣娘的返信

『あゝんなの全然へっちゃらだヨ！ それよりさ、今からどっか出かけない？ セっかくの連休で良い天気なんだからさ、海とか山と

か、あ、私お馬さんに乗ってみた〜い!』もう少し色気が欲しいな。つーか頭悪そう。何だよウマって。

例文四、企業間ビジネス的返信

『拝啓、貴社ますますご繁栄のこととお慶び申し上げます。平素は格別のお引立てを賜り、厚く御礼申し上げます。さて、私こと岡崎千夏、昨日は多大なるご迷惑をおかけしましたこと深くお詫び申し上げます。お気遣いのほど誠に有難うございます。その後、体調は順調に回復しておりますので一両日中には元気な姿をお見せできることとお約束いたします。これに懲りず、今後とも交際を続けて頂ければ幸いです。敬具』何だこれ。

例文五、ややギャル文字風痛女的返信

『ありがとうございマス京助さんのめえるお見たから千夏わもう元気いっぱいデス! 昨日わ千夏のはだか見られちゃつてすごおくハズカシかったケド……でもダイスキな京助さんだから許しちゃう!』読み辛っ! 打ち込みめんどくせっ! つーか誰だお前は!

例文六、面白味には欠けるがまあ普通の返信

『昨日はごめんなさい。体調はもうバッチリです。それより私達、本当に付き合ってるんですね?』

これでいいか……こういうのはあんまり深く考えない方がいいだろう。サクッとあくまで日常会話の延長線上として。私は送信しようと親指に力を込めたがすんでのところでボタンを押すのを止めた。

『私達、本当に付き合ってるんですね?』はいらないか。朝から重いよね、これって。そういう質問自体ウザがられそう。

確かに昨日、京助さんは「千夏ちゃんの彼氏にして」って言ったんだからその言葉を信じるべし。それにこうして心配もしてくれてるんだから、それで十分じゃない。私は後半の文章を削除し、短いメールを京助さんに返した。記念すべき初恋人との初メール交換である。一生の宝物にしようっと。

寝言で『私は神だ』とか言ってるそうじゃない

「おはよー」

階下の居間へと下りて行く。階下の居間へと下りて行く。人生で初めてにも拘わらず、あんなにたくさんのお酒を一気に飲んだんだからってつきり「それを一度でも経験すると、二度とお酒には手を出しませんと神に誓いたくなる」と巷で噂されるほどの苦痛と自己嫌悪の極みとも言うべき二日酔いという状態になるものだとはかり思っていたのだが、いっぱい寝たせいとか、頗る調子が良い。

さすが若い肉体、回復も早いのだ。お母さんは飲まないみたいだけどバカボンはお酒強そうだからな、案外酒豪の血を引いてるのかもしれない。

そのバカボンがソファに座って腕を組み、目を閉じて難しい顔をしている。何だろ、便秘かな？

「千夏、そこへ座りなさい」

「どうしたの？」

「お前、乱交、じゃなかったドラッグパーティーに通い詰めてるそうじゃないか」

「はあ？ 何を藪から棒に」

「母さんから聞いたぞ……なんという醜態、なんという墮落、父親として私は恥ずかしいったらありやしない。死んだ爺さん婆さん、更にはそのまた爺さん婆さんに申し訳が立たん」

そう言ってバカボンは俯き腕で目を拭い、大袈裟に泣く素振りを見せた。

「あのお、おっしゃる意味がよく分かりませんが」

確かに酔っ払って醜態を晒したのは事実だけど、ドラッグってなんのこっちゃ？

「昨日の夜、帰って来たときお前の状態は普通じゃなかった。私が声をかけても聞こえてるんだかいんだか、更に母さんが話しかけても聞いてるんだかいんだか。そしてその目は虚ろで『お父さん！ 千夏のあの目は絶対にヘンなクスリがキマったときの目よ！』と母さんが泣きながら訴えてきたのだ。」

いつからだ？ 誰にそそのかされた？ 種類は何だ？ アヘンかモルヒネかコカインかヘロインか覚醒剤か大麻かLSDかMDMAかモルヒネかシンナーかエクスタシーかスピードかヒロポンか？ アッパー系かダウナー系か？ 売人はクラスメートか担任か校長かはたまた食堂のオバちゃんか？」

よくそんなすらすらと淀みなく麻薬の名前が出てくるもんだ。アンタは麻薬捜査官かよっ！ 校長がヤクの売人ってどんな学校だ。つーかお母さんてば……

「よし、行くぞ」

「どどこどこへ！？」

「決まっているだろう、更生施設だ、隔離病棟だ、閉鎖病棟だ。お前はまだ若い。きちんと立ち直ってもう一度人生やり直すんだ。何年かかってもいい、心身ともに晴れやかに生れ変わった娘の姿を、再びこの父親の前で見せておくれ」

バカボンは座ったままの姿勢の私の腕を取ると、そのまま玄関まで

私を引きずって行つた。意外と凄い力である。

「ままた待て待てえい！ 膝が擦り剥けるっつの放せっつの！」

「こういうのはな千夏、家庭での療養では限界があるんだ。最初こそ厳しく接することを心に誓うがな、家族だとどうしても患者に対して毅然とした態度を取り続けるのが難しく甘くなりがちだってネットに書いてあったからな。だからしかるべき場所でしかるべき処置としかるべき規則正しい生活をだな」

「患者ってあのね、何で私が麻薬なんかに手を出さなきゃならんのだよ！ こないだは『私の娘が人の道に外れるようなことはするはずがない』とか何とか豪語してたじゃないのさ！ 信用してないわけ？」

「だがな、最近のお前は言動がおかしいという情報も風の噂で耳に入ってきているのだ」

「な、何よおかしいって」

「寝言で『私は神だ』とか言ってるそうじゃないか」

「げ……そ、そんなの寝言なんか自分でどうこうできるもんじゃないでしょ！ 神様になった夢でも見てたんじゃないの？ とにかく、私は麻薬なんか知りません！」

「では昨日のあのトリップ状態はどう説明する？」

「それはちよつと、たまたま、その、お酒をですね……」

「ん？ 何だって？」

「飲んでみたらですね、思いのほか酔いが回ってしまいましたですね……」

さっきまでの勢いはどこへやら、私はイタズラが見つかった飼犬の様にバツが悪い。

「ほっほー酒をね。そうかそうか、お前もとうとう大人になったか」

バカボンの態度も一変する。

「あれ、怒らないの？」

「麻葉に比べりゃ酒なんざ可愛いもんだ。で、誰と飲んでたんだ？」

「か、彼氏……とその仲間」

「お！ 遂に彼氏できたのか！ そうかそうかお前ももうそんな年頃か……そうだ、せっかくだから食事でも一緒にどうか？ 何してる男か知らんがその彼も今日は休みだろう？ ここは一つ我が家に招待しようじゃないか。ご馳走作ってくれるように母さんにメールしておくから」

「そういえばお母さんは？」

「社交ダンスだ。でも昼過ぎには終わるって言ってたからな、その足で買い物に行くはずだ。さあさあ早速お前もその彼に連絡してみなさい。ああ楽しみだ、お前が連れてくる初めての彼氏か、どんな男なんだろうな……おっとまだ何も言うなよ実際に会ってみるまであれこれ想像して楽しむんだからな。そうかそうかいやあめでたいめでたい」

あんなバカボン初めてである。すっげー気持ち悪い。美しき姉が初めて彼氏を連れてきたときもあんなに上機嫌だったんだろうか……それにしても意外だったのは、酔っ払って帰って来たことに一切お咎めなしだったということだ。まあいいか。とにかく京助さんに電話してみよう。

「もしもし千夏ちゃん？」

「もしもしもしも」

あー昨日のことを思い出すとやっぱり緊張するよー。

「……おはよう」

「お、おはようございます」

ここでしばし沈黙。まずい、何か言わないと。私からかけたんだし。

「どうしたの？」

「あ、えーっとですね、京助さん、その、今日のご予定は？」

「んー特にないけど。どうして？」

「えー実はですね、バカボン……もとい私の父がぜひ会いたいと申しておりますですね、良かったら我が家に来て頂けないかと」

「え、お父さんが？ 僕に？ もしかして、昨日のこと怒ってるのかな？ でも仕方ないよね、結果的には僕らが千夏ちゃんにお酒飲ませたのも同然だから……分かった。謝りに行くよ」

「いやあそれがですね、お酒飲んだことに關しては全くと言ってい
いほど寛容でしてね、何と言うかその、私に初めて彼氏ができた
ことを知ってそりゃもう初孫の顔を見たときのよう上を下への大
騒ぎで大変嬉しそうでしてね、とにかく連れてこいの一点張り
でしてね、一緒にメシでも食おうじゃないかと、こういう次第
でありますはい」

「そうなんだ……でもどちらにせよご招待に与ったんだ。喜んで伺
わせて頂くよ。それより意外だな」

「え、何がですか？」

「千夏ちゃんの初めての彼が僕だってこと」

「どうしてですか？」

「だって、そんなに可愛いのにこれまで誰とも付き合ったことがな
いなんて思いもしなかったから」

「そそそんな京助さん可愛いだなんてでへへへ……と、とにか
くそういう次第でありますので、一つよろしくお願いいたします」

はー何とか伝わったかな……

今日の夕方の四時、私の家の最寄り駅である、浦和駅西口改札前で待ち合わせる約束をして電話を切った。ああ……ようやく私にも春が来たのね。人生初の恋人。でも京助さんはどうなんだろう？ 私にとっては初めての人だけど、京助さんにとっては……初めてじゃないよね、もちろん。

歳だって違うんだし、何よりあのルックスだし。初めてだったら逆にヘンだよ。これまで何人くらいと付き合ってきたのかな……スゲイ気になる！ でも気にしても仕方ないか。今は私だけを見てくれればそれで充分じゃない。

生粋のタイ人が毎朝空輸される本場の食材を使って腕を振るう本格タイ料理屋が

まだお昼前か。ダンスの後に買い物して来るとなるとお母さんの帰宅は恐らく夕方で、そうすると食事は当然夜になる訳で。

さてこれからどうしたもんな……あーしまった！ 今日時間があんだから今すぐにでも京助さんと会って、優雅でロマンチックなブランチタイムと一緒にどうですかの提案をするんだった！ 爽やかなる秋晴れのお昼のデートに誘えばよかった！ とベッドの上で枕を抱えもんどり打って転げ回っていると携帯が鳴った。

「きよ、京助さん？」

「食事は夕方からだよね？ せっかくだからお昼でも一緒にどうかと思って」

うおおおおこれぞ正にデヴィッドカップフィールド及び二代目引田天功改めプリンセステンコーもびつくりの以心伝心！ あまりの絶妙なタイミングに全身をサブイボが席卷する。相思相愛をこれほど肌身に沁みて感じたことなどこれまでの人生で果たしてあっただろうか？ 否。

「どこに行きましょうか？」

「そうだな……千夏ちゃん、地元でどこか美味しいところ知ってる？」

おおっと京助さんいきなりの無茶振りだ。やはりSの気があるのかしら。京助さん、私が高校生だということを忘れでは？ 現役JKは当然お金なんか無いんだから外食なんて滅多にしませんがな。

たまにバカボンの目の前で、「外で食べたーい！」と駄々をこねて

もかっぱ寿司か安楽亭か、ぽんぽこぽ〜んでお馴染みのお好み焼き道頓堀に連れて行かれるくらいだ。あ、そう言えば夏休みは美しき姉とカルバンク・ラインホテルの自然食バイキングに行ったつけ…あんま味覚えてないけど。

しか〜し！　ここで美食家がお忍びで通い詰める穴場的五つ星級美味レストランに連れて行けば私の株は更なる赤丸急上昇、連日のストップ高も夢ではないわけで。こんなことなら私も龍馬を見習って地元で食べ歩きをしておくんだった。

「そうですね、えーとですね、確か家の近所には……」

ダメだ。行ったことも無いのにいかにも「常連です」みたいな感じで知ったかぶったりしたらそれこそ幻滅されることは必至。考えろ〜思い出せ〜きつとどっかに一件くらい良い店を知ってるはず。

「そう言えば駅の近くにですね……」

は、待てよ。もしかして私、試されてる？

京助さんのこの問いに対して仮に私が「あ、駅前のちょっと裏道入ったところに人当たりの良い夫婦が二人でやってる小さい洋食屋さんがあるんですけど、そのハヤシライスが絶品なんです！」とか

「駅から家までの道の途中に生粋のタイ人が毎朝空輸される本場の食材を使って腕を振るう本格タイ料理屋があって、結構辛いんだけどパクチーとレモングラスの使い方が絶妙でどれを頼んでも美味しいんです」とか

「県庁の裏にあるイタリア料理屋さんなんですけど、シェフが割と

若いんですね。だからそんなに期待してなかったんですけど、歳に似合わずイタリアで何年も修行してきたみたいでこれがめっちゃ美味いんです！　パスタはもちろんメインの肉や魚も手間暇がかかってるって感じで。で、何が感動したって最後のデザート！　あんなジェラート生れて初めて食べました！」

というように、即座に答えたならば、きっと京助さんは「こいつはしょっちゅう色んな男に食事に誘われて、ほいほいついて行くような尻軽女なんだな」と思うに違いない。

つまり京助さんは、私の「あなたが初めての彼氏」宣言に対して、それが本当なのかどうかを、美味しいお店を知っているかどうかという質問で、婉曲的に問うているに違いないのだ。直接的に言えば「お前、本当に俺が初めての男なのか？」となるのだが、京助さんはもちろんイケメンかつジェントルメンなのでそんな不躰な聞き方をするはずもなく。

だからここは上手く答えられなくて良いのだ。男は初めての男になりたがり、女は最後の女になりたがる、とは誰ぞ有名な人の恋愛格言だった気がする。要するに、私が答えに困れば困るほど京助さんは安心するに違いないのだ。

「いいよ千夏ちゃん無理しなくて。別にマックとかでもいいし、軽くコーヒー飲みに行くだけでも良いし。じゃあこれから出るから、そうだな、一時間後くらいに駅の改札で」

やっぱりな。京助さんの心の安堵の溜め息が聞こえてきたわ。そうよ、なんたって私はウブで純情で可憐なおトコも穢れも知らない十五歳の乙女なんだから。京助さんをガツカリさせるような言動には気を付けなくっちゃね。

「ごめん、待った？」

改札から現れた京助さんは……いやあん今日も変わらず爽やかっコイイ！ この人がホントに彼氏なんだなんて小生岡崎千夏、身に余る光栄、有難き幸せ。でへでへでへ。

「全然待ってません。私も今来たところです！」

ホントは電話を切ってから速攻で着替えて駅までダッシュして、これこれ四十分くらい改札前でうろうろと不審者の如く待っていたことは内緒である。

「どうしようか？」

「せっかく良い天気ですし、お弁当か何か買って外で食べませんか？」

何を隠そう我が家の近くには、一周一キロのトリムコースを設えた比較的大きめの公園があるのだ。中にはカモが優雅に泳ぐ大きな池があり、池のほとりでは暇そうなオッサン連中が、何が釣れるとも知らぬ水の中へと釣り糸を垂らし、不毛な時を過ごしている。

「いいね。でもその前に何か手土産を買っていこうと思うんだけど。寄って行ってもいい？」

京助さんは、駅前の伊勢丹を指差した。なるほど、こういう場合はやはり手ぶらではいけないのか……

「あ、それなら家の近くのケーキ屋さんにあるロールケーキが良いと思いますよ。凄く美味しくて母も父も気に入ってるんです」

ホントは久しぶりに私が食べたかった、というのは内緒である。

特にこれといった特徴の無い街を特にこれといった会話も無いままぶらぶらと歩き、公園へと向かった。もちろん恋人同士らしく手を繋いで。途中にある「フレッシュバーガー」という、看板のデザインからして明らかにフレッシュネスバーガーを意識したであろう店構えのハンバーガー屋に立ち寄り、食糧を調達する。程なくして公園に到着。

「住宅街にこんな広い公園があるんだね。羨ましい」

池を臨むベンチに座ると京助さんは深呼吸しながら辺りを見回した。少し離れた隣のベンチでは虎模様の猫が日向ぼっこをしている。トリムコースでは元気なお爺さんが元気一杯に走り、いかにも運動部然とした若者達が我先にと全力疾走し、ふくよかな体型の主婦仲間がお喋りしながらウォーキングをしたりしている。

私達は買ってきたハンバーガーとポテトとコーヒーを広げ、優雅なランチタイムである。京助さんは食べている間、終始無言だった。やっぱりいきなり親に会うことになって緊張してるのかな……私はポテトを一本摘まむと、池を眺めている京助さんの口元に持っていた。気付いた京助さんは、口を開けてぱくりと食べてくれた。

「うふふ京助さん、緊張してるんですか？」

「ん？ いや、そんなことないよ」

「あ……」

京助さんは私の頭を軽く撫で、肩を抱き寄せると不意にキスをした。そそそそんな真昼間の多種多様な人間が往来し、猫が集会を開き、

カモが泳ぎ回り、カラスが餌を狙う公園で恥ずかしい……私の顔は一気に紅潮する。優しい眼差しと穏やかな口調に反しての大胆な行動に、私の心はぐらんと揺さ振られる。

ああこれが恋愛というものなのですねお姉さま……

この壺、税込百万円だけど現金一括払いで買ってくれるよね？

「あ、あの、一つ聞きたいことがあるんですけど」

「なに？」

そつと唇を離した京助さんの顔をまともに見れない。代わりに日向ぼっこ続行中の猫を見ておく。私にはどうしても腑に落ちない点があり、そこをはっきりさせるまでは安心できない。

「夏に海に行ったとき、私見ちゃったんです。夜寝るとき布団の中で京助さんと監督がその、抱き合ってキスしてるところ……ホントに京助さんはゲイじゃないんですか？」

「あああれ。参ったな、見られちゃったんだ」

参ったなという割には参っているようには見えませんが。

「あれはね、まあ何というか役作りの一環かな。ほら昨日、香織の芝居の後で千夏ちゃんに色々話したでしょ。結果的に騙すことになっちゃったけど……夏の時点で次に撮るのはゲイを主人公にした話にしようって北川と決めてたんだ。男が男を好きになるとはどういうことか身を持って体験しておかないと脚本も書けないからね。ただまさか僕自身が出ることになるとは思わなかったけど。しかもあのときも真似だけでキスはしてないよ」

「なーんだ、そうだったんですか。ということは京助さんは……」
「もちろんストレートだよ」

ほっ。これで一安心である。だがそのとき、一羽のカラスがバカアと鋭く声を上げた。それが引き金となりあの夏の日、浜辺で香織さんが言ったある言葉が私の脳裏に甦った。彼女はいないけど絶対に

京助とは付き合えない、確かに香織さんはそう言ったはずだ。

でも現在こうして私と京助さんは付き合い始めているわけで、これはどういうことなのだろうか。ま、香織さんのことだ、どうせただの負け惜しみか虚言か戯言に決まってる。そーだそーだこういうときは自分に都合のいいように物事を捉えるべし。今が幸せならそれでいいのだ。

「あ、そうだ、言ってなかったけど千夏ちゃん、明日から撮影よろしくね」

「はい？ 何の？」

「だってあんな最高のラストシーンを演じ切ったんだから、出て貰わないと困るよ」

「ええ！？ 別に私は演じたわけじゃないし、そんなの聞いてないですよ？」

「だから今言ってるじゃない。それに、昨日交渉は成立したはずだよ」

交渉？ もしかして私の彼氏になってくれたら許すって言ったこと？

「あ、あれは昨日のことは許すって意味であって、それ以上映画に出るとは……」

だが京助さんは、私の肩を掴み、じっと目を見て言った。

「出てくれるよね」

ああダメだ、この人にこんな風に見詰められたら、例え「この壺、税込百万円だけど現金一括払いで買ってくれるよね？」って言われなくても大人しくハイって頷いてしまうに違いない。

「そもそもどんな話なんですか？」

「役どころはほとんどそのままかな。千夏ちゃんも僕もそうだけど、香織とか北川とか昨日の時点で実名出しちゃってるしね。」

物語は、映画好きの大学生二人が何か作品を撮ろうと決めるところから始まる。だけどどんな話にするかなかなか意見がまとまらない。そこへずっと音信不通だった僕の妹の香織がいきなり帰ってくる。香織は役者志望のフリーターで、以前僕と二人で暮らしていたんだけど、一緒に芝居をしていた男と付き合うようになって、勝手に家を飛び出してそいつと同棲を始めたんだ。僕には何の連絡もなしにね。

二年もの間、連絡一つ寄こさなかったのに、いきなり大きな荷物を抱えての帰宅。しかもまた僕と一緒に住むなんて言い出す始末。あまりにも身勝手過ぎる行動に当然僕は怒った。そして知りたかった。出て行った理由、いきなり帰って来た理由をね。とにかく訳を言えと迫るんだけど一向に話し出さない香織に僕はとうとう切れた。北川が僕を宥めて抑えてくれなかったら僕は香織を殴っていたかもしれない。

北川が帰った後の夜、電気を消した部屋で二人きりになると香織は布団の中でぽつぽつと話し始めた。家を飛び出したのには二つの理由があると。一つ目は実の兄が同性愛者だと知ってショックを隠せなかったから。もう一つはその兄の交際相手が、自分の片想いの人物だったから。そう、香織は前から北川に対して密かに想いを寄せていたんだ。

それを聞いて僕は香織の行動を許すことにした。悪いことをしたわけではないけど、結果的に、知らない内に香織を傷付けていたわ

けだからね」

「で、でも香織さんは同棲したいと思えるほど好きな人と付き合っていたんですよね？　だったらそれほど落ち込まなくてもいいんじゃないですか？」

「実はその男のことは大して好きじゃなかったんだ。ずっと男の方からアプローチをかけられていたんだけど、香織自身は全く興味が持たなくて相手にしてなかった。でも僕と北川の関係を知って、自棄になって付き合い始めたんだ。とはいえ同じ志を持つ者同士だからね、舞台の仲間としては互いに認める部分もあったみたいだよ」

「そうなんですか……」

「しかし結局長くは続かなかった。香織も一緒にいればそのうち好きになれるかもしれないと考えていたんだけど、どうしても北川が忘れられなかった。それと驚くべきことに二年も同じ屋根の下で二人きりで暮らしていたというのに、香織はただの一度も相手の男に身体を許さなかったんだ。男の方も最初は一緒にいてくれるだけでも嬉しかったけど、さすがに欲求不満になるよね。我慢の限界にきた男は、遂に浮気をしてしまう。それに怒った香織は別れを切り出したんだ」

「あのエロスの権化の香織さんが二年間もエッチしないだなんて……信じられん」

「千夏ちゃん、これ映画の話だからね？」

「あ、そうでしたそうでした。知ってる人ばかり出てくるもんでつい現実と混同しちゃった。それでどうなるんですか？」

「僕はそんな妹が可哀想に思えてきたんだ。だから少しでも喜ぶ顔が見たくて、北川と会うときは何だかんだと理由を付けて香織も誘うようにしたんだ」

「ああ、昨日も言っていましたよね。三人で飲みに行ったり遊びに行くようになったって」

「そう。でもそれが結果としてあの悲劇を生み出すこととなってしまふ。僕は単純に北川もゲイだと分かれば香織もきっぱり諦めてく

れるだろうと思っていた。でも考えが浅かった。例え相手が同性愛者であろうと、好きになった事実は変わらないし、気持ちはその簡単に切り替わる物じゃないってことに気付かなかった」

そうよ京助さん、私だってどれだけ頑張ってあなたのことを忘れようと努力したことか……

あーあ、せっかくのカネヅルが死んじゃった

「最初は三人で遊びに行くことを楽しみにしていた香織も、時間が経つにつれ付き合いが悪くなってきた。それを僕は『ようやく北川への想いが冷めた』ものだばかり思っていたんだ。でもそれはとんだ勘違いだった。だって僕に隠れて北川と香織は二人で会っていたんだからね」

「怪しいとは思わなかったんですか？」

「確かに引つかかる部分はあった。北川に打ち合わせをしようと持ちかけると『今日是用事があるから』と断られ、家に戻ると香織がいない、そんな日がときどきあったから。それでも僕は二人を怪しまなかった。なぜなら北川がゲイだと信じて疑わなかったからだ」

「あのお、私が一切出てこないんですけど……」

「あ、千夏ちゃんはね、僕に片想い中の、大学受験を控えた女子高生」

いくらなんでもそのまんま過ぎやしませんかね。

「京助さんとはどこで知り合ったことになってるんですか？」

「僕はバイトで家庭教師をやってるから。その生徒だね」

大学生の家庭教師に憧れる女子高生か、ちょっと捻りが無いような気がしないでもないけどまあいいか。ヘンにアイデア出して役の重要度がアップして、セリフがangan増やされても堪らないからね。

「でも、そんな本筋とは関係なさそうなチョイ役なのにラストとか飾っちゃって良いんですか？」

「何言ってるの？ チョイ役なんかじゃないよ、千夏ちゃんは。むしろキーマンだね」

「え？」

「家庭教師の先生に恋焦がれる千夏ちゃんは、僕のことを知りたくて堪らない。やがてその想いは行動へと変わるんだけど、気持ちを素直に伝えられない千夏ちゃんはストーカーになるんだ」

「げ」

「そして僕をつけて回している内に、香織や北川との関係を知るようになる。僕が同性愛者だと知ったときは香織同様ショックで落ち込んで、何とか忘れようとする。ここは昨日千夏ちゃんが言った通りにしないと辻褄が合わなくなるからね。家庭教師も僕から別の人へと変えてもらい、僕のこととは考えないようにして受験に臨み、見事第一志望に合格するんだ。で、合格発表の場で、こっそりと様子を見に来ていた僕と再会する」

「なーんだ、やっぱり脇役じゃないですか。ストーカーにはなるものの、京助さんのことを諦めてからは勉強一筋なんですよね？」と
いうことは出番なしも同然」

「それがそう簡単な話じゃないんだ。僕のことを忘れて勉強に集中しようと決意した矢先、千夏ちゃんは香織と北川が一緒にいるところを目撃してしまう。後をつけると二人はホテルへと消えて行く。僕と北川が付き合っていることは知っていた訳だから、千夏ちゃんも当然北川がゲイだと信じて疑わなかったんだが、実際はそうじゃなかった。バイセクシュアルだったわけだ。」

自分の好きになった人の交際相手が浮気している。しかもその相手が女で更に僕の妹と知って千夏ちゃんの復讐心に火が点く。今度は北川の部屋に盗聴器を仕掛けたりして身辺調査を開始するんだ」
「何か私、随分ダークサイドなポジションですね……」

「盗聴によって香織が北川の子を身籠ったことを知った千夏ちゃん
は、北川を脅迫する。『京助さんに黙って欲しければお小遣い
ちようだい』ってね」

「うわあ悪党だ。でも『お小遣い』ってところがちょっと可愛いかも」

「初めは大人しく千夏ちゃんの言うことを聞いていた北川だが、いつまでも隠し通せるはずは無いと気づき、自ら僕に全てを告白する。そして裏切られ続けたことを知って逆上した僕は、北川の首を絞めて殺してしまう」

「なるほど。確かにドロドロのラブサスペンスですね。あれ？でもそれだとちょっとおかしくないですか？」

「何が？」

「だって昨日私、監督と香織さんのことは、あの場で京助さんから初めて聞いたというふうに驚いたじゃないですか。でも今の流れだと、京助さんよりも先に全てを知っていたってことですよね？」

「そう。だから実はあれは本当のラストシーンじゃないんだ。あの後で千夏ちゃんは北川の家に行く。そして転がる死体を蹴飛ばして一言。『あーあ、せっかくのカネヅルが死んじやった』。で、カメラに向かってにつこり笑ってジ・エンド」

「京助さん……私めっちゃヒドい女じゃないですか……」

「そうだね。でも芝居ってそういうもんじゃないかな。普段の自分とはかけ離れた人間になれる、これが演者の醍醐味だと思うよ」

自分の映画の話をする京助さんは実に楽しそうだった。言われてみれば確かにその通り。普段の自分と何ら変わらない役を演じるのは楽かもしれないけど、それじゃあんまり面白くない。全く別の人格を演じてこそ役者冥利に尽きるってもんよ。って別に私女優とか目指してませんけど？

「でもなあ、自分で言うのも何だけど、昨日の場面で終わってれば感動のラストシーンで良いと思うんですけど」

「そうだね。でもそれだと単純に純愛ストーリーになってしまいうし、それこそ千夏ちゃんの出番が極端に減ってしまう」

「いやいや出番とか少なくっていいですってば。」

「千夏ちゃんは唯一全てを知っている存在なんだけど、最後までそれは伏せておく。そうじゃないと昨日の涙のシーンが白々しくなっちゃうからね。とまあこんな感じかな。だから千夏ちゃんは事実上の主役と言ってもいいかも知れないね」

まじですか……エラいことをさらりと言っのける京助さん。やっぱこの人Sなのかも。

チャチャチャのステップを軽やかに踏みながら焼き豆腐を切り分ける

「そろそろ行きますか？」

携帯を見ると、午後四時を回っていた。お母さんもそろそろ帰ってきている頃だろう。私達は公園を出ると、手土産を買うために近所のケーキ屋へ向かった。

住宅街にある「ケルクショーズ」という名のこの小さな洋菓子店は私が小学生の時分からあったのだが、昔はそれほど気にしていなかった。数年前に改装と共に通り一本分お引越しし、綺麗な店構えになってから母がたまにケーキを買って来るようになったのだ。

その中でもとりわけ美味しいのがロールケーキ。スポンジとクリームだけのシンプルなお菓子だけど、生地はしっとりフワフワ、生クリームも滑らかで、デパ地下で名前だけは有名なケーキ屋なんかよりもよっぽど美味しいので一家揃って大好きなのである。

ガラス張りの自動ドアを潜りすぐ目の前のショーケースを見る。おっと！ 何と言うことだ、愛しのロールケーキちゃんは一人寂しくポツネンと哀愁を漂わせていた。

「危なかったですね」

美味しいので当然人気商品である。売り切れ御免である。しかしまさかこの時間で最後の一つとは思わなかった。無ければ無いで別のケーキでも良いのだが、久し振りに私も食べたかったし、父も母も確実に喜ぶと分かっている物の方が良いに決まっているのだ。

このケーキ屋の唯一の欠点である、愛想の悪い店主にお金を払うと、京助さんは右手でケーキを受け取り、左手で私の右手を取って店を後にした。いやん京助さん、こんな近所さんでそんな大胆な……

「ここです」

「おお」

至って変わったところの無い普通の一軒家だが、なぜか京助さんは感嘆の声を上げた。

「どうぞどうぞ」

私は玄関の扉を開け、京助さんの中へと通す。

「お母さん、連れて来たよー」

靴は履いたままで親を呼び出す。連れて来いと言ったのは父親だが、こういうときはやっぱり母親を呼んでしまうのが子供心というものなのだ。

すると奥からは、付け睫毛上等のド派手なメイクを施し、プリンスも真っ青になって逃げ出すほどの鮮やかなパープルの、ラメラメフリフリ社交ダンス衣装を身に纏った、これまでに見たことも無いような姿をしたオバサンがタンゴのステップで颯爽と現れた。迫りくる熟女社交ダンサーの迫力に、私と京助さんは口を開けてただ呆然と眺めるばかりだ。

「ああらいらっしやい」

「お母……さん」

「は、初めまして。霧夜京助と申します。この度はお招き頂き有難

うございます。あの、これ良かったら皆さんでどうぞ」

「まあまあケルクのロールケーキ！ さすが分かってらっしゃるわ
く後で有り難く頂くわね。ささささ上がって上がって上が
って」

「お邪魔します」

京助さんは、お母さんのお笑い芸人並みの登場シーン（出落ち）に
辛うじて耐え抜き、靴を脱いで揃えて家の中へ。居間のソファに京
助さんを座らせると、お母さんは手招きで私一人をこっそりと台所
に呼び付けた。

「何？」

「やだわ千夏ったら、まさかあんな超二枚目連れてくるなんてびっ
くり仰天トコロテン！」

「びっくりはこっちだったの！ 何なのよその格好は！」

トコロテンの件はモチのロンで完全スルーである。

「え？ ダンスの本番用ドレスに決まってるじゃない」

「そうじゃなくって！ 何で家の中でそんなもん着てんのかって聞
いてんの！」

「そりゃあだって、千夏のアーストラバーが来るんですもの。普
段着でお出迎えじゃ失礼でしょ？」

ラメラメフリフリパープルレインの方がよっぽど失礼だろ……っ
か何だよアーストラバーって。まあいいや。

「で、今日の献立は何なの？ 当然御馳走なんでしょうね。ステ
ーキ？ 焼き肉？」

私は台所の床に置かれた、食材の入ったスーパーの袋を次々と覗き込む。お昼のハンバーガーは既に消化していて胃袋が新たな食糧を要求し始めている。

「こういう親睦を深めたいときにはやっぱり鍋系が最適なのよ。千夏、すき焼きとしゃぶしゃぶ、どっちが良い？」

「え？ 選べるの？ そうだな、最後に食べたのは確か……すき焼きだよ。ということは順番からするとしゃぶしゃぶだけど……すき焼きって無敵の美味さだから……しゃぶしゃぶは肉の質がかなり問われるんだよね。だから上等な肉ならしゃぶしゃぶか……いやでもな生卵との絶妙な絡みは捨て難いし……いやいやゴマダレとおろしポン酢でさっぱりも魅力的……」

「分かったわ。そこまで言うならすき焼きね」

「何だよ！ 決まってんなら選択権とか与えんなよ！」

「どうしたの？」

居間に戻り（といっても居間は台所と一続きでごく近い距離なのだ）ソファに座ると京助さんは少し心配そうに尋ねてきた。やっぱり緊張してんのかな。うふふ可愛い。

「あ、晩御飯の相談です。今日はすき焼きだそうですよ」

「そっか。牛肉なんて久しぶりだな……そう言えばお父さんはどうしたのかな」

忘れてた。京助さんをこんなむさ苦しい家に呼び出した張本人であるバカボンダイは何処へ？

「ねえお母さん、お父さんは？」

台所の母に声をかけたそのとき、隣の和室（バカボンの書斎）から、何やら声が聞こえてきた。

「ひとおつ人の世生き血を啜り、ふたあつ不埒な悪行三昧、みいつ醜い浮世の鬼を、あ退治してくれよう、あ、あ、あむうおむうおとうあるうおおう！」

ウザくてクドい言い回しが辺りを支配する。それが終わるや否や同時に引き戸が勢いよく開いた。そして現れたのは般若の面に紋付き袴、右手には刀を持った、まさしく桃太郎侍！

「お父……さん……何して……るのかな？」

ああもう！ 何でウチの両親は揃いも揃って変態なんだ！ 恥ずかしいったりやありやしない。隣を見ると、京助さんは今度こそ心底呆れた様子で、固まっている。

「そこの者、チコウ寄れ」

桃太郎バカボン侍は、般若の面のまま京助さんに刀を向け、もう一方の手で手招きした。呼ばれた京助さんは、警戒しつつ書斎へと足を踏み入れる。刀で座布団を指し示し、京助さんを正座で座らせた。

桃太郎バカボン侍がその正面に胡坐を搔くと、どういう仕掛けか分からないが、引き戸がひとりでに閉じられてしまった。あつ、と声を上げ、戸を開けようとするが、つかえ棒がしてあるのかビクともしない。すると書斎の中から再び桃太郎バカボン侍の大きな声がした。

「貴様か！ 私の可愛い可愛い箱入り一人娘に、散々酒を飲ませた挙句、動けないことを良いことに蹂躪し辱めを受けさせたという不埒な輩は！ よくもまあおめおめと我が屋敷の敷居を跨げたもんだな。生きて帰れると思うなよ！」

な……今朝は私が彼氏を連れてくることをあんなに嬉しそうにしてたのに……つーか私、箱の中で育てられた記憶はないしそもそも一人娘じゃないし。

「お父さん！ なにふざけてんの！」

私は開かない引き戸をどんと叩き叫ぶ。

「開けてよ！ お酒飲みたいって言い出したのは私で、京助さんは悪くないの！ ねえってば！ ちょっと、お母さん！ 何とかしてよ、お母さんてば！」

密室で何が行われているのか分からないが、京助さんがピンチを迎えていることだけは確かだ。あの勢いでは、逆上した桃太郎バカボン侍は京助さんを殺しかねない。私は台所でチャチャチャのステップを軽やかに踏みながら焼き豆腐を切り分けるお母さんに助けを求めた。

「あらあら何事？」

「お父さんが！ 桃太郎侍で刀振り回して！ 京助さんが！」

「帰ってくるなり急に『私の羽織袴はどこだっけ？』なんて聞いてくるからおかしいと思ったのよね」

「何を呑気なことを！ お母さん早くなんとか言って何とかして！」

すると書斎の中から桃太郎バカボン侍の、一際高い声が壁を突き抜

けた。

「わははは覚悟いたせ！ 成敗してくれるわ！」

「うわあああ！」

「京助さん！」

チラリと隣を見ると、お母さんが思い切り息を吸い始めた。そして。

「あなたいい加減にしなさい！ ケルクのロールケーキあげないわよ！」

かつて聞いたことの無いほどの大きさの、お母さんの鶴の一声が、こだましながら家中に響き渡った。書斎はシーンと静まり返っている。まさか京助さんは殺されたんじゃない……堪らず私は引き戸に手をかけ力一杯開けようと試みた。

「きょ」

私が彼の名を呼ぶと同時に中からすーっと戸が開けられ、未だ般若の面のままのバカボンが出てきた。

「何？ ケルクのロールケーキだと？」

「……うすけさん、大丈夫！？」

入り口に立ちはだかるバカボンを突き飛ばして京助さんの下へ駆け寄る。

「斬られた？ 殺されてない？ 怪我は？」

「だ、大丈夫だよ、千夏ちゃん」

正座のまま固まっている京助さんの頭や顔をさすってみる。とりあえず外傷は無いようなので一安心。

「ちょっとお父さん、私の大事な彼にいきなり何してくれるわけ！？」

憤懣やるかたない私をよそに、バカボンは刀を持ったままお母さんへ詰め寄った。

「どこだ？ 私のロールケーキはどこだ？」

「はいはい大人しくしてたら食後に出してあげますからね」

台所に戻る母。それに飼う犬のように追従する父。母は強し。なんだこれ。

これ即ちすき焼き界のエガちゃんなのである

「わはははそうかそうか、君が持ってきてくれたのか。それはそれは。まあ一杯やりたまえ」

ケルクのロールケーキが京助さんの手土産だと知るや否や、バカボンの態度は一変、いきなりの上機嫌となった。このおっさんがそんなにロールケーキ好きだったとは。

「それよりどういうつもり!? いきなり閉じ込めて斬りかかるなんて。ホント信じらんない!」

私は程良く火が通り、割り下の滲み込んだ牛肉を生卵に潜らせて口に運び、その蕩ける食感と、甘辛い醤油の味を堪能し、ついでに焼き豆腐と春菊と一緒に口の中に放り込み、五、六回噛んで飲み下した後で、ようやくステテコに着替えた普段仕様のバカボンに向かって怒りを吐き出した。

「朝はあんなに連れてこい連れてこいを連呼して、超ウェルカムな感じだったのに……さては騙したわね!」

春菊って苦くてあんま美味しくないし見た目もパツとしないし他に使い道ないけど、なぜかすき焼きには欠かせないよなあ。普段はいなくていいけど、あるい局面においては物凄い力を発揮する、それはまるで……そう、エガちゃんだ。春菊とはこれ即ちすき焼き界のエガちゃんなのである。と箸で摘まんでしみじみ思いながらも更にバカボンに噛み付く。

「何を言っているんだ千夏。これは岡崎家に先祖代々伝わる儀式な

のだぞ」

芋焼酎ロックを舐めながらバカボンはまた訳の分からないことをほざき始めた。

「娘が初めて家に彼氏を連れてきたとき、父親は般若の面を被り桃太郎侍の決め台詞で出迎える。そしてその男を密室に連れて行き、いきなり斬りかかったときの反応でその男が娘に相応しい男かどうかを見極めるのだ」

「ばっかみたい。何それ？ そんなんで何が分かるのよ」

「動体視力及び反射神経。この二つは娘の彼氏となる男の必須条件だからな」

「はあ？ つーかお姉ちゃんの時もあんなことやったわけ？ そもそも桃太郎侍とかそんな大昔からテレビ放送してなくね？ つかつか先祖代々とか言って曾爺ちゃんとか曾々婆ちゃんの時代にはテレビ自体なくね？」

ぶつぶつと文句を言いながら私は、鍋の中で箸からするりするりと逃げ回る白滝と格闘する。

「というのは冗談だ。これはまあ私なりの歓迎サプライズだと思ってくれたまえ。さあさあ硬い話は抜きにして今日は大いに飲もうじゃないか！ なあ京助くん！」

バカボンはグラスの焼酎をグイと空け、自分に注ぎ、京助さんにも注いだ。京助さんはお酒があんまり強くないのか、既に顔が真っ赤っ赤である。すると新しいお肉を運んできたお母さんが私に耳打ちした。

「あれはね、照れ隠しよ。普通に顔を合わせたら緊張して何話して

良いか分からなくなっちゃうから、わざとあんな真似して大声出して己に打ち勝ち、彼と打ち解けようとしたの。だから許してあげて」

んだよ面倒くさい性格だな……そんなに緊張するんだったら最初から呼ばなきゃ良いのに。と、テーブルの向いで並んで座る京助さんとバカボンを見ると、意外にも話が弾んでいるようだった。どうやら昔の映画の話題で盛り上がっているらしい。それよりお母さん、あなたは早く普段着に着替えてくれ。

和やかなお食事タイムは終盤を迎える。

「いやあ食った食った。では母さん、例のアレを」

赤ら顔でお腹を擦りながらバカボンはお母さんに指令を下す。はいはいじゃあお茶淹れましょうね、と言ってお母さんは立ち上がり、テーブルの上の宴の後を片付け始めた。すると突然京助さんが立ち上がった。

「あ、僕やりますよ」

と言ってみんなの食器を重ね、運ぼうとした。

「あらいいのよ京助さん、お客さんは座ってて」

お母さんがやんわりと制する。

「いえ！　僕にやらせて下さい！」

京助さんは引き下がらない。若干ムキになっている。もしかして酔

ってる？

「いいよ京助さん、私がやるから」

彼氏が後片付けを買って出ているのに彼女の私が何もしないわけにはいかない。私は立ち上がった。すると。

「千夏も座ってていいわよ」

お母さんが率先して動く。

「いや僕がやりますから」

「大丈夫よ京助さん」

「ここは一番若い私が」

「二人とも座ってなさい。お母さんがやります」

「僕が！」

「私が！」

三人で立ち上がり、テーブルを囲んでいると、遂にバカボンが重い腰を上げた。

「じゃ、じゃあ私が」

こ、この流れはもしかして……

「どうぞ」

「どうぞ」

「どうぞ」

私と京助さんとお母さんは同時に手の平をバカボンに差し出した。

ダチヨウお約束ギャグ、ここに成立。そして大爆笑。結局みんなでお片付け。

「ところで京助さん、千夏とはどこまで？」

アッサムとケルクのロールケーキで優雅な食後のティータイムの中、やっと普段着に着替えたお母さんが切り出した。

「どこまでとはどういうことでしょうか？」

一口分切り取ったロールケーキをフォークに刺し、口へ入れようとしたところで京助さんは止まった。そうだそうだ意味が分からんぞ。

「やあだあ京助さん、AとかBとかCに決まってるじゃない。見た感じそうね……お二人さんはそろそろF辺りってどこかしら？」

私は思わず口に含んだ紅茶を向かいに座るバカボン目がけて勢いよく吹き出してしまった。白いステコが紅茶で赤く染まる。今どき恋のABCって……バカボンは自慢のステコを汚されてしかめ面をする。いきなり何を言い出すんだこのオバサンは。しかもFって何だよ。

「そ、それはですね……」

さすがに彼女の母親からダイレクトでこの質問はキツイ。京助さんは困ったように私を見る。ここは助けないと。

「ちょっとーお母さんやめてよね藪から棒に」

「あら親としてそのくらい知る権利はあるわよ。千夏、あなたまだ

未成年なんだから」

いくら親子とは言え、恋人との進展具合をいちいち報告する義務はないと思うのだが、面と向かって当たり前前のように言われると、そのぐらいのやりとりは世間一般では当たり前前なのかもしれないという気がしてきた。

「じゃ、じゃあAで」

渋々私が答える。

「京助さん本当なの？」

その「本当なの？」はどっちの意味だ？ 「子供のクセにまだ早過ぎる！」なのか「え？ まだそんだけなの？ 奥手ねえ」なのか。

「ええ、まあ」

京助さんは少しバツが悪そうに俯いた。そりゃそうだ。彼女の親に向かって「ええそりゃもう暇さえあればキスばかりしてますよ！」などと胸を張って答える輩はいまい。

交際しているんだからキスくらいなら未成年でも許されると思うのだが。するとお母さんとバカボンは目を見合わせて笑いだした。

「んまあAですって！ あなた聞いた？ ホント可愛らしいわねえ」「そうかそうかまだまだAか。頂は遙か彼方だな。ま、ある意味安心したよ。頑張るんだな」

バカボンはハッハッハと高らかに笑いながら京助さんの背中をばん

ばんと叩く。だから二人の中のAって何なんだよー！ 頂には何が待ってるのー！？ 私一応ハダカ見られてますけどー！ 自分の中ではビーダッシュくらいまで行っちゃってる勢いですけどー！ しかも京助さん、外でも平気でキスしちゃうほど積極的な人ですけどー！

ごめんよプー

「今日は御馳走様でした。楽しかったです」

靴を履くと、京助さんは玄関先で並んで立っているバカボンとお母さんに丁寧なお辞儀をした。

「どう致しまして、また遊びにいらしてね。あなたみたいに素敵な彼氏ならいつでも大歓迎よ。ねえあなた」

「そうだな。今度はお姉ちゃんがいるときにでも来なさい。紹介するから」

腕を組んで仁王立ちのままバカボンが偉そうに言った。ステテコのクセに。

「じゃあ私、駅まで送ってくるね」

私はスニーカーを履き、京助さんと家を出た。

「何かごめんなさい」

「何が？」

「うちの親。京助さんに失礼なことばかりしちゃったから」

私は歩きながら京助さんの手をそっと握った。さりげなく手を繋ぐ動作はなんとかこなせるようになったが、まだドキドキする。

「全然。桃太郎侍はちょっと驚いたけど、でも楽しい御両親だし、家族みんな仲良くて羨ましいよ」

「えーそうですか？ 京助さんのところはなんですか？」

しかしそれには答えず、京助さんは逆に質問してきた。

「それより千夏ちゃん、お姉さんがいたんだ」

「はい。もう結婚して出てっちゃんしましたけど」

「そうなんだ。いくつなの？」

「十個上です。子供も二人いるんですよー。今は宮崎にいます」

「そっか。きつと綺麗な人だろうね、千夏ちゃんに似て」

「そうですよーものの凄い美人です、私に似て。なんちゃて」

「それはぜひお会いしてみたいね」

「毎年お盆と正月には帰って来ますよ。あ、でもやっぱ京助さんは姉に会っちゃダメです」

「どうして？」

「だって……ぜったい見惚れちゃうもん……私なんかよりずっと綺麗で可愛いから」

本気でそう思った。美しき姉の美しさは誰よりも私が一番よく知っている。隣に立たれたら勝ち目はない。

すると京助さんは突如立ち止まり、車通りの激しい大通りの夜の歩道で、私の身体をぐっと引き寄せ私の顔を上へ向かせた。京助さんはそのまま覆いかぶさるように、情熱的に唇を重ねてきた。頭がぼわーんとして身体中が気持ちの良い恋の成分で満たされる。そっと唇を離すと、京助さんは私の目を見詰めて言った。

「僕が好きなのは千夏ちゃんだけだよ」

繋いだ手をぶらんぶらんさせながら駅まで歩く。私はもうデレデレ

しっぱなしで鼻の下は推定一メートルに達する勢いだ。ああ幸せ過ぎて怖いわ……私は生れて初めて「この時が永遠に続けばいいのに」という甘甘ドラマチックラブロマンス的セリフの意味を実感したのである。だがどんなにゆっくりでも、歩いている限り目的地には必ず到着するのであった。

「今日は来てくれてありがとうございました」

「こちらこそ。これでもう僕は御両親公認になったわけだから、千夏ちゃんのことを堂々と誘ってもお咎めなしってことだよな」

京助さんは悪戯っぽい笑みを浮かべて楽しそうに言った。そして手を離して改札へ向かおうとする。私は反射的にその手を掴んだ。京助さんは、ん？ と首を傾げて振り返る。

「あの、あのね京助さん。一つだけ教えて欲しいの」

「なに？」

「どうして私と付き合ってくれたの？ 私は初めて会ったときからずっと京助さんのことが好きだったけど、京助さんは別に私のことなんて何とも思ってたんでしょ？」

すると京助さんは少し考えるような素振りをしてから答えた。

「僕も」

「え？」

「海で撮影していたとき、カメラの中の千夏ちゃんをずっと見続けて、気付いたら恋してた」

「京助さあああん……」

気が付くと私は部屋んベッドの上で等身大プーさんと激しいキスシーン演技していた。どうやら駅で京助さんと別れた直後から家に戻るまで、脳内にエンドルフィン出まくりで意識が半分飛び、夢現の狭間を彷徨っていたらしい。プーさんの口の周りはハチミツではなく私の唾液でまみれてしまった。ごめんよプー、今度クリーニングに出してあげるからね。

それにしても京助さんとのキスはクセになりそうで怖い。この世にあれほど甘美で官能的な世界が待ち受けていようとは。キスでこれってことは、エッチしちゃったらもう……私の身体はナマコのように溶けて実体を失い、二度と現実世界に帰ってこれないのではないだろうか？　そもそもソルフェージュと男の人とのセックスは何がどのくらい違うのだろうか。これはもう実行してみない限り分からないよね。

京助さんとのBからのC体験……つーかBってそもそもどのくらいまでがBなのかな。ああダメだダメだ！　頭の中が京助さんとのエッチな妄想で一杯だ！　この邪念を振り払うには……そう、アレしかない。

私は机の引き出しからでいるどエバを取り出すと、右手に握り、ウルトラマン変身時のハヤタ隊員よろしく天高く突き上げた。そのまま振り下ろし、フローリングの床にしっかり固定する。ジーンズとパンツを一緒に足元まで降ろし脱ぎ捨てると、私は既にスタンバイオッケーの股間をでいるどエバに深々と沈めた。

あああ京助さん……そ、そうだ、いいこと思い……付いたぞ。ととと等身大の京助さんの……ああ……写真写真写真をです、床に貼り付けて……あ、そんな……んでここ股間にでいるどを設置すすすれば、いつでも京助さんとおおおお……！！

愛する人のことを考えながらのソルフェージュだったせいかな、かなり早くそして深いフィニッシュを迎えた。これが愛の力、パワーオブラブなのですねお姉さま。心地よい疲労感に包まれて、下半身丸出しでうとうとしていると携帯が鳴った。ような気がした。朦朧とする意識の中、携帯を開くと京助さんからのメールであった。

『明日朝五時に池袋集合ね!』

朝五時!？ 何でそんな朝っぱらからお豆腐屋さん及びパン屋さんじゃあるまいし……すると続けてもう一通。

『早朝の方が人通りが少なくて撮影しやすいから。お休み』

やっぱSだよ京助さんて……

だからその辺は察してください

次の日の撮影は、朝から叩き起こされて眠さマキシマムだったが、あらかた快調に進行した。

私かというと、セリフ自体は少なかったものの、家庭教師役の京助さんに部屋で勉強を教わるシーンで、私が京助さんに近過ぎたり私が京助さんに近過ぎたり私が京助さんに近過ぎたりしてボサ男から何度かNGを喰らってしまった。

しかしボサ男北川を執拗に付け回すシーンでは、その狙った獲物は絶対に逃すまいとするハイエナの如きギラついた瞳は、ジョ・ルジオア・ル・マーニ大学映画研会初代監督ボサ男北川をして「まるで『野獣死すべし』の松田優作を彷彿とさせた」と言わしめたほどだった。

というのは真っ赤な嘘であるが、「その目付き、千夏ちゃんはストーカーの素質十分だね」という全く以って有り難くないお褒めの言葉は頂戴したのだった。

そんなこんなでその日一日は撮影三昧。ただ香織さんは、現在舞台公演中なので、香織さんの出番の無いシーンを中心に撮っていき、夕方には終了した。というか香織さんのシーンは既に撮影済み、かつ私と香織さんの絡む場面はないらしいので、今日で事実上のクランクアップということだ。

カメラ兼アシスタントの新人部員A&Bもようやく安堵の表情を見せる。あとは編集して映画になるのを待つばかりだ。ちなみに京助さんの話によると、新人部員Bは自分で撮った映像を好きな音楽に

合わせて編集してユーチューブ及びニコニコ動画にアップしたりしているらしく、「神編集だ!」というコメントが殺到する程の腕前らしい。

時間的にもこのまま打ち上げに流れるっぽい雰囲気ではあったが、私は当分の間お酒はコリゴリなので、皆さんでどうぞ楽しんできて下さい、と淑やかに辞退したら、せっかくだから食事だけでもしてこうよ、もちろん奢るからさ、と意外にも一番気の利かなそうな監督ボサ男北川が気を遣ってくれたので、じゃあお言葉に甘えて、と皆に付いて行くことになったのである。

「あ、それなら俺、美味しい店知ってますよ」

とここぞとばかりに鼻息荒く手を上げたのは、これまで大した活躍も見せなかった新入部員Aであった。

京助さんは私のダーリンだし超カッコいいし言わずと知れたジョ・ルジオア・ル・マーニ大学映画研会部長である。ボサ男北川は、見た目ではこのメンツの中で一番モッサイといってもいいくらいの垢抜けない風貌ではあるが、なんてったって監督だし、超イケメン京助さんの全幅の信頼を得ているので当然主要メンバーであることに異論はない。

そして新入部員Bは何気に映像編集に関してはエキスパートであり、ルーキーにも拘らず既に映画研究会には無くてはならない存在となりつつある。

しかしながら現時点で何も持たない新入部員Aは、今の自分のポジションを分かっているのだろう、今日も朝から先輩二人に認めてもらおうとシャカリキ動き回るのだが、それらが全て裏目に出てしま

い、ボサ男から叱責を受けている場面が度々見受けられたのだ。

Aは見るからに焦っていた。このままでは「ジョ・ルジオア・ル・マーニ大学映画研会ヒエラルキー」の中で永遠に最下層から抜け出せなくなってしまうのは必至だ。

更に追い打ちをかけるように、今日はゲスト出演のワタクシ岡崎千夏というスーパードラヴリーキューティストガールの天才的な演技により、Aの存在感は、夏の部活の練習には欠かせない、前の晩に粉末を好みの濃度になるように水に溶かして冷凍庫で凍らせたポカリの、溶け初めの甘い部分だけちゅうちゅう吸ってたら、後に残ったのは「これだったら単なる氷の方がまだマシだよ!」と思えるほどの、冷たいだけでほとんど味のしない「ポカリフレーバー」のする冷たい何か（マズい）」の如く薄まってしまったのだ。

挽回のチャンスはここしかない。ここで全員の舌を満足させるような、美味かつリーズナボーなお店に我々を連れて行ったならば、Aの評価はグッと上がり、最下層からの脱却も現実味を帯びてくるだろう。だが万が一、Aの選択した店が皆に不評だった場合、これらのAは奴隷以下の扱いとなることは火を見るより明らかである。

Aは先頭に立ってお馴染み池袋西口を歩く。芸術劇場裏の大通りに面した一件の小さな、いかにもな赤提灯居酒屋の前で立ち止まる。え？ 結局飲みなの？ 食事って言ったじゃん、という全員からの非難の視線をひしひしと感じ取ったAは、皆から突っ込まれる前に口を開いた。

「ここじゃないです。地下です地下」

Aの指差す方を見ると、そこには確かに地下への階段があった。階段は狭く、二人並んで歩くのは厳しいので、Aが先に降りて行った。その後を私達がぞろぞろと付いて行く。すると入り口に手を掛けたところでAは立ち止まった。そして「ちょっとダメです」と言ってみんなを押し戻し始めた。結局私たちは全員地上に追いやられてしまった。

「どうした？」

ボサ男が聞く。

「従業員が着替えてました」

とA。すかさず京助さんが腕時計に目をやる。

「五時きっかり。開店したばかりか」

そして憂いを含んだ表情で雲を見詰める……やあん京助さんそんな何気ない仕草もカッコイイ素敵今すぐ抱き締めてそしてキスしてえ！

「でもさ、五時に店開けるのに、五時ちょうどに店の中で着替えてるっておかしくないか？ 普通五分前には客の受け入れ態勢準備万端なはずだろ？」

ボサ男がAに食ってかかる。まずい、まずいぞA、キミの評価は長瀬のライン下り、もしくは満員電車にっちもさっちもいかない状況で突如訪れた腹下り並みの急降下に突入しつつある。するとAはもごもごと下を向いて呟いた。

「中国の方なんですよ」

「は？」

これは京助さん、ボサ男、B、私、の四人が見事にハモった美しい「は？」である。

「ここ中華料理屋なんです。で、お店の人が料理人もウェイターも全員中国人なんですよ。だからその辺は察してください」

「察するって何を」

ボサ男は苛立たしげに言う。そう言えば、この前の居酒屋のときからなぜかボサ男はAへの当たりがBに比べてキツイ気がする。嫌いなのかな？

「要するに、店に入ったらそこはもう日本じゃないってことです。さあ行きましょう」

ここへきてまさかの治外法権宣言である。自分を奮い立たせるかのように声を張ると、Aは勇ましく階段を下り、店の扉を開けた。私たちは今度はついて行かず、地上で見守ることにした。すると案の定、Aは再び階段を上って来た。

「今外の電気点けるからちょっと待ってって言われちゃいました」

照れ臭そうに戻ってくるA。見上げると、入り口の上には「中国料理蘭蘭」という看板が確認できた。

「おいおい大丈夫かい」

ボサ男はもはや怒りを通り越して呆れモードに突入しつつある。頑張れ、ここが踏ん張りどころだぞA！ と私は心の中でエールを送

ろうと思ったが、さっきから胃袋はきゅーきゅー鳴りつ放しでとにかく早く何か食べたくてそれどころではなかった。

ぼーっと看板を眺めていると、パツと電気が点き周りを取り囲む電飾がちかちかし始めた。今度こそいよいよ開店に違いない。

「二人っきりになりましたようよオーラ」全開の上目遣いビームをボリューム最上

店に入ると「イラシャイマセー」と確かに中国人かつ少し年上、そして目付きがきつめのオネエサンが迎えてくれた。店の中を見渡すと、紹興酒の甕や瓶詰の蛇やよく分からん漢方的な何かや私の好きな隷書体で書かれた漢字だらけの掛け軸等々が所狭しと配置されている。

全体的に赤と金の色を基調とした内装は本格的中華料理屋っぽくていいんじゃないでしょうか。店内はさほど広くなく二十人も来れば埋まってしまうだろう。

「ココヘドーゾー」

と案内されたのは壁際の一番隅っこの小さめのテーブルだった。できれば一個だけある、あの回るテーブルが良かったな、と指をくわえて眺めていると、ここでもボサ男はAに噛み付いた。

「なんで誰もいねーのにこんな端っこんだよ！ しかもこれ四人用の席だろ！」

確かにボサ男の言う通り、テーブルは二人用の物を二つ繋げたわけだから明らかにここは四人用の席だ。ただ、壁際の席はソファになっているので詰めれば三人座れなくもない。現在の配置は、椅子席にAとB、反対側のソファに左からボサ男、京助さん、私、と並んでいる。ボサ男は背後も左側も壁なので、その姿はまるで居飛車穴熊の玉の如き鉄壁に守られており、まるで身動きが取れない状態だ。

なぜ先輩二人が敢えて窮屈な方に座っているかというと、椅子席よ

りもソファの方がリラックスできるだろうと、Aが気を利かせたためである。だが実際は狭い。ここでもAの気配りは裏目に出てしまった。まあ今のところ他に客もいないので、私がずれて座ればそれほどぎゅうぎゅうではないのだが。

と言うよりも私は京助さんと「仕方なく」密着できるので、ここで充分幸せです。むしろAを褒めてやりたいくらいだわ。

だがボサ男は「ちょっとさ、席変えてもらおうぜ」とAに不満をぶつける。しかしAは、さっきのチャイニーズレディを恐れているのか、「ここ美味しいからすぐに満席になっちゃうんです。だから来た順に端から座らせないと効率悪いんですよ。ここは抑えて下さい」とボサ男に頭を下げる。

私はといえば、テーブルに広げられたメニューを見る振りして、必要以上に京助さんにくつつく。あああ今日も良い匂いだあ……これで白飯三杯はイケそう。

「これこれ！　これが美味いんですよ！」

写真付きのメニューを見ながらAは、宴の始まる前から既に暗雲立ち込めつつある空気を入れ換え場を盛り上げようと必要以上に大きな声を上げた。Aが指差したのは「緑搾菜」という前菜だった。メニューにも「店長イチ押し！」と記されていて写真も大きい。搾菜といえば通常は茶色っぽい色だが、これは文字通り緑色だった。若いうちに摘み取ったという感じだろうか。千切りの葱が和えてあり、見た目にも爽やかで確かに美味しそうだった。

「そしてこの一番のおススメが……この鉄鍋餃子！」

更にデカイ声でメニューを捲るA。何でもいから早く注文して欲しい。私の思いが通じたのか穴熊ボサ男は手を上げてチャイニーズレディ、略してCL（チャンピオンズリーグと混同してはいけない）を呼び寄せると、「じゃあその搾菜と餃子三つずつ」と周りの意見も聞かずに独断で注文してしまった。

搾菜は「既に切って盛り付けてあるのでは？」と疑わざるを得ないほど迅速にやってきた。白く丸い皿に向かって一斉に端が伸びる。ホントに緑だ。パリパリとした食感と程良い塩加減は搾菜特有のクセもほとんどなく、浅漬け感覚でどんどんいける。ボサ男も「これうめえな」を連発している。

みんなが我も我もと手を出していると、CLが無言で鍋敷きを三枚テーブルに置いて去った。一瞬時が止まる。そして時間がかかるだろうと思われた餃子も程なくして運ばれてきた。「アツツイカラネー」とCLは無表情で小さめの鉄鍋を三つ、どんどんと勢い良く置いた。途端に「アッチ！」とBが叫ぶ。

煙が立ち昇るほど極限まで熱せられた黒い鉄鍋には四角い棒状の餃子が五本、所狭しと並んでおり、じゅうじゅうという食欲をそそる元気の良い音と共に油の粒を無遠慮に辺り一面に飛び散らせていた。無邪気に飛び跳ねる油滴はどうやらBの顔にまで到達したらしく、臉を押さえている。それをしたり顔で見詰めるA。

「凄いでしょ？ このシズル感！ ホントに美味しいですから。あ、アンに味付いてるんでタレはいらないですよ」

ボサ男が自分の小皿に取る。京助さんも小皿に取り、それを私に手渡してくれた。いやああん京助さん紳士いいい！ ついでにアーンして欲しいな……と一瞬思ったが、よく考えたら極限まで熱せら

れた餃子のアーンは途轍もなく危険であることに気付き断念した。

仕方がないので自らの箸で餃子を掴み上げ、はふはふしながら齧る。四角い餃子は通常の半円形の餃子と違い、餡が全て皮に包み込まれているわけではなく、巻き寿司のように棒状に包まれているだけで、しかも巻きが弱いので噛み切ると具が零れてしまった。だが。

「これ美味しい！」

ボサ男が膝を手で叩いて叫んだ。そう、圧倒的に美味しいのだ。私の十五年の餃子人生の中でぶっちぎりの堂々第一位の餃子である。大絶賛の嵐の中、Bがぼそりと呟いた「やっぱり欲しいですね、ビール」。その言葉に激しく同意した男四人は結局我慢できずに生ビールを注文した。もちろんお酒の味も分らない私は遠慮しておいたが。

その後も麻婆豆腐や木耳の卵炒めや海鮮おこげなど色々と注文した。どれも美味しくて、酔いとともにボサ男の機嫌はすっかり回復していたのであった。二時間ほど食べまくったわけだが結局私たち以外に一組も客は来なかったことに気付いたが、敢えて言う必要もなかったので黙っておいた。これでAの株も上がったことだろう。

「じゃあ千夏ちゃん今日はありがとう。また明日ね」

池袋駅の改札で上機嫌のボサ男が握手を求めてきた。ん？ 明日？ キョトンとしてしていると京助さんが言葉を足した。

「ほら、明日は香織たちの千秋楽だから。その後みんな反省会」
「京助さんそれって……打ち上げでしょ？」

「そうとも言うけど。香織だってこの映画の出演者だからね。それ

に舞台も明日で終わりだからみんなで騒ぎたいだろうし」

「今日もやって明日も飲むんですか……」

「まあまあ、今日のはただの晩ご飯、で、明日が映研と劇団甚三紅の正式な合同打ち上げてことで」

「ジンザモミ？ ああ！ あれジンザモミって読むんですか！」

今さら解けた漢字の謎であった。ボサ男とA&Bはすっかり酔っ払っているが、何を隠そうまだ七時過ぎである。東京は夜の七時である。できればお邪魔虫三人には早々に退散してもらって、このまま京助さんとどっか行きたいな……と「二人つきりになりましたようよオーラ」全開の上目遣いビームをポリュウム最大にして送ってみる。しかし。

「今日は朝早くからありがとう。じゃ、またね」

とボサ男たちと楽しそうに改札の中に消えてしまった。ちょ……ちょっと待ってよ、私だって電車だっつーの！

支払金額が麻雀放浪記並みの青天井になりかねないので

京助さんからの着信で目を覚ますと既に午後四時だった。しまったあああ！ 今日こそは京助さんとラブラブハッピーデートする予定だったのにいいい！ と後悔の念に駆られながらも愛するダーリンからのメールに心躍らせつつ携帯を開く。

『八時に池袋集合ね』

んんん……思うんだけど、京助さんのメールって素っ気ないのよねえ。絵文字もないし。ハートもないし。もっとう、付き合い始めのバカッフル全開のデコメとか文末に「愛してるよ、チュッ」とか……は無理か。

よく考えたら男の人と本格的にメールのやり取りをするのは人生でこれが初めてなわけで、男という動物はメールでは概して事務的なのもかもしれないな、と無理矢理自分を納得させてみる。若干のヘコみを抱えつつ私は顔を洗い歯を磨き髪を整え服を着替える。そして階下の居間へ行って、なぜか日経新聞をニヤニヤしながら読むステテコバカボンをスルーし、台所で既に夕食の準備を開始しつつあるお母さんにこれから出かける旨を伝えた。

「お母さん、今日は晩ご飯いらないから」

「何が『今日は』よ。昨日だって帰って来なかったじゃない」

「そうでした。すみません。更に言うと、今日中には帰って来れないかもです」

香織さんの舞台が終わってからの打ち上げだ。八時集合ということが始まるのは早くても八時半、一般常識として飲み会の類は二時間

というのが相場だけど、どうにもこうにも盛り上がっちゃったら帰るに帰れない可能性は否めない。

「京助さんも一緒なの？」

「当然です」

「ふーん。じゃあ帰って来なくても良いわよ」

「え？」

「遅くなるんなら無理しないで京助さんどこにでも泊ってきたら？」

「お、お母さん……」

その言葉に私の目頭は涙が沸騰するほど熱くなった。娘の恋愛に對して理解ある親を持って私は幸せです。感極まって滲み出てきた涙が溢れぬように天井を仰いでいると、お母さんは大根を切る手を休め俎板に包丁を置いた。そして布巾で手を拭くとエプロンのポケットから何かを取り出して私の手にそつと握らせた。

指を開くとそれは……ピンクの蛍光色の、アメリカのキャンディの包み紙みたいにポップなデザインの袋に包まれたコンドームだった。

「お、お母さん……」

まさかウチの親が若者の性に對してここまでオープンだとは思ってもよらなかった。ダテにお婆ちゃんから中国四千年の「手淫の書」と「性技の書」を受け継いでないわね。

「はいお疲れさん」

次の日の夜、打ち上げ会場で映研部員四人と私が先に待っていると、三十分ほどしてから香織さんと相手役のジェームズ・ヌックンが現れた。ボサ男と京助さんが労いの言葉とハイタッチで出迎える。私

は先に頼んだ山盛りのゴマ油塩キャベツを一人ばりばり齧っているところだった。ひたすら葉っぱを齧り続けているのでウサギになった気分。

宴会場はもちろんご存知池袋西口で、今日は本物の打ち上げと言うことで今度こそ居酒屋かと思いきや、「やっぱり高校生を連れて行くのはまずいよな」というボサ男の配慮により、急遽焼き肉屋になった次第である。

食べ盛りの大学生が四人、育ち盛りの高校生が一人、食欲未知数の劇団員が二人というメンツで本格的な焼き肉屋さんに行くとなると、支払金額が麻雀放浪記並みの青天井になりかねないので、ここは「美味い焼き肉を低価格で」をコンセプトに、その名を全国に轟かせている牛角さんにお世話になることにしたのであった。

「やーん千夏ちゃんも来てくれたの！？　うれしー！　じゃあ私千夏ちゃんのとくなりっ！」

おあずけ状態が小一時間も続き、キリキリと胃が痛くなるほど腹が減り過ぎてテンションダダ下がりの私の隣に、今さっき自分の情熱を注ぎ込んで作り上げた舞台で全てを出し切り、解放感に溢れかつ興奮冷めやらぬ香織さんが、頬を紅潮させながら勢いよく私に身体を密着させて座ってきた。

香織さんの身体からはメスのフェロモンを存分に含んだ熱気が立ち昇り、押し付けられたデカイおっぱいが私の二の腕を圧迫する。

「ねえねえ見に来てくれたんでしょ？　どうだったどうだった？

個人的にはゾウニの都市伝説辺りのくだりが気に入ってるんだけど」

「え？　あー面白かったっすよ」

私は温くなったお冷をぐびりと飲み下す。空っぽの胃袋に沁み渡るぜ。

「やーだー千夏ちゃんテンションひーくーいー！」

香織さんは既に酔っ払っているかのように私の肩を叩く。するとボサ男が泡の消えかけたビールジョッキを片手に立ち上がった。

「それでは皆さん、飲み物は行き渡りましたね？ えーこの度は劇団甚三紅第一回公演『ジパング』の千秋楽、そして我がジョ・ルジオア・ル・マーニ大学映画研究会初作品（タイトル未定）のクランクアップを無事に迎えることができました。これも一重に皆々様の甚大なるご協力があつてこそ成し得ることができたわけでございます。つきましてはこれを祝しまして、僭越ながらワタクシ北川が乾杯の音頭を取らせて頂きます」

いいから早くしろっての。いい加減何か食わせろっての。

「カンパーイ！」

はいはい乾杯乾杯。私は目の前に置かれっ放しになって、氷がすっかり溶けて上の方は薄まりに薄まり、駅の階段を上っただけで汗だーだーになっている運動不足のおデブちゃんの如く結露した滴が垂れ流されまくったウーロン茶の入った中ジョッキによく口を付けた。

予想通り一口目はもう完全に水である（薄ポカリよりはマシだが）。やがて肉の乗った皿が次々と運ばれてきた。どうやらさっき新入部員Aがボサ男の命令で適当に大皿を注文していたらしい。

カルビやハラミ、ネギタン塩などAはてきぱきとした箸捌きでまんべんなく網の上に乗せて焼き始めた。肉奉行である。うーん、Aはこのサークルでの活躍の場を、完全に飲食店系に求めているような気がしてきた。

それでいいのかA。このままじゃ宴会要員としてしか認められなくなってしまうぞ。などという心配をするよりも先に私は、程良く焼けてきた肉を次々と皿に取り口へ運んだ。網の上から肉が消えるとすぐに補充するA……焼き肉ウマー。

徐々にお腹にウシの肉が蓄積されていくに従って私の気分も回復してきた。香織さんはいつの間にか私の隣からAとBの間の席に移り、相変わらずのハイテンションあおを維持し続け、食べるのもそこそこに生ビールをガンガン呷りながらA&Bの肩に手を回し、舞台の内容に関して一方的に話しかけまくっている。ボサ男と京助さんは予想通り今回の映画についての二人マジ反省会を開催中だ。

あーんもう！ 京助さんがいるからせっかくオシャレして来たのに！ 京助さんと話せないんなら来た意味がなーい！ ボサ男のヤツ、京助さん独占しやがって覚えてるよ……と例のストーカー的睨みを利かせていると、一人の冴えないおっさんの顔が私の視線を遮った。ジェームズ・ヌツくんである。

網の上に国境は無いんですぜ

私はしばしその情けなさ満点の顔を見詰めた。そもそもこの人は何なんだろう？

香織さんと劇団を組むくらいだから将来は俳優になりたいのだとは思うが、どう見ても香織さんとダブルスコアの四十代後半の中年だ。失礼を承知で言わせてもらえば、年齢は倍だが将来性は香織さんの半分だ。キミがいれば喜びは倍になり悲しみは半分このな。

イヤ！ イヤイヤ！ イヤイヤイヤイ！ そんなことは無い。何を言っているのだ岡崎千夏十五歳よ。思い立ったが吉日、人生に遅すぎる事なんて無いのだとザ・ブルーハーツ改めザ・ハイロウズ改めザ・クロマニヨンスの真島昌利も言っているではないか。

彼はたった今気付いたのだ。自分の本当にやりたいことに。そして見付けたのだ。己の力を存分に発揮できるフィールドを。これまでの社内成績万年最下位の営業人生は借りの姿、この歳になって自分の人生を取り戻したのだ。いいじゃないか、いくら眉毛が八の字で常に困った顔してたって。いいじゃないか、額がせり上がり頭頂部の髪が薄くなりかけてたって。夢に向かって進むあなたはそう、輝いている。

私は網の上で程良く焼けた豚トロに箸を伸ばす。すると横からその食べ頃に育った豚トロに向かって箸が伸びてきた。箸の持ち主を見ると誰だろう、又つくんその人であった。しばしお互い一歩も譲らない肉の掴み合いが展開される。網の上の肉弾戦である。

「これは私が育てた豚トロだ」

又っくんの円らな瞳がキラリンと光った。

「ふふん。なーに言っちゃってるんですか。網の上に国境は無いんですぞ旦那。即ち焼かれた肉を食べる権利は誰にでもあるってわけだ」

負けじと睨み返す私。すると又っくん肉を網の上から徐々に持ち上げ始めた。確かにこのまま膠着状態が続けば目の前の美味しそうな豚トロちゃんは焙られ続けて黒焦げになってしまう。私も又っくんに倣って少しずつ箸を持ち上げる。

現役激カワぴちぴちJKと冴えない役者を夢見る四十代が今、箸の先の豚トロ一枚で繋がっているというこの現実。肉の脂がぽたり、と落ちて炭から炎と煙が立ち昇る。又っくんの額は薄ら汗を掻き始め、少なくなった白髪交じりの髪の毛が未練がましく頭皮にへばり付いていた。だんだん箸を握る右手の握力が落ちてきた。そろそろ限界である。

「い、いい加減放したらどうですか。大人気ないですよ高校生相手に」

「肉に大人も子供もない」

くそう、このオッサン何があっても譲らない気だな。イイ歳こいてこんな強情張りとは思わなんだ。さっきの「輝ける夢追う四十代」発言は取り消させてもらうぞ。と、突然又っくんの表情が柔和になった。

「ところでお嬢さん、豚トロって豚のどの部分の肉か知ってるかい？」

「え？」

そう言えばどこだろ？ 突然の質問に視線が泳ぎ思わず肉を握る手が緩んだ。又つくんはその一瞬の隙を逃さず、電光石火の箸捌きで豚トロを口へ放り込んだ。

「あああ！ズルい！」

「はっはっは戦は何も体力だけが勝負じゃないってことさ」

勝ち誇る又つくん、項垂れる私。負けた、負けたのよ千夏。顔は情けなくともさすがは年の功。仕方ない、私は網の上に乗せられたはいものの放置され続けてすっかり干上がって縁が黒く焦げたカボチャスライスを自分の皿へ運んだ。負け犬の私には干乾びた野菜がお似合いさ。

カボチャをタレに付けて食べようとしたそのとき、私の小皿に熱々のカルビが乗せられた。顔を上げると、何ということでしょう、又つくんが頬笑みを湛えながら頷いていたのです。

「食べなよ」

又つくん……感激のあまり涙が零れそうになる。今の彼はまさに死闘を終えたボクサーがお互いの健闘を讃え抱き合っているときの、全てを受け入れそして許すことのできる一点の曇りも無い晴れやかな顔をしていた。

昨日の敵は今日の友。もはや勝敗は関係ないのだ。試合に負けて勝負に勝つ。我々の間に生まれたわだかま蟠りはもはや灰燼と帰したのだ。強敵と書いて「とも」と読むのだ。私は炭火で焙られて熱くなった目頭を押さえつつ「強敵」の証として受け取ったカルビを噛み締めた。

「ちょっとーハナさん何してんのー？ 私の千夏ちゃん苛めないでよねー」

ナイスバディ香織さんがA&Bの間から立ち上がると再び私の元へ舞い戻って来た。おっぱいは相変わらずデカいが少々酒臭い。今度は完全なる酔っ払いだ。A&Bを見ると二人ともげっそりとしている。肉を食っているにも拘らずここに来た時よりも三割ほど痩せたようだ。若い男二人は香織さんに色んな物を吸い取られたに違いない。恐るべし霧夜香織。

「ハナさんて言うんですか？」

私は目の前の又つくと左隣の香織さんを交互に見た。ハナさん、てことは……ハナ肇？

「そーよーハナダヒロユキっていうのよーメンドクサイでしょ」

あはははと笑いながら香織さんはジョッキをぐいぐい傾ける。何がメンドクサイのだろう？ すると香織さんは紙ナプキンを取り、ボールペンで何やら書きだした。しかし酔っているせいか上手く書けない。

「ああんもう！ ハナさん書いて！」

「え？ 何を？」

「名前よ名前！ 名前に決まってんでしょ！ 私の千夏ちゃんに自己紹介しなさいよね！」

香織さんに紙ナプキンを押し付けられたハナさんは、すらすらと自分の名前を書き私に手渡した。そこには「縹比呂由紀」という文字

が記されている。ああ、面倒くさいって漢字がつてことね。それにしても「縹」って字、どっかで見たな……あ！ 「小劇場縹」だ！
ってことは。

「ひょっとしてあの劇場の方なんですか？」

「そーよーこの人が管理人よ」

香織さんが笑ウせえるすまんばりにハナさんの顔に人差し指を突き付けた。

「オーナーって言うてくれよ」

ハナさんが不満げに言う。なるほど、「縹」ってハナダって読むのか。これで漢字の謎2も見事に氷解した。

「あっはっはなーにがオーナーよ気取っちゃって。それにさあ千夏ちゃん見てよこの顔。これであの真田広之と一字違いよ？ ホント勘弁してって感じよねー」

あ、そういえばそうだ。まあ字面はまるで違うから思い出しもしなかったけど。それにしてもこの二人、親子ほども年が離れているというのに随分と碎けた感じですね。というより完全にハナさんの方が尻に敷かれている様子だ。

「香織さん、ハナさんとはどういう関係なんですか？」

「関係？ 関係だってやーだー千夏ちゃん面白いハナさん言うてやってよ！」

だから別に面白こと言っていないんですけど。

「夫婦」

ハナさんは肘を着いてロツクの焼酎をカッコつけて飲みながら流し目で答える。

「え!？ 香織さん結婚してたんですか!？」

しかし今度は香織さんはニヤニヤ笑うだけで何も言わない。私はハナさんに目を向けた。

「言い過ぎた。まだ結婚はしていない。香織は俺の婚約者だ。来月ハワイで挙式だ」

「あのー」

「何だい？」

「ウソですよね？」

「ああ。ウソだ」

何なんだよこのオッサン。するとハナさんはグラスを置いて真面目な顔付きになった。

「実は、僕は騙されたんだ」

一転、ハナさんは泣きそうな顔になった。

えろらいくぜつと

「騙された？」

「そうなんだ。ある日僕が行きつけのカフェでカフェオレを飲みながら久し振りに『アルジャーノンに花束を』を読んでいると一組の男女が店にやってきた。紺色のスーツを着た中年の男とこれまたベージュのスーツを着た若い女だ。手には鞆を提げている。どうやら外回り中にちょっと一息入れようか、といったところだろう。

レジの前で男は『何にする？』と女に聞いている。女の方は『あ、いいですいいです自分で出しますから』とバッグから財布を取り出し打算的な上目遣いで媚びた笑みを浮かべている。この女には最初からコーヒー代を出す気などさらさら無いのだということはもうお分かりだろう」

「何の話ですか。そのスーツの男女に騙されたってことですか？」

私は香織さんがトイレに立った隙に生ビールの入ったジョッキを手に取り一口失敬する。うん。マズい。

「まあ待つんだ。話はここから。この二人組、どう見ても男の方が上司だ。恐らくお茶に誘ったのも男の方からだろう。従ってコーヒー代くらい出すのはごく自然な流れ、この女の確信犯的な振る舞いにそれほど目くじら立てるほどでもないか、と僕は再びアルジャーノンに目を通す。

コーヒーを受け取った二人組は店内に開いている席が無いかときよろきよろし始めたんだ。だが時間は午後三時、コーヒーブレイクするにはもってこいの時間帯、店内の椅子はほとんど埋まっていた。すると二人は僕の方へ近付いてくるではないか。そう、僕の右隣の

二人掛けの席が空いていたんだな。

女はしきりに上司に、僕の座っているソファ側を勧めた。どちら側に座るか？ という問題で、『立場の上の者が奥に座る』という社会的ルールが瞬間この女の脳裏をよぎったことは想像に難くない。自分は向かいの椅子席に座った。つまりその女は僕の右斜め前に座ることになるのだが……」

ここで言葉を切り、ハナさんは焼酎ロックの水をガリッと齧った。そして私をキッと睨み一言。

「エロいんだよね」

「は？」

「このシチュエーションは相当にエロい。エロさのポイントはいくつかあるんだけど、まず当然のこととしてこの女そのものがエロさ満点なんだよね。歳の頃は二七、八かな。年取ったせいかな、この『ニジュウシチハチ』っていう響きが最近やけにグツと来るんだな。あれかな、結婚してるかしてないかギリギリのラインだからかな？」

「は？」

「ほら、人間ってさ、それまで何の興味も湧かなかった物でも『誰かに取られちゃう』って思うと欲しくなるだろう。限定商品の心理ってヤツだ。だから二十七歳って聞くと『この子、もうすぐ結婚して一人の男のモノになってしまうのか？』っていう焦りにも似た欲求が意識とは無関係に生れるんだと思うんだよね。その欲求が即ち僕のエロのストライクゾーン、略してエロライクZに150キロの剛速球でズドンと来るんじゃないかと」

「えろらいくぜっと？」

「で、その女、顔はやや幼さの残る、隙のある感じのタヌキ可愛い系、体型は若干ふくよかで、胸は大きい。メイクはナチュラルで、髪もストレートの黒髪。営業職の基本である「清潔感」をアピール

しているのだろうが、付け爪もマニキュアもしていない指先が却って僕の妄想を掻き立てるんだ。

そもそもこの『中年の上司と仕事中に二人きりで喫茶店』というシチュエーション自体、イヤラシ過ぎると思わないか。二人は不倫の関係なのか？ それとも愛人か？ もしくは毎日セクハラされているけど立場上逆らえない？ などなど。あれこれ考えていると女は床に置いた鞆から資料を取ろうとしたんだ。そのときの意図的にやっているとしたかと思えない第二ボタンまで外されたブラウスからの見えそうで見えない胸チラといったらもう……僕はもはやアルジャーノンどころではなくなった。

そしてこのとき最もエロかったのが、スーツのタイトスカートから見える太腿及び脚および足とそれを包む黒いヒールなんだ。女の脚がエロいなんてオーソドックス過ぎて申し訳ないんだがそこは『エロスの原点に立ち返った』ということ勘弁願いたい。

基本的に僕の好きなストッキングは黒系の薄ら肌が透けて見えるタイプなんだよね。このとき女が履いていたのは、肌色系の穿いていることをあまり感じさせないナチュラルタイプだった。そこはきつとベージュのスーツに合わせたんだと思うよ」

このオッサン、さっきから何言ってるんだ？ 酔っ払ってるのか？ 困惑した私は顔を上げて辺りを見回す。京助さんと目が合った。すかさず私はアイコンタクトで京助さんに助けを求める。

すると京助さんはボサ男との会話を中断し、愛する可愛いミスウーティストハニーを、管を巻く中年の酔っ払いから救うべくスツクと立ち上がったのだ。素敵だわ京助さんさすが相思相愛ねっ。これぞ以心伝心。

「いい加減にしろよ父さん」

そうだそうだいい加減にしろ父さん！ え？ 父さん？ するとそこへトイレから戻って来た香織さんが加勢した。

「そうよいい加減にしてよね、お父さん。千夏ちゃんが困ってるでしょ」

ちよちよちよいまちふたりともおとうさんてなにそれいったいどうゆうことですか？

私は京助さん、香織さん、ハナさんの三人の顔を三拍子の曲でタクトを振る指揮者の如く一定のリズムで繰り返し見比べた。

この髪が薄く背も低い、本家本元又っくん顔負けの情けなさを誇るハナさんが？ 歴代メンズノンモデル達よりも、歴代ジュノンボーイズ達よりも、ヒーロー戦隊モノで名を上げた若手イケメン俳優達よりも、もちろん毎日ブラウン管を賑わさない日はないほどの各々八面六臂の活躍を見せ続けるジャニーズの面々よりも遥かにグッドルッキングであるマイラヴリーダーリン京助さんと、超美人というわけではないけれど、きちんとメイクをすれば大化けの可能性大かつ小池栄子ばりのボインかつ小池栄子ばりの目力を兼ね備えかつ男でも女でも気に入った相手なら一切の手加減なしに喰いまくるエロスの権化香織さんの兄妹の父親ですと？

僕の眼球とアルジャーノンと女の太腿の三点は

私は再びハナさんに視点を定める。このオッサンはきつと、自身の親から劣性遺伝子ばかりを受け継いだに違いないのだ。エンドウマメのメンデルさんの的に言わせてもらえばハナさんは純系のしわ型である。

これでもし京助さんのお母さんもしわ型だとすると、イケメン京助さん及びナイスバディ香織さんの誕生は100%不可能ということになる。ハナさんの劣性遺伝子を押さえ付け優位に立つには、お母さんはかなり強烈な優性遺伝子を備えている必要がある。つまり……

「京助さんと香織さんのお母さんて、もしかして物凄く美人かつスタイル抜群な人じゃないですか？」

すると再び私の隣に座った香織さんが肩に腕を回してきた。

「あーら良く分かったわね、さーすが千夏ちゃん。ウチのママはそりやもう半端じゃないわよ。色んな意味で」

やっぱりな。するとどうしたとか突然ハナさんが泣き出した。若干ハナ水も垂れている。

「ううう二人とも初めて僕を父さんって呼んでくれたね」

「え？ 初めてってどういうことですか？」

場に気まずい空気が流れる。私は京助さんを見た。このとき私は思い出したのだった。先日家に来て私の両親に会った後に「楽しい御両親だし、家族みんな仲良くて羨ましいよ」と言ったときの京助さ

んの一瞬の寂しげな顔を。きっと複雑な家庭環境で育ったに違いな
い。しかし。

「まあ何というか、ノリで」

京助さんはレバ刺しにゴマ油を浸しながら答えた。えええっかく
気持ちを察したのにノリとか京助さんそんな軽い感じ……シヨック！

「そうそうノリノリ」

香織さんがノリとか……はフツーか。っていうかここに来て皆さん
重大なミスを犯していることに気付いてしまった私。意を決して口
にしてみようではないか。

「あのお、父親なのに名字違います？」

そうである。京助さんも香織さんも名字は「霧夜」であるのに対し、
ハナさんはハナさんというだけあって名字は「縹」である。

「だって離婚してるし」

ビールから生グレープフルーツサワーに移行した香織さんがさらり
と言った。なるほど、離婚か。ということはこの兄妹は母子家庭で
育てられたのか。そうであるならば京助さんが私たち家族の団欒風
景を見て羨ましがするのも無理からぬことだ。

「そりゃあ四回も父親が変わったら人生ノリノリじゃなきややって
らんないわよ」

香織さんは搾り終えたグレープフルーツを手に持ち顔の上へ持って

いくと、まだ残っている果汁を啜ろうと右手でぎゅううと握り締めた。思いの外果肉が残っていたようで、100%グレープフルーツ果汁は口から零れ、アルコール摂取によりほんのり桜色に染まった喉を伝い胸元の開いたブラウスの中へとつつつと垂れて行った。うーん、やっぱエロいわこの人。

ってそんなことは今はどうでもよくって。四回父親が変わったってどーゆーことですか！？ 驚きを隠せず口が開きっぱなしの私に京助さんが説明してくれた。

「千夏ちゃん、ウチの母親は恋多き女でね。ハナさんは五人目の夫なんだ。あ、離婚したから『夫だった』か。ハナさんは僕も香織も成人してからの結婚相手だから父親っていう感覚は全くないんだけどね」

「じゃあ何で今『お父さん』って……」

しかも初めての「お父さん」がこんな酒の席ってどうよ？

「え？ だからノリで」

今日イチの爽やかな笑顔で京助さんは言ったのだった。うーん、こんなところでも京助さんはSっぷりを発揮するのか。

「それで騙されたってどういうことなんですか？」

霧夜家の家庭の事情の一端を垣間見たところで私はハナさんに話の先を促した。おお聞いてくれるかいお嬢さん、とハナさんは涙をかみながら口を開いた。

「そんなこんなで僕は斜め前の女の脚が気になって仕方がない。僕

がここでラッキーだったのは読書をしていたことだ。持っていた本をテーブルに置くと、それを読む振りをして堂々と女の太腿を凝視したんだよ。分かるかな、このとき僕の眼球とアルジャーノンと女の太腿の三点は一直線に結ばれたんだね」

いやだからそのエロ妄想話はもう結構ですから、騙されたって話です。ですね。

「とまあここまではこの話の前菜みたいなものなんだ。メインディッシュはここからここから。アルジャーノンを熟読する振りをしてエロダヌキ女の太腿及び脹脛及び足首を眺めていると一人のサンダラスをかけた女がすいっと音も無く僕の向かいの席へと座り、それが当たり前のようにごく自然な振る舞いで僕のカフェオレの半分残っているカップを摘まみ上げクイツと飲み干してしまったんだ。

このとき僕の脳味噌は記憶という筆笥の無数にある引き出しを手当たり次第開けては閉め開けては閉めを繰り返していた。目の前の女が果たして誰であったのかを思い出すためにね。だが一向に目の前の女の名前は出てこなかった。まあサンダラスしてる時点で顔がよく分からないというのもあるんだけどね。

思い出すのを諦めた僕は直接本人に問い質すことにした。『失礼ですが以前どこかでお会いしましたでしょうか』という言葉が喉を通り越し口から今まさに出ようとしたその瞬間、女はパツとサンダラスを外したんだ。素顔を見た僕は思わずアツと叫んでしまったんだよ」

「知ってる人だったんですね？ 元カノとか親戚のおばさんとか」「いやそうじゃない。やっぱり知らなかったんだ。ただ物凄い美人だったんだよ。しかもかなり卑猥系の顔立ちだ」

んだよこのオッサン、頭の中エロばっかかよ……ネチっ子が大きくなったらこんな感じなのかな。そもそも「ヒワイ系の顔」ってどんなだよ？ ヒワイなのはお前の方だが。

「年の頃は三十を少し過ぎたくらいといったところだろうか。僕はねお嬢さん、二十七、八の女性にも敏感に反応するが、この『三十を少し過ぎた頃』っていうのもまた堪らなくそそられてしまうんだよ」

結局女ならいくつでもいいんだろ……

「芸能人に例えるとそうだなあ……井川遥をもう少しイヤらしくした感じかな。円熟した大人の女性の色気と若干残るあどけなさを併せ持つ、とにかく男だったら必ず振り返ってしまうようなイイオンナなんだよ」

井川遥か……確かにエロいかも。

ちなみに私、パジャマって嫌いなよね

「私の視線はエロダヌキから完全に井川遥にシフトしてしまったわけだ。右斜め前で痛いほど私の視線を太腿に感じ、見られることを意識しつつ上司と仕事の打ち合わせを進めていたエロダヌキは、予想外の美女の登場に動揺を隠せない。

このままではこのオジサンの心を繋ぎ止めておくことができなくなってしまうわ。女としてのプライドがそうさせたのだろう、エロダヌキはこともあるかスカートの裾を直す振りをして少し上にずらしたのだ。自らチラリズムの演出に挑戦。要するに太腿がこれまでも露になったわけなんだね。

もし目の前に誰もいなければ当然私の意識は完全にエロダヌキに向けられたであろう。ややもすると『こいつ痴女なんじゃないのか？』と取られてもおかしくない彼女のギリギリの行動に敬意を表し、感涙に咽ぶこと間違いなしだ。

だが相手が悪すぎた。勝負は初めから着いていた。U・16のユース代表が今や世界中の誰にも止められない二十一世紀最大のフットボールスター最速メッシ率いる王者バルサに戦いを挑むようなものだ。タヌキはどんなに頑張っても所詮タヌキ、女としての力量では井川遥に遠く及ばなかったのさ」

ハナさんは自分だけ注文したカルビクツパをはふはふ言いながら食べている。私も負けじと冷麺を啜る。

「完全なる敗北を喫したエロダヌキは『そろそろ行きましようか』と休憩時間が終わった体を装い上司を連れだって店を出たんだ。さ

ようならエロダヌキ、キミと過ごした濃密な一時はきっと忘れないよ……彼女の寂しげな背中になんかそう呟くと、僕は正面の井川遥かに向き直った。するとこれまで沈黙を貫いてきた井川遥はついに口を開いた。『テリーヌに会わせなさい』とね」

「テリーヌ？　って確か料理の名前じゃ……」

「そう、僕も最初はそう思った。この人何言ってるんだろうってね。僕がきょんとしていると井川遥は苛立ちを露にしたんだ。『あなたのところに出入りしているテリーヌ勅使河原よ！』とね。そこで僕はようやく理解した。ああそういうことかと」

全っっ然分っかんねーんですけど。

「テリーヌ勅使河原っていうのは僕の劇場で毎週手品を披露しているマジシャンなんだ。名前の通りテリーヌを使ったマジックが得意でね。中でも客に引かせたトランプが、前の晩に作っておいたテリーヌの中から出てくる手品は人気が高い。ショーが終わった後はそのテリーヌを客に振舞っているんだよ。まだ若いんだけどね、マジシャンやる前はフレンチのコックだったんだ。だから味も本格的」

テリーヌって煮ごりみたいな奴でしょ？　そんな魅力的じゃねー。

「そして何より彼は二枚目だからね。しかも醤油系の。若くて二枚目でフランス料理のできるマジシャン。もちろんトークもエスプリの効いた本場パリ仕込み。これ以上ないというくらいにモテる要素が凝縮されているわけだ。当然彼のステージはいつも満席、立ち見も出るほど。将来も有望だ。しかも客の九割は女性で、『テテ様』って呼ばれてもはや韓流スター並みの人気なんだ。ウチの出演者のレギュラー陣の中では唯一グッズも販売している。いわば稼ぎ頭だね」

テテ様？ ああテリーヌの「テ」と勅使河原の「て」ね。

「そんな熟女のアイドルテテ様だから出待ち入り待ち追っかけは日常茶飯事、だがそこはさすがマジシャン、ミステリアスが身上の職業だけに、おいそれとファンに捕まったりはしないんだな。目の前の井川遥もテテ様の熱狂的なファンだったんだね。どんなに劇場を見張っても彼に会えず、業を煮やした彼女はオーナーである僕に直接交渉しに来たってわけなんだ」

「へえ、それで会わせてあげたんですか？」

するとハナさんは焼酎のグラスを持ったまま首を横に振った。

「一人のファンだけ特別扱いは出来ないよ。劇場以外の場所、例えば今みたいにテテ様が一人で焼き肉食べてる所に偶然居合わせてそこから仲良くなる、みたいなのはもちろん構わないけどね。僕の所に出てもらっている以上、個人的な情報を他人に漏らすわけにはいかない。もし相手がストーカー的な要素を持ったファンで警察沙汰にでもなったら大変だからね」

まあそりゃそうか。

「だから僕は井川遥には丁重にお断りしたんだな。井川遥は『あらそう』と意外にもすんなり引き下がったんだ。席を立ったから帰るのかなと思ったらカウンターへ向かってコーヒーを注文し、それを手に再び僕の向かいへと座った。そしてバッグから一枚の紙切れを取り出したんだね。僕はそれを見て驚いた拍子に手がカップに当たって紙の上に倒してしまった。全部飲んだ後だったからよかったけどね」

「何の紙だったんですか？」

「婚姻届」

「は？」

「意味が分からずに僕は紙と井川遥を交互に見比べること三十数回、すると井川遥はイヤらしい唇をよりイヤらしく持ち上げてとてつもなくイヤらしい笑みを浮かべて言ったんだ。『テリーヌに会わせてくれたら結婚してあげるわ』ってね」

「はあ！？ 何それ！？」

「そう、正しく何それ、だ。絶句し続ける僕を井川遥は更に追い詰める。」

『縹さん、あなた四十五年間独身の上に彼女もいたことが無いんですってね。そのクセ下半身は常に欲求不満、頭の中はエロい妄想で一杯。今だって隣のOLをイヤらしい目付きで見てたしね。日々の楽しみと言えば毎日ここで飲むコーヒート、週に一度の風俗店巡りと駅のホームの階段下から気付かれないように女子高生の短いスカートの中を覗くこと』

さすが井川遥、エロいだけでなく頭も切れる。交渉に当たって僕の素性は下調べ済みってわけだ。そのことに感心しつつも普段の行いが露顕して動揺している僕に構うことなく彼女は誘惑の言葉を並べ立てる。

『どう？ 結婚に同意すればこんなイイオンナと同じ屋根の下で暮らせるのよ。もちろん毎晩同じベッドで寝てあげるわ。ちなみに私、パジャマって嫌いなよね。ベッドの上は大切なリラックスタイム、身も心も解放されたいじゃない？ だからいつも寝るときは裸なの』

と前屈みになって二の腕で自分の胸を寄せて頬杖をつきながらコーヒーを飲む井川遥。卑猥さ満点の笑顔と豊満な胸の谷間がスリィデイメンションで僕の目の前に迫りくる……」

そんな奴ホントにいいのかよ。

基本的な江戸四十八手と裏を合わせた九十六手に加え

「いくらなんでも結婚はやり過ぎじゃないんですか。せめて『テテ様に合わせてくれるんならデートしてあげてもいいわよ』くらいならまだ分かるけど」

「つかいくら冴えない中年オヤジのハナさん相手とはいえ、ほぼ初対面なわけでしょ？ そんなセリフ、よほど自分に自信がなきゃ言えんわな。私にゃ無理でっせ。」

「僕もそう思った。彼女の超ド級のエロ攻撃に僕の思考能力は麻痺寸前だったが、辛うじて残された理性の欠片を何とか拾い集めてようやく僕は言葉を絞り出したんだ。『そんな程度のことで自分の戸籍を汚す必要はないんじゃないですか？』とね」

「ふんふんそんで？」

私は韓国風冷や奴をツマミに完熟津軽リンゴジュースを飲む。

「すると彼女はこう言った。

『あなたと結婚すれば私は劇場のオーナー夫人でしょ？ そうすれば出演者の個人情報も全て手に入るし摘まみ食いもし放題。テリーヌだって独占できるじゃない。一度や二度あなたと寝る代わりにテリーヌに会ったってそれっきりかもしれない。そんな中途半端はイヤ。私はね、テリーヌを完全に自分のペットにしたいのよ』

そのときの僕は寧猛な豹に崖っぷちまで追い詰められたか弱き野兎だ。このまま喰いちぎられて彼女の肉体に取り込まれる人生を選ぶか、自らを貶めることなくちっぽけな誇りを胸に抱いたまま潔く

谷底へ決死のダイビングをするか。

額にじんわりと汗を浮かべて逡巡していると彼女は徐々に僕に顔を近づけてきたんだ。甘い吐息が鼻と耳をくすぐる。僕と彼女の唇の間隔は一センチを切った。この瞬間僕はこの先待っているであろう彼女との快楽の誘惑に負け、思考能力は完全に崩壊した。

堪らずキスしようと唇を突き出すと、彼女は顔を引っ込めたんだ。そして『続きは夫婦になってから、ね?』とまたもやイヤらしく笑う。すかさず僕にボールペンを握らせると婚姻届にサインをさせ、用意してきた判子を僕に手渡して押させたんだ」

まじかよこのオッサン、初対面の女と結婚したのかよ。有り得ない。ん? あれ? ハナさんが結婚したってことはまさか。

「その女豹井川遥がつまり……京助さんと香織さんのお母さんってことですか?」

と周りを見ると、京助さんも香織さんもボサ男&A&Bと何やら盛り上がっている。私とハナさんは完全に切り離されてしまった。まあいいや。

「そう、その井川遥こそ京助くんたちの母親、霧夜琴子だ」

霧夜琴子……うーん、そんな超絶エロ女が京助さんのお母様だったとは。香織さんはそのDNAを完全に引き継いでるってわけね。納得。京助さんのイケメン振りも、きつとお母様の井川遥級の美貌がかなり影響されているのだろう。

「でもちょっと待って下さいよ。琴子さんはテテ様と付き合いたい

からハナさんと結婚したんですよね？　ということはハナさんは琴子さんの浮気覚悟で夫婦になったってことですか？」

いくら会って間もないとはいえ形的には夫婦となるのだ。それなのに初めから浮気することが前提って。

「そうなるね。でもまあ僕からしたら琴子が誰と付き合おうがどうでもいいことなんだ。だって考えてもみなよ、四十五年間彼女ナシの人生を送ってきて、この先も恋人なんかできるはずはないと諦めていたところに飛び切りの美女が傍にいてくれると言ってきたんだ。例え毎晩じゃなくても一緒にベッドで寝られるなら妻の浮気なんか些細なことさ」

そんなもんですかね。

「僕は興奮したよ。これまで温めてきた数々のアイデアを試すときがようやく来たんだからね」

「アイデアって何ですか？」

「基本的な江戸四十八手と裏を合わせた九十六手に加え、僕が独自に編み出した体位が二十数個あるんだ。毎日一つずつ試しても四ヶ月は違うバリエーションが楽しめるからねえへっへっへ」

あ、ちなみに体位はドイツ語で「ラーゲ」ね、とどうでもいいトリビアを一発披露してからハナさんは嬉々として一人でヒワイな体勢を取り始めた。焼き肉屋の狭い座席で相手がいると仮定してのエアセックス、略してASである。腰が砕けんばかりにいくいと高速で前後する。額には汗の粒が浮き出している。しょーもな。数十年間そんなことばっか考えてきたのかよ。

「ふーん、良かったじゃないですか。イイオンナとくんずほぐれつ

エッチ三昧な日々を送れたんですよね？」

リングジュースを啜りながら半ば白け気味に言うと、下卑た表情から一転、泣きそうな顔になってしまった。

「そこなんだが……いざ結婚してみるとどうだ。琴子のヤツは一緒に寝るどころか僕の家に一切寄りつかない。結婚式もそこそこに、テリーヌの個人情報僕を僕の書斎から手に入れるや否や電光石火の速さでテリーヌ勅使河原改め勅使河原大左右衛門のマンションにすっ飛んで行ってしまったんだ」

ダイザエモンですか……エスプリとは対極に位置するような名前ですな。

「そして琴子は僕の前から完全に姿を消したんだ。テリーヌと共にね」

「え、消したってことは、それっきり会ってないんですか？」

「そうだ。劇場の稼ぎ頭だったテリーヌとも連絡が取れなくなってしまった。やがて届いた一通の封筒の中には事務的な離婚届が一枚入っていただけ。風の噂じゃ琴子とその美貌と肉体と圧倒的性技を駆使してテリーヌを完全に骨抜きにしまったそうさ。今じゃ琴子は丸裸にしたテリーヌに首輪と鎖を付けて、毎日近所中を散歩しているらしい」

それって色んな意味で捕まるんじゃ……するとハナさんは抱えた頭をテーブルにがんがんと打ち付けて本格的に悶え苦しみ始めた。

「あああ琴子！ あんな形で僕を誘惑しておきながら髪の毛一本すら触れることも無いままに消えてしまうだなんて！ 何十年にも渡って一人磨いてきた技をぶつけるのに琴子、お前以上に相応しい相

手などいないのに！　せめて一度だけでも……」

と悔し涙を撒き散らしながらまた腰を動かしてのASに没入するハナさん。

「なるほどね。でもそれってある程度は予測できた事態なんじゃないんですか？」

「何だと？」

ぴたりと腰を止め、彼の目がじろりと私を睨む。そのこれまでにない眼力に一瞬たじろいだ。

血は争えないってこういうときのための言葉なの

「だってそうじゃないですか。結婚する前提として既に『テテ様に会わせろ』って言うてるんだから。確かに駆け落ちの失踪は行き過ぎかもしれないけど、テテ様の家に入り浸り、くらいは当然の成り行きじゃないですか」

「くそう小娘が生意氣言いおって……」

ハナさんはギリギリと歯を食いしぼる。よっぽど琴子さんとエッチしたかったんだな……あれ？

「ねえねえハナさん、琴子さんって京助さんのお母さんなんでしょ？」

「そうだ」

「ってことは結構な歳なんじゃない？」

京助さんは大学三年生で恐らく二十一だ。大学生の息子を持つ母親なんだから、普通に二十代後半とかで結婚してたらもう五十近いはず。まあ五十超えてもイイオナはいるだろうけど、いくらなんでも三十過ぎと見間違うことはないだろう。

「琴子が京助君を産んだのは十六の夏だった」

「へ？ 十六？ って高校生のときに妊娠してたってことですか？」

「何でも担任の化学の教師が我慢できなくなってしまったらしい」「ガマン？」

「当時から大人顔負けのお色気ムンムン娘だったからな、琴子は。京助君に琴子が高校生の頃の写真を見せてもらったが、あれじゃあ我慢できないのも頷ける」

「だから何の我慢ですか？」

「性的欲求に決まってるだろう。発育途中のティーンエイジャーにしてその豊満な胸は既に真っ白なブラウスを突き破らんばかりの存在感を示し、少女のあどけなさの残る顔とのアンバランス感がより一層男の下心を刺激してやまない。しかもすらりと伸びた白い太腿は短いスカートから惜しげも無くさらけ出されているのだ。意識的半分無意識半分、否応なく男という男を挑発するその身体には、女子高生を見慣れた高校教師をも一撃で打ち抜く破壊力を十分に秘めていたってわけだ」

「それで……その化学の先生が、女子高生だった琴子さんとやっちゃったと」

「そうだ」

「で、デキちゃったのが京助さんだと」

「そうだ。これは琴子本人からの情報だがな、その担任の化学ティーチャーは結構な男前だったらしい。だから琴子も身体を許したって話だ」

「どんだけ乱れてんだよ……」

「その後その事実は学校にも知れ渡り、化学Tは責任を取って学校を辞めた。だが琴子のことは本気で愛していたらしく、琴子が高校を卒業するのを待って結婚したとかしないとか」

「はつきりしてくださいよ」

「その辺の経緯は京助君も聞かされてないみたいなんだよ。琴子のみぞ知る事実」

「ふーん……じゃあ香織さんもその化学Tの子なんですか？」

「京助君と香織は年子だからな、普通ならそれが妥当な線だが相手は何と言ってもエロスの権化、聖女ならぬ性女の霧夜琴子だ。DNA鑑定でもない限り本当のところは分からないだろうね」

十六で産んで十七で産んで……その間も学校に通ってたんだろうか。

何か複雑過ぎてついていけないや。気を取り直してメニューなどを広げてみる。アイス食べたい。

「あ、さっき言ってた『騙された』って琴子さんに騙されたってことか」

と、食後のデザートに一人注文した白玉アイスを頬張りながら私は呟いた。

「違うぞ。この話にはまだ続きがある。確かに結果として琴子にも騙されたが今回僕を騙したのは香織だ」

「え？ 香織さんが？ あ、分かった」

「何が分かったんだ？」

「やらせてあげる代わりに舞台タダで使わせてって迫って来たんでしょ、あのおっぱいで。かー血は争えないってこういうときのための言葉なのかー」

私は一人ごちてウンウン頷いた。

「なーにが『かー』よ」

その声に振り向くと、怖い顔をした香織さんが背後に立っていた。

「だってそうなんでしょ？ 女の武器を最大限に使い倒してこの世の荒波を生き抜いていく。霧夜琴子&香織の女傑列伝ここにあり！」
「千夏ちゃんいい加減にしろさい。私がそんな安い女に見える？」

私は仁王立ちして胸の前で腕を組む香織さんの身体を、頭天边から爪先まで何度も見上げて見下ろした。安っぽいかお高いか、三割引きか二割増しか、そんなことはどうでもよかった。今この瞬間の

私の興味は、目の前に迫りくるでかいおっぱいのみ。

私の右手は無意識に香織さんのおっぱいへと伸びていた。そして軽く握ってみる。若さ漲る良い弾力だ。香織さんの三分の二でいいから私にもこれくらい胸があったらなあ、京助さんをもっと喜ばせてあげられるかもしれないのに……右手に飽き足らず、左手もいつの間にか目の前の胸を掴んでいた。

「……千夏ちゃん、酔ってるの？」

そんな私の行動に、されるがままの香織さんは冷ややかな目を見る。

「え？ あ、これは失礼しました。じゃあ香織さんが騙したって言うのは？」

改めてハナさんと香織さんの顔を見る。

「結果的にはこうなっちゃったけど、私だって最初から騙そうだななんて思って無かったわよ」

よいしょ、と香織さんは私の隣に腰を下ろした。そしていつになく真剣な表情で語り出す。

「そもそも私が芝居を始めたきっかけはね、ラーメンズだったのよ」
「ラーメンズ？ ラーメン大好き小池さん？」

「大学の友達に『これ面白いよ』ってDVD見せてもらったときの衝撃と言ったらなかったわ。一言で彼らを言い表すならば『パーフ

エクト』。あの完成度の高さは比類無き空前絶後。もはや人間技とは思えない」

香織さんは遠くを見詰める。へええそんなに凄いんですかいラーメンズ。どんな劇団なんだろう。

今なら霧夜香織スペシャルプライベートレッスンがなんと無料で受けられる特典

「いてもたってもいられなくなった私は早速次の日大学の演劇サークルの門を叩いたわ。ラーメンズの舞台は基本的にコントだからジャンルとしては『お笑い』なのよね。だから肩書きとしては『芸人』ということになるから演劇だちょっと方向性は違うんだけど、他にそういうサークルは無かったから。

正直言って彼らを日々テレビを賑わしている、何の芸も無いような名ばかりの芸人と同列にして欲しくないの。本当の意味で芸達者な彼らに対して失礼だわ」

そこで言葉を区切ると香織さんは、運ばれてきた熱々の石焼ビビンバをスプーンでかきまわし始めた。じゅうううと食材の焼ける音と食欲をそそる香ばしい匂いが立ち昇る。既にデザートまで済んでしまいいあとは寝るだけだった私の胃袋が、再び起き上がって石焼ビビンバに食い付いた。はふはふ言いながらそれを掬って口に運ぶ香織さん……私も頼もうかな。

「結果的に大学の演劇サークルは私にとってあまり意味のないものだった。何ていうか、真面目過ぎるのよね。硬いつていうか。演目も古典的なものが多かったしね。飲み会とかやつてもみんな『芝居とはこうあるべきだ』みたいに熱く語り出しちゃうし。

もちろん初心者だったから、それなりに勉強にはなったけど。私のもっと自由な空気を求めたの。詰まる所エンターテイメントの目的って『いかに観客を満足させるか?』ってことでしょ? どれだけ完璧に演じたところで話がつまらなければ結局は意味のないことなのよ」

まあね。オカタイ話を見せられても眠くなるだけですからね。

「そこでの活動に見切りをつけた私が次にやったこと、それは『相方探し』ね。計算され尽くした話の展開、人知れず行っている圧倒的な練習量から生れる完成度の高いパフォーマンス、ユニークなキャラクターと日常世界からちよつとずれた非日常の世界の物語。ラーメンズには私の目指す要素の全てが凝縮されているの。でもいくらラーメンズを尊敬しているからといって、同じようなことをやっても単なる真似でしかない。私は私独自の方法を見付ける必要があったの。」

ラーメンズは二人組、舞台セットのほとんどない空間で、パントマイムを駆使しながら話は展開される。賢太郎さんが脚本を書き演出する。その中で仁さんが変幻自在に暴れ回る。互いに互いが足りない物を持ち合わせていて、見事に噛み合っている。正に奇跡としか言いようのない二つの才能の出会い。それがラーメンズなのよ」

いつになく熱い香織さん。私は喋るのに夢中ですっかり忘れられた石焼ビビンバを香織さんにバレないように少しずつ手元に引き寄せた。若干冷めつつあるが、まだまだ温かい。要らないみたいだから食べちゃおっと。つかラーメンズって二人組みなのか。

「セットのない質素な舞台でパントマイムにより無限の空間を作り出すという手法は、お金もかからないし、それでいて観客には実物以上の『物』が見える、まさに一石二鳥の手法なの。でもこれは、同時に諸刃の剣でもあるのよ。演者の技術が低ければ、いくら脚本が練れていても面白さは半減、お客さんもシラけてしまうからね。」

今の私にはそこまでの腕は無いことは自分でも分かってるわ。そ

れにさっきも言ったけど、『何も無い空間＋パントマイム』では出来の悪いレプリカでしかない。だから別の方向性を持たせるべく、相方は二人欲しかったの。でもね、結局集まらなかったのよ」

ううむ、香織さんてエロいだけじゃなくって結構真剣に考えてるんだなあ、と思いつつ残りのビビンバを完食してしまう私。米粒のこびり付いた空っぽの石鍋だけをそっと香織さんに返却する。

「興味本位というか、ノリでやるやって言うてる子は何人かいたけど、いざ練習を始めると『結構本格的なんだね』とか言って逃げちゃうの。あったり前じゃないの。こっちは人生賭けてやってみんのよ、冷やかしたらとっとと帰りやがれ！ と強がってはみたものの、さすがに一人では心細いわけで。そこで思い出したのがハナさんだったのよ」

その話題のハナさんを見ると……先程のエアセックスで体力を使い果たしたのか、こっくりこっくりと船を漕いでいる模様。

「ハナさんこう見えて実は若かりし頃に役者を目指してたのよ。それに何と言っても劇場を持ってるって言うのは何物にも代え難い魅力よね。だっていくら練習した所でそれを披露する場所がなければ見て貰えないもの。私は意を決して『一瞬父親だった』ハナさんの家を訪れたの。そして『もう一度舞台に立たない？』って誘ってみたのよ。」

未だに夢を捨て切れず燻っている毎日を送っている中年男に若くてピチピチの現役女子大生からの提案に、二つ返事で乗っかってくると思ったのは浅はかだったわ。当時のハナさんはママに逃げられて失意のどん底だったの。こんな死んだ魚の目をしたオッサン、やっぱり相方にするのは止めようかな……と思って失礼しようとした

とき、ある物が私の目に止まったの」

何だろ。男性用のアダルトグッズかな？

「それはね、ラーメンズの公演が収められた数々のDVDよ。それを見た瞬間嬉しくなっちゃって。そこからは二人でラーメンズ話で大盛り上がり。いくつか彼らのコントを見ていくうちに『ウチの劇場にもこういう奴らが出てくれたらなあ……』なんてハナさんの目も次第に輝きを取り戻してきて。今ならイける！ と確信した私は『こういう奴ら』に私たちがなればいいじゃないって言ったのよ」

ほほうなるほど。お二人は偶然にもラーメンズ繋がりだったって訳ですな。

「いつになく熱い眼で私を見詰めるハナさん。落ちた、と思ったそのとき、彼の口から出たのは『分かった。やろう。でもその代わり条件がある』という言葉だったのよ」

「ああなるほど、その条件がつまり『琴子さんに会わせろ』だったんですね」

「そういうこと。私は『そんなことでよければ』とオッケーしたの。こうして目出度く劇団甚三紅が誕生したってわけ。ま、三人目はこれから探すけどね。っていうか千夏ちゃんやらない？ 大歓迎よ」

香織さんの目がトロンと妖しく光る。

「いえ、やりません」

「あらそう、残念ね……気が変わったらいつでも言ってるわ。千夏ちゃんならオーディション免除で即入団させてあげるわ。さらに今なら霧夜香織スペシャルプライベートレッスンがなんと無料で受けられる特典付きよ」

そりゃどーも。

「で、結局琴子さんには会わせてないんですよね？」

「だあって私だってママの居場所なんか知らないもーん」

もーんじゃねえよもーんじゃ。

ハナさんの飲みかけの焼酎を一気に飲み干すと、香織さんはあっはっはと楽しそうに笑って席を立てしまった。騙すつもりはなかったとか言ってるけど、最初から居場所知らないんじゃないじゃ騙したも同然じゃーありませんか。私は目の前で眉間に皺を寄せて「あああ琴子お」と時折寝言を呟くハナさんを見詰めた。

まあでも女房が若い男作って逃げたーって酒浸りの無毛な日々を送るより、若い女と舞台に出る人生の方が何百倍も刺激的で意義があると思うけどね。それに香織さん達の芝居、結構面白かったからそのうち人気が出てきてハナさんにもファンが付いて、新たな出会いも生れるかもしれないしね。

せっかくお母さんからオフィシャルに

「それじゃあお疲れ様でしたー」

何だかよく分かんない打ち上げは何だかよく分かんない内に終焉を迎え、我々は牛角を後にした。当たり前だが外は暗い。私は携帯の時計をチラリと見る。午後十時半を少し回ったところだ。

「二次会よ二次会！　こら！　お前ら帰ろうとしてんじゃないわよ！　今夜は朝が来てお天道様が天空の真上に来るまで逃がさないからね！」

完全なる酔っ払いと化した香織さんは、これ以上付き合い切れんとはばかりに「それじゃ僕たちはお先に……」とこそそと帰ろうとしていた新入部員A&Bを強引に捕まえて両肩を抱き一人気を吐いた。

A&Bは各々首根っこに腕を回され、それぞれの顔が香織さんの左右のでかいおっぱいに押し付けられている。香織さんの腕からは、アルコールパワー注入によるリミッター解除で女性とは思えないほどの尋常じゃない力が発揮され、A&Bは今にも窒息死寸前だ。豊満なるおっぱいに埋もれての窒息死。ネチっ子なら泣いて喜ぶシチュエーションである。

A&Bは虫の息の中、辛うじて首を捻ると視線を京助さんとボサ男に投げかけて助けを求めた。しかし先輩二人は涼しい顔で完全に無視である。恐らく京助さんもボサ男も香織さんの酒癖の悪さを知っているのだろう。だから今回は若い後輩に酔いどれ香織さんの相手を押し付けるつもりなのだ。

などという冷静な状況分析はこの際どうでもいい。今の私の最大の関心事、それは「このまま京助さんとお泊り出来るか否か？」である。せっかくお母さんからオフィシャルに外泊許可&性交渉許可を頂いたのだ。このまま手ぶらで帰ったら一族の恥、末代までの笑いは必至だろう。

もちろん私と京助さんは相思相愛愛し愛され想い想われの幸福絶頂誰もが羨む美男美女の仲良しラブラブカップルであるから「ねえ、このままどっか行こ？」と彼の手をニギニギしつつお口半開き、若干潤ませた瞳で上目遣いに可愛らしく言ったなら、京助さんの性欲も一気に加速し近くのホテルになだれ込むことはそれほど難しいことではないだろう。

だが周りにこれだけ人間がいるとなると、メンタルヴァージンのウブな乙女にとって、そこまで思い切った行動に出るのはかなりの勇気を要するのだ。とりあえず一步、京助さんとボサ男の方へ足を踏み出してみる。すると獲物を捕らえるかのような香織さんの目が鋭く光った。マズい。

「あーら千夏ちゃんごきげんよう。もうちーろーん千夏ちゃんも行くわよねえ？ ニ ジ カ イ」

両脇にA&Bを抱えたまま「ニ ジ カ イ」と一音ずつ発する度に一歩ずつ私の方へにじり寄る香織さんの顔、それは正しく悲劇のヒロインに迫りくるホラー映画の殺人鬼さながらである。ジェイソンである。

私は咄嗟に京助さんに視線を送った。A&B同様、私も涼しい顔で流されたらどうしよう……という懸念は杞憂に終わる。愛しのマイダーリンは私を見捨てることなどしないのだ。京助さんは可愛い彼

女の危機を瞬時に察知し、ボサ男との会話を中断して私の元へと駆けつけてくれた。

「千夏ちゃん、送るよ」

京助さんは恐怖に立ち竦む私の手を取って、今やニジカイモンスターと化した香織さんの攻撃圏内から引きずり出してくれた。しかしそんなことで諦める香織さんではない。

「ちょっとー京助え、こんな機会滅多にないんだからさあ、そーゆースタンドプレイで仲間の輪を崩すのやめてくんない？」

引き続きA&Bを抱えたまま今度は京助さんに迫る。

「香織お前飲み過ぎだぞ。まあ初めての舞台が成功した直後だからその気持ちも分かるけどな。飲み足りないんなら僕と北川が付き合ってやるから、いいだろそれで。千夏ちゃんは高校生なんだからもう帰してあげないと」

「むゝゝ……じゃあせめてこいつらは連れてくわよ」

腕の中のA&Bを交互に見下ろし香織さんは渋々京助さんの提案を受け入れた。さすが兄である。っていうか京助さん、まさか本当にこのまま二次会行っちゃうの？ えーやだやだやだ今から私との愛の時間、訳してタイム・オブ・ラブは……精一杯の上目遣いと高速瞬きで京助さんを見詰めていると、再び香織さんが叫んだ。

「あとハナさんも！ ってあれ？ ハナさんは？ どこ行ったの？」

そう言えば店を出てからハナさんの姿がない。辺りを見渡すと、一本の電柱の下に蹲るハナさんを発見。あの反省ポーズは……間違い

ない。吐いたな。

「ほくらハナさんも！ 行くよ二次会！」

ようやくA&Bを解放した香織さんは、衰弱しきって唇が真っ青になったハナさんの襟を掴んで引きずって戻ってきた。

「じゃあ僕は千夏ちゃんを送ってくるから」

京助さんは私の手を取ると、みんなを残して駅に向かって歩き出した。どうしよどうしよ……このままだと本当に帰されちゃう。よし。私は覚悟を決めた。

「京助さん」

「どうしたの？」

不意に立ち止まった私を不思議そうに見る京助さん。

「あの……私今日、帰らなくても平気なんです」

心臓がとくとくとくとくと、校庭を十周走った直後よりも早く収縮を繰り返す。顔が熱い。

「だからその……一緒にいて……欲しいの」

遂に言った、言い切ったわ私。恥ずかしさで京助さんの顔を見れない。

「千夏ちゃん……」

すると京助さんは私をぐっと引き寄せて抱き締めてくれた。私は京助さんの胸に顔を埋める。良い匂い。安心感からなのか、なぜか涙が溢れ出てくる。人通りの多い池袋の駅前で抱き合う私達を、通りすがりのサラリーマンや大学生がちらちらと見て行く。そんな中、京助さんは私の顔を胸から離すと上を向かせた。近付いてくる京助さんの顔。

こ、これはもしかや……キスはしたいけど、こんな人の多い外じゃやっぱり恥ずかしいな……でももうどうでもいいや、好きにして、と目を閉じた。あとちよつとで唇が触れ合うというそのときだった。

次の一球で一打逆転サヨナラ負けを喫するかもしれない

「ほーらやっぱりね」

背後から聞き覚えのある恐怖の聲が私の耳に届いた。ゆっくり振り向くとそこには腕を組んで勝ち誇ったような笑みを浮かべ仁王立ちする香織さんがいた。後ろにはA&B、更にその後ろにはボサ男とハナさん。

「なななにがやっぱりなんですか!？」

よもや知り合いにキスシーン（未遂だけど）の現場を目撃されるだなんて何たる不覚。万引きを現行犯で捕まったかのようなバツの悪さと恥ずかしさが私の中に押し寄せる。気が動転している。

「なーにが『高校生なんだからもう帰してあげないと』よ。聞いて呆れるわね。京助、あんた最初から千夏ちゃんとホテルにでもしっこむつもりだったんでしょ。バレバレなのよ」

香織さんが鼻で笑う。

「そ、それは私の方から一緒にいたいって……」

と言いかけた私を制して京助さんは、「そうだけど。悪い？」と私の肩を抱いて何事も無かったかのように答えた。ああ京助さん、私を庇ってくれたのね……

「あーらあらあら開き直ったわよこのイケメンが。だったら最初からそう言えばいいじゃない。『今から千夏ちゃんとやりたいから僕

「私たちはこれで失礼するね』ってさ」

な、なんという露骨で下品な発言。するとそれまで青ざめた顔で項垂れていたハナさんがいきなり身体を起こして叫んだ。

「だ、誰と誰がヤルって!？ まさか琴子が帰って来たのか!？」

「違うわよハナさん。京助と千夏ちゃんよ。私たちと飲むより二人っきりで熱い夜を過ごしたいんだって」

「え？ なに？ 京助君とキミはできてたの？ アベックなの？ ふーんそうなんだへえへえ」

アベックって……

「そうなのよ。あ、そうだわ、せっかくだから私も混ぜてよ」

「混ぜるっ……て？」

嫌な予感。

「決まってるじゃない。3Pよ3P。京助なんかよりも私とした方が絶対に気持ち良くなれることを証明してあげるわ。最低でも五回はイカせてあげる」

さ、さんぴーって香織さん……

「お！ そういうことなら僕もご相伴に与ろうかな。どうだいこの際だから前人未到の4Pってのもオツなもんだと思うけど？」

「ああらハナさん、たまには良いこと言うわねえ。じゃあ早速行きましょうか」

待て待てお前ら何を勝手にヒワイな方向に話進めてんだ！ 私の頭

に血が上ったところでハナさんの表情がふっと柔らかくなった。

「……なんてな。冗談だよ。まあいいじゃないか香織。恋人同士の夜を邪魔するなんて野暮で不粋だぞ。ささ、我々は我々で楽しく飲もうじゃないか若人よ。な？　な？」

とハナさんは、帰りたさMAXのオーラを全身から発散させているA & Bの気持ちなど完全に無視して二人の肩を叩き駅とは反対方向に歩き出した。「そうね、ま、せいぜい楽しんでちょうだい」と香織さんも私たちに背を向けた。ううむ、こういうところはさすがにハナさん大人である。ちよっぴり見直したわ。

さて。現在どこにいるかと言うと……ラブホテルの一室である。もちろん単独ではない。愛しのマイダーリンと共に、だ。

きゃーきゃー遂に来ちゃいましたよ奥さん！　岡崎千夏史上初の彼氏である超イケメンジョル大生霧夜京助さんとホテルに！　まあ正確には前にも来たことあるんだけど、あのとき私は泥酔状態の上、気分も最悪、醜態も晒しちゃったからね。ノーカウントでお願いします。

本当だったら私的にはホテルよりも京助さんの部屋にお泊りしたかったんだけど。

だっていきなりラブホテルだと「さあこれから一戦交えましょうか。どうぞお手柔らかに、いえいえこちらこそ、胸をお借りするつもりで頑張りマス！」的なイカニモな雰囲気満載で、もちろん私はそれを望んではいるのだけれど、でもやっぱりウブな乙女としてはオブラートに包まないそのストレートさは生々しく少々恥ずかしかつ

たりするわけですよ。

でも京助さんは香織さんと一緒に住んでるからね、お邪魔するだけならまだしもお泊りとなるとやっぱり気を遣うからね、仕方ないよね。

まあ現在香織さんは二次会でフィーバーしちゃってる頃だろうから、さっさと終わらせてグッスリ眠っちゃえば平気っちゃあ平気なんだけど、初めての彼氏との初めてのエッチなのに「さっさと」っていうのも味気なくて嫌だし、何よりコトの真っ最中にいきなり酔っ払いの香織さん帰宅、という状況に陥る可能性も無きにしも非ずなわけです。その結果、安心して集中できるということでラブホテルに直行とあいなったわけでございますハイ。

京助さんは今、シャワーを浴びている。一人ベッドに腰掛けた私は財布から取り出したお母さんから託されたカラフルなコンドームを、夏の甲子園の決勝戦、次の一球で一打逆転サヨナラ負けを喫するかもしれない場面で、エースで四番かつイケメンでモテモテのピッチャーがユニフォームの下に忍ばせた胸のお守りを祈りながらギュツとするかの如く強く握り締め、深呼吸を繰り返す。手の平にはジンワリと汗が滲む。

ああ、遂に、遂にこの時が来たのね。大好きな京助さんに処女（精神的）を捧げるこの時が。部屋は静まり返り、シャワーの立てる水の音だけが微かに漏れ聞こえる。心臓がバクバク言っている。

あ、シャワーで思い出した。ネチっ子から聞いた話だけど、ヨーロッパの人は恋人とエッチする前に、絶対にシャワーを浴びないのだそう。彼らの言い分によると、体臭は性的興奮をより高めるのに重要な要素であるにも拘らず、性行為の前にわざわざそれを洗い流

してしまうだなんて考えられないとのこと。中にはデート前の一週間、敢えてお風呂に入らずにより強烈な体臭を身に纏って恋人に会うというツワモノもいるらしい。

うーんそれってどうなんだろう。京助さんの匂いは大好きだけど、それはほのかに漂う爽やかな柑橘系の香りであって、素の体臭ではないからなあ……体臭かあ。私は思わず腕を上げ、ワキ臭チェック。異常なし。ま、そこら辺はまだまだ未知の領域ですな。今度美しき姉にご指導願うとして、取り敢えず今よ今。

結局のところ京助さんとは先ず手を繋ぎ、次にキス、で、これからエッチする……と美しき姉の言うところの「予定調和」な順番でここまで来てしまった。とすると、ここで普通に京助さんとエッチしたならば、私は京助さんにとって「男の本能のレールに乗った、都合のいい詰まらない女」となってしまいうわけか。それにまだふえらちおもできてないしなあ。

あ、でもあれか。「いきなりのふえらちお」は好きな相手を自分に振り向かせるためのテクニクであって順調に交際をスタートさせている場合には当て嵌まらないのか。即ち既に私にゾッコンラブになっている京助さんにはもはや無用の長物なのか……？ いやいやそうじゃないわ。

ドイツお得意の、堅守からの美し過ぎる速攻カウンター攻撃

これからもずっと私に夢中にさせ続けるにはやはり無軌道無計画かつ漫然とエッチしてたらダメなんだわ。

世のカップルが、特に相手を嫌いになったわけでもないのに破局する理由の一つとして挙げられる「性のマンネリ化」が、古代ローマ時代より常に上位三位以内をキープし続けていることから分かるように、「好き」という感情だけで食るようにエッチするだけじゃすぐに飽きられてしまうのは必至。

この性的欲求の飽和状態を回避するためには脳をフル回転させ額に汗しなければならぬのだ。例えば道端に点々と餌を置いておいて、それをどんどん拾って食べていたらいつの間にか戻れない場所まで来てしまっている、気付いたときには蟻地獄の最深部に嵌まってしまっている、といったようなトラップ的な何かを設けるとか。

そういう風に持って行って、京助さんを私なしでは生きて行けないほどのカラダにすることが大事なのよ。それがいつまでもラブラブな関係でい続けるための鉄則なんだわ。きっと美しき姉はそういうことを言いたかったんだと思う。

よし、どうすれば京助さんを私の虜にできるのか早速考えよう。戦略と戦術が重要なのは何もビジネスやスポーツだけじゃないわ。時代はもはや二十一世紀、二人一組、身体に汗を掻き攻守の入れ替わりもあることを考えると、セックスだってスポーツと言えなくもない。

感情の高ぶりにのみによる、行き当たりばったりの行動は御法度な

のよ。早くしないと京助さんがシャワーから上がって来ちゃう。急いでシミュレーションを開始せねば。

私はコンドームを握り締めたまま「気を付け」の姿勢でベッドに仰向けに横たわった。天井を眺めていると、ふと「♪男なら立って行け、女はただ寝てゝ待て」という歌が口を突いて出た。バカボンがお風呂に入ると必ず歌う鼻歌だ。

最初は気にしていなかったけど、あまりに毎日リピートし、家中に響き渡るもんだから「それって何の歌なの？」と聞いてはみたものの、バカボンは一言「ねるとん」とニヤニヤして答えるだけ。「ねるとん」って何のことなんだろう……ま、いいや。

通常のエッチの場合、まず女側がこうして上を向いて寝ていると、男側は覆い被さるようにキスをしてくるはずだ。キスをしつつ手ではブラウスないしTシャツを脱がせブラジャーを外しつつおっぱいを揉む。キスに飽きると男側は顔を下にずらし露になった乳首を舐める。舐めつつも手はジーンズのファスナーを下ろさないしはスカートの中へ移動しパンツを脱がせる……お、なんか分かったやつたぞ私、「セックスの方程式」が。

要するにアレだ。男は口と手を同時に使って女の身体を上から順々に攻めていくわけだ。第一段階としてキス&おっぱい。第二段階で乳首&股間。で、最終段階で合体と。そう言えば香織さんにヤラれちゃったときもそんな感じだったよなあ……まあ女なので合体こそなかったけど。

ポイントを整理しよう。男にとって女体における大事な部分は「唇」
「胸」「股」、つまり唇^{しんきょうこ}胸股である。やっぱな。古来より世界の至る所で重要視されてきた「三」という数字がここにも現れてきたっ

てわけだ。多分「唇胸股」という三文字熟語は、新明解国語辞典にはないかもしれないが、広辞苑辺りには載っているに違いない。今度本屋で立ち読みしてチェックだわ。

この三点を、男の本能のままに攻めさせてばかりいるとやがて飽きが来てしまうってことね。ということは、順番を入れ替えてもらうとか、もっと違う場所を責めさせる……は！

待て待て待つのは岡崎千夏十五歳。今のシミュレーションだと完全に女は「受け身」だわ。これじゃいわゆる「マグロ」ってヤツね（この前は京助さんの前でクジラとか言っちゃって赤っ恥掻いたけど）。守ってばかりじゃ点を取れないのよ。点が取れなければ良くて引き分けの勝ち点一、むしろほとんど負け。

少なくとも勝つことはできないわ。予選リーグ突破は絶望的。かといってお互い初めてのエッチなのに女の子の方からガンガン攻め立てるのもそれはそれで「コイツかなり遊んでるな」と有らぬ誤解を受けかねない……

基本的に男側に主導権を握らせて、ボールポゼッションを七対三くらいの割合に持って行く。ときどき際どいシュートを打たせ、コーナークICKも与えてあたかも男性側有利に試合を進めていると思わせておいてからのカウンター！　これよ、これしかないわね。ワールドカップで魅せたドイツお得意の、堅守からの美し過ぎる速攻力ウンター攻撃。あれほど華麗に相手にダメージを与える戦法はないわ。

じゃあエッチにおけるカウンター攻撃とはなんぞや？　となるのだが、それがきつと「ふえらちお」なのだろう。

男が女体を攻め立てて「どうだ、気持ち良いだろ？」と得意になっているところへいきなりの反撃。まさかの事態に男性陣ディフェンスは戻り切れておらず対応が遅れ後手後手、思いもよらぬ形での失点……完璧なシナリオだわ。

でもなあ、女側の攻撃ってふえらちおしかないのかな。お、そう言えば男の人も乳首って敏感なのかしら。ネチっ子に聞いておくんだった。もし男の乳首も効果的であるならば、攻撃のバリエーションはぐっと増えるのだが……あ、シャワーの音が止んだ。もうすぐ来るのね……ううう何だか緊張でお腹が痛くなってきたぞ。ちよっとトイレに行って落ち着きを取り戻してこようっと。

というか私もシャワーを浴びた方が良いのだろうか？ と便座に腰をおろしてふと思う。どうなんだろう。私の考えではエッチすれば多少なりとも汗を掻くだろうし、お互い色んな体液が出てきそうだし、終わった後に浴びた方がスッキリサッパリで良いんじゃないかと思うんですが。

でもなあ、京助さんは何の躊躇いもなく先に浴びてるしなあ。やっぱり日本人としてのエチケットなのかしら。神聖なる儀式の前に身を清める沐浴的な。ここら辺が東洋と西洋の思想の違いですな。

でもでも体臭云々は別としても、男としては女の子の服を脱がせるという楽しみは取って置きたいんじゃないかなとも思うわけですよ。ブラウスをちよつとずつ脱がせるとか、ブラジャーのホックを外しておっぱいが露になる瞬間とか、焦らしながらパンツを脱がせて「いやあ恥ずかしい」などと言わせたいとかさ、あるじゃん色々。

女側も最初にシャワー浴びてバスタオル一枚で出てきちゃったらしい「お楽しみ」が全部省略されてしまうわけでしょ……ああ、

お腹は引き続き痛いけど何にも出てこないや……でもシャワー浴び
ないんだったら出てこない方が良いのかも……ん？ え？ え？ え？
ちよちよちよちよと待て待てまさか……あああ！

略してSMDK

何ということだ！　こんなときに限って、まさかのオンナコノヒ、生理勃発……ウソウソウソでしょ……！？　冗談やめてよね、せっかく念願叶ったの、親の許可も得ての夢にまで見てないけど夢にも出てきて欲しかったくらい待ち望んだ京助さんとお泊りラブなのに……！！！！

あゝダメだ、本格的に血が止まらない。お腹が痛いのはこっちだったのか……お母さん、千夏は悔しいです。こんな……こんな形でまさかの一発レッドカード即退場だなんて。これだったら例え格の違いを見せ付けられても、コテンパンにやられるのが確実だとしても、リングに上がって試合に臨んだ方が一億倍マシよ、と下半身丸出しで項垂れ、今世紀最大級に肩を落とし打ちひしがれているとトイレのドアがノックされた。

「千夏ちゃん？　大丈夫？　具合悪いの？」

シャワーから上がった京助さんが優しい口調で私を気遣う。あああ京助さんごめんなさいごめんなさい。せっかくの夜が、愛の営みが、私のせいで台無しになってしまつて。

「千夏ちゃん、本当に大丈夫？」

私が返事をしなかったので京助さんの声は焦りの色を帯び、一際大きくなった。

「あ、はい、大丈夫です、すぐ出ます」

トイレットペーパーを手にくるぐる巻きにし、取り敢えず股間を拭き取る。まさかラブホテルにナプキンなんて置いてないよなあ、とトイレの中を見渡すと……あった！　ありましたよお母さん！　この龍馬の「ニューアフロディーテ」とは対極に位置するほどの素晴らしいアメニティの充実ぶりへの感動はしかし、京助さんとの熱い一夜をぶち壊しにしてしまったという事実によって急速に萎んでしまったのだった。

衣服を整えてドアを開けると、目の前には上半身裸で、下半身にバスタオルを巻いただけの京助さんが心配そうな目で私を見ていた。引き締まった身体、割れた腹筋、私は眼前の京助さんのハダカが恥ずかしくて思わず目を伏せる。

私の行動を、「彼との初めての夜に恥ずかしさと緊張で思わずトイレに隠れてしまっただけ」と解釈し、体調には特に問題がないと瞬時に判断した京助さんは、力強く私を抱き寄せ、大きな手を広げて髪を梳きながらいつにも増して情熱的な口付けをした。脳味噌が蕩けそうである。

キスの感覚にボーっとしていると、京助さんは私の身体をひよいと持ち上げて、いわゆる「お姫様抱っこ」で私をベッドまで運ぶ。そして、そして先程のシミュレーションの通り、私を仰向けに寝かせると、京助さんは上に跨り覆い被さるように唇を重ねた。

「あ、あの、あのね京助さん」

このまま何にも考えず身を任せたい、という思いを何とか断ち切り、京助さんの唇が私の首筋に移動した所で勇気を振り絞って呼びかける。動きを止め、私を見詰める彼。

「実はその……今さっき突然ですね、生理になっちゃったんです……」

最後の方は消え入りそうな声になっているのが自分でも分かった。悔しくて悔しくて、気が付くと唇がぶるぶると震え、涙が目尻から溢れて耳の中に流れ込んだ。

「ご……ヒック、ごめんなさい……ほん……ヒックとうに……ごっごめんなさい……」

私は涙ながらに京助さんに謝った。心の底から謝った。自分から一緒にいて欲しいと言い出し、本来ならば二次会で盛り上がっていたはずの京助さんを皆から奪い独占してしまったにも拘わらず、この体たらく。

「ふううんそんでえ、オナさん何もせずに帰ってきたのお？」

シルバーウィークの最終日、私はネチっ子と緊急ミーティングを開催した。場所はもちろん池袋のドトールである。本来ならばニューアフロディーテの龍馬の部屋がベストチョイスなわけだが、残念ながらあのバカは未だ放浪中により不在であった。

ネチっ子は私の人生最大の失態にさしたる興味も示さず、先程からオレンジジュースをストローでずびずび啜っている。せっかくコーヒー屋であるドトールに来てるんだからコーヒー飲まんかい！と前々から声を大にして言いたかったのだが、昨日の出来事で今度こそ京助さんに嫌われたかもしれないと激しく落ち込んだ今の私には、それこそ心の底からどうでもいいことだった。

「だって……生理になっちゃったんだもん。できるわけないでしょ」
「えええ〜？　そうかなあ。僕はさあそんなの全然気にしないけどなあ」

「はあ！？　あのねえ、田倉あんた女の子の生理ってどういう状況か分かってんの？　股間が血まみれなのよ？　初めてのエッチが流血沙汰じゃあいくらカワイくてラブラーで大好きな彼女が相手だとしても百年の恋も冷めるに決まってるじゃない。ド変態DMのあんたと爽やか京助さんを一緒にしないでちょーだい」

私は悔しさと悲しさと切なさで声のトーンが徐々に上がりつつあるのをホットのカフェラテをゆっくりと口に含むことによって気を落ち着かせ、なんとか抑えた。

「だあってさあ、単に血が出てるだけでさあせつくす自体はできるわけでしょお？　シーツとか布団には血が付いちやうからさあホテルの人にはちよつと悪いかなあって思うけどお、別に興醒めなんかないよお。第一彼女が処女だったらさあやっぱり血は出るわけだし。」

それにそもそもさあ生理はさあ文字通り生理現象なわけでえ、別に本人の意思とは無関係に起きるんだからさあ、そんなの責めたって仕方ないじゃない。それよりもさあせつかく一緒にラブホテルに泊ってさあお互い気分も盛り上がってるんだからさあ、生理ごときでせつくすっていう一大イベントを棒に振っちゃう方がもったいないと思うけどなあ」

グラスの中のオレンジジュースを極限まで吸い尽したネチっ子は、突如席を立つとレジの方へと向かった。次の一杯を買ってくるのかかと思いきや、手にはガムシロップが握られていた。何をするのか黙って見ていると、予想通りネチっ子は氷だけになったグラスにガム

シロップを注ぎ、ストローで掻きまわし始めた。

「そうは言うけどね、田倉、あんた知ってるか知らないか分かんないど生理の経血って結構臭うんだから」

私は溜め息を吐きつつカフェラテを飲み込んだ。

「知ってるよお」

ネチっ子は私の方も見もせずに、ガムシロップと氷だけで作った甘いく冷たい水、略して甘冷水を舐めるように飲みながら事も無げに答えた。何で知ってんのよ、という言葉が口を突いて出そうになったが、よく考えたら冴えないモテない童貞男子高校生、略してS M D D Kが、どこでどうやって女の子がひた隠しにしているあの臭いを嗅いだのか、という話は聞かない方が身のためかも知れないと思いい、何も言わずに聞き流しておいた。

「それにいい」

そこでネチっ子はようやく顔を上げ私を見た。

「血とか臭いが気になるんならさぁお風呂ですればいいんじゃないかなあ」

「は？」

「シャワー浴びながらさぁ石鹸泡立ててえお互いの身体を洗いっことしながらだったらさぁ、血も付かないいい臭いも気にならないいい、何より石鹸ぬるぬるでえすっごい気持ちいいよお」

な……なんという破廉恥なことを言い出すんだこのネチっ子が！
一緒にお風呂入りながらのエッチだなんて！ A V見過ぎだっつー

の！ つーかお前はそんなこと言いつつまだ未体験だろーが！ と
反射的に叫び出したい衝動を、カフェラテをぐびりと飲み下して抑
え込む。

心を落ち着かせようと目を閉じると……無の境地に達しようとする
意思とは反対に、瞼の裏側には裸の京助さんが現れた。私もすっぱ
んぼんである。私たちは一緒に家のお風呂に入っていて、京助さん
がその大きな手で石鹸を泡立て始めた。

八分立てのホイップクリームのような泡ができあがると、京助さん
は笑顔のままで私の身体を包むようにその泡まみれの手で優しく撫
でるように洗い始めるのだ。あああ京助さんそんなトコ恥ずかしい
……

未だメンタル的バージンハイスクールガールの私には時期尚早か

「オナさぁん？」

きよ、京助さんいくらなんでもそこをそんな風にしたら……

「オナさんてばぁ」

むむ、誰かに呼ばれている気がする。ふと目を開けるとそこには京助さん……とは似ても似つかぬのっぺりとしているのになぜか一度見たら忘れられないクドい顔立ちのネチっ子が！ くそう、今いいところだったのに無理やり現実世界に引きずり戻しやがって。

「顔が赤いよお？」

「お、オホン、何でもございませんことよ。そ、それより田倉、あんたの方こそどうだったのよ？」

私は公の場で、友人の眼前にも拘わらず一人で彼氏とのエッチな妄想に浸ってしまったことを悟られまいと、咄嗟に話題を方向転換した。

「どうってえ？」

「しらばっくれんじゃないわよ。したんでしょ？ デート。那珂乃紅と」

「ああ、そのことかぁ」

人生初の彼女、しかもクリス・チャンディオール高校随一の美少女の名を欲しいままにしているマドンナ那珂乃紅とのデートなのだ。男としてこれが嬉しくないはずがない。だがネチっ子はストローか

ら口を離すと、浮かない顔つきになり大きく息を吸い込んで吐きだした。何だ何だどうしたんだ？

「東京ウォーカーと散歩の達人と東京人を熟読した結果あ、代官山のさあタルトの美味しいカフェでお茶してさあ、オシャレな雑貨とを見て歩いてえ、石釜で焼く本格的イタリアンピッツアが評判のイタリアアンレストランでワイン傾けながらディナー、みたいなのを考えていたんだよねえ」

お、いいねそれ。ねっちりしたネチっ子らしからぬ爽やか路線なデートプランじゃん。お金かかりそうだけど。私も京助さんと手を繋ぎながらそういうデートしたいーい。美味しい窯焼きピッツア食べたーい。ワインはいらないけど。

「でねえ、連休初日に会おうと思ってえ前の日学校から帰ってからメールしたんだよねえ。明日は何時にどこで待ち合わせ〜っていう内容でえ」

「ほうほう」

「そしたらさあ電話がかかってきたんだよねえ」

「誰から？」

「だから紅ちゃんからあ」

「へえ」

「僕はさあてつきり待ち合わせ時間のことで変更したいとかあどうしても行きたい場所があるんだけどとかあそういう話かなあと思っただけどそうじゃなかったんだよねえ」

「何だったの？ 『実は私極度の乱視で田倉君のことバスケ部のキヤプテンと勘違いしてて……ゴメンナサイ、やっぱり付き合うの止めます』とか？」

「違うよお。『今から迎えに行きます』って言ったんだなあこれが」
「え？ マドンナ那珂乃紅自ら？ 田倉んちに？ 凄いいねえ相当な

惚れ込みようだねえ。やったじゃんニクイヨニクイヨこのこの！」

興奮して我を忘れると男言葉になるという変わった癖はあるものの、普段は明るくて人気者のマドンナだ。あんな子に、デートするのに家までわざわざ出向いてもらえるなんて男としては嬉しかろう。だがネチっ子の表情は冴えないままだ。

「でもさあ僕がメールしたの夜の十時半だよ？ そんな夜中に来られてもさあどうすることもできないよねえ」

「それは分かんないじゃん。田倉がそうであつたように那珂乃紅もまたあんととのデートプランを練りに練ってたんじゃないの？ 夜に迎えに来るってことは夜にしかできない何かを二人で楽しみたかった、とか」

「夜にしかできないことってえ？」

「そうだな……あ、ほら、山に星を見に行くとかさ。今流行りのナントカ流星群ですよ。天文部も泣いて羨む超本格的望遠鏡担いで。でさ、前もって田倉に教えちゃったらつまんないからいきなり連れ出してのサプライズデート的な」

「星ねえ……星座とか全然興味無いから行っても退屈なだけだってお、それでもアレよりはマシだったなあ……」

ネチっ子は紙コップに注いだ水にガムシロップを入れてストロ―で掻き回し、一気に飲み干すと遠い目をして語り出した。

「僕はもうおなにいして眠る準備してたからさあ、会うのは明日にしようよって言おうと思ったんだけどさあそれっきり電話が通じないんだよねえ。でえ、三十分経っても音沙汰ないからやつぱり冗談だったのかなあってパソコン立ち上げてえアダルトサイトに接続してえパンツずり下げて左手にティッシュペーパー三枚重ねを持ったところでインターホンが鳴ったんだよねえ。うわあホントに来たあ

と思つてえパンツ穿き直して玄関に行くときあ、紅ちゃんがお母さんと話してたんだなあ」

愛しの彼女のお出迎えよりもソルフエージュの方が大事だなんて、さすがネチっ子何たる身勝手！　とはいえその気持ち、分からなくもないか。確かにソルフエージュの最中だったらいくら京助さんのお出迎えでもいくまでは待つて頂かないとね。

「お母さんも最初はさあ『いくら息子の彼女とはいえこんな夜分に人様の家に訪れるなんて非常識な』みたいなこと言つててえ、やいのやいの押し問答してたんだけどお、何だかよく分かんない内に打ち解けちゃつてさあ、終いには『ふつつかな息子ですが末長くよろしくね』なんつってさあ、後ろで見てた僕の手を引っ張つて紅ちゃんに引き渡しちやつたんだよねえ。」

そのときの僕はオバQのTシャツに赤と紫のチェックのボクサーブリーフって格好だったからさあ、人生初デートの出で立ちとしてさすがにコレは無いよなあつて焦つてさあ『せめて服だけは着させてえ』つて言つただけとお、紅ちゃんはお構いなしに僕の手を引っ張つてえ表に停めてあつたプリウスの後部座席に押し込んだんだよねえ」

「田倉そういう強引で恥ずかしいプレイ大好きなんでしょ？　良かったじゃん」

「そおうだねえそこまでは良かったねえ。『こんな格好のままどこに連れて連れて行かれてナニされるんだろう？』つて久々にリアルなシチュエーションでドキドキしちゃつてえ……しかもお車が出ると同時にさあ隣に座つてた紅ちゃんがさあいきなりアイマスク被せてきてえ更に手錠までかけてきたんだよねえ。でえ僕の耳元でトドメの一言お『大人しくしてて』と来たもんだからあ、おなにい直前でえ準備万端だった僕はさあもうそれだけでイっちゃつたんだよねえ」

え」

この世の中に目を閉じて楽しかった日々を思い出したニヤけ顔のネチっ子ほど気持ちの悪いものはない。テーブルの下を覗き込むとヤツの股間は案の定、今世紀最大級の盛り上がりを見せていた。

「何だ、楽しんだんじゃん。人生初の彼女との初デートにしてはかなり変態入ってるけど」

一般的にはドン引きなデートプランだが、お互いが合意し納得しかつ楽しんだのであれば問題なからう。やれやれ、結局ノロケ話か、とカフェラテの残ったミルクの泡をスプーンで掬って口に入れる。

「で、車はどこに向かったの？ SMの館？ 蛭人形の館？ そもそも誰が運転してきたわけ？」

「運転手はあ紅ちゃんのお母さあん」

「ええ！？ 母娘揃ってSMクイーン？ いや違うな、母親は女王だからクイーンでいいけど紅は娘。娘は王女だから……SMプリンセス！ 略してエスプリ！」

エスプリからの流れとして当然エスプレッソを思い浮かべた私は、レジへ向かい人生初のエスプレッソを注文。ソーサーと共に手の平に乗せて席へと戻った。一口啜る。うーんアダルティな深く濃い味わい。未だメンタル的バージンハイスクールガールの私には時期尚早か。

泡立つエスプレッソを口に含み噛むように味わいながらゆっくりと飲み下す。私が落ち着くのを見計らってネチっ子が話を続ける。

生きてるうちに一回くらい総理の椅子に座らせとく？

「助手席にはあお父さあん」

「えええ！？ お父さんまで参戦！？ S Mキング略してS M Kまで登場か……恐るべし那珂乃家。つーか目隠しされてたのによく分かったね」

「だって後で聞いたもおん。でえ車はそのうち全く止まらずに走るようになったからあ、高速に乗ったって気付いたんだよねえ。トータルで一時間半くらい乗ってたかなあ、その間中さあ紅ちゃん一家はずっと無言でさあ、カーステレオから微かに流れてくるA Mラジオでさああんまメジャーじゃないお笑い芸人が馬鹿々々しい話しててえ今思えばあれは結構面白かったんだけどさあ、その下らなさとその時の状況がミスマッチ過ぎてえ却って怖かったなあ」

確かにね。ほとんど誘拐拉致監禁みたいな状態でバカ話聞かされてもね。笑えないよね。

「車は高速を下りてえやがてある港に停まったんだよねえ。何で港か分かったかっていうとお……」

「潮の匂いとカモメの鳴き声だね？ 田倉君！」

犯人を突き止めたコナン君ばりにびしっと人差し指をネチっ子の額に向けて突き出す。勢い余って指先は本当に額に当たってしまい若干ネチっ子の後頭部が壁に激突。

「ざあんねん。車から降りたら目隠し外してくれたからねえ」

「んだよツマラン」

「しかもお車を出るとお既に船の中にいたんだなあこれが」

「え？ つてーことはカーフェリー？」

「そおう。でえ僕らを待ち構えていたかのように汽笛が鳴ってえ船はすぐに出発したんだよねえ」

「乗ったことないから詳しくは分からないけどカーフェリーってことはさ、他にも車がじゃんじゃん乗っかってるんだよね？ ってことは結構おっきな船だったの？」

「それがさあ車は僕らのプリウス一台だけえ」

「夜だから他の乗客はいなかったってこと？」

「じゃなくってえ船の構造上車は一台しか乗れないのお」

「ええ！？　じゃあ那珂乃家プリウス専用カーフェリーってこと！？」

「そおう。こぢんまりとした船はあ風いだ夜の海を静かに進んで行く。船内を紅ちゃんに案内されてえ小さめのホテルの一室のような客室へ入るとおベッドの上に一着のタキシードが置いてあったんだよねえ。紅ちゃんはそれを指差して『着替えて』って言って出たんだあ」

「目隠し拉致監禁からの夜のカーフェリーにタキシード……何やら怪しげですな。あ、パンツはどうしたのよ？　車の中で粗相したんでしょう？　まさかそのままタキシード着用で臭いモノにフタじゃ……」

放出された精液を下着の内側に湛えつつの正装というのは、表向きはクリンなイメージで通しているけど実際裏では黒い交際バリバリでエゲつないことにも平気で手を染める悪徳政治家のようでもあり、どこことなく背德的であるのは否めない。

「それがさあ下着も靴下も全部一式置いてあったんだよねえ。しかもサイズもピッタリい。ついでにシャワーも完備してたからさあスツキリサツパリ浴びちゃったあ」

「そりゃまた用意周到ですな……あ、分かった。夜の海でディナークルージングでしょ。今巷のハイソなOLの間で大ブレイク寸前の。

フレンチの鉄人の一番弟子かなんか呼んじやってさ、船上で仔羊の骨付き肉をブワツとフランベしたりしてきやーきやー言っちゃったりしてさ。料理もフルコースだしご両親も同席だから正装なんですよ？」

「僕もねえタキシードに袖を通しながらそういう展開を期待したんだけどお着替え終わったら船は止まっちゃったんだよねえ」

「まさかのエンジントラブル……」

「じゃなくってえ、目的地に到着したのお。そこはねえ港から二十分くらいのところにある小さな島だったんだあ。船着き場から栈橋を歩いて行くとお目の前に大きな洋館が現れたんだよねえ」

闇夜の孤島に妖しく浮かぶ洋館……夜毎選ばれし者だけが集められ、夜な夜な繰り広げられる秘密の宴……ああ！ 卑猥かつ猥褻かつ淫乱なニオイがプンプンだわ！ 早く続きを聞かせてえ！

「いつの間にか真っ赤なドレスに着替えていた紅ちゃんに手を引かれて洋館に足を踏み入れるとお目の前に大広間が広がっててえ、連れられるままに奥の間の大きな扉を開けて進んで行ったんだよねえ。そこにはさあヨーロッパのお城の食堂風なあちよおうなあああいテーブルがあどどおんあったんだよねえ。」

向こう側がぁ一点透視法的に消失点まで見えちゃいそうなくらい長いテーブルの両脇にはさあ、これまたタキシード&ドレス姿の何十人も紳士淑女っぽい人たちがさあが着席しててえみんな穏やかに談笑しててさあ、僕は紅ちゃんとテーブルの真中辺りの空いてる席に着席したんだなあ。そしたらさあテーブルの一番奥に座ってた白髪で長髪のおガンダルフみたいなお爺さんが大きく手を叩いたんだよねえ。すると奥の部屋からメイド喫茶のメイドよりも本物のメイドっぽいメイドさん達があ手に手に料理を持ってえこれまた何十人と現れたんだなあ」

「ほう……それで？　つーかそのレディースエンドジェントルメンは何者？」

「親戚い」

「え？　そんなにいっぱい？」

「そおう。実は紅ちゃんはさあ、那珂乃財閥のお嬢さんなんだよねえ」

「財閥？」

財閥というアレよね。陰で何やってるのかはよく分かんないけどとにかく「金持ってるんだ！」的な、「ボクたち実は裏で政治家操っちゃってんだよね」総理大臣なんてただのマスコットに過ぎないのだよ、この愚民どもが！」的な一族？

「で、その金持ちの面々が集まって何してたの？　『まあ彼もそろそろ寿命が近いみたいだから生きてるうちに一回くらい総理の椅子に座らせとく？』系の会議？」

「もうオナさんナニ言ってるの？　そうじゃなくてえ、那珂乃一族は毎年何回かこうしてみんなが集まってえお食事会するのが恒例なんだってえ。でえ、この連休もたまたまそのお食事会が催されることになったからあ、まあ僕も一応紅ちゃんの彼氏としてえ参加したってわけえ」

何だツマラン。もったこう、蠟燭の炎が揺らめく石造りの地下牢で、噎せ返るような麝香の匂いの充満する中、馬の頭部のカブリモノを被った全裸の男女がくんずほぐれつの卑猥極まる行為に耽る、秘密結社のアブナイ儀式的なシチュエーションを想像してたのに。意外と普通だわね。

「でえ、その夜は遅くまで飲んだり食べたりして過ごしてえ、午前二時くらいかなあ、お開きになってさあそれぞれが自分の客室に戻

って行っただよねえ。僕も紅ちゃんに自分だけの個室に案内してもらってえ、ベッドに横になったらすぐに寝ちゃったんだよねえ」
「えーと、とゆーことは……要するに『ゴージャスな別荘でのちょっとリッチな親戚集会に、一族の年頃娘の彼氏として参加した』ってことでいいのかな？」 「次の朝目覚めるまでは僕もそう思ってたんだけどねえ……」

ネチっ子はグラスの中の、溶け切った氷&ガムシロップを飲み干すと、その時の様子を語り始めた。

ドラマで子役デビューして草なぎくん辺りと共演しちゃったら

「小鳥の囀りと波の音で迎える離れ小島の静かな朝をさあ、メイドさんが運んでくれたベーコンエッグとトーストとスコーンと紅茶と共にベッドの上で堪能しているとさあ激しく部屋の扉がノックされたんだよねえ。『良太さん！起きて！紅が……紅が！』ってさあ。

何事かと扉を開けるとお紅ちゃんのお母さんがあ目のやり場に困るほどスケスケのネグリジェ姿でさあおろおろたえてたんだよねえ。さすがに目を合わせるのが憚られたからあノーブラでほとんど丸見え状態の乳首を見つめながら『どうしたんですかあ？』って聞くとさあ『紅が……大魔導師に……さらわれたの！』って言うわけえ。

訳が分からずに突っ立ってるとさあ紅ママが僕の手を掴んでえ応接間に引っ張っていったんだなあ。すると中にはさあ紅パパがさあ頭に王冠被って神妙な面持ちでえ玉座みたいなゴージャスな椅子に腰かけてたんだよねえ。

『おおおよく来た勇者良太よ。昨夜皆が寝静まった後、大事な大事な我が愛娘、紅が大魔導師に連れ去られてしまった。娘を救うことができるのは世界広しといえどそなたしかおらぬ。どうか無事、連れ戻してきて欲しい。大魔導師はこの屋敷の下に蟻の巣の如く広がる迷宮の地下十階に居を構えている。入り口はこの暖炉ね。ではよろしく頼んだよ』

って大真面目な顔して言うんだよねえ。隣を見ると紅ママが青い顔してコクコク頷いてるしい。さらに訳分かんないからポカーンと

してるとお紅パパがあ『これで大魔導師を倒すんだ』って言ってえ
一組のトランプを手渡してきたんだよねえ」

「トランプ？」

「そおうトランプう」

「トランプって七並べたり神経衰弱させたりお婆さんを抜きつ抜かれつしたりするあのトランプ？」

「そおうそのトランプう」

「トランプで何すんの？」

「僕も同じこと聞いたあ。『トランプで何するんですかあ？』ってねえ。そうしたらさあ『行けば分かる。とにかく頼んだぞ！』って言うってえ、紅パパ&がママがあ両脇から僕の身体を抱えてえ無理やり暖炉の中に押し込んだんだあ」

「ちよい待ち、暖炉ってあのダンディなダディがお風呂上がりになガウン着てブランデーグラスをころんころん転がしてる後ろにある暖炉でしょ？ 火がボーボーじゃないの？」

「薪は燃えてなかったねえ。でもその代わり中は真っ暗でえ入ったらそこは下り坂の狭いトンネルになっててえ、どうすることもできないままあウサギ追っかけてったアリスみたいにあれよあれよという間に下へ下へと落ちて行っただんだなあ」

「そして行き着いた先が……地下迷宮？」

「地下迷宮う」

そほほんなバカな……いくら離れ小島に浮かぶゴージャスカつ妖しげな洋館とはいえ、その地下に迷宮？ ここはウサギの寝床の巣窟でその名を世界に知らしめてる経済大国ニッポンですぜ？ そんなもって大魔導師？ しかも倒すアイテムが紙でできたぺらぺらのトランプ？ いやいやそれじゃーハリーのポッターさんに負けず劣らずのマジカルファンタスティックな展開じゃーありませんか。まあある意味現実離れしてて楽しそうだけど。

「時間にしてどれくらいかなあ、凄おく長かった気もするけど実際は十秒くらいだったのかなあ、急に視界が開けたと思ったら、お尻から床に着地したんだよねえ。床には巨大なテンピュールつかいうか低反発枕みたいなクッションがあったからあそれほどダメージはなかったんだよねえ。」

尻もち付いたお尻を擦りながら立ち上がるとお、目の前には薄暗い通路が伸びていたんだよねえ。天井も壁も煉瓦で囲まれてる、正に『地下迷宮』の名に恥じない陰気な通路なんだけどおそうだなあ……幅は大人が三人通れるくらい、天井は普通の家の部屋よりちょっと低いくらいかなあ。でえ、壁には5メートルおきくらいに蠟燭がかけられててえ、それだけが唯一の明かりだったんだあ。

僕が落ちてきたのは通路の天井からだし後ろは壁だからあ、戻るに帰れない状況でえ、仕方ないから通路を前に進んでったんだよねえ」

「トランプ握り締めて？」

「トランプ握り締めてえ」

「タキシードで？」

「タキシードでえ」

ううむ。暗くじめじめとした、蠟燭の炎が揺らめく仄暗い通路はいかにも地下迷宮然としていて大魔導師を想起させるには相応しい場所だが、いかんせんタキシードとトランプが場の空気を台無しにしてる感は否めない。

「しばらく歩いているとさあ、正面と左右に扉のある突き当たりに辿り着いたんだよねえ。いよいよ地下迷宮っぽくなってきたなあっと思うと同時にさあ、大魔導師が潜んでるってことはそれ以外にも敵がいるってことでえ、この三つの扉を開けたら戦わなきゃならな

いんじゃないかってことに気付いたんだなあ」

「お、事態は急転直下、ワクワクドキドキな展開になりましたな。で？で？　どの扉を開けたの？」

「古びた木製の扉には錆びかけた真鍮の取っ手が付いてるんだけどおどれもおんなじ色と形でさあ、正直言って相当悩んだんだよねえ。開けた瞬間、腹を空かせたゴブリンが牙剥き出しで襲いかかってくるとか魔法使いがいきなり火の玉飛ばしてくるとか矢が飛んでくるとかしたらどうしようってえ。何たってこっちの装備はタキシードとトランプう、ほぼ丸腰だからねえ。一時間くらい悩んだ挙句う結局埒が明かないからあ、どうにでもなれっ！　てえ正面の扉の取っ手を掴んで思い切り開けたんだあ。そしたら何とお！」

ネチっ子田倉良太、遂に魑魅魍魎の跋扈する世界の扉を開く！　鬼が出るか蛇が出るかそれとも……

「中にいたのは小学生くらいの女の子だったんだなあ」

「はいい？」

「通路同様、薄暗い部屋の中の真ん中にはあ二本の蠟燭が乗った、一辺が60センチくらいの正方形のテーブルと二脚の椅子があったんだよねえ。僕が思い切り扉を開けるとさあ、テーブルの向こう側に座ってた女の子があ『もう、遅いよ！』って頬っぺた膨らませてたんだなあ」

何だそりゃ。

「まさか子供がこんなところにいるなんて思いもしなかったからさあ、どうしたものかと入り口に突っ立ってるとさあ『早く座って！』って女の子がイライラし始めたからあ僕はその子の正面に座ったんだなあ。蠟燭の炎の向こうの女の子はさあ、よく見ると真っ直ぐの長い黒髪のお目々パツチリのおドラマで子役デビューして草なぎク

ン辺りと共演しちゃったら一気にブレイクしそうな可愛い顔立ちでえ、ピアノの発表会に出るときみたいなりボンの付いたフリフリのドレスを着ててえ、お腹にカピバラさん抱えてたんだよねえ。

女の子の様子を観察してるとお、『アタシこれからピアノのお稽古なんだから。時間ないんだから。さっさと終わらせましょ』ってえ、ドレスのポケットからトランプを取り出したんだなあ。お、本当にピアノやってるんだ、当たった当たったあなんて喜ぶ暇もなく『じゃあ行くわよ、せーの！』っていきなり言い出すもんだからあ『ちよっと待ってよ何のこと？』って聞くとお、『ええ？ アナタ説明聞いてないの？ もう、これだから伯父さまは……』って舌打ちしながら説明を始めたんだなあ」

地下迷宮の薄暗い部屋にナゾのロリータ……見かけは可憐でも実は中身は齡三百歳を超える、不死身の大魔導師その人だったりして。

的なあ

「女の子はトランプを両手に持って扇形に開くとぱたぱたと扇ぎ始めたんだなあ。テーブルの上の蠟燭の炎がゆらゆら揺れてえその可愛らしい顔に不気味な陰影を作るう……今にも魔女に変身しちゃうんじゃないかなあって若干ビビってチビって股間押さえてるとお女の子は目を細めて『ポーカーよ』って言ったんだなあ。」

『ポーカー？』

『マツタク本当なら伯父さまがきちんと説明するとこなんだけど、最近メンドくさくなったのかぜーんぶアタシに丸投げなんだから、ホントやんなっちゃう。来年のお年玉はうんと色を付けてもらわなくっちゃ……いい？』

ここの地下迷宮にはこの先たーくさんの敵が待ち構えててアナタの行く手を阻むわ。アナタはその敵達を倒して地下十階にある大魔導師の部屋を目指すの。そこに紅お姉ちゃんが囚われているから、見事大魔導師を倒すことができれば無事お姫様救出成功！めでたしめでたし！　ってわけ』

『じゃあああその勝負の方法っていうのがあ……』

『そう、ポーカーよ。ルールを説明するわ。一度しか言わないからよく聞いて。役に関しては基本的に普通のポーカーと同じ。ワンピースからロイヤルストレートフラッシュまであるわ。勝負は三回。アナタが二回勝てば敵は負けを認めて道を開けてくれる。ここに來るとき伯父さまからトランプを十五枚渡されたでしょ？　敵も同じ十五枚のカードを持っているわ。お互いその十五枚の中から五枚を選んで勝負するの。』

一度使ったカードはその対戦ではもう使えないわ。つまり二回戦

目は残りの手持ち十枚の中から次の手を決めて勝負するの。そうすると三回戦目は当然、お互い最後の五枚で勝負するってわけ。先行逃げ切り型か、後半巻き返し型か、それはプレイヤー次第。敵にもそれぞれクセがあるから見分けられれば勝負を有利に進められるかもね。

アナタが勝った暁には敵の持つてるトランプの中から好きなカードを選んで持つて行くことができるわ。正し、持ち歩けるトランプの枚数は常に十五枚だから不要なカードはその場で捨てること。分かった？ それじゃあ行くわよ、せーの！』

『ちよちよちよつと待ってえ』

『んもう何なの！ 今度新しく変わったピアノの先生ホント時間にウルサイの！ まさか今の話、聞いてなかったとか言うんじゃないでしょうね』

『ちゃんと聞いてたよお。そうじゃなくってえルールは分かったけどさあ、僕のカード、すごい弱いヤツばかりなんだよねえ。これじゃあ最初から勝負にならない気がするんだけどなあ』

『ああそのことね。それは心配しないで。同じ階にいる敵は、基本的にアナタと同じ様な数字のカードしか持っていないわ。しょうがないから特別に教えちゃうけど、地下一階の敵だったら5より大きい数字のカードは持つてないと思って間違いないわ』

『つてえことはあ、地下二階、三階と進んで行くとお敵の持つてるカードの数字も大きくなっていくってことかあ。でえ、敵を倒しつつ強い役を作れるように自分の手持ちを大きい数字のカードと交換していくう……なるほどお』

『そういうこと！ もういいわね、じゃあ行くわよ。せーの！』

……って感じで僕と女の子のポーカー対決が始まったんだなあ
「で、その勝負どうなったの？ 話を聞く限り、結構こましゃくれたお嬢さんみたいだけど。まあ相手は子供だもんね。もちろん勝っ

たよね」

「それがさあ……負けたあ」

「ええ、負けたの！？」 高校生が小学生にポーカーで負けるとは何とも情けない」

「そう言うけどさあ、これでなかなか難しいんだよ。こっちはフルハウスなら勝てると思って出したのに向こうはフラッシュフルハウスとか出してくるんだからさあ」

「フラッシュフルハウス？ そんな役あったっけ？ つーか何それ？」

「フルハウスのスート（マーク）が全部同じバージョン。普通のポーカーにはもちろんないよお。でもさあ、あのダンジョンには敵がたくさんいるわけでえ、それぞれが十五枚ずつトランプ持って待機してるわけでしょお？」

仮に三十人いたとしたらその時点でカードの枚数は四百五十枚だよねえ。トランプ一組は五十二枚だからあ、ダンジョン内には何組ものトランプが入り混じってる状態だと考えられるう。そうするとさあ、相手は同じスートで同じ数のカードを何枚も持っている可能性があるってことになるんだよねえ。極端な話『ハートの3』を十枚持つてるとかも有り得るってことお」

「え、ってことは普通の役に加えて更に色んなバージョンがあるってこと？」

同じカードを5枚持つてたら「ファイブカード」なんてのもアリなわけか。

「そうなんだなあ。あの女の子お、そこんところは最初に説明してくれなかったからさあ勝負の後で文句言ったらさあ『あら、そんなのちよっと考えればすぐ分かるでしょ？』とか言って、カピバラさん抱きしめたままさっさとピアノのレッスンに行っちゃったんだよね

え。とりあえず分かったことはあ相手と同じ役だった場合はあ、ス
ートが揃ってる方が強いってことなんだけどねえ……」

ネチっ子は溜め息交じりに呟いた。

「要するにまとめるとさあ……」

私はこれまでのネチっ子の話を整理すべく鞆からボールペンを取り
出し、紙ナプキンに箇条書きにしてみた。

・これは言わば『リアルダンジョンRPG、略してRDRPG』で
ある

・那珂乃紅はダンジョンの地下十階に幽閉されている

・彼女を救うには大魔導師を倒さなくてはならない

・そこに辿り着くまでには数々の敵が待ち構えている

・勝負の方法はポーカー

・紅ポーカー（通常のポーカーと区別するためこう呼ぼう）は、ト
ランプの枚数の関係により通常の役に加え、スペシャルな役が存在
するようだ

・紅ポーカーの特殊ルールは実際に敵と戦ってみないと判明しない
ことがありそうだ

・敵は今のところゴブリンとかオークとかエルフとかじゃなくて普
通の人間である

「こんな感じってことでいいのかな？」

「まあそうなるねえ」

「あ、でも待ってよ。田倉あんた初っ端の敵でやられちゃったんで
しょ？ RPGでやられたってことはそれは即ち『ゲームオーバー』
ってことだよねえ？ どうやって帰って来たの？」

「それがさあ、勝負が終わって女の子が部屋から出てった後にいこ

れからどうすればいいんだろう？　って考えてたらあ急に部屋中が光に満たされてえ思わず眩しさを目を覆ったんだよねえ。しばらくして恐る恐る目を開けるとおそこは何と、あの暖炉のあった応接間だったんだなあ」

「どゆこと？」

「さあ。どうやらテレポーターションしたみたい」

「あのお一応確認取っとくけど、テレポーターションって日本語で瞬間移動のことだよねえ？」

「そおう。どうやら敵に負けると強制的に戻される仕組みらしいよお」

何を馬鹿な、そんな非現実的非科学的な超常現象をあつさりと感じるだなんてエロ才子ネチっ子らしくもない……あ、でも梅子も人智を越えた特殊能力が備わってるしな。実は気付いていないだけで、私たちは魔法の世界の住人だったのかしら。

「応接間ではさあ紅パパ&ママが二人とも玉座っぽい椅子に並んで座っててえ、紅パパがさあ渋い顔してえロールプレイングゲームで死んじゃったときのお決まりのあのセリフを言ったんだよねえ」

「それってまさか『おお勇者良太よ、死んでしまうとは情けない』的な？」

「的なあ」

「えーとですね、突っ込みどころは超山盛りテンコ盛りなんですけど、最も気になる点だけ教えて頂こうかしら」

「何ナニい？」

「那珂乃紅はどうなったのかな？　今も地下十階で大魔導師に囚われる身？」

「それなんだけどさあ、帰りは行きと同じでえ紅ちゃんとパパ&ママに送ってもらったんだよねえ」

「はあ？　何なのさその茶番は。ますます意味分からん」

まあ冒頭の紅ママの慌てようからして芝居がかってるのは分かったけどね。

ネチっ子の口振りからして、どうやら話は長くなりそうだと直感した私は、席を立ちカウンターへ向かい、コーヒーのお代わりを注文した。

香ばしい香りの立ち昇る黒く熱い液体を溢さぬよう、ソーサーとカップを両手で慎重に支えながら席に着くと、ネチっ子が待ち構えていたかのように「そもそもさあ……」と口を開いたところで私の背後から「おっとその先は俺が説明しよう」という、聞き覚えのある女の子の声がした。

『勇者』が現れるのを炙ったイカを肴に一杯やりながら待っている

振り向く間もなく、声の主はカップを持ちながら私の身体を押しつけて隣に腰掛ける。薔薇とバニラの甘い香りを身に纏い、「立てば芍薬 座れば牡丹 歩く姿は百合の花」がドンピシャで似合う容姿にも拘わらず男言葉を公然と口にする人物とは誰であろう、話題の渦中の人物、那珂乃紅その人である。

いきなりのマドンナ登場に、口に含んだばかりの熱いコーヒーを思わずゴクリ、と飲み下す。ぐあああ！ 今で喉、火傷したよう！

私は悶えつつもすかさず正面のネチっ子に視線を移す。するとこともあろうにネチっ子は素知らぬ振り他人の振りで、壁のシミらしきものを指でなぞりつつ完全に空っぽになったグラスにストローを立てて、ちゅうちゅうと吸っている模様。ちよっとお、コレ、あんたの彼女でしょ。何シカトしてんだよ。

しかも男言葉を発しているということは、那珂乃紅は興奮状態にあるということだ。やはり自分の彼氏（ネチっ子）が他の女（私）と二人きりでお茶してるところを目撃したら、平常心ではいられないのだろう。ははん、可愛い奴め。

「岡崎千夏、お前の聞きたいことは大体想像がつく。順序立てて説明してやろう。まず第一の疑問、それは『なぜ洋館の下に地下十階にも及ぶ迷宮が存在するのか？』だろうか？」

いや、残念ながら違うね。第一の疑問は「何でアンタがここにいるの？ そしていつからいるの？」である。でもまあいいや。突っ込むとややこしくなりそうだからそこは割愛の方向で。

「俺の爺さんはな、何を隠そう『ウィザードリイ』が大好きなんだ」
「ういざどりい？」

「発音が違う！ ウィザードリイ！」

そんなに変わんないじゃん……つかそれ何のこと？

「何だお前、ウィザードリイも知らないのか。ウィザードリイとは1981年にアップル用に発売されたダンジョンRPGの元祖だ。RPGの原点にして金字塔を打ち立てた、いまだに世界中に根強いファンを持つ伝説のゲームなんだぞ。」

これには今のRPGの礎となる要素が全て組み込まれていると言っても過言ではない。例えば『パーティを組む』『エルフやドワーフ、ノーム、ホビットといった人間以外の種族』『戦士や魔術師、僧侶などの職業という概念』『力や知恵、生命力などの各種パラメータ』『侍やロードなどの上級職への転職』などなどまだまだ挙げればきりが無い。だがウィザードリイの最も大きな功績は、

- ・戦闘シーンを移動シーンと切り離したこと
- ・コマンド入力によってキャラクターの行動を指示できるようにしたこと
- ・戦闘はリアルタイムではなくターン制によって進行すること
- ・敵のヒットポイントをゼロにすることで勝利となること
- ・経験値の概念とその数値の蓄積によりキャラクターがレベルアップすること
- ・キャラクターの成長に伴い徐々に探索範囲を広げていくことができること

という、今となっては当たり前のコンピュータRPGのフォーマ

ットを確立したことだ。

現在でこそシリーズ化され、様々なゲーム機種から続編や外伝など色んなバージョンが出ているが、最も面白いのはやはりシナリオ1の『狂王の試練場』だろう。ウィザードリィの原点にして最高のシナリオと呼び声高いそのストーリーとは如何なるものか？ それは『大魔導師ワードナに盗まれたアミュレット（護符）を、狂王トレボーの命により奪還しにゆく』という至ってシンプル極まりないものだ。

地下十階に及ぶダンジョン内にはさしたるイベントはなく、ただひたすらキャラクターのレベルを上げ、最下層に君臨するワードナを倒すだけなのだ。もっと言ってしまえば地下一階から地下四階、地下四階から地下九階まではそれぞれ直通のエレベーターが設置されており、地下五階から地下八階に至っては、ゲームをクリアする上では立ち寄る必要性は全くない。一見するとスカスカに見えるこのゲームが発売されてから三十年以上経った今もファンを魅了してやまない要素はどこにあるのか？ それは『アイテムの探索』だ。

地上には『ボルトック商店』という武器、防具などを売買できる唯一の店があるのだが、ここにはプレイ開始時には貧弱なアイテムしか置いていない。だが、最下層の強力なモンスターやワードナとの対決にはそれ相応の装備が必要不可欠なのは当然のこと。

では『強力なアイテム』はどこから調達するのか？ それは『敵が持っている』のだ。つまりより強い武器や防具は強い敵を倒すことによってのみ入手可能となる。もちろんこの『強力なアイテムは強い敵を倒すことによって入手できる』というシステムもウィザードリィが確立したものだ。全く以って素晴らしい。

先程地下五階から地下八階は必要ないと説明したが、着実に経験を積み、強力なアイテムを入手するためにはそこにいる敵を倒していくしかない。アイテムの中にはもちろんなかなか現れない物、そうだな……例えば『村正』のような最大級の攻撃力を誇る刀などがあるわけで、プレイヤーはそういった幻のアイテムを手に入れるために夜な夜な地下迷宮に繰り出すのだ。しかもウィザードリィのユニークな点はワードナを倒し、クリアした後もゲームを続けられるという点にある。

ワードナを倒して手に入れられる護符は、そのままトレボー王に返還してもよいのだが、実は返さずに装備することもできる。これは最強の防御力と回復力、それに全ての特殊攻撃から身を護ることができるという途轍もないスペシャルアイテムなのだ。

そして何故かワードナは何度でも現れる。つまり何回も倒せばその数だけ護符を手に入れることができ、更にプレイヤーに有利な状況でアイテム探しの旅に出かけることができる……っておい貴様！

聞いているのか!？」

「ふえ？」

私は那珂乃紅の怒声を聞いて遙か那由多の先まで飛んでった意識を取り戻した。半開きの口からは何だろう、美しく煌めく透明な液体が零れつつある。

「おっといけねえ」

それを右手の甲で拭い、姿勢を正す。正面のネチっ子はというと……やはり那珂乃紅の説明の長さで退屈さに耐え切れず、腕を組んだまま頭がぐらぐらんと揺れていた。何で私だけ叱られにゃならんのじゃ……

「はいはいはい聞いてますよ聞いてますってば……要するに、お爺さんのウィザードリイ好きが高じて、有り余る金に物を言わせて酔狂で自分ちの地下にダンジョン作っちゃったと。で、自ら大魔導師役を買って出て、地下十階に閉じ籠って『勇者』が現れるのを炙ったイカを肴に一杯やりながら待っていると。

で、話を面白くするために那珂乃さんを『さらわれたお姫様』に見立てて、その彼氏であるネチっ……もとい、田倉に救出させに行くと、というシナリオをこしらえた。でも実際に刀とか槍とか持ち出しちゃったら流血沙汰でシヤレになんないし危ないから戦闘方法は紳士的にポーカーに置き換えた。こういうことでしょ？」

私は一気に捲し立て気迫で那珂乃紅を押し返す。

「ま、まあな。一応合ってはいる」

お、やった。寝ぼけ半分で聞いてたわりには内容把握してるじゃん、私。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0849j/>

らぶほ

2012年1月13日01時47分発行